

ハイスクールD×Dの世界に転生したので、俺もハーレムを目指そう  
と思う

うおっ、でっか…

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界転生モノの小説が大好きな、とある日本の男が、ある日死んだ。

しかし彼は、彼が生前望んでやまなかった異世界転生を果たした。

……ハイスクールDXDという、物語の世界に。

原作知識はうろ覚え。持った力は原作主人公の物。

生まれも育ちも現代日本の一般家庭。

けれど弱いままならすぐさまデッドエンドなこの世界。

彼が選んだのは、来たる戦いに備えて己を極限まで鍛える苦難の道だった。

そしてついに始まるストーリー。

この世界での主人公である立神輪廻と、本来の主人公にして彼の親友である兵藤一誠を中心に、物語は若干変な方向へ加速する…!!

なお彼は基本テンプレオリ主な上、例の如くオリ主至上主義ですの  
で苦手な方はお逃げください。

ついでに彼の目標はタイトル通りのハーレム建設ですので原作  
ハーレムは完全に崩壊します。

イツセー君にもヒロインはいますが。

## 目次

旧校舎のディアボロス

気がつけば赤龍帝

多分俺はテンプレオリ主／悪魔、はじめてました

小さな猫とシスターと

駒の力と俺の力

熱い男

神器

事の顛末と猫の姉

旧章：婚約会場のフェニックス

新しい日常

許嫁は不死系男子

男の語らい

V S 輪廻

戦う理由

聖女の力、みんなの力

憤怒の龍魔王

他ならぬ親友の為に

戦いと恋の決着

新章：憤怒の魔王とフェニックス

下級悪魔は童貞悪魔

焼き鳥野郎に宣戦布告です！

部長とお話です！

ライザー、殴ります！

結婚式、ぶっ壊します！

259 242 232 220 211 208 192 180 164 152 141 128 109 98 82 68 54 42 30 15 1

月光校庭のウエルシュ・ドラゴン	
聖剣、ドラゴン―幼馴染？	281
洋服破壊、本邦初公開！	291
協力関係	307
決戦は駒王学園	318
『禁手』	326
今代の赤龍帝	340
停止校舎のアセンション	
安心安全の水着回	354
黒歌 1／7スケールフィギュア	369
邪眼と魔法。そしてブザー	382
神社の天使と救えない者	396
会合という名の罠	408
『最強』	418
覇龍の逆鱗、煮え切らぬ結末	436
白猫、黒猫	452
墮天使先生	463
冥界合宿のネバーダイ	
いざ、夏の始まり	474
ご両親への、ご挨拶です！	489
若手悪魔と夢の話、です！	499

## 旧校舎のディアボロス 気がつけば赤龍帝

「素晴らしい街だ。駒王町。こんないい町が他にあるかな」

どっかの快樂殺人鬼のような事を自分の右手に向かって話しつつ、ちよつとした高台から自分がここ十数年間暮らしてきた町を眺める。傍から見れば不審極まりない行動ながら、しかし俺は人の目を気にすることなく堂々としている。

まあ、周囲に人がいないというのもあるが。

『ああ。住んでいる連中は、一癖も二癖もある奴が結構いるが……それでも、平和だ』

「……自分で言っておいてなんだけど、まさかお前が同意するなんてな。かつて二天龍なんて呼ばれて恐れられてた力の象徴も、こんだけ長生きしてりゃ丸くなるってか?」

『そうかもしれないなあ。それこそ遠い昔なんかは尖っていた時だっただったが、今では全然だ。お前と長く一緒にい過ぎたのかもしれない』

「ははは、流石の赤龍帝もまさか自分が一人の人間と何百年も一緒にいるとは思ひもしなかっただろう?」

俺の声に反応する様に、右手が突如として真つ赤な籠手へと変貌する。

その籠手は神セイクリッド・ギア器と呼ばれる人間への神からのギフト——の、中でも強力な物である神滅具ロンギヌスであり、名は『赤龍帝の籠手ブラステッド・ギア』。

二天龍と呼ばれる強力なドラゴンの片割れであるドライグ（本名はもつと長い）の魂が封印された、凄まじい神器だ。

『そりゃあな。まさかただの人間が時間を自在に支配する魔法を習得するなんて、思いもしなかったさ』

「ま、だてに前世の記憶持ちやっってるわけじゃねえのよ」

そう。俺は前世の記憶を持っている。

所謂、転生者、というヤツだ。

目が覚めたら赤ん坊だし、剣と魔法の異世界へと転生したモンだと思いついて魔力修行だーって息巻いて瞑想の真似事始めたらコイツと出会うし、最初は色々と驚かされたものである。

そして転生者という事のついでに話してしまおう。

今俺がいるこの世界は『ハイスクールD×D』という、ライトノベルの世界なのだ。

で、その作品の主人公は兵藤一誠という男なのだが、そこに一つ問題がある。

なんとこの主人公の持つ力が、俺が今有している赤龍帝の力——つまり、ブーステッド・ギアなのである。

いや、だから最初は原作開始前なのかなー？なんて考えたのよ。もしくは原作終了後。

でも、なんと俺のご近所さんに居たんだよ。兵藤家。

しかも俺と同じ歳の、一誠という息子が居たそう。

あの時は本当に、「やっちゃまったあああつ!？」と思ったなあ。

まあ、俺自身が能動的に何かやらかした訳では無いんだけど。

「つつても、今となつては開き直つてんだけどさー」

『……まったく。相棒はすぐに自分の中で話を進める。多少お前の心を覗けるとは言え、リアルタイムで何を考えているのかわかるわけはないのだぞ』

やれやれ、とため息を吐くドライグの声は、最初の頃に感じた刺々しい近寄りが見たいオーラはなく、まるで水面のように穏やかな雰囲気満ちていた。

理由は先程会話中に出た通り。

俺が魔法を使って時間を支配できるようになったために、何度も何度も時間を巻き戻したり進めたり止めたりを繰り返して、その中で絆を深めていった為である。

因みに時間を操作して何をしていたのかと言うと、ひたすらに鍛錬である。

だってこの世界、パワーインフレの大渋滞が起きてるんだぞ。

作品自体は途中までしか見ていないけど、それでも十二分にインフ

レしていた。

まあ、主人公の力が2、4、8倍……って増していく設定なんだから、インフレして当然っちゃ当然だよな。

読んでる分には面白かったし。

だが当事者になるなら話は別だ。

強くなければこの世界では塵芥も同然。

どれほど辛かろうと、生きるためには強くあり続ける必要があった。

「で、結果として俺は世界最強レベルに至った、と」

『だーかーら。話を聞いていないのかお前は』

「たっはは、悪い悪い。ついモノローグで語っちまって」

何言っただみだみたいな事を呟かれながら、俺はなお夜景を見つめている。

何百年もの時を修行に費やし、ある程度強くなったと自分を認めてやれたので、いい加減に原作に突入し始めて良いだろうと考えた俺は、高校入学を翌日に控えた今、こうして夜景を楽しむ事にしたのだ。

俺とイツセー（兵藤一誠のあだ名のような物。俺と彼は幼馴染で親友なので、あだ名で呼んでいる）そして俺の家族や、親しくしてくれた人達。

皆が生きるこの町に、来年あたりから沢山の強者が集まる。

「——なあ、ドライグ」

『なんだ？』

「守れるかな。俺の家族や友人が暮らす、この町を」

『できるさ。俺達なら、な』

※——

月日は流れ、一年とちよつとの時間が経った。

俺とイツセーは見事志望校である駒王学園へと入学し（イツセーが元女子高で共学になったばかりだから女の子が沢山いるに違いないと入学を希望した）、そこで知り合った松田、元浜の二人と合わせて『変態三人と保護者一人』という謎の呼び名を頂戴し、男子高校生らしい馬鹿なやり取りを何気なく続けながら過ごしていた。

因みに変態三人はイツセー、松田、元浜であり、俺は保護者枠。

まあ、コイツ等と一緒に猥談する事は多々あれど、覗きをしようとしていたら止めるし特定の女子にセクハラ発言をするなら止めさせるか謝らさせるかするからな。

そんな事をやっている間にコイツ等の保護者になってしまったらしい。

∴最初は何百年も生きている事に気づかれて揶揄されてんのかと思っただぜ。

見た目同じ歳なのに、オーラのなので感じ取られたかと。

「おい、どうしたんだよ立神。たつがみ そんな遠い目をして」

「んー？まあ、ちよつと眠気がな」

「ほうほう。ならそんなお前にスペシャルな贈り物をやろうじやないか！」

「……なにそれ」

「企画もののAVだ！どうだ、眠気もぶっ飛ぶエロスだろ！」

「いや、タイトルとかパッケージは良いが……前にも言った通り、俺はAVだとなんか興奮しきれねえから抜けねえんだけど」

「そうだぞ元浜。コイツは基本2Dでしか抜かん男じやないか」

別に三次元でも抜けない事は無いんだがな。と思いつつも態々言うまでも無いので黙っておく。

今俺は、先程話した松田、元浜の二人と一緒に教室の隅で話をしてる最中である。

平然とAVと口にしてているが故にクラスの女子たちから冷たい目を向けられるが、そんな事は些事である。

あ、後ついでながら自己紹介をば。

名前は立神輪廻。たつがみりんね 名付け親はこの世界における祖父で、つい二年前に寿命で亡くなった。

結構キラキラネームだが、俺はそれなりに気に入っている。

「そーいや、イツセーのヤツ遅いな」

「だな。まったく、せっかくアイツが好きそうな巨乳系を取りそろえてきてやったというのに」

「……噂をすれば、だな」

「え？」

「おっはよおおおおおっ!!」

イツセーの気配を感じ取り口を開くと、そのすぐあとに教室のドアを勢いよく開いてイツセーが入って来た。

やけにテンションが高いが、一体どうしたのだろうか。

俺の机の上に置かれたAVを隣の男子の席にこっそり仕舞いつつ、俺はイツセーに挨拶する。

「おう、おはよ。やけに元氣そうだが、何かあったのか？」

「いやいや聞いてくれよ輪廻ツ!!なんと俺によ、俺によお〜!」

「なにもつたいぶってんだよ。なんだ?通りがかりの女の子がパンチラしたのか?」

「ちげえよ元浜あ。全く、想像力が足りないなあ。ど、う、て、い、はっ!」

「な、何いつ!?」

「その口ぶり、まさか貴様童貞を捨てたというのか!」

朝からハイテンションでやり取りする三人をぼけーっと見つめつつ、俺はイツセーの次の言葉を予想する。

そしてその言葉が正しければ、原作が開始されたのだ、という事になるわけだ。

「いやまだそこまではいってねえけど。——けど捨てるのも時間の問題だぜ、非モテ二人と鈍感系一人!」

「誰が非モテだ」

「「お前じゃねえよ!!」」

三人からの総ツツコミに口をつぐむ。

いやいや、でも俺は非モテだと思うぞ。別に木場（原作キャラ。イケメンで、女子から大人気）みたいにキヤーキヤー言われているわけでも無いし。

というかお前らと一緒に猥談してるせいで人気ねえだろ、俺。

「ゴホンっ!!なんと!この度私兵藤一誠に——彼女がつ!できましたあああああつ!!」

「な、なんだってー!」

「……そうか。おめでとう」

驚く二人を尻目に、純粹にイツセーを祝福する。

それと同時に哀れにも思う。

だってその彼女は、イツセーの事を――。

……とにかく、これで確定した。

原作は開始されている。

そしてもうすぐ、コイツは……イツセーは。

「はっはっは! 予想通りの反応ありがとう同志たち……いや! 元同志たち! そしてさよならだ! 俺はこの一週間以内に、ファーストキッスもその先も、全部経験してやるぜ!」

「な、なんかの間違いだ! イツセーに彼女ができたなんて!」

「あり得ねえだろどんな手品使ったあ!」

「ふざけんな! なんでお前に彼女ができたんだよ!」

「どんな弱みを握った!」

「え、うそ兵藤に彼女……?」

「趣味わるーい」

松田元浜を筆頭に、教室中から非難の声。

いや、酷い嫌われようだな。

まあ基本に俺が止めているとは言え何度か覗きを決行した男だから仕方ないと言えれば仕方ないのだが。

「まあ、外野の俺から言われる筋合いはねえだろうけど。彼女さん大事にしろよ。せっかくお前を選んでくれたんだから、相応の誠意つてのは見せなきゃだめだ」

「わ、わーってるよ、それくらい。――っつか、お前本当に彼女できた事ねえの? 俺ですらいきなり声かけられてずっと前から好きでしたって告白されたのに」

「ま、俺相手に告白しようとする酔狂なヤツは基本いないな」

はっはっは、と乾いた笑い声を上げる俺に、三人とも呆れた様な目を向けてくる。

なんだその目は。俺は別に間違ったことは言っていないぞ?

確かに時折女子から視線を感じることはあるが、それはどうせイツー達に向けられる様な奇異の目だろう。

その中に俺への好意的な目は決してないはずだ。

「つたく、物言いたげな目を向けてきやがって……まあいいか。ほら、そろそろ朝礼始まんぞ。さつさと席戻つとけ」

俺の言葉に従って自らの席に戻っていく三人から視線を外し、俺は机に突っ伏して眠り始めるのだった。

……因みに朝礼中に出席簿で殴られて目を覚ました。体罰調査に書いたろうか、この暴力教師。

※――

イツセーの彼女事件から早数日。

意気揚々とデートに臨んだ日以降、イツセーはやけに元気がない様子だった。

まあ、悪魔に転生した影響だろう。

……そう。イツセーは悪魔に転生した。

神器を持つという理由で、人間のフリをしてイツセーに告白した墮天使に、あいつは殺された。

それは原作通りの流れであるし、そのために俺はイツセーを見殺しにした。

無論最初は助けようと思った。

だがしかし、ただでさえ崩壊が決まっている原作の流れから、これ以上変更を加えさせるべきではないと自分で自分を無理矢理納得させ、一度親友が死ぬことを是とした。

結果として、ここまでの流れが原作通りとなったわけだが。

……まあ、その償いといっってはなんだが、この先イツセーが死ぬ様なことが有れば必ず守る。

そのためなら、俺の何百年と鍛え上げてきた力の全てを振るうことすら辞さない。

ドライグ公認の現世界最強（オーフィスやグレートレッドと言った最強レベルのドラゴンと肩を並べられるらしい。人間なのに）の名は伊達ではないぞ。

「つつーわけで、お前にコイツを殺させるわけにはいかないんだ」

「…いきなり現れ、何を言い出すかと思えば…：貴様の様な珍妙な輩が、この私と戦えるか?」

現在、夜。

弱い悪魔と墮天使の気配を感じたので駆けつけてみると、イツセーが墮天使の男に殺されそうになっていた。

悪魔に転生した今、墮天使の使う光の攻撃を受ければただでは済まない。

というかこれ以上コイツが死ぬ理由も必要もないしな。宣言通り守るさ。

因みになぜ墮天使も男が俺に珍妙な輩、と言ってきたのかというと、俺が顔を隠すために去年の縁日で買ったお面を被っているからだ。

上下ジャージでお面をつけた男。確かに不審者とは思えないだろう。

…というか俺、不審者ムーブ多すぎん?

「戦えはしないさ。なんてったって、これは一方的な処刑にしかかならないからね」

「戯言を…：下等種族風情が、調子に乗るなあツ!!」

俺の発言に怒り狂った墮天使が、その手に光の槍を生み出し、投擲してくる。

この光の攻撃は、特に悪魔に有効だが、ただの人間でも当たれば死ぬ程度の威力は持っている。

まあ、俺はその普通枠に入っていないんだけども。

飛んでくる槍を躲すことなく手で掴み、握りつぶす。

流れるように槍が破壊されたのを見て、墮天使はかなり狼狽していた。

「な、何ッ!?!」

「生憎と、俺はただの人間じゃないんでね」

「チツ…：神器持ちか!」

正解。ただ模範解答はその上、神滅具だ。

まあ、今回はその力は使っていないんだけども。

ただ気（オーラみたいなヤツ。人間誰でも持つてる）で全身を包んでいるだけだ。

つまりまだまだ全力とは程遠い状態なわけだが、なんだか墮天使が愉快そうにしている。

なんだコイツ。

俺の背後で座り込んでいるイツセーも、怯えながらも首を傾げている。

「ふ、ふふふつ。確かに少し驚かされたが、冷静になればどうということはない。大方その面が神器なのだろう？恐らく身体能力を向上させる効果があるのだろうな。だがその神器、まるで力を感じぬぞ？できる強化もたかが知れるな。まあ、少々面食らったが…その程度だ。込める力を増やせば、殺すのもたやすかろう」

「…ええ…」

すごい勘違いされてた件。

いや、このお面は顔バレ防止でつけてるだけで大した効果も何もないんだけど。

つーか『気』を使ったってわかんねえの？弱すぎないか？

呆れて脱力してしまう俺だが、イツセーはそうではなかったらしい。

バツと俺の前に立って両手を広げ、墮天使から俺を庇うようにした。

その体は、注意して見ずともわかるほどに、震えていた。

※――

俺は兵藤一誠。趣味が覗きとエッチな妄想な、普通の男子高校生。物心ついた時から一緒に遊んでる大親友の立神輪廻や、エロいことに関して情熱を滾らせまくっている同志である松田、元浜の三人と合わせて『変態三人組と保護者一人』という不名誉な呼び名を頂戴している。

勿論俺は変態三人組の方。俺が何をしたっていうんだ！教室でエロDVDの貸し借りしたりおっぱい談議に花を咲かせたり階段下で

待機してスカートの中覗こうとしたり女子更衣室を覗いたりしただけなのに!!

……はい、そうですね。明らかにそれが原因ですね。

でもしようがねえじゃん！男の子なんだから！

保護者枠でもある輪廻だってイケメンでモテモテだけど、俺らと一緒にエロDVD観賞会したり女体談義で白熱したりするし！

……って、今はそれはどうでもよくって。

こんなエロ猿として女子から軽蔑されまくっていた俺に、最近彼女ができた。

名前は天野夕麻。他校の子で、ずっと前から好きだったんだって!!俺はその子のことよく知らなかったけど、まあ愛つてのは時間と共に……って言うし、告白は即OK。

で、輪廻や松田や元浜に自慢しまくって、脱童貞という輝かしい未来に胸を躍らせて初デートに臨んだ。

そのデートの最後に、夕麻ちゃんがこんな事を言ってきた。

「死んでくれないかな」

いや、びっくりだよな。これから愛を育んで行こうと思つてた子が、キスするようなムードの中、死んでくれないかなって言うってくるとは思わなかったよね。

しかも次の瞬間には夕麻ちゃんの服が弾けてボンテージ姿になって翼が生えたかと思いきや、光る槍(?)で刺されるし。

カラスみたいに黒い羽が、今でも夢に出てくるくらいだ。

でも殺されたはずの俺は、今もこうして元気に生きている。

ただ、前と違って朝のテンションがかなり低くなった。

代わりに夜中はすっごくハイテンションで、それこそ一徹二徹も余裕で行けるレベル。

しかも力が湧き上がってきて、ちよつと走ってみたら陸上で世界取れそうなくらいの速力と持久力を発揮できた。

正直、自分が少し怖い。

朝にとことん弱く、夜中は人外レベル。

毎晩のように見る悪夢で俺を殺す恋人は、なんと誰も覚えていない

のだ。

交換したはずの連絡先も無くなってたし。

あの日：俺が夕麻ちゃんをデートしたはずの日から、俺の生活は変わった。

とりあえず力が溢れて止まらないから、夜中は散歩するのが日課になった。

：で、その日課を今日も今日とて行おうとしてたわけだけど、その途中で出会った。出会ってしまった。

夜闇に紛れる黒い翼。

肌がピリピリと痛むような威圧感。

鋭い目つきから連想されるのは、コイツに殺される俺の姿。

奴は、自分は墮天使だ、といった。

嘘だと思いたいが、その背中の翼が現実のものだと俺を納得させる。

：何より、俺は一度見てしまっている。

夕麻ちゃんが、同じ翼を生やすところを。

あいつは『はぐれ』とかわけわかんない事を言いながら、夕麻ちゃんが持っていたのと同じ輝く槍を手に持って、俺に投げようとした。

勿論逃げようとしたけど、体に刻み込まれてる『死』の恐怖が、この殺気を放つ男に背を向ける事を許さなかった。

やべえ、俺、また死ぬ…！と、思ったその時。

「つつーわけで、お前にコイツを殺させるわけにはいかないんだ」

突然現れた上下ジャージの、お面をつけた男。

なんだか輪廻によく似た声をしていたが、感じる雰囲気は別者だった。

なんというか、大樹？みたいなのを想像する感じ。

大らかつていうか、包み込まれるっていうか。

いきなり現れたこの男に、墮天使の方もちよつと緊張しているようだった。

まあ、戦いなんて漫画とかでしか見たことない俺でも、強いって本能的に感じるような人だからな。

…でも、なんで俺を守ってくれるんだろう。面識ないはずだけど。男と墮天使がいくつか言葉を交わした後、墮天使が手にした槍を投擲した。

俺が殺された一撃だ。強そうだけど、当たったら……！と思った次の瞬間、男は素手でその槍を掴み、片手で握りつぶした。

…う、嘘でしょお!?俺、それに殺されたはずなんだけど、ええー!?けどそんな芸当ができたのは、せいくりつど・ぎあ、とかなんとかいうモノのおかげだと墮天使は笑った。

しかもこの男のせいくりつど何とかは、大した力がないらしい。

このままだと、俺を守ろうとしてくれたこの人が殺される!

そう思った瞬間、体が勝手に動いていた。

すつげえ怖くて仕方ないはずなのに、しかも女の子じゃないのに、俺はこの人に死んで欲しくないって思った。

もう、何から何までわけわかんねえけど……こうなりややけだ!墮天使だかなんだか知らねえが、この人は殺させねえ!

「はははっ、悪魔が人間を庇うか!とんだ茶番だが、なるほど面白い。望み通り、貴様を先に消滅させてやる!!」

「いや、そんなことはさせんさ」

「は、速ッ!」

墮天使が槍を振りかぶる。

怖え!!……けど、俺が避けたらこの人が死んじゃう!

そう思っただけで無理矢理その場に止まって、でも死ぬのは怖いからって目を閉じたその時、背後から突風が吹いた。

驚いて目を開けたら、男が一瞬で墮天使の目の前に接近して、殴りつけているところだった。

えっ、もしかして今の突風って、この人の移動で発生したの!?マジで!?

ぐべえっ!なんて情けない声を出して吹っ飛んでいく墮天使を茫然と見つめる俺に、男はゆっくりと近づいてくる。

「え、えつと……」

「怪我は無いな?」

「あつ、はい！おかげさまで！…えっと、貴方こそ…大丈夫、ですか？あの、変な槍みたいなの掴んでましたけど」

「いや、敬語は良い。後、怪我也無い」

「そ、そっすか」

うーむ。落ち着いて話しているとやっぱり輪廻みたいを感じるな、この人。

よく見りや背丈もおんなじ感じだし、ほんとに輪廻？

…いやでも輪廻は確かに喧嘩強いけど、あの槍素手で掴んで破壊したり一瞬であの距離移動したりなんて、流石になあ。

「けど…あの、もしかしてなんだけど、お前って」

「明日、旧校舎に行け」

「は、はい？」

旧校舎？旧校舎ってーと、あれか？ウチの学園の二大お姉様ことリアス・グレモリー先輩と姫島朱乃先輩がよく目撃されると噂のアレ？

…あの二人、おっぱいでつけえんだよなあー。一度でいいからあんな美人のおっぱい揉んでみたいぜ、なーんて。

でもなんで旧校舎に？

「旧校舎に行けば全部わかる。お前に起きた変化についても、天野夕麻についても」

「ッ…！」

天野夕麻。

俺の初めての彼女で、俺以外の誰もがその存在を忘れていて、そして…俺を、殺した子。

なんでそのことが旧校舎に行けばわかる？

そもそも、なんでコイツが夕麻ちゃんを知ってた？

頭の中がぐちゃぐちゃになりそうで、後先考えずに男に掴みかかった。

仮にも恩人だけど、今はそれよりも…!!

「な、なんでお前が夕麻ちゃんの事を知ってたんだよ!?!なんで旧校舎に行けばわかるんだよ!?!つつーか、お前は誰なんだよ!?!」

「…すぐにわかるさ。お前の疑問も、俺の正体も」

そう言って、男は俺の手を避けて、そのまま去っていった。  
後に残ったのは、遠くで倒れている堕天使と、立ち尽くす俺。  
今日一日で……というか、この数分でいろんなことがあった。  
……俺、マジでどうなっちまうんだ……？

多分俺はテンプレオリ主／悪魔、はじめました

「ただいまー」

墮天使との戦闘を終え、イツセーにそれっぽいことを言って帰宅。大分遅い時間だが、基本的に父さんと母さんはこの時間でも晩酌している。

いつもなら、酔いが回りはじめた頃だろうか。

そんな事を考えながら靴を並べていると、居間の方からこちらに駆け寄ってくる足音が聞こえる。

無論足音の主は父さんでも母さんでもない。ついでに俺は兄弟姉妹もいない。

この足音の主は、今では立派な我が家の一員となった女性で。

「おかえりなさいにゃん♪」

「おう、ただいま」

背中を感じる柔らかい二つの感触にちよつとした興奮を覚えながら、抱きついてきた彼女の顔を見る。

艶やかな黒髪に、金色の瞳。

頭についたびこぴここと動く猫耳が、とても可愛らしい。

彼女の名前は黒歌。

ハイスクールD×Dの二次創作で、よくオリ主になんやかんや助けられて懐く子である。

(改めて、俺ってなかなかテンプレオリ主だよなあー)

『(む、てんぷれ？おりぬし?)』

頬と頬とをすり寄せる黒歌の頭を優しく撫でながら、疑問符を浮かべるドライグに「なんでもない」と一言だけ告げた。

※――

俺は生前から、ハイスクールD×Dが好きだった。

原作のおっぱい&熱血も良かったし、二次創作のシリアス濃いめやギャグ多めも好ましかった。

そして、オリ主……つまり、オリジナルのキャラクターが主人公で、なおかつ作中で一番強いというタイプの二次創作。

俺は、それも大好きだった。

俺はあまり原作信仰といった真似はしないので、主人公や別のキャラのヒロインがオリジナルキャラクターのヒロインとなっていて気持ちにならなかったし、ご都合主義的な力を使って原作ではどうしようもなかった事を片手間で解決してしまうのを良いものだと思っただ。

恥ずかしながら、自分が主人公だったら、という妄想を何度もしたことがあるくらいに。

……ただ、それは転生の過程でゴリツゴリのチート能力をもらえた場合の話。

得た力が作中で中堅程度（イツセーはそれでも上位陣に主におっぱいへの情熱で喰い込んでいたが）のアイテムで、しかもハイスクールD×Dにおいてそれなりに重要視される血筋はザ・平凡。

これではヒロイン達をご都合主義的に助けて惚れさせるなんて夢のまた夢。

それどころか、この世界の家族や友人……なんなら自分自身すら守れない。

だから俺は死の直前まで自分を追い込んだり、原作ではしていなかった神器の使い方を試してみたりと、この数百年間（何度だって言うが俺の魔法の効果で俺だけ何百年も過ごしたことになる）ひたすら己を高め続けた。

全ては俺の周囲の小さな「世界」を守るため。

あとついでに原作ヒロインたちといい感じになれたらなという下心ありきで。

……そういやこれってどーなんだろうな。

運命の強制力とか、よく二次創作で出てくるけど…俺がどんだけヒロインの好感度稼ごうとしても最終的にイツセーに持つてかれたりするんだろうか。

まあ、この辺はいずれ分かるか。

「んじやーん♪」

「お。今日はやけに甘えん坊だな」

「ははは。輪廻と黒歌さんの仲が良いようだなによりなにより！ほらほら、母さんも、僕に甘えちゃっていいんだぞ？」

「もお、お父さんってば〜！」

ソファに座る俺に、人の姿のまま黒歌が甘えてくる。

その様子を食卓から見ている父さんが高笑いし（普段はもつと寡黙なのだが、酒が入るとこうなる）母さんが嬉しそうにしながら父さんへとしなだれかかる。

我が家ではかなり見慣れた光景だ。

黒歌といえば、少し前に話した通り二次創作界限でしよつちゅうヒロインを勤めている猫耳美人。

着崩した着物と、猫？という種族故の猫耳&猫尻尾に、あざとすぎるとすら言える語尾の「にゃん」が魅力的な女性だ。

彼女とは冥界（所謂地獄。悪魔と堕天使が暮らす場所）での修行中に会い、傷ついた彼女を俺が助けて、その後紆余曲折を経てこの家で一緒に暮らすことになった。

…で、その過程で俺が色々をやったというかやらかした為に、こうして物凄く懐かれたのだが。

まあ、すつごく距離感が近い。

良い匂いするしおっぱいは柔らかいし甘えてくる表情が堪らんしおっぱいは柔らかいし。

一応生きた年数的には何百年レベルとはいえ、未だ思考は思春期なのだ。

あの変態三人組とタメを張れるレベルのエロエロ度合いなのだ。

つまり、うん。下品な話勃起が治らん。

今も抱き合う構図になってるせいで、黒歌の桃尻が俺の股間をぐにぐにとマッサージしてくるのだ。

ってかわざとやってんだろ。誘ってんのかコイツ。

…ま、そう思っても直接好意を口にされないと行動に移せないへタレなんて何もできないんですけどね。

俺の首元に顔を押し付けて匂いを嗅いで来る彼女の頭を撫でながら、自分の情けなさつぷりを改めて自覚する。

こんなに甘えてきてるんだし、ご主人様呼びもされているんだし、きつと少なからず好意は寄せられているんだろう。

けど、もし違ったらという考えがどうしても拭いきれない。

別に精神的には童貞じゃねえのに、変な所でチェリーなんだよな、俺。

「すんすん……この匂い……ご主人様、今日は堕天使と戦ってきたの？」  
「ん。ちよつと友人が襲われててな。まあ、下級も下級さ。神器を使うまでもなかった」

『そもそも今の相棒に俺を使わせるような相手なんざそうそういないさ』

「おおー！ドライグさん！今日はいいい酒が入ったんですよ、一緒にどうですか？」

『む、酒か。おい相棒、頼む』

「へいへいっと。黒歌、ちよつと離れて」

「はーい」

ブーステッド・ギアを出現させ、ソファから父さん達のもとへと移動する。

酒瓶を掲げる父さんに宝玉部分に向け、酒をかけてもらう。

すると酒は宝玉内に吸い込まれ、中からドライグの『ぷっはー！美味いな！』という声が聞こえてきた。

神器は所有者の願いによってその形やあり方を変える。

無論所有者の力量によって限界は定まるが、このように神器内部に物を収納する機能を与えるくらいはまだ弱かった時の俺でも作れた。

そして応用で、ドライグに飲食物を与える事もできるようになった。

……まあ、ドラゴンで神器とはいえ俺の相棒。長いこと一緒に過ごすわけだから、それくらいのこととしてはしてやろうと思っただのだ。

その結果、父さんと一緒に酒盛りをする飲兵衛ドラゴンが生まれたわけだが。

ああ、そうそう。黒歌の事もドライグの事も、二人はあっさり受け入れてくれた。

片や妖怪、片やドラゴンというファンタジック極まりない存在だったが、ここにいるんだから否定しても仕方ないと驚く程柔軟な思考をみせてくれた。

正直、この二人が両親で本当に良かった。熟年夫婦なのにバカッフルで、人前だとちよつと恥ずかしい二人だけど。

「ご主人様も、一杯どうにや?」

「ああ、ジュースか。なら貰おうかな」

右手は父さんへ向けたまま、黒歌からコップを受け取る。

中身は乳酸菌飲料だ。甘くて美味しいのでよく飲んでる。

……あ、そういえばブーステッド・ギアが右手に付いている件について（本来なら左手に付くのだ）まだ話していなかったっけか。

と言ってもこれは大したことはなく、ただ俺が右利きだからこうなっただけである。

やっぱ殴るときは利き手のが良いよな。

「いやあ、流石ドラゴン殿! ささ、どうぞもう一杯!」

『はーっはっは! いやはや、美味しい酒はやはり良いな! 親父さんに注ぎ返せないのが残念極まる!』

「…ほんつと、世俗に染まったなあ赤龍帝」

※——

墮天使やお面の男との一件の翌日。

俺は取り敢えず言われた通り旧校舎に向かうことにした。

アイツの言葉を完全に信じ切っているわけではないけど、現状手がかりがこれしかないのも事実。

…ま、もし何もなかったとしても二大お姉様のお姿を目にできるだけ得だしな。

そう思っただけで旧校舎の前までやってきたけど、なんだか変な威圧感めいた物を感じる。

これは俺が気張りすぎているのか、それとも何か別の理由があるのか。

生唾を飲み込んでドアに手をかけると、背後から突然声をかけられた。

「あれ？君はもしかして、兵藤一誠君？」

「うわあああつ?!?!……つて、お前は……」

声の主は木場裕斗。

俺と同じ年ながら、イケメンかつクールキャラとモテモテのモテ。

輪廻とは違い表立ってキヤーキヤー言われるタイプで、優男。

直接会って話したことは無いが、松田元浜と一緒によく呪詛を送っている相手だ。

でも、なんでそんなモテモテイケメン野郎がこんな所に？

「ああ、僕は木場裕斗。一応同じ学年だけど、クラスが違うから知らないよね……。ああ、僕が君を知っているのは——その、君が有名人だからー、かな？」

言葉を濁す木場。その笑みは男の俺から見ても爽やかで、とても腹立たしかった。

ち、ちくしょーっ！こういうヤツばっかモテて俺は何も無しとか、世の中不公平だと思っんですけど!?

輪廻曰く俺は顔はさほど悪くねえはずなのに！

なんだよ、やっぱエロいこと考えちゃダメなのかよ！でも輪廻だって俺らとよく猥談してるのにモテてるじゃねえか！

世の不条理を嘆きつつ、一応軽い自己紹介程度に名乗っておく。すると木場は、俺から感じる敵対心を感じ取ったのか、苦笑いをした。

「えっと、それでどうして君がここに？」

「そりゃー……あー……」

言おうとして、思いとどまる。

いきなり墮天使がなんだとかいなくなった恋人がなんだとか言っ  
て、信じてもらえないわけがねえ。

夕麻ちゃんの話だって、信じてくれた（というかまともに取り合っ  
てくれた）のは輪廻だけだったし。

——こう考えると輪廻ってマジでいい奴だよな。証拠も何も  
ねえのに「お前が言うんだからきつとなんかあるんだろうよ」って否  
定しないでくれてさ。

女だったら惚れてたって、きつとこういうのを言うんだらうな。  
つと。とにかく適当な言い訳でもして、中に入らねえと。

「ここにこの学園の二大お姉様のリアス・グレモリー先輩と姫島朱乃先輩がいるって噂を聞いてなー！ま、是非一度お目にかかって見た  
いって思つてよ。大勢に囲まれてんの一回見ただけだったし、せつか  
くなら邪魔がない状態でーって思つてな！」

「あら、私に会いに来たの？」

再び背後から声をかけられる。

今度は女性の声。

凜としていて、それでいて妖艶で、とつても素敵で——恐ろしい、  
声。

バツと振り向くと、そこにいたのはグレモリー先輩。

ゾツとするほどに鮮烈で美しい紅色の髪が、風に靡いていた。

そして、なんとと言ってもそのおっぱい！

デカイ。デカすぎる。

万乳引力はここに証明された！乳神様はここにいた！！

「あ、え、えつと。俺、兵藤一誠つて言います！初めまして！！」

「ふふつ、元気がいいのね。そういう子は好きよ」

すつ、好き！なんて素晴らしい響き！

とても一個上とは思えない余裕と気品に溢れる笑みに、俺の心臓は  
バツクバクだった！

…けどなんだろう。やっぱり、なんかこの人…怖いん、だよな。

前に見たときはそんなの感じなかったんだけど、ここ最近…それこ  
そ夕麻ちやんに殺される夢を見て以来、なんだか言いようのない恐怖  
というか、決して逆らつてはいけないつてオーラというか…そういう  
のを感じるんだよな。

「せつかくだし、中で話しましょうか。私たちの部室に招待してあげ  
る」

「ええっ!!いいんですか!?!」

グレモリー先輩の部室。そこはこの学園に通う男女から密かに『楽  
園』と呼ばれている。

なぜなら、そこにはグレモリー先輩を筆頭に姫島先輩、塔城小猫ちゃん（一年の子で、常に無表情のマスコットの人気のある子）といった綺麗＆可愛い美人三人と、木場という激モテ優男がいるのだ。男にとつては木場が邪魔だが、それでもあの三人と同じ空間にいられるのはまさに天にも登る気持ちだろう。

一度とある裏切り者が部室にお邪魔したという話があるがな！

……まあ、輪廻のことなだけど。

アイツの話によると、小猫ちゃんから一緒に部活に入らないかと勧誘されたらしい（滅多に人と関わらないあの子から、だ）

勿論その話を聞いて、俺たちは怒り狂った。

許すわけにはいかん。コイツ相手じゃ俺ら三人でも敵わないとしても、天誅を下さねばならないと。

結果は惨敗。しかも途中からクラスの男子のほとんどが輪廻討伐に乗り出したのだが、まとめて無力化された。

その一件の事を『駒王二年男子大虐殺事件』と呼び、輪廻に逆らうなどという暗黙の了解が男子の間で生まれたのだが、それはまた別の話。

しかもアイツ、小猫ちゃんからの誘いは断つたらしい。というかグレモリー先輩からそれとなく断られたとのこと。

イケメンってだけじゃ入れないようだ。ざまあ。

「ええ。なら、早速入りましょう？ 私たち……オカルト研究部の、部室に」

見る者全てを魅了してしまうような笑みに、やっぱり俺は何とも言えない恐怖を感じてしまうのだった。

……つてか、オカルト研究部で。なんだか変……というか、この人らしからぬ気がする。

※——

今はグレモリー先輩たち以外は誰も使っていないはずの旧校舎は、外観だけでなく内装もしっかりと小奇麗になっていた。

清掃員だか用務員だかの人も大変だな。ここも結構広いのに。

それにこの旧校舎、使われなくなつて結構長い事経つてるのに。

そんな事を思いながら、時折前を歩くグレモリー先輩のお尻を眺めつつ移動して、ついに先輩のいう『部室』にたどり着いた。

ある教室を改造して使っているらしいが、正直そうは思えないくらいにデコレーションされていた。

設置された西洋風の高級感漂う家具の数々。

壁や天井の至る所に書かれた、何語かもわからない呪文。

そして極めつけは、足元に大きく描かれた魔法陣らしきもの。

なんだかただの改造した教室ではなく別世界に来てしまったような気分になった。

「…どう？・気に入ったかしら？」

「——あつ、えーつと」

やべえ、正直先輩らしくないつすねという感想が俺の今の率直な気持ちなんだけど。

でも流石にそんな事言うのも失礼だよな……どうすつか。

悩んで返答できずにいる俺を見て、先輩は「その様子だとあんまりみたいね」と苦笑した。

見た感じあまり気にしては居なさそうだし、良かった？かな。

「あれ？・そう言えば、他のメンバーは…」

「まだ来てないわよ。まあ朱乃はすぐにでも来るでしょうけど、小猫の方は最近遅れてくるようになったわね」

気になる男子でもいるんじゃないかしら、と笑う先輩に、俺は脳裏に一人の男を思い浮かべた。

十中八九アイツだ。あの野郎輪廻に違いない。

「さてと。兵藤一誠君ね？皆が呼んでるらしいし、イツセーって呼ばせてもらっても良いかしら？」誠、だと少し言いくくって」

「は、はいっ！是非イツセーとお呼びくださいです!!」

あの学園トップクラスの美女からのあだ名呼び！

色々考えていた俺の脳内は、一気にその事に関する喜びで埋め尽くされた！

食い気味に若干間違った敬語で返事をした俺に、先輩は満足そうに頷いて、ソファに座るように手で促してきた。

それに従って席に着くと、先輩は俺の向かいのソファに座り、木場は先輩の隣（つっても少し距離は置いてある）に座った。

く、くそっ！悔しいけど先輩美女の隣には木場イケメンが居た方が絵になっ  
てやる！

歯を食いしばる俺に、先輩は一度静かに呼吸した後、口を開いた。

「ねえ、イツセー。どうしてここに来たの？」

「それはー……その、先輩たちを一目見たいな、と」

「嘘よ」

頬を掻きながら誤魔化した俺に、先輩はバツサリとそう言い切った。

なんだろ、俺の嘘ってバレやすいのかな。ポーカーとか得意なんだけど。

真っ直ぐに俺の目を見つめる先輩は、やっぱりどこか恐ろしかった。

美人が凄むと怖い、とは言うが、多分それ系の怖さとは違う。

「嘘って…」

「あなたは私の眷属だもの。主として、その程度の嘘は当然見破れるわ」

「は？眷属？」

先輩なのに滅茶苦茶タメ口が出てきた。

いやでも仕方ねえって。いきなり眷属とか主とか言われてもわけわかんねえって。

なんかの間違いですよ、という意味を込めて聞き返した俺に、しかし先輩はあっさり頷いた。

「そう。眷属。——いきなり言われても混乱するでしょうけど、単刀直入に言うわ。私、悪魔なの」

言葉と同時に、先輩の背中に突如現れる蝙蝠のような羽。

プロジェクションマッピングとかを使った大掛かりなドッキリ計画？と無理矢理現実的な内容に落とし込もうとしても、やっぱり目の前にいる先輩が『悪魔』であると認めるしかできない。

早速混乱している俺に、先輩はさらにもう二つ爆弾を落とす。

「今隣に座っている裕斗も、この場に居ない朱乃も小猫も、皆悪魔よ。  
——そして、貴方も」

「へっ?」

先輩の言葉に合わせるように、木場からも同じような羽が生える。  
ここまでは良い。いや全然良くないけど納得できる。

けど。けれども。

なんで俺も背中に何かがあるような感覚があるんだ?

なんでちよつと視線を向けたら二人の背中にあるのと同じような  
見た目の物があるんだ?

もしこれが本物で、先輩の言葉が全て真実だとしたら。

——どうして俺、悪魔になつてんだ!?

「う、うわああああつ!? な、なんだよこれッ、羽エッ!」

「落ち着きなさい、イツセー。混乱する気持ちはわかるけど、話が進ま  
ないわ」

先輩に言われ、渋々席に着く。

しかし未だに疑問符は頭の中でハッスルタイム真つただ中。いつ  
から俺の脳内はおっパブになつたんだ。

くだらない事を考えて何とか気を紛らわせようとする俺に、部長は  
知ったことかと重要そうな事をどんどんと口にする。

「今ので私達や貴方が悪魔だつて事は、取り合えず納得はできなくとも  
理解はできたと思うからその体で進めるわね? まずは貴方がここ  
に来た理由と、その答えについて話しましょうか。端的に言えば、  
貴方に起きた変化: 日中に力が出ない代わりに、夜中に力が溢れる事  
ね。その理由はさつき言った通り、悪魔になつたから。そして『天  
野夕麻』という少女は——」

「ちよつ、ちよつと待つてください! いきなりそんなまくしたてられ  
てもわかりませんから! っっていうか、なんで俺がここに来た本当の理  
由を知ってるんですか!」

「簡単よ。昨日あなたが墮天使の男に襲われた場を、私の使い魔が目  
撃していたから」

使い魔。

これまた悪魔関係っぽいワードだけど、そんなのもいるのか。  
まだ悪魔云々を認めたわけじゃねえけど。

……いや、でも堕天使がいるってのは昨日の一件で認めざるを得ない訳で。

となると悪魔の存在もまあ、おかしくはない……のか？

「本当はすぐに助けに向かう予定だったんだけど、あのお面の男が来たでしょ？彼が貴方を守ってくれたみたいだし、隠れて監視して彼の正体を探ろうとしたのよね。彼はその事に気づいていたみたいで、正体に繋がるような物は何も得られなかったけれど」

お面の男。

俺をここに来るように指示した張本人。

もしかしたら先輩の知り合いなのかな、ってさつき一瞬思ったけど、どうやら違ったらしい。

ガチで正体不明なのか。あの輪廻風ジャージ男。

誰との関係性も不明なのに、俺を守ってくれたって……つまりどういう事だ？

「その代わりに、あの場で交わされた会話の内容は私も知ってる。だからその上で、貴方が今知りたい事を教えてあげてるって訳。質問とかを挟まれると長くなっちゃうからって端折り過ぎたわね。ごめんなさい」

「あ、いえそういう事だったなら全然いいんです。——じゃあ、その。夕麻ちゃんの事を、改めて教えてください」

「わかったわ。気分が悪くなるかもしれないけど、はつきり言わせてもらおうわね。——彼女も、堕天使よ。貴方に接触したのは、あなたから微弱ながら神セイクリッド・ギア器のオーラを感じたからでしょうね。そしてあなたが神器持ちと確定したから、あの時あの場所であなを殺した」

セイクリッド・ギア。またこの言葉だ。

昨日の堕天使も、確かお面男に言っていたはず。

……つか、やっぱりアレは夢じゃ無かったのか。

しかもあのデートは、夕麻ちゃんにとっては俺を殺すための途中経過でしかなかったと。

俺、本気でプランとか考えて挑んだんだけどな……。

「やつぱり、シヨックよね」

「そりやそうですね。俺は、本気で夕麻ちゃんの事が好きだったわけですし。それが全部、あっちの都合で作られた嘘でしか無かったなんて……」

ああ、畜生。今にも泣きだしそうだな。

ここにもし先輩や木場が居なかったら、俺は大号泣していたに違いない。

つてか涙がちよつと零れてやがる。

だつてさ。初めてだったんだぜ？俺が本気で一人の女の子に特別な想いを抱いたのつて。

初めてだからつて失敗しないようにつて、輪廻にも協力してもらいながらプラン考えてデートしたし、夕麻ちゃんの前だとあんまりスケベな顔をしないように気を付けたし、街中でおっぱい大きい人とすれ違つても目で追わないようにしたつてのに。

自分の本質を隠してでも好きでいてもらいたいって思ったのに、あつちは元から俺そのものはどうでも良かったつて、事かよ。

「……もし辛いと思うなら、その記憶を消す事もできるけど」

「……これは俺の心の問題なんで、一人で解決します」

「そう。——なら、せめて気を紛らわせる意味も兼ねて、違う話をしましょうか」

そういうと、先輩は手にチェスの駒のような物を持った。

でもなんだろう。普通のチェスの駒とは何かが違う気がする。

「さつきさくらつと言つたけれど、貴方は悪魔に転生したの。だから貴方は眷属で、私はその主つてわけ。そしてその転生の為に使つたのが、この『悪魔の駒』よ」

「い、いーびる・ピーす？」

「イーヴィル・ピース。見ての通りチェスの駒をモチーフにしたものね。——昔、墮天使や天使との争いで多くの同胞を失つた悪魔が、何とか数を増やそうと作つた物よ。これを使えば人間どころかどんな生き物でも悪魔にできるの」

「そ、そんなすごい物を俺に使ったんですか？」

「ええ。貴方の持つ神器に興味があったし、それにあなた自身が面白そうだったから」

お、面白そうだった、ですか。そんな理由で。

なんだか複雑な気持ちになりながらも、先輩の持つ駒を見つめる。

うーむ。説明されてから見ると、なんだか怪しげな雰囲気を感じるぞ。

「せっかくだし、ここで神器を出してみましようか」

「えっ、出す、ですか？でもどうやって」

「簡単よ。貴方の中で最も強い存在をイメージして、その真似をするの。そうすればこの魔力の満ちた部屋の中なら、必ず神器が出現するはず。一度出してさえしまえば、どんな時でもどんな場所でも神器を呼び出せるから、自衛の意味も兼ねて出す練習をしておきなさい」

も、最も強い存在を真似っすか。

まあ、パツと思いつくとしたらドラグ・ソボールの空孫悟かな……けどその真似を先輩と木場の前で披露すんのか!?それはちよつと抵抗あるぞ!?

ただまあやらないという訳にもいかないし、こうなったらヤケだ。

二人に見せてやるぜ、俺の本気のドラゴン波。

実際に漫画やアニメで悟がドラゴン波を撃つときに行っていた構えを行い、大きく息を吸う。

目を閉じて、自分は本当に悟のようなドラゴン波が撃てると思いつむ。

そして放つ！俺の渾身の――！

「ドラゴン波ア——ッ!!」

裂ぱくの気合と共に発したその叫びの直後、俺の左腕が指先から肘の部分まで輝き出した。

ま、眩しいッ！ってかなんだこれマジでできちゃったのかドラゴン波!?

光が収まったときには、俺の左腕には何か籠手というか、ガントレットのようなものがついていた。

色はオレンジ。全体的に丸みを帯びたフォルムながら、強い力を感じる。

「な、なんだこれ…!?これが、俺の神器…?」

「ええ、そうよ。神が人間に与えるギフト。大半はそれほど戦闘能力に特化していない、持ち主を支えるだけの物だけど、時々こうして貴方のように戦闘に特化した物を持った人間が生まれる。墮天使なんかは所有者を殺したり捕まえて研究したりするらしいし、悪魔はレーティングゲームという眷属と主をチェスの駒に見立てて戦うゲームを有利に進めるために所有者を引き入れようとしているし、天使側…:…というより教会側は、所有者を神に選ばれた者と持ち上げたりするらしいわ。——まあ、なんにせよ普通の暮らしとは無縁の生活を送らざるを得なくなるわね」

「…えっと、知らない単語が 一気に出てきたんですけど」

「勿論、全部しっかり説明するわ。けどまず通過儀礼…:…まあ、言ってしまうえば自己紹介ね」

そう言うと、神器を出しっぱなし且つドラゴン波のポーズ取りっぱなしの俺に、部長は咳払い一つの後こう言ってきた。

「貴方や祐斗達の主にして、悪魔であるグレモリー家のリアス・グレモリー。家の爵位は公爵。これからよろしくね? イッセー」

高嶺オブ高嶺の花だった先輩が、俺の主になった日。

俺に向けられる笑みは、やっぱり美しくって魅力的で妖艶で、何より恐ろしかった。

…:…因みにこの後姫島先輩や小猫ちゃんが来るまでに色々と説明されて、悪魔として必要な最低限の知識は身につけさせられた。

そして俺はこの部活、オカルト研究部に所属する事になり、また悪魔としての仕事も順次行っていくことになった。

あと、先輩はこれから部長と呼ばなくてはいけないらしい。

せっかく部活なんだから、そっちのが良いとのこと。

公爵とかなんとか言っていたけど変な所で俗っぽいなど思ったのは、内緒だ。

## 小さな猫とシスターと

駒王学園。

俺やイツセー、松田に元浜が通うこの学校は、前にも言った通り元女子高。

共学化したのはつい最近の事なので、学年が上がれば自然と女生徒の数の方が多くなる。

俺の知り合いの三年生(男)は、ちよつと肩身が狭いと笑っていた。因みに俺達二年生の方はというと、意外と男子の数が少ない。まあ、6:4か7:3と言った所だろう。

余り肩身の狭さは感じない。

：まあ、俺が日ごろからつるんでいる男子がイツセー、松田、元浜の三人とアウトロー系だからか。

女子の目を気にせず猥談繰り広げるって、我ながら中々の胆力だろう。

「うーっす立神。良いもんもってきたぜ」

「あー、そうか。それはありがたいんだが俺の机の上に並べるのはやめてくれねえか。こないだ先生に俺の所持品だと思われて酷い目にあったばつかなんだ」

「あー、確かにな。お前が手に取った瞬間に先生入ってきたんだっけ」  
少し前のちよつとした出来事でそれなりに盛り上がりつつ、今日も一日平和を噛みしめる。

原作は既に始まっているとはいえ、最初の頃は意外と平和なのがこの作品。

インフレの兆しは既にあつた物の、イツセーの力の無さ故に最初は下積み時代の日常パートが多めな為、大規模な戦闘等は無いだ。

それに今になって思ったんだが、今の俺って中々ぶつ壊れ性能なんじゃないか？

人間のままでけど、赤龍帝の力とかその他諸々とかで、最終的には過去に戻って全盛期のオーフィスと一対一で引き分けまで持ち越したくらいだし。

正直イツセーが中級墮天使にヒーヒー言ってるような時代にそぐわな過ぎる気がする。

「つと、おい立神。裏切者が来やがったぞ」

「裏切者つてお前……オカ研入っただけじゃねえか」

「いや到底許し難い裏切り行為じゃないか！アイツがああ顔面偏差値の暴力みたいな部活に入れるなんてなんかの間違いでしかねえ!!」

「おい聞こえてんぞ元浜」

「おはよ、イツセー」

「ん、おう。おはよ」

最近、ようやくイツセーが気だるそうにしている所を見なくなつた。

恐らく、太陽光に馴れてきたのだろう。

そして話の中に出てきた通り、イツセーは原作通りにオカルト研究部に入部……つまり、グレモリー眷属となった。

俺が旧校舎に向かうように言ってから既に数日経過している為、もう依頼を取り始めている頃ではなからうか。

今度チラシをなんとか入手して、召喚してやってもいいかもしれない。

そしたらコイツどんな顔するかな。気まずそうな顔をするのかな。

「くっ、立神のみならずイツセー！お前までそんな非童貞っぽい余裕を醸し出しやがって！」

「いや俺まだ童貞なんだけど」

「うるさいっ、モテ男は黙っている！俺は今、同志と思っていた男に裏切られたショックに苦しんでいる最中なんだ！」

「元浜……」

もしここに今日休んでいる松田が来ていればもつと騒がしい事になつていただろうな、と考えながら、二人のやり取りを眺める。

というかモテ男つて。

俺に好意らしきものを見せているのは現状黒歌のみだぞ。

見ているこつちが暑苦しくなるほどに熱弁した元浜の肩に手を置き、イツセーは真つ直ぐな瞳で言葉を紡ぐ。

「おっぱいって、柔らかいんだぜ」

「貴様アあああああアツ!!」

勝ち誇った表情を見せるイツセーに、元浜が怒り狂って飛びかかる。

ここ最近よく見るようになった光景だ。未だに飽きない面白さがある。

どれもこれも元浜が大仰に反応するのが悪い。

後イツセーもある事ない事言うからな。前に聞いたら大半が嘘だと言っていた。

一度リアス先輩が使用中のシャワールームのカーテンが落ち、生乳を拝めたことはあるらしいが、それだけだと。

それでも十分いい思いできてるんじゃないの?と思ったのは、別段隠す必要もない事だ。

※――

さて。俺は自分をテンプレオリ主だと自称する。

その最たる理由は黒歌に死ぬほど懐かれているという部分にあるのだが、一応他にもそうする理由はある。

その一つが、今俺の膝の上でリラックスしている年下の少女、塔城小猫だ。

いつ見ても眠たそうな顔をしており、学園内の男女を問わずに人気を集めているマスコットのロリッ子。

黒歌同様に二次創作で必ずオリ主のヒロインを担当する子であり、色々あって俺に懐いている子だ。

そんな彼女の本当の名前は白音と言い、現在俺の家で両親公認の居候(二人は俺とくっつけようとしてくれるが、あまり進展はないように思う。主に俺のせいだ)をしている黒歌の実の妹である。

とある事情から二人は現在仲たがいでいるが、いずれは絶対に仲直りさせて見せると俺は心に誓っている。

実際、二人の間に亀裂が生じたのは説明不足による勘違いがスタートだからな。

このまま敵対しっぱなしで居させるわけにもいくまい。

…ま、今はまだ黒歌の覚悟が決まっていならしいし、実行に移せていないんだけども。

(しっかしコイツ、ダウンナー系な部分あるくせに温かいな。普通ダウンナー系は低体温と相場が決まっているのに)

『(どうなー系、か。前にお前が熱心に聞いていたえーえすえむあーるとやらのか)』

(まあ、アレは他にも色々ジャンルがあるけれども)

俺と一緒に耳舐め囁き音声に悶えるドライグは、正直笑いを禁じ得なかった。

かの赤龍帝が極めて一般的な日本人夫婦と酒を飲みかわし、宿主と一緒に休日の昼間っから耳舐めASMRに没頭するようになるとは、誰が予想できただろうか。

でも原作だと乳龍帝おっぱいドラゴンという不名誉極まりない名前で親しまれていたし、大差ないか。

本人がノリノリで楽しんでいる当たりこつちのがダメかもしれないないけども。

因みに最近はめつきりASMRを聞かなくなった。

黒歌の機嫌が急転直下するからである。

「……あの、先輩」

「んー？どした？」

「やっぱり、この部活には入らないんですか？」

「入らないっつーか、部長に拒否られただろ？まあ、俺がしばらく入る気が無いって言った上での発言だけ」

「そうよ？だからもし貴方の気が変わったなら、全然入ってくれて構わないんだけど」

悪戯っぽく笑うリアス先輩に、俺はわざとらしく大きなため息を吐く。

…そう。俺はこのオカルト研究部に所属するようにと誘われた事がある。

それもこの小猫から。

最初は悪魔になる気も原作開始直後から表立って関わるつもりも

毛頭なかつたので拒否したし、その時はリアス先輩も「参加の意旨がない生徒を加入させるのはできないわ」と、無理矢理にでも俺を引き入れたがる小猫を落ち着かせてくれたのだが……うん。たった今裏切られた。

別にこの後加入するのは良いんだけど、せめてアシアの一件が終わってからにして欲しい。

ライザー云々の下りは、イツセーの修行をつけてやるためにも参加したいし。

「つーか、最近入ったイツセーですら色々言われてんだぞ？そこに俺が入ったりなんかしたら、そりゃ株も下がるさ」

「……先輩なら、別に誰も文句を言わないと思いますけど」

「いんや。こないだ俺がここでくつろいだ話をただでクラスの男子全員と戦う羽目になったんだぜ？ただ部室で茶を飲んでお前と休んだだけでそれなんだから、部活に所属なんてしたら俺殺されるぞ」  
「話には聞いていましたけど、さりげなく凄いですわよね。たった一人でクラスの男子全員を無力化した、だなんて」

「そんな大したことはしてないですけどねー」

「はい、おかわりです。と茶を注いでくれた姫島先輩に感謝を告げ、すぐさま飲む。」

「やっぱりこの人が淹れる茶はうまいな。母さんや黒歌には及ばないが。」

「…で、イツセーはいつもいませんけど、木場までいないって珍しいですね。何かあったんですか？」

「今日は二人で実地調査に行ってるの。イツセーだけじゃ心許ない、ですって」

「へえ、実地調査」

勿論嘘だろう。

木場の方はわからんけど、イツセーは今日も今日とてピラ配りの最中のはずだ。

放課後のこの時間帯、アイツは必ずこの部室を離れる。

そのことについて尋ねても、こうして「あくまでオカルト研究部の

活動をしているだけですよ」と誤魔化されるのだ。

まあ、そう簡単に自分が悪魔だと話すわけにもいかないだろうしな。

話すときは本気で俺を勧誘しなくなった時か、あるいは俺が原作ストーリーに大規模に関わるようになったときだろう。

「…きっかけ、どうしてお前は俺に入って欲しいんだ？そんな熱心に誘われるような事、した覚えが無いんだが」

「……それは」

言葉を濁し、耳を赤くして小猫は俯く。

ボソボソとなにか言っているが、寿命がー、とか断片的にしか聞こえてこない。

確かに悪魔になれば寿命は普通の人間よりか伸びるだろうけど。

別に俺はブーステッド・ギアの効果で寿命底上げしてるし、なににより俺が長生きして小猫に何があるというんだろうか。

ってかそもそもこの部活に所属したからって悪魔になるってわけでもないだろ。

貴重な駒を神器持ちかも怪しい男のために使うか普通。

いや、実際は我ながら結構当たり枠の神器を持ってるんだけど。

「まあ、色々あるのよ小猫にも。もちろん、私だってあなたが来てくれれば嬉しいわよ?」

「……それ、イツセーの前で言わないでくださいね」

聞かれたりしたら、俺はあいつに殺されるだろう。

そう思いながら言うも、リアス先輩は曖昧に笑うのみだった。

「さて、そろそろアイツが戻ってくるでしょうし、俺も帰りますね」

「え、もう帰っちゃうんですか…?」

「おう。すまんがアイツに俺がこの場にいる事を知られたら大変だからな……。じゃ、お邪魔しました」

「はいはい。また明日もいらっしやい」

別れを惜しむような顔をする小猫と、微笑みを絶やさないリアス先輩と姫島先輩に見送られながら、俺は、部室を後にした。

その数分後、旧校舎からイツセーの雄叫び(?)が聞こえてきたが、

一体何があつたというのだろうか。

まさかハーレム王のくだりか？

でもそれって最初の会話で発生するはずじゃなかったっけか？

よくわからんが、あまり関係ないかと割り切つて、気にしないことにした。

※――

帰宅前に少し散歩でもしようかな、と思つて街を歩いていたら俺に、突如として何かが飛んできた。

手に取つてみると、その正体はシスターが頭に被るようなベールだった。

飛んできた方向へ目を向けると、金髪のシスターが倒れているのが見える。

「えつと、大丈夫ですか？」

「っ、？」

顔を上げ、困つた表情を見せるシスター服の少女。

金髪碧眼の美しい彼女は、俺の言葉が通じていないらしく、一応差し伸べた手は取つてくれているが、不安そうな、怯え切つた顔をしていた。

：うーむ。原作だと確か、イツセーは悪魔の種族特性で外国語を話してたけど：ついで何語かは説明なかったからな。

まあ取り合えず英語で良いか。

「ええと、これで通じますかね？」

「っ！は、はい。その：手、ありがとうございます。それにベールまで」

「いえいえ。それより怪我は？」

「あ、はい。大丈夫です」

当たり障りのない会話をしつつ、彼女を立ち上がらせる。

この見た目に、この現代日本にそぐわないシスター姿。

恐らく、この子がアシア・アルジエント。

とある悪魔の陰謀により教会を追い出され、この極東の大地を踏む事になった少女である。

どんな存在の傷だろうと癒すことのできる神器、聖母トワイライト・ヒーリングの微笑を生まれ持ち、その力故に聖女として崇められていた事もあったとか。

まあ俺がそんな諸々の事情を知っているのはおかしいし、知らない体で接するんだけども。

「なら良かった。ところで、見た所貴方はシスターのようですが：日本語が喋れないのに、布教でも？」

「い、いえ。今日からこの町の教会に赴任する事になっただけで、布教などではございません。——ですが、その。迷子になってしまいました」

「教会の場所がわからない、と」

「は、はい。お恥ずかしながら……もし知っていたら、場所を教えてください」

「構いませんよ。何なら教会まで案内します」

「本当ですか!?ありがとうございます!」

パアツ、と一気に明るくなった彼女の表情を見て、俺は心の中でただ一言、「天使」と呟くのがあった。

※——

教会へと連れて行く途中で、彼女の名前がアーシアという事と、敬語は無しで良いという事と、彼女が神器持ちだという話をした（神器の下りは、原作同様転んで怪我をした少年を助けた後に説明された）。

まあ、やっぱり原作通りだ。

ただ違うのは、この場にいるのがイツセーではなく俺という点。

このままだと、アイツが教会に殴り込みに行って、その時に神器が覚醒して本来の姿に戻る（まあそもそもアイツの持っている神器が未だ未覚醒の状態なのかどうか不明なのだが）という一連の流れが無くなってしまう。

それはつまり、アイツが乗り越えるべき『レイナーレの討伐』というイベントを無視してしまうという事を意味している。

もしイツセーとアーシアに接点が生まれないううだったなら、またお面をかぶって意味深な事を言う事にしよう。

そんな事を考えながらアーシアの身の上話（俺が聞き上手だから

か、初対面なのに自分のこれまでを話してくれた）に相槌を打ちつつ歩いていたのだが、突然彼女の足が止まった。

大方、話している最中に当時の事を思い出し、辛くなってしまったのだろう。

「アーシア？」

「…ぐすつ。ごめんなさい、いきなり…ちよつと、思い出してしまいました」

「それは、『魔女』として追い出された時か？——それとも、『聖女』として誰とも対等になれなかった時か？」

「ツ…両方、です。主を思う気持ちに嘘偽りはありませんが、ソレを否定された時や、自分の心の声を無視していた時は、辛く感じていましたから」

「…孤独感、か？」

「そう、なんででしょうね。神の妻であるはずのシスターという立場にありながら、主を信じる者で居ながら、私は常に孤独感を感じてきました。きつと」

ポロポロと涙を溢すアーシアの肩をそつと抱き寄せ、頭を撫でる。

初対面でそんな真似を、とか我ながら思うが、まあ会って少ししか経っていないのにそんな重要な話をしてきたアーシアも同罪である。

ここは大人しく俺の泣き止ませ戦術式式を受けるがいい。

「…今までアーシアがずっと一人で、寂しくて辛かったっていうなら、俺と友達にならねえか？」

「…えっ？」

「そりゃ毎日毎日会いに行くつてのは、俺にも色々あるし無理だけど。偶にアーシアのいる教会に立ち寄って、何気ない世間話に花を咲かせてみるとか、良いんじゃない？先に言っておくが『魔女』って呼ばれてるとか、その辺の事情は関係ないぜ。何せ俺は信仰している宗教が無いですね。これは単純に、俺の自己満足だ。拒否っても受け入れても、どっちでもいいぜ」

「え、ええっ!?——でも、そんな、良いんですか？あつて少ししか経っていないのに」

「そんなほぼ初対面の他人相手に自分の身の上話とか、普通の人なら信じられねえような超常的なアイテムの話とかしたのはアーシアだろ？だからそれこそ今更だぜ。——それに、アーシアみたいな可愛い子と仲良くできるのは、男冥利に尽きるってもんさ」

「か、可愛っ!?……男の人にそんな事言われたの、初めてです…」

「そりや神を信じ神を敬い信仰に生きる連中が、可愛いだのなんだのという訳ないだろ。原罪背負ってもらえてないじゃねえか。主に色欲」

ヘラヘラ笑う俺に、小さく「く、詳しいんですね」と驚くアーシア。

まあ、イエスが俺達人間の原罪をその一心に背負ってわざと処刑されたという贖罪思想は高等教育で教えられるレベルで有名なんだけど。

「それで？アーシアは、俺と友達になってくれるか？」

「——はいっ！」

両手で包み込むようにして俺の手を握ったアーシアは、それはもう素敵な笑顔を見せてくれた。

……なんだかフラグが建ったような気もするが、その辺は後々考えれば良いだろう。

さて、アーシアと友達になったところで、再び移動を再開。

先程のやり取りを住宅地のだ真ん中でやっていたので、近所の奥様方から「若いわね」とか生暖かい目を向けられて気恥ずかしかったのもある。

そして少し歩いて、ようやくアーシアの目当てだった教会にたどり着いた。

勿論ここは残っているだけで誰も使っていないはずの廃教会なのだが、一般人の俺が知る由もないので黙っておく。

ただこの先フリードとか墮天使とかに酷い目に遭わされそうになったら、俺が必ず助けてやるからな！

「ありがとうございます！輪廻さん！」

「いやいや、良いって事よ。俺こそありがとな。あそこで友人申請拒否られてたらしばらく立ち直れなかったわ」

「ふふっ。輪廻さんが落ち込むなんて、なんだか変ですね」

「な、なにおう？俺って結構繊細なんだぞう？」

一応つい先日殴り飛ばした堕天使の拠点でもある教会の入り口だが、俺はまるで緊張する事無くアジアと話す。

所詮下級か中級程度の堕天使しかいないし、ブーステッド・ギアすら使わなくていい雑魚相手に気張る事も無いだろ。

「あの、もしよかったらお礼に、教会でお茶でも……」

「んー。いや、遠慮しとくよ。そろそろ帰らないと、家の猫が不貞腐れちまう」

「あ、猫ちゃん飼ってるんですね」

「ああ、色々あってな。甘えん坊で可愛いんだよ」

「へえー！今度会ってみたいです！」

「おうよ。いつか散歩がてら連れて来るさ」

そんなやり取りを終え、教会を離れる。

——もうじき、アジアはレイナーレを筆頭とする堕天使たちに襲われる……というか、神器を抜き取られる。

神器を失った人間は死ぬ。というルールに従い、一度アジアは死を迎える事になるが……その後リアスがアジアの前に現れ、悪魔の駒を使って転生させることで救われる。

だが先程言った通り、俺がアジアとのイベントを迎えてしまったせいで、リアスと眷属たちがこの場を訪れる理由が無くなってしまった可能性がある。

一応ここに来るように誘導する気はあるが、それが成功するとも限らない。

そんな一縷の望みに賭けてアジアが死ぬことを是としていいかと言われれば、断じてNOだ。

イツセーを一度見殺しにした上で言うのはどうかと我ながら思うが、アジアを死なせるわけにはいかんだろう。

『あの娘を、助けるつもりか？』

「今度、な。まだ連中が動いていない以上、さらに面倒な事になる可能性がある。——今はまだ、動けんさ」

『そうかい。ま、俺はお前の望むように力を貸すだけさ。ドラゴンらしく、人らしく、己の欲望のままに力を振るうと良い』

「…ああ。そうさせてもらおうよ」

一先ずは、イツセーの行動を優先して見守るとしよう。

事と次第によつては、再びお面の不審者となつて意味深な言葉でアドライブしたり、助けたりしよう。

まだまだ暗躍期間。俺の戦いは、始まったばかりだ。

## 駒の力と俺の力

アーシアと友人になって数日。

イツセーの居ぬ間に小猫と一緒にソファに座ってまったりして、その後帰宅前にアーシアの下を訪れ談笑し、家に帰って以降はひたつすら黒歌とイチヤイチャする毎日を送っていた俺だが、今日の夜はいつもと違って外出する事に。

寂しそうにする黒歌に「帰ってきたらいつも以上に甘やかしてやるぜ」的な事を言つて（これでもまだ付き合っていない。もういい加減に腹括つて告白するべきだろうか）まで外出したのには、ちゃんとした理由がある。

それがここにいる、はぐれ悪魔バイザーと、対峙しているリアス達である。

まあ、アレだ。原作でもあった、イツセーに悪魔の戦いを見せるイベントだ。

俺はソレを、物陰に潜んで眺めている。

いや、これだけなら別に俺が来る必要も無かったのだが、ここにあるイレギュラーの気配を感じ取った。

本来ここにいるはずのない、もう一体のはぐれ悪魔の気配である。原作では今木場が素早さで翻弄しているはぐれ悪魔だけが登場していたのだが、なぜかこの場にはソイツ以外のはぐれ悪魔の気配がある。

それが本当は原作でも居て、ただ様子を見て去っていただけで登場しなかったのか、それとも原作とは違う事が起きているのか。

取り敢えず気配を隠して様子を見て、もしリアス達に接触するようなことがあれば俺が早急に排除しよう。

…でも、お面をつけて登場するにしても、それ相応の理由が無かつたら誤魔化せないはず。

うーむ…：まあ、普通に『コイツからは他の悪魔とは違う物を感じた』とかで良いか。

つてかその都度考えりやいいだろ。別に最終的に俺の正体明かすんじや、もうちよつと気配を消失させた状態で観戦させてもらいますかねつと。

※――

イツセーこと俺、兵藤一誠は、今日も今日とて悪魔のお仕事（ビラ配り）に励みながら、いずれ出世してハーレムを作る妄想に浸っていたわけだが、今日はいつもと違い荒事が入り込んできた。

なんでも大公というお偉いさんから、部長とその眷属である俺達に向けて直接出された指令らしい。

これをこなせばきつと俺の出世も近くなる！と、意気込んでみた物の。

いざ実際に対峙して思った。

いや、無理だねコレ。最初物陰から出てきた時は上半身裸でおっぱい丸見えのエッチなお姉さんだと思ったのに、下半身が化け物オブ化け物。

流石の俺でもNOサンキューだったし、何より放っている威圧感が恐ろしい。

まるで、墮天使に殺されそうになった時のようだった。

それでも部長の為に俺も戦わないといけない…っと思っていたが、今回は俺は見学らしい。

駒の特性と、皆の戦い方を見て学べとのこと。

「祐斗は『騎士』<sup>ナイト</sup>。持ち味はその速度。瞬発力。騎士の駒を使うと、こうしてスピードが増すのよ。――そこに祐斗の強みである剣が加われば」

西洋風の剣を構えた木場の姿が掻き消えたかと思えば、次の瞬間にはバイザーの腕が切断されていた。

や、やっべえ速すぎる！目で追えなかった！

「次に小猫。あの子は『戦車』<sup>ルック</sup>。特筆すべきはそのパワーと防御力。あの子が小柄だからって油断していると、ほら」

「く、そおおおおっ!!踏みつぶしてやるうっ!!」

「……うるさい」

腕を切られて怒り狂ったバイザーが、近くにいた小猫ちゃんを踏みつぶそうと足を振り下ろす。

しかし小猫ちゃんはまるで恐怖する様子も無く、その巨大な足を受け止めた。

す、すげえ！自分の何倍もある足を、難なく受け止めた！

「ぶっ飛べ」

「ああやって、痛い目を見るのよ」

「ぐわあああああっ!?!」

受け止めていた足を投げ飛ばし、体勢を崩させた小猫ちゃんは、その場で跳躍して拳を引き絞り、バイザーの腹を思い切り殴りつけた。

すると、ドバンツ!!という音と共にバイザーは吹っ飛び、後には残心する小猫ちゃんが残った。

つ、つえええええっ！小猫ちゃんは怒らせないようにしねえと、俺もあんな風にぶっ飛ばされちまうのかな!?

つてか今まで一年の覗きしてなくて良かったあー！してたら絶対小猫ちゃんに殴られてたぜ俺達！

輪廻様様だな！止めてくれてマジでありがとう！

吹っ飛ばされたバイザーの目の前に居るのは、あらあらうふふと上品な笑みを浮かべた姫島先輩。

でもなんだろう。普段の優しいオーラとは対照的な、刺々しい攻撃的なオーラを感じる。

「うふ、うふふふ。さあ、どうやって遊んであげましょうか。ほらほら、まずは小手調べ程度で」

姫島先輩が両手を翳すと、突然雷がバイザーを襲った。

凄まじい雷撃だ。見ているこっちも痛い。

ぎゃあああああつ、と断末魔めいた叫びをあげるバイザーが、見た目醜悪な化物ながらも同情してきた。

…いやでも、罪も関係もないただの一般人を食い物にしてたような奴だし、同情してやるのも変か。

「朱乃の『女王』<sup>クイーン</sup>は、『騎士』『戦車』そして『僧侶』<sup>ベシヨッフ</sup>の三つの力を兼

ね備えた、まさに最強の駒。王を間近で支えるに足る能力の持ち主として事。あの子は魔力による攻撃が基本スタイルで、その雷撃の苛烈さから『雷の巫女』と呼ばれているわ」

「うふ、うふふふつ。ほらほら、もつと頑張りなさい？まだまだこの程度じゃ、全然物足りませんわよ？」

「え、部長。俺はその、アレがただのドSにしか見えないんですけど」  
「違うわよイツセー。あの子はただのドSなんかじゃ無いわ。究極のドSよ」

ズドンッ!!バリバリイツ!!と何度も雷撃が落とされ、バイザーはそのたびにビクンビクンと体を痙攣させる。

いや、究極のドSってなんですか!?!えっ、怖ええっ!

怯える俺を無視して、姫島先輩は生き生きとしながらバイザーに雷撃を与え続けた。

そしてしばらく経って一息ついた所で、部長がヤツに歩み寄った。

「最後に何か言い残すことはあるかしら？」

絶対零度を思わせる冷たい声音に、俺に向けられたものではないと知りつつもちよつとゾツとする。

しかしその冷たさを向けられた本人であるバイザーは、今まで受けた攻撃で疲弊しきっているのか、それとも既に諦めきつたのか、取り乱すこと無く一言告げた。

「殺せ」

「そう、ならお望み通り」

部長が手を翳すと、どす黒い魔力の塊がバイザーに襲い掛かり、触れたと同時にヤツの姿は消滅した。

まるでそこに何も無かったかのように、消えてなくなったのだ。

「終わりね。みんなぐ苦勞様」

部長の一言で、みんなの緊張感がふつと消えた。

…これが、悪魔の戦闘、か。

俺にこんなすげえ戦いができるのかって言われたら、多分無理だろう。

一応昔輪廻に喧嘩の極意みたいなのは教えてもらったし、ソレは多

少なりと体に染みついては居るけど……それは全然付け焼刃だし。

神器があるとは言え、『トウワイス・クリティカル龍の手』っていうありふれた神器の仲間っぽいつて事しかわかんない以上、戦闘で使おうにも使い方すらわからないという始末。

……はあ。先は長いなあ。

「あの、部長。結局俺の駒の特性って……下僕としての役割って、なんなんですか?」

「ああ、それはね——」

「いやはや、流石はグレモリー家の御息女。眷属たちも素晴らしいお力をお持ちだ」

ゾワツ、と、全身の毛が逆立つような恐怖感を感じて、声のした方を見る。

そこには、黒いタキシード姿の男がいた。

シルクハットを目深にかぶっているせいで顔は見えないが、背中から生えている羽的に悪魔だろう。

……こ、コイツもはぐれか?それとも、部長の知り合い?

「……貴方、ただの下級悪魔って訳じゃなさそうね。名前は?」

「生憎と、私は名乗る名前も、仕えるべき主も持っておりませんので。まあ、お好きなようにお呼びください」

大仰な身振りをしながら話すこの男は、一言で言うなら胡散臭さの塊。

あと部長の知り合いではないらしい。

ならただの敵か。名前も無いらしいし、きっとはぐれ悪魔なんだろう。こいつも。

つかか主いないならはぐれじゃん。

明らかにさっきのヤツよりも強そうだけど。

「…それで?自分の名前も主も無い悪魔が、一体私達に何の用かしら?」

「ええ、簡単なことです。私…いえ、我々の悲願のために、ここで死んでいただきたい」

「そんな事をさせるわけがないだろう」

三日月のように歪められた口元に、知らず後ずさっていた俺の背後から、今度はまた違うヤツの声が聞えて来る。

上下ジャージに、謎のお面。

いつだか俺を墮天使から守ってくれた、あの男だ。

※――

死んでいただきたく、なんて気取った言い方をしやがった謎の悪魔。

まあ、明らかに原作に居ない輩だ。

その癖介入している当たり、イレギュラーと言えるだろう。

つまりは俺と同じようなヤツ、という訳だ。

『まあ、それなりに力はあるようだが、相棒なら俺無しでも全然余裕だろうさ』

(ましてや悪魔だからな。対抗策はいくらでもある)

イツセー達から向けられる視線を一旦無視しつつ、彼等の前、つまりシルクハットの男から守れる位置まで移動した。

「はて、貴方は？」

「さあな。俺の事はどうでも良いだろう」

まだ『気』は抑えたままだ。実力を隠して、相手の出方をうかがう。

アイツは我々、だとか悲願、だとか、そんな意味深なワードを使っていた。

俺の知らない、原作にない組織の介入がこの先あるのだとしたら、今の内に情報がある程度入手しておきたい。

「それよりも、なぜ彼女等を狙う？ 貴様、まるで自分がとある組織に所属しているような口ぶりだったな。ならお前の所属する組織の悲願とやらは、一体なんだ？」

「ふむ……まあ、どうせ殺すのです。話してしまっても構わないでしょう。――我々は『夢幻人』イマジンネウス。かの夢幻を司る龍を信奉し、真の目的に『とある龍』の抹殺を掲げる、あらゆる種族が緋い交ぜになった

組織です」

「夢幻……グレートレッドか」

「ぐ、グレートレッド?!」

「え、なんすかそれ」

「端的に言えば凄い龍だ。ドラゴンともいう」

驚くりアスを見て、不思議そうに首を傾げるイツセーに、凄く大雑把な説明をする。

まあ、詳しい話は後々話してやるとしよう。具体的にはみんなの前でお面を外して堂々と戦えるようになった後くらい。

「…しかし解せないな。その『とある龍』とやらが何かは知らんが、ソレと彼女等がどう関係する」

『とある龍』とは言いしましたが正確にはその『とある龍』の力が込められた神器の持ち主。未来から来たと自称した、とある男の抹殺が我らの悲願」

「えっ」

「み、未来から来た…?」

男の言葉に、俺はつい体が固まってしまう。

この男、今なんと言った?

未来から来たと自称する、龍の力を宿した神器を使う男?

俺、思い当たる節があるんだけど。

思い当たる所かそれ、もしかして……。

「最強を名乗る、時間の支配すら容易に行う彼は、我ら夢幻人…いえ、我々が崇拜するグレートレッドを脅かすに足る存在と判断された。だから我らは何百年もその存在について調べ、彼奴の言葉の端々から元居た時代を特定し、そしてその正体を掴んだのです」

「……まさか、今代の赤龍帝か?」

「その通り! ヤツこそ我らの宿敵とも呼ぶべき相手! 無限と謳われるオーフィスすらも超越した存在であるあの男を、我々は我々の信仰の為に殺す必要があるのです!」

う、うわあーっ、俺だ。滅茶苦茶俺だった!

嘘でしょ? 俺確かに修行のために過去に行って過去の強い存在に只管喧嘩売って、最終的には全盛期のオーフィスと戦って引き分けるレベルにまで成長したけど。しまったけども、なんでそんな危険分子

扱いされてんの!?!ってかグレートレッドを信仰するってなんだよ!?

内心大騒ぎな俺を放って、話は進んでいく。

リアス達は今代の赤龍帝という言葉に反応して。

シルクハットの男は、自分の話で気分が高揚して。

「赤龍帝が、あのウロボロス・ドラゴンをも超えた:?!?そんなの、あり得るはずが」

「そんな不可能を可能にしまったのがあの男なのです。——そして、その男の名前も素顔も、我々はついに入手する事に成功した。彼奴の名は——」

「だからその赤龍帝の身の回りの人間を襲って、おびき寄せようとしたわけか」

「む。人の言葉を遮るのは感心しませんねえ。——まあ良いでしょう。その通りです。リアス・グレモリーというビッグネームを殺してしまえば、悪魔勢力との火種を抱える事になりそうですが:これも悲願の為には仕方のない事。眷属諸共、皆殺しにさせていただきたく」  
「だからさせねえって言ってるんだろ」

俺の名前を出させないように無理矢理言葉を遮って、そのまま戦闘に突入する空気感を無理矢理作る。

隠していた『気』もある程度出した為か、男は一気に警戒心をあらわにした。

後、ついでに背後にいるリアス達からも身構える気配がした。

:あの、これでも君らを守るためにここに立ってるんですけど。今はもう自己保身第一になっちゃってるけど。

仮にも味方梓なんだから、もうちよつとこう、安堵する感じになっ  
てくれたりしない?

「ほう:その気配、仙術使いか」

「:まあ、使えなくもないが。俺のコレはただの『気』さ。人間誰もが  
持つてるような、何てことない物を、ただただ練り上げ続けたただけ

——なっ!!」

「ぐうっ!?!」

話しながら手に手作りの武器を持ち、ソレを即座に投擲する。

狙い通り、男の左腕を切断した。

我ながら良い投擲だ。

「こ、これはっ……!」

「まあ、お察しの通りコイツは光の力が込められた剣……じゃなくて、コイツは剣の形をした聖書っていった方が正しいな。聖書一ページを専用の儀式を行って加工して、記された言葉の神秘性や神々しさなんかを抽出して固めたモンだ。人間相手にゃ絶望的なまでに殺傷力がないが、悪魔や堕天使が相手だと違う。低位の聖剣なんかよりも強力な武器になるぜ」

「そ、そんなモノを、一体どうやって……!? 貴様、まさか高位のエクソシストかッ!」

「だとしたら悪魔を庇うなんて真似する訳ないだろ。単純に、コレは俺が作った物だ。必要だったからな」

まあ、ドライグの力を借りてようやく形にできたんだけど。

イメージはあったけど、中々成功しなくて困った思い出がしつかりと残っている。

「ふ、ふふ、ふははははっ!!この町は化け物揃いか!かの赤龍帝然り、貴様然り!」

(同一人物なんだよなあ)

『(ふん。だが悪い気はしないな。赤龍帝はやはり力と恐怖の象徴。誰もが恐れ、憧れ、敬い、傳く存在であって当然だからな)』

高笑いしながら、男は魔力による攻撃を仕掛けてくる。

規模はそれなりにでかいが、全然躲すのが苦じゃない程度。

密度もさほどないし、大方上級一二歩手前の中級悪魔程度の実力しかないのだろう。

それでも、今のグレモリー眷属たちには十分脅威であるし、イツセーなんかちよつと攻撃されただけで死んでしまうレベルである。

コイツ等に当たらないような位置に誘導するように移動しつつ戦って、終わったらドロンド。

※――

目の前の戦いを見て、ただただ凄い、としか思えなかった。

二人の会話の内容は正直チンプンカンプンだったけれど、この戦いが凄いつてのは流石の俺でもわかる。

さつき部長が使ったレベルの魔力による過密な攻撃。

それを掠ることすらなく回避して、手にした剣（聖書らしい。見た目は鈍っぽい感じで、剣の腹の部分にはなんか言葉が書いてある）を時折投擲して、男の移動や攻撃を牽制していた。

じゃあ開いた口がふさがらないのは転生したての下っ端悪魔の俺だけなのかというところでもなく、他のみんなも驚いている様子だった。

「凄まじいわね、あのお面の人間」

「ええ。騎士の駒の力で速度が底上げされている僕と、ほぼ同程度の速度を出しています。しかも僕の最高速度が、彼には通常速度のようだ」

「……まだまだ、余裕を持つてる…そんな気がします…」

「正直、敵対はしたくないですわね」

みんないには、どちらかというとお面の男の方が気になるらしい。

…まあ、方や悪魔であつち人間。

それで互角でやってるんだから、人間のが凄いつてなるよな。

……つてか、あの人絶対俺より強いじゃん。

前掴みかかった事、気分悪くされてないと良いんだけど。

…いやいや。でもアレはあつちが悪いよ。俺にとって禁忌だった内容に、いきなり触れたんだから。

「なっ、なんなんだ貴様はッ！こんな人間が、そういるはずが…ッ!!」

「普通はそうかもな。だが俺がここに居るのは紛れもない事実さ。――ほら、そろそろチェックメイトだぞ」

「何――はッ!？」

男が周囲を見渡し、何かに気づいたように声を荒げる。

えっと、第三者目線で見ているはずなのに、俺何にもわかんねえよ？

誰か――！説明してくれ――！

「兵藤君。見ての通り彼は今、壁際付近に追いつめられているだろう

？そしてその周囲には、先程あのお面の彼が投げた剣が刺さっていて、間を通り抜けるだけでも消耗した今の状態では消滅の危機すらあるだろう。だから、彼は逃げ道が一本道しかない状態で回避しなくてはならないんだ。しかしあのお面の彼がそう簡単に外すような真似はしない。——だからこそその、チエツク<sup>註</sup>メイト<sup>み</sup>って訳さ」

「な、なるほど」

なんとなく分かったぞ。

わかったけど、俺の心を読まないでくれ。男に読まれたって嬉しくとも何ともない。

「…さて。他にも色々聞きたいとは思ったが…これ以上はあまり期待できそうにないな。この程度の実力でそれなりのポストにつけるとも思えん。与えられる情報も、斬り捨て可能の末端程度だろ」

「こ、この程度の実力って…ソイツ、相当強いはずじゃ」

「確かにそうかもな。上級悪魔二、三歩手前の中級悪魔程度の実力はあるし、戦いのセンスもそうそう悪くなかった。片腕失った上で、しつかり計算された攻撃をしてきたしな。——だが、今代の赤龍帝を殺すレベルとなれば別だ。アイツはこの程度の連中が上位層として扱われる程度の組織じゃ、束になっても意に介さないさ」

俺の言葉に、男は律義に説明してくれる。

「ってか、その赤龍帝ってヤツ、そんな強いのか。」

正直会いたくねえなあ。なんか怖そうだ。

「それじゃあ、止めは任せる」

「あら、殺すのは苦手なの？」

「いや。悪魔的に見れば、ここはアンタの領地だろう？なら、関係者の前に下手人がいるんだ。大人しく引き渡すのが正しい判断だと思うね」

「そう。——なら、私が直々に消滅させるわ」

再び、先程バイザーに使ったようなドス黒い魔力が放出されて、シルクハットの男が消滅した。

ただなんだろう。恐怖心が薄れた気がする。

もつとやべえのを未だに手に持った男が、そこに居るからだろう

か。

「では、俺は帰るとしよう。——また何かあったら、会う事になるだろう」

「ちよつと待ちなさい。貴方には色々聞きたい事が——」

「それは、またいつか、な」

呼び止める部長の言葉を無視して、男は姿を消した。

∴結局、なんだったんだ？アイツ。

そんな疑問を残しつつも、俺の悪魔の戦闘見学は終わった。

因みに俺の役割は『兵士<sup>ポーン</sup>』。滅茶苦茶下っ端でした。

## 熱い男

「ねっ、ご主人様。私今日はお散歩したい気分じゃん」

「散歩か。せっかくならお洒落な喫茶店とか、行ってみるか？」

「にやんですとツ!?そ、そそ、それって——ツ!!」

今日はアジアの所へ寄らず、そのまま家に帰って来た。

することも無いので膝の上に猫モードの黒歌を載せ、ソファでまったりと本を読んでいたのだが、その時突然散歩に行きたいと言われた。

無論断る理由も無いし、せっかくならデートっぽいのもしてみるかと思ねてみたら、まあ面白いくらい顔を真っ赤にして狼狽していた。

原作だと、狼狽させる側だった気がするが。これも俺がこの世界に居るが故の変化なのだろうか。

あの夢幻人なる存在然り。

「ああ、ただ耳と尻尾は偽装しておいてくれよ?もしお前の存在がこの町の悪魔に知られるようなことがあれば、最終的に悪魔を根絶やしにする必要があるかもしれない」

「わ、わかってるじゃん。だいじよぶだいじよぶ。——そ、それよりも!ちよつと準備してくるじゃん!」

『おーおー。生娘みたいに慌てて。相棒がさらつととんでもない事を言った事に気づかなかったか。勿体ない奴』

何がどう勿体ないのかわからんが、まあ良いだろう。

…しかし、黒歌とデートか。

せっかくだし俺もちゃんと着替えたりするか。

『…はあ。そこまで意識しているなら、さっさと愛でも何でも囁けばいいだろうに』

「うっせ。俺はもしもを考えて足が止まっちゃうヘタレ野郎だよ、どーせな」

※——

道行く人が、俺達を……正確には俺の隣を歩く黒歌を、すれ違いぎ

まに二度見する。

遠巻きに眺めている人がいれば、友人と共に「声かけちゃう？」とか話している輩までいた。

まあ、チャームポイントの猫耳と尻尾を隠しているとはいえ、黒歌は相当の美人。

モーターショーのコンパニオンみたいな体のラインが透けて見える服を身に纏っている為に、そのそこのグラビアアイドルを優に上回るボディが強調されており、特に男性の目を引いてしまうようだ。

そんな彼女と腕を組んでいる俺に対しては、特に女性から色々陰口を言われているらしい。

何と言っているかは聞こえないが、きつと男性と違って黒歌を見ても「綺麗な人だな」程度にしか思わないから、冷静に「なんであんな男があんな美人と歩いてるんだろう」とか言われてるんだろうな。

猥談云々を知らなければ俺はそこそこ美男だと思っていたが、案外そうでもないのかもしれない。

少なくとも、黒歌と一緒に歩いていて陰口を叩かれるくらいには残念なようだ。

「にやはは、凄い注目されてる」

「なんだか居心地悪いな……ま、黒歌みたいな美人の隣を歩いてりや、こうもなって当然か」

「——んもう。ぐ主人様ってば」

俺から顔を背けて、何か小さく呟く。

幻術の耳ながら、なぜか赤くなっていた。

まさか、美人と言われて照れたのだろうか。

『(やれやれ、相棒はもう少し女心を知った方が良いな)』

(どういう意味だオイ)

『(そのままの意味だ。ほら、俺なんかと話してないで、その猫？に構ってやれ)』

いまいち何が言いたいのかわからないが、取り合えず俺に対して呆れているだけは良くわかる。

だが確かに今は黒歌とのデート中。(相手がどう思っているかは知らないが)

声も酒の趣味もおっさんなドラゴンに構ってやるよりも、可愛らしい猫耳少女(今は人耳だけど)と話している方が良い。

「ほら、あの喫茶店。今時見ないだろ、ああいう雰囲気のお店」

「あ、本当。外装もシックな感じでお洒落にやん」

少しの間外観を眺め、そして店内へ入っていく。

店は前に来た時同様、殆ど人がおらず、よく経営できているなど思ってしまう。

しかしこの雰囲気は嫌いじゃないので、このままずっと経営して欲しくもある。

「今日のおすすめ一つと……黒歌は何にする?」

「あ、私も同じのが良いにやん」

「かしこまりました」

無表情なメイド服の男性(!?)に注文を言い、待つ間何気ない日常会話に花を咲かせる。

最近外であった事。

白音……小猫は今日も元気そうだったという事。

後、なんでか俺が命を狙われているという事。(話した時とても取り乱していた。まあ、俺の脅威になり得ない存在だろうし問題ないとは言っておいた)

「いやあ、赤龍帝つてのも楽じゃ無いな。こうして変な所で恨みを買う事になるとは」

「……その、ごめんなさい」

「え? いや、なんで?」

「…だって、ご主人様が命を狙われてるのって、私のせいじゃ」

「え? うん? あつ? あー……なるほど、そう思っちゃったわけか」

少し時間はかかった物の、黒歌が取り乱し、落ち込んでしまった原因は理解できた。

どうやら俺の説明不足のせいで、コイツは『指名手配されている極悪人である自分と一緒にいるせいで命を狙われてしまった』と勘違い

してしまつたらしい。

確かにこいつは主殺しの大罪猫として主に悪魔から狙われているが、しかし今回はまるで関係ない。

それどころかこいつ関係で襲われた覚えは一度もない。

早急に訂正してやらないと。

「違うよ。これは俺の自業自得。夢幻人って組織が、アイツらの信仰してる存在の為にって俺を狙ってるだけだ。黒歌については微塵も言及されてねえし、問題ねえって」

「……そう、にやん？」

「そうそう。——ってか、こないだ言ったばっかじゃねえか。もしお前が原因で悪魔全体と戦う事になろうが俺はお前を捨てたりしねえし、全霊を賭して守るって」

『（……ほんと、これで付き合つてないんだからなあ）』

うるさいぞドライブ。いつかはそこもはつきりさせるつもりなんだから口を出さないでくれ。

俺の言葉を聞き、涙を流す黒歌。

……多分、こいつがこんな俺に懐いてきたのは、俺のこういう発言が原因なんだろう。

意識していなくても、どうしてもなんだかキザつたいというか、格好つけてるようになってしまふのだ。

そのせいで、好意をほのめかす感じになったりして、若干勘違いさせてるんだろう。

……まあ、最初の方こそ黒歌相手に好意なんざ抱いてなかったが、今は……

「仮にも赤龍帝だぜ？そうそう負けたり死んだりなんざしねえよ」

「おまたせしました。本日のお勧めブランドでございます」

「あー、ほら。コーヒー来たし飲もうぜ？泣いてないでさ」

「う、うんっ」

無理矢理作つたんだろう笑顔は、涙でグシャグシャだったが、それでも俺は、美しいなと思った。

※——

店の奥の、窓の外が見えない席に座って過ごしていたせいで、外に出たときにはすっかり陽が沈んでしまっていた。

時間を忘れる、とはまさにこのことだろう。

しかしまあ、俺の帰りが遅いのはいつもの事。

なんかすごいドラゴン（二人のドライグの認識はこの一言なのである）が宿っているから、不審者に襲われても大丈夫だから、だそうだが、遅くなってしまったなら、とことんのんびり帰ってやろうという事で、行きとは違いちよつと遠回りをして家に向かっていたのだが、とある場所を通っていた時に、あり得ない気配を感知した。

黒歌の方も、何かの匂いを嗅ぎつけたらしい。

「……この気配、悪魔とエクソシストか」

「血の匂いもするし……多分、犠牲になった民間人がいるにやん」

「そうか。——ちよつと、行ってくるよ」

「……もう、民間人の方は殺されてると思うけど」

「まあ、一応な。——お前は どうする？」

「……待っておくにやん。ここらで悪魔って言ったら、もしかしたら白音と鉢合わせちゃうかもしれないし」

「わかった。じゃあ、ちよつと待っていてくれ」

お面を取り出し、そのまま気配のする場所へ向かう。

今日は上下ジャージじゃないが、まあそつちにこだわりの無いしいだろう。

……恐らく俺の予想通りなら、悪魔の気配の正体はイツセー。

エクソシストの方は、はぐれのエクソシストであるフリードだろう。

奴は悪魔祓いの天才でありながら、殺す事に悦を見出し、人間であつても悪魔と関わった存在は惨たらしく殺すようになった狂人。

イツセー一人で戦うには危険な相手だ。

一応原作では負傷する物の駆け付けたリアス達によって救出されるが、まあ方が一という事もある。

俺が介入しておいて損はないだろう。

「よお、またピンチみたいだな」

※――

悪魔の仕事。

それだけ聞くと、魂だの命だののやり取り……って思っちゃうけど、意外と今の悪魔は違うらしい。

勿論そういう仕事もあるにはあるらしいけど滅多になく、金品を貰ったりするのが基本だ。

で、色々あつて悪魔になつちまつた俺も、最近はどうして仕事をこなすようになったんだけど……俺を呼び出した人が、なぜか死んで居た。

正確には殺された、だ。

だつてあんな、あんな惨たらしい死に方、自殺なわけが無い。

大量の血が飛び散っている部屋の中には、その惨殺を行った男がまだいた。

名前はフリード・セルゼン。

白髪の十代くらい見た目のソイツは、返り血で濡れていながらも愉快そうに笑っていた。

狂人つてのはきつと、こういうヤツを指すんだろう。

聞けば、悪魔を呼び出したから、つて理由だけで俺の依頼主は殺されたらしい。

「う、うオおおあああああああッ!!」

「うわ、なにいきなり叫んじやつてうるさ——つておおっ!? 神器持ちかよ悪魔くん! こりゃいい! 神器持ちの悪魔ちゃんを刻んでみていつて、ずっと前から思ってたのさっ!」

許せねえ! 敵対している悪魔ならともかく、ただの一般人を殺すなんて!!

感じる恐怖をねじ伏せるために叫びながら、俺は神器を左手に出現させてフリードに殴りかかった。

けど、当たらない。紙一重で躲されて、背中を蹴られて壁にぶつけられた。

い、いてえ……! けど、まだ蹴られただけだ!

あの見るからにやばそうな剣はまだ使われてねえ!

「ひゃっははは！弱い、弱っちいつすよ悪魔くん！体の使い方全然だめ。素人ちゃんですのん？しょうがねえから、俺っちが殴り方教えてやんよおツ!!」

「ぐあっ!？」

きつとコイツはわざと武器を使わねえんだ。

俺が弱いから、こうして拳とかで攻撃して遊んでいやがるんだ。

ちくしょう、ムカつく。ムカつくムカつくムカつくツ!!

こんな人殺し野郎にすら勝てねえのかよ、俺！

それにこの状況でも、神器はうんともすんとも言わねえ！

再び吹っ飛ばされてフリードから離れた時、俺は行き場のない怒りをぶつけるように、床を神器をまとった手で殴りつけた。

力いっぱい、拳を打ち付けた。

——すると、突然力がみなぎるような感覚がした。

フリードの方も、何か訝しむようにこっちを見ている。

「…今、床を殴ったから力が増した…？も、もう一回っ!」

ドゴツ!!と、さつきよりも強く、大きな音を立てて床を殴りつけた。すると、また力が湧き上がってくる。

——もしかして、俺の神器の力…!？」

「あらら？…なんでもか悪魔くんの力が増してるぞ?」

「これが、俺の神器の力だ…!!行くぜフリード、今度こそテメエをぶん殴ってやるツ!!」

「はあ〜!?!下級悪魔くん風情が、ちよろつと強くなった程度で調子乗ってんじゃねえーんですよ!!」

いつもよりも、もつと感覚が研ぎ澄まされてる気がする。

今なら何でもできる。——コイツに、勝てる!!

左手を思い切りフリードに向けて振りかぶる。

狙いは顔面、ど真ん中!

拳を振る速度も、さつきよりずっと速い!

これでいける。このムカつく顔、ぶん殴って——。

突然足に激痛が走り、体が固まる。

これはまさか、光の攻撃!？」

「どうよ、この俺っちお手製対悪魔用祓魔銃！光の弾を発射するだけだから音無し火薬無しで周囲に優しい設計となっておりまあす！当たると悪魔ちゃんは、気持ちよすぎて昇天しちゃうでしょ！」  
話しながらもさらに数発撃たれる。

慌てて躲そうとするも、光の攻撃で足が上手く動かない。

全弾、当たってしまう。

「がああああっ!!熱いつ、熱いつ!!」

「ひゃっははは!!光は悪魔に猛毒。いくら一発一発はかなり弱いとは言え、数発も当たつちまえば動けねえでしょ。——でもまっさいんじやない？ほんとの下級悪魔くんだったら、ここでもうおさらばしてたわけだし？耐えてるだけ偉い！なんちゃって」

耐え切れずに倒れ込む。

当たった箇所が、まるで直接火であぶられてるみたいに熱くて痛い。

このままじゃ、死ぬ。

もし死なないにしても、きつと殺される。

ああ、すみません。部長。せつかく悪魔にしてもらったのに、俺、何もできずに死んじやいます。

親不孝だな、俺。悪魔は人間よりずっと長生きのはずなのに。

——はあ、出世してハーレム、作りたかったな……

「よお、またピンチみたいだな」

「……お、お前は」

「んん？一体全体どこの誰ちゃん？ま、知らないけど言葉的にこの悪魔くんのお友達かなんかでしょ。はーアーメンアーメン。こんなクソザコ悪魔くんとつるんじやう悪い子は、血塗れオブジェに改造手術ってね!!」

突然部屋の中に入って来たのは、これで三度目になるお面の男。

また、俺を助けに来てくれたんだろうか。

——でも、フリード相手は不味い。

いつだかの悪魔には有効だった聖書の剣とやらも、狂人で人殺しとは言えただの人間なフリードには効かないはず。

それにこんな狭い場所じゃ、あの時みたいなアクロバティックな動きもできねえだろうし。

男に襲い掛かるフリードを止めないと、と思っ手て手を伸ばすが、届かない。

このままだと、あの人があの光の剣で殺され――。

「こんな玩具で俺を血塗れオブジェに？面白い冗談だな、はぐれ神父」「んなっ!？」

振り下ろされた剣を、あろうことか男は素手で掴んだ。

す、すげえ！

そーういやあの人、墮天使の光の槍も素手で掴んでたし……よく考えたら全然危なく無かったな！

男は光の剣をなんと握りつぶし、驚いて硬直しているフリードの顔を殴りつけた。

明らかに骨が折れる音が聞えた。

「ぐーばあぁっ!？」

「弱い、弱すぎるぞ。そんな程度でよく調子に乗っていたな」

「ふ、ふぎけてんじゃねえーですよこの化け物野郎!!決めた、アンタ地獄行き。遊び無しでぶっ殺して」

「喋る暇があるなら動けっつての」

「ぐーばあぁっ!？」

男に再び殴られ、フリードは壁にぶつかる。

あまりに一方的なこの光景に、俺は啞然とした。

…さ、さつきまで俺をボコボコにしてたフリードが、今度はあの男にボコボコにされてる…。

本当にあの男はただの人間なんだろうか。

毎回俺がピンチの時に駆けつけてくれるし(あの自称魔法少女な筋肉ダルマのミルたんとの遭遇時は来てくれなかったけど)しかも必ず一方的に勝つし。

仮にも相手は墮天使や悪魔、そして今はエクソシストだったのに。

「む、無理無理無理無理力タツムリッ!こんな化け物系男子相手するつもりとかねえんですよこっちは!さささと退散させていただきま

「しようかねえっ！」

「させると思うか？ 人一人殺しておいて、お前だけたった数回殴られて逃げられると？」

「だーかーら。悪魔と関わっちゃやうようなド腐れ人間は殺してもノーカンなんですノーカン！ んでもって悪魔くんを庇っちゃやうような君も腐れ系男子に見事認定！ 次は殺す。必ず殺す」

「次は無い。お前はここで終わ——」

「きやあああああつ!!」

突然、部屋の入口の所から悲鳴が。

甲高い、女の子の声。

聞き覚えがある。この声の主は。

「アーシア……」

「っ、こ、これは…!？」

「おんやあ？ 助手のアーシアちゃんじゃありませんか。結界は張り終わったのかしらん？ でもせっかく張ってもらった所申し訳ないけど、ちよいとこの悪魔…というか悪魔の知り合いくんが強敵なんですね。涙ながらの敗走ですよ」

「答えてください！ この、壁の…この人は、何があったんですか!？」

金髪のシスター。俺がつい最近一緒にハンバーガーショップに行った子だ。

困ってる所に出会ってな。悪魔的にはダメだろうけど、可愛い子だったし、つい放っておけなくて。

……でもまあ、俺より先に輪廻と知り合ってたらしいし、なんかいい感じになってたんだけどさ。

アイツの話する時だけ、すっげえ目が輝いてたっていうか。

で、そんなアーシアは、フリード相手に壁の死体について質問した。きつと、なんとなくわかってんだらう。

これをやったのは悪魔である俺でも、その仲間らしきお面の男でもなく。

神に仕え、悪魔から人を守る立場にあるはずのフリードだと。

「んー？ ああ、ソイツは悪魔を呼び出す常習犯だったし殺したよん。

んでそつちで寝っ転がってんのが悪魔くんで、そこのお面野郎は悪魔くんのお友達って訳。ザツツギルテイ」

「っ?!いい、イツセイさんが、悪魔…?」

信じられないという目を俺に向けてくるアーシア。

くそつ、知られたくなかったのに。知らせるつもりなんて、無かったのに。

俺はあの一回以降会うつもりなんて無かったのに。

どうして、こんな所で再会しちゃうんだ…!?

「あんれえ?アーシアちゃん、もしかして悪魔くんとお知り合い?もしかして悪魔とシスターの禁断の愛!とか言っちゃう?——ま、その面白話は後で聞かせてもらおうとして、そろそろドロンさせていただきまひよ。ほら帰るわよアーシアたん。悪魔くんの涙のお別れでっせ」

「だから逃がさんと…!!」

「おーう怖い怖い。でもねーでも、僕ちん気づいちゃってんです。さつきアーシアちゃんが入って来た時、お面くんも動揺してたってコト。多分アンタもアーシアちゃんとお知り合いなんですしやる?ならなら、この子の目の前で僕ちん殺すなんて真似、できないよねえーえ?」

「チツ…」

物凄い殺気を滲ませながら、しかし男は動かない。

本当にアーシアと知り合いなのか。

立ち尽くす男と動けない俺を嘲笑いながら、フリードはアーシアを連れて出ていった。

「——イツセイ」

少し経って、男は俺の名前を呼んだ。

しかも、あだ名で。

返事をせずにいると、ソイツはつけていたお面を外してその素顔を見せた。

その正体は俺の予想していた通りでありながら、やっぱり驚きの隠せない物だった。

「…り、輪廻」

「色々聞きたい事はあるだろうが、聞いてくれ。——俺はアーシアを取り戻しに行く。あの畜生神父にやられっぱなしなのがまず気に入らねえし、それに——」

一度言葉を切り、俺の目を見つめてくる。

今まで見た事無いような顔だ。昔本気で喧嘩した時ですら、ここまですで怖い顔をしていなかった。

「アイツが向かった、この町唯一の教会。あそこは堕天使が根城にしている場所だ。お前を殺した堕天使もそこに居る。そして、連中はアーシアが持つ神器を、奪おうとしてる」  
「神器を、奪おう？」

アーシアの神器。聖母の微笑、だっけか。

うっかりできた俺の手の傷を、それで治してくれたのを覚えている。

俺を殺した堕天使が……夕麻ちゃんが、ソレを奪おうとしている？

「大事なものは、神器を奪われた人間は例外なく死ぬという事だ」

「えっ、死!？」

アーシアが、殺されるって？

そんなの、はいそうですか、なんて受け入れられる訳ねえだろ。

——でも、俺には力が無い。

お面の男…いや、輪廻みたいに、堕天使や悪魔、エクソシストを圧倒するような力を持っていない。

それに俺は悪魔で、しかも使い走りのポーン。

大した力も何も持たない、神器だってようやく使い方が感覚で分かりつつある程度。

助けに行こうたって、どうしようも……

「知り合いなんだろ、お前も。なら助けてやろうとは思わねえのか？」  
「それは……できるなら、そうしたいけど。俺は結局ただの悪魔で、力なんて無くて。部長たちに迷惑をかけるわけにもいかねえし。——せめてお前くらい強けりゃ、俺だって……」

「悔しくねえのか？自分を殺した女が、今度は自分の友達殺そうとし

てんだぞ？それを黙って見て見ぬふりするとか？」

「悔しいに決まってるだろ!!夕麻ちゃんに色々言いたい事だつてあるし、アジアだつて助けたい!でも俺は部長の眷属で、神器の力もろくに扱えねえ!それなのにどうしろつてんだよ!俺は、ただのポーンなんだぞ!?!」

「かもな。だが兵士<sup>ポーン</sup>だつて王<sup>キング</sup>が取れねえわけじゃねえ」

「…は？」

壁に打ち付けられた惨い死体を床におろし、バラバラになった部位をできる限り人の本来の形へと直しながら、輪廻は話す。

「俺の知る兵藤一誠は、誰よりも変態で、誰よりも馬鹿で、誰よりも熱い男だ。だからこそ俺はそんなお前に憧れたし、お前だから親友になった」

「…いきなり、何言ってるんだよ」

「力が無い？部長の眷属？そんなの俺が聞きてえ事でも何でもねえ。俺はな、ただ『行く』か『行かない』かだけ聞いてんだ。馬鹿が面倒くさい理屈考えてんじゃねえよ。変態が可愛い女の子助けるのに理屈捏ねてんじゃねえよ。熱い男が、何冷めた事言ってるんだよ。お前はイツセーだろ。誰よりもおっぱいが好きで、誰よりも馬鹿野郎で、誰よりも熱血な、イツセーなんだろ。似合わねえ事やってねえで、さつさと俺に着いてくるかどうか決めやがれ」

…びつくりだった。

あの輪廻が、あのいつつもクールぶってる輪廻が、ここまで熱く俺に語り掛けてくるなんて、初めてだった。

それと同時に恥ずかしくなった。

俺は一体、どんだけ似合わねえ真似してたんだ。

そうだよ。俺はバカで、変態で、んでもって熱苦しい男だ。

だから、アジア助けに行くのに、一々変な言い訳も何も、要らねえんだよ。

「行く。俺も行く。アジアを助けに行きたいし、夕麻ちゃんと話したい。——けど、やっぱり先に部長に話してくる」

「……お前なりの、ケジメって訳か」

「ああ。部長は俺の命の恩人だし、俺は部長の眷属だ。だから、死ぬ可能性の方が高い戦いに挑む前に、ちゃんと話だけしてくる」

「引き止められたら?」

「無理矢理でも教会まで行く。もう、揺るがねえよ」

「そうか。——ま、俺は先に行つちまうからな。アーシアの王子様、俺になつちまつても恨むなよ?」

「……いや、お前気づいてねえの?」

「あん?気づく?」

「……ほんつと、こういう鈍感なところさえなきや、手放しにカツコい  
いって言えるんだけどな、コイツは。」

## 神器

「さてドライブグ。一つ聞きたいんだが」

『なんだ?』

「…この教会の中にいる連中相手に、お前を使わずに勝てると思うか?」

『ああ、そんな事か。聞くまでも無いだろう。良くても中級墮天使程度のヤツしかいないのに、お前が俺を使う必要があるわけないだろう』

「そうか。そりゃよかった」

あの後黒歌に事情を話して先に帰ってもらい、俺は教会まで来た。

アーシアは原作ヒロインだし、何より俺の友達だ。

絶対に死なせるわけにはいかない。

まあ、最悪の場合はブーステッド・ギアも使おう。

使ったら夢幻人が乱入してくる可能性もあるし、できる限り使わないでおきたいものだが。

「おろろ?アンタ、誰です?」

「……服装で気づかんか?」

「服装?……あ、ッ!てんめ、さっきのお面野郎!!」

普通に入り口を開けて入り聖堂まで向かうと、フリードが頭部の破壊された聖人の像の前で立っていた。

俺に殴られて腫れていたはずの顔は、まるで何も無かったように綺麗になっている。

大方、アーシアに治させたのだろう。

アイツの事だから自分から治したんだろうか。それとも、無理矢理させられたのか。

何にせよ今コイツは、ただただ邪魔なだけだ。

「ただ、悪いな。お前の相手はまた今度だ」

「かっちーん!さっき優勢だったからってチョーシ乗っちゃってます?乗っちゃってんなお前な。けどお生憎様。こっちはアーシアちゃん。今度は油断も怠慢

も無し子ちゃんなんで、圧勝間違いなし——おごおっ!？」

「油断無しっていう割には、話中に夢中になり過ぎだ」

『氣』を使って特殊な動きをすることで発動できる『縮地』という技術を使い肉薄し、顎を揺らすようにして強めに殴る。

フリードは何ら抵抗する事なく、吹っ飛んでいった。

まあ、死んではいけないだろうが、これでしばらく動けないだろう。起き上がったとしてもしばらくの間は脳が揺れて立つだけで限界だろうし。

：さて、確かアースシアに墮天使、信者たちは地下に居るんだっけか。さっさと向かって、終わらせてやろう。

※——

部屋に戻り、事の顛末と俺がこれから教会に行くことを伝えると、部長からビンタされた。

痛いな。主に心が。

目を見ればわかる。部長は本気で俺を心配してくれている。

決して自分の名声やなにやらに関わるから、なんて保守的な理由じゃ無く、俺の身を案じてくれている。

だけど、俺は行く。アースシアを助けに。

夕麻ちゃんと……俺を殺した墮天使と、話しに。

「すみません。心配してもらっているのはわかります。部長にどれだけ迷惑がかかるのかも、わかります。——けど、俺は行きます。アースシアは友達ですし、それに……夕麻ちゃんと、会いたい」

「駄目よ。絶対にダメ。光は悪魔にとって猛毒なの。死ぬなんてものじゃない。消滅するわ。それなのに、敵勢力の存在でしかないその子の為に、自分を殺した墮天使の為に、危険な場所へ向かうというの?」

「はい。俺はただ、それを言う為だけに来ました。では」

部長に頭を下げ、部屋を出る。

しかしドアノブに手をかけたその時、部長が俺の背中に声をかけてきた。

「イツセー。良い事を教えてあげる。『兵士』<sup>ポーン</sup>には、『プロモーション』っていう力があるの。私が敵地と認めた場所でそれを使えば、

『王』以外のすべての駒になれる。『騎士』のスピードも『戦車』のパワーも『女王』の万能性も、望むままにね」

そ、そうだったのか。

いや、でもこの情報は大収穫だ。プロモーションと神器の力が合わされば、夕麻ちゃんを前にしてもすぐに死ぬような事は無いはず。

「そして神器について。貴方の神器は前にも言った通り、未知数よ。だけどどんな神器にも共通する大事な事がある。——想いなさい。貴方の願いを。神器は、それに応えてくれる。貴方の願いを叶える手伝いを、きつとしてくれるはずよ」

俺の、願いを？

神器の宿る左手を見てみる。

俺の神器。それは多分、殴れば殴る程力が増す、って能力なんだろう。

実際床に拳を叩きつけた時、俺の力はかなり上昇した。

そんな戦い特化みたいな神器でも、俺のこの、アシアを助けたって思いや、夕麻ちゃんともう一度話したいって願いを、かなえてくれるのか？

「……ありがとうございます」

礼を言つて部屋を出る。

やっぱり、部長は優しいよ。

俺の意志を、最終的には尊重してくれた。

戦いのアドバイスまでくれた。

——正直、生きて帰れる自信はねえけど、やってやる。

馬鹿はバカなりに、やりたいようにやるのさ。

※——

最初は、傷ついた小鳥を見て、可哀そうだと思った事だった。

なんとかかしてあげたい、って思ったら、私の手から光が出て、その小鳥の傷が癒えた。

そして、その光景を見ていた教会の人が、私を『聖女』だと喧伝した。

傷を癒す聖女だと、多くの信徒にあがめられた。

そして、その『奇跡』を使い、私は教会に命ぜられるままに人を癒し続けた。

嬉しかった。ドジで非力な私でも、こうして誰かの、何かの為にされたんだと思うと、嬉しかった。

お礼を言われる度に、ポカポカした気持ちが胸に生まれるのを感じた。

……けれど、本当に幸せだったかと言われれば、違う。

私には、対等な立場の人が与えられなかった。

みんな私を『聖女』と呼び、間に見えない壁を置いて接する。

まるで、『人を癒す機械』のような扱いだっただ。

それでも良かった。私の行いが誰かの為になるのなら、それで良かった。

良かったのに、ある日事件が起きた。

私の目の前に、傷ついた悪魔が現れたのだ。

苦しそうに、うわごとのように助けを求め続ける彼を見て、助けあげたいと思った。

そして癒しの力を使うと、なんと悪魔の傷が治ってしまった。

それを目撃した教会の人は、今度は私を悪魔を癒す『魔女』だと嫌い、教会を追い出した。

ずっと感じていた孤独感が、ようやく目に見えるものとなって私を襲った。

心細かった。主を思う気持ちに嘘偽りは無いのに、この力のせいで私は『魔女』になってしまった。

——けど、この国に来て、私にも友達ができた。

こんな私を、友達と呼んでくれる人が、できた。

輪廻さんに、イツセイさん。

二人とも私の言葉がわかるみたいで、言語の壁や文化の違いに困っていた私を助けてくれました。

それだけじゃなくなって、私の身の上話を聞いて、神器を使う所を見た上で、友達になってくれたんです。

輪廻さんは殆ど毎日のように私に会いに来てくれて、とつても嬉し

かった。

イツセーさんとは、つい先ほど…私達にとってあまり良くない再会をしてしまったけれど、それでも私はあの人が話に聞く悪魔とは違うように思えた。

おかしな話だけど、良い人にしか思えなかった。

——だから、もう一度会いたい。

教会の地下にある祭儀場。その高台にある十字架に、私は拘束されていた。

レイナー様……この廃教会のトップである墮天使様が、独特の装束に身を包み、磔られている私に妖艶に微笑む。

「さつき話した通り、今から貴方の神器を抜き取るわ。神器によって人生を狂わされ、孤独に生きる道を余儀なくされた貴方を、死を以て救ってあげる」

「……確かに、今までの私なら、それでも良いと受け入れてしまったかもしれません。——ですが、今の私は一人じゃないんです！だから、やめてくださいレイナー様！私は、この力を恨んでいるわけでも、孤独を感じているわけでもございません！お願いします！」

「…ああ、そういえば、最近よく貴方に会いに来る人間がいたわね。大事な人なのね。——安心しなさい？あなたが死んだことくらいは、伝えておいてあげる」

懇願するも、レイナー様は私を殺す事を止める気配はない。

もうすぐ、レイナー様が言っていた儀式が成功してしまう。

そうすれば、私から神器は失われ、同時に命も失われてしまう。

——つまり、輪廻さんに会えなくなってしまう。

まだ今日は会えていないのに。

まだ別れの言葉も伝えられていないのに。

「い、いやっ、嫌ですっ！私、死にたくないっ！」

「その反応、もしかして貴方、あの男に恋でもしてたの？ふふふ、だとしたら滑稽ね。恋どころか友情すら知らなかった孤独の聖女様が、魔女になってようやく友人を得て、挙句は恋心まで抱くなんて。何もかもを手にしていった時より、何もかもを失った時の方が満ち足りていた

なんて」

どれだけ抵抗しても、レイナーレ様の笑みは崩れない。

儀式は決して、止まらない。

もうすぐ、もうすぐで私の命は尽きてしまう。

嫌だ。怖い。

イツセーさんに、悪魔でも私の友達ですって、言いたかった。

輪廻さんに……輪廻さんに、好きですって、伝えたかった。

「……助けて、輪廻さん……!!」

「敬虔なシスターが最後に縋るのが神ではなくただの人間。本当に落ちるところまで落ちてたのね、教会の視線で見れば。けどそういう子は好きよ。墮天使的にもね」

でも、殺すけど。

レイナーレ様の声に、私は全身の力を抜いた。

……もう、抵抗しても意味は無い。いや、元々意味は無かったのだ。

全部。全部。

せめて、苦しくない事を祈ろう。別れを告げられない事を懺悔しよう。

しかし、瞳を閉じた瞬間。

祭儀場のドアが大きな音を立てて吹き飛び、次の瞬間には儀式の魔力が消滅した。

「なっ、何が起きたというの!?!」

「簡単さ。俺が魔力をかき消した」

逆光で顔が見えないけれど、この声を私は知っている。

低くて安心できる、落ち着いた声。

時々変な事を言っただけを笑わせてくれた、あの声。

輪廻さんの、声だ。

「輪廻さん!!」

「遅くなって悪いな、アジア。助けに来たぜ」

※――

「あなた、立神輪廻ね?ここ最近、アジアに会いにここを訪れていた」

「ああ、そうだな。そういうお前はレイナーレって名前であつてるよな？」

「下等生物が気安く呼ぶな！——と言いたい所だけど。なぜ私の名前を知っているの？それに、私の計画すらも知っていたみたいだし」

「他の墮天使に、色々あつて襲われてな。その時にベラベラ勝手に話してくれたよ。お前の名前も、やろうとしている事も」

「チツ…どいつか知らんが勝手な事を…」

話しながらも、俺はゆつくりとアーシアのいる方へ近づいていく。

会話の最中だからか、周りの信者たちは様子を見るだけで攻撃はしてこない。

——まあ、してくるようなら今の俺は人間だろうと容赦なく殺せるんだが。

「そしてソレを知った上で言わせてもらおう。——つくづく不愉快だよ、お前。俺の親友殺した挙句、今度は違う友達殺そうってか？」

「不愉快、とはまた大きく出たわね。どうやって他の墮天使と対峙して生き延びたのか、とか儀式の魔力をかき消したのか、とか色々疑問はあるけど、所詮あなたは人間。上位の存在に勝るとも劣らない私を、倒せると思つて？」

「当たり前だろ。ただまあ、そこはイツセーに譲るがな」

俺がイツセーの名前を出した途端、レイナーレは大声で笑い始めた。

心底愉快そうに、腹を抱えて。

「イツセー君が？私を？あつはははは！そんなのできる訳ないでしょ？確かにあの日殺した直後、悪魔に転生したらしいけれど…でも、まるで脅威を感じなかったわよ？彼の神器は不明だけど、あつてもなくても同じ程度の微かなオーラしか感じなかった！そんな下級悪魔が、私を倒す？あり得ないわよそんな事！」

「…ま、どう思おうがアイツが来たら全部わかる事さ。——とにかく、俺の目的はたった一つ。アーシアの奪還だけだ。大事な友人なんでね。殺させるわけにはいかねえんだよ」

そう言つて、『気』を大量に放出する。

『氣』を扱う仙術に長けた黒歌曰く、俺ほどに老練された『氣』は、ただそこらにまき散らすだけで鍛えていない人間なら死に至らしめることができるらしい。

だてに何百年も練っては居ない、という事だな。

まあ言われた時はかなりびびったりしたけど。

「なつ、なんてオーラ…!? 貴方、本当にただの人間!？」

「まあ、正確にはドラゴン関係の神器を持っている人間、だな。だから半分人間半分ドラゴンみたいなもんさ。ああ、言っておくがさつき魔力をかき消したのは違う神器の力だからな。まだ俺はドラゴンの力を微塵も使っていない」

「違う神器…? まさか、神器を二つ持っているというの!? それこそあり得ないわ! ドラゴンの神器ですらレアケースなのに…:…あなた、もしかして私のように他人から奪ったの?」

「奪ったわけじゃない。その力を分けてもらって、ソレを増幅させて本家本元と同等かそれ以上の出力を出せるようにしたのさ。——ま、一応神器は二つ持つて生まれてきたわけだけど」

そう。俺は赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手ブーステッド・ギア以外に、もう一つの神器を持つて生まれた。

オーフィス相手に引き分けられたのも、白龍皇との戦いの切り札も、そのもう一つの神器。

原作では登場しない、存在しないはずの神滅具ロンギヌス。

たださつき儀式の魔力をかき消したのはそれとも別の神器だ。

因みに神器の力の貰い方は『氣』を相手と同化させて力の流れる道を作り、そこからブーステッド・ギアの『譲渡』の力を発動してこちらに相手の神器の力の欠片を持ってきて、ソレを倍加の力で底上げするという物だ。

相手の信頼や許可が無ければこんな真似できないので、一個の神器を貰うのにかなりの時間と体力を必要とする。

「ま、お前ら相手にや使わないさ。必要無いからな。——さ、帰ろうぜアシア。つってもここがお前の家なんだから…:…どうすつか」

「あ、あれっ? 私、いつの間に拘束が解かれて…?」

『氣』をまとった手刀でアーシアを拘束していた枷を全て破壊し、十字架から落ちてきたアーシアを優しく抱きとめる。

その流れを一瞬で行ったからか、アーシアは混乱している様子だった。

それはレイナーレの方も同じらしく、開いた口がふさがらないといった感じだ。

「さて。俺の目的は終わったし、後はここでイツセーを待つだけでいいんだけど……多分、そうさせるつもりは無いだろう?」

「——あつ、当たり前でしょう!立神輪廻を殺しなさい!早く!」  
信者:というより神父か。

神父連中が、レイナーレの言葉に従って襲い掛かってくる。

いや、ここまで俺の力を見ておいてまだ下っ端使うって、相当だがこの女。

流石最初期の敵。かませの匂いがする。

「つたく。俺を攻撃してくんのは良いけど、アーシアにまで当たったらどうすんだよ」

流石にアーシアを抱き止めた状態で『氣』の放出を行うわけにもいかないのです、取り合えず床を砕いてその欠片を彼等の脳を揺らすように狙って投擲。

一人、また一人と倒れていき、それを見てただ突っ込むのは危険だと判断した他の神父たちが動きを止める。

それを良く思わないのが、レイナーレだ。

「なんて使えない連中……ツ!!いいわ、私が直々にあなたを殺してあげる!!」

「いやだからさあ……つたく。ま、程々にな。無駄だから」

「ツ、ふざけろツ!!」

光の槍が投擲される。

俺ではなく、俺の腕に抱かれているアーシアに向けてだ。

怒り狂っているようで、こうして弱点となる部分を狙ってくるあたり流石:なんだろうが、やっぱり及ばない。

攻撃はアーシアに届くことなく、半透明の壁が出現して槍を防い

だ。

「チツ、それも神器の一つか!」

「いや? コレは俺の手作り。天使や普通の人間の攻撃は防げねえが、悪魔や堕天使の攻撃は基本なんでも防げるんだ。この『聖書の剣』同様に聖書のページを使つて作った:言うなれば『聖書の盾』だな」

これも白龍皇対策で作つた物だが、意外とこういう時に役に立つ。わざと防戦に徹しなければならぬ時とか、実は結構あるのだ。

「大丈夫だぞ、アシア。もう安心していい。俺の傍にいる限り、お前に傷一つつけませんさ」

「あつ……は、はいっ!」

よしよし。さつきからなんか震えてたし、フオローして良かったみたいだな。

落ち着いたのか、震えも感じなくなった。

ただなんだか顔が赤い気もするし、瞳が潤んでいるような気もするけど……いやいや、思い過ぎしだよな。

確かに色々アシアの琴線に触れるような言動をした覚えはあるけど、それでも俺に惚れるなんて、なあ?

「なんでっ、なんで攻撃が効かないのよツ!! 私はアザゼル様や、シエムハザ様に、御寵愛をいただけるはずの存在なのに! どうして!？」

「どうしても何もないだろ。コレが現実だよ。——ほら、後はアイツに任せっから、俺は外野に回るぜ」

「あ、アイツ……?」

首を傾げるレイナーレに、指で入口の方を見るように誘導する。

そこには、木場と小猫、そしてオレンジ色のガントレットを左腕に纏ったイツセーが立っていた。

※——

教会に向かつて走り始めて数分。

俺の隣を走るのは、木場と小猫ちゃんだ。

なんでも、俺一人で行くのが心配だからついてきてくれるらしい。

言っていないだけで輪廻がいるからあまり心配はないと思うけど、厚意は受け取っておくべきだと思つてついてきてもらった。

そして教会についたが……なんだろう、変な空気感だ。前に教会の前に来た時は、凄くうすら寒い嫌な予感がしたのに、今は何もない。

代わりに、地下から物凄いオーラを感じる。きつと、輪廻だ。

臆することなく入り口から入り、聖堂へ向かう。

すると、壁にめり込んで気絶しているフリードと、開け放たれた地下への扉が視界に入ってきた。

「……これ、一撃でやられてるよ。一体誰が……」

「い、一撃か……ま、やったのは多分、俺らの味方だから。それよりもさっさと行こうぜ」

気絶しているフリードの状態を確認し戦々恐々とする木場に、俺は言葉を濁して先に進むように促した。

……さつきも圧倒はしていたけど、まさかの一撃か……すげえな輪廻。悪魔の俺よりも全然強くね？

乾いた笑い声を出しながら、俺は地下の階段を駆け降りた。

一歩進むごとに強いオーラを感じる。木場も小猫ちゃんも圧倒されているのか、冷や汗を流していた。

……いや、マジで何モンなんだ輪廻。悪魔ビビらせるって相当だぞ。終わったら必ず話を聞こうと思いつつ、破壊されたドアを通り中に入る。

するとそこには沢山の気絶した神父と、槍を下ろし絶望したような顔をしている夕麻ちゃん、そしてアシアを腕に抱き、半透明の壁に守られている輪廻がいた。

「……輪廻、先輩？」

小猫ちゃんが呆然と呟く。

さらっと名前呼びされてやがる……とちよつとアイツを羨ましく思いつつ、夕麻ちゃんを見つめる。

ボンテージ姿に、黒い堕天使の翼。

……やっぱり、堕天使だったんだ。

「遅かったな。ほとんど終わっちゃったぞ」

「悪いな。わざわざ夕麻ちゃんにだけ何もせずに来てくれて」

「気にすんな。……じゃ、俺は見る側に徹するから、やりたいようにやりな」

「おう」

神器はそのままに、俺は夕麻ちゃんに近づく。

「久しぶり、夕麻ちゃん」

「……ええ、久しぶりね。まさか悪魔になって生き延びるなんて、予想外だったわ」

「……本当に、堕天使なんだな」

「そうよ。私は堕天使、レイナーレ。それもあなたのような下級悪魔と違い、上級悪魔すら屠る力を持った者よ」

まるで自分に言い聞かせるように話す夕麻ちゃんに、俺はどんどん近づいていく。

「俺さ、本気で好きだったんだぜ？夕麻ちゃんの事、大事にしようって思ってた」

「ああ、そうだったわね。騙されてるとも知らずに私に尽くす姿は、まさに滑稽だったわ」

「初めての彼女だったからさ。最初死んでくれてって言われたときは、なんか失敗しちゃって嫌われたのかと思っちゃまったよ」

「初めての彼女、ね。確かにそんな感じだったわ。初々しくって、可愛かったわよ？哀れって意味でね。けど安心して頂戴。あなたのデートプランは陳腐でつまらなかったけど、当たり前障りのないものだったから。他の子ならある程度妥協してくれるんじゃない？」

「……一応、聞かせてくれ。……俺の事、好きか？」

俺の質問に、夕麻ちゃん……いや、レイナーレは数秒黙り込む。

何を言われたのかわからない、という顔をして、そして突然吹き出した。

「ぶっ、あは、あっははははははっ！私が、あなたを？それこそありえないわ！あなたに向けた好意も、言葉にした想いも、全部偽物よ！あなたに取り入って神器を見極め、殺すための方便！もしかして、本気にしちゃってた？ふふ、あっははは！もしあなたが人間のままだった

ら、優しく抱きしめてあげたいくらいに哀れだわ！」

「……そうか」

わかっていたけど、やっぱり全部嘘だった。

これで名実ともに、俺の初恋は終わったわけだ。

「……そうかよ……!!」

だったら、もう、良い。

「レイナーレええええええええ!!」

「気安く呼ぶな、下級悪魔っ！」

その、ムカつく顔面、ボコボコに腫れ上がらせてやる!!

俺は左の拳を握りしめ、レイナーレに飛びかかった。

光の槍の切っ先が俺に向くが、関係ない。

俺の気持ちを踏みにじり、アーシアを殺そうとしたコイツは、なんとしても俺が倒す!

雄叫びをあげて恐怖心をかき消しながら、俺は拳を振り抜く。

狙いはレイナーレの顔面……に、見せかけて床!!

ドゴツ!と床を殴りつけた途端、俺の全身に力がみなぎる。

レイナーレは突然床を殴ったことに困惑して、動いていない。

「くらいやがれええええええっ!!」

「ぐうっ!?!」

隙だらけの顔面を今度こそそのまま殴る。

ギリギリのところまで防がれてしまったが、腕の骨を折った感覚があった。

それと同時に、さらに力が増す感覚を覚える。

いける。

俺は、コイツを倒せる!!

「な、なんだっていうのその力は!明かに下級悪魔のソレを超えてる!こんなの、中級……いえ、上級悪魔レベルじゃない!」

腕を抑え、俺から距離を取ろうとするレイナーレ。

その顔は恐怖に歪んでおり、まるであの日殺される直前の俺のようだった。

……ほんとに立場が逆転したな。

全く気分は良くねえけど。

「上級とか下級とか、関係ねえ……！」

「ひっ!？」

ガシツとレイナーレの肩を掴み、拳を限界まで硬く握りしめる。

普段の俺なら、女の子殴るのは抵抗がく、とかいうんだろうけど、今はそんなのまるで気にならない。

「俺はただ、テメエを殴るだけだああああ!!」

おおきく振りかぶって、拳を顔面に叩きつける。

レイナーレは声を発することもできないまま、壁に叩きつけられた。

そしてそのまま動かなくなり、俺も力の限界が来たのか、膝から崩れ落ちた。

「おつかれさん」

「……ああ。……終わっちまったなあ、俺の初恋」

「アイツの言葉聞いた後でも、やっぱ辛いかな？」

「…確かにレイナーレは清々しいくらいクソ野郎だったけど、あの日あの時俺が夕麻ちゃんが好きだったのは、変わらないからさ」

「そうかい。……胸、貸してやろうか？」

「……背中頼む」

「了解」

俺に向けられた輪廻の背中にしがみついて、俺は大声で泣いた。

もう、ここで一生分泣いてやろうと、本気で泣いた。

その間、輪廻は黙ってそこにいてくれた。

……やっぱ、持つべきは友だな。

いや、今でも女の子大好きだし、おっぱいへの情熱も燃え盛ってるけど。

こうして弱いところ見せられんのか、多分親友で男なコイツだけなんだろうな。

…余談だが、木場達は俺が泣く事を察して先に出ていってくれた。

ほんと周りに恵まれたな、俺。

## 事の顛末と猫の姉

墮天使レイナーレの引き起こした一件は、なんだかんだ輪廻が大半終わらせてしまった。

俺がやった事と言えば、もう殆ど無力化されてたレイナーレに態々喧嘩吹っ掛けて気絶させただけ。

後始末だって部長や朱乃さん（同じ眷属同士なんだから他人行儀は無しと言われた）がしてくれた。

因みに教会に悪魔が殴り込みに行つて墮天使を倒した、なんてのが問題にならなかったのかというと、結果としてはならなかった。

なんでもアーシアの神器を奪う作戦はレイナーレとその部下たちが独断で行つた事らしく、墮天使側も教会も一切関与していなかったため、寧ろ、勝手な行動をした墮天使に対処した事で俺達が評価されたとのこと。

……ほんとにすごいのは、輪廻なんだけだな。

あの数の神父相手に、無傷でアーシアを奪還して、しかもあのフリードだつて一撃で倒してた。

アイツ本当にただの人間なのか？ 実は俺よりも前から悪魔やってましたとか言われても驚かねえ自信があるぞ。

勿論部長には輪廻があつた事に居た事と、レイナーレを無力化したのも神父を倒したのも全部アイツがやったって事も説明した。

アイツ自身ソレを否定しなかったのもあつて、詳しい話を後日部室で聞かつて事になったんだけど…。

「なんでお前そんなくつろいでんだよ!？」

「別に何も後ろめたい事が無いからだが？ 落ち着けよイツセー」

「いや、くつろぐにしても限度があんだろ!？」

「…うるさいです。イツセー先輩」

小猫ちゃんに苦言を呈されるも、俺のこの激情は収まらない。

いくら最近あだ名で呼んでもらえるようになったからって、その喜びだけでは受け入れ切れない現実という物があるのだ。

——なんでコイツ、当然のように小猫ちゃんを膝の上に乗つけてる

んだ!?

木場も朱乃さんも何も言わねえし!

因みに部長は今シャワー中だ。

カーテンに映る美しいボディラインが今日も目の保養です。

「そ、そうですねよ輪廻さん! ええつと……その、良くないと思います!」

「いやアーシア。俺らは客人なんだから、もてなしを受けるつもりでいいんだよ」

「い、いえ、そういう意味で言ったのでは……うう……」

輪廻の隣に座るアーシアも、俺同様に文句を言う。

でも多分、俺とは違う理由だよな……目で分かっちゃうよ。アーシアのヤツ、絶対にアイツの事好きだろ。

くそうつ、輪廻ばつかモテやがって許せねえ!

でもどう足掻いても勝てない気がするのも事実! 悔しい!

「ああ、もしかして膝に乗りたいのか? それくらい構わねえけど」

「っ! ほ、本当ですか!?! じゃ、じゃあ……」

「……いえ、ダメです。私が今離れられません」

「んなつ! な、なんでですか!」

「と、取り合い……だとツ……!?! り、輪廻テメエ、男の夢を実現させてんじゃねえぞコラア!!」

「いや、これは多分そういうのじゃないと思うんだけど」

輪廻は冷静にそんな事を言っているが、絶対アレはハーレム状態というヤツだ。間違いない。

方やアーシア。方や小猫ちゃんというこの美人揃いの学園の中でもトップクラスの可愛い系二人(アーシアはさらっとこの学園に通う事になった。実質理事長でもある部長が入学させたらしい)に膝の上を取り合いされるなんて、羨ましいにも程がある。

ってか誰がどう見てもあの二人は輪廻が好きだろ。

なんで本人気づかねえんだよ。鈍感過ぎるだろ。

「ごめんなさいね、待たせちゃって。——つて、あら。喧嘩?」  
「やあ?」

満を持して登場した我らが部長様の疑問に、朱乃さんはあらあらうふふと、濁した言葉を発するのだった。

※――

「それじゃ、早速色々聞かせてもらおうかしら」

「まあ、答えられる範囲で」

アーシア救出作戦の翌日。俺とこの学園に通う事になったアーシアは、あの時何があったのか等の詳細な情報を話すために、オカ研の部室を訪れていた。

予定よりも早く着いてしまった為に少し待つことになったが、リアス先輩の用事(シャワー)も終わったので、早速昨日の件についてアーシアと共に話す事にした。

俺から見た事件の詳細と、アーシアが実際に墮天使の口から聞いたこと、そして自分がされた事。

時折質問しながら話を聞いたりリアス先輩は、満足そうに頷いた。

「…なるほどね。少しこっちで把握しているのと違う所はあるけど、主観が混ざれば違って当然だし、この件についてはもう特にいう事は無いわね。――それで、こっちの方が正直本題んだけど……輪廻。貴方、一体何者なの？」

「何者、と言われましても。ただの男子高校生ですが」

「冗談にしては笑えないわよ。ただの男子高校生が墮天使や悪魔に勝てるだけでも？そんな訳ないでしょう。――それに、私達の事も良く知っていたみたいじゃないの。私達が悪魔だって、いつから気づいていたの？」

…ま、流石に普通の男子高校生とは言い切れないわな。

小さくため息をついてから、予め考えておいた言い訳を脳内で再確認し、ゆっくりと口を開く。

…今はまだ、俺の全部を話すわけにもいかないしな。隠せるだけ隠しておこう。

「正直、会った時から気づいていましたよ。気配が違ったので。――ちよつとした事情があつて、俺は『気』を読むのに馴れています。それで人間の気配とそうでない気配との違いなら、わかつたんです」

『気』？もしかして、仙術を扱えるって事？」

「まあ、そんな大層な物ではありませんがね。俺にできる事なんて、この練り上げた『気』を纏つての徒手空拳だけです。まあ、それでも心もとないつて事でいつぞや使つて見せた『聖書の剣』や『聖書の盾』を作つたんですよ」

あながち間違いいではない。

実際俺は仙術は使えないし（黒歌曰く「才能が無さすぎるという才能」レベル）ブーステッド・ギアや他の神器の力も使うとは言え基本戦術は徒手空拳オンリーだからな。

よくみんなから「頭が良さそう」とは言われるが、俺は基本何も考えずに突っ込んで出たとこ勝負するタイプだからな。

テストとかは流石に準備して臨むけども。

「じゃあ、イツセーが悪魔になったのに気付いたのもその『気』とやらのおかげ？」

「まあ、そうですね。それに感じる『気』がこの学園の他の悪魔と違って、貴方達に似た物だったので、ここを訪れるようにと教えました」

「……他にも悪魔がいることに、気づいてたの？」

「ええ。——因みに天野夕麻について知らないふりをしてたのは、他の連中が忘れ去っていたのに合わせたからだ。まだあの時は俺について誰にも知られたく無かつたんでな。許してくれ、イツセー」

「えっ、あ、あー……うん。あんまり気にしてねえし。つつーかお前、知らないふりをしていたとしても一番まともに取り合ってくれたじゃねえか。そうした意味じゃ救われてたし、別に恨みも何もねえよ」

「…そうか」

正直あの時はイツセーに対する罪悪感が半端なかった。

今の俺にとつては、物語のキャラクターである以上に親友で幼馴染なのだ。

そんな友人を見殺しにした挙句騙すなんて真似、心苦しくて仕方なかった。

そう言いつつ今も現在進行形で嘘をついてたり隠し事をしてたり

するわけだけど。

「ねえ、アーシア。今度は貴方に聞きたいんだけど……レイナーレとの会話の中で、輪廻が『神器持ち』だって言ってたらしいけど、それは本当?」

「あ、はい。確か、ドラゴンに關係する神器……と言っていました。後、他にも神器を持っているとも」

「それは本当なの? 相手に実力を読ませないための嘘じゃなくって?」

「ええ、本当です。今この場ではお見せしませんが、俺はいくつかの神器を持っています。うち二つは神滅具ロンギヌスですし、これらを全部使えばそれこそ最上級悪魔にも匹敵する実力であると自負しております」

まあ、嘘ですが。

二つの神滅具ロンギヌス、というのは本当だし、いくつかの神器を持っているのも事実だ。

だがソレ等を全部同時に使った場合の俺の力は、最上級悪魔レベルなんてもんじゃない。

現在よりも神器の所有数が少ない状態の全力で、全盛期のオーフィスト引き分けたのだ。

今なら全神器を振るえば『禁手フランス・ブレイカー』無しでも魔王や神にだって引けを取らない自信がある。

『禁手』ありならドライグの力だけでも事足りるけど。

しかし少し規模を小さめに話したものの、リアス先輩たちは皆驚愕していた。

……ただの人間が最上級悪魔レベルを自負したら、そりゃ驚きますわな。

というか神器の複数所有なんて、それこそ人工神器を作り出したアザゼルでも無きやあり得ないくらいだし、その時点で大分驚きか。

ただイツセーはいまいち凄さがわかっていないみたいだが。

そういうところだぞ。

「さ、最上級悪魔レベル……!? あなた、本当に人間?」

「人間ですよ。さつき言った通りドラゴンの神器を持ってるので、半

分ドラゴンと言っても差し支えは有りませんが」

「……ドラゴンの神器、ね。それは教えてくれないのかしら?」

「ええ。こればかりはね。——もし敵対してしまったら、対処法を用意されてしまうかもしれないでしょう?」

俺の言葉で、一気にリアス先輩の表情がこわばる。

見れば小猫たちも顔が引き攣っていた。

…薄めたとはいえ、『気』を放出するのは不味かったか。

まあやってしまった事は仕方ない、と『気』の放出を止めて、口を開く。

「つて言っても別に俺の方から敵対するつもりはありませんがね。できれば今までみたいに仲良くしていきたいですよ?勿論」

「……心外ね。私達が、貴方が神器持ちだと知っただけで態度を変えろと思ってたの?」

「いえ?どちらかというと、今から話す内容の方が色々厄介ごとに繋がりそうというか何と言いますか」

そこまで言つて、窓の外に視線を向ける。

窓の外の木の枝には、直接見なければそこに居る事に気づけない程に気配を薄くした一匹の黒猫がいた。

…そう。黒歌である。

俺がリアス先輩たちに自分の話をすると知った黒歌が、いつそ自分もここで白音……小猫に会つて、全てを話すと言い出したのだ。

何度も「良いのか?」と確認を取つても意志が固いようだったので連れてきたが、その瞳は緊張している事を雄弁に語っていた。

だがまあ、ここまで来たんだから腹を括つてもらわなきゃ困る。

一応目で合図して、窓を開ける。

突然の行動に首を傾げる全員だったが、俺の腕に飛び込んできた黒歌を見て皆驚愕の表情を浮かべた。

勿論イツセーとアーシアはわかっていない様子だったが、俺の腕から降りた黒歌が人の姿に変わると、皆と同じように驚いた。

「——姉、様……!?!」

「にや、にやつはは……久しぶり、白音」

※――

輪廻先輩。変態だけどかつこよくって優しくて、一緒に居て温かな気持ちになれる人。

最初に私があの人を知ったのは、クラスの女子たちが「駒王学園イケメンランキング」なるモノについて話していたのが耳に入ってきた時だった。

曰くその人は、好き嫌いが分かれやすいタイプだと。

祐斗先輩のように大多数の人が好きになるようなタイプではなく、クセが強くて好きにならない人も多いが、一度好きになっちゃえばとことんハマってしまうタイプだと言われていた。

ただその時はまるで興味が無かったし、その後に変態三人組とよく猥談をしているという話を聞いてからはちよつとマイナスイメージを抱いてしまった。

だって変態三人組と言えば、この学園でも屈指の有名人だ。

松田先輩、元浜先輩、そしてイツセー先輩。

猥談、覗き、盗撮。この世のありとあらゆる性犯罪の擬人化とすら呼ばれるその三人に、私達も何度か着替えを覗かれたことがある。

そういえばそのたびに「今日は輪廻が休みで良かったーッ！」とか言っていたような気がする。

：なるほど、保護者。きつと先輩がこの三人の覗きや盗撮を止めていたんだろう。

今ならその姿が容易に想像できる。

――で、ある日実際に、その先輩と会った。

確か、天気が良いから屋上でお昼寝でもしようとしていたんだっけ。

本来なら立ち入り禁止だけど、この学園の裏の支配者ともいえるリアス部長の眷属である私は侵入可能。

普段から誰も訪れない場所だから、密かにお気に入りスポットだった。

けど、その日はそこに在り得ない客がいた。

それが輪廻先輩。

立ち入り禁止のはずの屋上で、よりによつて私が普段から使っているブルーシートの上で、それはもう我が物顔で眠っていた。

イラつとしたので、鼻と口を塞いで起こした。

初対面だし先輩なのにそんな真似をしてみまえるくらい、なんともうか懐かしい雰囲気が出たというか、親しみやすい雰囲気を出していたというか。

…でもまあ、そんな事をいきなり言われても困惑されるだろうし私のしたこともそれなりに悪い事なので、しっかり謝ったが。

それで、せつかくだからと話をしている途中に、ある違和感を覚えた。

…そう。この懐かしい雰囲気の正体が、私の姉様にそっくりの匂いによるものだど気づいたのだ。

私の姉様。黒歌姉様。

主を殺し、私を置いて去ってしまった姉様。

私が、大好きだった姉様。

そんな姉様のような匂いがするこの人について、もつと知りたいと思つた。

この人は悪魔でも何でも無い、ただの人間なのに。

黒歌姉様の手掛かりになんて、なるはず無いのに。

そうして会う度に話してみたり、時には私の方から会いに行つてみたりしている内に、クラスの女子からこんな事を言われた。

「塔城さんってもしかして、立神先輩と付き合ってるの!？」

極めて心外だった。

何だつて私が、あんな変態と一緒に猥談に興じるような男の人と付き合わないといけないのか。

そりゃあ話してみたら中々常識人だし一緒にいるとなんてか安心できるし変態三人組の暴拳を諫めたり被害に遭つた人に誠心誠意謝罪してたりと真面目だし料理もおいしいし膝の上に乗ると温かいし先輩自身の匂いはとつても落ち着いてポカポカできるしそれに――。

と、このような事を言つて否定したが、そしたら余計に女子たちは盛り上がってしまった。

訳が分からなかった。

けど、付き合ってるのか、という質問を経て、私があの人を意識するようになったのは事実だ。

そのせいで最近はあまり人前で接したくなくって部室に誘うようになっただけ。

ついこの間なんて、先輩に悪魔になってもらおうとすらしてしまっただ。

そうして、先輩に対して抱く感情が何なのかわからなくなりつつあった私を、さらなる衝撃が襲った。

イツセー先輩の手助けをするために廃教会へ向かった時、倒れている神父たちや絶望しきった顔をする堕天使を前にして、いつも通りの飄々とした態度のまま立っている輪廻先輩がそこに居た。

イツセー先輩の話によると、いつだかのはぐれ悪魔と夢幻人なる存在の一件の時に現れたお面の人の正体が輪廻先輩だったらしい。

ただの人間のはずの先輩が中級、或いは上級レベルの悪魔を相手に戦えるほどの人だったなんて、驚きが隠せなかった。

その上先程の話が本当ならこの人は神器を複数所持しているらしいし、力の全てを使えば最上級悪魔に匹敵することのこと。

なんだか気の遠くなる気分だった。

……それでもさっき膝に乗せてもらった時の安心感が変わらなかったし、ついつい甘えてしまいそうなオーラを感じるのも変わりなかった。

いや別に甘えてはいないけども。

全然甘えてなんていないけども。

ただちよつと体を擦り寄せただけで。

羨ましがってたアーシア先輩に譲らなかつたのは決して嫉妬心とかそういうのではなく。

——とにかく、私にとって輪廻先輩は今までの輪廻先輩のまま。

最上級悪魔に匹敵するとか、複数の神器を持っているとか、途轍もない威圧感を出すとか、色々驚かされる所はあるけど、先輩は先輩だ。そうやって自分の中で納得した矢先、今度は違う衝撃に襲われた。

先輩の腕に飛び乗った黒猫。

人の姿になった黒猫。

着崩した和服姿に、困ったように笑う顔。

間違えるはずがない。

だってこの人は、私の。

「——姉、様……!?!」

「にや、にやつはは……久しぶり、白音」

黒歌姉様が、そこに居た。

力を暴走させて主を殺し、SS級のはぐれ悪魔として冥界にその悪名を轟かせた姉様が、ここに。

「黒歌?! い、一体どうして!?!」

「あー、先輩落ち着いて。いやこうなるとは予想していたけど、それでも話を」

「どういう事ですか…!!」

「…小猫」

警戒して立ち上がったリアス部長を宥めている輪廻先輩と、その隣で居心地悪そうに立っている黒歌姉様を睨みつける。

「どうして……どうして先輩が、姉様と一緒にいるんですか」

「…まあ、話せば長くなるが。端的に言えば冥界で路頭に迷ってる所を拾った、かな」

「ひ、拾われちゃったく……にやーんて」

「ふざけないでくださいッ!」

どういうつもりかわからないがふざける姉様に、つい声を荒げる。すると姉様は肩を震わせ、申し訳なさそうに縮こまった。

「ま、詳しい話はちゃんとするさ。——でも、俺の口から聞くより黒歌から聞いた方が良いだろ? 俺が話していいならそれでもいいが」

「それは…」

「ご主人様。大丈夫だから、私から話させて?」

「ご、ご主人様アツ!?!」

「イツセー君、ちよつと静かに」

姉様が輪廻先輩をご主人様と呼び、それにイツセー先輩がとても大

大きく反応を示す。

ただ即座に祐斗先輩に諫められて、釈然としないような顔をしながらも口をつぐんだ。

「……白音」

「っ」

「まずは、謝らないとね。今まで放っておいて、本当にごめん。ずっと、辛かったよね」

「——い、今更っ！今更謝られて、何が…っ!!」

「うん。そうだよ。謝って許されるなんて思っていないし、私が主殺しの大罪人って事も間違いないし。——それでも、私は謝りたかったの。そしてちゃんと、本当の事も伝えておきたかった」

本当の事。

そう話す姉様の目は、真実を話しているようにしか見えなかった。

まだ全然釈然としないけど、このまま聞かずに逃げてしまっっては後悔すると思っ、一先ずは続きを聞く事にした。

ゆつくりと頷いた私に、姉様は、今までの話をつらつらと語り始めた。

※——

黒歌は全部を話した。

主殺しの理由。

小猫：白音を迎えに行けなかった理由。

全部が小猫を思っの行動であったと話し、「信じてもらえないかもしれないけど、今までもこれから私は白音の事、大好きだから」と涙ながらに告げた黒歌に、小猫もポロポロと涙を流していた。

イツセーとアーシアも、なぜか号泣していた。

「小猫ちゃんの身を守るために大罪人につて……こ、この事をちゃんと伝えたら、罪に問われる事も無かつたんじゃない」

「違うわ、イツセー。もし仮に彼女の話が真実だしたら、確かに罪はいくらか軽くなるかもしれない。けどね、その罪は決してなくなることはない。主殺しっっていうのは、それくらい重い罪なのよ」

「ど、どうしてですか…っ」

「悪魔の世界は上下社会なの。最近は私みたいに眷属も同胞として扱う考えが浸透してきてはいるけど、それでもやっぱり眷属を奴隷のように扱う事を是とする悪魔もいるわ。そしてそういう考えを持った悪魔もまた長命で、権力を握っているのが普通なの。もしこの話を伝えたとしても、黒歌の罪を無くしてやろうなんて言う悪魔は、はつきり言っていないはずよ」

「そんな……」

リアス先輩の言葉に、皆が顔を俯かせる。

だが社会に生きるというのは、こういう不条理に晒されるということでもあるとわかっているんだろう。

これ以上文句を言う者は、一人もいなかった。

……ま、俺は悪魔とか関係ないから違うんだけど。

「落ち込む必要は無いさ。黒歌を罪に問わせない手段は一応ある」

「ツ、ど、どういう事ですか!?!」

「今は言えない。こればかりは確実性が無いし、下手な希望を持たせるわけにもいかないからな。——ただ、時が来れば全力を尽くす。黒歌は俺にとつても大事な家族だからな」

「つく!!……ご主人様あ!!」

俺の言葉に、まるで感極まったように震え、そのまま抱き着いてくる。

その様子を見て途端にイツセーと小猫、後何故かアジアが不機嫌そうになるが、今は一旦無視させてもらって黒歌を宥める。

よしよし、俺が何とかしてやるからなー。

実際成功率低いからあまり期待しないで欲しいけども。

「そ、そうだよーなんでお前、ご主人様なんて呼ばれてんだよ!?!」

「え、そりゃあ……なんでだっけ?」

「んむく?聞きたいかにかにや?気になるのかにかにや?私とご主人様のな、れ、そ、めっ♪」

「な、馴れ初め!?!」

愕然とする全員に、黒歌は先程までのしんみりした感じは何処へやら、なんだかどや顔風になりながら俺との出会いから、今に至るまで

を話し始めた。

「私がご主人様に会ったのは、以前の主を殺してお尋ね者になってから、しばらく後の事だったにやん。ちよつとハマしちやつて傷だらけになって彷徨つてた私を、ご主人様が拾ってくれたの。その時は周りは敵しかいないって思つてた時だったから、ご主人様に何度も攻撃したんだけど…全部いなされちゃつて」

「ぜ、全部いなした…ですつて…？」

「討伐隊まで編成される程のはぐれ悪魔のはずでは…？」

「いやー、本当あの時は死を覚悟したにやん。必死の抵抗だったのに、何もされてないみたい我真つ直ぐ向かつてきて…捕まるのかな、殺されるのかな、もしかしたら犯されちゃうんじゃないかなつて。——でもご主人様は、私の傷を治してくれたの」

俺に抱き着いたまま話す黒歌。

その内容にリアス先輩と朱乃先輩が若干引くが、気にすること無く彼女は話を続ける。

しかし抵抗、ね。死にかけの状態で放つ攻撃だったからか、まるで威力を感じなかったな。

だからそんな引く事ないと思うんですよ、御二方。

「あんなに攻撃したのに、殺すわけでも何でもなく治療してくれて。信じられなくて困惑してた私に、ご主人様つてばなんて言つたと思ふ？ 『大丈夫。何があつたかわからないけど、俺は敵じゃないから。安心してくれとまでは言わないから、落ち着いてくれ』つてー！私の本気の攻撃を何度も受けたのに、第一声がそれつて！それつてー！」「黒歌、痛い、痛い。テンション上がつてるのはわかるから俺を叩かないでくれ」

「あ、ごめんにやん」

まるで机をバシバシ叩くかのように俺の体を叩いていた黒歌を諫める。

うーん、痛い。頑丈になつたと言つても素の状態は鍛えただけの間なのだ。

悪魔の一撃は重い。

「ごほん。それで、なんとなく『あ、この人は敵じゃ無いんだ』って思っ  
て、そのまま落ち着くどころか安心して気絶しちゃったにゃん。で、  
次に目を覚ましたらご主人様の家で」

「っ、連れ込んだ……だと!？」

「人聞き悪いなお前。疲れ切ってたみたいだし、ベッドで寝かせてや  
ろうと思っただけだ」

「そうそう。目を覚ましたらご主人様のベッドで。敵じゃないって  
思っでいつも警戒してる私に、ご主人様は気分を悪くすることも無  
くお粥とか食べさせてくれちゃつて。で、いきなりそんなに優しくさ  
れちゃつて……その……色々逃亡生活とか白音に会えない事で溜まっ  
てたストレスが爆発して、泣いちちゃつたにゃん」

「んで、泣きながら俺に今まで何があつたのかとか話してきて、それで  
俺が『好きだけ家に住りゃいい』って言っつて、一緒に暮らす事になっ  
た訳だ」

父さんと母さんにはすごく驚かれたっけなあ。

特に気絶した黒歌を連れ込んだ時。

「うちの子が性犯罪に!？」とか滅茶苦茶失礼な事を言われた思い出が  
ある。

「いやー。私っつてば誰にも飼われず自由奔放に生きる野良猫タイプだ  
と思っつたけど、実は意外と飼い猫生活悪くないなーっつて思っっちゃつ  
てたり?正直ご主人様になら首輪つけられちゃつていいんだけど」

「父さんと母さんの前でお前に首輪つけられる程胆力ねえよ」

「え、貴方の両親、彼女の事受け入れてるの?」

「それどころかこの町に悪魔が多数潜んでるっつて事とか、俺が神器を  
持つて生まれたとか、全部知ってるよ」

その上父さんは良く赤龍帝と酒盛りをしています。なーんて言っつた  
らどんな反応するんだろうな。

少なくとも今よりもっと派手に驚くか。

普段の余裕溢れる大人っぽい雰囲気も崩壊したり?

そんなどうでも良い事を考えていると、イツセーがまだ話は終わっ  
ていないとばかりに俺に詰め寄ってくる。



まあ、別に俺は悪魔に転生しようがしまいがどっちでも良いんだけど。

## 旧章：婚約会場のフエニックス 新しい日常

俺の朝は早い。

二度寝を前提とした早めの目覚ましの音に目を覚まし、布団の中に潜り込んでいる黒歌を優しく抱きしめて再び二度寝……しようとしたところで、突然ドアが勢いよく開けられ、アーシアが怒り心頭と言った様子で入ってくる。

俺と黒歌が同衾しているのを発見して以来、彼女は毎日俺の目覚ましのタイミングで起きて俺の部屋まで来て、黒歌を回収して出ていくのだ。

そのたびに「一緒に寝るか？」と誘ってみると、毎回顔を真っ赤にして「し、失礼しましゅっ！」と照れるのが可愛い。

黒歌と違って本当に初心だからな。あまり人をからかう趣味のなはずの俺でも、からかい甲斐のある子だと思ってしまう。

そんなこんなで目が覚めてしまうので、二度寝することなく体をほぐし、そのまま庭先へ。

時間操作の魔法を発動して、一瞬の間に何時間もの時を過ごせるようにしつついつものトレーニングを開始。

ブーステッド・ギアで重力を倍加させての基本ストレッチ。

スクワット、腹筋、背筋、その他諸々の筋トレを重力強化の下1000回ずつ行い、自分の回復能力を倍加させて即復帰。

超再生が即座に行われるため、最初の頃はのたうち回るくらい痛かったが、もう慣れた。

何百年と続けてきたのだ。その程度の痛みじゃ悶えもしない。

その後はひたすらシャドーボクシングと魔力コントロールと倍加の限界を超えるチャレンジを同時に行う。

体を動かし、仮想敵と只管戦いながら、魔力を球体や四面体にしてその場に生成し形を変えずに大きさを変えてみたりしつつ肉体が追いつかないレベルまでブースト。

これがここ最近の基礎トレーニングである。

実戦経験は今の所積み切ったと言っても過言ではないので、後はこうして己を磨く他ないのだ。

それにしたって大分壁にぶち当たってる気もするけど。

で、以上の常人には過酷なトレーニングを現実時間では一瞬で終え、そのまま家に戻る。

するとアジアと黒歌と一緒に料理を作っている所が見られるので、そこでまず一日分のハッピーを取得。

マジで癒される。この先数年分のストレスが帳消しにされる気がする。

「ご飯、できましたよ〜」

「おおっ、今日も美味そうだ」

「いただきます〜」

父さんと母さんはこの時間には既に仕事に行ってしまったている為、

朝食は俺達三人で取るのが常だ。

今日も今日とて美味しい料理を食べて、俺達は学校に行く準備を整える。

勿論黒歌はお留守番だ。

「じゃ、行ってくる」

「行ってきます」

「はいはい。いってらっしゃいにゃん。——あ、ご主人様。今日のお弁当は超力作だから、みんなの前で食べて自慢しちやっぴにゃん」  
♪

「おお、楽しみだな。そうするよ。——じゃあ、鍵よろしくな」

「はい」

家を出て、アジアの歩幅に合わせながら歩く。

他愛ない話に花を咲かせながら歩き、交差点を二個曲がったあたりで、イツセーと合流する。

汗をダラダラと流しながら、疲れ切った顔をしているコイツは、俺達と合流するまでの間ずっと鍛錬させられているのだ。

部長（俺も才力研に所属することになったので、こう呼ぶように言

われたのだ)に毎朝スパルタ的特訓をされていると、嬉しそうな嬉し  
くなさそうな複雑な顔をしていた。

特に腕立て伏せが一番複雑な気持ちになるらしく、部長の尻に敷か  
れる感覚が嬉しい反面普通に腕立てが辛いと釈然としない様子だっ  
た。

自分の気持ちすらわからなくなるくらい疲弊しているって事だろ  
う。今度帰りにラーメンでも奢ってやるとするか。

「そーいや、イツセーの神器の正体ってわかったのか?」

「それが全然なんだよ。龍の手、って神器に似てるらしいけど、それ以  
外まるでわかんないって。一応俺が試した感じ、何かを殴る度に強く  
なっていくイメージなんだけど…それもなんでかムラがあるし、まだつ  
かみ切れてねえんだよ」

「うーむ…ま、強化系に変わりは無いんだし、素の力を上げんのが大  
前提さな。学校まで走るか?」

「…お前、俺は仮にも悪魔だぜ? 戦闘センスとかじゃ悪魔を上回れ  
ても、素の力じゃこつちのが上に決まってるんだろ?」

「おいおいおい、鍛錬後の疲弊しきったお前如きに遅れを取るつもり  
は無いぞ?」

「——っしやあ!! やってやろうじゃねえかこの野郎! 勝ったらお前名  
義でエロDVD借りまくってやつからな! そして松田と元浜の二人  
に「輪廻が良いもん仕入れてきたぞ」って教室のど真ん中で言ってや  
る!」

「じゃあお前負けたら三日間エロ関係全部禁止」

「強すぎるクロスカウンター!?! 三日間おっぱいって言うのも含め全部  
禁止ってキツすぎんだけど!?! 俺のアイデンティティは!?!」

「なんだ、逃げるのか? それもそれでいいが、今のこの登校中の女子た  
ちが見ている所で俺に勝ちや、お前も一躍モテ男子にランクアップだ  
と思うがな」

「やったるぞコラア!! よーいドンツ!! 一抜け貰いだあああああつ  
!!」

会話の流れでイツセーと学校まで競争する事になった。

しかし焚きつけ過ぎたせいか、アイツは俺の準備が終わるよりも早く駆け出してしまった。

だがやはり疲れがたまっているのか、速度はそれほどでもない。これなら全然追いつけるな。

「アーシア、ちよつと失礼すんぞ」

「えっ？——ええっ!!？」

俺達の都合でアーシアを一人にするのも忍びないので、お姫様抱っこして走る事にした。

負ぶつても良かったが、それだと彼女が「高校生にもなっておんぶなんて…」と思われてしまう可能性もあったので、別にこの歳でも違和感のない（完全にはないわけではない）こちらを選んだ方が良いと判断したので。

これでもまだ、負ける気しねえな。

すっかりつかまってろよ、とアーシアに一言告げ、俺はイツセーを追い抜こうと走り出した。

勿論、この戦いを制したのは俺だ。

アイツはアーシアを抱えていたのに自分に勝つなんて、と凄くシヨックを受けていた。

…この悔しさを糧に強くなりたまえ。

俺だって原作のお前の強さを知って、その強さに憧れてここまで強くなっただんだけさ。

※——

時間は流れ昼飯時。

黒歌に言われていた通り、皆の前…と言ってもいつも一緒に飯食ってる変態三人＋アーシア＋桐生藍華の五人の前で、俺は弁当箱を開いた。

因みに桐生藍華は俺達相手に普通に接してくる稀有な女子で、橙色の髪を三つ編みにしているメガネっ子である。

顔立ちも美人だし、黙ってりや大人しい文学少女や清楚な学級委員長にも見えるのだが、会話レベルは俺達と同等である。

だからこそこうして仲良くしてくれてんのかね。

——と、今大事なのはそこじゃない。

黒歌が、俺の弁当にとんでもない爆弾を仕込んでいたのだ。その正体がこの、『輪廻♡黒歌』の桜でんぶと海苔で米の上に書かれた文字である。

周りには丸く切ったチーズの上に海苔でハートマークが書かれてあるモノが敷き詰められていたり、それはもうまさに愛妻弁当だった。

そんな事を露ほども知らずに「今日の弁当、力作らしいんだよな」と言ってコイツ等に見せてしまったのだが、まあ反応の酷い事。

変態三人組は言わずもがな。「コレは一体どういう事だコラアツ!! 黒歌って誰だ貴様アツ!!」と同時に口角泡を飛ばす。

アーシアは「学校に着くまでのお楽しみって……だ、騙されましたあ!」となんだか嘆いている様子。

因みに桐生の方は「う、うわー。流石にないわー」とか言っただけで引いてた。

まあ普通は引くだろう。ここまでハートマークが敷き詰められていては流石に及び腰になってしまう。

だが俺も馬鹿なのか浅はかなのか、これでも嬉しいと思えてしまう。

——ほんつと、俺も大概だよなあ。

『(…これを喜べるならもういいだろう。何を躊躇ってる)』

(あ、あのなあ。知的生命体の恋愛ってのはそう「好きです!」「私も!」ってなるようなもんじゃないんだよ。もしかしたら好意に見えるコレは、別の感情かもしれない…って一步引いて考えるのが肝心かなめで)

『(…まあ、言い訳するのは勝手だが。他の男に取られて自棄を起さすなよ?過去に同じような目に遭った相棒がいたが、そのシヨツクのあまり『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』を発動して己が愛した女も家族も友人も、その

故郷すらも破壊しつくした事があったからな。躊躇いも大事かもしれないが、一步進む勇氣もまた必要なんだぞ、相棒』

(…それもそう、なんだけどさ)

おかずの方を口に運ぶ。

手作りのから揚げだ。よく朝に作ってくれたと思う。

勿論味は凄く良い。くど過ぎず、されどパサパサしすぎない絶妙な油の量。

黒歌は将来いい嫁になれる。

——そして願わくば、嫁入り先は——なーんて。

「いや、お前一人で納得して飯食ってんじゃねえ説明しろコラアツ!!」  
「アーシアちゃん以外とも同棲中とは許せん! 貴様この現代日本でハーレムを作る気か!？」

喚き散らす馬鹿二人を肴に飲む清涼飲料は、中々どうして美味かった。

他人の不幸は蜜の味。これまたいい日本語を作った物である。

因みにこの二人とイツセーがあまりに騒ぐせいで他の生徒が俺の弁当の中身を見に来てしまい、ちよつとした騒動に発展したのだが、その話は割愛させてもらう。

※——

そして現在は夜。

アーシアの悪魔としての仕事も終わり、今はみんな一階に集まっているのんびりしている。

いつもはドライグと父さんが酒を飲み交わしているが、俺が赤龍帝であると知らないアーシアの前でドライグを出すわけにも行かないので、しばらくの間は禁酒だ。

『(う、うおおおん!! せっかく純米大吟醸が買ってあったのにいいいい!!)』

(流石に取っておいてくれるだろ。いつまでお前の存在を隠すかは未定だが)

嘆くドライグにさらつと止めの一言を告げ、外からとある気配を感じて家を出る。

その気配の正体は、夢幻人だ。

あのシルクハットの男を倒して以来、この町にそいつらの気配を感じることがなくなった。

基本的には夜にその存在を確認できるのだが、なぜだろうか。

毎回何かの準備をしているように見えるのだが……アイツ等倒した後に確認しても、特に何も見つけられねえんだよな。

ドライグに聞いてもわからないって言ってたし。

「よお、良い月だな。曇りで何にも見えねえけど」

「っ、何者だ！」

「見てわからねえか？お前らには顔も名前もバレてるって話だが」

ビルの建設現場に、四人の夢幻人がいた。

全員フード付きのローブに身を包んでいて、その背中には全員ドラゴンを模したマークが描かれている。

夢幻人の下っ端の服装だ。

てつきりあのシルクハットが最底辺かと思っていたが、使い捨ての兵士はこつちの方だったらしい。

この前、捕らえた夢幻人から情報を聞き出してみた所、あのシルクハットの男の立場はこの下っ端の統率者程度だったとのこと。

下から二番目だし、あんまり大差ないか。

「貴様、立神輪廻……赤龍帝か！」

「その通り。テメエらが何をしようとしているかは知らんが、少なくとも俺やこの町の連中にとっていい事ではねえだろ？だから邪魔しに来たぜ」

『Boost!』

『禁酒のストレス、ここで晴らさせてもらおうか！』

右手にブーステッド・ギアを展開し、早速倍加。

禁手は使わない。そもそもこの下っ端相手ならブーステッド・ギアそのものが必要ない。

ただドライグ本人が言っていた通り、コイツのストレス発散も兼ねているのだ。ここ最近滅多に使ってないし、いい機会である。

俺の基本スタンスは敵対者には容赦しない。

俺を殺そうとしてきているのだから、殺されても文句は言えないという物である。

相手は『気』で読み取るに人間一人悪魔二人墮天使一人。

本当に色々な種族から恨まれてるんだなあ俺。一度たりともグレートレッドには喧嘩吹っ掛けてないんだけど。

『禁手』すら使わないとはなめられたものだな。だが我らはそう易々とはやられんぞ？何せこちらにも、神器持ちがいるのだからな！』

悪魔がそういうと、人間の男が右手を俺につきだした。

そしてその手から、何か鎖のような物がこちらに向かって飛んでくる。

神器というくらいだしわざと受けるのはダメだろうと回避するが、その鎖は不自然な動きをして俺を追跡してきた。

少々驚いた俺に、所有者の男は調子に乗ってか神器の説明を始めた。

「俺の神器、『捕縛の鎖』マダー・スネークは一度狙いを定めた相手を蛇のような柔軟さと狡猾さで必ずとらえる！そしてとらえた相手の生命力を奪い取り、死に至らしめるんだ!!最強と呼ばれる赤龍帝だろうが、この鎖から逃れる事も、捕まってから脱出する事も、どっちも不可能!!ほらほら逃げてみるよ!隙を見せたらコイツが脇腹に噛みつくぞ!!」

「説明どうも。——んじゃ、全員殺すわ」

『Boost!』

現在四回目のブーストを行い、能力が全体的にかなり向上した事を確認して、まずは何らかの設置を行っている様子の堕天使に一瞬で肉薄。

そのまま倍加に加え『気』で強化した拳を、容赦なく顔面に振るう。ぐしやつ、と肉がつぶれる音を立てて死んだ堕天使の男の体を掴み、俺を追ってきている鎖に放り投げる。

すぐそこまで迫っていたはずの鎖は、その死体を避けるために大きく移動し、俺から距離を取った。

よし、狙い通り。

んじゃ次は、悪魔の方を——。

「おおっと、そうはいかないんだよなあ!」

「——チツ、黙ってた方は転生悪魔かよ」

「その通り!神器持ちはアイツだけじゃねえ、コイツもなんだよ!」

墮天使の男と同じように顔を潰そうと拳を振るうが、その拳は何か見えない壁に阻まれ届かない。

並の魔力障壁なら既に破壊できるくらいには強化されているはずだし、これはきつと神器だろう。

しかし防御系か。ただの神器だったらドライグの力で真正面からぶつ壊せるが、万が一コイツが神滅具だった場合は時間をロスするだけになるかもしれん。

『Boost!』

「ほらほら立ち止まっていいのか? 『捕縛の鎖』マードラー・スネークはお前のすぐそばだぞー!」

「言われなくてもわかつちやいるが……いい加減鬱陶しいな」

わざわざ躲すのも面倒になって来たので、力押しに路線変更。

迫り来る鎖を避けることなく手で掴み、一瞬で何百回とブーストして破壊した。

「は、はあつ!?ど、どういう事だよオイ!!俺の、俺の『捕縛の鎖』がなんで砕かれてんだよ!?!」

「ブーステッド・ギアの能力を知らねえわけじゃねえだろ。力を倍加させて壊したんだよ、普通に」

「そ、それこそあり得ねえ!だってお前の神器は、『禁手』しない限り十秒に一回しか倍加できないはず……!」

「おいおい、俺が『時間を操る』って話、聞いてねえのか?」

「……は?いや、まさか……!!」

愕然とした表情を見せる男達。

そう。俺は今の一瞬の間に、朝のトレーニングの時に発動したような自分の生きる時間の流れだけを遅くさせる状態になり、その上で自身自身の時間を加速してブーストを行ったのだ。

こういう『禁手』を使うには狭い空間とかで良く使うんだよな、この方法。

……っつーか、ブーステッド・ギアってやっぱ破格の性能過ぎるよな。

並の神器なら倍加して壊せるとか。流星は二天龍の一角。

最近アル中気味だけど。

「その壁も、もう壊せるくらいにはなってるはずだぜ。降参するつてんなら命までは取らねえよ。代わりに情報を貰うがな」

「…はんつ、命？そんなモノ、悲願の達成の前には何の価値もないな」  
「ああ、そう。じゃあさよならだ悪魔たち。そして人間」

『氣』を圧縮し、砲弾として放つ。

悪魔たちと俺を隔てていた壁を貫通し、『氣』の砲弾は三人を跡形も無く消失させた。

『Release』

「ふいー。久しぶりに戦闘中にブーステッド・ギア使ったり時間操作したせいで、なんかどつと疲れたわ」

『ここ最近』は『氣』での強化で事足りるのが多かったからな。それにこんな狭い場所で俺の力を使ったんだ、そのせいで余計に疲れたろ』

「だなー。ま、相手さんは戦う場所なんざ選んでくれねえのさ。——帰ったら風呂までちよつと寝るか。気疲れしたわ」

そう呟き、家に戻る。

出迎えてくれたアーシアと黒歌に風呂が沸いたら起こしてくれと告げて、自室のベッドへ一直線。

倍加と、上昇した力が一気に抜けていく感覚。

久しぶりのその感覚に、かなり疲れた。

明日からは倍加と解除の感覚になれる特訓もしなくちやな、と考えながら、俺は一度眠りにつくのだった。

※——

『(相棒。客が来たぞ)』

「……ん、ああ……？客？」

ドライグに起こされ、目を覚ます。

まだ眠りについてから少ししか経っていないはずだ。というか時計を見ると二十分も経っていない事がわかる。

しかし、客。一体誰が来たのだろうか。

誰だろうとこの時間帯に来るのはちよいと非常識だと思うが。

そんな事を考えながらのそのそと体を起こして、ようやく気づい

た。

部屋が何故か明るい。電気は勿論つけていない。

輝きの中心は、部屋の床。

見るからに魔法陣が輝いている所だった。

「は？魔法陣？」

マヌケな声を出しつつも、魔法陣を読み解く。

眠気はすっかり吹っ飛んでしまった。

で、この魔法陣……グレモリー？

俺が脳内で魔法陣の正体を看破すると同時、光がさらに強くなる。

そして一瞬視界が光に埋め尽くされた後、そこには何故か部長が現れていた。

神妙な面持ちで、俺を見つめている。

なんだろう。言いようも無く嫌な予感がする。

なんだっけ、原作でもイツセーがこんな状況に直面していたような。

こういう時に、あまり記憶が定かではない自分が恨めしい。

でも何百年間も過去に読んだ物語の内容を覚えていられるヤツなんて絶対いないと思う。

「…ええと、部長？何か御用で？」

「いきなりだけど輪廻。お願いがあるの」

「は、はい？」

どちらかというと思魔である部長の方が、俺の願いを叶える立場だと思っただけども。

そんな冗談を頭の中で考える余裕がある自分にちよつと驚きつつ、俺の方へ近づいてくる部長から少し体を離す。

いやいや、悪魔からのお願いって怖いんですけど。

俺部長から魂よこせとか命よこせとか言われても抗いきれる自信ないぞ。

「——輪廻。私を抱いてちょうだい」

「……は、はあ!？」

## 許嫁は不死系男子

抱いて。それは一体つまりどういう事なんだろうか。

抱きしめれば良いのだろうか。

それとも性行為的な意味で言ったのだろうか。

混乱して固まってしまった俺に、部長はさらに近づきながら服を脱ぎ、下着姿になってこう囁いた。

「私の処女を、貰ってちょうだい」

脳が茹ったかのように錯覚した。

考えてもみて欲しい。俺は童貞だ。いくら現在進行形で想い人がいようとも、何百年という時を生きてきたのだとしても、その思考は一般的な男子高校生同様、常にエロに比重が寄っている。

そんな俺に、突然『駒王学園の二大お姉さま』なんて呼び慕われるような美人が下着姿になって「処女を貰って欲しい」だなんていうって、もうつまりそういう事なんじゃないでしょうか。

特にこの、貰って欲しいってのがベストだ。

基本的にいちやらぶ系が好きな俺としては、奪って欲しいという言葉よりもこの捧げてくれる感が凄く良い。

——って、おいおいおい！冷静になるんだ俺、落ち着くんだけ俺。

この状況、知らない訳じゃないだろ？原作でもあった、あのシーンじゃないか。

だからほら、別に突然俺への好感度がバグってエッチな事させてくれるようになったわけでも、家に侵入してきたサキュバスが夢を見せられてるなんて都合のよすぎる展開が発生しているわけでも無いんだ。

落ち着いて行動しろ、オーケー？

自分で自分に説教するようにしつつ、現実でも深呼吸。

そうそう。部屋が暗いせいで分かりにくい物の、しっかりと見れば部長の肩が震えているのがわかるだろう。

つまり、彼女自身これは本意ではないという訳だ。

——だが解せないな。コレが原作でもあったアレだとするならば、なぜ俺の家に来たのだろう。

…聞いてみるか。

「…えっと、なんで俺なんですか？ イツセーとか、木場とか…アイツ等なら眷属だし同じ悪魔だし、正直俺を選ぶ理由ってないと思うんですけど」

「祐斗は根っからの騎士だから、きつと拒むでしょう？ そしてイツセーは…その、すぐにでも抱いてくれそうではあるけど、なんだか怖いし。その点貴方はイツセーと同じくらいに性欲が強いらしいけど、そこまで押しが強くないっていうか、どちらかと言うと紳士寄りでしょう？」

「俺が紳士、ですか」

この人は一体俺の何を見てきたんだろう。

風呂上がりにはバスタオル一枚で歩く黒歌を見た数年前の記憶を未だにオカズにするような性欲の権化相手に紳士とは、まさに片腹痛い。

評価が高いのは嬉しい事だけでも。

「それで、ダメ？ 私じゃ不満？」

「いえ、部長程の美人を抱けて、しかもそれが初めてだなんて。それこそ身に余る光栄ですよ。——それが普段のあなたなら、ですけど」俺の言葉に部長の表情が、俺を誘うかのように色っぽい物から、強張った物へと変わる。

瞳は震えているし、こりや相当追いつめられていたと見受けられる。

「……気づいていたの？」

「観察眼には自信がある方です。——何か、あったんですか？ いえ、無理に話して欲しいとは思いませんが。ただ悩み事というのは、意外と口にして誰かにぶつけければ楽になれるもんですよ」

俺も実際そうだった。

本来イツセーが持つはずの赤龍帝の力を俺が持ってしまった事に対する、ある種の罪悪感。

ソレをドライブグに全て話した時、そしてソレでも俺を相棒と呼び、俺は俺だと言ってくれた時に、救われたと感じたように。

部長も、自分の今抱えている悩みの種を俺に——もし俺が無理なら他の人にでも、ぶつけてみりや良い。

「そ、それは——いえ、ダメよ。ダメなの。だって私は『王』だから、ですか？」

先んじて答えを当てた俺に、部長は押し黙る。  
まあ、そう言うと思ったよ。

この人は理想に生きる事を第一とする人だ。

貴族らしい優雅な振る舞いを、グレモリー家の名を穢さぬ誇り高い生き方を、そして『王』として弱い姿を見せない強かなあり方を。

そんな理想論を己の現実の目標として掲げつつ、それに反する願いである「ただ一人の少女、リアスとして愛されたい」という欲望を貫く事も夢見ている。

その姿の、なんと人間らしく、悪魔らしい事か。  
強欲。まさしく強欲。

かけ離れた対極の願いを、どちらも現実の物としようとする。  
妥協の一切をせず、他への影響を無視してでも行動へ移す。

それでこそ悪魔だろう。それが人間の姿なのだろう。  
読者の中には、何も知らぬ子供のように理想を全て実現すると声高に叫ぶ彼女を「我がままだ」とか色々非難する者が多いが、俺は彼女はそれでこそリアス・グレモリーなんだろうなと思っている。  
少なくとも嫌いではない。

それに俺が見殺しにしたイツセーの命を救った人だ。

読者時代の感情の有無にかかわらず、困っていたらある程度は手を貸すさ。

「つ……ええ。その通りよ。私は『王』。強かで、弱音を吐かず、決して人前で膝をつくことのない存在。それが『王』なの」

「でもそれは理想論だ。平均的な『王』の話じゃない。悪魔だってきつと、最初っから理想の状態にたどり着いてる存在なんて滅多にいないんですよ。確かに一握り才能に恵まれ尽くした輩は居るでしょうけ

ど、自分がその一握りじゃない事を恥じる必要なんて全くない。――  
―それに部長。俺は人間ですよ？オカルト研究部に籍を置いてはいませんが、ただの人間。部外者なんです。『王』がどうか、悪魔の都合は関係ないんですよ。ここに居るのは、ただリアス・グレモリーっていう先輩が困っている所を見て手を差し伸べたいなんて考えた、おせっかいな後輩なんです。だから、年甲斐も無く泣きわめこうが、癩癩おこして駄々こねようが、問題無いんです」

「あつ……」

部長を隣に座らせ、肩を抱き寄せる。

小さく声を漏らした彼女の瞳を見て、もう一押し必要だろうか、と次の言葉を考える。

しかし、その必要は無かった。というか無くなった。

突然床に魔法陣が輝き、部長が現れた時のように違う人が現れたのだ。

銀髪に、メイド姿。

俺の記憶が確かならば、彼女はグレイファイア。

部長の兄であり魔王の一角を担う、サーゼクスという男の伴侶にして、グレモリー家に仕えるメイドだ。

彼女は俺の方を一瞥すると、部長に向かってどこか呆れたような声音で語り掛けた。

「……こんな事をして、破談に持ち込もうとしたわけですか」

「こうでもしないと、お父様もお兄様も私の意見を聞いてはくれないでしょう？――けど、今はもうそんな事する気も無いし」

「まったく……いくら貴方の貞操は貴方自身の物とは言え、流石にこのようなただの人間に捧げるのはいかがなものかと。もうする気がないというならそれまでですが、もし仮に捧げようものなら、旦那様もサーゼクス様もとてもお悲しみになれますよ」

『(はっはっはっ、ただの人間だと。言われてるぞ相棒)』

(そう笑ってやるなよ。俺が今必死に人畜無害に見えるように偽装してんだから)

仮にも魔王の伴侶だ。俺の存在に意識を向けられるのも困る。

…まあ、魔王の方には既に知られている訳だけど。

俺がドライグと会話している間に、二人の会話も終わったのか、部長はいそいそと服を着て、魔法陣の上に乗った。

「ありがとうね。輪廻。話を聞いてくれるって言われただけで、結構救われたわ。——詳しい話は、明日部室でしましょう」

「輪廻…？ああ、貴方がお噂の」

「えっ、噂？」

部長の言葉にうなずいた俺だが、続くグレイファイアさんの言葉に素っ頓狂な声を出した。

噂ってなんだ、噂って。俺の名前を噂するような連中なんて、それこそ夢幻人みたいな変人集団だけだと思うんだが。

「…いえ。まずは失礼しました。挨拶が遅れてしまい、申し訳ございません。私はグレイファイア。グレモリー家に仕える者です。以後、お見知りおきを」

「あ、いえお気になさらず。——えっと、俺は立神輪廻と申します。一介の男子高校生ながら、リアス・グレモリー嬢とは親しくさせていただいており…」

「別にあなたが堅苦しくする必要は無いわよ」

苦笑交じりの部長の言葉に、俺は少しホッとした。

敬語に自信が無いのは勿論の事だけど、実際にそう言うのに厳しそうな人（メイドとか執事とか面接官とか）の前で敬語やそう言ったマナー的な物を披露するのが緊張するタイプなんだよな。俺って。

「…えっと、じゃあさつき言っていた噂というのは？」

「人の身でありながら、上級に匹敵するような中級悪魔の討伐。はぐれ堕天使の無力化とエクソシストの集団の鎮圧を、無力な少女を守りながら行った事。他にもいくつか貴方の武勇は報告されています。他ならぬお嬢様によって」

何俺の事報告しちゃってんの？と部長を見ると、なんだか居心地悪そうに頬を掻いて、目を逸らしていた。

おいおいおい、俺はその場にいなかった体で話してくれといったはずでは？

まあ、話されちまったもんはしょうがない。

絶対サーゼクスあたりがなんかやらかしてそうとかやらかしただけ、それは後になって考えれば良いだけだ。

「聞けば聖なる力を扱うのに、悪魔であるお嬢様方と友好関係を築いているとか」

「ええ、まあ。俺の方も良くしてもらってますね、はい」

「……そろそろ良いでしょう？元々私に話があつて来たんでしょう？続きは私の根城で聞かし、話すわ。朱乃も同伴で良いわよね？」

『雷の巫女』ですか。私は構いませんよ。上級悪魔たるもの、『女王』を常に傍らに控えさせるのは当然ですのぞ」

「よろしい。——それじゃあね、輪廻。ちゃんと明日、全部話すから。いつも通りの時間に部室に来てちょうだい」

そう言つて、一度俺に近づいて頬にキスをして、そのまま去つていった。

びつくりして固まった俺に一礼して、グレイフィアさんも去つていく。

後に残されたのは、部長のキスに未だに動揺しっぱなしの、現役童貞の俺だけだった。

「輪廻さーん、お風呂湧きましたよー！」

「あ、ああ、うん！今行く！」

※——

そんな事があつた翌日。

言われた通り、いつも通りの時間に部室に向かう。

隣を歩くアシアは気づいていないが、旧校舎から露骨に威圧感というか、物々しい雰囲気を感じる。

グレイフィアさんの『気』もあるし、きっとそのせいだろう。

木場もイツセイも既に部室入りしている頃だし、さつさと中へ入る。

するとそこには険しい表情をしている部長と、なんだか笑みに凄みを感じる朱乃さん（部活仲間なんだから他人行儀は無しとのこと）いつもの爽やかな笑みがちよつと引き攣り気味の木場に、居心地悪そう

に何度も座る姿勢を直す素振りを見せるイツセー、そしていつもと変わらぬ無表情な小猫がいた。

いつもと変わらぬと言っても、勿論雰囲気はこの空間にあった重々しい物だったが、俺が来たのを見た途端、ソファを一度離れて、そこに座るようにと手で促してきた。

後はいつも通りだ。

そこに座ったと同時に、小猫が俺の膝の上に陣取り、ソレに頬を膨らませたアシアが俺の右腕か左腕、どちらかを抱き寄せる。

いつもと違ってグレイフィアさんまでいるというのに、なんと平常運転な奴らだ。

そんなところも癒されるのだが。

「……立神輪廻様。失礼なのですが、その……いつも、そのような事を？」

「ここ最近はどうですね。それが何か？」

「——いえ、特には」

嘘つけ。その間は明らかに何か言いたい事がある時の間だろ。

言わないけど。一々指摘する方が面倒ごとになりそうだし。

「ん、んんっ。これで、全員揃ったわね」

咳払いをして、部長が話し始める。

部活動開始前のルーティンワークのようなものだ。こうして部長からの一言を聞いて、俺達の部活動は始まると言っても過言ではない。

しかし、今日は部長の一言を聞けないようだ。

部室の魔法陣が突然光り輝き、そしてその模様が違うものへ……フェニックス家の物へと変化したのだ。

「フェニックス？」

「……お詳しいのですね」

「まあ、人並みには」

グレイフィアさんのお世辞に定型句で返した所で、突然魔法陣から炎が噴き出した。

炎はかなりの規模だが、しかし部室の中の物に一切火が飛び移らな

い。

なるほど、これも演出か。

そしてしばらく火柱が立っていたただけだったが、中から男の影が見えるようになった。

その影が手を手刀のようにして振るう素振りを見せると、まるでその手に斬り裂かれたかのように火柱が開き、そして炎は霧散していった。

後には金髪オールバックに、着崩した赤いスーツと言った、ホストのような風貌の男だけが残っていた。

どこか悪童のような雰囲気を感じさせるワイルド系の顔立ちは、多数の女から黄色い声援が飛んでくるであろうこと間違いなしと言える。

——ライザー・フェニックス。

純血悪魔の一族、フェニックス家の三男。

「ふう、人間界に来るのは久しぶりだな。相変わらず息が詰まるぜ。けど、これもお前に会うためだと思えば途端に何てこと無く思えてくるんだから、不思議なもんだよなあ？愛しのリアス」

普通に生きていればまず聞くことのないだろう気障ったい発言に、全員が眉を顰める。

特に名前を呼ばれた部長と、この世全てのイケメンは敵と断言するイツセーはそれが顕著だった。

「さて、式場を見に行こう。日取りはもう決めてあるんだ。早めがいんでな」

「……その手を放しなさい、ライザー」

馴れ馴れしく部長の手を掴んだライザー。

直ぐにその手を振り払われ、絶対零度の瞳を向けられるが、しかし余裕そうな笑みは消えない。

寧ろ、その顔は愉快そうで、まるで「手なずけられない我儘な動物をどう手なずけるか」と遊び感覚でとらえているように見えた。

というか、実際にそうなんだろう。

コイツは多分、そういうヤツだ。

「おい、アンタ。部長に対して無礼なんじゃねえか？つか女の子にその態度はどうなんだよ」

そしてそんなライザーに耐え切れなくなったのか、イツセーが立ちあがり苦言を呈する。

あんなことを言われたライザーの方はと言うと、これまた不機嫌そうにイツセーを一瞥して一言。

「あ？誰お前？」

「俺は兵藤一誠。リアス・グレモリー様の眷属悪魔、『ポーン兵士』の兵藤一誠だ！」

「ふーん、あつそ」

力強く自己紹介したイツセーだったが、まるで相手にされていない。

素っ気ない返事とも呼べないような返事をされ、イツセーはさらにムカついたようだ。

「つーか！アンタこそ誰なんだよ！」

「……ん？え、もしかしてリアス、俺の事下僕に話してねえの？いや話してねえにしても俺の事知らねえって中々だろ。転生悪魔にしたつてよ」

「ええ。話す必要もないもの」

「おおつと、こりや手厳しい」

軽薄そうな笑みを絶やささない物の、少し目元が引き彎つたように見える。

それは果たしてあまりに冷たくされ過ぎてショックなのか、はたまと思いつりに行かない事に対してストレスが溜まり始めているのか。

恐らくは、両方だろう。

さて、イツセーにもしつかりと説明してやるかな。

俺が知っていてもおかしくない程度……冥界の常識に多少通じていればわかる程度の範囲で。

「イツセー。その人はライザー・フェニックス。部長と同じ純血の悪魔で、フェニックス家の三男坊だ」

「フェニックス？フェニックスって悪魔なの？鳥じゃ無くて？」



思う。

けど、今の部長は明らかに嫌がつてる。

この許嫁云々も、きつと親かなんかが勝手に決めたことなんだろう。

だとしたら許せねえ！そもそも部長とのスキンシップが許されてんのは俺達眷属だけなんだよ！

今までであったスキンシップなんて頭を撫でられるくらいだけど！

…で、朱乃さんもライザーは嫌いなのか、いつものような温和な雰囲気はどこへやら、随分と冷たい表情をしている。

いや、笑顔なのは変わらないんだけどさ、なんだろう、うすら寒いというか。

「いい加減にしてちょうだい！」

しばらくの間されるがままだった部長が、ついに声を荒げた。

しかしそれでもライザーの余裕そうな笑みは変わらない。

それが余計に俺と部長に苛立ちを募らせる。

くうっ、殴つてでも部長から引き離させられない自分の立場が悔しいッ！

「何度も言ったはずよ！私は貴方と結婚するつもりなんて無いわ！」

「ああ、それは以前に聞いたさ。けどなりアス。君の所の御家事情が切羽詰まっているのも事実だろう？君のお父様もサーゼクス様も、御家断絶を恐れてる。大学に行くのも、下僕をどう扱うのかも自由にしてもらってるんだから、せめてこれくらい妥協したらどうだよ？」

御家事情？断絶？

途端に話のスケールがデカくなってないか？

許嫁云々の時から貴族的な会話だとは思ってたけど、両親がなんだとか言われると本当に俺、口の出しようがなくなりました？

あとサーゼクス様って誰？

混乱する俺を無視して、二人の話は進んでいく。

部長側の話を俺が理解できる程度に噛み砕くと「確かに部長の家は現在断絶寸前で、婿養子を迎え入れなくてはならない状態。しかし部長はライザーと結婚するつもりはさらさらなく、自分で心に決めた相

手と添い遂げたい」とのこと。

別に結婚しなきゃいけないなら好きな相手ができたらいいんじゃないの？って俺も思うけど、話はそう簡単な物じゃないらしく。ここで、さつき輪廻が話してた「純血悪魔」ってのが出てくるんだそう。

ライザー曰く「同じ純血悪魔同士、つまり部長とライザーの婚約でなければいけない。そもそもこの話は両家の当主が合意している縁談な為、ソレを個人の事情で破棄されては面子が立たない。もし仮に抵抗を続けるならばこちらも多少強引な手段を選ぶ必要が出てくる」だそう。

今まで余裕ある表情をしていたライザーが、ついに部長に苛立ち始めた。

そして最後の脅すような一言と共に、俺達に向かって炎を放つて――。

「完全部外者の俺が口を出すのは良くないでしょうけど、流石にそれはやりすぎだと思えますが？」

「ふん。寸止めにするつもりではあったさ。――だが解せないな。お前ただの人間か？俺の炎は手加減したとはいえ、ソレを消すなんて」

「良い事教えてあげますよ。人間ってのは誰かを守る為ならいくらでも強くなれるんです」

「けっ、かっこつけやがって……」

勢いよく俺達の方へ向かってきた炎が、何か赤いオーラのような物に握りつぶされるように消えた。

それと同時に、今まで黙って眺めていた輪廻から途轍もない威圧感を感じる。

恐らく、あの赤いオーラは輪廻の物だ。

いやいや。誰かを守るためなら強くなれるって言っても限度があるだろ!?

明らかに今の炎、軽くかき消せるもんじゃ無かったと思うんだけど!?

「つてか普通の人間にこんな目に見えるオーラとか出せる訳ねえじゃん!!」

「しかも小猫ちゃんとかアーシアとか、見るからに照れてるし! 守られて嬉しいんだろうな、発言も込みで!」

「輪廻の言葉により一層不機嫌さを際立たせてるライザー。」

「俺達を下に見ている雰囲気は変わらないはずだが、なぜか湯呑を持つ手は若干震えていた。」

「: そりゃ、俺も直接向けられてるわけでもねえのに震えちまうくらい強大なオーラを向けられちゃ、流石の上級悪魔と言えどビビるか。輪廻の話が本当なら、実力はライザー以上らしいし。」

「最上級悪魔レベルの人間って、マジでなんなんだろうな。」

「つてか俺の親友はいつからそんな人外レベルに至ってたんだ?」

「——立神輪廻さま」

「わかってますよ。俺だって荒事にしたいわけじゃない。何より俺はあくまでただの人間ですしね。この場で何か口出しする方がおかしいとは、わきまえていますとも。——ですがライザー殿。これだけは留意しておいていただきたい。部長……グレモリー嬢含め彼女の眷属は全員俺にとって大切な存在。もし傷つけるといふなら、俺は容赦しない。上級悪魔だか純血悪魔だか何だか知らないが、その場で消滅させる」

「こ、怖ええええええつ!! 空気が確実に重いし、家具とかがミシミシいってるよコレ!」

「圧が本当に現実の物になるって、マジでなんなんだコイツ!」

「今までにない位の威圧感をまき散らす輪廻に、ライザーはもの言いたげな目をしているモノの、素直に頷いた。」

「グレイファイアさんの方は小さくため息をついている。」

「きつと、「わかってないじゃん」とか思ってるんだろうな。流石にそこまでフランクじゃないとは思っけど。」

「——話を戻しましょうか。このように話し合いで解決できないだろうという事は、両家とも予想済みでしたので、最後の手段としてある提案がなされております」

「提案？」

「はい。それは、お嬢様とライザー様で『レーティングゲーム』を行うという物です。ゲームでもしお嬢様が勝利なさった場合はこの話は破棄。なかつたものとしませう。代わりにお嬢様が敗北されれば」

「俺とすぐさま結婚つて訳か。良いじゃないかリアス。非公式戦とは言え『レーティングゲーム』で決着をつければ、俺もお前も文句ないだろう？それに、こういう荒事の方がお互い好きだしな」

「…貴方と意見が合うのは癪だけど、いいわ。『レーティングゲーム』で決着をつけようじゃないの」

「どうやら話はまとまつたらしい。」

部長もライザーも、さつきまでの険悪なムードを脱した様子だ。

輪廻の方も、茶を飲んでまつたりしている。

「…コイツさらつと朱乃さんに茶淹れてもらいやがつて…：あんだけ俺達ビビらせといてよ。」

厳密にはビビってたのは俺と木場とライザーの男性陣で、女性陣はなんだかんだときめいてる風だったけど。

「いやいや待て！さらつと部長と朱乃さんまで毒牙にかかってないか!？」

「決まりですな。——では、詳しい日程は後程お伝えいたします」

グレイフィアさんの言葉に、二人とも頷く。

「しかしレーティングゲームか。」

確か、チェスの要素を絡めた総力戦みたいなモンだっけ。たまにルールの都合上勝ち抜き戦になったりするらしいけど。

『兵士』『騎士』『僧侶』『戦車』『女王』の眷属と、主である『王』が、専用のフィールドで戦うというのが基本。

『王』が取られればどれだけ相手の眷属を倒していようと問答無用で敗北と、チェスらしい部分もありながら、そのフィールドによって立ち回りや定石が変わったりと奥が深いゲームだと、前に皆から教えてもらった。

部長はまだ成人していないから公式戦には出られないらしいけど、非公式戦な戦いは別だ。

そしてその非公式戦つてのは、基本的に家族間の争いや今みたいに許嫁云々の問題を解決するのに行われるらしい。

——ま、俺が考える事はただ一つ。アイツの眷属を倒して倒しまくって、ライザー本人もブツ倒す事だけだ。

細かい指示は、部長がしてくれるし。

司令塔が『王』の基本的な立場らしいしな。

「しかしリアス。そそのかすような言い方をしておいてアレだが、君は本当に俺と戦うのか？こっちは公式戦の経験もあるし、その殆どが勝ち星だ。今ならまだなかつた事にしても」

「冗談言わないでちょうだい。いくら貴方に実績があろうと、私には関係ないわ」

「随分と自信満々なようだが……失礼だけど、君の下僕たちじや俺の可愛い下僕たちには遠く及ばないと思うぜ？良くて君の『女王』である『雷の巫女』が食らいつけるか。——その人間は、君の下僕じや無いようだし」

随分な物言いだが、それでも輪廻の事はなんだか恐れてる様子だった。

いやまあ、アイツだけこの場で規格外枠だよな。俺なんて味方してもらってるはずなのに怖えもん。

「因みに、これが俺の下僕たちさ。——おいで、可愛い下僕ちゃんたち」

ライザーが指を鳴らすと床の魔法陣が輝いて、一気に複数の人影が現れた。

その数、十五人。

全員が眷属つて事は、フルメンバー揃ってるって事だ。

俺みたいな例外は居ないらしいけど。

——つてえ!!なんだこりゃ!?

「ぜ、全員……女……ッ!」

「ああ。その通りさ。これが俺の可愛い下僕たち。全部の駒が埋まっているのさ。——で、リアス。なんで君の下僕くんは号泣しているんだい？」

「……その子の夢、ハーレムなのよ。だからきつとあなたがうらやましいんじゃないかしら」

溜息混じりに、額を押さえながらそう話す部長。

呆れられてしまった。

こんな欲望に忠実な下僕でごめんなさい！

それでもこの、男の夢をかなえている姿を見ると、どうしても涙が止まりませんっ！

そんな俺に、ライザーの眷属の子達は「気持ち悪いーい」だの「きもーい」だの好き放題言ってくる。

やめろよ！余計に涙がこぼれちゃうだろ！

「つていうか！部長をそんなハーレム野郎に渡せるわけねえだろ!!」

「英雄色を好むって言うだろ？俺くらいになると、一人の女熱心に愛するだけじゃ足りないのさ。——まあ、君には一生わからないだろうけどね。下僕くん？」

そういうとライザーは、近くに居た自分の眷属の子を抱きよせ、見せつけるようにディープキスを始めた。

な、なんだコイツ！仮にも部長と結婚するっていうなら、そんな見せつけるような真似してんじゃねえ！羨ましいぞこの野郎!!

恍惚とした表情や、自分もして欲しいと言いたげな顔をするライザーの眷属の子達と対照的に、部長たちは嫌悪感を滲ませた顔をしていた。

グレイファイアさんも、表情はあまり変わっていない物の眉が少し寄っていた。

多分、不機嫌なんだろうな。

因みに輪廻は、今度はあまり怒っている様子でも何でもなかった。あくまで俺達に手を出されたらキレるって事だろう。

ライザーもそれが分かったからか、少し緊張感が薄まった様子だった。

踏んだら不味い特大の地雷でも、見えてりや恐怖も薄まるってもんだろう。

「お前じゃこんな事、一生できまーい」

「んなつてメエソレを言ったら戦争だろうが!!——くそつ、イケメンだっただけでもいけすかねえのに、部長に言い寄っておきながらその狼藉!レーティングゲームとか関係ねえ、ここで全員俺がブツ倒す!!」

堪忍袋の緒が切れる音が、確かに聞こえた。

俺は神器を纏い、足元を壊さない程度に三度ほど殴りつけ、ライザーに向かって一直線に駆け出す。

なんだかいつもよりも力が入っていない気がするけど、これでも大丈夫だろ!

格上上等。俺の攻撃は当たれば当たる程強くなるんだよツ!!俺が拳を振り上げるも、しかしライザーは嘆息するばかり。

まるで呆れて物も言えないと言われているようで、俺はさらにイライラする。

この種まき焼き鳥野郎ツ、墮天使を倒した俺の拳を喰らって逃げ帰りやがれツ!!

「やめとけ馬鹿」

「ぐええっ!?!」

突然俺の真横に移動して、首根っこ掴んできた輪廻。

だいぶ距離があつたはずなのに、いつの間にか?という疑問を抱いたが、今はそれよりも。

「な、何しやがんだ輪廻!」

「お前が考えも無しに突っ込むから止めたんだろうが。神器使えるようになって調子に乗ってるか何なんなのか知らんが、せめて実力差くらい理解しろ」

「じ、実力差って…」

「ははっ、その人間のがよっほどわかってるようだな。その通りだよ下僕くん。お前じゃ俺は愚か、下僕たちの一人にすら勝てないさ」挑発してくるように話すライザーだが、これは多分違う。

本気で俺じゃあ誰にも勝てないと思って、言っつてやがる。

「ふざけんな!んなモン、やってみなきやわかんねえじゃねえか!」

「それでもない。——じゃあイツセー。さつきお前が拳を振りかぶっ

た時、誰が何をしていたかわかったか？」

「何をつて……そりや、ライザーが溜息ついた程度じゃねえの？」

俺の返事に、輪廻はそれはもう大きくため息を吐いた。

な、なんだよ。事実アイツの眷属は何もしてなかったじゃねえか。

「馬鹿。そのライザーの妹以外、全員身構えてたぞ。うち数人…魔法を使うヤツは、すぐにでも撃てるようにしてた」

「は、はあ？そんな訳」

「その通りだぜ、下僕くん。俺の下僕たちは優秀なんぞな。俺に危機が迫れば、すぐに対応する。そちの人間の方が、本当に良くわかつてるじゃないか。——だがなんでレイヴエルが俺の妹だつて気づいた？」

「別に。ただ顔立ちとか雰囲気似ていたので。悪魔は見た目の年齢を変えられると言いますし、確実に妹だとは思っていませんでしたよ」

そ、そうだったのか……全然わかんなかった。

ですご過ぎねえか輪廻。なんでそんなわかるんだよ。

——つて、妹お!?

「い、妹までハーレムに加えてやがるのか teme!!」

「あー。そうそう。別に手は出して無いし、形だけ眷属だけどな？ほら、妹萌つてのが世間一般にあるらしいし、せつかくなら入れとくかって」

「そ、そんな軽いノリで……!!」

ますますコイツが許せねえ！今すぐにもぶん殴つてやりてえ！

……けど、輪廻の話聞いてちよつと冷静になった。

今の俺じゃ、コイツは愚か眷属の方にも勝てねえ。

だつて、構えていたかどうかすらわかんねえんだもん。実際に戦つたら気づかない間にやられちやいそうだ。

「ま、神器があるからつて驕ったな。何度だつていうが、お前じゃ俺達には勝てないよ。——さて、そろそろ帰るとしようか。またなりアス。次に会う時はゲーム会場で」

「ええ。必ず勝つわ」

「はははっ、その勝気な顔が俺からの愛を求める蕩けきった顔になるのが楽しみだよ。じゃあな」

そう言うと、ライザーは魔法陣を光らせて、眷属たちと共に消えていった。

後に残ったのは、悔しそうな顔をしている俺含む部長の眷属たちと、まるで表情の変わっていない輪廻とグレイフィアさんだけだった。

そして今日の夜、俺達のレーティングゲームが行われるのは十日後と知らされた。

十日。長いようで短い、俺はやれるだけやるだけだ。

待ってるライザー！テメエのその顔、人前に晒せないくらいボコボコにしてやるからな！！

## 男の語らい

ライザーとの試合を控えた部長たちは、原作同様に彼女の所持する別荘に泊まって修行を行う事にしたそうぞ。

で、黒歌と俺もそこに呼ばれ、指南をして欲しいと頼まれた。

黒歌はともかく、俺はただの人間（という体）なんだけど、それでも良いのだろうか。

まあ、アーシアが「輪廻さんも一緒に良いです」と頼んできたことだし、断る理由も無いんだけど。

「はあっ、はあーっ……む、無理だつて……これは、流石にキツイ!!」  
「おい何言つてんだよイツセー。ハーレム作るんだろ？つまり女の子を複数人抱きかかえる事だつてあるわけだ。それなのに、たかだか複数の荷物を背負っている程度でひいひい言つてちゃ世話ねえぞ」

「そ、そんな余裕なら変わってくれませんかねえ!!……いや、でもいいや。お前のがなんかキツそう」

「ちよつとそれ、どういう意味よ」

「女子に『重い』は禁句だと知らんのかお前は」

「いやいやいや！流石にそれは見た目に重そうだつて！どういう状況だよそれ!!」

はて、どういう状況、とは。

別に俺は背中にアーシアを負ぶつて、黒歌をお姫様抱っこして、俺を含めた三人分の荷物を頭の上に乗せて落とさないようにバランスを取りつつ歩いているだけだが。

いや、確かに見た目凄いいけど、意外と難しくないんだよな。

カバンの中身が詰まってるからか、バランスが崩れにくいんだよ。

「カバンつて、意外とバランスとりやすいんだぜ」

「そこじゃねえよこの無自覚ハーレム野郎！前後に美人侍らせやがつてこの野郎!!その癖全然辛そうな顔してねえのがいつそ不気味なんだけど!？」

「はははっ、良い事教えてやるぜイツセー。かわいい子は羽毛布団よりも軽いんだよ」

「仮に軽いとしてもどうやっておんぶしながらお姫様抱っこまでやってんだよ…!?!」

「どうやってと言われましても。」

普通にアーシアの足を押さえるようにしつつ前に腕を出して、そこで黒歌を抱えているだけだ。

確かに腕の長さが若干足りないせいで黒歌の密着度合いが凄いとになっているが、誤差だよ誤差。

「ほらほら叫ぶ余裕があるならさっさと先行こうぜ。時間は有限なんだ。ここで費やしてどーするよ。——んじゃ、俺はこっから走るわ。遅れんなよー」

「ち、畜生オおおおっ!!」

イツセーの叫びを背後に聞きながら、俺は坂道を駆け上がるのだった。

※——

到着して数分後。

イツセーが木場の冗談（僕の着替え覗かないでね発言）に割と本気でキレたりした後、全員が着替えて外に出た。

周囲を山に囲まれたいい場所だ。将来はこういう別荘を買ってみたい。

「それで、俺はどうすれば?」

「そうね……基本的に、イツセーと祐斗、そして小猫の修行についてあげて。やり方は貴方に任せるわ」

「了解つと……え、でも小猫も俺なんです? 仙術の指導とかするなら黒歌のが適任なんじゃ」

「その事にゃんだけど、白音はまだそのレベルに至っていないのにゃ」「至ってない?」

「そう。肉体のレベルが、悪魔の駒の特性込みでもまだ足りないの。このままじゃ、本当に力が暴走しちゃう可能性もある。だからしばらくは基礎的なトレーニングと、軽く格闘技術を教えてあげるしかないにゃん」

なるほど。ライザー戦からさっそく仙術を操って…とはいかない

わけか。

見れば小猫も悔しそうにしているし、意欲がないという訳でも、遠ざけたがってるわけでもなさそうだな。

だとすれば俺が基礎の基礎を教えてやった方が良いでしょう。

「じゃあ、他を黒歌が面倒みるのか？」

「そうにやん。まあ、私はどっちかかって言う魔法は苦手だから、時々ご主人様の力を借りるかもしれないけど」

簡単な魔力コントロールくらいなら私でも教えられるけどにやー。と話す黒歌に、なるほどと頷く。

しかしこれで殆ど全員オツケーだとして、アーシアの修行はどうするんだろうか。

アーシアの場合、神器の熟度を高めるのが一番明確な特訓だと思うが：生憎と、その面倒が見られるのはこの場に居ない。

複数持っているとはいえ、俺もそこまで詳しい訳じゃないし。

「因みにアーシアも私が面倒みるにやん」

「え、黒歌が？何教えんの？」

「にやっふふー。それは秘密。成果は本番をお楽しみにつて事で」

悪戯っぽく笑う黒歌。

何をするつもりかは知らんが、秘密というならここは無理に聞き出すべきでもないだろう。

アーシアも「今は秘密でお願いします」と頭を下げているしな。

——さて、そんな話をしたのがついさっきの事。

今は俺を囲むようにしてイツセー、木場、小猫が立っており、攻め時を今か今かと伺っている所だ。

何故こんな事になっているのかと言うと、俺が「まずは三人の実力がどんなもんか知りたいから、俺と戦ってくれ」と言ったからである。

戦う事によって欠点が浮かび上がってくるし、実力の差を示す事で多少指示に文句があっても反発されにくくできるのだ。

「どうした？睨んでるだけじゃ勝てねえぞ？」

いつまで経っても攻めて来る様子がないので、挑発してみる。

ついでにわざと隙を作り、攻めやすいようにもしてやる。

すると、俺の言葉に反応したイツセーと、隙に気づいたらしい木場と小猫がほぼ同時に駆け寄ってくる。

イツセーは神器による強化を既に済ませている為、生身で当たれば流石にひとたまりもないだろう。

ま、当たるわけねえんだけど。

「イツセーの場合、まず強化の仕方に問題があるな。いや、神器の都合上仕方ねえんだろうが、どこかを殴りつけるってのが隙としてデカすぎる。俺みたいに待つてくれるようなヤツは、そうそういないって事を忘れるな。——で攻撃の方はもはや論外。自分の速さにすらついてこれてねえ時点で話にならねえし、攻撃そのものも大振りですらでる気ないようになしか思えねえな」

イツセーの拳にそつと手を添えて逸らし、転ばせる。

ぐへっ、と情けない声を出してイツセーが倒れた所で、わざと隙を作っている部分を狙って木場が木剣を振るってくる。

また小猫の方は、木場の攻撃に対応させないようにと、同時に防ぎにくい場所を狙って拳を突き出してきた。

「で、木場も小猫も攻撃が単純すぎる。隙を狙う技術はまあ評価できるし、すぐにそのカバーを行おうとしたのも評価できるが、攻撃がまさに『お手本通り』だ。基本ができてなきや論外だが、基本しかできないのも論外だぞ」

木場の剣を躲し、その動きの勢いのまま小猫の拳を逸らす。

そうして体勢が崩れた二人の背中を軽く押し、転ばせる。

まだ一度しか攻撃しに来ていないが、なるほど。

目に見えて欠点がわかる。

これでは確かに、ライザーに勝つてのは非現実的といえよう。

「つてか木場。お前も神器持つてるだろ。使つていいぞ」

「いや、でも僕の神器は」

「危険だつて？安心しろよ。俺から見りやお前もイツセーもほぼ同レベルなんでな。神器があった方が指導しやすい分ありがてえよ」

「……後悔、しないでよねー！」

三人とも立ち上がり、俺から一度距離を取る。

イツセーは攻撃を外したせいで失った分の強化を取り戻すために地面を叩き、木場はその手に本物の剣を取り出した。

「これが僕の神器『魔剣創造』<sup>ソード・パース</sup>。名前の通り、魔剣を無限に作ることができる。勿論刃も付いてるし、切れば流石の君でも…」

「問題ない。それもイツセーのと同じだ。当たらなきゃ何てことねえ」

「…そうかいっ！」

今度は木場が率先して斬りかかってくる。

その太刀筋は、やはり綺麗だった。

いい意味でも、悪い意味でも。

「ま、言われて直ぐに直せるヤツなんてそうそういないよな。――

―って、言いたいとこだけだ」

向かってくる木場から目を離さず、しかし手は背後に回す。

気配を隠していたが、それは俺には通用しない。

「大方、今俺に見えていたのは幻影だろ？しかも実体はない。そしてそれに気を取られた所を、背後から攻撃する…って感じか？はは、お前すげえよ。てつきり騎士道に拘って、正面からしか攻撃できないモンだと思ってたぜ」

「二応僕は速度で相手を翻弄して、色んな方向から攻撃するのが基本戦術だしね。騎士道だけじゃ強くはなれないって、ちゃんとわかってるさ。――けど、これをそんな軽々と防がれちゃうと、自信無くすね…」

「いや。幻影だってそう悪いもんじゃ無かったし、気配の消し方もまだ発展途上とは言え目を見張るモノではある。鍛えりや伸びるってのはお前みたいな奴の事を言うんだらうさ」

「はは、そりやどうもっ!!」

言葉の終わりと同時に、俺に掴まれていた魔剣から手を離して新しい魔剣を創り出し、振り下ろしてくる。

触れるのは不味い気がするな。回避して…っつと。

避けようとした所を、背後から小猫が襲ってくる。

しかしコイツの攻撃もまた単調。体の芯を只管狙うのも悪くはな

いが、狙いがバレてしまえば勝率が半減するのはどの戦いでも変わらない事実だ。

因みにイツセーは、なんでか倒れこんでいた。  
何してんだアイツ。

——この後しばらく攻防を繰り返して、トレーニングの内容を考えついた所で切り上げた。

途中休憩で知ったのだが、どうやらイツセーの神器による強化には限界があるらしく、ソレをオーバーすると体が動かなくなってしまうのだとか。

上限は今の所、本気で殴って四回（調子によっては三回）までらしい。

だからさつき倒れてたのか。

※——

ライザーとの試合を控えた俺達は、部長の所有する別荘に来て修行に勤しんでいた。

俺の面倒を見てくれてるのは、まあ予想通りというか輪廻だった。で、初日はトレーニングの内容決めるためについて言って輪廻と戦う事になったんだけど……結果は惨敗。

一撃入れるどころか、本気を出させることすらできなかった。

俺だけで挑んだわけじゃなくって、木場と小猫ちゃんも居ただけど……うん。全員で挑んでもダメだった。

二人とも俺に合わせて、隙を作ってくれたりしたのに、まるでかすりもしなかった。

輪廻曰く、俺の攻撃は大振りだし予備動作がデカいし周りが見えていないし工夫が無いしでとにかく欠点だらけらしく、その矯正を意識しながら素の力を鍛えていく必要があるとのこと。

うーん。俺に力が無いってのはわかってたけど、まさかここまでダメ出しされるとは。

でも輪廻の方が俺より強いのも事実だし、言ってる事もわかりやすいし的確だし、取り敢えず文句を言わずに指示されたどおりのトレーニングに勤しむことにした。

トレーニング自体は、基本的には筋トレ。

限界ギリギリまで肉体を痛めつけた後は、輪廻との模擬戦を行って、逐一攻撃の仕方や回避の仕方、防御の仕方に移動の仕方を指導してもらおう。

そしてそれが終わった後は、魔力と『気』を扱うトレーニングだ。明らかに一日一回できるような密度じゃないのに、なぜかこれだけやっても夕日が沈みだしている程度の時間なのが不思議だ。

まるで一日がとても長くなっているかのような。

ま、不思議だけど強くなってる自覚もあるし、いい事だろ。

因みに木場と小猫ちゃんも俺みたいなたレーニングメニューだった。

模擬戦は最初の一回と違って一人一人やることになってるんだけど、木場とか小猫ちゃんとの戦い見てると、俺ってまだまだだなぁって思わされるな。

輪廻もまあまあおかしいけど、木場も小猫ちゃんも全然凄い。

木場は速くて目で追えないし、小猫ちゃんの一撃一撃は見てるだけでも重い。

それに比べて俺は、神器を使わないと何もできねえ。

『兵士』がただの捨て駒じゃないってのは十分わかってるけど、やっぱり俺って必要なのかなって、ちよつと不安になる。

——いやいや。暗い事考えるなんて俺らしくねえ。

ここはアレだ！俺の編み出した新魔法、洋服破壊ドレス・ブレイクについて考えるとするか！

俺は魔力も『気』の才能もからつきしとのことで、魔法に至っては一つか二つ使いりゃいい方と言われた。

そりゃ最初はかなりシヨックだったけど、一つ二つしか使えないならせめて俺が一番欲しいような魔法を作ろうと逆に燃えた。

そうして作られたのが、さつきも言った洋服破壊ドレス・ブレイク。

その名の通り、相手の服を下着も含めて全て破壊し、一瞬で真っ裸にしてしまう素晴らしい魔法だ。

今はまだ朱乃さんに一回使っただけだけど、いつかは知り合う女の



「ま、大した理由はねえんだけどさ。昔…いつ頃だったかは忘れたが、そんなくらい昔に、思った事があるんだよ。俺って弱えなつて」

「お、お前が？」

「おうとも。己の無力さに嘆いたね。だってこの世界には——」

そこまで言つて、アイツは言葉を切った。

そして咳払いをして、何事も無かったかのように話を変える。

「とにかく。俺は弱かった。そして今も弱い。まだまだ発展途上だと自覚してるし、驕りもないさ。見つめる先は上だけで良い。そして掴みたい未来も、とつくに決まつてる」

「掴みたい、未来？」

「お前と同じだよ。ハーレムさ」

凄く綺麗な瞳で空を見上げて、アイツはそう言った。

……う、うわー。流石残念イケメン。

モテモテなくせに、一部界限からそうやって蔑まれてるだけあるわ。

なんでコイツここまで恵まれておいて俺と同レベルの思考と病気レベルの鈍感持ち合わせてんの？

奇跡の産物か？

「ここだけの話なんだけどさ。俺黒歌の事が好きなんだよ。ずっと前から、恋愛的な意味で。勿論エツチな事だつてしたいし、最終的には結婚だつてしたい。——けど、最近アーシアの事も気になり始めてるっていうかさ。ほら、アイツもアイツで思わせぶりっていうか、俺の好きなんじゃね？つて思わせる感じがあるっていうか」

「…お、おう…」

思わせぶりというかガチでお前が好きなんだよ、その二人は。と言いたい気持ちをグツと堪え、俺は曖昧に笑った。

…ただ、コイツから恋バナ(?)して来るなんて珍しいな。

ていうか初めてだろ。コイツが好きなき子いるって話してきたの。

なんかちよつと嬉しい気もする。

コイツがそういう、弱み?みたいなの見せてくるのって、初めてだし。

「ま、良いんじやねえか？ハーレム。俺だつて夢はハーレム王。さつさと上級悪魔になつて、眷属を可愛い女の子とかエッチなお姉さまとかで埋め尽くすんだ！」

「ははは、お前らしいや」

「——でき。できれば俺、部長にも隣に居て欲しいんだよな」

「…へえ？そりやまたなんで？」

なんとなく口から出てきた言葉に、輪廻は愉快そうに口元を歪めた。

俺が言った言葉を、喜ぶかのように。

「それこそなんとなくだけどき。——朱乃さんとか、黒歌さんとか。ああいうおっぱい大きくてエロい人つて、正直一杯いるじゃねえか。決して部長だけがーつて訳じゃないだろ？」

「ま、そうさな。意外とああいうタイプの美人は少くないな」

「……でもさ。部長だけ、なんだか特別つていうか……なんだろ。なんて言えばいいんだろ。上手く言葉にできねえけど、つまり」

「それが好きつてヤツなんじゃねえの？胸張つて言えばいいじゃねえか。俺はリアス部長が大好きですつて」

「そ、そんな簡単なもんじゃなくつてだな！」

コイツにも言えない事だけど、俺は最近、恋愛とかそういうのを避けている。

原因は既にわかっている。夕麻ちゃんの件だ。

本気で好きになつたし本気で大切にしようと思つた子に初デートの終盤に殺されて、その上話を聞くと俺の事なんて微塵も好きなんかじゃなく、ただ殺すか利用するか確かめるかだけの為に恋人ゴツコをされていた。

正直言つて、トラウマだ。

ここ最近純愛モノで抜けないのは、きつとそのせいだろう。

かといって寝取られで抜けるかと言われたら100パー無理だけど。

「当てようかイツセー。お前、天野夕麻——レイナーレの件を引きずつてんだろ？」

「ッ!? な、なんでわかんだよ!」

「だてに親友兼幼馴染やってねえって事。——後、部外者だけと言わせてもらうが、お前の懸念は間違ってるぞ」

「……は? 間違ってる? 何が」

「お前が部長が好きで、部長とそういう関係になりたいという思いがある事に対し、レイナーレの一件のせいで引き気味になるのは間違ってるって事だよ」

輪廻の一言に、俺はついカツとなって掴みかかってしまう。

しかしアイツの胸倉をつかんだ途端、凄まじい重力が俺の手を襲った。

な、なんだコレ!? どうなってんだ!?

「確かに自分が好きだった子に殺されて、しかもその子の好意は嘘だったってなったら、そりゃ誰でもトラウマになるだろうさ。——けど、お前が部長が好きになったのと、レイナーレを好きになったのは、決定的な違いがある」

「……なんだよ」

「それは、『完全にお前から好きになった』か『好意を寄せられてから好きになった』かの違いだよ」

輪廻の言葉に、一瞬手に感じた途轍もない重力の事が頭から抜け、コイツの言葉を理解する事に集中する。

正直、いまいちピンと来ない。

結局好きになってるんだから、同じじゃ無いのか。

確かに部長はレイナーレみたいに俺を殺したりしないだろうけど、好意を何らかの形で裏切ることには変わりはないんじゃないのか。

「わかってないって顔だな。——要するにさ。レイナーレの場合と違って、お前は今お前の意志で、部長に好意を寄せてる訳だろ? それはずつまり、お前の知る部長の行いがほぼ全て好ましいと思えているって事だ」

「……まあ、そうだな」

「まして部長はグレモリー家の人だ。身内……つまり眷属に対しては、多少オープンになり過ぎる所もあるだろう。そうした彼女の、所謂欠

点とも判断されるだろう部分を知って尚、お前は好きなんだろう？」

「そうだけど……それが一体どういう」

「でもレイナーレの時は違ったろ。偽りのアイツ、上っ面のアイツ。それしか知らないけど、自分を好きになつてくれた子だから、って理由で何とか好きになつた。違うか？」

問いかけてくる輪廻に、やっと少しわかつた気がする。

つまり、俺が裏切られた……この場合は、そういう気持ちになつたのは、その子の全てを知らない状態で好きになつたから。

知つている状態の今好きになつてしまえば、例えフラれようが何だろうが、俺の想いが裏切られるという事にはならない……と。

「恋つてのはフラれてなんぼ。碎けてなんぼだろ。そしてお前は、どんだけ酷い目に遭おうがポジティブにおっぱいおっぱい連呼するよな、底抜けのバカじゃねえか。——だったら、好きなようにやれよ。やって見せろよイツセー。お前ならなんともなるはずだ！——なんて、フラれるのが怖くて未だに黒歌に告白できてない俺が言つても、なんだけどさ」

「……いや。そんな事ねえよ。その言葉で、結構気が楽になつた」

「そうかい？なら良かった」

そうだ。俺が部長にフラれようが厳しい事を言われようが、俺の今の想いは誰にも裏切られない物だ。

だったら、恐れず突つ込めばいい。馬鹿で熱くて助平な俺らしく、小細工無しで突つ走ればいい。

俺の言葉に小さく笑う輪廻に、深く頭を下げて礼を言う。

ほんと、俺はコイツに救われてばかりだと思う。

困つてる時に必ず助言をくれたり手を貸してくれたり、感謝してもしきれない。

「ありがとな、輪廻。おかげで元気出た。——そうだよな。俺は、俺の好きなようにやる！ライザーとの縁談をなかつた事にして、そして

——部長に、アプローチする！」

「たっはは、変に律義だな。態々縁談無かつた事にしてからアプローチし始めるなんて」

「り、律義っていいのか？これって」

愉快そうに笑う輪廻に釣られて、俺も吹き出し、笑い始めてしまう。ライザーとの試合が終わった訳でも、特訓が終わった訳でもない。それでも、俺の直近の目標は決まった。

部長が好きだというこの想い、必ず告げる。

そのためにも、アイツとの戦い……負けるわけにはいかねえ！

## V S 輪廻

修行最終日。

今日は午前中に荷物をまとめ、午後には下山するだけの予定だったのだが、予想よりも早く俺とイツセーの帰宅準備が完了してしまった。為、修行の成果の確認という意味も込めて、戦う事になった。

と言ってもイツセーとの模擬戦を特訓内で行わなくなったのは四日前の事なので、それほど久しぶりという訳でもない。

「柔軟、終わったか？」

「おうよー！——これでも毎晩自主練に励んだりして、神器の強化上限も増してんだ。そう易々とは負けねえぞ！」

「バーカ。ただの人間に簡単にやられてて、フェニックス倒せるわけないだろ」

「言ってる！今にテメエのその余裕そうな面、驚きに染めてやるから——よっ!!」

会話を打ち切ると同時に、イツセーは神器を纏ってそのまま突っ込んでくる。

これは、戦闘中に一度強化が解除されてしまった時、その場で強化に専念しないようにする特訓の成果だ。

悪魔という事もあって、大分駆け出しのスピードも上がっている。視野も大きく取っているらしく、以前とは違い俺の動きにすぐさま対応できるように、重心の運びもしっかりしていた。

かなり成長したな。

『気』すら無しで技術だけで戦うのは、そろそろキツイ位だ。

「ま、そう簡単に負けてやれないんでな」

「へへっ！その躲し方は想定内——おおっ!？」

紙一重で躲しつつ、死角から足を攻撃し、転ばせる。

やっぱり、詰めが甘いな。

相手の回避行動までは予測できるようになったのに、相手がこうして反撃してくるとなると途端にアドリブ力が無くなる。

戦闘中は相手の一歩先を読むだけじゃ勝ちはないと、さんざん教え

たつもりだったが。

少し落胆しようとした所で、ある異変に気付く。

転んでいる途中のイツセーの口元が、まるで笑っているかのように歪んで……まさか！

「お前、そこまで想定済みだったって訳か！」

「はんっ、今更遅え!!おら、まずは一回ッ!!」

意図せず転んだ振りをして、イツセーは地面を殴りつけた。

瞬間、アイツの力が倍程度に膨れ上がる。

なんだよ。しつかり相手の反撃まで想定できるようになってんじゃないかねえか！

殴りつけた衝撃で浮いた体を、左足を軸に回転させ、そのまま右の拳を俺に振るってくる。

先程殴りつけようとしてきた時よりも、ずっと速く、鋭い。

ペースを戻す意味も込めて、一度後方へ跳躍。

イツセーの攻撃範囲から逃れる。

「つとと。やっぱ力が一気に抜けてく感覚はキツイな」

「一度でも外せば、どれだけ強化しても一瞬で解除、ねえ……でも、

一回分の強化から解除されるのは慣れたんだろ?」

「ある程度は、だけどな。なんつっーのかな、攻撃外すたびに賢者タイムが来るイメージ。倦怠感半端なくつてさー」

五回も外せば一回分の強化しかしていなくても体力に限界が来る、と語るイツセー。

まあ、俺には当たらなくとも、既に最大速度は木場レベルなんだ。『騎士』にプロモーションすれば、大抵の相手は動きについてこれないだろう。

もしついてこれても、防御してしまうはずだ。

そして防がれたとしても、イツセーの神器は『当たりさえすれば強化は継続し、さらに強くなれる』ので、脱力感に襲われずに攻撃を継続する事ができる。

ただ、強化の上限がまだまだ低いので、数度の攻撃で倒し切らないと一気に形成が逆転してしまうのだが。

「おっし。次はプロモーションも使って、最大強化で行くわ。お前も『気』使えよ」

「了解つと。——因みに最大強化から解除されるのって、何回まで耐えられるようになったんだ？」

「良くて二回。今なら一回でキツイわ」

「オツケーオツケー。なら軽く触れる程度で防ぐわ」

「けっ、言ってくれるじゃねえか。『騎士』にプロモーションした最大強化の俺のスピード、甘く見るなよっ!!」

そういつて、イツセーは俺へと駆け出して来る。

そのスピードは明らか先程よりも増しており、それこそ俺でなければまず目で追えないくらいだった。

因みに今言っていた最大強化というのは、相手を数度殴っても力がオーバーしないレベルの強化なので、厳密には限界ギリギリまで強化しているわけではない。

……じゃ、俺も『気』を使って相手してやるとするか。

※——

荷物をまとめ終えた僕たちが外に出た時、途轍もない戦いがそこで繰り広げられていた。

スピードに自信がある僕を、遥かに上回る速度で動きまわる影。

そしてその影の攻撃を、余裕ある表情のままいなし続けている輪廻君。

恐らく影の方はイツセー君だろう。

……しかしまさかここまで、差ができていたとは。

輪廻君が強いという事は、前々から知っていた。

しかしイツセー君がここまでの実力を持っていたなんて、完全に予想外だった。

僕は内心で彼を侮っていたのかもしれない。

彼は僕よりも弱いんだろうと、内心下に見ていたのかもしれない。だが今の彼はどうだ。

僕なんかよりもずっと速く動き、その姿は目で追えないレベル。

ソレを平然といなししている輪廻君もどうかと思うけど、イツセー君

も大概だ。

「はははっ、どうしたイツセー！良いのは威勢だけじゃねえだろ？」

「な、舐めんなッ!!」

挑発する輪廻君に、イツセー君がさらに速度を上げる。

輪廻君が拳を弾いたり逸したりする音が、さらに大きくなっていく。

さっきので全力じゃなかったんだね……

「す、すごいわね、あの二人。……でも、イツセーがあそこまで動けるなら、ライザーとの試合も希望が見えてくるわね」

「うふふ。とっても頼もしいですわ」

部長と朱乃さんも、驚いている様だ。

僕も輪廻君に指導してもらったんだけどな……二人を驚かせられるほどじゃない。

「皆も準備終わったみたいだし、そろそろ終わるかイツセー」

「え、ちよつと待つぶへえっ!!」

「おお!?大丈夫か?」

輪廻君が僕たちに気づき、防御を止めて回避する。

すると、攻撃を外したイツセー君が突然足をもつれさせ、地面に激突してしまう。

：確か、彼の神器は攻撃を外すと強化状態が解かれて、一気に脱力してしまう……と言っていたはず。

いきなり脱力したせいで、そのスピードに体がついて行けなくなり、転んでしまった……という事だろうか。

ただただ強いって訳でもないって本人は言っていたけど、こういう事か。

「い、いきなり避けんなよ!!」

「はは、すまん。——ただま、相手がずっと防御ばかりしてくれるとに限らないからな。そこもちゃんと考えとくんぞ」

「う、うーん……まあ、そうだけどさあ」

釈然としない様子で頬を掻くイツセー君に、輪廻君が少し目を逸らす。

言っている事はまともだけど、彼自身はイツセー君を転ばせてしまったのは不本意だったんだろう。

若干その瞳が申し訳なさをたたえていた。

「お疲れ様。二人とも」

「ああ、部長。どうです、イツセーのこの仕上がり。これならライザー相手でも任せられるはずですよ」

「ええ。正直、期待以上の出来ね。流石よ、イツセー。貴方がいると、心強いわ」

「きよ、恐縮つす!!」

部長から褒められて、イツセー君は目に見えてガチガチになっていた。

はははっ、さつきまでの人間離れ…というか、下級悪魔離れした動きをしていた時とは打って変わって、なんだか彼らしいな。

それでも視線が基本的に部長の胸に向かっていているあたり流石だと思っうけど。

「それで、もう下山します?」

「そうね……まだ時間もあるし、せっかくだから成果発表でもしましょうか。イツセーの成長も、みんな見た事だし」

※——

「で、まずは木場ってわけね」

「胸を借りるつもりで行きますよ、先生?」

冗談めかしてそんな事を言うってくる木場に苦笑しつつ、構える。

今は下山前の時間を使って、どれだけ強くなったかの成果発表の時間だ。

俺とイツセーの組み手を見て、皆少なからず熱くなっているようだし。

ま、イツセーは強いからな。

原作の同じ時点よりも確実に強い。

こりやライザーもレーティングゲームで倒せちゃうんじゃないか?

「——ふうー……しっつ!!」

魔剣を手に、真っ直ぐに突っ込んでくる。

しかしこれは幻覚。本物は地中を進んできている。

だがかなり気配を隠しているし、俺レベルじゃ無けりやまず気づけまい。

「大分騎士道に縛られなくなったな！」

「やっぱりバレてるか…！そうさ。僕も、正々堂々以外の戦い方を身に沁みさせてきたからね！」

足元を踏み抜き、地震のような現象を起こす。

すると地中から木場が出てきて、真っ直ぐ向かってきていた偽物の木場が消え去った。

苦々しげな顔をしつつも、その目はまだ死んで居ない。

スピードだけが取り柄だった彼は、今やスピード以外の武器も手にしているのだ。

敵わないと知ればすぐに諦めるような男ではない。

「君に教えてもらったのは、ただ速い事がスピードじゃないって事！相手のペースを乱して、呼吸をずらさせることで相対的なスピードを得る事もできる！こんなふうには、正攻法と搦め手を混ぜて攻める事で——ねっ!!」

今までは創り出した剣を綺麗な太刀筋で振るうだけだった木場が、今は蹴り技等を多用して攻撃してくる。

綺麗な太刀筋と見せかけてフェイントだったり、フェイント風の振り方から突然綺麗な太刀筋を見せたりと、相手を混乱させるような攻撃ができるようになった。

その上、一度生み出した魔剣を折れるまで使うとかではなく、一度振った剣をすぐに捨てて違う剣に持ち替えたり、能力でゴリ押しするような戦いもするようになった。

今までの正統派騎士道タイプから、卑怯上等の邪道タイプへの変更。

この十日間（と言っても俺の魔法でかなりの日数にまで水増しされているが）でここまで戦闘方法を変えさせられたのは、俺としてもちよつと鼻が高い。

相手を只管自分のペースに持ち込み、そのスピードと剣技で止めを刺す。

俺としてもあまり戦いたくないような男になったと思う。

まあ、まだまだ素の実力が俺レベルになってないんだが。

もし俺レベルになったら多分勝つのきついぞ。

「今まであまり使っていなかった魔剣の力も、フルで活用するようになった。その分のスタミナもしっかりつけさせた。——ま、ざっとこんなもんかな」

「ふっ!？」

部長たちに木場がどれだけ強くなったかを説明しつつアイツの攻撃を自分のペースのまま躲し、いなし、防ぎ続けて、話終わると同時に腹部を殴りつけ、無力化する。

「加減はしたぞ」

「は、ははは。ども……全然息が乱れてないなんて、君は本当に底なしだね」

「そりゃ、俺はお前よりももつとずっと鍛えてんだ。そう易々と追い抜かれてたまるかっての」

「祐斗。今までの剣技も綺麗だったけど、この搦め手も混じった戦いは貴方のスピードをより際立たせていて良かったわ」

「はい。ありがとうございます」

部長に褒められて、木場が恭しく頭を下げる。

ソレを見てあまり面白くなさそうなのはイツセーだ。

ま、お前の方が総合的には強いから安心しろって。

素の力じゃお前に勝てるのはこの場に俺と黒歌しかいねえし。

まあ、イツセーの場合は搦め手とかに簡単に引つかかるタイプだし、いざ戦ったら木場に負けるとは思うけど。

「じゃあ、次は小猫ね」

「……はい。よろしくお願いします。先輩」

「おうよ」

木場と入れ替わるように俺と向き合ったのは、小猫。

コイツは将来的に仙術を扱うようになる予定だし、俺からは簡単な

『気』の扱いを教えた。

俺ほどではないが、『気』による強化やソレの応用は中々の出来だと思う。

「そっちのタイミングで攻めてきていいぞ」

「…では、行きますー！」

俺の言葉にうなずき、小猫は地面を殴りつけた。

だがその狙いはイツセーのような強化狙いではなく、土埃を舞わせての目くらましだ。

『気』による探知ができる俺には無意味…と思うだろうが、小猫もそれなりに『気』の扱いができる。

気配をわざと広げてわかりにくくして、俺にすぐ居場所が絞られないようにしている。

「でも後ろにいるのはバレバレだぞ」

「はい。想定済みです」

振り向くことなく拳を乱雑に振るうも、小猫には当たらない。

空を切った感じから察するに、空中で跳躍して後方に逃げたのだろう。

『気』を使って、空中に足場を作ったのだ。

それだけにとどまらず、小猫は全体的に『気』を何かに変える才能に特出している。

俺の場合はひたすらに肉体強化特化だが、小猫はどちらかと言うと『気』を足場にしてみたり、炎や水に変えてみたりと、魔力みたいな扱いが得意。

勿論強化だって一級品だし、俺みたいな完全特化の下位互換程度ではある。

まあ、まだまだ発展途上、なんだけどな。

「小猫は『気』を流し込んで雑草を刃物にしたりとか、中々応用力を活かせるようになりまして。言ってしまうえば『仙術』を習得する一歩手前の状態までには成長しているとと言えるでしょう」

「ふっ…！くっ、このっ…!!」

「攻撃もできる限り最小限の動き、最低限のスタミナで行えるように

なったので、今までみたいにすぐにバテる事は無くなりました。後は攻撃の予備動作を控えめにさせたり、『気』を利用してのフェイント等、木場のように相手を翻弄する戦い方ができるように仕上げましたね」

「なんでっ、当たらな…!!」

プレゼンしながら体を動かして回避する俺に、小猫のストレスが着実に溜まっていく。

まあ木場と違ってスピード特化じゃないし、避けるのは一番楽なんだよな。

後、この「自分の思い通りに事が運ばないとストレスがすぐにたまる」癖だけは直しきれなかった。

これはあくまで本人の性質って言うか気質だし、仕方ない所ではあるんだけどさ。

実際の戦闘中に明確な弱点とならない事を祈るばかりだ。

「っ!？」

「ほい、お疲れ様っ」と

空中を飛び回るようにして俺に攻撃し続けていた小猫の足を掴み、『気』を流して痺れさせ、動きを止める。

勿論止まってしまったらそのまま落下してしまうので、お姫様抱っこで受け止める。

まあ、一番まともな抱きかかえ方だよな。

顔真っ赤にして恥ずかしがってるけど、許してな。

「まあ、俺が面倒見た中だと、小猫が一番無難な成長の仕方をしたかな。イツセーは神器の力もあつて中々ぶっ飛んでるし、木場は戦い方が変わったし」

「——え、ええ。そうみたいね」

なんだか呆けている様子の皆に首を傾げる。

俺が小猫を抱きかかえているのがそんなにおかしいだろうか。

ははーん。さては俺が三人を平然といなしてきた事に今更ながら驚いているんだな。

確かにただの人間というには俺は強すぎる自覚がある。

「ご主人様が何を考えてるかはわからないけど、多分違うにやん」  
「…なんでまた」

「ふっふー。長い事一緒にいると、顔を見るだけでご主人様の事が色々わかつちやうんだにや。で、今の顔は取り合えず何か間違った納得の仕方をしている時の顔だにや」

「失礼すぎんかな!？」

※——

「それで、部長たちも俺と戦うんです？」

「いえ。それは辞めておくわ。朱乃はともかく、私の魔力は当たった瞬間消滅してしまうもの」

「それに、そこまで派手な成長を遂げたわけでもないの。純粹に魔力の制御や、後は相手の行動に合わせて魔法の選び方、使い方の知識をつけただけですわ」

「お、魔法なら——」

「イツセー。俺の言った事忘れてねえよな？」

「う、ツ、わ、わかってるっの」

ドレス・ブレイク  
洋服破壊を披露しようとしたイツセーに、遠回しにやめるように指示。

…ま、敵対者に使う分には文句ねえし、そこは妥協してくれ。

因みにイツセーの魔法について知らない皆は首を傾げていたが、しようもない事だけはなんとなくわかるのか、誰も気になるとは口にしなかった。

「ところで、アーシアは何をしたんだ？」

「あ、私は……その、秘密ですっ」

「そうそう。本番までのお楽しみ♪」

本人と黒歌にそう言われては、これ以上深堀する事も出来まい。

とても気になるが、ここは引くことにしよう。

——しかし、なんだろう。

アーシアから感じる、この練り上げられた『気』は。

もしかしたら、この中で一番成長したのは、彼女かもしれない。

直感でそう思いながらも、しかし可愛らしい笑顔は変わらないア—

シアに、俺は自然と脱力するのだった。

## 戦う理由

ついに迎えたレーティングゲーム当日。

負けるつもりは無い。

けど、やっぱり緊張はする。

相手はエセホストの種まき焼き鳥野郎だが、それでも実力は本物。不死という最大の防御と、炎による最大の攻撃。

その二つを操るライザーは、なんと今までの試合で殆ど負け無し。しかも負けたのは相手に配慮しての出来レースで、実質負けなしのことだ。

いくら輪廻に鍛えてもらって強くなったとは言え、油断はできねえ。

勿論俺以外のみんなもそうだ。

普段からおっとりしている朱乃さんも、ピリピリしている。

何と言ってもこの試合、部長のお兄様である魔王様が見ているらしいのだ。

後、輪廻も見てる。

元々負けられない戦いだけど、負けられない理由がまた増えたな。

俺達が今いる場所は、いつもの部室……に、よく似たゲームの会場。

なんと、今回のレーティングゲームの会場は駒王学園のレプリカ（実寸大）なのだ。

悪魔の技術力ってすげー。

「作戦を話すわ。みんな一度集まってちょうだい」

部長に呼ばれ、各々がしていた事を止めて部長のすぐそばに集まる。

そして話された内容は、俺達の殆どを驚かせるような物だった。

「あ、アシアを最前線に出す!?ほ、本気ですか部長!」

「ええ。そしてコレは彼女の願いでもあるの。勿論、彼女に戦う力があるという事はわかってるからこそ許可を出したのよ」

「そ、そうなのか?」

「はい。大丈夫ですよ、イツセーさん。実は悪魔になって以来、ずっと

黒歌さんに鍛えてもらってたので！」

ふんす、と意気込むアジアに、恐れなどは見られない。

今まで争いごとの類を嫌っていたと思っていたけど、案外そうでもないようだ。

…でも、どうしてそんな前から鍛えてたんだ？

気になったので尋ねてみると、アジアはこんな話をしてきた。

「これは、私が悪魔になった理由でもあるんですけど……あの日、輪廻さんに助けられた時に、思ったんです。弱いままは嫌だって。守られるのは嬉しいけど、それだけじゃきつとあの人の隣には立てないだろうって」

「……アジア先輩は、あの日よりも前から先輩の事が？」

「はい。いつから、と聞かれたら良くわからないですけど……その、私の友達になってくれて、しかも殆ど毎日会いに来てくれて、自然とでもその時は輪廻さんがとつても強い人だって知らなかったし、私もまだそういう……争いごとに対しては忌避感があったんです。けどそれが、あの日を境に『強くなって、あの人の隣に立っていても胸を張れるようになりたい』って思いが変わって……だから、この戦いで私が強くなったんだって事、輪廻さんに見てもらいたいです」

真つ直ぐな瞳で語るアジアからは、とても強い意志を感じた。

多分、俺達が何と言つても前線に行くことは変えないだろう。

……ま、部長も太鼓判押ししてるし、黒歌さんに鍛えてもらったらしいからな。

きつと大丈夫だろう。仲間の俺が信じてやらないでどーするよ。

「勿論。私にいつも良くしてくれている部長さんの為に戦いたいって気持ちもありますしね！私、頑張りますよ！」

「あらあら、頼もしいですわね。私もリアスの『女王』として、負けてられませんわ」

「もう、仲間同士で張り合いすぎないでよね？——それで、アジアが前線に出る代わり、イツセーには私の傍に居て欲しいの。『王』を守る最後の壁としてね」

「え!?そ、それじゃあライザーを殴りにいけないじゃ」

「いいえ。違うわ。知つての通り、この戦いは私が縁談をなかつた事にするための戦い。勝つなら、私はただ安全な場所で待っているだけじゃダメなの。止めを刺さずとも、戦場に立つ必要はあるわ」

「だから、部長自らライザーを討ちに行く、と?」

「ええ。けど勿論、私の力だけでライザーを倒せるなんて思っていないわ」

「だからこそイツセー君を傍に置いて温存させて、終盤に攻め込みに行く…と?」

木場の言葉に、部長が頷く。

なるほど。この戦いはただ勝てばいいわけじゃなくって、多少危険ではあっても部長が前に出る必要があるわけだ。

そしたら俺は部長の傍に居て、万が一敵が攻めてきても守り抜き、こつちから攻める時はグレモリー眷属最強の矛として、その力をライザーにぶつけてやると。

「改めて全体の動きをまとめると、祐斗と小猫は森に隠れながら校庭へ向かい、アーシアが体育館から校庭を目指す。ちょうど私達の本陣と相手の本陣の中間となる場所よ。必ずそこにライザーの眷属が集まるはず。祐斗と小猫はアーシアと合流するまでの間、相手に発見されない限りはなるべく行動を起こさないで。発見されたり、一人だけで居て、不意をつけそうなら話は別だけど」

「了解」

「アーシアは、多分この中で一番敵と遭遇するはず。体育館も、向こうが押さえておきたい地点のはずだしね。——いけるかしら?」

「はい。必ず、勝ちます」

「よろしい。そして朱乃。貴方には上空で待機してもらうわ。アーシアが出てきたら、まず体育館を爆撃して破壊しなさい」

「うふふ、わかつたわ」

「え、いや体育館壊しちゃっていいんっすか!?あそこはこの戦いで重要な場所なんじゃ…」

「だからこそ、よ。体育館が重要なのは相手も同じ。だからいつそ、壊す方が良いの。多分、相手も戦力の多くを体育館に連れて来るでしょ

うしね。最悪アーシア一人で捌ききれなくなったら、朱乃が体育館を破壊するついでにまとめてリタイアさせられるし」

皆にテキパキと指示を出し、俺の質問にもわかりやすく答えてくれる部長は、とても初心者とは思えない貫禄があった。

これならきつと勝てる。そう思わせる何かがあった。

——っしやあ!!俺もなんかテンション上がって来た!この戦い、絶対勝ってやるからな!

「眷属をある程度削った所で、私とイツセーがライザーのいるであろう本拠地に移動するわ。体育館を破壊した後、朱乃にはその護衛を頼むわね」

「わかったわ。…でも、体育館を破壊した後、貴方の護衛をする前は何をしていたら?」

「そうね…一度アーシアの移動中の援護を頼むわ。でも多分、それよりも自分の身を守る方に注力する事になると思うけど」

「体育館を破壊して、居場所がバレるから、かしら?」

「そうよ。そして、相手にも貴方のように空中での魔法戦を得意とする女がいる」

「…『爆弾王妃』、ユーベルーナ」

なんだか仰々しい二つ名の人だな…誰の事だろう。

いや、クイーンって言ってるんだから、ライザーの『女王』か。

部長の『女王』である朱乃さんも、『雷の巫女』なんて二つ名で呼ばれてるくらいだし。

というか悪魔の業界では、レーティングゲーム等で目立った活躍をする凄人には二つ名がつくらしい。

俺もいつか、二つ名で呼ばれてみたいな。

…つと、今は目の前の相手に集中。

ユーベルーナって人は、二つ名から察するに爆弾を使うのか?

いやただの爆弾じゃないか。恐らくは魔法…朱乃さんの雷みたいな威力の爆発が来るわけか。

いつぞやはぐれ悪魔を楽しそうに甚振っていた朱乃さんの姿を思い出し、ちよつと身震い。

「きつと、彼女がすぐに攻めてくる事でしょうね。もしかしたらあちらも犠牲前提で体育館を破壊しにくる可能性もあるわ」

「後手に回るわけにもいかず、されど隙を見せて元々の目的を逃すわけにもいかない……あらあら、大変ね」

「そう言う割に、大分余裕そうじゃない」

「ふふっ、一緒に鍛えたんだから、わかっているでしょう？ 私も今までより、もっと強くなったんだから」

「期待してるわよ、私の『女王』」

「吉報を楽しみにして？ 私の『王』」

お、おおっ！ なんだか今のやり取りかっけー！

！  
二人の間にある信頼っていうか絆っていうかが、凄く伝わってくる

『開始まで、後五分』

「…そろそろね。祐斗、小猫。一応、森にトラップを仕掛けてきてちょうだい」

「五分前なのに、良いんですか？ 行かせちゃって」

「レーティングゲームって、開幕十五分はトラップを仕掛けたりする時間なのが一般的だからね。寧ろ早いくらいさ」

「…それに距離もありますし。行ってきます」

俺の疑問に、部室から出ていこうとしている木場が答えてくれた。

小猫ちゃんの補足説明もあって、ちゃんと理解できたぜ。

……じゃ、俺はいつも通りストレッチと、精神統一でもしますかね。

心を落ち着かせるって、今までなんのこつちやと思ってたけど、案外やってみるとそのすごさがわかる。

輪廻のいう事って、なんでもあも正しくって為になる事ばっかなんだらうな。

なんだか、おばあちゃんの知恵袋みたいだ。今まで生きてきて、自分が確かめて、そうして得ていった知識みたいな。

そんな事を考えながら体をほぐす俺の耳に試合開始の合図が聞えたのは、アナウンスから丁度五分後の事だった。

※――

部長とライザーのレーティングゲーム当日。

人間である俺はいくら友人であっても呼ばれる事はないだろう：  
と思っていたのだが、なぜか見る事を許可された。

しかも呼ばれた部屋ではなんだか豪華なソファに座る事を許され、  
近くのテーブルには高級そうなドリンクに食事まで置いてある。

……きつとこれは、アイツの仕業だろう。

「…あの、グレイフィアさん。一応お聞きしたいのですが、俺のこの待  
遇は一体どういう理由で？」

「申し訳ございませんが、私にも良くわかりません。ただ、サーゼクス  
様が貴方をこのように迎え入れろと」

「……やっぱりかー…」

小声で呻くようにして言葉を発する。

そうだ。こういう事をするのは、そしてできるのは、サーゼクスだ  
けだ。

頭を抱えたくなるような気分になったその時、突然部屋のドアが開  
いて、一人の男が入って来た。

部長のような紅の髪に、整った顔。

全身からあふれ出す強者のオーラは、並大抵の存在であればそこに  
立つだけで跪かせそうだ。

「さ、サーゼクス様!? なぜこちらに!?!」

「んん? 言ってなかったかい? これを用意させたのは、私が彼と一緒  
に試合を見るつもりだからだよ」

今までの鉄面皮は何処へやら、サーゼクスの登場にとても動揺する  
グレイフィアさん。

やれやれ。何をやってるんだこの魔王は。

呆れて物も言えない俺に「やあ」と手を振る魔王さま。

その姿にグレイフィアさんはより一層動揺していく。

そりや自分の旦那でもある魔王様が、ただの人間相手にこんなフレ  
ンドリーな姿を見せてたら驚かない方がおかしい。

一気に居心地悪くなっちゃまったじゃねえかよ。

「それと、すまないが私と彼を二人にしてもらえないかい?」

「……し、しかし……」

「頼むよ。——彼には、聞かなきゃいけない事があるしね」

「っ。それは……かしこまりました。それでは、失礼いたします」

意味深げな表情と共に発された言葉に、グレイフィアさんは何を勘ぐったのか途端にシリアスな顔を見せ、そのまま去って行った。

大方、明らか隠し事しているだろう俺に魔王様が直々に話を聞こうとしている……とでも思ったんだろう。

しかし悲しいかな。きつとアイツの発言は、ただの嘘だ。

まあその嘘のおかげで俺も助かるし、構わないのだが。

グレイフィアさんが去り、若干シリアス風味を漂わせていた表情を再び親しみやすさ溢れるフレンドリーな物へ変え、サーゼクスはこちらを見る。

そして嬉しそうに破顔しつつ、こう挨拶してきた。

「やっ、久しぶりだね、輪廻」

「……変わらねえな、サー坊」

※——

サーゼクスと俺が知り合ったのは、約数千年前の事。

まだ幼いサーゼクスが、貴族という存在に恨みを持つ連中から命を狙われた所を、時間遡行を繰り返して強者相手を通り魔的に喧嘩を吹っ掛けていた最中の俺に救われたのが始まりだった。

当時は今でいう旧魔王が実権を握っており、まだ三大勢力の戦争もそこまで激化しておらず、神も存命だった頃だ。

当時の貴族の態度は今の貴族よりももっと横暴で、下の存在が革命を起こすこともまあ、少なくはなかった。

何せ悪魔の世界は数ではなく質が勝敗を分ける。

ただ一人の一騎当千のカリスマがいれば、大抵の争いには勝ててしまいう世界なのだ。

ソイツが立ち上がってしまえば、反乱、革命の類はいくらでも起こる。

だからこそ当時のバトルジャンキーな俺にボス含めた一団が目をつけられて、物のついでに攫ったはずのサーゼクスを奪還されてし

まったわけだけでも。

それでその時の俺の戦い方（力にモノを言わせて蹂躪するやり方）に感銘を受けたただか何だか言ってサーゼクスが俺に教えを乞うようになって、ただの人間と魔王という立場の差がありながら仲のいい兄弟みたいな関係になった訳だ。

：俺の事、グレイフィアさんには話して無いんすね。

まあ、当時から俺の事を知るのはサーゼクスと付き人数人とご両親だけだったけども。

「いやー。長い事探したよ、輪廻がいつの時代の人間なのか聞きそびれてたからね」

「未来から来た、って話だけ聞いて目ん玉キラキラ光らせまくってたもんなお前」

「だって、凄いいじゃないか！今でもその話を聞くだけで心が躍るよ！悪魔でも何でもなかったあの人間でしかない君が、神器の力でもなく自分の魔法で時を行き来するなんて！——まあ、どれだけ憧れても私とは致命的に相性が悪かったせいで習得できなかったわけだが」

「歩く滅びの魔力だもんな、お前」

「酷い言い方だなあ」

でも実際事なんだから仕方ない。

それと、俺の魔法を羨ましいとか言っているがソレこそあまりお勧めしない。

長時間の時間操作はかなりの集中を必要とするため戦闘中は勿論何かしながらも無理だし、時間停止に至っては『世界』の全てを己の魔力だけで停止させ続けるという仕様上どんだけ集中しても5秒が限度というレベル。

時間を操作する範囲を極限まで小さくし、尚且つ操作する時間もそれほど膨大じゃ無くすることでようやく戦闘で利用できるのだ。

本当に不便極まる。

その癖時間操作を行えるようになってしまえば魔力の質が『時間操作特化』になってしまったため、部長やサーゼクスの『滅びの魔力』同様にそれしかできない事になってしまう。

つまり、俺に洋服破壊や乳語翻訳ドレス・ブレイク　バイリンガルを習得する可能性は残されていないという事である。

アレ使えたら楽しそうなのに。

「……ところで輪廻。リーア達の修行を手伝ってあげたみたいけど、この試合どちらが勝つと思う?」

「さあな。勝負なんてのは始まんきやわかんねえよ。その時のコンディション、実際の戦闘の空気感にどこまで揺さぶられるか、等々。実戦でなきやわかんねー事ばっかさ」

「じゃあ、個人個人の戦力だけで見ればどうだい?」

「それなら部長の方が勝つき。相手の眷属の練度もまあ大したもんなんだろうが、なんだかんだライザーの不死と炎に頼り切り。対して部長側は一人一人が一騎当千レベル。外的要因が一切ないとすりゃ、負けはまず無いな」

「ははは、君をしてそこまで言わせるんだから大丈夫なんじゃないかな?」

「どうだかな。これはあくまでレーティングゲーム。相手の方が有利なのは確かだ。知識量や場数が圧倒的に不足してるからな、部長達は」

「こういった『ルールの定められた戦い』において勝負を左右するのは、当たり前だが個々人の強さだけではない。

知識や場慣れしているかは勿論、突発的な閃き力に応用力、戦況によって元の作戦を即座に捨てて新しい作戦に切り替えたりする決断力が必要となってくる。

少なくとも現時点では知識、場数ともに相手にまるで及ばないのが部長チームだ。

作戦が上手くいかなかった場合、何か予測できていなかった事が起きた場合。

その時に部長、或いは危機的状況に直面したヤツがどう動くかによって、勝敗が決すると言っているいだらう。

俺の意見を聞き、サーゼクスは「君らしいね」と微笑し、ワインに手を付けた。

俺も飲むかと尋ねてきたので、一応高校生なんて言って断る。

「…因みに、赤龍帝はこの戦い、どう見るんだい？」

『ふむ。まあ、大方相棒と同じだな。——ただ、注目しているヤツがないかと言われればそうではない』

「ほう。かの赤龍帝をしてそう言わせるとは。それは一体？」

『アーシア・アルジェント。元シスターの『僧侶』だ。ともすれば、相棒が面倒を見てやった三人よりも、もつとずっと化けているかもしれないぞ』

「え、アーシアが？確かに感じるオーラとかは変わったけど…」

『それは相棒が強大過ぎるだけだ。相手との差があり過ぎると相手の実力の変化に気づきにくくなる』

サーゼクスに質問され、ブーステッド・ギアが展開し、宝玉を光らせながらドライグが答える。

しかし、アーシアが注目株か。確かに今までと何かが違うとは思ったが、はてさてどうなることやら。

試合開始五分前を告げる声と同時に、俺達の前にある複数のブラウン管の電源が一齐につく。

見た目旧式のテレビなのに、映像は最新の高級な物で見ると大差なくらい綺麗だった。

映像はそれぞれ、両者の本陣、体育館、校庭、等の重要拠点を永続的にうつしているモノと、定期的に切り替わっているモノがある。

恐らく、この切り替わっているモノは上記以外の場所で戦闘が行われた時にソコを映すための物なんだろう。

「そろそろ、だね。——そう言えば、君から何か手を貸したりしないのかい？」

「まさか。確かに修行も見てやったし、中には技とか武器とかのヒントを教えてやったヤツもいる。けど、本番にまで手を出すのは、違うだろう？」

「はは、違くない」

『……ふむ。見た所リアス・グレモリー含め眷属たちは皆、程よく緊張している様子だな。特に兵藤一誠はいい塩梅だ。少なくともコン

デイションは最高と言っていていいだろう』

座り込んで瞑想しているイツセーを見て、ドライグはそんな事を言う。

確かに、緊張しすぎでもなく、しかし全く緊張していない訳ではない。

戦いで最高のパフォーマンスを發揮できるいい状態だ。

勿論他の皆も程よく緊張できてる。

取り合えず本来の実力を發揮できずに敗北、というのはないはずだ。

戦い始めて相手に翻弄されて：とかが無ければ。

……しかし、アーシアが手に持っているのは、なんだ？

もしかして、武器？

十字架みたいな、刺突武器槍とも打撃武器棒ともいえる武器だ。

何より特徴的なのは、十字架の交差している部分にある、穴のような部分。

見た感じ、スピーカーのように見えるが：なんで武器にスピーカー？

というかアーシアが武器を持つなんて、少なくとも原作ならかなり先の話だったはず。

何か心境に変化でもあったんだろうか。

『アーシア・アルジェントの持つ武器。微かだが聖なる力を感じる。どのような使い方をするかまではわからんが、並の悪魔であれば消滅させられるかもな』

「悪魔なのにそんな物を持ってて平気、か。——もしかしたら、コレも神の不在が原因だったりしてな」

詳しくは戦っている所を見ない限りわからないが、な。

ワインではなく、明らかにお高そうな紅茶に口をつけて、開始を待つ。

俺が大きく息を吐きだしたと同時に、試合開始の宣言がなされた。

勝率は半々。勝っても負けてもおかしくない。

願わくば、原作のようにならない事を。

ブーステッド・ギアをそのままに、俺は部長たちの動きに注目するのだった。

## 聖女の力、みんなの力

レーティングゲームが始まって、十五分経った。

木場と小猫ちゃんが戻ってきて、トラップを仕掛け終えたことと、相手はトラップを仕掛けていない様子だという事を伝えてきた。

舐め腐ってやがる！と憤る俺だったが、部長は冷静なままだった。どうにもライザーは今までの試合で、トラップを仕掛けた事が無いそうぞ。

この準備期間ともいえる十五分を、アイツは侵攻に使うのが常なんだと。

ただ今回は俺達を馬鹿にしているのかハンドェのつもりなのか、本陣でふんぞり返ってるだけらしい。

窓の外から覗いてみたら、眷属とよろしくやっているのが見えた。木場が言っていた。

ち、ちくしよーっ！ムカつくぜあの野郎！

「落ち着きなさいイツセー。それに、私が直接戦わなきゃいけないのと同じように、ライザーもこの試合で全力を出すわけにはいかないの。ある程度余裕を見せないで、彼のキャリアに関わるしね。——だからこそ、そこが狙い目のの。余程追いつめられない限り本気で攻勢に出れないライザーを、本気を出す前に倒せれば……」

「な、なるほど……わかりました、部長」

素人相手に本気を出すつてのは、俺の……というか、人間（元だけど）の基準で考えればまともだしかつこいい事だけど、この試合を見ているお偉いさんは違うらしい。

力の差が存在するなら、強者側は敢えて全力を出さず、余裕を持って優雅に勝つ方が良いんだそうぞだ。

わかんねーけど、それならその舐めプに甘えさせてもらおうとするぞ。

俺のやることは、部長の護衛とライザーを倒す事。これに変わりはないんだし。

「とにかく十五分経った今は、ライザーの方も動き出すはず。皆。作

戦通りに頼むわよ」

部長の言葉に、全員が了解と言って頷く。

よおっし！目にももの見せてやるぜ焼き鳥野郎！強くなった俺達グレモリー眷属が、お前に吠え面かかせてやつからな！！

※――

「木場と小猫が森の中に潜伏。アーシアが一人で体育館、か……随分思い切ったな」

本格的に両者が行動を始めた。

俺が呟いた通り、なんと原作でイツセーと小猫が向かっていたはずの体育館に、アーシアが一人で向かっていた。

武器みたいなもの持つてはいるけど、まさか前線に立たせるとは思わなかった。

それくらいアーシアが強くなったのか、はたまた違う理由か。

『早速接敵してみたいだな。アーシア・アルジェント一人に対し、四人……ふむ。少なくとも今までのあの女なら、逃げる事すらできず一方的にやられていただろうが……』

「まず、目が死んでない。アレは勝てる自信がある奴の顔だ。——自信の源は、あの武器か？」

十字架を模した、彼女の背丈よりも大きな武器。

スピーカーのような物がついた、聖なる力を感じさせる武器。

正直何をするのか、何が起きるのか読めない。

だが不思議なことに、俺はアーシアが負けるとはとても思えないのだった。

※――

「……驚きましたね。ここは『センター』。何としてでも奪いに来るものだと思いますが」

「別に、私は譲りに来たわけじゃありませんよ。——この人数差でも勝てるって、部長さんが信じてくれたんです」

いつの日か輪廻さんに教えてもらった製法をもとに何とか作った、私の戦うための力を握りしめ、私と向かい合っている人に毅然として睨み返す。

不思議と、恐怖はない。

四対一なんて不利な状況なのに、今は負ける気がしない。

だって、私は部長さんの為に戦ってるんだから。

今の私を、輪廻さんが見てくれてるんだから。

「貴方が何をするとしても、私達がやることに変わりはありません。

——ここを、奪う。卑怯かもしれませんが、四人同時に攻めさせてもらいます」

「あはは！解体しまーす！」

「バラバラ、バラバラ♪」

棍を持った女性が構えると、体操服を着た双子らしき女の子がこちらに走ってきた。

その手にはチェーンソーを持っており、少しでも触れれば酷いダメージを受ける事は明白。

…それでも、やる事が変わらないのは私も同じ。

ここで全員、無力化します！

私の作った十字架を模した拡声器の電源を入れ、大きく息を吸う。

そして、今向かってきている双子や、後方で追撃を狙っている二人の方にスピーカー部分を向けて、紡ぐ。

私が、シスターだから…いえ。シスターだったからこそ、歌える歌を。

※——

突撃してくる双子らしき少女に対しアーシアが取ったのは、武器として十字架を構えるのではなく、まるでマイクのように口元に近づける、だった。

そしてソレを誰もが訝しんだ途端、体育館中に響き渡ったのは聖歌。

「はは、はははははっ!!そうか、そう来たか!やりやがったなアーシア!お前、最高だっ!!」

「っ、?おかしい、私が、苦しい、だど?そんなまさか。高位のエクソシストならともかく、元々ただのシスターだったはずの彼女の聖歌で、ここまで…!?!」

あまりに愉快過ぎて大爆笑してしまう俺の隣で、サーゼクスが苦しそうに頭を押さえる。

そりやそうだ。ただアーシアが聖歌を歌うだけなら、サーゼクスは愚かライザーすら苦しめさせられまい。

だが今のアーシアは、あの十字架によって聖歌の持つ『聖なる力』を増幅されている。

それこそ、下級悪魔なら近くで聞くだけで消滅させられるくらいだ。

「神が死に、そしてその力はいくつか失われた。天使長なんかは『システム』を御しきれていないせいだと思ひ込んでいるらしいが、実際は違う。元々聖なる力の象徴であり、神により深く関係する物へ、その力がこぼれていったんだ。——だからこそ俺の『聖書の剣』や『聖書の盾』が生み出せし、三大勢力の戦争のあとには讚美歌等の聖歌が増え、修行をせずとも取り憑いた悪魔を祓う事ができる才能を持った人間が生まれるようになった」

「…彼女のあの十字架も、ソレと同じだと?」

「ああ。神に深く関わる、聖なる力を持つ物。その代表例が、聖書と十字架。カトリックだろうがプロテスタントだろうが聖書を読むし、十字だつて切るだろ? つまりはそう言う事さ。神を信じる人々が、須らく信じる物、行う事。それは人間の都合の良いように考えられてんじゃ無く、それが一番になるようになってるんだ。予定説つてのはあながち間違いない。信仰に関わる全てに、人間の自由意志なんかないって事だな」

「なるほど……だからあの十字架を模したマイクを通して聖歌を歌う事で、聖歌の持つ聖なる力を増幅し、聞いた悪魔を例外なく祓う事ができると…!!」

「そこに、歌に乗せて十字架そのものが持つ力も送られてるからもつと酷いさ。現魔王のお前がテレビ越しに聞くだけで苦しむんだぞ? ライザーはともかく、その眷属程度じゃしばらくまともに動けないばかりか、自分の存在すら見失ってるはずだぜ」

アーシアの歌に、ライザーの眷属たちは半狂乱という言葉が良く似

合う程に暴れていた。

その苦しみ方はサーゼクスの比じゃない。

そんな三人に、アーシアは止めを刺すことなく体育館を離脱。

足がかなり震えており、自分の歌った聖歌の影響をもろに受けてしまっているのが見て取れた。

：しかしおかしいな。なんで重要なポイントである体育館の確保を急がない？

苦しんでいるとは言え、時間が経てばダメージも回復する。

相手はフェニックスの眷属。ある程度不死性も譲り受けているはずだ。

それなのに放置して先に進むって……一体どういう？

頭に浮かんだ疑問の答えは、すぐに分かった。

アーシアが体育館を出て少し離れた所で、朱乃さんが体育館を雷撃で破壊したのだ。

そこで思い出す。

原作でも、朱乃さんの雷で体育館を破壊していたな、と。

細かい理由までは覚えていないが、ここまでは部長たちにとって狙い通りの展開のはず。

それにしてもアーシアがやけに消耗しているように見えるが、そこは考慮済みなのだろうか。

このまま次の戦場に向かっても、即座にやられる未来しか見えないが。

とはいえ現状一番注目すべきがアーシアであるという事に変わりはない。

俺にできるのは、彼女の活躍と勝利を祈るだけである。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』三名、『戦車』一名、戦闘不能！』

いつものと変わらぬ様子を装っているグレイフィアさんのアナウンスが聞えたが、その声は何処か憔悴しているような感じがあった。

流石の最強の女王でも、十字架ブースト聖歌はきつかったらしい。

※――

頭が痛い。気を抜けば今にも倒れてしまいそうなくらい、体力を消耗してしまった。

悪魔の身にして聖歌を歌う事のリスクは、重々承知していた。それでも実戦で使えるためにと、この苦痛になれる特訓は毎日欠かさず行ってきた。

だというのに、この消耗。

部長さんからも「悪魔の理に反する行為だから多用すると自分の命に関わる」と言われた程だし、やはりこの技は切り札として取っておくべきだったでしょうか？

いえ。鍛えたとは言え、四対一を無傷で突破できるなんて自惚れてもいません。

あの場を切り抜けるには、アレしか無かった。

破壊された体育館の上空で戦う朱乃さんと相手の『女王』さんが戦う音が背後から聞こえてくる。

最初は私も加わって、一緒に倒してしまった方が良いのではないかとも思っただけで、空中の相手には私だと分が悪い。

それに、こんな消耗した状態ですぐに戦っても、ただの足手まといにしかならない。

だから走る。部長さんの作戦を実行するために、真っ直ぐ。

祐斗さんと小猫ちゃんが待っている予定の校庭へ向かって走っている途中に、アナウンスで相手の『兵士』が追加で三人、倒された事が知らされた。

先に戦い始めてしまったのか、はたまた不意を突くチャンスがあったのか。

とにかく私も合流を急がないと。

走っている途中に、何とか『気』で疲労度を回復する事も出来たし、聖歌を歌うにまで行かなくとも、戦闘中役に立つことはできるはず。

黒歌さんから教わった息を整えながら走る方法を実践しつつ校庭に向かうと、比較的気づかれにくい用具入れの小屋の影に祐斗さんと小猫ちゃんが隠れているのが見えた。

向こうも私に気づいたらしく、こっそり来るようにと手招きしてい

る。

合流して二人の姿を見て、驚いた。

祐斗さんも小猫ちゃんも、どちらもとても怪我をしている。

大半がかすり傷だが、放っておけば必ずこの後の戦闘に支障をきたすはずだ。

私の元々持っていた力である『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』を使い、二人の怪我をすぐに治す。

こちらの日々のトレーニングのおかげで、回復にかかる時間が短縮され、回復できる範囲が大きくなった。

「ありがとうございます」

「いえ。——ですが、どうしてお二人がそんなダメージを？」

「それは……前情報との違いに驚かされて、その隙を突かれたというか」

「……相手、なぜか全員神器持ち」

「えっ？」

それはおかしい。

だって、確か相手の眷属に神器使いは居なかったはずだ。

それは部長さんが持ってきた最新のデータに載っていた事だし、そこも一つの勝ち筋だった。

それなのに、相手が全員神器を持っていた？

私の場合は、戦いが始まる前に無力化したからわからなかったけど……もし聖歌を出し渋っていたら、四人の神器使い相手に一方的に敗北していた可能性もあった。

「しかも、なぜか全員が似たような神器を持っていたんだ。——多分、全員で共有できるタイプの神器を持ってるんだと思う。それがこの十日間で手に入れた物なのか、前々から持っていて隠していたのか不明だけどね」

「けど、これで相手に一步勝っていたのが無くなってしまいました……ここから、どう巻き返すか」

「聞け!!私はライザー様に仕える『騎士』、カーラマイン!!このようにこそこそとした腹の探り合いにも飽きた!リアス・グレモリーの『騎

士』！そして『戦車』よ！正面から正々堂々と勝負しようではないか！！」

突然、校庭の中心から大声が聞えて来る。

声の主は自らをカーラマインと名乗り、武器を構えてはいるモノの特にトラップ等を仕掛けている様子も無く開けた空間に立ち尽くしていた。

本当に、正面から戦うつもりなんだ。

「——はあ。輪廻君に散々言われたんだけど、ね。僕はやっぱり、根っこの部分が『騎士』みたいだ」

「正面から、挑むんですか？」

「罠の可能性だってあるかもしれないのに……」

「それでも、だよ。僕だって『騎士』。この十日間で卑怯上等搦め手上等の精神を身に着けたとは言え、ああも愚直に名乗られたら隠れているわけにもいかないさ。——彼女が『騎士』なら、他には『戦車』と『僧侶』が一人ずついるはず。そっちの対応は任せたまよ」

「はい」

「……奇しくも、同じ駒」

頷く私と、拳を握りしめる小猫ちゃん。

その姿を見て微笑んで、祐斗さんは臆さずに前へ出た。

「僕がリアス様の『騎士』、木場祐斗だ」

「私は『戦車』。塔城小猫」

「私は『僧侶』の、アーシア・アルジエントです」

「ほほう。まさか本当に姿を見せてくれるとは。骨のある奴らで嬉し  
いぞ！罠の可能性を考慮して隠れている選択肢もあっただろうに、全  
員が前に出るとは。——だが、私はお前らのようなバカが大好きだ  
！！」

堂々と名を名乗る祐斗さんに続き、小猫ちゃんと私も名乗る。

そんな私達に、カーラマインさんは嬉しそうに高笑いしつつ、しか  
し「罠に嵌めてやった」と考えているとは思えないようなすがすがし  
い目をしてこちらを見てきている。

なんとなくわかっていたとは言え、まさか本当に罠でも何でもなく

呼んでいた、なんて……お手本のような『騎士』だ。

「馬鹿で上等、愚直で上等。——カーラマイン！同じ『騎士』として、君に一騎打ちを申し込む!!」

「良いだろうッ！私もこの新たな力、試すのであれば一騎打ちでと決めていたッ!!」

※——

「あのバカ。俺の教えた事早速無視しやがって」

『ふむ？そうは言っているが相棒、随分と口元が緩んでいるじゃないか』

「まーな。話の通じないタイプのバカは嫌いだが、ああいうタイプのバカは大歓迎だとも」

画面の向こうで激しい斬り合いを行っている木場とカーラマインを眺めつつ、ドライグと談笑する。

サーゼクスはサーゼクスで愉快そうに二人の戦いを見守っており、たまに俺がどのような修行をつけたのか等を聞いて、試合をもっと楽しもうとしている。

副音声扱いですか、俺は。

——しかし、連中の持っている神器。

アレは恐らく『神器であって神器でない』ものだろう。

言うなれば俺の『聖書の剣』、アジアの『十字架拡声器』のようなものだ。

神の不在により、神器という物のシステムにも多かれ少なかれ変動が出た。

神がいなくなった後に生まれた神器である『赤龍帝の籠手』等はまだ影響を受けなかったが、それこそ神が生きていた時代に、神が直々に作ったような神器はその性質にかなりの変化が起こった。

それだけじゃない。神がいなくなり、神器の定義が『神からの人間へのギフト』から『神の力に準ずる形を持った奇跡』となったが故に、人の手で神器をある程度容易に生み出せるようになってしまったのだ。

アザゼルが人工神器を生み出せるようになったのも、赤龍帝や白龍

皇の力を神器に封じ込められたのも、そのためである。

：で、長々と話してしまつたが何が言いたいのかというのと、彼女等が使っている神器モドキは、本質的には人工神器のソレに近いという事。

そしてこの神器モドキ、恐らく力の根幹を担っているモノが――

『まつたく。剣士というのはこれだからあまり好ましくありませんわ。頭の中が剣の事で一杯で、正々堂々と戦う事以外を是としない。』  
『犠牲』を主に命ぜられても渋るくらいなんですもの。正面突破は美徳かもしれませんが、こういう場合は悪手でしかありませんのに。ねえ?』

『ッ、貴方は、『僧侶』の…!!』

フェニックス由来の炎を操り、時に怪し気に輝く歪な剣を振るつて戦うカーラマインに、木場は俺が教えた通りのフェイントを織り交ぜた戦いで交戦していた。

だがどちらかというところと正々堂々とした戦い方が中心となつていて先が読みやすく、修行最終日に見せた成果通りの実力を発揮できているとは言えなかった。

それ故に拮抗状態となつていたわけだが、そんな二人を無視して向こうの『僧侶』、ライザーの妹であるレイヴェルが口を開いた。

ほんと、典型的なお嬢様キャラだよな。ここまで立派な金髪ドリルなんて今まで見た事ないぜ俺。

呆れているかのような口ぶりで話す彼女からは、戦場に立っている者独特の緊張感をまるで感じない。

それでも…いや、それだからこそ、小猫もアジアも身構え、どのような攻撃をされるか集中した。

だが警戒されているレイヴェル自身は、小さな扇を取り出してパタパタと扇ぐだけで、戦闘行動に移る様子はない。

『……その御一方。言っておきますけど、私は戦う気はさらさらありませんわよ?まあ、手持ち無沙汰だというならイザベラ、貴方が相手してあげなさい』

『元からそのつもり。——さ。どうする？二人同時に来てもいいし、一人ずつでもいい。私は『戦車』だからね、二人同時の攻撃だろうと捌ききれ自信があるよ』

『い、いえ。それは良いんですけど……』

『どうして、『僧侶』は戦わないの？』

すぐ近くで『騎士』二人が激しい剣戟を繰り広げているというのに、なんだか脱力した雰囲気。

アーシアと小猫の疑問に答えたのは、イザベラと呼ばれた顔半分を仮面に隠した女性だった。

まあ、理由は前に部室でアイツが語っていた通り。

ただ自慢するためだけに眷属に入れてる、言わばお飾りの『僧侶』だから、戦闘に参加するかしないかは自由意志なんだと。

二人とも呆れて物も言えない様子だった。

理由が理由だから仕方ないけどさ。

『ま、そういう事だから、戦うのは私だけさ。——丁度、あの二人の決着もそろそろ着きそうだし、はじめようか』

『……アーシア先輩。私に任せてください』

いつでも戦闘を行えるような構えを取るイザベラに、小猫が向かいあう。

画面越しにもわかるくらいに綺麗な『気』の練り上げだ。俺が教えただけの事はある。

アーシアが少し離れた所に移動した次の瞬間、二人は一気に動き出した。

交差する拳と足。

同じ『戦車』同士だが、パワー勝負は小猫の拳に軍配が上がった。

イザベラは苦悶の表情と共に距離を取り、再び急接近しながら今度は鞭のように腕をしながら攻撃した。

トリッキーな格闘術が彼女の本来の戦法なのだろう。だとすれば多少パワーが無くともカバーできる。

まあ、それ以上に『気』を使って体を強化しているかしていないかというのが影響しているわけなのだが。

敵ながらあつぱれと言える奇妙な攻撃の数々に、パワーで勝っているはずの小猫が若干押される。

防戦一方という訳でもない。時折攻撃に転じられてはいるが、致命傷に至っていないだけだ。

アーシアはただソレを見守るばかり。

任せてくださいと言われ、それに頷いたのだ。まだ押されているわけでも無いのに力を貸すのは無粋だと、そう思っているのだろう。

膠着状態の『戦車』対決に対し、『騎士』側は大きな動きがみられた。木場の魔剣が折られたのだ。

その事に自分の勝利を確信したのか、カーラメインが「貫ったアツ!!」と叫びながら炎を纏わせた剣を振り下ろす。

……だが、アイツは騙されている。

木場は今の斬り合いで、魔剣を一本しか使っていない。

そして普通は魔剣を複数使うなんてあり得ない。聖剣程適性は要求されないが、それでも複数本持つのはかなり稀なのだ。

だからこそ、カーラメインはアイツの剣を折って勝ったつもりになつた。

否。なつてしまった。

『貫った……ふふっ、違うさ!』

即座に新たな魔剣を創り出し、カーラメインの大振りな一撃をはじめ、隙を作る。

突然のことに驚き、動きが固まってしまう彼女は、せめてもの抵抗とばかりに口を開く。

『んなっ……ば、馬鹿な!二本目の魔剣だ?!一体、どこに隠し持っていた!』

『それも違うよ。僕の武器は、あの魔剣一本だけじゃなかったのさ。神器、『魔剣創造』<sup>ソード・パース</sup>。僕が望む限り、どんな魔剣でも生み出す事ができる。——例えば、こんなふうにもね!』

言い終わると同時にその場を離脱する木場。

それに訝し気な表情を一瞬見せたカーラメインだが、次の瞬間には再び驚愕に染まる。

地面からせり出す、大量の魔剣。

刀身も違う。柄も違う。炎を纏っている物から、夜闇よりも深く暗い刀身の物まで、様々な魔剣がカーラマインを囲むように、突き刺すように出現した。

確実に撃破するために、全方位から攻撃したのか。

腰に先程創り出した魔剣を携え、一呼吸つく木場。

誰の目にも勝利を確信しているように見える彼だったが、しかし異変に気付く。

『アナウンスがない?』

『当たり前だ。まだ私は敗れていないのだから!』

訝しむように呟くと同時に、その声に剣山の向こうの声が答える。

カーラマインだ。無数の魔剣に貫かれ撃破されたはずの彼女が、なぜかまだ平然としている。

『な、何?!?魔剣は確かに君を貫ぬいたはずじゃ?!?』

『そういう神器だ。タイミングさえつかめれば、一度戦闘不能レベルのダメージを受けても即座に再生できる。——まさに、フェニックスが如き神器だ』

『…剣の形をしているのに、攻撃的な能力じゃ無かったというのか?!?』

剣山を破壊して外へ出てきたカーラマインには、傷の一つも見受けられない。

神器の性能を読み違えた事に悔しそうに歯噛みする木場からは、普段の爽やかさが消え去っていた。

一度きりの切り札とも言うべき不意打ちが効かなかった事により追いつめられる木場。

そこに更なる絶望が飛来する。

校舎の方から吹っ飛んできた、一つの影。

地面に激突し土煙を上げたソレの正体に、木場とアーシア、そして戦いの手を止めた小猫が驚きの声を出す。

『『『い、イツイツセイ君、イツセイさん、イツセイ先輩、イツセイ!?!?』』』

『ぐっ、げほっ…ちく、しょう…!!』

ボロボロの制服を身に纏い、肌が火傷しているイツセー。

それが校庭に吹っ飛んできたモノの正体だった。

直ぐにアーシアが駆け寄り傷を治すも、足がもたついて立ち上がるのに苦戦する。

神器を纏っていないのを見るに、限界を超えて強化してしまった……或いは強化してしまいそうになり、やむを得ずやめたか。

どちらにせよ、その足の震えは強化が解除された事によるものに違いない。

そしてそんなイツセーに声をかけつつ校舎の屋根から飛来してくる、炎の翼を持つ男が一人。

ライザー・フェニックスだ。

『どうした下僕くん。まだまだ俺は本気なんて出して無いばかりか、まともに攻撃すら当ててないぞ？それなのにもう限界とは、良かったのは威勢だけだったみたいだな』

『…ふざっ、けんな…!! テメエが、 テメエが…!!』

悔しそうに睨みつけるイツセーに、しかしライザーは余裕そうな、愉快そうな笑みを絶やさない。

そしてライザーの後を追うようにして現れたのは、朱乃さんを抱えたユーベルーナだった。

…人質か、或いは肉壁か。

どちらにせよ、グレモリー眷属相手には有効過ぎる手段だ。

苦しそうに呻く朱乃さんを見て、木場達が息を呑む。

そして何があったのかを理解したのだろう。全員が鋭くライザーを睨みつける。

『おいおい、敵を即座に撃破せず盾にするのも、戦法としてあるんだぞ？それに見事に引つかかったのがお前だっただけで、俺には何の非も無いさ』

飄々とした態度を崩さないライザーは、何とか立ち上がったイツセーを挑発する。

いや、イツセーだけじゃない。この場のグレモリー眷属全員を挑発している。

もし仮に全員から攻撃されようと、自分なら問題ないとわかっているから。

それ以前に、朱乃さんを人質として持っているからか。

『さて。別にこのまま俺の炎で焼き尽くしてやっても構わないが、俺も三男とは言えフェニックス家の看板を背負ってるんだ。種まき焼き鳥だのとふざけたことを言ってくれやがったお前には、さらなるダメ押しをしてやろう』

そう言っただけでライザーが右手を横に伸ばすと、その手の中に歪んだ刀身の剣が出現した。

神器だ。恐らくアイツの眷属が持っているモノの、本元。

何よりこの感じる気配。

そうだ、やっぱりそうだった。

コイツは、コイツの力の根底にあるモノは——。

「…『夢幻』、か」

『この剣はそのまま『引換剣』という物でな。安直な名前だが、人の手によって生み出された神器さ。武器として使う事も可能だが、その真価は自分の命を対価とし、願いを叶えるという物。本来は一人一回の願望機だが、不死身である俺は違う。現にこの神器を量産し、下僕たちの願いを一つ無償で叶えられるようにした上で、こうして戦いに臨む事が出来た』

『…命と引き換えに、願いを…』

『そうさ。無限の命を持つ俺に相応しい神器だろう。——さて、これのおかげでリアスを痛めつけなくても、強制的に投了<sup>リザイン</sup>させる事だつてできるわけだが…俺はフェニックス。その看板を背負ってここに立つ男。両家の党首どころか関係者各位まで来ている所で、ただいっでも終わらせられませんでした、じゃつまらないと思ってな。せっかくだから、君ら下僕たちをまとめて相手してあげようと思ってな』

地に足をつけ、『引換剣』を素振りするライザー。

剣の形をした願望機。その力すらも手に入れたライザーの姿は、彼等に絶望を与えるに足るものであった。

そして、俺以外はまだ気づいていないが、すぐにでも知ることになる事が一つ。

イツセーの神器が、目覚めようとしている。

## 憤怒の龍魔王

頭が痛む。

手足に力が入らない。

まるで水の中に居るみたいなの、不自由さの混じった浮遊感。

——俺、何してたんだっけ。

そんな疑問が頭の中に浮かぶ。

前後の記憶があやふやだ。

部長の指示通り待機して、そしてついにライザーに動きがあつて

……その後、何が起きたんだっけ。

『よお、小僧。目を覚ましたか』

前後左右、どこから声をかけられたのかわからないが、低い声が俺に語り掛けてきた。

突然のことに驚きつつも、取り合えず返事だけでもしようと口を開く。

「お前、誰だ…？」

『あん？俺か。俺は——ま、名乗るのは後だな。まずは俺の宿主さまに、現状を把握して燃え上がってもらわにやならん』

宿主？何言ってるんだ？

困惑する俺を無視するように、まるで指を鳴らしたかのような音が響く。

かと思えば次の瞬間、浮遊感が無くなり、代わりに俺は豪華なソファに腰かけていた。

隣には、俺よりも背の高い男が座っている。

顔を見ようにも、なぜか見れない。

だが男だという事だけは確かだ。

『吹っ飛ばされたせいで記憶が飛んだみたいだから、ぎっくり見せてやるよ』

「吹っ飛ばされた？見せる？い、一体何を言ってる」

『いいから。ほれ』

男が指さした方を見ると、そこにはまるで映画のスクリーンのよう

な物があつた。

そしてそこに映るのは、俺の記憶。

本当は俺自身の物であり、尚且つ俺視点の映像のはずなのに、なんだか第三者の記憶を見せられているような気分だった。

流れる映像が、何があつたかを教えてくる。思い出させる。

部長と一緒に屋根に乗り、攻め込んできたライザーと対峙した事。

神器とプロモーションで強化された俺の力と、部長の滅びの魔力を使って、アイツを追いつめた事。

もうすぐで倒しきれるという所で、アイツが何故か神器を取り出した事。

そこから何故か立場が逆転し、その上アイツの『女王』がボロボロになった朱乃さんを連れてきて、動けなくなってしまった事。

そのまま吹き飛ばされ、校庭に居る木場達と諸共、アイツの炎に燃やされた事。

そして今は、俺達がやられた事に激怒しているリアス部長が、ライザー相手に必死に攻撃し続けている。

既に他の三人は戦闘不能扱いされているが、俺だけはまだ残っているらしい。

『今流れているリアルタイムの映像は、神器越しに映してるモンだ。お前が戦闘不能扱いされてないのは、こうして神器が発動しているからだな』

「なるほど……ってかお前、マジで誰なんだよ！名前は良いからせめて何者かだけでも言えば良いだろ!？」

『んじゃあ、俺はお前の神器に宿るモノ。ドラゴンであり悪魔、悪魔でありドラゴン。ま、長い付き合いになる予定なんだ。よろしく頼むぜ？』

「は、はあ。良くわかんねえけど、そうか」

……ん？この男って、神器の中に宿ってるモンなんだよな。

じゃあそんなコイツと面と向かって話している俺って、今神器の中に入っちゃってるって事？

あれー？と頭を抱える俺に、男は関係ないとばかりに話しかけてく

る。

『さてつと。本題入りますかー……なあ小僧。お前、あの悪魔……ライザーとかいうヤツ、どう思うよ?』

『どうつて……』

『ム力つくだろ。イケメンでハーレム野郎で、お前の大事な仲間を人質にして戦うような卑怯なヤツ。その上、お前が大好きなりアスとかいう女、お前から奪おうとしてんだぜ?』

悪魔を名乗ったコイツは、まさしく悪魔のように耳元で囁く。

まるで俺をそそのかそうとしているかのようだが、別にそんな事言われなくても、今まで何があったか思い出した俺にはアイツに対する怒りしかない。

「ム力ついでるに決まってるんだろ。——でも、命引き換えになんでも叶える神器とか持つてるらしいし、何より俺の体が動かねえ。今までみたいに、ただキレルなんてできねえよ」

『ふーん。んじゃ、諦める? 神器の中から聞いてたけど、あの女、まだ未貫通おぼこなんだろ? 好きな子一度も抱けないまま他の男の、それも既に何人も食い散らしてきたような男の女にさせちまって良いのかよ?』  
「良い訳ねえだろ!! だから今すぐでもアイツをぶん殴って、負かしてやる! 体力だつてもうねえし、アイツは俺なんかよりずっとチートな神器持つてやがるけど、ンなもん関係ねえ!! 良いか、キレたりしないけどアイツは許さねえしブツ倒す! 部長は誰にも渡さねえ!!」

まくしたてるように怒鳴った俺に、男は愉快そうに腹を抱えて笑う。

なんて面白い奴なんだと、俺から一度も目を離さない。

『イイね良いねその怒りその無謀その欲望! それでこそ悪魔! 古き良き悪魔つてのはこういうのを言うんだよ! 気に入ったぜ小僧! お前に力を貸してやるよ!』

「力を貸すつて……そ、そうすりやアイツを倒せるのか!」

『ああ。上手くやれば、だけどな? 俺の本来の力を貸す……つまり、一度強制的に『禁手バランス・ブレイカー』となるわけだ。今のお前の力なら、左手一本差し出しや10秒間、その力を行使できる。使い方は即座に頭に刷り

込まれるはずさ。神器俺の名前もな」

『禁手』……10秒間だけで、俺にアイツが倒せるのか?」

『弱気になってんじゃねえぞ小僧。良いか、悪魔だったらさつきみたいに傲岸不遜に、無知蒙昧に突き進め。俺の力はそういうヤツにこそ相応しく、真価を発揮できる。怒り狂え。欲に生きろ。お前が本当にしたい事だけ考えて、後の事なんか捨てちまえ。10秒間もありや、あんな小規模のフェニックスに負ける事なんてねえし、あの手に持つてる『夢幻』の力も微々たるもんだ。願いをなんでも叶えるなんて触れ込みしてるが、実際にはかなりの制限があるはず。——何度だつていうが、勝てない相手じゃねえよ』

俺の胸に拳を突き当て、男は後押ししてくれる。

悪魔らしく、欲望に忠実に、か。

勝てないなんて思わずに、後先なんて知りもせず、ただその時やりたいようにやる。

まさにいつもの俺じゃねえか。

『ほら、お前のお姫様がそろそろピンチみたいだぜ?行つて来いよ小僧』

「おう。——後、俺の名前は兵藤一誠だ。小僧じゃ無くて、イツセーって呼べよ」

『ほう、イツセー。あだ名つて奴か。クククツ……なら、俺も自己紹介してやろう』

そういうと、先程まで何故か認識できなかったはずの男の顔が鮮明に見えるようになり、そして男の背中からは蝙蝠のような羽が生え、頭部には角が生えた。

まるでキレた時の輪廻のような雰囲気を全身から滲ませる男は、俺だけでなく、この世界に告げるようにして叫ぶ。

自分の名を。俺すら知ってるような、超ビッグネームを。

『俺の名はサタン!!神の使いであり蛇であり龍であり、そして悪魔である原初の魔王!後に生まれた連中は俺の事を『憤怒の龍魔王』と書いてサタンと読ませるらしいんで、そつちも覚えてきな、イツセー!』  
あまりに衝撃的な自己紹介に面喰っていると、俺の視界は眩い光に

包まれて、そして次第に周囲に物凄い熱を感じるようになった。

この雰囲気、戦場に戻って来たんだ。

少し顔を上げると、部長が今にもライザーの攻撃に晒されそうなのが見えた。

その瞬間、俺は脳が沸騰したかのように怒りが湧き上がり、奇襲とかそんなのを考える間もなくライザーに怒鳴り散らす。

「俺の部長から離れろライザーッ!!」

「——ほお？ 戦闘不能扱いになつていないからまさかとは思っていたが、立ち上がるとはな。だが馬鹿なヤツだなりアスの下僕！ 隠れて背後を狙えば、まだ俺に一撃入れるチャンスがあつたかもしれない物を!!」

「うつせえ!! 奇襲なんざ必要ねえ! ——いいかライザー! 俺は……俺はっ、部長が好きなんだよッ!!」

俺の告白に、ライザーは今度こそ目を丸くして驚く。

いきなり何を言い出すんだと言いたげな瞳をするライザーに、部長に聞かれているのも承知で思いのたけを話す。

支離滅裂になろうと、お構いなしに。

「優しい部長が好きだ。怒ると怖い部長が好きだ。大人びた部長が好きだ。子供らしい一面を見せる部長が大好きだ! おっぱいが大きい部長が大大大好きなんだッ!! 家柄なんてどうでもいい、眷属と主なんてのもどうでもいい、俺はただ部長が好きなんだよ!! そりゃハーレムだって作りたいし、お前ほどイケメンでも無けりゃ甲斐性もねえただのバカな変態だけど、それでも部長が大好きなんだよ!! ——だから、絶対にお前なんかと結婚させねえ。婚約なんて認められつかバアアアアカッ!」

「はんっ、いきなり何を言い出すかと思えば、ムードも色気も何も無い思いの叫び! 何から何まで三流の下級悪魔くんらしい告白の仕方だな! だが俺がお前の為に遠慮して負けてやるとでも? いやいやないね! 寧ろ燃え上がって来たぜ下僕くん。お前の絶望する顔を想像しながらリアスの処女をいただくのは大変気分が良さそうだ! なんせまだ俺は寝取りプレイだけは経験した事が無いんでね!」

「黙れえええええッ!! 不死身だか何だか知らねえがぶつ殺すぞ腐れイケメン焼き鳥野郎!! 部長の、部長の処女は俺のモンだアああああああ!!」

『Satan's power over drive!!』

俺の渾身の叫びに呼応するように、左手の神器が輝き、そして俺は、深い闇に体を包まれた。

※——

『部長の処女は俺のモンだアああああああ!!』

ただ自分の思いを口にしました、みたいな告白をしたイツセーが、ライザーの言葉に怒り狂うかのように叫んだと同時に、その体を闇が包んだ。

黒い、悪魔とドラゴンの気配が入り混じった気配だ。

そして俺は、その気配の正体を知っている。

というか、神器そのもののシステム音が確かに名乗っていた。

「サタン……!?! 馬鹿な、それこそあり得ない! 姿を消したはずの原初の魔王が、なぜ神器に!?!」

「さて、な。これもまた神の不在の影響、なんだろうさ」

今日一番に取り乱すサーゼクスを尻目に、蠢く闇に包まれたイツセーと、ソレを見つめるライザーとユーベルナ、そして部長を眺める。

前二人は突然の変化に警戒している様子。

しかし部長は、イツセーの突然の変化に驚くよりも、先程の言葉にときめいているのか、頬を赤く染めて乙女の表情をしていた。

はははっ、やったなイツセー。お前の想い、届いたじゃねえか。

『なっ、なんだその力は! なんなんだその神器は!!』

『改めて自己紹介だぜライザー……! 俺は兵藤一誠。憤怒の龍魔王の神器を宿す者だッ!!』

『Break down!!』

システム音と同時に、イツセーの全身から凄まじい力が解き放たれる。

原作のイツセーが最初に禁手の力を振るった時も、このような力を

放ったのだろう。

勿論俺には遠く及ばないが、確かにその力はサタンを名乗るに足るモノであった。

突然のイツセーの変化に、ライザーもその眷属も目に見えて狼狽する。

だがイツセーは止まらない。恐らく、その目には何も見えていない。

真っ黒で所々にオレンジ色のマグマのような光が見える全身鎧をまとい、巨大な蝙蝠の翼のように見える黒いエネルギー体をはためかせ、ヤギのように歪み捻じれ曲がった角をはやすその姿は、まさに悪魔。

顔を覆い隠す鎧の口の部分は、まるで三日月のように裂け、ギザギザの歯を見せ笑っているかのような見た目をしていた。

『ふ、ふざけるな、ふざけるなよ！そんな物、ただのコケ脅しだろうが！サタンの力を持った転生悪魔が、居てたまるかアツ!!』

『知るかッ！んなことどうでもいい！俺の部長から離れやがれ、焼き鳥ホストオとおおおッ!!』

翼を大きく動かしたと同時に、イツセーの姿が掻き消える。

その次の瞬間にはライザーとユーベルナは校舎に向かって吹き飛び、部長のすぐそばにイツセーが移動していた。

言ってしまったえば、ただ急接近して殴っただけ。

そこには何の工夫も戦術も作戦も無く、感情のままに暴れる姿はまさしく憤怒。

アイツはキレてる。今までにないくらいにキレている。

ライザーへの怒りが最高潮に達し、それ故に神器の力をここまで引き出せているのだ。

だがとつくに限界は迎えている段階。

本調子なら原作より鍛えられている分長くなっただろうが、先程の状態からならば十秒が限界だろう。

しかしその短い秒数をデメリットと感じさせない程の力。

サタン本来の『感情の高ぶりで強くなり続ける』力に、アイツのラ

ライザーへの怒りと部長への愛と性欲とが上手くかみ合ったのだ。

短い秒数が無駄にしない為か、それとも永遠に再生を続け、隙を与えればどのような願いだろうと現実にしてしまう『夢幻』の力を持っているライザーに微かな時すら与えない為か……それとも何も考えていないのか。

とにかく、イツセーは吹き飛んでいったライザーを追うように再び超速移動。

ユーベルーナは先程の一撃で既に撃破された。

残るはライザーのみである。

『ライザああああああああああつ!!』

『ぐっ、ぐうっ……ぐぼああつ!!』

回復の炎を揺らめかせつつ立ち上がったライザーに、イツセーの拳が即座に突き刺さる。

殴り飛ばすなんてことは無く、その鋭い一撃はライザーの腹を貫いた。

かと思えば次の瞬間にはライザーの頭部が吹き飛び、後にはもう片方の手を振り抜いたままの状態で残心するイツセーだけが残った。

……凄いいスピードだ。一応『女王』にプロモーションしてコレらしいが、『騎士』になって速度重視にすれば俺でも神器無しじゃキツイ段階にまでなつていやがる。

まだまだ成長段階の癖に、これか。

これが、原初の魔王の力か。

『く、くそオっ、『夢幻』よ！俺の願いを叶えろ！あのサタンのガキを完膚なきまでに叩き潰せ！手段も何も問わん！俺が奴に勝つという結果を——ぐぼあつ!!』

『遅エなアツ！全ツ然遅いぞライザー！『夢幻』の力はお前の思ってる程万能じゃねえつてのは、こっちはもうとつくに気づいてんだぞ！』  
イツセーは凜猛に告げる。

その力は後五秒しか持たない。

だがそれでも、この圧倒具合ならば事足りよう。

ライザーとの実力差は、確かに今逆転している。

負けはない。——本当に、五秒間も使えるのなら、だが。

『つしやあ止めだッ!!不死つてのは体力と精神力が弱点なんだよなあつ、だったらソレを削りきるような一撃をぶちかましてやれば、それでいいだろうがよおッ!』

『調子に乗るなつ、下僕風情がああああああッ!!』

一際力を溜め、イツセーはその拳をライザーに急接近して振るう。しかしライザーはソレを防ぐように大量の炎を放出する。

追いつめられようと、相手がサタンだろうと流星はフェニックスとすべきか。

その炎は、確かにイツセーの拳を食い止めた。

だがこのままならすぐにも破られるような拮抗状態。

誰もが予想した通り、ライザーの炎はイツセーの拳に吹き飛ばされ、無防備になったライザーの眼前にイツセーが拳を構えて立つという状態になった。

そして誰もが確信する。

この勝負は、イツセーの勝ちだろうと。

しかし、ライザーの最後の抵抗は、確かにイツセーを追いつめていた。

『time out』

『ん——!?!』

タイムアウト。十秒も経っていないのに告げられた言葉は、イツセーにとっては何よりも残酷で、ライザーにとっては福音だった。

そう。イツセーは限界を超えた力を操った。

その手をサタンにすら捧げ、今出せる全てを出し切った。

しかしその一撃は、不死鳥の炎をかき消すのみで終わってしまったのだ。

後には鎧を維持するだけの力しか残らず、最後の1撃を加えようと力をためたと同時に維持すら不可能となった。

力を失ったイツセーは、ただその場で崩れ落ちるのみ。

そしてそれと同時に、転移の光が輝いた。

——強制退場。

力を使いつくしたと、レーティングゲームのシステムが判定したのだ。

まだ戦えると言いたげな顔をしていたが、画面越しでもわかる。アイツの『気』はさながら死にかけの病人のように弱々しく、とても戦えるような物では無かった。

『——り、リアス・グレモリー様の『兵士』一名、戦闘不能』

たどたどしくイツセイ退場のアウンスが告げられると、突然の事に戸惑っていたライザーが肩を震わせ、そのまま狂ったように高笑いを始めた。

『ふ、はは、ははは、ハハハハハハハハハハッ!!バカなヤツだ!身の丈に合わない力を無理矢理行使おうとするからこうなるんだ!!——さて、あのサタンを名乗る下僕は居なくなつて、これで『王』対『王』だ……さつき俺と戦つてわかつただろ、リアス。君じゃ俺には勝てない。それに君がここで無駄な抵抗をして傷つくのは、君の為に戦つた下僕たちにとつても不本意のはずだ。——大人しく『投了』<sup>リサイン</sup>しなよ、リアス』

『……『投了』<sup>リサイン</sup>、するわ』

唇を噛みしめながら、ライザーの言葉に従い『投了』する部長。悔しそうにしているのだが、なぜか目が虚ろだった。

——そりゃ、本人の意志じゃないからだろうがな。

『引換剣』と呼ばれた剣が怪しく輝くのを、俺は確かに見ていた。しかし俺以外の誰もが気づかない。

サーゼクスに至つては先程のサタン云々の事で頭が一杯になつて  
いるらしい。

……つたく、目の前で堂々と不正してるヤツがいるんだから、ちゃんと見とけよな。

「……サーゼクス。思考に埋没中の所悪いが、お前の妹さん負けたぞ」  
「——えっ?あ、はあっ?さ、サタンの力を持ってしても勝ちきれなかつたと?」

『お前は見てなかつたのか。兵藤一誠は力を使い果たして退場し、リアス・グレモリーは『投了』を選んだ。——まあ、あの女の本心では

無かったようだが』

ドライグの説明を受けて、ようやく現状を理解したのか、愕然とした、しかし確かな怒りが混ざった表情を見せるサーゼクス。

本心では無かった、の一言で何とかなく察したのだろう。

ライザーは『夢幻』の力でリアスに『投了』させたのだと。

しかし怒りを覚えたとして、その瞬間を見たのは俺一人。

証拠も何もない以上、魔王という立場にあるコイツが行動するのは不可能だ。

……だから、俺が動いてやるとするかね。

親友の恋路だ。ちよつと手を貸すくらい問題ないだろう。

「つてな訳でサーゼクス。婚約式だか結婚式だかわからんが、乗り込んで無理矢理婚約破棄させたいと思うんだがどうだろうか」

「——いいのかい？」

「ああ。親友があんな世紀の大告白やってのけたんだ。それがあんな結末ではいお終いつてもアレだろ。それに『夢幻』が無けりゃ、あの消耗具合……部長に勝機はあつたはずだ。個人的にも『夢幻』関係者は許せないんでね」

「そうか。——なら、頼むとしよう。式場が決まり次第、日時と乱入用の転移魔法陣を君に渡そう」

サーゼクスの言葉にうなずき、俺は部屋を出て、校舎を去る。

まだ真夜中だ。長い事戦っていたようで、しかしそれほど時間は経っていないかったらしい。

『気』の力を使つて空中を移動しつつ、ドライグに声をかける。

「なあドライグ。あの『夢幻』、お前は どう見る？」

『兵藤一誠が言っていた通りだろう。アレは万能に見えて、しかしそれほどどの力を持たん。どんな願いだろうと、とは言っていたが、実際は大した願いも叶えられんだろうな。それこそ死人を蘇らせる等頼めば、即座に壊れるだろうよ。アレはその程度の『夢幻』しか持たん。というよりも、あのグレートレッドの力を人の作り出したものに抑え込めるわけが無い』

「だろ。ライザーはそれに気づいていないのか……もしくは、騙

されてるのかもな」

アイツから感じた、最初の対面時には無かった別のオーラ。  
それも『夢幻』に近いオーラであったし、何よりアイツの様子も  
少し変だった。

まるで、操られているかのような。

「つたく。ただの結婚騒動に連中が絡んでくるなんてなあ」

『…だが、やることは一つだろう?』

「ああ、いつも通りさ」

——纏めて捻じ伏せる。俺にできるのは、いつだってそれだけさ。

## 他ならぬ親友の為に

部長たちのライザーとのレーティングゲームが終わって、数日。

俺の部屋に突然現れたグレイフィアさんが、「サーゼクス様よりあなたへ、と」と言つて、転移用の魔法陣が書かれた招待状を渡してくれた。

招待状にはしっかりと厳密な日時が書かれており、俺がどのタイミングで乱入すれば良いのかすらも書かれていた。

ここまで仕込みをしてもらえらるとは流石に思っていなかったが、まあやつてもらえたことには感謝感謝だ。

「……んじゃ、そろそろ時間だな」

「本当に行くの？流石のご主人様でも、フェニックス相手は…」

ベッドから起き上がり、転移の魔法陣を手取る。

そんな俺に、心配する様に黒歌が声をかけてくる。

彼女は俺がどれくらい強いのか正直わかっていない節があるので、相手によつてはこうして心配する素振りを見せてくれるのだ。

ここで「実は俺、世界最強なんだよね」なんて言ったらどんな顔をするだろうか。

流石に信じてもらえないか。なんだかんだ言つても俺はただの人間だしな。

「ま、大丈夫さ。対悪魔の性能には自信あるしね」

「……酷い怪我とかして帰ってきたら、絶対許さないから」

「おうよ。いくらでも怒りな、怪我してたらな」

流石に無傷で勝てるまでは思っちゃいないが、そんな考えはおくびにも出さずに黒歌の頭を撫でて笑う。

今回の戦いで、俺が赤龍帝の力を使うわけにはいかない。

もし使つてしまえば、リアス・グレモリーはドラゴンの力を使つて婚約を破棄したと後ろ指を指されてしまいかねない。

そんな事、部長もイツセーも望まないだろう。

だからこそ、俺はただの人間で、友人という立場で戦う必要がある。使えるのは『聖書の剣』と『聖書の盾』、後は『気』の力くらいか。

レボリユーション・スベルブック  
バレない程度なら、『反魔の万能書』を使ってもいいかもしれない。

フェニックスの炎も、元をただせば魔法だからな。  
あの神器を使えば、必ず無効化できる。

「…んじゃ、行ってくるわ」

「行ってらっしゃい、ご主人様」

黒歌に見送られ、俺は式場へと転移するのだった。

部長やイツセー。アーシア達みんながいる、式場へ。

※――

俺はライザーに敗れた。

左腕を捧げ、その命すら使い潰すつもりで戦ったのに、ギリギリで届かなかった。

気にすることは無いと、イツセーはよく頑張ったと、皆も部長も慰めてくれたけど、結果はアイツに部長を奪われたまま。

不甲斐ない。あんだだけ大見得切っておいてこのザマだ。

そしてあの戦いから数日たった今、俺は部長とライザーの婚約パーティーに参加している。

サタンにくれてやった左腕は、今もまるで神器を展開している状態のようになっている。

神器との違いは、まるでこの腕が生きているかのように脈動している所だろう。

貴族らしき人達とすれ違う度に「アレがサタンの…?」「なんというオーラだ…」とか色々囁かれた。

まあ、最終的にその驚きとか畏怖みたいな感情は「でもまだ未覚醒だろう。フェニックスの三男に敗れたのだから」という結論に至るわけだけど。

ソレを言われる度に、俺の中に言いようのない感情が渦巻くのを感じる。

怒りと、悔しさと、後はもうとにかく負の感情が一杯。

泣き出しそうだし、叫びだしそうだ。でも、部長の眷属である俺がこんな大勢の前で情けない姿を見せるのは、部長の評価に関わってし

まう。

だから、歯を食いしばって堪える。

「皆さまーこの度は私ライザー・フェニックスとリアス・グレモリーの婚約の席にお集まりいただき、誠にありがとうございます！」

マイクを片手に、ライザーがそんな事を言う。

相変わらずムカつく笑顔だ。ぶん殴って滅茶苦茶にしてやりたい。でも、今の俺にそんな事ができるかと言われたら、ノーだ。

あの戦いで力の殆どを使いつくした俺は、しばらくの間戦闘はおろか少しの激しい運動すらも不可能になっているのだ。

輪廻曰く『気』を使いつくした影響らしいが、これ自体はちゃんと飯食って寝てれば数日で直るらしい。

問題は、今すぐには直らないという点のみだ。

今俺が動けたら、右腕だろうと両足だろうと何だろうと捧げて、もう一回あの力を使ってライザーをぶちのめすのに。

俯いて悲痛な顔をしている部長をどうしても視界に映したくなくて、俺は隣を見る。

木場に小猫ちゃん、朱乃さんにアーシア。同じオカルト研究部の仲間が、部長の眷属である仲間が、俺みたいに悲しそうな顔をしてそこに居た。

——皆、頑張ったのにな。

アーシアなんて、びっくりするくらい強くなってた。自分が消滅する危険だつてあるのに、聖歌を武器にするなんて。

「部長さん、とても辛そうです……」

「…仕方ありませんわ。結局、私達は負けた。リアスを助ける事を、彼女の夢を守る事を、達成できなかつた」

朱乃さんの言葉に、全員が唇を噛みしめる。

壇上では、ライザーが他の貴族から祝福の言葉を貰い、嬉しそうにしている所だった。

……畜生。左腕を捧げても、この命を懸ける覚悟があっても、どうして俺は届かなかつた。

俺じゃ、部長の隣に立つちや、ダメなのかよ…!!

「いやあ、嬉しいお言葉をありがとうございます。では次は——  
ん？参加者？おかしいな、全員揃っているはずだが」

突然どよめきだす会場内に違和感を感じ顔を上げると、なぜか転移用の魔法陣が輝いているのが見えた。

あの魔法陣……グレモリー？グレモリー家の中に、まだ来ていない人でも居たのか？

誰もが頭に疑問符を浮かべる中、一際強く光が輝いた後、そこに居たのは——。

「…輪、廻？」

「突然現れた上で言うのもアレだが、この結婚、無かつた事にさせてもらう」

黒いトレンチコートに身を包み、今までで一番の威圧感を放つ、輪廻だった。

突然現れたのが人間だと気づいた悪魔たちは、皆騒然とする。

そして輪廻を知る俺達やライザーは、もつと驚いた様子を見せる。

「なつ、なぜあの人間がここに…!!つ、つまみ出せ!!」

ライザーの怒号に従うように、衛兵たちが動き出す。

止めないと、と思っただけ皆が動こうとした直後、凄まじいプレッシャーが会場を制圧した。

無論、その発生源は輪廻だ。

相変わらずのただの人間とは思えないような圧をまき散らしながら、一歩ずつライザーと部長に近づいていく。

威圧感で、近くの貴族たちが持っているワイングラスが砕けた。

——いやいや本当にバケモンじゃねえか!!俺の幼馴染君やばすぎないかな!?

「久しぶりだな、ライザー・フェニックス」

「き、貴様…ツ!!ここがどのような場であるか、知らないとは言わせんぞ!」

「ああ、知ってるさ。そしてお前がどうしてこうなれたのかもな」

輪廻の言葉に、ライザーは露骨に言葉に詰まる。

どうしてこうなれた？一体なんの話をしてるんだ？

「あの剣…『引換剣』とか言ったか？アレ、夢幻人のモンだろ」

「——ッ!!なっ、貴様なぜソレを!!」

「わからないと思っただか？——そして、お前がそれを使って何をしたのかも、俺は知ってる」

誰の目から見ても取り乱している様子のライザーに、輪廻が止めを刺すかのように一言告げようとしたその瞬間、ライザーはその手に炎を出現させて攻撃しようとして——。

即座に、ドス黒い魔力によって炎が消滅させられた。

まるで部長のような魔力を放ったのは、これまた部長のように紅色の髪をした男性。

木場みたいな、爽やか系のイケメンだ。

そんなイケメンが、ツカツカと二人の下に歩み寄る。

「さっ、サーゼクス様!!」

「感心しないなあ、ライザー・フェニックス君。人間相手に、話の途中に攻撃を仕掛けようとするなんて」

サーゼクス様の言葉に、ライザーは渋々頷いた。

ソレを見てなにやら満足した様子のサーゼクス様は、今度は輪廻に向き合っそう言った。

「君はあの戦いを見て、何か不満に思う所があった——そう捉えて良いかな？」

「ええ。最後の『投了』<sup>リサイン</sup>の瞬間、確かに彼の神器が輝き、その力を発動していた。所有者の命と引き換えに、願いを叶える力が」

「い、言いがかりだ!!」

「その力を使い、リアスに『投了』させた…と？」

声を荒げるライザーを手で制し、サーゼクス様は輪廻に問いかける。

「これまた凄まじいプレッシャーだが、輪廻は臆することなく頷いた。

「ええ。しかしそれに気づいていたのは、どうやら俺だけだったようで、誰に言ってもそのような事実はないと返される。——しかしながら結婚という一大行事の有無を決める戦いの結末が、このような不

透明なまま終わらせて良いとは到底思えない。ですの俺はこうして式に乱入し、部長……リアス・グレモリー嬢を連れ去ろうかと考えたわけです。単独でね」

態々単独という言葉を強調したのは、きつと全責任を自分で負うつもりだからだろう。

俺達の、何より部長の評価を悪くさせない為に。

そんな輪廻の言葉に、サーゼクス様は少し考える素振りを見せてから口を開く。

「ふむ。確かに、あの試合を見ていた者の中に一人でもあの結末に異議を唱える者がいるなら、そのような状態で人生における大事な決断をさせる訳にもいかないな」

「な、何を」

「だが、ぽつと出の人間の言葉に従って『じゃあ無かつた事にします』とはできないのだよ。悪魔にも面子があるのでね。———そこで、だ」

サーゼクス様は一度言葉を切り、ライザーと輪廻を交互に見据える。

その目からは何の感情も読み取れない。

何を考えているのか、まるで分らない。

「君とライザー。両者の意見は食い違っている……そうだろうか？なら簡単だ。悪魔的に決めればいい。実力で、己の意見を貫き通せばいい」  
「……それはつまり、私にこの人間と戦え、と」

「その通りさ。構わないだろう？君はただの人間と戦い勝利すれば、この先誰にも文句を言われずにリアスと結婚できる。対して———君は、婚約破棄以外に何を望む？この戦いは悪魔としての戦いだ。人の身だろうと、勝者には然るべき報酬が必要だと思うね」

その発言に、会場の悪魔たちは騒めく。

ただの人間に、魔王様が何か褒美をやると言っているのだ。

悪魔のささやきとも言うべきその言葉に、輪廻は一度俺の目を見てから口元を歪め、こういった。

「そうですね。彼女、リアス・グレモリーの縁談を破棄、というのは前

提条件。褒美としてももらえるならば——俺の親友、兵藤一誠とリアス・グレモリーの交際を、許可していただきたい」

「えっ!!」

「はあッ!!」

輪廻の爆弾発言に、俺と部長、そして部長の御家族が驚愕の声を出す。

いやいやいきなり何言っちゃってんの!?ここ、ここ、交際ッ!?俺と、部長が!?

「ま、待て待て輪廻いきなり何言ってるんだよ!」

「何言ってるって、言葉のままだが」

「そういう意味じゃなくってさあ!」

周囲の目とか、魔王様の前とかそういうのは一旦忘れて、輪廻に掴みかかる勢いで壇上に立つ。

俺の言葉に、輪廻は飄々とした態度を崩さない。

部長は、なぜか顔を赤くしていた。

お、怒ってるのかなあ。だって望まない結婚は嫌だって言ってたしな。

俺なんかじゃ、望まないどころか話にならないだろうよ。

「あの試合の最後。お前がサタンの力を使った時。確かにお前は告白してたと思うけどな。部長が好きだと」

「そ、そうだけでも!でも、それとこれとは…!!」

「別に俺は結婚しろとまでは言っていないさ。あくまで交際。部長がお前を嫌だと思えば、俺が勝った時点で別れの言葉でも告げりゃいい。告白はもう済ませて、でも婚約云々で有耶無耶になってる状態。だったらその婚約が無くなりゃ、お前の告白に応える事だって可能なわけだ。——でももし仮にお前の想いに応えようと部長が言ってくれたとしても、お前たちには『主と眷属』、『純血悪魔と転生悪魔』、『貴族と平民』なんて壁が立ちふさがるわけだ。俺の願いは、グレモリー家の方々に、もし二人が交際の意志を固めた場合その壁を取っ払ってくれっただけ。付き合うも付き合わないも、部長とお前の意志だよ」

「そ、それじゃお前に何の得も無いんじゃない」

「だあー!! テメエそれでも悪魔か! 貰えるモンはありがたく貰っとけ! —— 後、ここで改めて言っとけ。お前の想い。もう腹括ってんだろ、フラれても構わねえって。だったら言え、躊躇うな! お前はリアス・グレモリーをどう思ってたんだ!?!」

輪廻の言葉に、なんだか会場の奥様方が騒がしくなる。

時々「若いわねー」とか聞こえてくるのは一体何なんだ。

チラツ、と部長を見る。

部長は顔を赤くしたまま、しかし何故か覚悟が決まったみたいな顔をして俺を見ていた。

え、ええっ! これ、俺の告白待ち!?

—— え、ええい、ままよ!

「お、俺は部長が—— リアス・グレモリーが大好きだアあああああッ!!」

「良く言った!」

「うんうん。流石だ」

半ば自棄になって、腹の底から声を出す。

そんな俺に称賛の言葉をかける輪廻……と、サーゼクス様。

拍手までしている。いやなんで!?

部長は—— ちよつと、今は見れない。

だって恥ずかしいし! こんな大勢の前で告白なんてしてすんませんね本当!

「じゃあ、その返事はもし君が勝ったら、だね?」

「ええ。この戦いが終わった後に、ですネ」

まるで負けるつもりがないと言いたげな輪廻に、ライザーは見るからに不機嫌そうな顔をする。

人間風情が舐めるなど、そう言っているようだ。

「—— では、会場の準備をしましょう。二人とも、良き戦いを期待しているよ」

※——

「くそっ、なんでこんなことに……ッ!!」

「随分と不機嫌だな、ライザー」

「人間風情が気安く俺の名を呼ぶな!!」

不機嫌そうに炎をチラつかせ、俺を威嚇するライザー。

その表情に余裕は見られない。何度も俺の威圧を味わったからか、警戒している様子だ。

対する俺は自然体。

武器も構えず、動きやすくするためにコートのボタンをいくつか外しただけである。

だがいつでも『聖書の剣』は取り出せるし、『聖書の盾』に至っては攻撃と同時に発動するようになっていいる。

盤面は整った。後は倒すだけだ。

会場に急遽つくられたフィールドで、俺とライザーは向かいあう。

開始の合図は当に告げられた。どちらかが仕掛ければ、力のぶつかり合いが始まるだろう。

どちらかが倒れるまで。

「聞きたいんだが、夢幻人といつどこで接触した？連中の居場所を知っているなら吐いてもらいたい」

「聞かれて答えるとしても？貴様のような、不愉快極まる人間に！」

…ふむ。洗脳されているとは思ったが、まさかここまでとはな。

本来のライザーは、アレでも強い奴には敬意を見せる事もあるし、あんな卑怯な戦い方だってしない。

味方の犠牲を問わないヤツではあるが、冷酷無情という訳でもないのだ。

大方、あの『引換剣』を受け取らせるために洗脳したのだろう。

それと同時に、俺に対し無意識に嫌悪感を抱くように仕掛けた。発見次第、理由が無くとも殺すように仕向けたわけだ。

全く、一々作戦が狡い奴らだ。

「にらみ合ってるだけじゃつまんねえだろ？そろそろ始めようぜ」「はんっ、言われなくてもそのつもりだッ!!」

ライザーの炎が俺を襲う。

実際に対面すると凄いな。炎の塊が迫ってくるインパクトは。

交わすことなく『聖書の盾』を発動し、その攻撃を防ぐ。熱も衝撃も完全に防いでいる。流星は聖書の力を持つ盾だ。炎で包まれて誰の目に見えなくなっている今の内に『聖書の剣』を構え、走り出す準備をする。

炎が消えるタイミングが、俺の攻めるタイミングだ。ジツと待つ。油断させるために、アイツが「やった」と思うまで、待機。

そして、時は来た。

「ふん、口ほどにも——何ッ!?!」

「油断したな、ライザー」

聖書の剣を逆手に持ち、駆け寄って直ぐにライザーの腹部から胸元にかけてを斬りつける。

高密度の光の攻撃を受けた奴の体からは、煙が立ち上った。

焼かれるような痛みが、全身を駆け巡っている事だろう。

しかし攻撃の手は緩めない。

まずは一度目の死を迎えてもらおう。

右手に持つ剣を振るい、ライザーの頭部を切断した。

その数秒後に、再生が始まる。

炎が揺らめいて、攻撃された部分が癒えていく。

「——はあつ、はあつ!?!そ、その剣……まさか聖剣か!?!」

「そんな大層なもんじゃない。これはただの『聖書』だ。剣に加工した、な」

「剣に加工した、聖書……?馬鹿な、そんなものが……仮にあつたとしても、なぜそれほどの痛みを俺に」

「そりゃ、聖書だぞ?十字架、祈り、聖書は神の力を一際受けているモノの代名詞。それが武器として相手を斬りつけ、その聖なる力を流し込めば、いかにフェニックスと言えど一撃で限界だろう?」

歯噛みして、ライザーは俺から距離を取る。

空を飛んでまで逃げるその姿は、まさに弱者のソレ。

この場の強者は、上級悪魔<sup>ライザー</sup>ではなくただの人間<sup>俺</sup>だ。

「認めよう、認めてやろうじゃないか人間!大口を叩くだけの事はあ

る！——だが、お前が無類の強さを誇るのはあくまで地上のみだろう！なぜなら人間は翼を持たず、俺は不死鳥と呼ばれし翼を、炎の翼を持っていて！今謝ればお前の不遜な発言の数々、水に流してやっても吝かでは——」

「御託は良いからさっさと続きやろうぜ、来ないならこっちから行くがな」

『氣』で足場を作り空を歩く。

階段を上るように足場を踏みしめてライザーへと接近し、再び聖書の剣を振るう。

俺が空中を移動した事に驚いたライザーだったが、今度は何とか回避した。

しかしギリギリ掠ったのか、光という猛毒に犯され苦しそうな顔をしている。

「く、くそつ、くそつ、くそつ、クソがアあああッ!!人間が、人間如きが!!俺はフェニックスだぞ、負けるはずが——」

「だから喋ってる暇があるなら攻撃すりゃいいだろ」

聖書の剣を投擲し、ライザーの腹部を貫く。

そのダメージに動きが鈍った瞬間を狙い肉薄し、新たに取り出した剣で頭部を切断し、踵落として地に落とす。

これで二回目。

一回目の消耗具合を見るに、後二回も殺せば終わるだろう。

「いや、一回でも済みそうだ。どうやら、俺の予想以上に事が容易く終わりそう——だったな。邪魔さえ入らなけりや。」

「アフターサービスも万全ってか、夢幻人さんよ」

「ええ。お客様のピンチには即座に駆けつけるのが私のモットーですので」

足場を消して落下しつつ、先程まで俺がいた場所に光の剣を振るつた天使を睨む。

「——どうやら、ライザーをこのまま負けさせるつもりは無いらしい。」

しっかし参ったな。聖書の剣くらいしか使えないというのに、天使

と来たか。

こりや、無傷で帰るのは難しいか…？

※――

「なっ、天使だと!？」

「なぜ天使がこの場に!？」

先程まで輪廻の戦いに驚いていた悪魔たちは、今度は突然現れた天使に驚愕と恐怖を見せる。

俺達も驚愕しているが、驚ているのは乱入者が天使だから、だけではない。

輪廻の口から出た、『夢幻人』という言葉である。

夢幻人。奴らは真の赤龍神帝と呼ばれるグレートレッドというドラゴンを信仰している団体…らしい。

その信仰の邪魔となると判断したのが、今代の赤龍帝。二天龍という凄いドラゴンの片割れ…の、力を宿した神器の今の持ち主。

なんでもソイツは時間を操る力を持ち、過去と未来とを自由に行き来して、その力を振るつたという。

何度か夢幻人を名乗る悪魔と戦って得た情報によると、

・曰くその赤龍帝は無限の龍神と呼ばれる最強のドラゴンを倒した。

・曰くその赤龍帝は過去現在未来の強敵との戦いを望んでいる。

・曰くその赤龍帝は純粋な人間であり、夢幻人は名前も顔も把握している。

とのこと。

部長たちから色々説明も受けて、なんとなく分かった事が一つある。

今代の赤龍帝、頭おかしい。

なんでも無限の龍神とやらは文字通り無限の力を持っているらしく、それを倒すには同じく無限の力が必要とのこと。

神様だって滅ぼしきれないようなヤツを敗北に追い込むってのは、どうしようもなく頭の悪い事だと部長が言っていた。

後時間の流れに逆らうのも、そういう効果を持つ神器にのみ許され

たことであり、もしそのような神器を使っていないなら相当の脳筋<sup>バカ</sup>と  
のこと。

何が不思議って、俺達が何故かそんなバカと知り合い扱いされているのが不思議だ。

……まさか、松田とか元浜とか……いやいやないない。

アイツ等が「強い奴と戦いてえ！」なんて言う所想像できねえし。  
輪廻に至っては「戦いとかめんどくせー」とかいうタイプだろ。今  
は俺達の恋路の為に戦ってくれているけど。

——つつか、勢い余って告白しちゃったけど大丈夫かな俺。アイツ  
が勝ったとして、俺は部長にどう思われてんだ？

……ま、絶対フラれますよね。わかっています。わかっていますけども。

「お、お前は……は、はははっ、た、助けに来たのか！」

「ええ、ライザー・フェニックス殿。どうぞ『引換剣』のお力をお使い  
くださいませ。その隙は、私が作ります故に。——立神輪廻。貴方の  
『神器』でなければ私を倒す事は不可能でしょう？なぜ故その力を振  
るわないのかは疑問ですが、使わぬというならば……」

死にますよ。

そう告げると同時に、天使の男は輪廻に向かって剣を振るう。

空中からの落下の勢いを使った斬撃は、例え悪魔であろうと耐えら  
れないはずだ。

そもそも光の力って時点で悪魔的には大分ダメなんだろうけど。

……ってかライザーの野郎、夢幻人と組んでやがったのか！

しかもよりによって、天使だと!?

いやいや今はそれよりも、だ。

輪廻は避けようとも武器を構える素振りを見せるわけでも無く、そ  
の場にボーっと突っ立っている。

何してんだよ!?!死ぬ気か!?

輪廻はゆっくりと左手を頭上に掲げる。天使の剣を受け止めよう  
としているかのように。

そして、黒いグローブをつけている左手が、その剣に触れた。

——次の瞬間。

「なっ!？」

「ほら、お望み通り使ってやったぞ、神器」

剣は金色の塊になり、天使の攻撃は易々と防がれた。

そして輪廻の体から真っ赤なオーラが溢れると同時に、その左手が剣だった塊を握りつぶした。

まるで金属を叩き割るかのようになり、粉々に砕け散る。

「そ、それは、未確認の神器!」

「驚いてる暇があったら、お客様とやらを守ってやれよ」

目線を天使に向けたまま、輪廻は剣をライザーに投擲する。

凄いスピードで迫った剣は見事にライザーに命中し、あの時持っていた神器を使おうとしていたライザーの手から、神器を弾き飛ばした。

腹部に刺さった剣から、猛毒の光が流れ込み、アイツは再び倒れる。

もう限界なんだろう。勝負はついたような物だ。

神器を弾き飛ばされ、腹部には高濃度の光が内包された剣。

誰の目にも、ライザーは輪廻に負けていた。

しかし戦いは終わらない。

まだ、アイツを客と呼ぶ天使が残っている。

「貴様ツ……いつもそうだ、貴様は、我々の邪魔ばかり!!!」

「勝手に目の敵にして攻撃仕掛けてくるからだろうが。俺に関係ない所で何をしようと何を信仰しようと関係ないのに」

「かつて強者というだけで様々な存在に攻撃を仕掛けた貴方がソレを言いますか」

「……俺の場合はちゃんと相手に許可を取ってだな」

「強者というだけで様々な……んん?」

天使の男の言葉に、首を傾げる。

おかしい。俺の知る限り、輪廻はほぼ毎日俺と遊んでいた。

小学生の時なんかは、朝に会って夜まで遊ぶなんてのがざらだったし、アイツが強者とやらと戦うような時間は無かったはずだけど。

ってか幼少期から天使とかと面識があるなんて、それこそ普通の人

間じゃあり得ないだろ。

神器持ちだとしても、俺みたいに中々発見されないパターンもあるだろうし。

「ま、良いだろ。ライザーはもう負けたようなモンだ。わざわざお前が俺に突つかかる必要は無いだろ。さつさと帰りな。勝てないってわかってるんだろうしよ」

「御冗談を。勝てないとわかっていても、それでも戦うのが我ら夢幻人故に」

「——そうかい。なら、黄金になりな」

一瞬で肉薄し、輪廻はその左手を振るう。

天使の男は回避しきれずその手に触れた。

すると、触れた部分が輪廻の言葉通り、黄金に変わった。

あ、あれがアイツの神器の一つ……なのかな？

あのグローブ……左手にしかつけてないみたいだし、俺の『悪魔の連撃』みたいに、片手に出るタイプなのかな。

「そのグローブ、触れた物を黄金にするんですか……また面妖な物を『ミダース・タッチ黄金の御手』。ま、お察しの通りだな。触れた物を黄金に変える。

天使だろうと何だろうと関係なく、触れた物は平等にな」

輪廻の言葉に、天使はさらに警戒を強める。

にしても凄い神器だな。触れた物をなんでも黄金に変えるグローブ、か。

だからさっきの光の剣も、突然力を失ったわけか。

——アレ、神器とかも黄金にできるんだったら凄いな。

相手にしたく無さすぎる。

「厄介ですね……しかし、私は時間を稼ぐだけでいい」

「時間稼ぎ？…また変な事を言うな、お前以外の夢幻人の気配も感じないし、ライザーだって今はもう——チツ」

「馬鹿がッ!!フェニックスを甘く見過ぎたな、人間!!」

輪廻が舌打ちすると同時に、炎の波がアイツを襲った。

発生源を見ると、そこには剣が抜けたライザーが、狂喜的な笑みを浮かべて手を伸ばしていた。

まさかアイツ、あの剣を無理矢理抜いたのかよ!?

光の攻撃を受けたら、普通力が入らなくなるはずなのに!

「流石フェニックス殿。見事でございませす」

「は、はははっ、たかが光の力で、俺が、この俺がそう簡単にやられるとでも思ったか」

「思いはしたが、俺がこの炎でやられるとでも思ってるお前も同レベルだろ」

炎が掻き消えると、そこにはやっぱり無傷の輪廻がいた。

サタン曰くフェニックスの炎はドラゴンの表皮にも傷をつけるというのに、なんで無傷なんだよアイツ。

自分の自慢の攻撃が効かなかったにも関わらず、ライザーは笑う。

その手には、先程輪廻に弾き飛ばされていた『引換剣』が握られていた。

——まさか!

「ああ、思っちゃいないぞ人間。俺の狙いは、先程の二の舞を繰り返させない事だった! 『夢幻』よ! 我が願いを叶えよ! アイツを——あの人間を、自滅させるッ!! あの屈辱的な光の剣でなあ!!」

ライザーが声高に叫び、剣を掲げる。

すると刀身が光り輝き、輪廻の目が虚ろになった。

そして、アイツはコートの中に手を入れ、新しい剣を取り出す。

「り、輪廻!!」

「は、はははっ、お前がいくら強かろうと、『夢幻』の力の前には無力!! さあ、その喉を自らの刃で掻っ切れ!」

俺の声は届かず、アイツは手に持った剣の切っ先を喉に向ける。

そして、躊躇う事無くその刀身を喉へと突き刺した。

## 戦いと恋の決着

呆れて物も言えない、というのはまさにこのことだと俺は思う。

ライザーは『引換剣』の力を使った。あの状況だと俺も神器無しじゃ止められなかったし、まあそこまではよくやったと思う。

思うが、その後だ。

何故俺に自害を命令した。よりによって、聖書の剣で。

アレは天使と人間にはまるで効かない。触れれば即座に砕け散るような代物だ。

赤龍帝であり、ドラゴンが混ざっている俺でも、その刃は決して通らない。

知らなかったとは言えなんだか呆気なかった。

そもそもアイツの『引換剣』の願いを叶える力だと、俺を操る事すらできなかつたし。

ま、ただの剣にグレートレッドの力を注入しようなんて方が間違ってたんだらうな。

——んで、戦いは結局俺の勝利で終わった。

こんなあつさり一言でまとめてしまうのもアレかもしれないが、実際特筆すべき内容も無かつたし仕方ない。

天使の男だつて、ちよつと本気を出せばすぐにでも捕黄金にできたまえられたし。

で、肝心なのは部長とイツセーの話だ。

ライザーが気絶し、天使が黄金のオブジェになった後、ひと段落してから部長がイツセーの告白に応えるという話になったのだが……その答えは。

「…なんて答えたにやん?」

「なんて答えたと思う?」

「あ、問題つて訳。——んー……ごめん、無理…とか?」

「フラれる前提なのな」

「そりゃ、惚れる要素がないと思うにやん。別になんか特別な事をしてつて訳でも無し。リアスつて、そこまでチョロい女でもにやいんで

「しよ?」

「——それが、意外とそうでも無かつたんだよな」

「えっ、オツケーしたって事!？」

俺の言葉に、黒歌が驚いて身を乗り出して来る。

そう。部長はオツケーした。イツセーの告白に、頬を赤く染めて頷いたのだ。

因みに言葉は無く、普段の明朗快活さは何処へやらという程にしおらしく頷いていた。

勿論イツセーは滅茶苦茶喜んでいたし、俺もアイツが喜べる結末になってハッピー。

アーシアも、表情が明るくなったしな。

「好きな人と一緒に居られる方が、幸せですよね」だそうだ。

「ふーん……にやるほどね……んでもでも、ご主人様には何の得もない結果で終わっちゃったって事じゃ」

「いや、そうでもない。イツセーと部長がくつついたのは実際に俺にとつても気分が良い事だし——それに何より、サー坊と連絡先を交換できたからな」

「……あの魔王をサー坊呼ばわりって……戦闘力随一なんじやにやいの?あの魔王」

「ま、アイツがまだ子供の時に会って以来、ずーつとサー坊呼びだしな。公にはしてないが、兄貴分みたなモンだよ、俺はな」

ま、その立場というかなんとかを、たった一人の為に最大限活用しようとしている当たり、俺はきつと政治家とか向いてないんだろう。

己の私利私欲の為なら、持った力をなんだって使ってしまうタイプだからな。

俺を見つめてくる黒歌に目を合わせ、その双眸を眺める。

綺麗な金色だ。宝石のように美しい……なんて、ちよつと気取った言い方をしてしまいそうになるほどに。

「俺も、いつかは……」

「?いつか、なに?」

「——いや。なんでもない」

無くはないが、まだ言えない。

言うなら、せめて俺のやろうとしている事を終わらせてからだ。

黒歌が、なんの負い目も感じずに、自由になれるようになってから。俺の想いを伝えるとしたら、きつとその時だろう。

——そして、その時は、もうすぐそこに迫っている……なんて。

(ほんと、イツセーはすげえな。俺が後押ししたとは言え、すぐさま告白までやってのけるだなんて)

『(まあ、よく急かすような事を言っておいてなんだが……お前はお前のペースでやればいいんじゃないか？相棒)』

(……そうだけど、さ)

この世界で、俺はハーレムを作る。作って見せる。

そんな事を思った事もあったけど、今こうして一人の女の子相手に好意を伝えるか否かでうじうじしている俺に、複数人同時なんて真似が、果たしてできるのだろうか。

原作のイツセーにさん付けしてしまいそうな気持になりつつ、俺は黒歌を抱きしめるのだった。

——因みに抱きしめてみた瞬間、黒歌はゆでだこみたいに真っ赤になった。

これももう俺の事好きって事でいいんじゃないかねえのかな、本当に。

## 新章：憤怒の魔王とフェニックス 下級悪魔は童貞悪魔

俺は最近、悪魔になった。

いきなり何言ってるかまるでわかんねーと思うが、安心しろ。俺も全然わかんない。

悪魔つてのが現実には存在するんだって事自体驚きなのに、まさか俺自身が悪魔になるなんてな。

しかもそうなった理由が墮天使の女の子に嘘告されて付き合ってた最初のデートで刺されて殺されたから、つてのももつとよくわかんない。

つーか軽くトラウマだよアレ。俺何かしましたっけ？

——まあ、悪魔になって良い事もあった。

まず第一に、駒王学園の美人が集まる（後気に入らないがイケメンもいる）オカルト研究部に入部できた。

というのも俺を悪魔に転生させて生きながらえさせてくれたご主人様が、オカルト研究部の部長にしてこの学園の二大お姉さま、リアス・グレモリー先輩だったのだ。

勿論部長（リアス先輩の事はこう呼ぶようにと本人からの御命令）も悪魔だし、他の部員たちも全員あくまで、部長の眷属だった。

第二に、上級悪魔になれば『レーティングゲーム』という悪魔同士のゲームに参加する資格を得て、『悪魔の駒』という別の種族の存在を悪魔に変えたり、元々悪魔である存在を配下に加えたりできる駒を貰えることができるらしい。

その駒で眷属とした女の子でなら、ハーレムを作っても構わないんだそうだ。

というか悪魔自体の出生率が極めて低い為、後宮とかも全然容認されてるらしい。

まあ、それ以外にも色々な小さなメリットはあるし、俺は正直今となっては文句はない。

俺を殺した墮天使とのわだかまりも、既に拳で解決済みだ。

その解決のキーアイテムとなったのが、墮天使が俺を殺してきた理由でもある『セイクリッド・ギア神器』。

歴史に名を遺すような人や、現在凄いスポーツ選手として有名な人は、大抵『神器』を持っていてと言われている。

神様からの、力を持たぬ人間へのギフトなんだそう。

生まれ持っただけでも稀有な『神器』の中で、さらに稀有な存在である『ドラゴン』の力を宿した神器。

それが俺の持つ神器らしい。

その効果は、現状判明している通りならば『殴れば殴る程強くなる』という単純明快な物。

基本考え無しな俺に相応しい神器だと思う。そもそも宿って無かったら俺は殺されたりしなかったわけだけ。

でも宿ってるおかげで今があるわけだし……俺は喜ぶべきなんだろう。それとも悲しむべきなんだろう。

——で、下積み（ビラ配り）も終わって契約もある程度取れるようになって、神器の力も把握できてこれから輝かしい上級悪魔への道を歩み始める——。

って、なつたはずなんだけど。

「ほらイツセー、後100回」

「は、はい!!」

待っていたのは再び下積み。

今度はお仕事のな下積みではなく、肉体的な下積みである。

速い話が筋トレ。

朝早くから部長に呼び出され、近所の人気のない公園で腹筋背筋その他諸々の筋トレ祭り。

因みに先程の後100回発言は今朝の腕立ての時のセリフである。重し替わりにと俺の上に部長が座っているんだけど、腕に来る負担と部長のお尻の柔らかな感触とに板挟みにされて本当に複雑な気持ちになる。

これ、俺は喜ぶべきなのか辛いかわからない。

ま、そんな辛い筋トレを終えた後は輪廻とアジアと一緒に学校に行つて、松田元浜と合流してバカ騒ぎをするのがここ最近の流れ。アジアがいるのもあってか、桐生藍華なる女子生徒（思考回路俺達レベル）も最近はよく話に入ってくるようになったが、まああまり大差はない。

会話のレベルはいつだって思春期男子高校生なのである。

——で、今日は輪廻が同居人の手作り弁当が自信作らしいと俺達に見せてきて、その中身が『輪廻♡黒歌』と桜でんぶと海苔で書かれたちよつと痛すぎるくらいのお妻弁当だったという事件があった以外は、悪魔の仕事の方も何の異常も異変も無く終わった。

で、帰路について、家に帰つて、風呂浴びよつかなーと思つて父さんが上がってくるのを待つてたら、部屋の床に魔法陣が輝いて、突然部長が出てきた。

：うん。一番大事な説明が俺自身わけわからんせいで雑になつちやつたな。

「えーと、どうかしましたか部長。いきなり俺の部屋に来るなんて」  
やけに切羽詰まった表情をしている部長に、俺は平静さを装つて尋ねる。

下手に動揺してクソ童貞だと思われたくないしな。我が主様だし。美人だし。おっぱいおつきいし。

場の空気を和ませるつもりも込めてマイルドな雰囲気を出したつもりだったが、しかし部長の表情は硬いまま。

そしてそのシリアス風味な顔のまま、俺にこんな刺激的な事を言うてきた。

「イツセー。私を抱いてちょうだい」

「ほへっ？」

めつちや変な声が出た。これはまさしくクソ童貞。

ちくしょう。装いきれなかったか。

そんなどうでもいい事を考えつつも、しかし脳内回路はショート寸前。

何をおっしゃったんですの部長様。俺に、なんて？

混乱する俺を他所に、部長は服を脱ぐ。

制服を脱ぐということはつまり下着姿になってしまおうという事であり、しかも下着姿という事はその上乳が見えてしまうという訳で。ってかおぱんつ！おぱんつ様もお見えになられておりましてよ!?

上おっぱいだけでなく下半身のデルタゾーンまでお見せしてしまおうなんて部長様はやけにご乱心の御様子!?

「もう一度言うわ、イツセー。私の処女を、奪ってちょうだい」  
な、なんですとおおおおっ!?

しよ、処女!? 処女って言っちゃったよお客さん!

潤んだ瞳と朱に染まった頬がやけに俺の理性を溶かす。

あ、でもおっぱい見えてる時点で大分理性溶けてたか、あっはっはっは!

いや笑ってる場合じゃ無いな!

どうしたんだ部長、俺に、処女? いい、良いのか!?

突然降って湧いたラッキーに、俺は自分の脳みそにある後先を考える機能の一切を停止し、放棄した。

後に残るのは、常に女の裸の事しか頭がない変態三人組のリーダー格であるおっぱい星人のイツセーである。

だが相手は仮にも俺の主様で、しかも——その、ちよつと、気になつてる人と言うか。

まあとにかく乱雑に扱っていいような人じゃない。というか女の子の処女を乱雑に扱うなんて真似俺にはできない。

まだだ。まだ抑えるんだ俺。

取り合えずなんでこんな事をしているのか——いや、これ聞いたら冷静になって抱かせてくれなくなっちゃう可能性あるな。

だったら、どうして俺なのかにしよう。

「え、えつと…なぜに俺を? 木場とか、何なら輪廻とか、知り合いに居ると思いますけど」

「祐斗はダメよ。あの子は根っからの騎士だから、きつと拒むわ。——輪廻については、小猫とアーシアに色々聞いてみて、考えてみただけ…:…なんだか、大人な対応をしていなしてきそうだったし。だから

貴方が良いと思ったの」

ちよつと怖いけど、と小声で付け足す部長様。

た、確かに日ごろの行い的に俺はがつつき過ぎて怖いかもしれない。

だ、だけど木場と輪廻という、普段なら逆立ちしても勝てないようなイケメン二人を超えた事は事実だ！ひゃっほう！

「け、けど俺、自信ないっすよ!?は、恥ずかしながら初めてといいますか、ど、どど、どどど…」

「言わなくてもいいわ。初めてなんでしよう？でも、それは私も一緒。至らない所はあるかもしれないけど、それもある種の経験よ。——それとも、貴方は私じゃ、不満？」

そんな事は天地がひっくり返ろうとあり得ませんッ!!と断言しようとした次の瞬間、俺の右手は部長の手に捕まれ、なんと部長の胸元。左おっぱいに誘われた。

抵抗なんてもつてのほか。ただ黙ってその行為を受け入れた俺に待っていたのは、ブラ越しのほぼ生おっぱいの感覚。

むにゆうつと右手が沈み込むマシユマロおっぱいに、俺は鼻血が出るかと思った。

いや出てるなコレ！なんか鼻から出てるな俺！

ムードも何も無いぞこれ！

熱に浮かされたような表情のまま、部長は俺の目を見つめて話す。

「ねえ、イツセー。感じるかしら、私の胸の鼓動……」

「は、はい！す、すごく凄く感じますです、はいっ！」

物凄くテンパる俺に、部長は一周回って落ち着いてしまったのか、いつものような大人びた苦笑をする。

ご、ごめんなさいね俺がキングオブ童貞で。

松田元浜程がつかない代わり、輪廻程余裕も無いんです、俺。

いや、アイツ等がこういう状況に陥ったらなんて考えた事も無いけど。

ちよつと冷静になったららしい部長は、俺の手を離して胸元からよけ、そしてブラに手を伸ばしホックを外し——ホックを外した!?



「あんっ……！」

「や、柔らかい……ッ！そして、温かい！」

まるで世紀の大発見をした、というような俺と、恐らく初めて他人に胸を触られたのか、小さく喘ぐ部長。

なんというか、初めて同士ってこんな感じなんだと思う。

俺ってもし彼女とかができたら絶対アブノーマルなスタートになっちやうよなーとなんとなく思ってたけど、全然そんな事無かったな。

でもオーソドックス万歳！初めての事だからノーマルでもアブノーマルだわコレ。

「イツセー、その……優しく、お願い……ね？」

「あっ……す、すみません!!」

つい夢中になって揉みまくってしまった俺に、部長が控えめに言うてくる。

やってしまった。

こんなところで童貞の弊害が！

曰く、女性というのはセックスの上手い下手でパートナーとのその先の関係を考えるという。

つまり俺は、スタートダッシュで顔面から地面に突っ込んでいったようなものだ。

大失敗にも程がある。

だ、だがしかし！まだまだエッチは始まったばかりだ。

俺の頭の中で何度も妄想彼女と繰り広げられてきたエッチの流れは完璧に思い出せている。

後はソレを実行すれば、部長も俺にメロメロのはずだ！そうであつてくれ！

一度おっぱいから手を離し、大きく深呼吸。

部長も少々乱暴にされたせいとか、息を荒くしている。

……よし、行くぞ俺。戦え男イツセー。決してピロートークで「これから頑張りますよね(苦笑)」とか言われたりしちやならんだ！「すごかったわ……(恍惚)」を目指すのだ、俺！

そう意気込んだ次の瞬間、またしても床の魔法陣が輝く。

それに気づいた部長が、小さく「一足遅かった」と忌々しそうにつぶやいた。

えっ、えっ、何事!?

混乱する俺の目の前に現れたのは、メイド姿の銀髪の美人。

そのおっぱいは大きかった。

い、いや何を考えているんだ男イッサー! 目の前に裸の美人がありながら、着衣の美人のおっぱいに気を取られているのでは片腹痛いぞハーレム王!

：ん? ハーレム王なら全裸っぱいと着衣っぱいを同時に愛でても構わんのでは?

さらに混乱を極める俺を無視して、二人は話を始める。

やれ「こんな事をして破談に」だの「お兄様の意志」だの「旦那様もサーゼクス様も」だのと、訳の分からん内容が、セックスを前にして通常よりもさらにIQの低下した俺の脳をイジメてくる。

スタートダッシュで失敗した童貞への罰なのですか。救いは無いのですか。

なんだか泣きたくなってきた。

着衣<sup>メイドさん</sup>っぱいには下賤の輩とか言われたし。

部長は途中で服を着て全裸っぱいから着衣っぱいに戻ってしまうし。

因みにメイドさんはグレイフィアという名前らしい。

俺がおっぱいを見つめているのに気づいてか、やけに冷たい視線を向けてきた。

正直怖かった。

「ごめんなさい、イッサー。迷惑をかけたわね」

「い、いえ。全然お気になさら——はうあっ!」

「ふふっ……今夜は、これで許してちょうだい。明日また、部室で会いましょう」

色々とショックで落ち着いてしまった俺に、部長は申し訳なさそうな顔をした後ほっぺたにキスをして、そのまま去っていった。

後には、部長に頬とは言えキスしてもらった事に呆然とする俺だけが残され、その放心状態は親父が次に風呂に入れと呼んでくるまで続くのだった。

——つてか俺、結局失敗した分を取り戻せずに終わっちゃった……

## 焼き鳥野郎に宣戦布告です！

部長が俺の部屋に来て、生乳どころかおぱんつ姿まで見せてくれた一件：から一日経過。

今日は朝のトレーニングも無しで、ただただ部室で会おうとだけメールが来た。

まあ、ルーティンになりつつあるからサボったりはしないんだけどさ。

で、いつも通りへとへとになりながらも輪廻とアシアと学校に来て、また松田元浜とエロい話題で盛り上がって、覗きをこっそりしようとして輪廻にボコボコにされて、いつも通り時間が過ぎた。

その途中で昨日会ったことをぼかしつつ松田と元浜に話してやったら、それはもう血の涙を流す勢いでキレられた。

俺も結局おっぱい揉むしかできなかつたけど、それでもコイツ等よりは明らかに立場が上である。

その事の何と気持ちの良い事か。

はっはっは。この間運よく覗きができた時お前ら二人で覗き穴を占拠して俺に見せず、挙句バレて逃げている最中に二人して俺を裏切って生贄にしたことの恨みをここで晴らしてやったぞ。

——で、なんだかんだで放課後。

輪廻とアシアは先に行ってしまったし、木場はいつも俺達よりも早く行っているの、今日は珍しく一人で部室に向かった。

で、ドアを開けて中に入るとそこには修羅が、般若がいた。

勢い余ってドアを閉めて一旦深呼吸してしまいそうになったが、冷静に般若や修羅の正体を見ると、部長や朱乃さんが放つ刺すような鋭いオーラだった。

どんな威圧感だよ、ちびるかと思っただぞ。

後何故か、部長の背後には昨日のメイドさん：グレイファイアさんが控えていた。

その表情は、昨日と同じく無である。

いや昨日は表情あったな。俺への侮蔑の眼差し。

俺マゾじゃないから辛かったな……

「よ、イツセー。遅かったな」

「あ、ああ……ちよつと腹痛くて。——えつと、これどういう状況？」  
前述の通りの三人。困ったような表情の木場。輪廻の膝の上に座りつつも、いつもよりも縮こまつてる小猫ちゃん。輪廻の腕を取りつつも、なんだか部室内の張りつめた空気に戦々恐々としてるアーシア。

そんな中でいつも通りのゆるーい空気のまま俺に声をかけてきた輪廻が、さながらオアシスのように感じられた。

持つべきものは親友。付け加えるならばこういう状況でもマイペースに居られるような心臓が鋼鉄な上に毛が生えているタイプの。挨拶ついでに近づき、アーシアの反対側に座って輪廻に今の状況を問いかける。

それに答えようとアイツが口を開いた所で、部室の中央にある魔法陣が輝いた。

俺ここ最近転移してくる現象目の当たりにし過ぎじゃない？

そう思いつつ、誰が転移してくるのかなーなんて考えていると、魔法陣の様相が突然変わった。

グレモリーの模様じゃなくなつて、これは……

「フェニックス、だな」

「——お詳しいのですね」

「まあ、人並みには」

輪廻が答えを言ってくれた。

フェニックス。不死鳥って事か？悪魔の家系にはそんなものいるのか。

そう考えた俺の視界を、炎が包む。魔法陣から炎が噴き出したんだ。

熱っ、熱いなコレ!?

凄まじい熱気にわりかし本気で仰け反った俺の目に、炎の中から出てきた男が映る。

パツと見、ワイルド系のイケメンだ。スーツを着崩しているせいも

あつて、なんだかホストに見える。

：なんかこう、不死鳥つて言うんだからもうちよつと真つ当なかつこよさをイメージしてただけど、ちよい悪系のイケメン出されちゃったよ。

しかもイケメンだよコイツ。許せねえな。

「ふう、人間界に来るのは久しぶりだな。相変わらず息が詰まるぜ。けど、これもお前に会うためだと思えば途端に何てこと無く思えてくるんだから、不思議なもんだよなあ？愛しのリアス」

早速呪詛を送り始めた俺の耳に、そんなさぶいぼが立つような気障つたいセリフが入ってくる。

なんだコイツ!?!つてか愛しのリアスつてどういう意味だよコラ!

怒りを抱く俺の目の前で、ホスト風の男はさらなる暴拳に出る。

それがどれほどの大罪と言われてもおかしくないのに、自分がやるのは当然だというように、だ。

具体的に言うなら、部長の手を馴れ馴れしく掴んだ。

もう片方の手で肩を抱き寄せた。

「さて、式場を見に行こうか。日取りはもう決めてある、早い方が良いだろ?」

「その手を放しなさいライザー」

ライザー、と呼ばれた男は部長の言葉にパツと両手を話し、向けられる絶対零度の眼差しに飄々とした笑みを見せる。

まるで、部長のその反応を面白がってるみたいで腹が立つ。

「おい、アンタ。部長に対して無礼なんじゃないか?つてか女の子にいきなりその態度つて、どうなんだよ」

「あ、お前誰?」

ライザーと呼ばれた男は、部長に向けていた笑みから一転。不機嫌そうな、鋭い目を向けてくる。

ちよつと怯みそうになるが、部長を思う気持ちは新入りだけど眷属一だと自負する俺。押し負けるわけにはいかん。

ここは、自信満々に自己紹介だ!

「俺は兵藤一誠!リアス・グレモリー様の眷属悪魔、『<sup>ポーン</sup>兵士』の兵藤一

「誠だ！」

「ふうん、あつそ」

んなつ、なんだこの冷たい態度は！聞いておいて無関心はバカにし過ぎだろこの野郎！

確かに男に興味持たれるのは嫌 of 嫌だけど、それはそれとしての態度はムカつく!!

「つかーアンタこそ誰なんだよー」

今の所名前しか知らないこの男に、俺は逆に質問してみる。

これも軽く無視されたら神器で殴りつけてやる、という思いで居たが、ライザーは今度は無関心ではなく、ちよつとびつくりした顔をして、部長の方を見た。

「ん？え、もしかしてリアス、俺の事下僕に話してねえの？いや話してねえにしても俺の事知らねえって中々だろ。転生悪魔にしたってよ」

「ええ。話す必要もないもの」

「おおつと、こりゃ手厳しい」

今まで見たことないくらいに冷たい部長の態度に晒されてもなお、飄々とした態度を崩さない。

こうして冷たくされていゝる事もスパイスだと言いたげだ。

どうせ最終的には自分の物にできると、そう思っている。

それが何とも許せない。腹立たしい。

「イツセー。その人はライザー・フェニックス。部長と同じ純血の悪魔で、フェニックス家の三男坊だ」

いつまで経っても男についての説明がない中、輪廻が説明してくれる。

悪魔でもない、ただの人間のはずの、輪廻が。

「フェニックス？フェニックスって悪魔なの？鳥じゃ無くて？」

「フェニックスにも色々あるんだ。中国の高い山の峰に巢を作る不死身の鳥を指す場合もあれば、ソロモン七十二柱の悪魔の一柱を指す場合もある。この場合だと、ソロモン七十二柱の方が正しいな。まあ、あくまで人間側の呼び方だから悪魔側だとまた少し違うんだろうが」

「へえー……詳しいんだな」



しかし部長だつて黙つてやられるわけじゃない。ついに怒りがボルテージマックスになったのか「いい加減にしてちょうだい!!」とキレて立ち上がった。

怖い。俺に向けられているわけではないのに、その怒りのオーラは凄く怖かった。

……改めて、俺は最近人の発する『オーラ』に弱くなったというか、敏感になった気がする。

これも悪魔になつて影響なのか、それとも……

つと、とにかく部長はキレた。それはもう烈火のごとく怒つた。馴れ馴れしくするな。触るな。私は結婚なんてする気はない。

正直結婚する気はないと部長が言つた時、俺は心から安堵した。

これでもし部長が過激なツンデレで、結婚に乗り気だったとしたら俺はもう生きていけねえとすら思つていたし。

……ま、見るからにそんな可能性はなさそうだったんだけど。

で、そんな部長にライザーがお家事情がどうだの、断絶がどうだのとスケールのデカイ話をし始めた。

正直この辺はついて行けなかつたのでよくわかつていない。

取り合えず、部長とライザーが結婚するのは両家の親が決めた必要な事らしい……とだけ俺は理解した。

ま、そんな都合知つたこつちやねえけどな!

俺は所詮平民。貴族のごたごたなんて知つたもんか!

話を聞く分には部長も自分の家の問題はちやんとわかつて、その上で結婚を拒否しているらしい?

だつたら俺は部長の意見を尊重する。させてたまるか婚約なんて。

しかし、どれだけ説明しても部長が意見を曲げない事に、今度はライザーがキレた。

やれ人間界の空気は不味くて仕方ないだの、俺にもフェニックス家としての面子があるだのと言って、最終的に俺達を燃やしてでも連れ帰るなんて言つて、炎を向けてきたのだ。

言うなれば炎の津波。触ればひとたまりもないだろうソレが、突然俺達を襲つた。

——そして、輪廻が『オーラ』でソレを潰して消した。  
つ、つえええええつ！

もしこの世界がゲームだとしたら、俺の幼馴染だけバランス調整をミスしているとしか言えないレベルで強かった。

つてかオーラであの炎を消すつてどういう芸当だよ。いつそ馬鹿かコイツ。

で、大人しくしていると遠回しに言ったのに輪廻に聞き入れてもらえなかったグレイフィアさんが溜息をついて、輪廻の脅しに若干怯えた様子のライザーと、部長にある提案をした。

それが、非公式の『レーティングゲーム』で決着をつけ、勝者の意見を通そうという物である。

部長もそれが一番だと判断したのか、はたまたそれしかないと思っただからか、素直に頷いた。

——よしっ、だったら後はライザーとその眷属をブツ倒してやるだけだ!!と俺が意気込んだその時。

「しかしリアス。そそのかすような言い方をしておいてアレだが、君は本当に俺と戦うのか？こっちは公式戦の経験もあるし、その殆どが勝ち星だ。今ならまだなかった事にしても」

「冗談言わないでちょうだい。いくら貴方に実績があろうと、私には関係ないわ」

「随分と自信満々なようだが……失礼だけど、君の下僕たちじゃ俺の可愛い下僕たちには遠く及ばないと思うぜ？良くて君の『女王』である『雷の巫女』が食らいつけるか。——その人間は、君の下僕じゃ無いようだし」

ライザーが、そんな舐め腐った事を言ってきた。

おいおい、俺が遠く及ばない？ライザーどころか、その眷属にすら？

腹が立つ俺だが、最後に付け足された輪廻を恐れるような一言には素直に賛同。

だってアイツ怖エもん。味方なのにびびっちゃったよ、アイツが威圧まき散らした時。

なんで今平然と茶飲んでんだよ。自由か。

「因みに、これが僕の下僕たちさ。——おいで、可愛い下僕ちゃんたち」

ライザーが指を鳴らすと、再び魔法陣が輝き、十五の人影が出現。どうやらアイツは眷属が全部の駒分揃っているらしい。

まああんな傲慢な事言うくらいなんだ。フルメンバーでもおかしくはない——と思ったたら、その十五人を見て俺は酷く驚かされた。

なんと、全員女。

この野郎、なんと俺の夢：いや、世界中全ての男性の夢であるハーレムを実現してしまったらしい。

羨ましすぎて涙が出てきた。

そんな俺に、部長は額を押さえて呆れた様子で溜息を吐いた。

こんな欲望に忠実な下僕でごめんさい！

でも目の前にある理想郷には涙を禁じえませんか！

そんな俺に、ライザーの眷属の子達は「気持ち悪い」だの「きもーい」だの好き放題言ってくる。

やめろよ！余計に涙がこぼれちゃうだろ！

「つていうか！部長をそんなハーレム野郎に渡せるわけねえだろ!!」

「英雄色を好むつて言うだろ？俺くらいになると、一人の女熱心に愛するだけじゃ足りないのさ。——まあ、君には一生わからないだろうけどね。下僕くん？」

そう言つて、ライザーは近くの眷属を抱き寄せてキスした。

それも舌と舌を絡めるティープキス。あまりの濃厚さに、アーシアが顔を真っ赤にして俯いた。

つてか見せつけてんじゃねえ!!羨ましいぞこの野郎！

ライザーの眷属たちは皆恍惚とした表情や自分もして欲しいと言いたげな顔をし、対照的に部長たちはその表情に嫌悪感を滲ませていた。

グレイファイアさんも、眉を顰めていた。

ただ輪廻だけは平然としているというか、どうでもよさげだ。

ほんつと無関心だよなー：俺らと「ハーレムつていいよなあ」つて

話すような奴なのに、現実でやってるのを見てもまるで興味無さそう  
というか。

まあその輪廻を見て安心したのか、さらにライザーの態度がデカく  
なるわけだけど。

この場で一番危険度高いのって、多分輪廻だからな。

グレイフィアさんも強いんだろうけど、この人が感情的に動くよう  
な事ってないと思うし。

——くっそおく!!あんな「お前じゃこんな事、一生できまい」みた  
いな顔しやがって!見せつけてんじゃねえ、こつちみんな!

「お前じゃこんな事、一生できまい」

「んなつテメエソレを言ったら戦争だろうが!!——くそつ、イケメン  
だっただけでもいけすかねえのに、部長に言い寄っておきながらその  
狼藉!レーティングゲームとか関係ねえ、ここで全員俺がブツ倒す  
!!」

堪忍袋の緒が切れる音が、確かに聞こえた。

言いやがった!言ってくれやがったぞこの野郎!

俺の頭ン中で考えた原文ママに言ってくれてんじゃねえ!!

神器を纏い、床を三度殴りつけ、ライザーに向かつて一直線。

いつもよりは強化されてる感が少ないが、俺は下級悪魔ながらに中  
級墮天使を倒すジャイアントキリングの天才だ!あんなホストみ  
てえな見た目している焼き鳥キャラ男に負ける訳ねえだろ!!

拳を振り上げるも、しかしライザーは嘆息するばかり。

その姿に俺はさらにムカつく。

ツだあああああつ、死ぬつ、この種まき焼き鳥野郎!俺の拳喰らっ  
て冥界に帰りやがれ!!

「やめとけ馬鹿」

「ぐええっ!?!」

言葉と同時、輪廻は俺の首根っこを掴んで引き留めた。

それなりに距離が離れていたはずなのに、一体いつの間にもここまで  
接近していたのか。

ってかそんなのは今どうでもいい!

「なんで邪魔すんだよ輪廻!!」

「お前が考えも無しに突っ込むから止めたんだろうが。神器使えるようになって調子に乗ってるか何なんなのか知らんが、せめて実力差くらい理解しろ」

「じ、実力差って…」

「ははっ、その人間のがよっぽどわかってるようだな。その通りだよ下僕くん。お前じゃ俺は愚か、下僕たちの一人にすら勝てないさ」  
「はははっ、とバカにするように笑うライザーの言葉に苛立ちを覚えるが、ちよつと冷静になつて考えてみるとこの言葉は挑発でも何でもなく、ただコイツにとつては事実を述べただけなんだ。」

「くそっ、俺が勝てない?んなモンやって見なきゃわかんねえだろ!俺がそう言つと、ライザーではなく輪廻が溜息混じりに解説してくれる。」

俺とライザーやその眷属との、実力差を。

「お前、さつき突っ込んでた時、誰が何してたか分かったか?」

「何をつて——そりゃライザーが溜息ついたくらいだろ」

「…実力どうこう以前にお前は視野が狭いな。——正解は眷属全員迎撃準備をしていた、だ。そのライザーの妹らしき子以外はな」

「は、はあ?そんな訳」

「いいや。その人間の言った通りだぜ下僕君。俺の下僕たちは優秀なんぞな。俺に危機が迫れば、すぐに対応する。よくわかってるじゃねえか。——ただ、どうしてレイヴェルが俺の妹だと気づいた?」  
「別に。ただ顔立ちとか雰囲気似ていたので。悪魔は見た目の年齢を変えられると言いますし、確実に妹だとは思っていませんでしたよ」

「す、すごいな。なんでそんな事までわかるんだよ……って、妹!?!」

レイヴェルと呼ばれた金髪ドリルの子を見つめ、その後ライザーを見る。

ほんとだ、言われてみりやどこか似てる。

でもコイツ実妹をハーレムに加えてんの!?

「妹までハーレムに加えてんのかテメェ!!」

「あー。そうそう。別に手は出して無いし、形だけ眷属だけどな？ほら、妹萌つてのが世間一般にあるらしいし、せつかくなら入れとくかって」

「そ、そんな軽いノリで…!!」

「ますますコイツが許せねえ。」

でもちよつと冷静になって考えると、俺が今無策で突っ込むのは無意味だ。

実際構えてたかどうかなんて気づきもしなかったし。

戦ったとしても一方的にボコボコにされるだけだ。

——でもやられっぱなしは性に合わねえ。ここは捨て台詞だけでも…!!

「こ、このホスト崩れの種まき焼き鳥野郎！お前みたいなハーレム野郎に部長は渡さねえからな！」

「なつ、ふざけるのも大概にしておけよ下僕風情がツ！この俺を、フェニックス家の俺を、種まき焼き鳥だど!?——ふんつ、確か兵藤一誠とか言つたな。良いだろう。レーティングゲームの時、お前は俺直々に消し炭にしてやろう！」

「はんつ、女困つて英雄色を好むとか言つちやうような焼き鳥にそう易々と負ける訳ねえだろ！所詮強いのは下半身と性欲だけだろうがバーツカ！」

「テメエツ、調子乗ってんじゃ——!!」

「お止めください。この場で荒事を起こすというなら、私が全力で阻止させていただきますが」

「——ふん、最強の『女王』と称される貴方に言われれば、矛を収める他あるまい。だが覚えておけよ、お前のその安い挑発が、より残酷な死を招く事になると！」

「言つてろ！レーティングゲームまでどのくらいか知らねえが、その間に滅茶苦茶強くなってテメエに吠え面かかせてやる！」

こうして、俺達とライザーの会合は終わった。

その日の夜に、レーティングゲームが十日後に行われる事を告げられ、俺達は修行のために山に籠ることになった。

山ごもりには輪廻も黒歌さんも付いてきてくれるらしいし、ここで  
今までもよりもつとずっと強くなつてやる。

そして、俺はあのクソ野郎の顔面ボコボコにして、部長を取り戻し  
てやるんだ!!

部長とお話です！

ライザーとのレーティングゲームを控え、俺達は山に来た。

山と言ってもただの山じゃない。部長様が所有する、領地らしいのだ。

そこに在る別荘に泊まり込んで、この十日間を修行漬けにするとのこと。

燃え上がって来たぜ！と思ったら山登りの時にほぼ全員部員の荷物を背負わされて早速修行開始と言われるし、登り切って楽な恰好に着替えることになった時に木場から「僕の覗かないでね？」と言われるし、面倒見てくれるらしい輪廻に実力を測るためと言われる木場、俺、小猫ちゃんの三人で同時に攻撃を仕掛けても軽ーくあしらわれたしで、さんざんだった。

いやアイツ強すぎい！山登りの最中はアーシアと黒歌さん抱きかかえながら荷物三人分持ってたし、俺達の攻撃はまるで当たらないし、なんかもう滅茶苦茶だった。

それでもまだまだ底が見えないあたり流石だと思うし、絶対敵対したくない。

で、今は輪廻考案の基礎メニューを実行中——ぐへえっ！

「どうしたイツセー。まだ三桁も行っていないぞ」

「ちよ、ちよつと待って？おかしくない？俺のメニューだけ人外レベルじゃない？同じパワータイプの小猫ちゃんは今うちよつと甘いと思うんだけど！」

「そりや可愛い女の子とむさい男どっちに甘くなるよ」

「可愛い女の子だな!!」

「…ま、後は小猫の体が予想以上にできてなかったっつーか、『戦車』に頼り過ぎてたからな。毎朝筋トレやつてるお前と違って、本当に基礎の基礎が足りないんで軽いのから始めてんだよ。だからそんな『私を甘く見ないでください』と言いたげな顔をするな。ちゃんと本人にあったのを選んでるだけだっつーの」

足腰を鍛えるためのスクワットを、毎日四ケタ台までやらせてくる

鬼畜教官、輪廻。

しかしただ命令してくるだけじゃなくって隣で一緒にやってきてから「口だけじゃねえか！」と文句を言う気にもならない。

「ってかコイツは全然汗の一筋も流さない。」

因みに木場は腿上げ、小猫ちゃんは腹筋中だ。

二人とも三桁まででいいと（それでも多い気はする）許可が出ているが、それは先程アイツが言っていた通り『駒』の力に頼り過ぎて肉体がまるで完成していないからだそうだ。

俺は土台はできていると、そこだけは素直に褒めてもらった。

へっへっへ。まあ時々俺たちが覗いた<sup>若</sup>女子から逃げる特訓をしますからな。

「ほらイツセー。ダンベルを持ちやすく持つな。俺の指示した体制をキープしろ」

「は、はいいつ」

「木場は足が下がってきてるし、小猫も楽しんでるだろ。無意識が最大の敵だからな、味方に引き入れて自分を痛めつけるんだぞー」

「うっ、くうっ、はは、まさか単純な基礎トレーニングが…」

「ここまで、辛かったなんて…」

「だから『駒』に頼り過ぎだつて言つたら。人間の俺でもできるんだから、悪魔補正かかっているお前らでもできるぞ。明後日までには四桁いけるくらいの体を作ってもらおうからな」

輪廻の言葉に、皆が顔を青くする。

勿論俺もだ。

だって二人の桁が増えるって事は、俺も桁を増やすって事で。

五桁って、もはやアスリートでも手を出さない領域だと俺は思うんだけど。

因みに基礎トレーニングメニュー（本日分）はまだまだ始まったばかり。

これ以外にも沢山の考えられた内容があつて、ソレを終わらせてから戦闘訓練である。

っ、辛い！でも確かに初日より成長してる！

その自覚がある分頑張れるけど、それでもやっぱり辛い物は辛い。特に戦闘訓練なんかそれが顕著で、例えば昨日俺が輪廻から言われた事をいくつかリストアップしてみると、

・「予備動作がわかりやすい次の行動を考えていない相手の動きを見ていないフレイントにすら気づかない！お前やる気あるのか!?部長取られていいのか！」

・「速度を上げろ！プロモーション無しでも最大強化状態なら木場並のスピードを出せるようになれ！一撃一撃は小猫のように重く鋭く！切り札になるんだろ、ライザーぶん殴るんだろ！理想つてのは語るだけじゃ無意味なんだ、OK!？」

・「俺みたいなの戦い方をするな。基礎もできてない癖に応用編に手を伸ばすな。千里の道も一歩から、だ。焦らず、でも急げ」等々。

まさに鬼教官だけど、わからないと言えばちゃんとかわりやすく解説とかしてくれるし、ある種理想の教師だった。

ほんと、何から何まで同い年とは思えない。

でも二人っきりの時の会話レベルは相変わらず俺レベルというか、卑猥だ。

俺から振ってるんだけどさ、そういう話題。

俺からはやっぱりおっぱいの話。未だに部長の夜這いの時の話をしているのに、輪廻は嫌な顔一つしない。

…あ、嘘。めっちゃ小馬鹿にするように笑ってくる。やっぱりムカつくわーイケメンって。

ま、アイツだって黒歌さんの話ばかりだし、言う事同レベルなんだよ俺ら。

だから嫌悪感とかわかかねーんだよな。イケメンなのに。

ま、昔からずつと一緒にいるつてのもあるんだろうけどさ。

「ふいー。今日の分の自主トレ終わりーっ」と

もうすぐ修行開始から十日経つ。

ライザーとの試合も間近に迫っているモノの、やっぱり自分に自信が持てない。

最初の方こそ俺の方が素の筋力とかは勝っていたらしいけど、それも三日あれば並ばれて、最終的には抜かされた。

今では俺の方が桁数少ない。

その上実際に輪廻と戦う訓練も無くなって、鍛え多分がどれくらいになっているのかを確認できてすらいない。

今まで実感できていた「自分が強くなった」という感覚を、味わえていないのだ。

そのせいもあってか、別に何かあったという訳でもないのにスランプ気分である。

ま、ちよつと前に輪廻と話して俺の部長への想いも教えて、ちよつとは気が楽になったんだけどさー。

俺はやっぱり部長が好きで、部長には俺以外の人とくつついて欲しくない。

そりや部長が選んだ相手だって言うなら文句はないけど、そこに部長の意志が介入していない結婚だったら俺は嫌だ。

ライザーの一件が終わった後に似たような話を持ち出されたりしたら、俺は迷いなく止めに入る。

——いや。まずこの一件が終わったら部長にこの想いを伝えるんだ。

結果はどうあれ、俺は後悔しないと決意したじゃないか。

「——って、あれ？部長？」

夜風に当たり、トレーニングで火照った体も冷めた所で部屋に戻ろうとして、ふと部長が自分の部屋のベランダから外を見ていた所を見。

眼鏡かけてるのかーとぼけーっと見つめっていると目が合い、少し苦笑してから部長が俺を手招きしてくれた。

どうやら、部屋に行って良いらしい。

なんだか緊張するなーっ、改めて最近、「好きだ」って自覚したのもあって余計に！

ニヤニヤ…というよりも引き締まった表情になりつつ、俺は部長の部屋に向かう。

ノックして中に入ると、部長は俺が来るまでの間に本を読んでいたらしい。

タイトルから察するに、レーティングゲームのマニュアル本だろう。

自由度高いゲームらしいけど、そんな本あるのか。

帯の部分には「初心者向け！あの〇〇も大絶賛！」とか書いてあった。

〇〇の部分は良く見えなかったが、悪魔だろうと人間だろうと売り文句は同じようになるんだなという事はよくわかった。

「眠れなかったの？」

「あ、いえ。ここに来てからずっと、寝る前に自主トレをしてるんです。俺、まだまだだから……こうやって、少しでも皆に追いつけるようにって」

俺の言葉になるほどね、と頷いて、部長はお茶の入ったカップを差し出してくる。

喉も乾いていたので、俺はありがたく受け取った。

うん、美味しいな。

朱乃さんの淹れるお茶も美味しいけど、部長のお茶も中々美味しい。

甲乙つけがたいとはまさにこのことだろう。

というか俺、改めて凄く変わったな。

あの駒王学園の二大お姉さまのお茶を味わえるだなんて、想像だにできなかった。

「……あれ、そのノートに書かれてるのって」

「ああ、これ？まあ、見ての通りよ。当日の戦術。貴方達の力量に任せっきりにならないような、多少常識外れのプレイングを考案しなくっちゃいけないから、結構時間がかかって。——まあ、どれだけ策を弄してもはつきり言って気休めなんだけどね」

「……相手が、フェニックスだから？」

「その通り」

ライザーがどんだけ凄いのかというのは、輪廻から聞いてある程度知っている。

不死だから決して『王』が取られて負けるなんて事が無い上に、ドラゴンの表皮すら焼くという炎。

戦績は八勝二敗。その敗北はどちらも懇意にしている家との戦いの為出来レース。つまりは実質無敗の男という訳だ。

流星にここまで凄い奴だと羅列されてしまうと燃え上がる所かちよつと弱火になってしまいそうになる。

ただま、俺が部長を諦める理由にはならねえがな！

「レーティングゲーム黎明期からずっと、フェニックスは最強の名をほしいままにしてきた。ライザーだけじゃなくつて、その兄も親もね。——言うならば、この試合も殆ど出来レースよ。私が結婚から逃げられないようにするために、わざとライザーとの縁談を用意した」  
「ライザーなら、部長が何をしようと勝てるはずがないと思っただから……？」

「ええ。——けど、完全に勝てないという訳じゃない」

理不尽な状況にあるにも関わらず、部長の目は死んで居なかった。なんでも、不死の弱点はその体力と精神力にあり、何度か死を迎えれば先に心がやられて戦えなくなってしまうのだとか。

ソレを狙えるのが、俺——そして、アーシアらしい。

俺はまあ、自分で言うのもなんだけどわかる。

この強化の力があれば、木場や小猫ちゃんとは比べ物にならない攻撃が見込めるからだ。

輪廻も、お前なら切り札になれると言ってくれたし。

しかしアーシア？アーシアが切り札になるって……確かに部長たちと一緒に黒歌さんに面倒見てもらってるらしいけど、正直アーシアが実際の戦闘で役に立つと思うかと言われるれば、ノーだ。

だってアイツ、そもそも争いごとが嫌いみたいだし。

回復の力は確かにすごいけど、アーシア自身が戦えるとは、とても思えない。

そう考えているのがわかるのか、部長はクスクスと笑って俺に「あの子、すつごく頑張ってるのよ？」と言ってきた。

あのアーシアが、ねえ……きつと多分、その原因は輪廻にあるんだ

ろうな。

アイツの存在が、多分アーシアを変えたんだろう。

詳しい話は今度聞いてみるか。

「ところで部長、一つ気になってたんですけど」

「言ってみて?」

「いえ。なんでライザーとの結婚を拒否するんだろうなーって。確かに俺はアイツがいけ好かない奴ですけど、客観的に見たら顔も力も家柄も不自由ない相手じゃないですか。普通だったら、許嫁になっても文句とか言わないだろうなーって」

「ああ、そのこと。——そうね、これは私の夢の話よ。ちっぽけで、子供っぽくて、でも大事な夢」

そう言って、部長は目を閉じて語りだす。

これは部長のお兄様…つまり今の魔王の一角を担う凄い人が、周囲の反対を押し切ったの大恋愛をした末に結婚したという話だ。

その相手というのが、あのグレイフィアさん——の妹らしく。

姉であるグレイフィアさん共々メイドをしていたらしいが、今ではサーゼクス様（部長のお兄様）専属メイド…:…:というか、補佐官みたいな事をしており、政治的な権力は彼女が握っているとも言われているようだ。

だが実際リーシアさん（妹さんの名前らしい）の発言とかはかなり悪魔社会に良い影響を与えているらしく、サーゼクス様も彼女に任せる事を是としているらしいから誰も文句はないそうだ。

厳密には仕来り等を重んじる頭の固いご老人方には不評らしいが、若手からの支持が厚いとのこと。

——で、そのサーゼクス様とリーシア様の大恋愛は書籍化されて冥界の女の子達の憧れとなっているそうで、部長もその大恋愛に憧れた一人なんだと。

「私はね、どこまで言ってもグレモリーなの。必ず家柄というのがついてくる。ライザーなんかは典型的な、私の家柄を目当てにしているタイプよ。確かに女好きというのもあるんでしょうけど。——だけども私は、『リアス』で居たい。たった一人の『リアス』を愛してくれる

人と一生を添い遂げたい。……ごめんなさいね、変な話をして。くだらない、わよね」

「そんな事、ありませんよ。寧ろそれが普通なんだと思います。所詮は平民基準の考えですけど、それでも俺は部長のその意志が、真つ当で素晴らしい物だと思えます」

悲しそうな目をする部長に、食い気味になりながら俺の考えを主張する。

部長の夢は、確かに貴族とかそう言った立場の人にとってはダメな物なのかもしれない。

でも俺は平民で、その上バカだ。

たった一人の女の子でありたいなんて夢を、頭ごなしに否定するよ  
うなヤツじゃない。

寧ろ、そんな事を夢に思わないといけない方がおかしいと思う。

乾いた笑みとともに「ありがとう」とだけ言ってくる部長に、なんとなく俺の言葉が慰め程度にしか聞こえていないんじゃないかと思つて、つい熱が入る。

「難しい事は、よくわかんないんですけど。俺は少なくとも部長が好きです。部長が好きなんです。俺みたいな平民には貴族特有の悩みなんてわかんないですけど、それでも部長を思う気持ちや、部長を応援する気持ちに嘘偽りなんてありません。だから——」

「もう、いいわよ。ありがと、ね？ イッセー」

言葉を途中で止められ、ふと我に返る。

何だろう、俺結構やばい事言っちゃったんじゃないだろうか。

部長の顔色を恐る恐る窺う。

しかし目を合わせようとした所で、ふいつと逸らされてしまう。

これは、やっちゃまった可能性大。

しかし今更後悔しても、発した言葉は戻らない。

どうしようどうしよう、俺には部長の次の言葉を待つ他無いのか？  
目を閉じてむむむと悩む俺に、しばらく経ってから部長が咳払い一  
つの後に話を変えた。

「と、ところでイッセー。輪廻から聞かされてはいるけど、貴方はどれ

くらい強くなれたのかしら？」

「えっ、あー…そう、っすねー…正直、自分じゃよくわかんない所が多いんですけど、取り合えず今までとは比べ物にならないくらいには強くなれたと自負してます！」

具体的な事まではわからねえが、強くなったことだけは胸を張って言える。

明らかに拳の振るう時の音が違うし、攻撃の時の視野も広くなったし、戦闘中の相手との読み合い等も得意になった。

ただある程度強くなったせいで、逆に自信が無くなっちまったというのはある。

強くなり、相手の事をいざ考え直してみると、自分の実力を客観的に評価できるようになってしまったせいもあり、なんだか自信が余計に無くなってしまふのだ。

一応明日の朝、下山の準備が終わったらみんなを待つ間組手をしてくれると輪廻が約束してくれたし、そこで自分の成果を再確認しようと思っっている。

最大強化の幅も広がったし、攻撃を当てる手段や交わされた時の対処法等もある程度身についたし、最後にやった時よりもマシになっているはずだがどうだろうか。

「なるほどね。それくらい胸を張って強くなれたと言えるなら十分よ。これで不安で仕方ないって言われたら、慰めてあげようかと思っただけど」

「はいっ！不安で仕方ありませんッ！」

「自信満々に言っただけだよ」

悪戯っぽく笑う部長に、俺は馬鹿正直に不安だと言った。

一応事実ではあるが、慰めてあげようかという言葉に反応しすぎてちよつと力が入ってしまった。

そのせいで部長からは「そんなに元気があるなら大丈夫よ」としか言ってもらえなかった。

うーん、俺のバカ。

「レーティングゲームは目前。勝って当然、とは言えないけど、勝てな

い訳じゃない相手よ。そしてその勝負の結果は、貴方にかかっている  
と言っても過言ではない。勿論私も他の子もベストを尽くすわ。――  
―けど、任せたわよ、イツセー―

「は、はいっ―」

真っ直ぐに俺を見つめて、真剣な声音で言われる。

背筋をピンと伸ばして返事をする、部長は「よろしい」と一言告  
げて、俺にもう寝るようにと勧めてきた。

待ってるよライザー。俺はお前を、必ず倒すツ！

そして部長に、この想いを伝えてみせるツ!!

ライザー、殴ります！

修行の日々も終わりをづけ、ついに俺達は下山し、そしてレーティングゲームに臨む事になった。

下山前に修行の成果を披露するタイミングがあつたが、そこで部長たちから賞賛してもらえた。

これならライザー相手でも見劣りしない、だそうだ。

そして今は試合会場の中。普段使っているオカ研の部室にそっくりなここは、なんと魔力で作った偽物の教室らしい。

魔力で作られているのはこの部室だけでなく、なんと駒王学園全体が作られているんだそうだ。

向こうばかりが優勢では不味かろうという事で、俺達の勝手知りたる学び舎がバトルフィールドに選ばれたらしい。

今は試合開始前の休憩時間。

しかし普段通りに落ち着いているヤツなんてここには居ない。

俺も木場も部長も朱乃さんも小猫ちゃんも、そして何よりアジアも、全員引き締まった表情だ。

なんでもこの試合は、部長のお兄様……つまり魔王様も見ていらっしゃるのだ。

その上輪廻まで見ているとなつては、絶対に無様な姿は見せられない。

大きく深呼吸して気合を入れつつ、部長から伝えられた作戦を脳内で反芻。

今回、俺は前線に出ない。

代わりにアジアが、最前線で戦うらしい。

俺を温存してライザーとの戦いでのみ使う為でもあり、アジア自身が輪廻に自分が強くなつたと見せたいから、とのこと。

アイツが悪魔になったのも、輪廻の隣に胸を張って立てるように、強くなりたいと思つたからだそう。

とにかく、序盤から中盤にかけては木場、小猫ちゃん、アジア、朱乃さんの四人が戦い、その後部長と俺がライザーを叩きに行く。

それまでは、例え何があろうと俺達は待機だ。

正直、誰かがやられたってアナウンスが来たらすぐにも駆け出しそうだけど……部長の指示だ。従おう。

というか万が一にも皆がライザーの眷属にやられるような事はなはずだ。だって、木場や小猫ちゃんは俺と一緒に輪廻から凄いとレーニングを受けたし、朱乃さんやアーシアだって、黒歌さんからかなり鍛えてもらったのだから。

「さあ、試合開始ね。皆、この試合——必ず勝つわよ」

部長の言葉にうなずき、全員が行動を開始する。

俺は動く時まで精神統一だ。己という刃を研ぎ澄まし、極限までその切っ先を鋭くすることが、強者を穿つ最大の策だ、と輪廻に言われたからだ。

明鏡止水……とまでは行かないが、取り合えず常日頃考えているおっぱい関係の事は全て脳内からシャットアウト。

新技の洋服破壊ドレスブレイクを使う機会があったならおっぱい一色だっただろうが、生憎と俺の相手はライザー一人。男相手に素っ裸にする技を使っても誰も得しない。勿論俺もだ。

取り敢えずこの十日間。俺はやれるだけの事をすべてやった。

肉体、技術、精神力。そして神器との接し方、使い方。

達人レベルかと言われれば全然そんなことは無いが、付け焼刃だとしてもこの戦いで勝利を掴めるくらいには仕上がっているつもりだ。

——しかし、俺の神器。

修行中、神器を扱う鍛錬が多数あり、その過程で神器と多く関わる事になった訳だが、それでも名前はおろか、詳しい能力についてすらも不明なままだった。

輪廻には「もしかしたら肉体が魂がその神器を受け止めるに足りないせいで、その本質が見抜けないのかもな」と言われた。

あんだだけ鍛えても、まだ足りないらしい。

単純に肉体が足りないのか、それとももつと別の何かが必要なのか。

わかっているのは、何かを殴りつければその攻撃の当たり具合に

よって強化され、攻撃を外せば一気に強化分が失われるという事と、気配に敏感になるという事だけ。

神器を使いこなせている、というには少々心もとなない。

「イツセー、少し良いかしら」

「?はい、どうしました?」

「ちよつと、こつちに」

部長から呼ばれて、一度瞑想を止めてから手招きされるままに近づく。

何だろう。何か秘密の話だろうか。別にこの場に誰もいないんだけども。

まあ、相手に俺達の行動が筒抜けの可能性だってあるわけだし、一応な。

「今から、貴方の駒の力を解放するわ」

「……はい?え、俺の駒の力って……」

「知っての通り、貴方は最初まるで力が無かった。魔力も無ければ、肉体もダメ。下級悪魔の中でもかなり下位に位置するような存在が、あなただった」

「うぐつ…ま、まあ、そうですね」

いざ面と向かって言われると心に来るぜ!部長様の言葉は時に俺を鋭く傷つける刃なのさ!

そんな事を考える俺だが、部長の続く言葉に胸を打たれる。

「でもあなたは努力した。その足りない分の才能を、努力でカバーして見せた。まだまだ発展途上だけど、それでもかなり成長してる。主として誇らしいわ」

「ど、どうも…」

飛び上がって喜んでしまいたい気持ちがあるものの、なんだか照れくさくって目を逸らしてしまう。

でもそっか。俺、ちゃんと成長してたか。

部長が誇らしく思ってくれたなら、それだけでも嬉しい。

「それでね、イツセー。貴方は最初、とても力が弱かった。それこそ、『悪魔の駒』に耐えられない程に。貴方には『兵士』の駒を四つ消費し

た、と前に話したわね？でも厳密には違う。貴方の本来の駒の消費量は、八つなの」

「八つ？…って、それ全部使ったって事ですか!？」

「そうよ。それくらい、貴方の中に眠る力は強大だったって事。まだその片鱗しか見えていないけどね」

部長の話を要約すると、なんでも俺に言っていた駒四つ消費の『兵士』という話は、厳密には『駒八つで転生させたものの、体に支障をきたさないレベルで力を発揮できるのは四つまでの兵士』という話だったらしく、日々のトレーニングと輪廻のスパルタメニューをこなした今の俺なら、八つ分の力を解放しても構わないとのことだった。解放するかしないかの判断は俺にゆだねてくれるとも言われた。

なんでも、突然大幅にパワーアップしてしまうと、自分の力に振り回されて本来のパフォーマンスを披露できなくなる危険性があるから、だそうだ。

でも、力があればライザーに勝てる確率が上がるのもまた事実。

正直分の悪い賭けだとはわかっているが、俺はここに来て力を底上げする事を決意した。

これによって、プロモーション時に得られる恩恵が増したらしい。後は素の力の向上。

試してはいないが、感覚的に強化の上限幅も大きくなった気がする。

「それじゃあ、後は皆からの報告を待ただけね。もう少し自由にしているわよ」

「了解です」

まあ俺が今できる事なんて、精神統一くらいだ。

心頭滅却すれば火もまた涼し、ってやつだな。アイツは不死鳥で炎を使うらしいし、ピツタリの言葉だ。

俺は再び胡坐で床に腰を下ろし、静かに瞳を閉じるのだった。

そして次に部長から声をかけられたのは、俺の出番…つまり、ライザーに攻め入るタイミングだった。

※――

部長に声をかけられ、すぐさま神器を用意し強化して、部室を飛び出す。

ドアからではなく、窓から。

屋上や屋根を通って、ライザーのいる場所へ攻め入る作戦だ。

部長だけなら飛んでいけば良いのだが、俺が飛べない為こうして足で向かう方法を選択する事になってしまった。

いくら格闘術とか筋トレとかに詳しい輪廻でも、流石に空を飛ぶ鍛錬はしてくれなかったからな。

そりやアイツ、ただの人間だし。

「でも部長、ライザーの野郎、ちゃんと本陣に居座ってるんでしょか？」

「データを信じるなら、ライザーはどれだけ眷属を失っても動かない。敗北はないと、そう確信しているから。もし本陣に居なかったとしても、ライザーが行く場所の予想はある程度つく。まず最初に一番可能性の高い所に向かっている、とだけ考えれば良いわ」

話しながらも、その速度は緩めない。

目線の先には、ライザーの本陣。窓を割って中に入り、そのまま奇襲で優位を取る。

それが俺達の作戦だ。

——だが、その奇襲作戦はすぐに失敗に終わる。

その原因は、ライザーがデータ通りではない行動をしたからだ。

そしてアイツの行動は、部長が予想だにしていなかったような突飛な物であり、とても舐め腐った物であった。

屋根を移動する俺たちの目の前に、突如として火柱が出現。

どこかデジャブを感じさせるその炎の中から現れたのは、やはりというかライザーだった。

奴曰く、俺達の活躍（眷属の大量撃破）を称賛し、自分を倒すチャンスを与えてやろうとの事。

自分が負けるわけが無いと知っていながら俺達の前に現れ、倒せるかもしれないという一縷の望みに賭けさせる。

悪趣味な野郎だ。お望み通り真正面からぶん殴ってやる。

「先手必勝ッ!!奇襲も正面突破も同じだあああああッ!!」

「はんっ、力量差もわからないとはな!この一本道において優勢なのは、偏に炎を自在に操る俺だという事を教えてやる!」

ライザーの手が手を伸ばすと、俺に炎の波が押し寄せる。

物凄い熱気だ。こんなのに触れたら、俺の体は溶けてなくなってしまうだろう。

けど、俺は止まらない。部長を信じて、前へ進む。

「何ッ!?——チッ、そうかリアスの滅びの魔力…!!」

「喰らいやがれっ、腐れイケメンがあッ!!」

俺を襲っていた炎は、部長の魔力によって消失した。

そのことに面喰って動きが固まってしまったライザーを、俺の拳が襲う。

顔を抉るようなストレート!強化された俺の拳は上級悪魔レベルだと、部長からもお墨付きだ!

「ぐっ……ははっ、まあ今の一撃でやられる程度なら、話にもならないからな。良いだろう、不死鳥と称えられし我が炎の真価、見せてやる!」

轟ッ!!と、俺の両側から炎が迫る。

部長の滅びの魔力で消滅させられても、しかしすぐさま再生する。

「まさかその炎、あなた自身だというの!?!」

「その通りさリアス!魔力で放つ炎とは違い、こちらは俺の翼!フェニックスの不死性を持つこの翼は、君の滅びの魔力であっても消滅させきれないのさ!」

翼は止まらない。このままだと、必死に回避しようとしたところで必ず攻撃を喰らってしまう。

部長の魔力で消滅させられないような炎を、強化されているとは言え生身の俺では即リタイアだろう。

——だったら、俺のやることは一つだけだろ!

拳を握りしめ、左右から迫る炎の翼に感じる恐怖心を噛み殺し、前へ。

そんな無謀な真似をするとは思っていなかったらしいライザーは、



よ。魔力切れは敗北扱いだもの」

「そつすよね……消しても即座に回復する以上、少量の魔力で消しつ  
つっていう最初の作戦も使えないですし」

さて困った。負けるつもりはさらさらでないが、これではどうやって  
勝ちを取りに行けば良いかわからん。

頼みの綱だった部長の魔力でも足りないとなつては、後はもうさつ  
き愚策つて言ったアレしかない。

俺が馬鹿正直に突っ込む以外に、方法がない。

「——でも、妙ね。ライザーの実力は私と同程度だったはず。それな  
のにどうしてあれほどの力を……？」

「え？上級悪魔つて、あのくらいの事ができる物なんじゃ無いんです  
か？」

「違うわよ。仮に上級悪魔であのレベルだったとしても、それはもう  
最上級一步手前とかだわ。勿論ライザーが最上級悪魔一步手前だ  
なんて事はない。直近の戦闘データを見てもそれは明らかだもの」

「じゃあ、あの力にはなんか仕掛けがある……つて事つすか？」

「そうよ。そしてその仕掛けさえ何とかできれば、或いは——」

部長の言葉を遮るように、炎の波が襲い来る。

戦闘再開だ。とにかく今は逃げに徹して、アイツの力の源を探る！

「部長、失礼しますッ！」

「えっ？——ひゃあっ!?!」

足元を殴りつけてちよつぱり強化し、すぐさま部長を抱きかかえて  
その場を離脱。

部長一人でも逃げられるんだろうけど、今は俺達が二人で居た方が  
良い。

攻撃が来る場所を一か所に絞れば、部長に防いでもらえやすいから  
な！

それに、俺じやアイツの力の源がわからなくても、部長なら見抜け  
るかもしれないし。

しかし部長の顔が真っ赤だ。

何だろう、もしかして照れている——んなわけねえか。俺や木場が

いるのに、カーテンに仕切られているからって堂々とシャワー浴びちやうような人だし。今更抱きかかえられてる程度で顔真っ赤にして照れたりなんかしないだろう。

……まさか強く抱きしめすぎて苦しいとか!?

でもこれ以上力を緩めると落としてしまいそうなんで我慢してください！すんません！

「うひゃー……すっげえ炎。校舎が歪んでるぜ……」

「フェニックスの炎は龍の鱗すら溶かすというもの。コンクリートはともかく、中の鉄筋なんかは溶けてしまっているのね。直接燃やさずとのこの熱気……もう少し、離れましょう」

「そっすね……マジで、校舎がでつかくて良かった……」

少し離れた場所に着地しつつも、その目はライザーから離さない。炎に囲まれて見えないが、ライザーが何か強い力を放つ物を持っているのだけは感覚で分かる。

でも感覚は感覚だ。実際に見たわけじゃない。

だから、炎が揺らいで隙間ができる一瞬。その一瞬でアイツの力の正体を探れば——！

俺達を追いかけて来る炎を躲し、時に部長の魔力で防いでもらいながら、隙間を待つ。

まだか、まだかと焦りが生じそうになるのをぐっと堪えつつ、逃げ続ける。

そして、ついにその時が来た。

奴の手に握っているのは——剣。一振りの剣。

強い力を感じるのも、その剣だった。

恐らく、あの剣がライザーに力を与えてるんだらう。

つまり、アレさえ壊せば俺たちの勝ちだ！

「部長！」

「ええ、見えたわ。アレを消滅させれば！」

「一気に近づき——ッ!？」

「あらお見事。今のを避けるだなんて」

突然悪寒を感じその場を離れると、俺達のいた場所が爆発してい

た。

そして聞こえてくる、女の声。

「ユーベルーナ……！」

「こんにちは『紅髪の滅殺姫』。挨拶ついでに忠告してあげるけど、そこ、炎が来てるわよ?」

「んなっ——があああっ!?!」

油断した。いや、意識を一方向に向け過ぎた。

背後から迫ってきていた炎。本来なら除けられたはずのソレを、俺は受けてしまった。

痛い!熱いとかじゃねえ、痛い!背中を引つpegがされてるような痛みが一気に押し寄せる!

「イツセー!?!」

「はあ、はあ、部長:は、無事ですか?怪我は?」

「え、ええ。私は何ともないわ。——でもイツセーは」

「俺は、平気です。ちよつと背中が焼かれただけで」

嘘です。ほんとは滅茶苦茶辛いです。涙出ちやいそう。

でも男つて馬鹿なんです。好きな人の前だと、どうしても格好つけちゃう生き物なんです。

だから泣かないし、倒れない。部長は離さないし、撃破判定が入るまでは戦い続ける。

「それよりもユーベルーナですよ。ライザーの突破口を見つけたとは言え、アイツが邪魔してくるとなると……それに、アイツがここにいるって事はつまり」

「朱乃が、敗れた……」

「その通り。『雷の巫女』には爆発してもらったわ。——けど、妙だと思わない?やられたはずの彼女の、撃破のアナウンスが無かった事」

そう言われてみればそうだ。

今現在、俺達の方は誰一人として撃破されたとのアナウンスが無い。

ライザーとの攻撃をかわしている時に、聞き逃した?いやいや、あの時はかなり集中していたとはいえ、周囲への警戒も怠っていないかつ

たし、アナウンスなら聞こえていたはずだ。

訝しみつつ、もしかしてと思いつながら気配を探る。

朱乃さんの気配は何処にあるのか。

そして、気づく。

——アイツの、ローブの中。

「ふふっ、怖い顔。わかったかしら？ 『雷の巫女』の居場所」

「……今、お前が抱えてるんだろ」

「ご明察。勿論なぜ連れてきたのかもわかっているでしょう？」

「…人質、つてわけね」

部長が歯噛みしながら言う。

ソレを見てユーベルーナを口元を三日月のように歪めて笑いながら、ローブで隠していた腕の中を見せる。

そこには、傷だらけの朱乃さんが抱きかかえられており、首元にナイフを突きつけるように、顔のすぐ近くに魔法陣が展開されていた。

あの至近距離で爆発なんかさせられたら、リタイアどころか顔に一生消えない傷が残ってしまう。

そんなの、良いはずがない。

「動きが無くなったかと思えば、まさかユーベルーナがやってくれたとはな」

「独断をお許しく下さい、ライザー様。ですが、これも完全なる勝利の為」

「構わないさユーベルーナ。お前の俺を思つての行動、とても嬉しく思うぞ」

炎が弱まり、ライザーが俺たちの背後から歩み寄ってくる。

その手に持っている剣は怪しく輝き、その瞳もまた爛々と輝いていた。

勝利を確信した表情に、俺と部長が拳を硬く握りしめる。

「さて。どうするリアス。大人しく『投了』するならお前の『女王』にはこれ以上何もしないぞ」

「…最ツ低ね。こんな戦いをよりによって両家の当主たちが見る場にして、非難を受けないと？」

「いや問題ないさ。なぜなら今俺達を見ている物は誰一人いないのだから」

「何?」

それが事実であるかのように話すライザーに、俺は眉をしかめた。なんでコイツが、そう断言できるんだ?まさか、見ている人達もライザーに協力しているって事か:!!

愕然とする俺だが、表情から俺の考えている事を読み取ったのかライザーが首を横に振る。

そしてその剣を掲げ、次の瞬間俺は吹き飛ばされていた。

部長を守るとか、回避するとか、そんな隙も無く。

フェニックスの炎が突然俺を襲い、吹き飛ばしていた。

気配も何も無かった。

突然そこに現れたみたいになんの前触れも殺気も無く、いきなり。

「ぐうっ!」

勢いよく地面に叩きつけられた俺は、脳が揺れたせいか動けなくなってしまった。

ぐらぐらと揺れる視界から察するに、俺は校庭に飛ばされたらしい。

しかも木場達がいる所だ。

皆が俺を心配するように声を荒げるが、それに応えるどころじゃない。

マジで全身が痛い。つつーか今の衝撃で神器が解除されちゃって、

強化が全部抜けてっちゃった。

その倦怠感も相まってか、気絶寸前だぜ俺。

「おいおい、こんなんでへばってちゃお話にならないぜ下僕君。俺のこの新しい力の真価は、まだまだ発揮できてないんだからな」

「ぐっ、があっ………て、めえ……!!」

拳を握りしめ、再び神器を纏おうとするも、ライザーは親指で背後を——ユーベルーナと、その腕に抱きかかえられている朱乃さんを指す。

脅しだ。俺が何か抵抗しようものなら、アイツは朱乃さんに攻撃す

る。

畜生っ、あのクソ野郎、最後の最後で卑怯な真似しやがって!!

「その剣と、朱乃さんの存在が無けりやテメエなんか!」

「そうでもないさ。俺のこの剣の力はまだまだその力を発揮していない、そう言っただろう。元々リアス含めその下僕たちも、俺には敵わないのさ。だがな、ちよいと余裕を見せすぎた。そのせいで俺はお前に何度か殴られるという醜態をさらすことになってしまった。——だからな、ここで圧倒的な力の差を見せつけてやらないと、フェニックスの名前に泥ぬったままになっちまう」

だから、と言ってアイツは剣を掲げる。

そして再び怪しく光を放ち、今度は俺を心配して近づいてくれた木場達を焼き尽くした。

「ツ!!テメエ!!」

『リアス・グレモリー様の『騎士』『僧侶』『戦車』、計三名、戦闘不能』  
アナウンスが冷酷に三人の敗北を告げる。

あまりに呆気なさすぎる。必死に修行して、ここまで鍛えてきたのに。

まだまだ戦えただろう三人が、たったの一撃で。

アーシアなんか、輪廻に見てもらおうと誰よりも張り切っていたのに。

歯を食いしばり、ライザーを睨みつける。

人質?そんなの関係ねえ! 朱乃さんに攻撃されるよりも先に、俺がライザーを撃破すれば良い!

神器を出現させ、一気に最大強化まで溜めて駆け出した俺に、ライザーはしかし余裕の笑みを見せたまま、悠然と剣の話をする。

「この剣は『引換剣』と言ってな。名前は安直だが、その力は所有者の命と引き換えに願いをなんでも叶えると絶大なのさ。神器に近い力を持つコレは、<sup>フェニックス</sup>不死である俺が使ってこそ真価を発揮する。例えば、さつきみたいに俺の炎をより強く、より激しい物にしたり——前触れも無く出現させてみたり、な」

「があああああつ!!?」

飛び上がった拳を振りかぶった俺の目の前に炎が現れた。

いや、厳密には俺の目の前だけじゃない。俺を包み込むように炎が出現し、そのまま俺の全身を焼き尽くした。

熱いッ、死ぬほど熱いッ!!

最大強化されてるおかげか即リタイヤとはならないが、それが逆に辛い。

でも、諦めるわけにはいかない。

俺の大好きな部長を、コイツなんかには渡すわけにはいかないからだ!!

地面に落下した衝撃も、現在進行形で全身を焼かれる痛みも、全部根性で耐え抜く。

たかが焼き鳥野郎の炎で、部長の唯一の『兵士』である俺がやられてたまるかよ!!

「はんっ、耐えるじゃないか。だが既に体は限界のようだな。その足、酷く震えているじゃあないか。今ここで諦めて倒れ伏したって、誰もお前を責めたりなんかしないと思うが?」

「うっせえ! 部長がまだ諦めてねえってのに、眷属の俺が諦めてたまるか! どんな願いもかなえるだか何だか知らねえが、俺のやることは—— テメエを、ぶん殴ってブツ倒す事だけだあああああつ!!」

拳を地面に叩きつけ、最大強化からさらに強化する。

数発殴っても問題ないレベルの強化なんかじゃ、足りない。

だから、一撃当てたら限界を迎えるようなレベルの、ギリギリまで強化した拳を振るう。

限界強化した拳の一撃なら、もしかしたら一撃でアイツの心を折る事ができるかもしれない。

修行中に輪廻に言われた言葉だ。

分の悪い賭けだからやめておけとも言われたけど、今はもうコレに賭ける他ない状況だ。

一か八かだ、気合入れろよ俺!

「チッ、今までののが限界じゃ無かったのか!」

「はんっ、今更気づいたって遅えッ!!」

驚いて硬直するライザーに肉薄し、顔面を砕く勢いで殴りつける。防御も回避もされること無く、俺の拳はヤツを再び死に至らしめた。

強化限界を超えたせいで一気に力が抜けていくが、ヤツが即座に回復する素振りが無いのを見て勝ちを確信する。

見た所朱乃さんもまだ何もされてないみたいだし、部長も無事みたいだ。

どっと疲労感を感じるが、それ以上に達成感を感じる。

俺の拳は、ヤツを殺しえた。部長の婚約も、これで破棄だ！

「つしやあつ、どうだこの野郎!!俺の限界強化パンチは、流石に堪えたろ!!」

「ああ、本当に喰らっていたらやばかったかもなあ」

ゾクツ、と。

特に殺気を感じたわけでも無いのに、途轍もない悪寒を感じた。

いや、それどころじゃない。

なんでアイツの声が、背後から聞こえる？

重力に従って落下していきつつ、体をひねって声の聞こえた方を見る。

そこには、『引換剣』を持ったライザーが、無傷の状態でそこに居た。

「んなつ、どうして?」

『引換剣』は所有者のあらゆる願いを叶える。——こうして、俺にそっくりな偽者を造りだす事も可能だし、誰にも気配を察知されること無く潜む事も可能という訳だ」

「い、いつから」

「俺が炎で自分の姿を隠してからさ。まさか、上級悪魔の中でもトツプクラスの實力を持つこの俺が、なんの意味も無く乱雑に炎をまき散らしていたとでも?」

既に体力が尽きた状態でありながらなんとか着地し、ライザーの言葉を聞く。

なるほど、だからユーベルーナは俺の攻撃を妨害しようとしなかったわけか。

そうだよな、そこで怪しいと思わなかった時点で、俺の敗北は決定していたって訳か。

「——いや、まだだ。まだ動くぞ、俺は」

「はあ。主の為と何度でも立ち上がるその姿にはいつそ敬意すら感じるがな、勝ち目のない相手に対して無駄な足掻きをするのは見苦しいだけだぞ」

「何が見苦しい、だ。それは貴族のテメエの意見だろうが。ノブレス・オブリージだかなんだか知らねえが、気品ある振る舞いがどうのとか、俺には知ったこつちやねえんだよ。泥臭くても、笑われても、勝利を掴む。大切な人のために戦う。それが俺だ、『兵藤一誠』なんだ」  
無理矢理神器を再出現させ、二度だけ地面を殴る。

今の限界強化はこの二回分だけ。どうせ俺の力じやライザーは倒せねえが、隙を作るくらいなら……部長がライザーを攻撃する隙を生じさせるくらいなら、できるはずだ。

屋根の上でこちらを呆然と見つめている部長に、目線だけで俺の作戦を訴える。

わかってくれるだろうか。伝わらなかつたら参ったな。

——それに、すっげえ場違いだけど……やっぱ、綺麗だな。部長。

あの人に笑顔で居てもらうためにも。

そして俺のこの想いを、いつか告げるためにも

俺は最後まで抗い続ける！

「勝負だつ、ライザあああああああッ!!」

雄叫びと共に駆け出した俺は、多分誰の目にも情けなく、弱々しく、愚かに見えただろう。

相手は最強クラスの『王』で、こっちは消耗しきった『兵士』。

勝ち目なんて無くって、大人しく敗北を受け入れるのが正しいあり方なんだろう。

でもそんな事は知ったこつちやないと、己の意志を貫き通すためだけに振るった拳。

その必死の一撃が、ライザーに届く事は無く。

振り抜く直前に力を使い果たした俺が強制的にリタイアさせられ、

こちらは部長トを残すのみとなつてしまい。  
『リアス・グレモリー様の『投了リザイン』を確認。勝者、ライザー・フェニツクス様』

退場者が集まる部屋で意識を失う直前に聞こえたのは、俺達の敗北を告げる冷酷なアナウンスだった。

結婚式、ぶっ壊します！

「……………」

ふと目を覚ますと、俺は真つ暗な闇の中に居た。上下も左右もわからない、ただただ黒い空間。

俺はちゃんと両足で立っているのか、それとも何かに掴まっているのか、それもわからない。

視界もぼやけているし、意識だつて朦朧としたままだ。

俺は確か、ライザーに負けて……で、皆に慰められて、部長に怪我が残っていないかって何度も心配されて……そこから、数日過ぎて。部長が結婚しちまうってシヨックで漠然と過ごして、それで今日がその婚約を大々的に発表するパーティーの日で……

上手く思考がまとまらない頭を無理矢理働かせ、俺は今に至るまでの記憶を掘り起こす。

しかし、やつぱりなんでこんな意味不明な空間に居るのがわからない。

「よお、やっと目え覚ましたか」

「——えっ？ソファ？それに、誰？」

「おいおい挨拶も無しかよ、せつかくの神器デビューだつーのに、宿主サマがこうも情けないと幸先不安だぜ」

渋い声の男に声をかけられたと思つたら、今度はソファに腰かけていた。

隣を見ると、声の主であろう男も座っている。顔は何か影のようなもので塗りつぶされているようで、見えない。

「す、すみません……えっと、俺、兵藤一誠つて言います。それで……アンタは？」

「ああ、よく知ってるね。そんでもって俺は——そうさな、お前の神器に宿るモノ、つて言つたらわかるか？」

「神器に、宿る？」

おかしな話だ。神器つてのは神様が人間に授けるギフトだと、部長が言っていた。

ソレはあくまで物であり、意志なんてのはそこに宿っていないはずなんだが……いや、でも輪廻が前にそれっぽい事を言っていたような？

でもアレって比喩表現とかじゃないのか？

混乱する俺に、男は軽く笑って話し始めた。

「そう、神器に宿るモノ。赤龍帝だの白龍皇だの、聞いたことあるだろ？あれと同じさ。強大な力を持つドラゴンである俺は、こうして神器に封印されちまったのさ。ご丁寧に力の一部を切り離されてな」

「ど、ドラゴン？いやいや、でも見た目は普通の人間じゃ」

「ああ。俺ってのはただのドラゴンじゃない。ドラゴンにして悪魔。それが俺さ」

「ドラゴンにして、悪魔？」

それもまたおかしな話だ。

ドラゴンってのは力の象徴。天使も悪魔も墮天使も、他の神話の存在も神様でさえも歯牙にもかけず、そのどれにも力を貸さずに自由に生きるのがドラゴンのはず。

それが、悪魔も兼任ってのは変だろう。

だが男はまるで平然と、ただ事実を並べ連ねるように話す。

「そうさ。ま、詳しくはわかんなくってもいいさ。取り敢えず今のお前に大事なものは、俺がドラゴンでもあり悪魔でもあり、そしてその力をお前に貸してやってるって事。左腕に出現する神器：『悪魔の連撃』はその一端だな。殴れば殴る程強くなる。単純で良い能力だろ」

「……いや、まあ、助かってはいるけど……もうちよつと使い勝手良くなったりしねえの？」

「たっは——言うね。でもいいぜその強欲さ。俺は憤怒担当だけど悪魔らしいかつたらなんだって大好きさ！——ただ、改良してやるよりもっといい手段があるんだよな、これが」

にやりと口元を歪める男。影で隠れているはずなのに何故かそうわかってしまうのに気味悪さを感じつつも、次の言葉を待つ。

『禁手』ってのは知ってるよな？」

「…神器所有者が至る事の出来る、神器の力を解放しきったその先：だっけ？」

「ま、おおよそはそうだな。細かくは違うが、取り合えずそんな認識で構わん。——で、だ。お前、あのフェニックスの小僧にムカついてんだろ」

「え？」

突然そんな事を言われて、返事に詰まる。

まあ、腹が立たないかと言われれば嘘になる。できる事ならアイツをボコボコにして、今やっているのかこれからやるのかわからない婚約パーティーを滅茶苦茶にしてやりたい。

でも、俺は無力だ。

もし『禁手』ができるならもしかしたらがあるかもしれないが、それは何年もかけてようやくたどり着けるような領域だと、輪廻が言っていた。

人によつては、何か劇的な変化があればその場でとの話もあつたけど…：あんな修羅場を潜り抜けても至らない俺は、きつと何年もの努力が必要なんだろうな。

「惚けなくなつてわかるさ。好きな女取られて、自分は死ぬ直前までボコボコにされて…：悔しいったらありやしないだろ」

「…：そりゃ、そうだけど」

「よっし。そうだ、それでいい。——さて、お前は今『自分には力が無い』だの『禁手』に至るには何年もかかる』だのと考えてるだろう。ああ言わなくてもわかる。俺達は今や一心同体。考えてる事は俺には筒抜けなのさ。お前の脳内の内半分は常におっぱいの事しか考えてない事も含めてな」

いやなんて事まで把握してんだコイツ！

「で、だ。そんな悩めるお前に悪魔から素敵な取引を持ちかけてやろう。力が手に入って、グレモリーの娘と結婚させないようになれる…：そんな素敵な契約を、な」

ソファから立ち上がり、男は大仰な素振りと共に話し始める。

その内容は、確かに魅力的で——同時に、俺を破滅へと導くような

物だった。

※――

「さーって。そろそろ式場にでも行ってきましたかね――ん？客？」

「こんな時間になんて、珍しいにゃん。私が見てくる？」

「んや、俺の知り合いかもしれないし、俺が出るよ」

時間もまだあるしな、と付け足して一階へと向かう。

因みにここで黒歌に行かせなかったのは、こんな夜遅くに尋ねてくる俺の知り合いはいつもの変態三人組くらいだからだ。

イツセーはともかく、松田元浜と黒歌を二人つきりにするのはなんとなく嫌だ。

別にアイツ等を性犯罪者か何かと知っているわけでも無いのだが、なんとなく。

今日も今日とて酒盛りしている両親を横目に玄関へ向かい、ドアを開ける。

するとそこには、真剣な顔をしているイツセーがいた。

――コイツ、腕を捨てたか。

「…おおよその事はその左腕を見りやわかった。その上で聞くが――何の用だ？」

「婚約パーティーを滅茶苦茶にして、部長を取り返したい。お前なら会場に行く方法も知ってるだろうから、連れてって欲しい」

俺を真っ直ぐに見つめながらそう言ったイツセーに、俺は無言で頷くのだった。

※――

「本日は私、ライザー・フェニックスと妻、リアス・グレモリーの婚約披露宴にお越しいただきありがとうございます!!」

胸元を大きく広げた悪趣味な服を着たライザーが、声高に告げた。

会場に集まった貴族達や、イツセーを除く私の眷属たちが、皆私とライザーの方を見てくる。

別にまだ完全に妻と決まった訳じゃ……いえ、もう無理ね。

私達がレーティングゲームで負けたのは事実。

朱乃を人質に取り、私達が所持していないフェニックスの涙を使用

し、あんな反則級の武器すら使用したとは言え——どれも、ルールに抵触しない範囲。

寧ろあの試合を中継で見ていた貴族達は、ライザーの評価をより高い物にしたと聞いている。

冷徹さを持ち合わせ、しかしエンタメ性を失わない派手な戦闘。それは悪魔たちが好む物だから。

冷静さを装いつつも、拳を握りしめる祐斗。

無表情に見えて、悲し気に瞳を伏せている小猫。

気にするなど何度も言っただけけれど、未だに申し訳なげな表情のままな朱乃。

そして唇を噛みしめ俯くアーシア。

まるで自分の事のように悲しんでくれる眷属たちの姿に、私も抑え込もうとしていた感情がこぼれそうになる。

泣き言の一つでも、吐いてしまいたい。

……もし、もしもこの場に貴方がいれば、どんな顔をしたでしょうね、イツセー。

感情的な貴方だから、大声で泣いてくれたかしら。それとも、意外と冷静に堪えたり？

こうして貴方が何をするか、どんな表情を見せるかを考えると、私が全然貴方の事を知らないと思いきや知らされるわね。

イツセー。私の可愛い下僕。

エツチで、おバカで、熱血で……優しい子。

神器の名前を知らなくたって、魔法陣で転移できない程に魔力が無くなったって、それでも諦めずに前を見続けられる……そんな子。

私はあの子が好きだった。

他の皆への好意とは違う。たった一人にだけ向ける、大切に、温かい気持ち。

初めて意識したのは、私が好きだと輪廻に話すのを聞いた時。

そこからイツセーを見る目が少し変わって、そして修行の最終日に二人で話した時、惹かれて。

でもまだそれは『好き』って気持ちじゃなくって、本当に『好き』に

なつたのはライザーとの戦いの最中。

私を抱きかかえて戦い、ボロボロになつてもなお最後まで戦い続けようとしたイツセーに、私は惚れた。

あの子はずっと自分を責めていたけれど、私にとっては一番頑張ってくれたのは、一番かつこよかつたのは、あの子だった。

——ああ、イツセーがこの場に居なくて良かった。  
ウエディングドレスを身に纏つた今の私を、他の男の物となつた私を、見て欲しくないから。

でも、それと同時に願つてしまう。

あり得ない事なのに、どうしても心の奥で抱いてしまう期待。

今この場に颯爽と現れて、私を連れ去つて欲しい——なんて。

限界まで傷ついて、私の為に全てを懸けてくれたあの子に、これ以上求めるのは酷なのに。

そつと瞳を閉じる。

現実を受け入れよう。だが、心は決して渡さない。

体はライザーにゆだねる他無くとも、私のこの想いはイツセーだけの物。

そう硬く心に誓つたその瞬間、会場のドアから爆音が響いた。

「なつ、貴様は！」

ライザーが声を荒げる。

会場の貴族達が、皆動揺する。

ゆつくりと目を開く。

もしかして、と逸る気持ちを押さえつけ、ゆつくりと。

「お前に部長は渡さねえ」

そこには、イツセーがいた。

拳を振り抜いた形で残心するイツセーが、確かにそこに居た。

そして、私が一番欲しい言葉を、この場の全員に聞こえるように告げた。

「部長の、リアス・グレモリー様の全部は、俺のモンだあああああああ

ああつ!!」

私のポーン下は僕。

私を助けに、来てくれた。

※――

神器の中に眠るモノ。ソイツの持ちかけてきた話はいたってシンブル。

俺の腕を生贄に、『禁手』を一時的に使用可能にするというもの。場合によっては腕一本では済まないと告げられたが、俺は悩まずにその話に乗った。

最低腕一本で、部長を助け出す事ができる。俺にはそれだけで十分だった。

そうして腕を先払いした俺は、輪廻を頼ってパーティーの会場に乗り込む事にした。

今思えば無計画にもほどがあつたと思う。

輪廻が婚約パーティーに行く手段を知らないとかだったら、俺の腕が捨て損になるところだった。

――で、意気揚々と会場に乗り込んで、輪廻のアドバイス通りドアを殴り飛ばして堂々と宣言。

まだ告白の一つもしてねえけど、駆け落ち気分だ。

勿論ライザーは俺を見るや否や警備を担当しているだろう兵士たちを俺に差し向けてきた。

別に俺が相手しても問題無かったけど、露払いは全部輪廻がやってくれた。

直接言われたわけじゃないけど、「お前はライザーに集中しろ」って事だろう。

ありがとよ、親友。そして見ててくれ。

俺が好きな<sup>部</sup>人を、あの焼き鳥野郎から奪い返す所をよ！

「あの人間：！！チツ、何しに来たんだよりアスの下僕君。君は俺に負けただろう？その上で、なんだって？リアスの全部は俺の物？お前が？身の程知らずにも程があるぞ下級悪魔。リアスは、俺のリアスだ。これは両家のお偉方が決定した事でもある。お前みたいな転生したての弱小悪魔が一々口を挟めるような内容じゃ」

「んな事知るか！俺に大事なものは、部長が望まない結婚を強いられ

るって事と！部長が俺以外の男と結婚するって事だけだ！行くぞライザー、ゲームの時みたいに顔面殴り飛ばして、そのまま部長を連れ帰ってやる！」

俺の言葉に、ライザーは顔を歪める。

心底憐れんでいるみたいな目を向けてくるのが腹立たしいが、それよりも部長だ。

純白のウエディングドレス。素敵だが、ライザーが選んだものなら今すぐにも普通の制服に着替えていただきたい。

一触即発、といった雰囲気ではらみ合う俺達の間、一人の男性が割り込んでくる。

部長のような紅の髪をした、中性的な顔立ちのイケメンだ。

「その話、私も一つ噛ませてもらうかな？」

「なっ、サーゼクス様!?!」

「サーゼクス…って、部長のお兄様!?!」

「ああ、二人とも硬くなる必要は無いさ。これは、個人的な介入だからね」

柔らかい笑みを浮かべるサーゼクス様に、しかし俺は緊張したままだ。

なんてったってサーゼクス様は、部長のお兄様にして魔王様。

その力は悪魔随一で、部長と同じ滅びの魔力を操る凄い人なんだとか。

俺なんか指先一つで簡単に消滅させられちゃうような人を前に、その人の妹を連れ去る宣言をしちまったんだから——いやでも、怖気づくな俺。部長を取り戻すって決めただろ！

「……あなたは、あの試合が不服だったと？」

「いや？あの戦い方は悪魔としてとても褒められたものだった。私とて君の勝利が間違った物だというつもりは無い。——けど、それと同じ時に私は、こういう熱血漢というのが大好きなのさ。愛する主のためにと、無謀にもフェニックスに挑む下級悪魔。実に面白い。……確か、兵藤一誠君…だったかな？」

「は、はいっ！」

「君は、リアス・グレモリーとライザー・フェニックスの婚約を破棄させ、連れ去りたい：そう言っていたね？」

「っ！はい。俺は、俺は部長が結婚するなんて嫌です！勿論、部長だって好きでもない相手とは結婚したくないと言っていました！だから、だから俺は！」

「うん。もう大丈夫だよ。君の願いは、確かに把握した」

俺の言葉を遮り、サーゼクス様は頷いた。

そしてライザーの方を一度見て、その後全員に聞かせるように大きな声で言った。

「どうだろう。今から君と兵藤一誠君とが戦い、もし兵藤一誠君が勝利する事があれば望み通り、婚約を破棄させるというのは」

「し、しかし！」

「無論君が勝利すれば、君の望みを叶えよう。リアスとの婚約もそのままに願いが叶う、良いチャンスだと思うけどね。——富も名誉も、望むなら美女だって。魔王としての私が、望む物を与えると約束しようじゃないか」

「：望む、物を」

「ああ。そも、君はフェニックス。いくらこの場に殴り込めるくらい胆力があるとしても、単なる下級悪魔に敗北するような事はないと思うね」

「——良いでしょう！不死鳥と謳われし我が一族自慢の炎を、お見せしましょう!!」

「：勿論、君も良いだろう？兵藤一誠君」

「ええ。願ったりですよ。必ず勝って、俺の願いを……部長の婚約破棄を、叶えて見せます」

「イツセー……」

部長が俺を呼ぶ声が聞える。

視線を向けると、心配そうに俺を見つめていた。

大丈夫ですよ、部長。

なんてっただって俺は、俺のこの力は——!!

「では、早速準備に取り掛かろう。この会場に、特設のステージを作る

としようかな」

「……あの、サーゼクス様。あちらの人間は…？」

サーゼクス様の隣に控えていた美人さんが恐る恐る指を指した先には、倒れ伏した兵士たちを一か所に集めている輪廻がいた。

……さ、流石。無傷な上に汗一滴流してねえ。

サーゼクス様は輪廻を見ると、なぜか一瞬だけ表情をほころばせて、すぐに厳格な表情に戻り一言。

「…せっかくだ。私と一緒に、二人の戦いを見てもらうとしよう」

「よ、よろしいのですか!？」

「あの少年と一緒に連れてきた人間だ。本来招かれざる客ではあるが……今回は、特別に許そうじゃないか。君も、友人の雄姿を見逃すつもりは無いだろう?」

「——ええ。俺は彼が勝つ姿を見るために、ここに居ますので」

…ツ!不覚にもジーンときた。

あの輪廻が、俺なら勝てるかと信じてくれている。

こんなのもう、負ける要素がどこにもねえ。

願いを叶えるだか何だか知らないが、不死性を突破するくらいの一撃ぶち込んで、今度こそ勝ってやる!!

※——

「お前…兵藤一誠とか言ったか。なぜまだ諦めない?あのレーティングゲームで、十分俺との実力差はわかっただろう?」

「ああ。その上でだよ」

「…はんつ、勝ち目のない勝負に挑む事を美德とは思えないがな」

「いや、違うぜ。俺がああのレーティングゲームで知った実力差は、殆どないって事だけだ」

挑発する様に言った俺に、ライザーは不快そうに顔を顰めた。

いいぞ、怒れ怒れ。かつこよさとか気にした、あの時みたいなの舐めプはこりこりなんだよ。

「身の程を教える必要があるらしいな!」

「言ってる種まき焼き鳥!——聞こえてるよな、最初っから全力全開、クライマックスで行くぜ!プロモーション『女王』!!」

部長からプロモーションの許可は下りている。

最初は騎士にするか戦車にするかで悩んだけど、ここは女王を選んだ。

魔力での攻撃はできないとは言え、速度も攻撃力もどちらも極限まで引き出せるのは『女王』だからな。

一個の能力が無駄になっちまってるのは悲しい所だが、それでも十分、十二分！

プロモーションと同時に駆け出した俺を、ライザーは大きなため息と共になじる。

「おいおい、あんな大見得切っておきながら、やることは相も変わらず無策の突進か！所詮は下級悪魔だな、リアスの『兵士』！」

「いや違うッ！俺はあの時よりも、もつとずっと強い！なあそうだと、見せつけてやろうぜ——サタン!!」

『Satan's power over drive!!』

生贄にした左腕を突き出し、神器の中の、俺の中のアイツに、憤怒の龍魔王に呼びかける。

その声に反応するように、神器が黒い輝きを放った。

そして俺の全身を影が、闇が包む。

遠くから、近くから、至る所から聞こえる笑い声。

俺を包み込んだ不定形の闇が、形を持ち始める。

光の一切を飲み込むような、しかし黒く輝く鎧へと。

「これが俺の新たな力！『悪魔の連撃』の『禁手』——」

『龍魔王の鎧』だ！さあ行くぜサタン、10秒もいらねえ、5秒

以内に終わらせてやらあッ!!」

『Break down!!』

「馬鹿なッ、サタンだど!?原初の悪魔の中でも最強と謳われる悪魔の力が、なぜ転生悪魔如きに宿っている!!——ええい、まあ良い。コケ脅しだろうが本物だろうが、願いを叶える俺の力には及ぶまい！さあ『引換剣』よ！あの身の程知らずの下級悪魔を、灰すら残さず焼き尽くす力を俺に——ぐぼああッ!」

力を解き放ち、ごちやごちやと喚き散らすライザーを思いつきりぶ

ん殴る。

拳が当たり、さらに力が増していく感覚を覚えながら、俺は吹っ飛んでいったライザーを追撃するべく無言で駆け出す。

「なっ、速——ッ!!」

驚いている様子のライザーを、さらに二発!

こんな重い一撃を三発も入れたら、普段の俺なら既に許容限界超えてぶっ倒れてる頃だけど……まだまだ、いけるよなあッ!!

「うおおおおあああああッ!!これがっ、俺の、力だあああああッ!!」

「ぐっ、ぼっ、があああああああッ!」

壁に埋まりかけているライザーを、さらに押し込むように殴る、殴る、殴り続ける!

力が増し、さらに気分が高揚する!

ああ、そうだ。俺の心は今までにないくらいに燃え上がっている。人質にされた朱乃さん。

ほんのおまけ程度に燃やされたアーシア、小猫ちゃん、木場。

必死に足掻き続けた俺を嘲笑ったライザー。

そして、俺がリタイアする直前に見た、部長の——涙。

全部、全部だ。

その全部が今俺を奮い立たせる。

限界を超えろと、何もかもを捧げて戦えと。

「ライザーあああああッ!!」

「な、めるなよ、下級悪魔風情がああああああ!!」

一度攻撃を止め、俺のカス程度しかない魔力を限界まで込めた一撃を放つ。

今までの隙の一切を見せない連撃ではなく、確実に仕留めるための一撃。

だがソレを放つために生じてしまった微かな隙は、アイツに『願い』の力を発動させてしまう致命的な一瞬となってしまった。

瞬間、目の前に現れたのは青い炎。

フェニックスの炎は本来赤い物。けど、それよりもさらに強く、熱

いその炎は、凍えるような蒼色だった。

「でもンなもん関係ねえ！家柄とか体とかそんなモンにしか興味ねえテメエと違って、俺は部長の全部が、リアス・グレモリーの全てが大好きなんだああああアツ!!!」

『願い』で強化された青い炎。

俺の放つ渾身の一撃。

数瞬の拮抗状態の後、勝ったのは俺の拳だった。

拳は確かにライザーに届き、しかも『引換剣』を砕いた。

ただ、威力がかなり殺がれちまったせいで、この一撃じゃ倒しきれない。

もう一発、もう一発殴れば——ツ!?

突然背後に悪寒を感じ、その場を飛びのく。

俺に残された時間はわずかだというのに、反射的に。

俺が元居た場所を見ると、そこには光り輝く剣のような物が刺さっていた。

いや、光り輝く、じゃねえ——光の剣だ！

「やれやれ、まさかあの男ではなくこの男が出向くとは。しかも宿した神器がかの『憤怒の龍魔王』サタンだとは。ですがまあ、私の敵ではありません。その身も神器も、悪魔の力が主である故に」

「お、お前は……!!た、助けに来たとしてもいいのか!」

「ええ。その通りでございます。——さて、サタンの少年。名を兵藤一誠と申しましたか。でしたら私も名乗りましょうか、私だけ名を知っているのは不公平であるが故に」

狼狽するライザーと対照的に、その男は極めて落ち着き払っていた。

しかし手に持った光の剣。そしてその背中に生える純白の——天使の翼。

それは明らかに、この場に居てはならない存在であることを示していた。

だが男は一切気負う様子無く、俺や、他の悪魔たちに向かって自己紹介してのけた。

「さて、名乗ると言ってしまうてあれですが、生憎と私は名乗る名を持たぬ物。役職名は『プリンシパリティ権天使』——まあ、特筆するような力も持たぬ、ただのありふれた天使ですね。ですが下級悪魔相手なら、私でも全然事足りる」

権天使。奴はそう名乗った。

確か権天使ってのは、天使の中でもかなり下の方……とはいえ下手すりゃ中級悪魔よりも強いような存在だ。

サタンの力を使っている俺でも、一撃喰らえば不味いだろう。

——つてか、待て。この力は、もう——。

『time out』

「うおあつー——チツ、クソツ、時間切れかよ……!!」

サタン・ジ・ラーズ・ステイルメル『龍魔王の鎧』が、液体のようになって消えていく。

名残惜し気に俺の体を伝っていく黒い塊は、地面に触れるとしみこむように消えた。

それと同時に、全身から力が抜け、倦怠感が襲い掛かってくる。今すぐにも意識を失ってしまいそうなほど、消耗している。

「は、はは、ははははっ！どうやら限界のようだな、兵藤一誠！サタンの力とやらが果たして本当なのかどうかはさておいて、俺をここまで追いつめたのは素晴らしいと褒めてやろう。だが、力及ばなかったな」

「ふむ。——いかががします？止めを刺しても構わないとは思いますが。まあ、あなたにも面子というのがあります故に」

「まず面子云々気にするなら上級悪魔が天使と組んでるってのが大問題だと思っただよな、俺は」

聞き覚えのある声が聞える。

輪廻の声だ。いつもとまるで変わりない、落ち着き払った声だ。

「輪廻……？」

「よっ、イツセー。本当はお前とライザーだけの戦いのはず……だったわけじゃなくなっつてな。まあ俺がここに来たのも全部その天使が理由って訳だ。詳しい話はちよいと省くが、そうだな……『夢幻人』の力を借りての勝利つてのが、どうかなーって思ったって事だな」

「立神、輪廻……!!」

「よお、初めましてだが、俺の事は知ってるだろ?——でき。お前の客と、俺の親友。今大事な物をかけて戦ってるんだよ。勿論邪魔させるわけにはいかないんでさ……俺と遊ぼうぜ、暇ならさ」

次の瞬間には、天使は輪廻に蹴り飛ばされ、地面に埋まっていた。かなりの距離を一瞬で詰めたアイツに、もはや驚く事はない。

なんかもう、一々反応していると疲れるタイプだ。

「さ、『禁手』終わったからってまだまだ諦めつかねえだろ。ライザーだって気丈に振舞っちゃいるが正直限界のはずだぜ。なんせサタンの攻撃を十秒未満とは言え只管喰らい続けていたからな。——だから、諦めんなよ」

「……言われ、無くても!」

天使は任せろ、と目で言ってくる輪廻に心の中で深く感謝し、震える足に鞭打って無理矢理立ち上がる。

「お互い、頼れるモンは殆ど出し切った、な。俺は『禁手』と、魔力と、体力。お前は再生して復活できる精神力と体力、そして願いを叶える『引換剣』」

「…残ったのは、互いに攻撃手段一つのみ…か。俺は炎で、お前は神器」

「ああ、そうさ。テメエはム力つく野郎だけど、でもその強さははつきり言って認めてる。もし部長の結婚云々が無けりゃ、俺はお前に憧れてたかもな。眷属ハーレム持ちで、わかりやすいくらい強いってさ」  
「ははっ、だが俺の立場に立つと、存外面倒ごとの方が多かつたりするもんだぜ。下僕たちは可愛らしいが、御家問題とかは三男坊だから色々面倒臭い。関わらないといけない癖に、大して何ができて訳でも無いからな。——そういう意味では、言っちゃあなんだが平民のお前が羨ましいよ」

なんだか憑き物が落ちたみたいなライザーは、ちよい悪そうな雰囲気はそのままに、しかしどこか爽やかさを感じさせた。

……もしかして、だけど。感じる気配から考察するに、あの『引換剣』とやらのせいで若干変わってた部分があったのかもしれないな。

ちゃんと話してみたら、気さくでいい奴だったり……なんてな。

「さて。俺もお前も、どっちも限界だろう？生身で俺の炎に耐えるなんて真似、お前にはできないだろうし……俺とて強化されたお前の拳を喰らえば、精神が尽きる」

「だから、この一撃で決まる」

俺は拳を何度か地面に叩きつけた。

ライザーは炎を揺らめかせた。

輪廻と天使が戦う音が、段々と聞こえなくなっていく。

それだけじゃない。静寂特有のうるささすら感じない。

極限まで集中しているんだ。だからこそ、無音。もはや、周囲の景色すら見えない。

見えるのは、ライザーの姿。その一挙手一投足に、俺は集中している。

「ツ―」

最初に動いたのは、俺だ。

炎の揺らめきや、感じる気配。その他諸々から、今この時が攻め時だと判断した。

事実、それは成功だった。

炎を出すのに準備とか予備動作とかあるのかと思うが、しかし俺のタイミングが正しかったのか、炎は数瞬遅れて放たれた。

俺の前方全てを覆い隠すような炎の波に、俺は拳を――振るわなかった。

恐怖心なんかを全部押さえつけて、炎の中に飛び込んだ。

ああそうだ。ライザーの言う通り、生身の俺が炎の中なんて入ったら灰すら残らない。

だが、それはアイツが知るレベルの最大強化なら、だ。

今の俺は、左腕と一緒に寿命も差し出した状態。強化倍率は、今限定で底上げされてんだよ！

だから、ギリギリ耐えられる。

歯を食いしばれば、乗り越えられる。

俺の拳を、威力を殺さずにアイツにぶつけられるツ!!

「はははっ、ついに燃え尽きたかッ、兵藤一誠！」

「いいや、俺はまだ、ここに立っているッ!!」

炎を抜け、ライザーの前へ。

驚愕に目を見開いた奴に見せつけるように、体をひねって拳を構える。

「だあつ、くそつ、俺の炎が、及ばなかったとでもいうのか！」

「ああそうさ、俺の部長を思う気持ちの方が、もっとずっと強かったんだよー！」

「——下級悪魔と、純血の上級悪魔だぞ？ 本当に良いのか？ お前が、思うような、良い事ばかりではないんだぞ。周囲の目、グレモリー家の介入、様々な問題や、困難がお前を襲うはずだ。それでも」

「それでも俺はッ、俺は部長が大好きだ!! 問題がどうか困難がどうか、関係ねえ！ 俺は、俺のやりたいようにやるだけだ。——悪魔らしく、突き進むだけだあああああッ!!」

俺の拳がライザーを穿つ。

顎を的確にとらえた強烈な一撃。限界間近だったライザーを倒すには、十分すぎた。

「はあつ、はあつ……勝つ……た？」

体がフラフラする。

頭がガンガンと痛む。

今にも倒れそうな俺を支えたのは、輪廻だった。

「よっ、お疲れさん。かつこよかったぜ、親友」

「おいおい、止せよ……男に褒められたって、嬉しかねーっての」

「……じゃ、そう言う事にしといてやるよ」

「イツセー！」

フィールドが消え、元居た会場に戻る。

俺達の下へと部長が駆け寄ってきて、俺の名前を呼んで抱き着いてきた。

——抱き着いてきた!?

「ぶ、部長!? そ、その、いきなりそう、下僕と主のスキンシップとなる俺のお馬さん根性がパカラパカラと！」

「ありがとうっ…私を、私の夢を、守ってくれて。私の為に、戦ってくれて…!!」

狼狽する俺に、部長は震える声でそう言ってきた。

輪廻は部長が抱き着くタイミングを見計らって離れてくれており、俺にサムズアップしてきている。

口の動きから察するに、「頑張れよ」と言っているようだ。

「部長の為だけじゃ、ないですよ。俺が戦ったのは、何よりも俺自身の為、なんです」

「…貴方、自身の為…?」

「はい。部長が望まない結婚をさせない。それは眷属としての俺の理由。そして——だ、大好きな貴方が、俺以外の男と結婚して欲しくない。それが、一人の男としての、俺の理由でした」

「っ、そ、それって…!」

「お、俺は…:俺は、俺は!部長が、リアス・グレモリー部長が、大好きですツ!!」

部長を一度離して、言葉に詰まりながらもなんとか思いを告げる。

ああ、そうだ。俺は部長が大好きだ。

勿論他の女の子だって大好きだし、おっぱいへの情熱だって枯れちゃいない。

だけど、部長は特別なんだって、ついこの間気づいた。

部長に寄せるこの想いだけは、ただのスケベ根性とは違うんだって、やっと気づいた。

だからこそ、ここまで戦えた。

ライザーなんて強敵を、倒せた。

告白の返事は、正直あまり期待していない。

俺なんかを好きになってくれる人なんていないと、やっぱりレインナーの一件で思ってしまったているからだ。

このトラウマは、多分一朝一夕で払拭できる物じゃない。

だから期待していないのに…:…していない、はずなのに。

なんでこんなに緊張しちゃうんだ!?

フラれちゃったら、俺はどうしようって…:…どうしてこんなに不安

になっちまうんだ!?

ああ、頼む、お願いします部長。

返事は言わないでください。言葉にしないでください。

拒絶するなら、せめて首を横に振るだけに――。

「イツセー……そんな、不安そうな顔、しないでちようだい?」

「で、ですが」

「返事を聞く前から、決めつけないで欲しいわ。――何度も言った通り、私は私が決めた相手としか結婚しない。交際だって、勿論そうよ。今まで何人もの告白を断ってきたし、親が用意した縁談も全部破談にしてきた。――改めて、貴族としては最低ね」

「そ、そんな事!」

「いいの。事実だもの。私自身、正直ダメなんだろうなって思わなかったわけじゃない。――でも、そうして今まで断り続けてきたからかしら。やっと……やっと、会えたの。私が、心に決めた相手と。そして今、こうして私が好きだと言ってくれた。すっごく、すごく嬉しい」

「部長……それって、つまり……!!」

俺の言葉に、部長は目尻に涙を浮かべながら、頬を朱に染めて頷く。首を縦に振る動作、そして今の言葉。

それは、もう勘違いでも何でもなく……!!

「私も、貴方が好き……ううん、大好きよ、イツセー。下僕としてじゃなく、たった一人の男として」

「ツ!!や、やったあああああああッ!!」

感極まって、叫びながら部長に抱き着いてしまう。

いやでも、こんな嬉しいに決まってるんだろ!

あの部長が、リアス・グレモリー先輩が、俺を選んでくれたんだぞ!

ライザーでも木場でも輪廻でも無く、他にもいただろうイケメンたちでも無く!この、俺を!

「ん、んんっ。お熱い所すまないが、少し口を挟ませてもらうよ」  
「お兄様?」

咳払いをしつつ、サーゼクス様が歩み寄ってくる。

その顔は相も変わらず優しそうな笑みに彩られ……後、なんだかちよっぴり恍惚としているとか、憧れのスーパーヒーローのショーに行つて握手までしてきたみたいな表情をしていた。

「無論、勝利した君の願い通り、リアスの婚約を破棄させる……が。ここは一応公の場なのでね。両家の面子の為にも、一応駆け落ちという形を取ってもらいたい」

「は、はあ……でも、俺そろそろ意識も限界で」

「わかっているとも。だから私からプレゼントを、ね」

そう言つてサーゼクス様が指を鳴らすと、魔法陣が展開し、グリフォンが現れた。

す、すげえ！一応、使い魔向け動物一覧で見た事あったけど、リアルで見ると違うな！

……しっかしプレゼントつて……これに乗つてけつて事？

でも俺グリフォンの操縦なんて無理だぞ。乗馬すらしたこと無いのに。

「この子は賢いからね。背に乗れば、後は勝手に目的地まで連れて行つてくれる。だからそんな不安そうな目をする必要は無いよ」

「あ、そ、そうなんですか……あ、ありがとうございます」

不安そうな顔、不安そうな目と部長とサーゼクス様に言われたわけだけ。

俺つてそんなに表情に出てるのか？輪廻曰く「エロい事考えてる時は良くわかる」とのことらしいけど。

ま、まあとにかく。面子とか色々言われたら乱入した側の俺としてはちよっぴり居心地悪くなつてしまふし、それに——せっかくその、付き合う事になつたんだから……二人つきりで話たいなー、なんて思つたり。

そもそもグリフォンの上に乗った時点で限界迎えて気絶しそうだけ。

大丈夫だよな？俺。

「——では、これからもリーアを頼むよ、兵藤一誠……いや、イツセー

君」

「えっ、今俺のあだ名…」

「ああ！なんてことだ！私のリアが、婚約を控えたあの子が、連れ去られてしまうー！」

サーゼクス様が急に棒読みなわざとらしい演技をすると、俺と部長を乗せたグリフォンは入口へと向かい、そのまま外へと飛び出した。

そして、俺達は殆ど一瞬で、冥界の空へと移動してしまった。

なんだか全体的に薄暗い雰囲気だ。

悪魔の住む場所なんだから当然っちゃ当然だけど。

「——ねえ、イツセー」

「あ、はい。何か、ありましたか？」

「いえ、そんな大した話じゃ無いんだけど…：…ほら、貴方が寝てしまう前に、先におきたいなって」

「しておく？—一体何を——んむっ!？」

冥界の空を飛ぶグリフォンの上。

部長の目を見て話そうと振り向いた俺の唇に、部長の唇が重ねられた。

時間にして、ほんの数秒にも満たない刹那のキス。

だけど、この限界付近の俺をオーバーヒートさせるには、そのキスの魅力と威力は十分だった。

「私の、ファーストキスよ。特別な一回…：…勿論その意味、わかってるわよね——って!!ちよつと、落ちちやうわよイツセー!?!イツセー!？」

ファーストキス、という言葉に名実ともに限界を迎えた俺は、グリフォンから落下してしまうかもしれないという事すら忘れて、全身の力を抜いてしまうのだった。

※——

「ん、うう…：…朝、かあ…」

憂鬱だ。ヤンデレ目覚まし時計（ランダム五種類の音声がなる、結構お高い目覚まし時計。今日は発狂型のヤンデレだった）を止め、未だに苦手意識の拭えない日光をカーテンの隙間から浴びつつ伸びを一回。

うーん、相変わらず日光強めの嫌な朝だ。でも曇りの日の方が力が出ない。

もしかして悪魔って日光そのものではなく紫外線に弱いのでは？と最近思った。

——さて。なんだろう。この俺の隣に感じる熱は。

感触、熱ともに人間味を感じる。というか人だろう。

丁度布団のかぶり方でよくわからないが、きつとこの中には人が入っているはず。

しかし悲しいかな。俺と添い寝してくれるような人なんていない。

部長とはまだお付き合いを開始したばかり。いくらあの人でも、俺と一緒に同衾なんてまだまだしてくれないだろう。

では一体誰だ。

まさか親父かお袋が、酒の飲みすぎで俺のベッドにもぐりこんでしまったとか。

いやでもお袋は元々酒を飲まないし、親父は現在禁酒中。

だったら——いや、マジで誰？

頭の中で疑問符が躍る中、俺は恐る恐る布団を捲った。

「……………ぶ、ちよう？」

そこには、部長がいた。

——全裸の。

「え、ええええええええええええつ!!？」

俺の主様で、素敵な先輩で、愛しい恋人。

そんなリアス部長との恋人生活は、どうやらかなり刺激的なモノになりそうだ。

## 月光校庭のウエルシュ・ドラゴン 聖剣、ドラゴン―幼馴染？

イツセーと部長が交際する事になった例の一件から、早数日。

アイツから惚気話を毎日のように聞かされたり、部室で部長とイチヤコラしている所を見せつけられつつ、俺達は今まで通りの落ち着いた日々を過ごしていた。

変態三人組の中でも一番の獣と評されていたイツセーと、誰もが憧れる二大お姉さまの片翼であるリアス部長の交際は瞬く間に学園中に知れ渡り、特に松田元浜がイツセーを本気で殺しかける事件等が勃発したのも今では懐かしい。

余談だが、殺されかけたのは最終的に松田と元浜の方だった。

だてに毎日鍛えてるわけじゃないな、イツセー。

さて。今日は普段部活で使っている旧校舎が清掃中という事もあって、俺達はイツセーの家に集合している。

今はイツセーの家が部長の家って事でもあるからな。サー坊なんかは「リーアたんが帰ってこないんだよ…」と悲しんでいたが、それは別のお話。

「今となつては驚きよねえ。あのイツセーが、こうして沢山の女の子と知り合つて……しかも美人外国人の恋人まで連れてきちゃうなんて！まさか輪廻君より先にイツセーが彼女連れになるなんて、思いもしなかったわ！」

そんな風に笑うイツセーの母に、俺は曖昧な笑みを浮かべる。

親父さんの方も、うんうんと力強く頷いていた。

……ま、そうだよな。未だに目を離せば松田元浜と一緒に覗きを敢行しようとするスケベ野郎なのに、こんな美人を俺の彼女です、つて言つて紹介するなんて。

俺が同じ立場だとしたら、驚きのあまり卒倒する自信がある。

「か、母さん……そう言ってくれるのは嬉しいけど、アルバムを皆に見せる必要は無かったと思うんだよね俺」

「あら。良いじゃないの。彼女さん……リアスさんも、喜んでるみたいだし?」

「ええ。ありがとうございます。イツセーの幼少期、幼少期のイツセー……」

うわごとのように呟く部長は、他のメンバーと一緒にイツセーと俺が写った写真をまとめたアルバムに見入っていた。

俺は昔から大人びていたというか、一応転生者だから恥ずかしいよな真似はしていないが……イツセーは、うん。全裸で海に飛び込んでみたり、ちよつぴり恥ずかしい写真があるからな。

それが憧れであり恋人である部長にまじまじと見つめられ、他の部員たちにも見られるなんて、そりゃ耐えがたい苦痛だろう。

……ああ、でも俺もあまり見られたくない写真があつたな。

ヒーローごっこをしてる時だけ、年甲斐も無く子供っぽくなつちまうんだよ。

ま、気づかれてないっほいしセーフセーフ。

「あ、この写真の輪廻さんだけ、なんだか年相応つていうか……大人びた感じが無くつて、可愛いですね!」

「ああ、そうねえ。輪廻君、昔っから大人びてたけど……変身ヒーローが絡むと、これでもかかってくらい子供らしさ全開になつちやつて。テレビを食い入るように見つめてみたり、玩具で目を輝かせたり……」

「ちよつ、そういう話はあまりしなくてももらえるありがたいのですが」

「……先輩に、そんな一面があるなんて」

全然アウトだった。

アーシアも、後何故か小猫も、俺のちよつぴり恥ずかしい一枚を食い入るように見つめている。

朱乃さんもあらあらうふふと微笑んでいるし、木場もいつも通り爽やかに笑っている。

なんだろう、別に悪い事をしたわけでも何でもないのに、なんだか気まずい。

イツセーみたく部屋の隅で縮こまってしまいそうだ。

しばらく談笑していると、イツセーの母さんと父さんが部屋を離れていった。

その後も時折これは何の写真か、等の質問に答えて過ごしていたのだが、突然木場が一枚の写真に反応し、表情が硬くなった。

それと同時に感じるようになったのは、凍えるような殺気と、燃え上がる復讐心。

……なるほど、あの写真か。

「——イツセー君、輪廻君。この写真なんだけど」

「ん？ああ、ソイツは昔、よく一緒に遊んだ奴でな……名前も何も覚えてねえけど、俺を良く振り回してたコトは今でも覚えてる。コイツと遊んだ日の夜は、もはや気絶と言ってもいいくらいにぐっすりと眠れてだな……まあ、家族全員引越してって、もう年賀状も送り合っていないし、接点も何もないな」

「そうか……輪廻君は、覚えてるかい？特に、この男性が腰に携えている剣に」

「……聖剣、か？」

「ああ。——その通りだよッ!!」

聞き返した俺に、木場は攻撃と共に返答した。

創造した魔剣が首元を狙うが、それを片手で受け止めて防ぐ。

部長たちが木場の蛮行に驚くが、当の本人はそれどころではないらしい。

……いや、なんで俺を攻撃するん？イリナの一家と仲良くしてたのはイツセーもなんだけど。

「前から、怪しいとは思っていたんだ。君の使うあの剣……聖書の剣とか言ったっけ。感じるオーラも何もかも、聖剣と同等かそれ以上だった」

「そりゃどーも。ただ知名度のあるような強い聖剣には全然劣るぜ」

「アレの強弱は今はどうでもいい。僕にとって重要なのは、君が教会の関係者か否か……そして、聖剣とどう関係しているかという事だけだ！」

俺に掴まれた剣を手放し、新たな魔剣を生み出す。

刀身が氷になっているその剣は、多分素手で防げば普通は凍てついてしまうだろう。

……俺は『気』で守ってるから無意味なんだけど。

「おい木場！どうしちまったんだよお前！」

「邪魔をしないでくれるかな、イツセー君。これは僕の問題なんだ。僕と——殺された、皆との」

「言っておくが俺は教会と何ら繋がりはないし、お前に恨まれるような真似をした覚えはない」

「ならなぜ聖剣と同質の力を持つ武器を生み出せた！僕らの命を弄んだ末に手にした技術を流用したからだろう！?でなければ、そんな武器を生み出す必要性がない！」

「生み出したのは俺の持つ神器の力があつたから。そしてその構想は俺が独自に編み出したもので、製造過程で誰かの命を奪うような事はない。『聖書の剣』も『聖書の盾』も、もとは黒歌を追う悪魔に対処するために生み出したものだしな。なにより俺はお前に何があつたのか、なぜ聖剣にそこまでの憎しみを向けるのかを知らない。——これで満足か？」

一部嘘を織り交ぜた話だったが、まあ隠している事は『俺が赤龍帝』という事と『俺が転生者であり、この世界の事は物語として知っている』という事なので残酷な嘘という訳でも何でもない。

∴それは言い訳に過ぎないか。

勿論だが、『聖書の剣』と『聖書の盾』を創り出した理由に黒歌を追う悪魔に対処するためというのも事実だ。

元々は白龍皇<sup>ヴァーリ</sup>対策で構想を練り始めて、黒歌と一緒に暮らすようになってからはそっちメインになったという感じ。

だから最初の案では『聖書の盾』なんて作る気は無かつたんだよな。

俺一人の防御なら『気』で事足りるし、なんなら回避で間に合う。

俺の説明を聞き、木場は険しい顔のままではあるモノの、一応武器は下ろしてくれた。

魔剣を消し、淀んだ瞳のまま重苦しく口を開く。

「……………ああ。一先ずは、君の言葉を信じるよ。すまなかつたね、いき

なり攻撃なんかして」

「いや、構わないさ。何があったか知らんが、お前の話から察するに――誰か、大事な人を殺されたんだろ？なら、冷静さを欠くのも仕方ないさ」

俺の言葉に、小さく「そう言ってくると、助かるよ」とだけ言つて、木場は部屋を出ていった。

イツセー達が引き留めるが、その言葉は耳に届かなかつたらしい。残された俺達は、気まずい沈黙が場を支配する中、ただただ立ち尽くしていた。

「部長、その……木場と聖剣に、何かあったんですか？アイツ、いつもと全然様子が違つたつていうか……」

「――イツセーと輪廻……後、アジアには教えてなかつたわね。祐斗に何があつたのか。あの子がどうして聖剣を憎むのか」

イツセーに問われ、ゆつくりと語り始めた部長。

その内容は、とても重く、悲しい物であつた。

※――

聖剣計画。

教会で極秘に行われた人体実験。その被験者の一人が、木場だつたらしい。

本来聖剣を扱うには資格が必要らしく、聖剣に選ばれる必要があるのだが、本来先天性の物である資格を、後天的に付与しようとしたのがその計画なんだと。

しかもその計画の要となつていたのが、俺でも知つてるような超有名な聖剣、エクスカリバー。

成功すれば、悪魔や墮天使に対する有力な攻撃手段である聖剣を、人を選ばずに持たせることができる……と、言われていたその実験は、失敗に終わったらしい。

でも話を聞く分には失敗するのが普通だと思ふ。

なんてつたつて、エクスカリバーつてのは聖剣の中でもかなり強力な物らしいのだ。

そんなすごい剣を、そう簡単に誰でも使える物になつて、きつとで

きないだろう。

だが、実験が失敗に終わった……だけでこの話は終わらなかった。何と被験者たち……つまり木場やその仲間たちを全員処分、皆殺しにしたらしい。

酷い話だ。聞いているだけでムカついてくる。

アーシアも、人を救うためにあるはずの教会がそんな事をしていたのかとショックを受けている様子だった。

輪廻だって、表情こそ変わっていなくても、オーラは怒りの色に変わっていったくらいだ。

——けど、その実験の首謀者とかそう言ったものは、未だにわからないんだと。

復讐心は有れど、しかしその矛先を見つけられない……それが今の木場だと、部長はそう締めくくった。

今は聖剣の存在を目の当たりにし、聖剣と同質の力が間近にある事で冷静さを失ってしまっているのだろう。けれど自分達には何もできないから、しばらくは様子を見るしかできない……と。

「なんだかなあ……」

『不満そうだが、しかしお前に何かできるか？ 聖剣計画について長い事調べていたであろうグレモリーの娘すら首謀者を掴めていないというのに、つい先日その事を知ったお前が？』

「……わかってるっつーの。——でも、それでも木場は俺達の仲間で、部長にとって大切な眷属家族で……」

部長がいつだか言っていた、眷属を家族と思って接しているという言葉。

それは勿論俺だけじゃ無く、朱乃さんや小猫ちゃんにアーシア……そして、木場も、だ。

でもこつちにもそう言った理由があるように、アイツにも仲間たちを殺された事に対する復讐心って理由があるわけで。

ソレを否定するつもりなんて俺には毛頭ないし、第三者でしかない俺が口をはさんで良い問題とも思わねえけど……

むむむ、と頭を抱えつつ帰路につく。

いつもなら部長と一緒に帰宅するのだが、今日は生徒会の人と話があるんだとか。

なんでも、もうすぐに迫っている体育祭が開催できなくなるかもしれないとのことだ。

脅迫状が送られてきたせいで、安全を確保できない限り保護者会の方々が納得してくれないのだとか。

——ああ、そうそう。なんと生徒会の皆も悪魔だった。

いやあ、驚いたね。部長、朱乃さんに並んで美人と称される支取蒼那先輩率いる生徒会メンバーが、まさか悪魔だったなんて。

しかもその支取先輩は、ソーナ・シトリーが本名で、部長と同じ貴族なんだとか。

因みに俺と同じく『兵士』である匙元士郎という男は、駒四つ消費の凄い奴らしい。

ドラゴン系の神器を持つてるんだ、と自慢げに話されたが……一体どんな神器なんだろうか。

まさか、アイツが夢幻人の言っていた赤龍帝——なんて、流石にないか。

『なんだ、今度は赤龍帝が気になるのか?』

「気になるっつーか……いや、気になるよ、やっぱり。俺らが夢幻人に狙われるのもソイツのせいらしいし、せめて正体くらい知っておきたいっつーか」

『くくくつ、正体を知りたい、ねえ……いやはや、正直不思議に思ってたんだよ、俺もな。なんでアイツは正体を明かそうとしないのか、ね』  
「えっ、もしかしてお前、知ってるのか!？」

『そりゃあ勿論。全盛期の俺の目の前に現れて、突然喧嘩吹っ掛けてきて……ああ、やばい奴だなアイツは。かの無限ウロボロス・ドラゴンの龍神を倒したってのもあながち嘘じゃないんだろうと思わせられる強さだったぜ』

「ぜ、全盛期のお前に勝ったのか、ソイツ」

って事はつまり、その力の一部しか持たない俺だとまず勝ち目はないという事になる。

誰かは知らないけど、そんなやばい奴が身近にいるって……なんだ

か薄気味悪いというか、恐ろしいな。

『一応俺は、黙示録の獣なんて側面もあつたんだがな……それこそ、まだ一匹のドラゴンだった時の『赤い龍の帝王』ウエルシュ・ドラゴン相手なら勝負にすらならないくらい、俺の方が強かった。強いはずだった』

「なのに、負けた……って?」

『ああ。名前は伏せておくが、ソイツはまあ強かった。複数の神器を持ち、赤龍帝の力を限界以上まで発揮したアイツは、とても俺じゃ敵わねえ相手だったなあ……そうだイツセー。俺たちの戦闘面の最終目標は、奴を超えるってのはどうだ? 封印された力を振るうもの同士、対等だと思うが』

「いや無理無理無理! 流石に無理だって、そんな話聞いているだけでも勝ち目なさそうな奴相手に挑むとか超えるとか!」

『なんだよつまんねーな。こと女の事に関しちやすつげえ情熱を持って挑めるといふのに、なんで強敵との戦いつてなったら急に消極的になるんだよお前』

「あのな、実力差があり過ぎる相手に挑むのは自殺行為って言うんだよ! 胸を借りるとかそういうもんでもないだろ!?!」

『……お前だったら、そうでもないと思うがな』

何を言いたいのかはよくわからないが、多分絶対間違っている。

その赤龍帝を宿す奴というのが誰なのか、どんな奴なのかまるでわかんないが、そんなバトルジャンキー相手に喧嘩吹っ掛けて生きて帰れる自信は全然ない。

そんな風にサタンと会話しながら歩いてきた俺の前に、見知った背中が見えた。

「気配的にも、輪廻だ。」

だがしかし、両隣を歩く謎のローブ姿の二人……物凄い悪寒を感じる。

まるで……そう、教会の前に立った時のような。

「り、輪廻……?」

声が震えるが、一応平静さを装いながら声をかける。

すると、両隣の人との会話を切り上げて、アイツはこちらを見て片

手を上げた。

いや、「よっ」じゃなくって。

俺結構心配して声をかけたんだけど。

「なんだイツセー、今日は一人か？」

「ああ、部長は生徒会の人と一緒に脅迫状問題対策会議に出席中だと。

——で、その二人は？」

「んー……なんつーんだろ、教会の人？こっちの青い髪の人がゼノヴィアで、こっちの栗毛の方がイリナ。わかってねーだろうけど、イリナの方は俺達の幼馴染だぜ」

「え、はい？教会？幼馴染？なんて？」

いきなり脳内で処理しきれない情報を与えられ、俺は聞き返してしまふ。

ゼノヴィア？イリナ？いや、片方幼馴染って言われましても。全然聞き覚えが無いと言いますか……ってか二人ともすげえ美人！

服の上からわかるくらいおっぱいおっきいし!!

「な、言つたら。イツセーは覚えてないって。つーかお前が女だった事にすら気づいてないぜ」

「本当ねー……ほら、覚えてない？昔よく一緒に遊んでた、イリナ。私にイツセー君が振り回されて、輪廻君が手綱を握っててくれたんだけど……」

「……いや、確かに俺を昔よく振り回してくれやがった奴は居たけど……え、男じゃ無かったのか……!？」

「失礼しちゃうわね。私はずーつと女よ。まあ、昔はお淑やかさの欠片も無かったから、誤解されてても仕方ないけど」

そんな風に話ながら、イリナはローブを外し、顔を見せた。

やっぱり美人。でもこの栗色の髪、確かに昔よく遊んだ少年（少女だったらしいが）と同じである。

「改めて、久しぶり。長い時を経ての再会って、喜ばしくもあるし……こうも悲しい物だなんて、思いもしなかったわ」

そう言つて複雑そうな笑みを浮かべたイリナ。

どうやら、俺が悪魔になっている事は、とつくに気づいているよう

だ。

## 洋服破壊、本邦初公開！

紫藤イリナと、ゼノヴィアという二人の少女。

ゼノヴィアは初対面だが、しかしイリナの方は俺と幼馴染で、昔は輪廻と一緒によく遊んでいた奴だった。

しかし俺は今は悪魔となり、交際相手は貴族で悪魔。

対するイリナはまさかの聖職者である。

まさに水と油の関係。敵対する以外ありえないのか——と身構えたが、輪廻が制してくれた。

因みに俺が悪魔だと気づいた時よりも、輪廻が俺が悪魔だと知った上で仲良くし続けている事に対してシヨックを受けていた。

……あの、まさかとは思うけど、イリナさん？あなたもしかして、輪廻の事……？いやいやまさかね。

「……まさか、イツセーが教会の人間と接触してしまうだなんて……本当に何もされなかった？貴方に何かあったら、私……」

「だ、大丈夫ですよ部長！俺はこの通り元気元気なんで！——それよ、問題は明日の学校ですよ。なんでもアイツ等、ここのボス……つまり部長に、直接話があるって」

「私に話、ね……わかったわ。一応、上にも色々確認してみるわね。でも困った物ね。ここ数日で、祐斗の聖剣への憎悪だったり、謎の脅迫文だったりと立て込んでるのに……そこに教会からの使者、だなんて」

「本当、大変ですね……でも、脅迫文って一体、何が書かれてたんです？俺はただ脅迫文が来たって事しか知らないんですけど……」

「ああ……一応、その話は明日の部活中に話そうと思っただけだけど、あなたには先に教えておきましょうか」

そう言うと、部長は携帯を取り出し、画面を俺に向けて見せてきた。

そこに写っているのは、ザ・脅迫状って感じの文字で書かれた、『この学園を起点とし、世界に混乱をもたらす』の一文。

それが書かれた手紙が、なんと部長の机に置かれていたのだとか。

生徒会と話し合った結果、差出人が三大勢力関係者である可能性が

極めて高い事と、学園そのものに何かを仕掛けられている可能性も極めて高い事を判断し、今日から早速対処に当たっているらしい。

明日は俺達に対処する日で、今日は生徒会が担当する日なんだとか。

俺達と生徒会メンバーとは、得意分野とかが違うからな。もしかしたら生徒会メンバーにしか対処できない可能性もあれば、俺達じゃ無きゃ対処できない可能性もある。

…まあ、部長や会長の力があれば何とでもなるだろう。

もし誰かが襲撃してくる、とかだとしたら俺の力の見せ所だし、輪廻も参戦するだろうからな。

「とりあえず、今日はもう寝ましようか——つと、その前に」

部長が俺の左手に優しく触れる。

これは、俺達の日課の合図だ。

俺が生贄に捧げた左腕は、常に神器を装備しているような状態になってしまった。

寿命だつて若干縮んだらしいし、かなり色々とおの戦いで失ってしまったわけだが、この腕の問題を部長の協力を得て何とか解決(?)することができたのだ。

神器に宿る力を、魔力をまとった状態で行う『とある行動』で吸い上げ、散らす方法……まあ、簡単に言えば指ちゅぱである。

そう。指を、しゃぶってもらえるのである。

部長に。

「お、お願い、します」

「ふふっ、まだまだ緊張しちゃうのね。——でも、そんなところも可愛い」

軽く笑って、部長は俺の指を口の中へと誘った。

瞬間、感じるのは生暖かい口内独特の感覚。

ぬるぬるとしている舌を絡まされ、俺の指はまるで生殖器のように敏感になる。

ちうちうと指を吸われると、力がどんどん抜けていくのを感じる。

この散らされる時の感覚が、まるで射精後の解放感というか、脱力

感にそっくりでなんとというか…!!

しばらくの間、部長の口の中を指一本で感じていた俺は、指が自由になると同時に大きく息を吐いた。

……そう。この後、すつごい倦怠感が襲ってくるのだ。

「お疲れ様。それじゃあ、寝ましようか」

「は、はい…」

こうなってしまうと、俺が元気になる事はまずない。

多分献血とかしたらこんな感じになるんだろう。この言いようの無い疲労感はこの指ちゅぱをしてもらうようになってからしばらく経つ今でも、全然慣れない。

「じゃあ、先に寝てますので……おやすみなさい」

「ええ。お休みイッセー。——また、明日ね」

電気を消し、布団にもぐる。

ああ、色々考えたし、色々あつたけど……明日、どーなっちゃうんだろうなー。

※——

イリナとゼノヴィアと会った日の翌日。

クラスメイトの宿題の手伝いをやっていたせいで少し遅れて部屋についた俺を出迎えたのは、なんとも言い難い気まずい空気だった。

室内の顔ぶれから察するに……大方、原作にもあつた「悪魔は手出しをするな」というイリナとゼノヴィアの発言に部長が気分を害したシーンだろう。

少し時間を置いてから、もう一度来た方が良いだろうか。

「遅かったわね、輪廻。座りなさい」

「え、いやなんかお邪魔みたいですし俺一旦席を外して」

「座りなさい」

「……はい」

なんだろうこの有無を言わさない感じ。イッセーはきつと、尻に敷かれるんだろうな。

ほんの少し同情の意志を込めた目をイッセーに向けた後、改めて室内の全員の様子を確認。

まずイツセー。困ったように眉を顰めている。

視線はイリナとゼノヴィアが持つ聖剣に向けられており、時折チラチラと木場の顔色を窺っている。

次にアジア。なんだか気まずそうに俯いているが、これはきつと自分が教会の人間にとつては『魔女』であり、しかもその上で悪魔に転生してしまったからだろう。

いつも通り俺は隣に座っているので、安心させてやる意味も込めて手を握ってあげた。

すると一瞬驚いた顔を見せたアジアは、表情をほころばせ、小声で「ありがとうございます」と言ってきた。

可愛らしい子だ。

朱乃さんと小猫は、実は普段と大差ない。

ただ朱乃さんの方はなんだか困ったような、呆れてるかのような笑みを浮かべている。

小猫は本当に変化なし。俺にすり寄ってくる素振りが何だか黒歌に似ていて笑ってしまう。

んでもって部長は……まあ、先程の言葉からもわかるように、まあ機嫌が悪い。

なんだっけ、堕天使と手を組んできるとか言われたんだっけ。そりや怒るわな。

そしてイリナとゼノヴィアは……まるで表情が変わっていない。死ぬ気か、と問われた後なのか、覚悟の決まった瞳をしていた。

まあ、後で俺が介入する気満々なので死ぬことは決してないのだが。

やっぱり幼馴染だからなー。守ってやりたくもなるよ。……で、一番問題なのは、やっぱり木場。

視線だけで殺して見せると言わんばかりに聖剣を睨みつけるコイツは、今にも攻撃を仕掛けそうな雰囲気だ。

もし何か行動に移すようなら、止めてやるとするかね。悪魔と教会の全面戦争なんかは勃発されちゃ、俺も困るし。

「一応聞きますけど、彼女等は何と？」

「教会の保有する聖剣、エクスカリバーが盗まれた。その下手人である墮天使コカビエルの討伐、および聖剣の奪還のためにここに来た……だそうよ。私達には、悪魔と墮天使が手を組んでいる可能性があるから手出しをしないようにと釘を刺しに来たらしいわ」

「ええ、凡そその通りよ」

「コカビエル、ね……聖書に名前が記されてるレベルの墮天使相手に、二人だけで挑むと?」

「その話は既にしたよ。そして私達が、信仰の為ならば死ぬことすら厭わないともね。——無論、ただただ死ぬつもりは無い。教会から賜ったこのエクスカリバーと、もう一つの切り札を以って、使命を果たすつもりさ」

一切の恐怖心を抱いていない様子で、ゼノヴィアとイリナは頷く。実際、信仰つてのは昔からそういう側面を持つ。己の信じる神を否定されたからと言って戦争を始めた事だってあるくらいなのだから、神の敵ともいえる墮天使相手に命を懸けるのは、何らおかしくはないのか。

……まあ、ソレを黙って見ているか否かは別問題だが。

「さて、そろそろお暇させてもらおうかと思っただが……もう一つ、聞かねばならない事があった」

「聞かねばならない事?別に、私達は墮天使の動向なんて知らないわよ」

「いいえ、それとは一応無関係の話よ。——今代の赤龍帝について、何か知っているかしら?」

なんで?

いやいやなんでここでも今代の赤龍帝が狙われてんの?俺何かしました?

教会勢力にはあんまり喧嘩吹っ掛けた覚えが無いんだけど。

……いや、嘘。結構手当たり次第に吹っ掛けてました。

でもなんだって今になって俺の存在がバレてる訳?

夢幻人と言い、どこから流出してんの俺の情報。っていうか名前は夢幻人以外にはバレてないのか?

俺、もう隠す必要なかったり？

脳内で疑問符がタップダンスを始めた俺を置いて、部長が首を横に振る。

「残念だけど、私達もさっぱりよ。噂程度には知っているけど、その姿を直接見たわけではないし、その正体を知るわけでも無いわ」

「そうか。——いや何、これはただの独り言なんだが、どうやらコカビエルは『夢幻人』イマジネウスという存在と手を組んでいる可能性が極めて高いらしい。そしてその『夢幻人』というのは、今代の赤龍帝の殺害を悲願としているとか」

「それで、教会側が調べたところ、夢幻人と交戦した事がある貴方達は、もしかしたら今代の赤龍帝の関係者の可能性がある……と判断したわけ。だからさつき聞かせてもらったの。あ、これも勿論独り言よ？」

…なるほど。あくまで俺の情報は夢幻人の存在を知ったついでに知ったって訳か。

なら安心だな。いや、別にこれ以上隠しておいて何があるって話なんだけど。

……早いうちに明かしておかないと、気まずくなるよなー、さてはどうするか。

「な、なあ。教会の方でも、その赤龍帝とか白龍皇とかつてのは、すごい奴扱いされてんのか？」

「ああ。多かれ少なかれ、ドラゴンというのは神器だろうがそのものだろうが周囲に影響を及ぼす。無論ソレを警戒しない教会ではないさ。その上、今代の赤龍帝も白龍皇も、どちらも歴代最強と呼ばれているらしい。白龍皇の方は詳しく知らないが、赤龍帝の方は『無限の龍神』すら超えた存在だと語られている。——それに」

「教会では、今代の赤龍帝は『神の使い』として扱われてるのよ」  
「えっ？」

めっちゃ素の声が出てきた。

いやいや、待ってください。知らないです。本当に俺、何も知らないんです。

なんで俺が、え？神の、使い？

「過去と未来とを行き来する力を使い、我らの信仰を守ってくださいつた、赤き鎧の英雄様……！きつと、素敵なお方に違いないわ！悪魔、墮天使、果てはドラゴン！私達信徒の信仰を妨げるような存在を駆逐してくれた存在。主への信仰が今日まで途絶える事無く続いているのは、現在を生きるとされる赤龍帝様のおかげだと言われているの！ああ、一度でいいからお会いしたい……!!」

「強きを挫き、弱きを救う。時に信者や天使にすらその牙を向けたとされているが、それはきつと我らを試すためだろうと言われているね。私にとつても、憧れの存在さ。というか、争いに身を置く信徒は皆赤龍帝に憧れを抱いていると言つても過言ではない」

「う、嘘でしょ……」

恥ずかしい、恥ずかしい……たらありやしない。

酷い言われようだ。いや、別に悪い事は言われてないんだけど、滅茶苦茶に誤解されていやがる。

残念ながら俺ほど聖職者に不向きな存在はないだろう。どこが敬虔。聖書の剣とか、大事な聖書のページを破って作ってるんだぞ？ここまで流信的な男はそうそういないと思うんだけど。

やめてくれよ二人とも。そんな真っ直ぐな目を見て思いを馳せないでくれ。

俺はここにいるし、何より現物は思ったよりも残念なんだよ、やめてくれ。

「あ、私もよく耳にしました。未来より来た赤龍帝様は、強大な悪魔や墮天使をその圧倒的な力で以って薙ぎ払い、我らを救った……と。感謝する信徒たちに『俺は何もしてはいない』と謙虚な姿勢を見せたという話が、私とつても大好きで……!」

「あら、わかるじゃないの!——つて、貴方もしかしてアール・アルジェント?かつて聖女と呼ばれ、今では『魔女』で悪魔だと聞いたけど……まだまだ、信仰は捨ててないみたいじゃない」

「っ、は、はい。ずっと、信じてきたモノ、でしたから……」

つい反応してしまったアールシアが、イリナとゼノヴィアの視線を向

けられて縮こまる。

それもそうか。どんな事情(変態シスター狂い)があるとしても、教会側の情報しか知らないイリナ達にとってはアーシアはただの魔女で、今は悪魔。

そりや、冷たい目も向けられる。

先程までの明るいオーラは何処へやら、なんだか軽蔑というか、いつそ憐みとすら感じられる眼差しを向ける二人。

……もし、もしもイリナかゼノヴィアが原作通りのような、アーシアを傷つけるような事を言った場合、果たして俺は冷静でいられるだろうか。

ふと湧いた疑問の答えは、即座に明らかになった。

※——

「そうか。ならばいつそ、悪魔として生きるのではなく、ここで断罪してやった方が良いかもしれないな。苦しみながらも継り続けるくらいなら、聖なる剣でそのまま楽に——」

聖剣を構え、そんな事を言ったゼノヴィアに、俺はふざけんなって思った。

何が断罪してやった方が良いかもしれない、だ。そんなモンを勝手に押し付けてんじやねえと、俺も、他の部員たちも皆思った。

けど、同時に忘れてた。失念していたんだ。

この場で最もアーシアを大切に思っていて、この場で最も恐ろしい奴が、そんな事を言われて冷静でいられるわけが無いと。

——まるで、何か強大な存在に睨まれたかのようにだった。

全身から汗が吹き出し、息が一気に荒くなり、気が付けば武器を構えて威圧感の中心地から一斉に距離を取っていた。

それは聖剣を構えていたゼノヴィアや、アーシアを蔑む目をしていたイリナだけじゃなく、俺達部員も全員。

部長や朱乃さん、小猫ちゃんに俺。聖剣への憎悪でここ最近何に対しても無気力だった木場でさえ、突然感じた恐怖に魔剣の切っ先を威圧感の中心——つまり、輪廻に向けていた。

「……り、輪廻君？」

「まあ、教会側からしたら、そう言う考えになるのもわからなくはないさ」

震える声で問いかけたイリナに、しかし輪廻は語りだす。

優しく寄り添うかのような内容でありながら、だがその声は冷たい。もし何か間違った態度対応をすれば、即座に殺されてしまう。

そんな風に思えてしまう程に、輪廻の殺気は悍ましかった。

「でもさ。アーシアは聖女の時に得た喜びと違う喜びを、確かに得たんだ。ただ一人の少女として、転生悪魔としてみんなと過ごす日々を、幸福だと言ったんだ。——それを否定し、神の名のもとにだのなんだのと抜かすなら俺は容赦しない。今のアーシアの幸せを、信仰なんぞに否定させない」

わかつたら武器を下ろせ、と輪廻は一言呟いた。

その一言に逆らう者は誰一人としておらず、二人は構えていた聖剣を下ろし、俺は神器を戻し、木場も魔剣を消した。

……つてか俺、ほぼ無意識で神器装備してたんだけど。

そのレベルの殺気をただの人間のはずの輪廻が放つて……なんかもう、おかしくない？

「ま、わかりやいいのさ。わかればさ——と言いたいところんだけど。許す云々の代わりに一つ頼んでいいか？」

「…な、何？」

「いや。俺の友人に…というか、この場にな。お前たちの持つような、聖剣——特にエクスカリバーを恨んでる奴がいてさ。ソイツと戦ってやってくれよ。——お前も、願ったりだろ？木場」

輪廻の突然の提案に、木場は目を大きく見開いた。

そして、先程までの恐怖におびえていた顔から一転、殺意に満ちた恐ろしい顔になり、呟く。

「…ああ。本当に、願っても無い事だよ」

※——

「いや、木場はまだわかるよ。聖剣に対して恨みがあって、輪廻もソレを知った上で、こうして戦いの場を設けてやったって。でもさ……俺は違うくない!？」

場所は変わって旧校舎外の開けたスペース。

そこで、ゼノヴィアと木場。そしてイツセーとイリナが対峙していた。

……うん。俺も思った。

なんでイツセーまでイリナと戦う事になつてんの？

確かに俺は先程、アーシアに刃を向けられた事でそれはもう怒った。あんなに感情的になったのは久しぶりだなと思うくらい感情的だった。

で、その後「せつかくなら木場のストレス発散がてら聖剣と戦わせて、今の復讐心だけの状態じゃ勝てる勝負も勝てないぞ」という事をわからせてやろうと思つて木場と二人で戦うように頼んだ…の、だが。

なんでか知らないが、イリナが「私はイツセー君の相手をするわ！」とか言い出して……マジでわけわかんね。どうしてそうなつた？

「貴方に戦う理由が無くても、私にはあるわ！再会した幼馴染が悪魔に転生して、しかも悪魔と恋仲になつていたなんて！その上私を男と勘違いしていたりと、正直私的にはイツセー君の方が断罪対象よ！」  
「ひ、ひでえー！別に最後の奴以外誰にも被害を出してないじゃねえか！」

「悪魔はそこに居るだけで悪なのよ！お父様も皆も、そう仰つていたわ！——だから、ここで貴方を裁いてあげる。私のこの、  
『エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣』で！」

そう言つて、イリナは腕に巻き付けていたひも状の物を日本刀のよ  
うな形に変えた。

なるほど、これがエクスカリバー。一応完全体は見た事あるが、こ  
うして分割されたものを見るのは初めてだ。

言つてしまえばかなり弱体化してはいるが、それでも『聖書の剣』を  
上回る光の力を感じる。

折れても最強の聖剣、か。

イツセーの方も、舌打ち一回と同時に神器を装備。

『悪魔の連撃』……殴つた回数と、その時に込められた力によつて強化

倍率が変わる、サタンの力の一端である神器。

使い手によつてはかなり凶悪なその神器を、イツセーは段々と物に  
してきていた。

毎日の修行が、実を結んでいるんだろうな。俺も負けてられない  
ぜ。

一方木場とゼノヴィアは、既に剣戟を開始していた。

……やっぱり、冷静さを失ってんな、アイツ。本来の持ち味である  
速さでの翻弄も、俺が教えたダーティーな戦い方も、何一つ活かせて  
いない。

力でゴリ押しして、目の前の聖剣を破壊しようとしている。

それではダメだ。勝ち目はない。

「はんつ、聖剣が何だつてんだ。こつちは悪魔の中の悪魔、サタンだか  
らな！そんなでもつて、対女性用最強の魔法——ここで初披露としてや  
らあ!!」

「ぎ、サタン!? イツセー君がそんな悪魔の力を宿しているなんて…!!  
ああ、主よ！私に一体どれほどの試練を与えるというのでしょうか！か  
つての友人は悪魔になり、もう一人は悪魔と親しくしてしまうなんて  
！でも私負けません、必ずやこの信仰心を貫き通して見せましよう  
!!」

イツセーが地面を殴りつけ強化を開始し、その隙を狙ってイリナが  
剣を振り下ろす。

だがイツセーとて弱かったあの頃のままではない。

強化中に生じる隙への対処は、とつくに身に着けている。

「つと、あぶねえあぶねえ。相手から目を逸らさず、強さを的確に判断  
しながら…だよな!」

攻撃を上手く避けつつ、しかし余裕は失っていないイツセー。こつ  
ちは教えた事をしつかりと活かしている。

やはり冷静さは大事だな。俺も常に心を平静に保つ訓練でもした  
方が良いだろうか。

「ちつ、ちよこまか動くわね！スケベな顔して、一体何を狙ってるつて  
いうの!？」

「はははっ、良いぜ良いぜ、気になるってんならお望み通りッ!!」

回避を続けていたイツセーが、左足を軸にして体の位置を動かし、イリナに向かって手を伸ばす。

イリナの肩を軽くタツチすると、それはもう見事なにやけ顔のままその場を離れ、イツセーは語り始めた。

「俺は才能がない。魔力も気も何もかも、戦闘で強みにするには不足してる。——だけど、俺にだって、オンリーワンな要素が一つある！それが——それこそが、エロスだ!!」

「は、はあ?」

「魔力の力は神器同様、ソイツのイメージ。思いの力。だから俺は、魔力を使って何をしたいかを考えた。透明人間、時間停止、催眠術、その他諸々：色々なエロいイメージが脳内を駆け巡った末に、俺はこの答えにたどり着いた!」

腕を掲げ、そして指を鳴らす。

乾いた音が響くと同時に、先程イツセーに触れられた部分に魔法陣が輝いて、魔法が発動した。

原作のイツセーも使っていた、あの魔法が。

「き、きやあああああつ!? な、なにこれ、どうして服が破けて…!」  
「名付けて『洋服破壊』!! 女の裸が見たいという純粹な願いを叶えるべく生み出された、俺のオンリーワンの魔法! 最後の最後まで、服が透けて見える魔法と悩んだが、やっぱり脱げて恥じらう姿が最高だもんな! んでもってあざっす! 幼馴染のたわわおっぱい、眼福です!!」

「さ、最ッ低! 女の敵! 悪魔!!」

「はーっはっはっは!! 何とでも言うがいいさ紫藤イリナ! 俺のスケベ根性は、エロへの情熱は、女の子からの罵倒を薪にさらに燃え上がるのさ!」

イリナの着ていた、ボディラインのよく見えるボンテージが粉々に破け、その裸体が明らかになった。

うーむ。デカイ。下着から突然解放されたせいで、一度大きく揺れたのがまた良い。

……ただこれ、覗きと大差ないレベルの性犯罪なのでは。

呆れて物も言えない俺と違い、女性陣の反応は冷たかった。

「…最低です、イツセー先輩」

「そ、そんな魔法を作るだなんて…」

「まさしく、悪魔だな…：…なんと欲深いというか、救いようの無いというか」

「——それに関しては、仲間として謝るよ。ごめん」

ゼノヴィアの言葉に、木場も一度冷静になって謝ってしまうくらいだった。

…流石、シリアスを破壊する男。俺の幼馴染にして親友だけあるぜ、イツセー。

「い、いやあ！見ないで輪廻君！見られたら私、私いつ」

「だあーっははは！そう！これだよこれ、このために俺は洋服破壊をドレス・ブレイク編み出し——あだあっ!？」

「やりすぎだバカ」

顔を真っ赤にし涙すら浮かべているイリナに、流石に俺も罪悪感。

すまん。しばらく今見た物は忘れないが、許してくれたまえ。

取り敢えず未だに高笑いをしているイツセーの頭を殴り、イリナの服を破壊される前の状態まで戻し（時間操作も、一時間以内ならかなりの集中無しでできるようになったのだ）軽く頭を下げる。

イリナの裸を見て喜んだのは俺も同じなのでね。そこは本当に申し訳ないと思っている。

それはそれとして眼福でした。ありがとうございました。

「あ、れ？服、戻って…」

「あのかなイツセー。服を脱がせることに特化させたのはいいとは思いますが、着ている方がエロいという発想には至らなかつたのか」

「そ、それは…：…でもよ、一度でいいからあの子やこの子の裸を見てみたいって…誰だっけと思うだろ！」

「せめて服がずり落ちるとかにすればよかつたじゃねえか！破いたら、場合によっちゃ全裸で家まで帰らないといけない事にもなるんだぞ!!」

「はっ…!？」

俺の言葉に、イツセーは目を見開いた。

そして、頬を一筋の涙が伝う。

「――俺、何てことを……」

「確かに全裸で恥じらう姿は素晴らしい物だとは思う。けど、だけど、それは結局一過性の物だ。全裸だけが良い物という訳ではないと、お前はとつくにわかってるじゃないか。――まだ、まだ変えられる。服を破くのではなく、脱がす魔法に変える事も、今ならまだ可能なはずだ」

「おう、俺…服はもう破かないよ！輪廻！これからは、脱がせることを妄想し続けるよ!!」

「ああ。それでこそ俺の親友だ!!」

「輪廻ツ!!」

力いっぱい抱き合う。

俺は今猛烈に感動している。あのイツセーが。己の性欲の赴くままに行動するだけだったイツセーが、俺の言葉を聞き入れたのだ。

何と成長したのだろう。俺は嬉しいよ。ここまで成長していただなんて！

しかし周囲の反応はやはり冷たい。

「……え、輪廻君もこんな感じなの？」

「輪廻先輩はイツセー先輩程ではありませんが、変態三人組と保護者一人と呼ばれるくらいには変態です。まあ、イツセー先輩よりかは紳士ですし、直接的な行動に出たりしない分まだマシです」

「それでも人目を憚らずにその…え、エッチな話をしたり、とかは…しますけど」

そのことに関しては許せアーシア。俺とて男。しかも友人が皆オープンスケベだと、俺も一緒になって猥談に興じてしまうのだよ。

これでも最近は抑えてる方で、アーシアの前ではあまりそういう話をしないようにはしているんだけど…：：：ば、バレてましたか。やつぱり。

「ま、まあ。とにかくイリナの負けで良いだろ？服は俺が元に戻したとは言え、一度は戦闘不能状態に陥った訳だし」

「……く、悔しいけど、そうね。私の負けだわ。正直って、甘く見過ぎたかも。それ抜きにしても、その『洋服破壊』は凶悪だったけど」  
「でも、この技はもう封印するよ。その代わり、俺は輪廻の教えを活かして新技『強制脱衣』リアル・ストリップを開発して見せる！衣服を傷つけず、女の子が裸で恥じらう姿を、この目に映せるようにしてみせる!!」  
拳を天に掲げ、イツセーは宣言した。

俺は涙が出そうなほど感激したのだが、やっぱり他の皆には呆れられるだけだった。

——さて、そうこうしている内に木場の方も決着がつきそうだ。  
寧ろ、まだ決着がついていない事に驚きなまである。

本来の戦い方を止め、馬鹿正直に正面突破。

もしあの聖剣が『破壊』エクスカリバー・デストラクションの『聖剣』でなければまだ可能性はあったかもしれないが、破壊特化のあの聖剣相手には不味いだろう。

今アイツが振るっている魔剣も、そろそろ限界のようだしな。

「ぐ、あああああっ!!」

「勝負あったな。——正直、残念だよ。貴方は本来なら、きつと素早く相手を翻弄して戦うタイプの騎士だったろうに。そうではなく、この『破壊の聖剣』相手に力勝負を挑んでしまった。相手によって戦い方を変える、そんな基本すらなっていない今の貴方では、聖剣の破壊なんてのは決して不可能だと思っうね」

「ま、て……まだ、僕は負けてない……!!」

「普通に負けだろ、木場」

「ッ、いや、僕は」

「ゼノヴィアが言った通りだけどき。アレを言われて尚同じ事を繰り返そうとしている時点で、お前には何もできねえよ。復讐心を糧に戦うのも、そりや間違いないが……怒りに飲み込まれて戦うだけってのは、己の望みも使命も、何もかもを見失って破滅するだけだつて事を忘れんな。——まあ、今のお前にやわかんないだろうがな」

「…………クソッ、くそつ、畜生オツ!!」

普段の木場からは想像もできないような叫び声と共に地面に拳を叩きつけ、しばらく肩を震わせて涙をこらえた後、何も言わずに去つ

ていった。

部長が止めようとしたが、それをイツセーが制していた。

まあ、そうだよな。今のアイツには、本当に何を言っても意味がない。

寧ろ、今下手に介入するのは、自分もアイツも傷つけるだけだ。

それをわかっているからこそ、イツセーは止めたんだろうな。

「——それで、また聖剣奪還に戻るわけか？」

「ああ。それが私達の使命であり、ここにいる理由だからね。——正直な所、あのレベルの殺気を放って見せた君とも是非手合わせ願いたい所だが……やめておこう。君を傷つけたりしたら、私がイリナに殺されてしまう」

「はい？イリナが？」

「な、何言ってるのよゼノヴィア！変な嘘つかないでよね!？」

「嘘なんかついてないさ。プライベートの時、その胸元のロケットの中に入っている写真の少年を愛おしそうに眺めては、何度も何度も立神輪廻という少年について話して……」

「わーっ、わーっ!」

大声でゼノヴィアの言葉をかき消そうとするイリナを見て、なんでかアーシアと小猫がジトつとした目を向けてくる。

……俺に。

「いや、なんで俺が睨まれてんの？」

「……知りません」

「り、輪廻さんの節操無し!」

「は、はあっ!?!ちよつとアーシアそんな言葉どこで覚えて——」

「あらあら。若いわねえ」

「……朱乃、それオバサン臭いわよ」

ワイワイと騒ぐ俺達から少し離れた所でイツセーが何かを決心したような顔をしていた事に、この時は誰も気づいていないのだった。

## 協力関係

翌日の朝。

今日は休日という事もあって、一度目覚ましに起こされてからもう一度入眠するという贅沢な時間の使い方をしたはずなのだが、突然腹部に強い衝撃が加えられ、慌てて飛び起きた。

驚いて周囲を確認すると、むすつとした顔をしつつ俺を見ている小猫の姿が。

でもおかしい。ここは俺の部屋で、この時間に立ち入ってくるのは黒歌かアーシアのはずだ。

黒歌に至っては立ち入ってくる所か我が物顔でベッドの半分を占領している。勿論今も。

「お、おはよう?」

「おはようございます。先輩。——それとまずは一つ。人の姉と何寝てやがるんですか」

「や、やがるって……いや、別にコレは黒歌自身が望んでる事で」

「それが何か」

「ひ、ひえー……」

暴君だ。幼き暴君がここにいる。

相も変わらぬ無表情ながら、しかしその目は鋭い。

視線の向かう先は俺の隣で寝ている黒歌。なんと服を着ておらず、その美しい体の一切が丸見えだ。

毎朝下半身が凝るのもそのせいである。まったくけしからん。もつと見せてくれ。

——つとと、口が滑った。

とにかく、この状況は黒歌自身も望んでいる事だ。前に確認した時、「ご主人様と一緒に寝たいって思うのは……ダメにやん?」と上目遣いで聞き返されたくらいだからな。

勿論「良いに決まってんだろ!おらつ、一緒に寝るぞ!」って返した。

以来俺達は絶対二人で寝る事にしてるのだが……最近では、アーシ

アが逆側を陣取っている。

現在も、綺麗な姿勢ですやすやと。

ちやんと服は着ている。

「……ま、まあ説教は後で受けるから。取り敢えずここに来た要件だけ教えてもらえないか？ほら、黒歌と一緒に寝てる事の話をして来たわけじゃないだろ？」

「……そうですね。ではこの件については後程。——端的に言います。先輩の力を貸して欲しいんです」

「の、後程ね……で、俺の力を貸す？詳しく聞こうか」

俺の腕に頬ずりしてくる二人からそっと離れつつ、伸びを一つして続きを促す。

起こさないようにしたつもりだったが、黒歌はそこで目を覚ましてしまった。

目を擦り、俺と小猫の方を何度か見て、なんとなく事態を察したのか苦笑い。

「にや、にやつははー……お、おはようにやん？」

「……姉様にも、後でしつかりお話があります」

「ひ、ひえー……」

「……んむう……たべられませんよう……」

朝特有の静かな部屋に、アーシアの典型的な寝言がやけに響くのがあった。

※——

小猫から持ち込まれた話は、まあ予想通りというか木場絡みだった。

やっぱり同じ仲間同士、死に行くような真似はさせたくないらしい。

俺とてそうだ。アイツはもう友達だと思ってるし、だからこそあのまままでいさせたいとも思っていない。

だから別に難癖付ける事も下手に試すような事もせず、そのまま安請け合いました……のだが、ここに黒歌が待ったをかけた。

この話、自分も関わらせろ、と。

その理由は純粹に、小猫が聖劍使いがいる戦場に行くのが看過できないという事らしい。

まあ、相手もエクスカリバー使いだ。下手に首を突っ込めば、それこそ小猫なら消滅させられかねん。

その懸念も仕方なからうという事で、俺がこれから木場の為にする事への動向を許可する事にした。

勿論小猫も付いてきている。

依頼だけ受けて、じゃ後は待つてー、とはならんのだ。

本人もちゃんといってくるつもりだったらしいし。

「それで、ご主人様のいう『当て』って言うのは何なの？」

「んー……ま、聖劍使いには聖劍使いをもってヤツだな。ああ、そんな心配そうな顔しなくても、相手は一応顔見知りだし問題ねーよ」

「いえ、その聖劍使いって……」

「だから大丈夫だって。いや、確かに洋服破壊の一件で嫌われた可能性も無くはないが……つと、居た居た」

街中を歩いていると、目的の二人が見つかった。

前に会った時と同じ、顔を隠すフードとチラリと覗くボンテージ。

布に包まれた大きな何か（看板か何かだろうか）を抱えている以外には変化のない、イリナとゼノヴィアの二人がいた。

……後ソレを、影から嫌そうな顔をして見ているイツセーと……匙元士郎なる男がいる。

匙はアレだ。生徒会書記で、支取蒼那会長……いや、ソーナ・シリートの眷属。

駒四つ消費の『兵士』であり、五大竜王の一角を担う『ヴリトラ』の力を宿している稀有な男。

イツセーとは、部長と会長の眷属の顔合わせの時に会ったくらいしか面識がないはずだが、なんで一緒にいるんだっけか。

確か原作にもこんなシーンがあった気がするが、しかし思い出せない。

「あつ、輪廻！」

「げつ、立神。——と、一年の塔城ちゃんと……えつと、どちら様？」

「私は黒歌。野良猫から家猫にジヨブチエンジン済みの猫?にゃん♪」

「……まあ、俺の家に住んでる妖怪兼悪魔で、小猫の姉だな」

「え、ええっ!?お姉さんいたのか!にしては全然似てないような……主に一部ぶごおっふッ!」

「さ、匙ーッ!!」

「……失礼な人」

小猫と黒歌の胸元を交互に見ながら失礼な事を言った匙は、小猫の一撃を頬に喰らってノックアウト。

なんだか俺の修行を経て、小猫が以前よりもアグレッシブというか……バイオレンスになった気がする。

「匙の事は置いておいて……その、お前ら何してんの?」

「実は、その……木場の件でさ」

「どうやら、イツセーの方も小猫と同じだったらしい。」

木場の身を案じ、どうすれば良いかと考えた結果、俺のような考えに至った……つまり、イリナとゼノヴィアに協力する事にしたのと。

実際部長……つまり悪魔側は教会の言葉もあって動けないし、同じ聖剣使いであり、エクソシストでもある二人に協力する形をとった方が、木場の望みである聖剣の破壊に近づけるしな。

でも、なんで匙?

その事を質問すると、先程まで倒れていた匙が起き上がり、イツセーに掴みかかった。

「そうだよ……なんで俺をこんな休日の朝から呼んで、しまいにやバレたら会長に怒られそうなことの片棒担がせようとしてんだお前は!」  
「い、いやほら。咄嗟に頼れる相手が輪廻かお前しかいなくてさ。でも輪廻を呼んだら……その、前に木場が輪廻に攻撃した事もあったし、あんまりよくないかなって。だから消去法で、お前しかいかなーって」

「消去法!?お前ふっぎけんよ!これじゃ俺と会長のラブラブでき婚大作戦成功への道程が遠くなっちゃうじゃねえか!!」

「え、何その胡乱な計画」

「つとおーよくぞ聞いてくれました、塔城さんのお姉さん！ふっふっふっ…この俺、匙元士郎の夢は、俺の主様であり生徒会長である、支取蒼那先輩と…できちゃった婚をする事なのです!!」

「お、おおーっ!!」

「うわー…」

「…最低ですね。これに目を輝かせるイツセー先輩も、同レベルです」

感激に涙すら流すイツセーに対し、黒歌と小猫はドン引き。

それどころか、通り過ぎていく街の人たちも「できちゃった婚ですって」「進んでるわねー」とか言いたい放題である。

…俺、この場を離れても誰にも咎められないと思うんだけど。

「じゃ、じゃあ。なんですぐに話しかけないでここで二人を監視するような真似を?」

「…ああ、それか。それはアレを見たらわかるぜ」

若干辟易したような顔をして、イツセーが二人のいる方を指さす。謎の大荷物を持っている以外に、何も違和感はないと思うが…つて、うん?」

視線の先のイリナ達が、何やら手を組んで祈るようなポーズをしつつ、何かを言っているのに気づく。

「どうか前々から聞こえていたのを、敢えて聞こえていないふりをしていただけかもしれない。」

「迷える子羊にお恵みを〜!」

「どうか、天の父に代わって哀れな我らに慈悲をおおおつ!」

おかしい。あんなシリアスな顔をして「信仰の為なら、命を落とす事すら覚悟の上だ」とか言っていたあの二人が、なんだって物乞いみたいな真似をしているんだ。

しかも、この現代日本の表通りで。

「…な? あんなの話しかけるの躊躇しちまうだろ」

「お前匙と一緒にできちゃった婚だのと大声で言ってたじゃねえか」

「それとこれとは違うだろ!」

「大差ねえよ」

※――

「うんうんっ、やはり日本の料理は美味いな！」

「これよっ、これこそ故郷の味よ！」

「イタリアンだぞ」

あの後、何やら言い争いを始めそうになった二人を止めるためにも声をかけ、腹が減つていると言われたので飯屋に連れてきた。

一応日本の全国チェーンではあるが、出される料理に日本食は一つもない。

本当にいいのかイリナ。お前の故郷は今この場をもつてイタリアンになったぞ。

「……でも、なんだって路銀が早々に尽きる事態に陥るんだよ。まさか宿泊施設の料金を一桁間違つてましたとかじゃねーよな」

「そんな訳ないじゃない！というか、私達はホテルじゃなくて、この町近辺の教会で寝泊まりしてるの。だから宿泊費なんてかからないわ」  
「ああ。変な消費の仕方をしなければ、それこそ一か月はまともな食生活を送れたさ。――それを、イリナが変な絵画を買ってきて……」

「変つて何よ！これは立派な……立派な……そうっ、聖ピエトロ様の肖像画よ！」

そう言つてイリナが見せてきたのは、少なくとも落書きにしか見えないファンタジックな絵だった。

かろうじて真ん中に描かれているのが貧相なボロ布を身に纏った男性だというのがわかるが、他はまるで分らない。

そもそもこの背景は何だ。宇宙なのか。

俺やイツセー達はその絵画に無言になるなか、ゼノヴィアが冷たく言い放つ。

「これのどこが聖ピエトロ様だ。こんな訳の分からん絵のどこに信仰心が見て取れる。――全く、これだからプロテスタントは好かんのだ」

「何よ！カトリックのあなたにはこの絵の素晴らしさがわからないだけですよ!?!」

「じゃあ逆に君から見てその絵のどこに素晴らしさを感じるというん

だ！どこにもないだろう!?その絵一枚で、私達の一か月分の食費が全  
てなくなつたとわかつた上で発言しろ！」

「うぐうつ…」

「まーま、落ち着けて。最悪飯なら家の分わけてやっから」

「二本当（か）!?!」

こちらに身を乗り出し、目を輝かせる二人。

おいおい良いのか。ここに来るまでの間に「悪魔と悪魔に親しい者  
からの施しだなんて…!」とか好き放題言つてたのを俺はすっかり覚  
えてるんだが？

「さて。そろそろ本題に入ろうか。——何のために、私達に接触を  
図つた？」

「俺達の方は、先日お前と戦つた木場という男の為に、その聖剣の奪還  
およびコカビエルの撃破の協力を申し出に來た。本人に許可を取つ  
てはいないが、聖剣破壊を目的とするアイツには良い機会だと思つて  
な」

「お、俺の方もだ。ここで聖剣の破壊に乗り出しても教会側との争い  
が起きないように話しておきたかつた」

「不要だ、と言つたはずよ。確かに聖剣は核となる欠片さえ確保でき  
れば原形をとどめていなくても構わないとお達しが来ているけど  
…だからといって、悪魔の力を借りるのは」

「そういうと思つてな。適当な方便は考えてある」

方便？と全員が不思議そうな顔をする中、俺は一度水を飲んで喉を  
潤し、黒歌たちに「耳を塞いでおけよ」と一言告げてから、言葉を発  
した。

If anyone does not love the Lo  
rd, let him be under a curse. Co  
me O Lord!

「痛っ!?!」

「今のは…」

「これ以外にも、聖書、福音書、その他すべての宗教的文章は記憶して  
るんでな。まあ教会側に後々文句を言われるようなら『現地の敬虔な

信徒が協力してくれた』とだけ言っておきやいい」

因みに今のは「もし主を信じぬ者がいるなら、誰でも呪われよ。主よ来たれ！」とかそんな感じの一文。

キリスト教にも派閥は多数存在するが、その内の一つでしかないのが皆が皆「呪われよ」だのなんだの言っているという勘違いだけはないでやって欲しい。

俺は何の宗教も信じていないし、そもそもこの世界の神（三大勢力の掲げる唯一神の事）が死んで居る事も勿論知っているわけだけど。

俺の忠告を無視して耳を塞がなかったイツセーは、頭を押さえて苦しそうにしている。

まったく。匙ですら素直に耳塞いでたっというのに。何を言うか気になってんだろうな、大方。

——で、なんでイリナ嬢はそんなに目を輝かせておられるのか。

「すごいわ！悪魔と仲良くしてるから誤解してたけど、輪廻君もしっかりと信仰心を持った信徒だったのね！」

「いや待て、それは話が違う。俺は別に信仰心自体は持ち合わせてはいない」

「ああつ、主よ！貴方に感謝します！極東のこの地にて再会した幼馴染が、同じく敬虔な信徒だったなんて！所で輪廻君はプロテスタント？それともカトリック？」

「あの、だからイリナ、話をだな」

何度も誤解を解こうと口を開いたのだが、暴走したイリナは中々止まらず。

話をもとに戻すまでに、結構時間を取られた。

因みにその間、イツセーと匙が勝手に色々と注文していた。

しかも財布は持ってきていないとのこと。おいふぎけんな。

「……まあ、そういう事なら問題ないだろう。現地の協力的な信徒の力を借りた、なら教会も何も言うまい。——だが、ただの人間であるはずの君が、仮にも聖書にその名を記されている墮天使との戦いに参入しても構わないのかい？」

「多分だけど、この中で一番強いのは輪廻だぜ。俺達の修行の面倒見

てくれたのもコイツだし、その時にコイツがどんだけやばい奴かは十分知った」

「…はつきり言つて、規格外。人間基準なら、間違いなく最強クラス」「だってご主人様は今代の——もごっ!?!」

「おーよしよし黒歌ー、近代きんだいを近代こんだいと言い間違えるなんて良くないなーっ！意味が違つて聞こえるだろー？」

自然と黒歌が俺の事を「今代の赤龍帝」と明かしそうになったのを防ぎつつ、ちよつと無理のある言い訳をセットに苦笑い。

危ない危ない。別に知られて何があるつて訳じゃないけど、せつかくここまで知られずに来れたわけだし、もうちよつと良さげな場面で知られたい。

でもどんだけ劇的な披露をしても、なんだか「ああ、なんかそんな気してた」みたいな反応をされそうな気もする。

だつて人間にしては強すぎるもん。我ながら。

ただの人間じゃ無くて赤龍帝でしたー。つて言ったら「妥当」としか言われなさそう。

「とにかく。俺とその仲間たちが協力するつて事で良いな？」

「ああ。切り札があるとはいえ、元々私達二人ではコカビエルや聖剣使い相手をするには心もとないと思つていたしね。イリナも構わないだらう？」

「ええ。悪魔の力も一緒に借りなくっちゃいけない所はまあ気になるけど……自殺志願でここにいるわけでも無いし。最大の信仰は、天寿を全うするまで生き続けて、その間も主を思い続ける事にあるもの！」

二人の了承は得た。後は……つと、ちようどいいタイミングで来たか。

「よお、木場。ちゃんと来てくれて嬉しいよ」

「君の言う事は、いつだつて物事の本質に繋がるからね。『聖剣を破壊したいなら、ここに来い』だなんて簡素な文面と店名だけ告げられたら、来る他ないさ。——でも、まさかここで再び聖剣使いと会えるとはね。君が言うのはアレかい？この二人と再戦する機会を用意し

たつて事かい？」

「落ち着けバカ。コイツ等は協力者だ」

相変わらず普段とは違う邪悪な笑みを見せる木場に、俺は溜息を吐きながら頭を抱えるのだった。

※——

「それで？お前のライバル：今代の赤龍帝とやらは、見つかったのか？」

「残念ながら、まだ発見できてないな。本当に居るんだろうな、この町に」

「おいおい、俺の情報が信用できないってか？悲しいねえ、反抗期か？」

月が燦然と輝く夜の街。その中心街にある、建設中のビルの骨組みの上。

二人の男が、互いにニヒルな笑みを浮かべながら会話している。

夜風に銀色の髪を靡かせている男——今代の白龍皇である、ヴァーリは、浴衣姿の男——墮天使の総督であるアザゼルの言葉に鼻で笑う。

「まさか。捕らえた『夢幻人』は口を揃えてこの時代だと語っていたんだらう？何よりアルビオンも、過去に対峙したという宿主の気配を、この町から感じているらしいしな」

「へえ。わかるもんなら、居場所もわかると思うが？」

『あの男は用心深い一面も持ち合わせている。己の正確な居場所を知られないようにするために、この町全域に己の気配を流している。ヴァーリであっても、私の力を貸したとて気配を探るのは不可能だ』  
「それならまだ『夢幻人』を探して、もつと細やかな情報を得た方が良い。何せまだ、名前すら知らないんだからな。——とところでアザゼル。コカビエルの方はどうするつもりだ？まだ泳がせるか、それとももう捕らえるか」

「まだまだ泳がせるさ。何より、『夢幻人』とつるんでるんだろ？ここは敢えて泳がせておいて、かの赤龍帝を呼ぶ餌にでもしておけばいいさ」

アザゼルは一度言葉を切り、そして突然思い出したかのように口を開く。

「ああ、そうそう。俺の教えてやったもう一人の気になる方、見てみたか？」

「サタンの神器を宿す者……兵藤一誠、と言ったか？正直、アレは期待外れも甚だしいな。力も弱ければ、血筋も出自も凡庸。いくらサタンの力を持っているとしても、あれでは宝の持ち腐れだ」

「あちら、随分と辛口評価だな。俺は結構、面白い奴だと思ったがな」  
「はっ、確かに少し似ている所もあるか？だが、俺にはやはりつまらん男にしか見えなかった。——どちらかと言えば、その友人らしき男……立神輪廻。あちらの方が興味深い。感じるオーラも佇まいも、どこにでもいる人間……なのに、同時に微かに強者のオーラを感じる」  
「赤龍帝を見つける前に、そつちをつついてみるってか？神器持ちかどうか怪しい人間を、ちよつと気になったからなんて理由で……よりもよつて、このグレモリー領で喧嘩吹っ掛けるとか、サーゼクスの野郎と揉め事になつちまうかもしれねえだろ」

「俺としては一向に構わないんだがな」

「ああ、はいはい。お前はそういうヤツだったな。だが俺は違う。もう戦争なんて真つ平ぐめんだし、何より対処しなきゃいけない敵が外部に多すぎる。——さ、そろそろ拠点に戻るとするかね。お前はどっするんだ？」

「……もう少し、夜風に吹かれるとしよう。この町は、常に強き龍のオーラを感じて心地いい」

「そうかい、じゃー自由だ」

黒い翼をはためかせ、アザゼルはその場を去る。

そしてその姿が完全に遠くに行つた途端、ヴァーリの背後に男が現れる。

「よお、白龍皇。いや、ヴァーリ、の方が良いか？」

「どちらでもいいさ。鬼族の王、伊吹狩刈……いや、『夢幻人』の幹部

金棒を肩に乗せ、子供のよういぶきかりがりに笑う黒髪の男、伊吹狩刈。

彼が持ち掛けた話は、ヴァーリが惹かれるような、そんな話だった。

## 決戦は駒王学園

木場とイリナ達との再会は、それなりに荒れる事はあった物の、何とか「協力する」という話に落ち着いた。

そしてその時に言っていた事なのだが、なんでも木場は聖剣を持ったフリードと一度対峙したらしい。

フリードとは勿論、あの気が狂ったような神父の男の事だ。

で、そのフリードが持っていたのがエクスカリバー。砕け散り、七本に分かれたうちの一本であり、所有者の速度を上昇させるエクスカリバー・ラビッドリイ『天閃の聖剣』だったとのこと。

その時はフリードを倒す事は勿論聖剣の破壊もできなかつたらしいが、代わりにコカビエルがバルパー・ガリレイという男と組み、聖剣の力を統合する計画と、その力を利用しての大規模な破壊術式を作っているという事が分かった。

……後は、『夢幻人』について。

なんでも、コカビエルに協力している『夢幻人』は、今までと違い『幹部』の男なんだと。

フリードが出した情報ではそれしかなかったらしいが、一筋縄ではいかない相手である事に変わりはない。

——俺も、いい加減に腹括正体明かすった方が良いかな、なーんて。

「……しっかしまあ、良く思いついたよな」

「思いつくのは誰だつてできる。どっちかつつと、俺らの分の服を用意してくれたイリナ達に感謝だな」

「まあ、理にかなった作戦だからね。悪魔に神父服を着せるなんて、教会の人間としてどうかとは思うが」

「清濁併せ？む、ってヤツね。——後は、この状態で移動して、フリード・セルゼンが来るのを待つだけね」

夜の街を、神父服に身を包んだ俺達が闊歩している。

イツセーの案で、俺達が神父の恰好をする事でフリードをおびき出す作戦だ。

おびき出して聖剣を回収し、そのままコカビエル達の情報を得て

……んで、万全の状態に整えてから最終決戦へ、という感じ。

「……大分冷静になって来たな、お前も」

「ははは……まあ、今までは『聖剣』が漠然とした敵だったけど、今は『バルパー・ガリレイ』を倒すっていう明確な目的ができたからね。一つの目的に向かって全霊をかける以上、今までみたいにはずつとピリピリしっぱなしで居るわけにもいかないよ」

頬を掻きながら笑う木場の目からは、強い意志を感じた。

何としてもバルパー……『聖剣計画』の首謀者を倒す、と思っっているのだろう。

イリナ達からバルパーが諸悪の根源だったと聞かされた時から、木場は一周回って冷静になっていた。

今は良いが、実際にバルパーと対峙した時に我を失う事が無ければ良いが。

「——さて。ようやくお出ましみたいだぞ」

「お出まし……って、まさか!」

「呼ばれて飛び出てじゃつじゃやーんっ!!通りすがりの神父モドキ共め、覚悟しやがれい!」

相変わらずのエキセントリックな言葉と共に、聖剣の切っ先を向けながら俺らに攻撃してくるフリード。

なるほど。確かに前に会った時よりも動きが速いな。

……一体どういう原理なんだか。

「フリード!!」

「いやはやお久しぶりっすねー悪魔君。ちよつと背ー伸びた?なんちて」

「僕たちが神父じゃないと、気づいていたのか」

「そつりゃあ気づきますって。だって悪魔だぜい?悪魔。もう臭くて臭くてしょうがないっつーの!なーんか新顔増えてるみたいだけど、そこの猫耳じゃない二人組はただの人間……っつと!?しかもこの雰囲気、シースターちゃんじゃありませんか!?おいおいマジかよ教会!悪魔と組むとか世も末だっぴ!」

「殺す事に執着したあまり教会を追い出された貴様に言われる筋合い

は無いな」

「さあ行くわよ、まずは一本——」

「回収／破壊するツ!!」

魔剣を生み出した木場と聖剣を握ったイリナが、フリードへと斬りかかる。

続くようにゼノヴィアが相手の回避先を目指して駆け出し、黒歌が援護用の仙術を発動した。

聖剣での強化がいかほどな物かはわからないが、これで速度負けする事も、パワー負けする事も無いだろう。

「ひゃっはーっ、俺ちゃんモテ期到来のお知らせ!? 悪魔と教会のクソビッチ二人から殺気向けられちゃうなんて素敵感激そのまま死イッ!!」

「させるかよー伸びろラインよ!!」

攻撃を回避し、反撃しようとしたフリードを匙の腕から伸びたラインが引き留める。

これがヴリトラの力か。神器として見るのは初めてだな。

『(ほう、かなり力を失ってはいるが……なるほど。あの匙元士郎という男と相性がいいらしいな。十全に力を発揮できている。アレは育て方によつては化ける逸材だぞ)』

(お前がそんな褒めるなんてな。もしかしたら、いつかはヴリトラ自身を超える事になったりしてな)

『(それこそあり得ない話ではないさ。お前が一番わかっているだろう? 俺本来の力を超えたお前なら)』

「つちい! 神器持ちかよめんどつちーな!——なーんちつて。僕ちゃんはっきりチミ達の神器を知ってるし、この神器への対処法はバルパーの爺さんに教えてもらった後でござんす! ほれ、悪魔殺しの聖剣ばわーッ!」

「ぐあぁっ!?!」

フリードの体が輝くと同時に、匙の体から煙が昇り、苦しむような声を出した。

まるで、体内に光の力を直接流し込まれたような……あぁ、なるほ

ど。ヴリトラの神器の吸収する力を逆に利用して、そこから聖剣の力を流し込んだのか。

「おいつ、無事か匙!？」

「あ、ああ。何とか、ギリギリでラインを外したからな……くそつ、あの野郎、俺の神器の事を知ってるだと…!？」

「もうちろんですとも！なんてたつて、こつちにや優秀な情報屋がいるからね！その『聖剣計画』の失敗作君が『魔剣創造』の持ち主で、今苦しそうにしてる君が『黒い龍脈』の持ち主。その前に俺にボコボコにされた悪魔くんが『悪魔の連撃』の持ち主で——ひひつ、そしてそして、まさかまさかのもう一人が——ぬおあ!？ちよつとちよつとー。人が話してる途中に攻撃するとは何事ですのん?」

「はは、ははは、ああ、そうさ。僕は所詮失敗作だ。それに変わりは無いし、否定もしない。——けど、聖剣を持ち、聖職者を名乗り、そしてバルパー・ガリレイと手を組んでいる君に言われると——虫唾が走る!」

「はっ、んだよ熱い男はお嫌いなよあてくしは!このエクスカリバーちゃんの錆にしたげるわ!」

黒歌の強化込みとは言え、いつも以上の速度を發揮してフリードへと攻撃を仕掛ける。

一度距離を置いたイリナが間に入りに行けなくらい苛烈な剣戟の応酬は、夜の住宅街に鉄の音を響かせた。

……わざと煽ったな、フリードの奴。これが木場にとって地雷だつてわかつてて言つてやがる。

相手の冷静さを奪うのは戦法として理にかなったものだからな、まあ悪くはないだろうが……仲間がやられてるのを見て、気分が良くなるモノではない。

後ついでに、コイツ多分俺の事知ってるな。黙らせておくためにも、ここは俺も動くでしょう。

『氣』を練り上げて『縮地』を発動し、振り下ろされる聖剣の腹に手を当て、軌道を逸らす。

「はあつ!?え、エクスカリバーだぞ!?なんでそんな平然と触れてんの、

はあ〜ッ!？」

「それはともかく、隙だらけだな」

右手を握りしめ、腹部を殴打。

すんでの所で攻撃がガードされるが、それでも防いできた左手の骨は折った。

……聖剣のブーストがあるとは言え、凄い反応だな。前の時とは違う……というか、元々これくらい強いのか？

「つてえ、痛エよこのっ……なーんてねええええっ!!聖剣の持つ光の力。その使い方も俺ちゃんすっかり学んでるの巻!ほれ、折れた腕もこのように……!!」

折れた腕が光に包まれ、あらぬ方向に曲がっていたはずの左腕が元通りになる。

……あんな使い方ができたのか。バルパーが発見したのか?いや、原作で無かった要素だからこれは……『夢幻人』か?

とにかく、攻撃してもああやって再生するのか。

つつても再生にかかる時間が結構あるし、何なら隙の生じぬ連撃で……つと?」

俺とフリードの間を、衝撃波が通過する。

地面を抉り、一直線に破壊をもたらしたソレの発生源には、金棒を持った男が立っていた。

黒髪の美少年。中学生くらい見た目なソイツは、下駄をカラコンと鳴らしてこちらへ近づいてくる。

身長の何倍もある金棒を肩でトントンしながら、鼻歌混じりにやってくる。

「やっぱ、流石に今のじゃやられねえわな、立神輪廻」

「おっおーっ!狩刈君じゃ、あーりませんか!」

「よおフリード。そろそろ儀式開始だから戻ってこいってよ」

狩刈と呼ばれた少年は、なぜか俺の名前を知っていた。

……つつーか、フリードの仲間で、原作に出てなくて、しかも俺の事を知ってるのか……確実にコイツが『夢幻人』の幹部だろ。

「あんな残念。ここらであの悪魔君たちをぶっ殺殺殺してあげたかつ

ただけどもねえ」

「お楽しみは取っておけ、つてやつだな。——兵藤一誠、木場祐斗、塔城小猫…だな？グレモリー眷属の三悪魔。後ついでにシトリーの眷属、匙元士郎も居るか。お前らの主様に伝えとけ。俺達は駒王学園で、聖剣を統合する儀式を行う。そしてこの町を消滅させ、悪魔や天使に宣戦布告を行う…とな」

「な、なんだよソレ、宣戦布告!?!」

「ま、詳しい話はコカビエルから聞けよ。さっき言った通り、駒王学園…の、校庭にいるからよ。止めたきやご自由にどうぞつてやつだ」  
それだけ言つて、狩刈は踵を返し、戻つていく。

それについていくように、フリードも聖剣を腰に携えて去つていった。

「ッ、逃がすか!」

「あ、おい待てよ木場!」

「イリナ、私達も追うぞ」

「ええ、勿論!」

去つて行つた二人を追うようにして、木場とイリナとゼノヴィアが駆け出す。

イツセーが止めようとするも、無駄だった。

「行つちまつたな。でもまあ、最終的に目指す場所は同じなんだ。俺達は後から向かえばいいだけだろ?——ちゃんと説教受けてからな」

「え、説教?何言つて…:げっ」

「酷いわねイツセー。私の顔を見て、なんで『げっ』なんていうのかしら?」

振り向いたイツセーの顔が引き攣り、冷や汗が額を流れる。

その視線の先には、なんだか不穏なオーラを垂れ流す部長が、会長や朱乃さんと一緒に立っていた。

※——

「…ち、ちくしょう。すつげえ痛い…」

「愛の鞭よ。私を心配させた罰」

「は、ははは、情けないな兵藤。俺なんて全然…ひぎいんっ!」

「座ろうとしただけでそんな情けない声上げてる癖に俺の事笑ってんじゃねえよ匙！」

イツセーは部長に、匙は会長に尻叩きという罰を受け現在満身創痍。

小猫も俺と黒歌も説教をされたが、流石に尻叩きは無しだった。

ま、イツセーは眷属であり部員であり後輩であり…何より彼氏だもんな。一番心配しただろう。

イリナ達と協力し、聖剣の破壊に参加していた事…そして、フリードと対峙し、コカビエル達が何をしようとしているかを聞いたという事。

その話を聞いた部長は、それはもう険しい顔をしていた。

「…取り合えず、お兄様には連絡したわ。だけど、どうやら転移用の魔法陣に妨害工作が仕掛けられていたらしくって、別の手段で来ようにも、そうするよりも魔法陣の修繕を行った方が早いらしいの」

「それで、その修繕とやらにはどれくらいの時間が？」

「最低一時間。どれだけ遅くとも三時間、だそうよ」

「コカビエルが何を以ってこの町を消滅させようとしているのかがわからない以上、何時間も魔王様の到着を待つのは非現実的ね…これは、私達で食い止める…できれば解決する必要があるわ」

「何より、祐斗が既に戦場に向かってしまっているしね。——そうと決まれば、早速行きましょう。アジア、武器の準備はしてあるわよね？」

「は、はい。『スピーカー・オブ・グロリー聖なる十字の拡声器』は、いつも持ち歩いていますので。——でも、その…相手が、聖書に名前を記されるレベルの墮天使だというのに、輪廻さんまで行ってしまっ…大丈夫なんでしょうか？」

心配そうに俺を見ってくるアジア。その言葉に、全員が「そう言えば」とこちらに視線を向ける。

まあ、黒歌はともかく俺はただの人間…だと思われてるしな。心配されて当然か。

「問題ねーって。寧ろ危機が迫ってるってわかってるのに黙ってる方が気分悪い。何より、木場もイリナも戦場に行っちゃったんだ。大人

しく待ってるなんてできるかよ」

「……それに、あなたは持っている力を全て振るえば、最上級悪魔レベルの力に匹敵する……って言ってたわよね。それが真実なら、正直心強いわ」

「それに、SS級はぐれ悪魔の称号を与えられるくらいに強い姉様もいますし」

「ほ、褒められて渡された称号じゃ無いんだけどにやー」

「え、SS級はぐれ悪魔!?塔城さんのお姉さんが!」

「匙……」

会長が溜息を吐く。

……まあ、一応悪魔界では有名な存在らしいしな。長い事一緒に行動してて気づいてなかったなんて、そりや溜息も出る。

「戦力は、まあ十分とは言いい切れないかもしれないけど……でも、負けるつもりは無いわ。私達みんなで、この町を守って見せるわよ!」

部長がそう言うと、皆が拳を突き上げて賛同する。

この団結力や意志があれば、きつと負けるなんて事は無いだろう。

——後は、俺が本気を出すだけ、だな。

## 『禁手』

会長と部長の話し合いが終わり、作戦が決まった。

相手は墮天使の中でも上位に位置する、コカビエル。

ソイツとの戦闘の余波で町が壊れては本末転倒という事で、会長とその眷属たちが学園全体を覆うように結界を張り、俺達が存分に戦えるようにしてくれた。

本当は、会長たちと一緒に戦って……ってやった方が勝率高いけど、背に腹は代えられない。

何より、こっちは黒歌さんも輪廻もいるんだ。不安がる必要なんて、全くねえよ。

『女王』にプロモーションし、皆が各々の武器を携えて、正門から堂々と中に入る。

唯一の出入り口だからな。本当は不意打ちとかの方が良いのかもしれないけど……ま、相手が強い事には変わりはない。やることだつて一つだ。大差ねえよ。

入って直ぐに、凄まじいオーラを感じる。

聖剣の物だ。というか四本の聖剣が、光り輝きながら浮いている。

その下には魔法陣と、フリードと狩刈と老人。そしてその上には、空中に椅子を置いて優雅に座る墮天使……コカビエル。

それに対峙しているのが木場達なのだが、何でか木場は地面に手をついて何かを嘆いている様子だし、イリナもゼノヴィアも老人の方を非難するように睨みつけている。

「加勢が来たらしいな、聖剣使いに魔剣使い。かといって状況が好転したとは思えないが」

「……部長」

「微力かもしれないけど、主として助けに来たわ。——何より、私達も貴方のやろうとしている事を止めないといけないもの、ねえ？コカビエル」

「はははっ、その瞳、その紅の髪——やはりお兄様に似ているなあ、リアス・グレモリー。見ているだけで反吐が出る」

強い重圧が俺達を襲う。ただ睨まれてるだけなのに、物理的な重圧を感じるぜ。

けど、今大事なのはそこじゃない。見たところ、木場達は無傷みただけけど……一体、何があつたんだ？

「……バルパーから、何か言われたのか？」

「はははっ……さすがだね輪廻君……その通りさ。見てくれよ、この拳大程度の大きさしかない、石を。これがなんだかわかるかい？」

引きつった笑みと共に、大事そうに手に持っている石を見せてくる。

なんだろう。ただのちよつと変わった石にしか見えないはずなのに、今まで感じたことのないようなオーラを感じる。

分からずに無言でいる俺たちへ、木場が震える声で告げる。

「僕の、仲間たちさ。厳密には、僕の仲間たちの命を奪って取り出した、聖剣を扱う為の因子、だつてさ」

「左様。私の実験……聖剣計画は失敗に終わった、ということになってる。だが実際には違う。私の出した結論は、人間は誰だろうと聖剣を扱うために必要な『因子』を持っており、その『因子』が一定数を上回ること、聖剣を使えるようになるという物だ。当初こそ、人の中にある因子を一定数まで引き上げる実験を行なっていたが……その過程でな、死んだ人間から因子を抽出し、それを結晶として固めることができる結論付けたのだ。そしてその結晶を利用することで、第三者が聖剣に適合できるようになれる……あの時実験体を殺したのは、それが真実か否か確かめるためだったのだよ。結果は見ての通り。まあ今となつてはあの実験体どもの結晶は大した力も残っていない搾りカスでしかないが、それでもフリードに聖剣を自在に扱わせることが可能なほどではあつたな」

「そんな……ひどい……」

「酷い？ 酷いのは教会の上層部の連中だ！ 私の実験は成功だった！ それを証明するために実験体を全部処分したというのに、連中はやれ非道だのやれ異端だの言つて私を追い出した！ 何が非道、何が異端！ 聖剣の力を誰もが扱えるようにと最初に命じたのは彼らだというの

に！」

バルパーの言葉に涙を流すアーシアだが、しかしやつは逆上するばかり。

くそつ、なんて身勝手な野郎だ！そのせいで、一体どれだけ木場が辛い思いをしたと思ってるんだよ！

見れば、部長も朱乃さんも不愉快そうにしている。

小猫ちゃんだって、無表情ながら眉をしかめているのはわかるくらいだ。

「聖剣を帯刀するにあたり、教会から与えられた『祝福』…その正体が、聖剣の因子、だったなんてね」

「ああそうだ。それが何より腹立たしい。私の生み出した技術だというのに、私を追い出した後でそれを我が物顔で使うなどと」

ゼノヴィアの言葉にも、やっぱり不機嫌そうに話すバルパー。

どこまでも自己中心的な野郎だ。一発ぶん殴ってやんねえと気が済まねえ。

『悪魔の連撃』を発動し、地面を何度も殴り付けて駆け出す。

すみません、部長。作戦とか、一旦忘れさせてください！

バルパーを殴りつけようと振りかぶった拳は、しかしフリードの持つ槍に防がれる。

……な、なんだよこれ！ただ槍に拳が触れているだけで、なんでこんなに力が抜けてくんのだ!?

「いつひひひひひひ！どうよ墮天使の総督、アザゼル謹製の汎用ドラゴン・スレイヤー龍殺し。その名も『愚かなる老騎士の槍』！人工神器とやらの中で

もより量産が容易く、尚且つドラゴンの力を持つ者に多大なるダメージを与えられる武器！君のサタンだって、悪魔でありながらドラゴンなんて属性もりもりの存在な訳だから……当たったり前のようにダメージ増加つしよー！」

「ど、ドラゴン・スレイヤー!?!」

『不味いゼイツー。』『禁手』が使えるならともかく、使えない今その武器と真正面から殴り合うのは分が悪い。これならまだ聖剣素手で触る方がマシだぜ』

「そんなに危険なのかよ!?ちっ、クソツ!!」

拳を地面に叩きつけて土埃を上げ、その時の衝撃で後方へと跳躍。部長たちの所へ戻り、一度体勢を立て直す。

……『禁手』か。前に一回使った事があるけど、アレは俺の腕を捨てる事でようやく至れた領域。

そりゃ、いずれは好き放題使えるようにはなりたいけど、一朝一夕では不可能だ。

今使いたいのに、どうしても使えない。

——いや、俺がもう一度腕を捨てれば或いは…?

『やめとけ、っていうか必要ねえ』

「は?な、なんでだよ。相手は堕天使のすげえ奴に、龍殺しを持ったフリードに、なんか同じくらい強そうな男で……『禁手』が必要ないなんて事は無いだろ」

『まず戦力差で既にこっちが勝ってるってのはあるが……それよりも、今はお前が力を解除したおかげで、あの木場って小僧が目覚められるかもしれないからな。一旦黙って見守ってやれよ』

「は、はあ?それってどういう……」

サタンの言葉に眉を顰めつつ、俺は木場の方を見る。

会話を聞いていた部長たちも木場へ視線を向けるが、そこである異変に気付く。

——木場の周りに、人影?

どんな顔をしているのかはわからない。どんな服装をしているのかもわからない。

黒い人影が、口元だけ動かして、木場に何かを言っている。

声はここまで聞こえないが、まるで木場を鼓舞するような事を言っている事だけはわかった。

「……みん、な」

涙を流しながら、木場が周囲の影一つ一つに目を合わせ、名前を呼ぶ。

呼ばれるたびに、影たちは小さく頷く。

そうか。アレが木場の、仲間たちなのか。

「先ほどの、サタンの言葉……もしかしたらイツセー君から抜け出た強化分の力が、この空間に満ちる力をさらに増やし、その結果あのよう  
に思念体を発現させることになったのかもしれないわね」

「思念、体？」

『姫島とかいう女の言う通りさ。あの男、バルパーとやらは因子だなんだと言っていたが、あの結晶は言ってしまうえば固体化した魂。神の力の一端である聖剣の光や俺の力……つまり悪魔の力がこうして閉ざされた結界内に満たされれば、物言わぬ魂の塊から意志を持った思念体が顕現できるようになる。——んでもって、何を話しているかはわからんが、あの手の人間ってのは何度も見てきたからわかる。死んだ仲間や、守りたいと願った大切な存在のために戦ってきた奴が、戦う原因となっていた奴の言葉や、遺した意志を手にした時、必ず至ったのさ』

いまいち具体的な事を言わないサタンを他所に、木場は影に話しかけ続ける。

コカビエル達ですら、そこに横やりを入れる事は無かった。

「……ずっと、ずっと悩んでばかりだった。生き延びてしまった僕が、どうすれば皆の為にこの先を生きていけるかと。僕よりも生きていたかった子がいて、僕よりも大きな夢を持っていた子がいて、ソレを踏みにじって生きているのが僕なんじゃないかと、毎日思ってた。本当に、僕はこのまま幸せに生きて、良かったのか……って」

涙をボロボロと流しながら、木場が影たちへ問いかける。

影たちは、口をパクパクと動かして、何かを答えた。

俺には何を言っているのかさっぱりだったが、朱乃さんが教えてくれた。

『良いんだよ。僕たちの事を忘れても、君が幸せに生きてても。過去に  
縋り続ける必要なんて無い。過去に縛られ続ける必要なんて無い。君は他でもない、君なんだから』……と、言っていますわ』

突然、微かに歌声が聞こえ始める。

この歌は……アーシアが歌っていた、聖歌だ。でも不思議と、ダメージを受けない。

それどころか……心が、安らぐ？

部長たちが困惑する中、木場の手に握られていた結晶が、眩い光を放つ。

視界が白く塗りつぶされるが、しかしダメージは無い。

柔らかい、聖なる光だ。悪魔になりたての俺でもわかる。

『さあ、手を伸ばして』

『恐れず、聖剣を受け入れるんだ』

『僕たちの力があれば』

『私達と力を合わせれば』

『君はきつと、聖剣だって使いこなせる』

「ああ、そうだ——。僕たちは、例え直接会えなくたって、離れ離れ

だとしたって、その心だけは——」

『『』 いったって ひとつだ 『』』

何も見えない光の中。

確かに聞こえたのは、木場と、その仲間たちの声。

そして俺は見た。見えないはずなのに、この目で見た。

木場が、一本の剣をつかみ取る瞬間を。

『セイクリッド・ギア神 器 』ってのは、所有者の心によって変化する。心の変化が大き

ければ大きいほど、神器は相応の反応を示すのさ。そして、今木場祐斗に起きた変化は、ある変化を引き起こすに足るモノだった。神器の力を、世界の理に反した禁じられし忌々しきモノへと変える、そんな変化をな』

「……まさか」

『ああ、そのまさかだ』

サタンが愉快そうに言う。

それと同時に光が収束していき、木場の手の中へと消えていった。

その手には、一振りの剣。

今まで通りの魔剣……それと同時に感じる、光の力。

——そうか。アレが木場の……！

『バランス・ブレイカー禁 手 』『ソード・オブ・ビクトリアー双覇の聖魔剣』……聖剣の力と魔剣の力。二つを合わ

せたのが、今の僕の——いや、僕たちの力だ!!」

ソード・オブ・ビトレイヤー。

そう呼ばれた剣は、聖と魔の入り混じったオーラを、まるで心臓が鼓動するかのようなりズムで放つのだった。

「——ちいつ、なんだなんだよなんですかあ!? そのそーどおぶなんちやらつてのはよオオおおおつ!! くつそ、俺っち戦場でドラマチツクな真似する奴や歌を歌うヤツが大ッ嫌い。その上聖歌なんて聞いた日にや怒りで震えて涙が止まりません! つつー訳でバルパーのじつちやん! 聖剣、もう完成してるっしょ。俺っちに使わせてプリーズ」  
「…ああ、構わんさ。私の愛した聖剣が、あのようなイレギュラーに負ける事はありませんと、示してくれ」

いつの間にもやら一本の剣になっていたエクスカリバーを、フリードが手に取る。

「…：おかしいな、本当だったらあの剣相手にするなんて…：つつて俺も加勢しちまうとこだけど、今は全くそんな心配が起きねえ。」

寧ろこれは邪魔しちやだめだと思ってる。ここは、黙って見てるべきだつて。

「やつちまえ、木場。お前と、お前の仲間ならできるさ。きつとな」

「…：ファイト、です」

「祐斗君なら、必ず!」

「そうよ祐斗! その力、存分に見せつけてやりなさい!」

輪廻達が、木場に声援を送る。

負けじと俺も何か言おうかと思うが、ここは敢えて何も言わない。

…：俺は、終わった後に真つ先に声をかけるとするさ。

木場は一度目を閉じ、そして聖魔剣を構える。

相手は聖剣。四本が一本になったつてのは恐ろしい話だが、だけどきつと大丈夫。

木場と仲間たちの剣は、決して折れない。

「——改めて名乗ろう。僕はリアス・グレモリー様の『騎士』<sup>ナイト</sup>、木場祐斗。この聖魔剣で、その聖剣——<sup>越えさせてもらう</sup>破壊する!!」

「しやらくせええええつ!!」

聖剣と龍殺しを持ったフリードが、木場に先手を打つ。

しかし奴の攻撃はするりとかわされ、お返しとばかりに木場が攻撃。

その動きは、部長の婚約破棄をかけたレーティングゲームに臨む際の修行で、輪廻からたたき込まれていた動きだった。

……完全に吹っ切れた、ってワケね。

剣戟が続く。

続くと言っても殆ど一方的だ。フリードは光の力を上手く利用しているみたいだけど、それよりも木場の方が圧倒的に上手だ。

そりやそうだよな。ただの道具として聖剣を使うフリードが、仲間たちとの絆によって手にした聖魔剣に勝てるわけねえ。

その状況を見たバルパーが、半ば半狂乱になりつつ狩刈へと声をかける。

「か、狩刈！お前も加勢し、あの聖魔剣使いを殺せ!!」

「ほいほい、っと。ああいうのは見てるだけが一番なんだけどねえ

……ま、悪いなフリード。躍起になるとこ悪いが俺が全部持つてかせてもらう——っと?」

「邪魔立てはさせないさ。今の彼の敵は、聖剣ただ一つ……だからね」

金棒を構え、攻撃を仕掛けようとした狩刈の前に、ゼノヴィアが立ちふさがる。

だが無茶だ。アイツは聖剣を奪われてるはず。

勿論狩刈もソレをわかっているため、小馬鹿にするように問いかける。

「お前が？俺の相手を？聖剣がなけりや、力を持たねえただのキリシタンだろ。言っておくが、鬼は祈りを捧げたって苦しまねえし、その上俺は頸を切るだけじゃ死なねえぞ?」

「日本の魑魅魍魎には生憎と詳しくないが、まあ私とて愚直に前に飛び出した訳じゃない。——我が声に応えよ、デュランダル」

ゼノヴィアの声に呼応する様に、アイツが手を伸ばした先の空間に穴が開く。

そしてそこから出てくるのは、底冷えするような強い光のオーラを纏った剣。

…デュランダル？ゲームかなんかで聞いたことあるような…？

『はははっ、あの女、まさか天然の聖剣使いか。しかもよりによつてデュランダルとはな。あの暴れ馬を御せる程の実力があるとは思えないが…はてさて、どう扱う？』

「面白がっているようだが、生憎と使いこなせているわけでも何でもない。私はただ、力任せに振るう事しかできないさ。まだまだ修行中の身なのでね、そこはご愛敬、つてやつさ。——だけど、鬼一匹と対峙するくらいなら、力不足に悩む事も無いはずだ」

「……ははっ、そこまで実力差がわかってねえと笑えるぜ。俺は鬼の王。そんでもって『夢幻人』の幹部。流石に意地つつーか、見栄つつーのがあるからさあ……ま、久しぶりに生娘黽つてお楽しみと行こうかア!!」

狩刃の金棒とゼノヴィアのデュランダルが交差する。

それだけで物凄い暴風が俺達を襲った。

一度衝突しただけで、余波がこんだけ来んのかよ！恐ろしいぜ、どつちも！

「ははっ、僕の聖魔剣よりも強い光のオーラ、か。だけど、こっちは聖なる力だけがウリじゃない。魔の力と聖の力が入り混じり、相乗効果で最強になる。——さ、そろそろ終わりにしようか。はぐれ神父フリード」

「だああああ!!さっきからムカつくんですよ、テメエはよおおっ!!ちよこまか避けてチビチビ攻撃してきやがってさあああっ!!」

「安心すると良い。もう君が怒りに苦しむ事は無いからね。——黒く輝け、聖魔剣よ!!」

刀身から光と闇のオーラが噴き出す。

二つの相反するはずのオーラは、螺旋を描くようにまじりあい、そして一つになる。

凄い力を感じる！あれなら、きっとフリードの持つ聖剣だって！

木場が剣を振り下ろし、フリードは槍を投げ捨て、エクスカリバーで応戦する。

そして刀身が衝突し、甲高い金属音を立て——。

エクスカリバーの刀身が、ちょうど半分の部分で折れ、吹き飛ばされた。

木場と仲間たちの剣が、エクスカリバーを超えたのだ。

「く、そ、があああああつ!!なんつでだよおかしいだろがよおっ!なんで俺のエクスカリバーが、最強の聖剣が、折れてんだよおおおあああああつ!!」

「所詮はかつての大戦で本来の力を失った剣。僕たちの想いを碎くには、まるで力不足だっただけだ。——さあ、君も……お休み」

優しく告げて、フリードを袈裟斬りにする。

鮮血が舞い、アイツは白目を剥いて倒れた。

後には、残心する無傷の木場。

完全勝利とは、まさにこのことだろう。

「ば、馬鹿なつ、馬鹿な馬鹿な馬鹿なツ!!四本の力を一つに統合した、エクスカリバーだぞ?!それが、あんな呆気なく折られて良いはずがない……!!」

「次はお前だ、バルパー。もう復讐心も、憎悪に駆られる事も無いが……それでも、お前が生きていけばこの先も必ず、僕たちのような被害者が生まれるはずだ。だから、ここで斬る」

「被害者?たわけた事を抜かすな。私の研究の実験体となれることが、一体どれほど栄誉ある事かわからんか!聖剣だぞ。神が、星が、世界が!人間に与えた形ある奇跡を、扱えるようにする実験だぞ!多少の犠牲程度で喚くとは、狂っているのはそちらだろう!!——そもそもなんだというのだ。聖魔剣だと?聖と魔のバランスが乱れている事は既にコカビエルから伝えられてはいたが、まさかこのような事象に繋がるとは……ふん、神も魔王も死したこの世界は、つくづく私の邪魔ばかりする」

「な、に?」

さらっと口にされた言葉に、俺達は耳を疑った。

魔王が死んだ。この話は部長から聞かされていた。

四大魔王が、かつての戦争で皆死に、その後を継いだのがサーゼクス様達だと。

けど、神？ 比喻でも何でもなく、きつと…神様の、事だよな？

それじゃあつまり、アーシアや…イリナや、ゼノヴィアが信じてきたモノは？

木場や、その仲間たちが信じてきたモノは？

「ふむ。その様子だと知らなかったようだな。——コカビエル」

「ああ。構うまいよ。別に話した所でコイツ等が死ぬことに変わりはない。この国の言葉を使うなら、冥途の土産、と言ったところか？ くつつ、そうさ。先の大戦で、三大勢力はどれも痛手を負った。俺達墮天使は最大のウリだった数を失い、悪魔は四大魔王を、そして天使は神を失った。だから今までは、この三竦みじや睨み合いが続いていたわけだが…俺は、それが耐え切れなかった。なぜ勝敗も決まっていない戦争を、こんな形で終わらせようとする？ おかしいだろう。この戦い、あのまま戦っていれば俺達の勝ちだった。だというのにアザゼルですら戦争はもうしないと宣言始末だ！ だから今日、俺は戦争の火種を手に入れる。悪魔や天使を、再び闘争の渦へと巻きこんでやるのさ！——内部分裂の激しい悪魔と、神を失い数を増やすことのできないばかりか、その力の大半が世界中に散ってしまった天使を滅ぼし、俺達墮天使が頂点へ至る!!」

両手を広げ高笑いをしながら、コカビエルは言い放つ。

…アイツ、本当にただ戦争をするために…そのためだけに、この町の皆を殺すとか言ってるのか…!?

怒りで振るえそうになるが、暴走しかけた俺の思考を、アーシア達のすすり泣く声が冷静にしてくれた。

…そうだ。アイツ等にとっては、信じていた神がいなくてのは…

「主が、主が既に、死去していた…だど？ なら、私は、私達は今まで、何を信じて…？」

「うそ、嘘よそんなの！ 我らが主が、死んでいる、だなんて…!!」  
ゼノヴィアが俯き、イリナが嘆く。

その姿をコカビエルは一瞥し、狩刈へと声をかけた。

「そのこのデユランダル使いは放っておいて良い。心の柱を失った奴

は、置物にしかならん」

「へいへい……つたく、ようやく温まってきたつてのによー」

「まあそういうな。——さてバルパー。術式の方は後どれくらいだ？」

「どれだけ遅くとも、後十分もすれば発動する。この町は、一瞬にして地図から消えるだろうさ」

「そうか……なら、お前らを甚振って手慰みとしようか!」

コカビエルが手を横薙ぎに振るう。

その瞬間、俺達を凄まじい衝撃波が襲った!

光の力が含まれているのか、全身が熱波に襲われているかのように痛い!

わかつちやいたけど、やっぱりコカビエルは強い。この一撃だけで、力の差がわかつちまうほどに。

でも負ける訳にはいかねえ。この町は消させねえし、戦争だつて起こさせねえ。

——つてか、イリナとゼノヴィアは!?

あの一撃を一番近くで無防備のまま受けるなんて、流石にまずいんじゃないや……

「ほう。お前が動いたか。立神輪廻」

「……イリナ、ゼノヴィア。それにアーシア」

コカビエルに名前を呼ばれるも、輪廻は無視してイリナ達へ声をかける。

その手には大きな黒い布が握られている。もしかして、あれも神器か?!

というか、なんでアイツの名前をコカビエルが知つて……

「神がいなくて、辛い気持ちはわかる。俺とて信じるモノが、己の精神的支柱が最初から無かつたとしたら、そんな風にもなるだろうからな。——けど、その上で言わせてもらう。何を嘆く必要がある?」

「……輪廻、さん?何を言つて」

「嘆くに決まっているでしょう!?!私たちのずっと信じてきたモノが、敬愛してきた主が、死んでいたのよ!?!」

「信じてきたものを失ったというのに、嘆かないはずがないだろう」「だろうな。けどお前らは少し間違ってるぞ?——お前たちは、今まで神の何を信じてきた?」

コカビエルが光の槍を投擲する。

ソレを黒い布で受け流し、まるで闘牛士のように堂々と立つ。

その間も、ずっとアーシア達に語り掛けていた。

「その存在か?確かにそうかもな。けどお前らが信じてきたのは、神の教えだろう。聖書とはそういうものだし、信仰するのはそういうものだ。だってお前ら、神に会ったことがあるから信じているわけじゃないだろう?結局、神が居ようがいまいが、信じるべき教えってのは、こうして残ってるじゃねえか」

「…それ、は」

「なら……なら一体、誰が私達を救ってくれる!?迷える私達に、一体誰が愛を注いでくれる!」

ゼノヴィアが激昂する。

それでも、輪廻は飄々とした態度のままだ。

……コカビエルの攻撃をずっと受け流し続けてるってのに。

もうアイツ一人でいいんじゃないかな。

魂の叫び、とすら思えるほど感情的な問いかけに、しかし輪廻はあっけらかんと答える。

そんなの簡単だ、と言わんばかりに、さらっと。

「そんなの、俺がやってやるよ。助けて欲しいなら助けてやるし、望む事があるなら、できる範囲で力を貸す」

「んなつ……そ、そんな無責任な言葉を、信じろ、と?」

「勿論、こうして鼓舞しちまった以上、責任はとるさ。微力かもしれないが、俺の力で良けりやいくらでも貸してやるよ。——ドライグ」

『おう相棒。ははっ、久しぶりだな、こうして人前で見せるのは。復帰戦が聖書に記された墮天使ってのは、なるほど俺達には丁度いいな』

輪廻の右手から声が聞える。

どういう原理で聞こえているのかはわからないが、とにかく威圧感のあるというか、偉大さを感じる声だ。

そしてその声と名前に、コカビエル達が反応を見せる。

「まさか、正体を明かすつもりなのか？今まで隠してきたらしいが」

「ああ、そのまさかだぜコカビエル。それと『夢幻人』……お前らの宿敵の力、龍帝の力を見せてやる」

輪廻が右の拳を突き出す。

それと同時に、凄まじいオーラが噴き出した。

まるで、天に昇って征く龍のようなオーラだ。

突き出された右手に、赤い籠手のようなモノが装備される。

あれも輪廻の神器か！

手の甲部分の宝玉が点滅し、さらにオーラが増幅。

「さあ、行こうぜドライブグ！バランス・ブレイク禁手化ツ!!」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!』

会長たちの張っている結界を破壊する程の力が爆発し、輪廻が赤い光に包まれる。

現れたのは、赤い龍を模した全身鎧。

強大な『力』の塊が、そこにあった。

「改めて名乗ろうか。——俺は立神輪廻。今代の赤龍帝にして、無限の龍と並ぶ者だ!!」

ずっと謎だった今代の赤龍帝が、確かにそこに立っていた。

## 今代の赤龍帝

砕けた結界が光の粒となって降り注ぐ中、俺達は呆然と輪廻を見つめていた。

——赤龍帝。今代の、赤龍帝。

俺達が夢幻人から命を狙われてきた原因であり、今までその正体が何らわからなかった存在。

それがまさか、輪廻だったなんて。

「今代の、赤龍帝……まさか、輪廻さんが……！」

「ははっ、ようやくお出まして訳か。良いぜ良いぜ……楽しませてくれよッ!!」

好戦的な笑みを浮かべながら、狩刈が輪廻に肉薄し、金棒を振り下ろす。

ソレを輪廻は何てこと無いように左手で受け止め、右の拳で鳩尾を殴りつけた。

ここまで衝撃波が来るほどの一撃を受けて、狩刈は体をくの字に折り曲げて、校舎まで吹き飛んでいってしまう。

「す、すげえ」

「さーってドライグ。別に必要ないけど、せっかくだから使うとしようぜ」

『了解だ相棒』

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost』

宝玉が点滅し、輪廻から感じる力の波動がさらに強くなる。

校舎の窓ガラスが割れ、木々が折れ、暴風が吹き荒れる。

——こ、これが赤龍帝の力!?

サタンの話だと、白龍皇が相手の力を半減させて我が物にする力で、赤龍帝が力を倍加させ、他者へ授ける力を持っている……だったはず。

今の一瞬で、どれくらい強化したんだ……!?

「コカビエル。お前は確か、戦争がしたいんだっけな。そのためにこ

の町の人を殺すとも、言つてたつけか?」

「ああ、そうさ。他者を思うがままにできる程の暴虐的な力を持つ前ならわかるだろう?己の力を振るう事の楽しさを。命を奪い、奪われるあの空間こそが至福だと!」

「まあ、確かに力を使つてすげーすげーと言われるのは好きだけど、ソレで人をどうしようという気持ちまではねえな。——ま、取り敢えず発動しそうだった魔法はかき消しておいたから」

「何…?バルパー、それは本当か?」

「あ、ああ。突然、発動直前だった魔法陣が、跡形も無く」

魔法を、かき消した?町を一つ消すつてレベルの魔法を?

な、なんだかスケールが違い過ぎてついて行けなくなってきたけど…つてか俺達、ここに突っ立つてていいのか!?!余波で死んじやわないか!?

『レボリユーションナル・スベルブック』

『「反魔の万能書」』つて言つてな。相手の魔法の反対魔法を発動し

て、その効果を無力化する神器だ。どんな魔法だろうと、コレの前には無力。——さあ、来いよコカビエル。聖書に記された墮天使とは、実はまだ一度しか戦った事が無いんでな。正直、期待してるぞ」

「ふざけたことを…!!だがいいだろう、お前をここで殺せば、俺が最強だツ!!アザゼルにもシエムハザにも、舐めた口はきかせねえ!」

光の槍を投擲するコカビエルの背後に、輪廻が突然現れ拳を振るう。

数秒遅れて音と爆風が俺達を襲う。

「は、速い…!目で追えなかった」

「…なるほど、輪廻はアレを隠してたつてワケ…:イツセー。一応聞  
くけど、貴方は知ってた?」

「い、いえ。俺もずっと知らなくつて…:まさか、アイツが赤龍帝だったなんて」

コカビエルが、まるでサンドバッグのように殴られていく様を、俺達は黙つて見ていた。

あんな強そうだったコカビエルが、まるで玩具みたいに。

——輪廻の強さは人間の範疇を超えてる、とは前々から思つてたけ

ど……まさか、赤龍帝だったなんてな。

無限の龍神とやらに喧嘩を売って勝ってみたり、過去と未来を行き来してみたり、なんでもありな赤龍帝が、輪廻だったなんてな。

「久しぶりにご主人様が戦ってる所見たけど、やっぱり強いにゃー」

「姉様は、知ってたんですね」

「ま、ご主人様が言わなかったら、一応私も黙ってたにやん。——にしてもコカビエルも可哀そうにねえ。七回も倍加したご主人様相手に戦えるほどの力はなさそうだけど」

「七回……って事は、128倍？あの修行中に見た力が128倍になってるだなんて、なんだか笑えないわね」

笑えない。確かにそうだ。

実際、今の光景も輪廻が圧倒しているだけにしか見えない。

俺、一応ここに来るときに決死の覚悟をしたはずんだけど。なんでこんなワンサイドゲームを見るだけになってんの？

「どうしたコカビエル。これじゃ狩刈と同レベルだぞ？それだったのに、戦争やるとか俺は最強だとか言ってたのか？俺なら恥ずかしくて家から出れなくなるレベルだぞ」

「火炎息!!」

校舎の方から、突然火柱が噴き出し、輪廻を襲う。

この感じ、魔法じゃない。どちらかというところ……黒歌さんの仙術に似てる。

瓦礫から出てきたのは、狩刈だった。

瓢箪に口をつけ、何かを一気に飲み干している。

「ははっ、油断したな赤龍帝。俺はまだ負けちゃいない」

「別に、なんのダメージも無いが……それが切り札だとも?」

「いんや。妖術はあくまでおまけだよ、おまけ。俺はどっちかつつーと自分で殴ったりする方が好きなんだ。けど、今ので隙ができたろ」「死ねっ、赤龍帝ええええっ!!」

動きの止まった輪廻に、コカビエルが光の槍を突き刺そうとする。

レイナーレのソレを大きく上回る力を感じる槍が、輪廻の鎧に触れて——砕けた。

後、ついでとばかりに輪廻から感じるオーラがさらに膨れ上がった。

でたらめすぎる。

「は、はあっ!?!」

「俺が時間を操作できるってのは知ってるだろ? ソレさえ使えば、一瞬で無制限に倍加できるんだよ。で、強くなった俺のオーラを、お前の槍じゃ貫けなかったってワケ。——ただ二人同時に相手は確かに面倒だな。ドライブ」

『行けるぜ相棒。久しぶりの『龍帝武装』ドラゴニック・ウエポン、見せてやろうじゃないか!』

「何をするかわからねえけど、黙って見てるなんて優しい真似しねえぞッ!!」

狩刈が金棒を振るう。

衝撃波が目に見える波動となって、輪廻を襲う。

しかし、輪廻は左手をそちらに向けるだけだ。

『Change Shield weapon!!』

波動が、突然現れた半透明のエネルギー体によって防がれる。

輪廻を包み込むように、黒色の球体が出現していた。

左腕の籠手部分も、なんだか少し見た目が変わっている。まるで、盾を装備しているようだ。

『龍帝武装』ドラゴニック・ウエポン。禁手の力に手を加えて生み出した能力。両手両足のアーマーを武器や盾等に変化させることができるんだが……一部モジュールには、俺の持つ他の神器の力も含まれていてな。この盾は『四神玄武の大盾』アーク・ウォールって神器の力が入ってる。ま、名前の通り四神の内一つである玄武の力を持った、守り特化の神器だな」

「……龍帝のみならず、四神にまで手を出したってか」

苦々しそうに狩刈が言う。

正直ピンと来ないが、まあ取り合えず凄い存在の神器を持つてるって事だろう。

「一応、この盾は空気中の水を集めて作ってるモノだから、壊そうと思えば壊せるぞ。——まあ、それ以前に俺が攻撃の暇を与えないけど

な」

『Change Blaster weapon!!』

今度は右手が、まるでカノン砲のようになる。

左手に盾。右手に砲口……なんだろう、鬼に金棒って、多分こっちに言う言葉だろう。

一応狩刈も金棒を使ってるし、鬼族の王とか名乗ってたけど……確実に手に負えなくなった感があるのは輪廻だ。

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!』

「なっ、このオーラの量と力……!!魔王級なんてレベルじゃない!下手すれば、この町が消し飛ぶわよ!」

「あー大丈夫ですよ部長。俺も考え無しじゃないんで。——一度壊れた物は、後で戻せば問題無しってね!」

ソレを考え無しって言うんだよバカ輪廻!!

そう叫ぶが時すでに遅し。

途轍もないオーラが砲口に圧縮され、そして解き放たれる。

『Longinus Smasher!!』

「消し飛ベツ!!」

極太の、真っ赤な光の柱が、砲口から飛び出す。

今すぐにこの場を逃げたくなるような恐怖心を覚えるが、光の柱が飛び出した際に、黒いドームが俺達を囲うようにして守ってくれた。

……ってか、このドームって輪廻がさつき使ってた、玄武ってヤツの盾?

「覇の力を禁手で扱うだと……ッ!?くそっ、『ランス・オブ・ドーン・キホーテ愚かなる老騎士の槍』、疑似

禁手!!」

「やみたがえ闇違え」

極光が二人を襲うが、それぞれが無理矢理回避する。

コカビエルは、フリードが持っていた槍を使い。

狩刈は、全身を足元の影の中へと沈ませて。

——ってか、バランス・ブレイカー?アイツも禁手を使ったって事

か？

でも、なんかプロビジオナルとか言ってたような。

「へえ、上手く避けたじゃねえか。ただ、かなり持つていかれたようだがな」

「……余波だけで、腕を失う羽目になるとはな……ははは、どれだけ規格外の存在なんだ、コイツは。仮にも龍殺しの力を持つ神器だぞ。複製品とは言え、ソレを防御性能に特化させた疑似禁手を使ってなおこのダメージか……！」

「この場から一瞬で離脱して地球の裏側まで逃げたらまた違っただろうが、そんな真似はできないだろう？ま、もう一発受けりやお前は退場だろうが——っと、狩刈の方は無傷だったのか。だからって俺のすぐ近くに来るのは悪手だと思うが？」

「ちっ、これのどこが無傷だよ。腹にでっけえ傷作りやがって……忌々しい野郎だぜ、赤龍帝。だからここで、俺が殺してやる！陸を碎き海を割き天を穿つ、鬼の一撃を喰らいやがれっ!!」

狩刈が金棒を振るう。

今までで一番力の入っている攻撃だ。もし仮に俺達が喰らおうものなら、即死だろう。

しかし、輪廻は全く危機感を覚えている様子ではない。自然な動作で左手を前に出し、バリアを展開する。

『BoostBoostBoost!!』

「く、だ、け、ろおおおおおおあああああッ!!」

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!Transfer!』

火花を散らして拮抗していた金棒とバリアだったが、勝負はバリアが突然分厚くなり、何重もの壁になった事で終わりを告げた。

今のが、譲渡の力か。

バリアに倍加分を譲渡した結果、厚みも数も増えたって事ね。

サタンから話を聞いた時は、赤龍帝は他人の力も借りる前提の戦いを強いられる物かと思ってたけど……自分の他の手札を強化する事もできるわけだから、全然単騎性能も強いのか。



の他の幹部か。

警戒する俺達の目に映ったのは、夜の闇とは対極的な、白。

真っ白い全身鎧と、輝く翼だ。

「白龍皇か。お前が墮天使側なのは知っていたが、まさか夢幻人を庇う真似までするとは思わなかったな」

「別に、ソイツを助けようと思ったわけじゃない。アザゼルの命令でね。実質離反したコカビエルと、一緒になって行動していた夢幻人幹部の伊吹狩刈、はぐれ神父のフリード・セルゼン、聖剣研究の第一人者バルパー・ガリレイを生きた状態で連れてこいと言われているんだ。だから、任務達成のためにもソイツを殺させるわけにはいかない」

「——嫌だ、つつつたらどーすんだ？」

ゾワツ、と鳥肌が立つ。

相変わらず殺気だとかが恐ろしい野郎だ。改めてアイツとは敵対したくない。

つてか強化分がそのままだから、さつきからずっと重圧が。

威圧するように問いかけた輪廻に、白龍皇と呼ばれた男は鼻で笑って答える。

「その時は仕方ないさ。元々、アザゼルの命令と言ってもさほど結果には期待されてない。現地に赤龍帝がいる事は既に知っているからな。その友人知人を巻き込んだ事件を起こそうとしたコカビエルとその一味が生きているとしたら、それこそ奇跡だ、とか言っていたよ」

「…そうかい。お前は生粋のバトルマニアだと聞いていたが、意外と理性的なんだな。今の質問と同時に攻撃してくるつもりでいたぜ」

「いや、そうでもない。俺が今抑えられるのは、どうせすぐにでも再会する事になるからだ。——だろう？ 歴代最強にして、世界最強の赤龍帝君？」

「そういうお前は歴代最強の白龍皇だろうが。才能含めてな」

「はははっ、かの赤龍帝からそこまで褒めてもらえるとは、つくづく光栄な限りだ。——さて、大人しくすれば、俺から攻撃する事は無いぞ。大人しく着いてくるなら、沙汰を待っただけで良い……どうする？ コカ

ビエル、伊吹、バルパー」

冷たく問いかける白龍皇に、狩刈とバルパーは大人しく引き下がる。

片方は、今の自分と相手の力とを比較して負けを認めただからで、もう片方は元々抵抗しても何の意味も無いからだろう。

だが、コカビエルは違った。

うわごとのように何かを呟きながらフラフラと動き、そして半狂乱になって槍を生み出す。

「黙れ、黙れ黙れ黙れ！俺は負けていない。俺が最強なんだ。二天龍がどうした、アザゼルがどうした！関係ない、俺はこの町を消滅させて、戦争を、再び起こすんだ。戦火を三大勢力から、その他の勢力へ広げて見せるんだ。——俺は…俺の野望は、まだ始まってすらいらないんだあああああつ!!」

「やれやれ。忠告はしたんだけどな」

光の槍を回避し、白龍皇はコカビエルの懐へもぐりこんで……次の瞬間には、コカビエルは地面に叩きつけられていた。

腕を一本失っているとは言え、十枚の翼をもつコカビエルが、目で追えない速度で呆気なく。

『Divide……Divide……Divide……!!』

「これくらい力を奪っておけば十分だろう。——さて、帰るとするか」  
『待て、ヴァーリ。少し赤いのと話がしたい』

宝玉が点滅し、赤龍帝やサタンのように声を出す。

あれが白龍皇。うーん。赤龍帝と言い、なんで渋いカッコいい声なんだらうか。

サタンだつて結構イケボだし。

アレか。神器に封印されるくらい強い奴つてのはイケボなのが前提条件なのか。

『ほう、お前から声をかけてくるとは珍しいなあ、白いの』

『そうでもない。二代前の時も私からだつた』

『そうだっけなあ。俺にとっては、かなり昔の事だ。今の相棒になつて、もう何百年も経つたからなあ』

『……まったく。時を操る魔法を生み出し、ソレすら己を高めるために使うとは……ヴァーリもヴァーリで変わった男だが、そちらはもつと変わっているな』

『ははは。だが変わり者つてのは存外悪くないものだぞ。そうでも無けりゃ、お前と会って真つ先にあんな事を考えて実行して見せようとはしないはずだ』

『……アレは、私にとって忌々しい出来事だ。あまり口にしないでもらおう』

『そうかいそうかい。悪かったな』

意外と仲良さそうに話すドラゴン二人に、俺は内心首を傾げた。

だって、この二人のドラゴンがとんでもない喧嘩を始めたせいで、三大勢力の戦争は中止になったって話だ。

てつきり、神器になつても険悪なままだと思つてた。

……つてか、何百年？輪廻の神器になつてから何百年もつて……いや、魔法で時間を操れるようになってのがあるんだろうけど、それはそれで規格外だなあオイ。

『今代は、互いに最強の宿主……そうだな？』

『ああ、そうだな……つまり、ここでの決着が、俺達の戦いの終着つて事になる』

『この先の結果がどうあれ、今代の戦いを上回る戦い等、きつとできぬはずだからな。——今代の赤龍帝よ。立神輪廻と言ったか？久方ぶりだな』

『一回会っただけなのに、覚えてるとはな。あの時は名乗つて無かつたっけ？』

『ああ。だが今はそれはどうでも良い。——かつての宿主と貴様に挑んだ時は、こちらが辛酸を舐める結果に終わった。しかし、今回は違う。才覚に恵まれたヴァーリに私が直々に指導を行ったが故、その力は以前とは比べ物にならない物となった。つまり、負けは無いという事だ』

「へえ……『覇』も、使いこなせるのか？」

「生憎と、そちらはまだ整備中だな。——だがまあ、先程君の力の一端

を見て確信したよ。勝てない相手じゃない。油断も遊びも無しの本気なら。覇を利用した最大限の力を惜しまず振るえば、必ず勝てる：とね」

自信満々にそう言い切ったヴァーリという男に、輪廻は黙ったままだった。

……マジかよ。あの輪廻に勝てるって…じゃあ、アイツも無限の龍神ってヤツに勝てるレベルって事なのか？

なんつつーか…突然俺の周りでもんでもないパワーインフレが始まったような気がする。

木場の禁手化が聖と魔の融合だったのも驚きだけど、赤龍帝とか白龍皇とか、スケールがデカくなり過ぎたような。

『では、また会う時を楽しみにしているぞ。赤いの。そして立神輪廻』『あばよ白いの。それとヴァーリ』

魔法陣を展開し、消えていくヴァーリ。

後に残ったのは、ボロボロになった学園と、立ち尽くす俺達。

そして、鎧を解除して大きな伸びをしている輪廻だけだった。

※――

「ねえ、ゼノヴィア。本当に…その、ソレで良かったの？」

「ああ。無論信仰心そのものは失っていないが…主のいないこの世界で、今私が望む事は、彼の近くにいる事だからね。――どちらかというと、イリナがついてこない方が驚きなんだが」

「…私は、信仰を捨てる事は勿論、教会を離れるなんて事も出来ないわよ。ここが、私のいるべき場所だから。――聖書も十字架も、全部返したんでしょう？ だったらもう、貴方は部外者って事になる」

「そうだね。…短い間だったけど、イリナ。君と一緒に戦えてよかった。もしかまた会う事があれば、その時はよろしく」

「ええ。――って、言いたいんだけど。言いたいんだけどお願いしたい事があってね？ いやその。敬虔な信徒としていかなものとは思うんだけど、定期的に『今日の輪廻君』って報告を」

「自分で電話でもメールでもすれば良いだろう」

「そ、そんなの恥ずかしくってできる訳ないでしょ!? 電話かけても、

あ、今日いい天気だったねーくらいしか会話できないわよ私！」

「……はあ。なんだって私の元相棒はこんな……」

「何よ溜息なんかついちゃって！っていうか、輪廻君はその……赤龍帝様、だったじゃない。信徒的にも恐れ多くて話しかけにくいわよ」  
「彼がそういうのを気にするタイプとは思えないけどね。——まあ、考えておくよ。だができれば自分から連絡してみると良い。多分、彼はそちらの方が良いと思うはずだよ」

「うう……とにかく。今まで、ありがとね？日本でも、その……頑張るのよ」

「そちらこそ。主の不在を知りつつ、ソレを知らぬ信徒たちと共に過ごすのは大変だろうが……負けるな」

※——

「……やあ、輪廻君」

「珍しいな、小猫じゃ無くて木場が来るなんて。ここは俺の特等席なんだけど……アレか？屋上は立ち入り禁止です、だなんてつまらん校則振りかざしに来たんじゃなからうな」

「ははは、まさか。どちらかというと、僕も悪い子側……かな？」

にやりと笑って、木場は俺の隣に来る。

聖魔剣を手にして、今まで通りの爽やかイケメンに戻った訳だが、なんだか最近距離が近い気がする。

小猫程とは言わんが、確実に今までより近い。

その、そういう趣味の人を否定はしないんだが、俺はそういうのノーサンキューなタイプなんで。すまんね。

「……ずっと、言いそびれてたからさ。ありがとうって。イツセー君や君の力があって、僕はあるの一件を乗り越える事が出来た」

「イツセーや小猫はともかく、俺は別に何もしてねえよ。動いたにしても、小猫から何か言われたい限りはそつとしておくつもりだったしな」

「けど、結果として君は動いてくれたし、君がしてくれた助言が僕の助けになっていたのも事実さ。ここは素直に礼を受け取ってくれないかい？」

大きく息をして、渋々と頷く。

：まったたく。コイツは結構我が強いというか、中々曲げない所があるんだよな。

空を眺めながら、ふとあの後の事を思い出す。

念には念を、と力を無駄に倍増させて攻撃しようとした俺に、ヴァーリが介入してきて：で、その後特に何をするでも無く帰って行ったから、俺も禁手を解除して。

終わったぜー、と部長たちの方を見たら、まあ何かもの言いたげな顔をしておらっしゃったわけだ。

その後、本当に大変だったなあ。

質問攻めにして来る部長とアーシアに、目を輝かせて「貴方が赤龍帝様だったのね！」とテンションが急上昇したイリナに、お前もつと早く言えよと言ってきたイツセー。

全員を宥めるのに、かなり時間がかかった。

その間、唯一俺が赤龍帝だという事を前々から知っていた黒歌は助けてくれること無く面白がって外から眺めてくるだけだったのがまた大変だった。

少しくらい手伝ってくれても良かったと思うのよな、俺は。

「……しかし、まさか君が赤龍帝だなんてね」

「いつまでその話してるんだよ……確かに色々やって来たけど、人間やろうと思えばできる事だし。そんな大層な存在じゃねえのよ俺は」  
「時間を支配し、無限の龍神を倒したっていう君が？」

「それ、デマだからな。時間を支配しつつも片手間で操作できるのは一時間の範囲だし、無限を倒したってのも嘘だ。正確には引き分けだったの」

「……それでも十二分だと思っただけだな……」

そうでもない。

この世界はパワースタイルの世界だ。どれだけ強くても先が無い。

一応俺が知る時点での作中最強の存在である全盛期オーフィスに喧嘩を売っては見たが、もしかしたらこの先もっと強い奴が現れる可能性だって無いわけではない。

今は最強かもしれない、なんてのじゃ足りないのだ。もっともっと強くならなければ、俺みたいなポツと出の赤龍帝モドキに居場所はない。

…俺とて一応性欲は強い自信があるが、イツセー程のおっぱい星人でも無ければ、眼鏡越しにスリーサイズを測る事も、一瞬の隙も逃さずにパンチラ盗撮できるような能力も無いのだ。

ことエロスに関しては、変態三人組の下位互換といえよう。

「あの白龍皇がどれくらい強いのかもまだまだ分からないし、油断はできないって事だな。——さ、そろそろ昼休みも終わりだ。戻ろっぜ」

「そうだね。——ねえ、輪廻君」

「おん？」

木場に呼び止められ、ドアの前で立ち止まる。

少し声のトーンが低い。真面目の話だろうか。

「……君は、味方なのかい？」

「逆に、なんで敵だと思うんだよ」

聞き返した俺に、木場は険しい顔のまま黙り込む。

いや、真面目になんで？俺何か悪い事しました？

……やれやれ、答えない限り何も言われないパターンですか。

「……はあ。別に敵対する気なんてねえよ。つてかする理由がねえ。お前らは仲間だったり友達だったり、とにかく守りこそすれ攻撃するなんてねえつての。——これで満足か？」

「ああ。——ごめんね、変な事聞いちゃって。それでも、ちよつと不安でさ。君ほどの力を持った存在の考える事は、やっぱりどうしても理解しきれないから」

「……俺ほど何も考えてない奴は居ないと思うけどな」

俺のそんな言葉に、木場は曖昧に笑うばかりだった。

——コイツ、絶対信じてねえ。

## 停止校舎のアセンション 安心安全の水着回

コカビエルと伊吹狩刈という強敵（笑）を倒した俺だったが、しかし今まで通りの平凡な日常が戻って来たかと言われれば、なんだろう。ちよつと違う。

一応イツセーなんかは今まで通りに接してきてきているのだが、アーシアなんかがまるで画面の向こうで応援していたアイドルと実際に会っているかのような態度で接する様になったり、小猫が俺の家に住む事になったりした。

アーシアはまあ、わかる。教会の人間にとって、俺は救世主的な扱いらしいからな。

その上であんな『何かあったら俺が助けてやる』発言をしたら、確かにああなってしまうもおかしくはない。

長きに渡る説得で、何とか今まで通りに接してもらえるように戻ったし。

だが小猫との同棲はいかがなものか。

いや、確かに前々から黒歌が「白音とも一緒に暮らしたいにゃん」と要求してきたし、ソレを「俺が赤龍帝だとバレるリスクがあるからダメ」と拒否してきたのが背景にあるんだけども。

だけど、アーシアと違ってこっちは良い方便が無い。

アイツの場合は留学生のホームステイ先という体で乗り越えられたが、小猫は戸籍上日本人。その上今まで普通に学校に通っていて、マスコットの人気を得ている俺の後輩。

急にインモラルな匂いがしてしまう。

……ま、黒歌の涙目上目遣いには勝てなかったんだけどね。あははは。

両親には死ぬほど怒られました。流石に後輩女子を連れ込んで住まわせるなんてアウトロー過ぎるだろうと。

仰る通りでございました。

——さて。時が過ぎるのは早いもので、既に夏の盛り、というか入口。

既に暑苦しく、比較的涼しい旧校舎ですら灼熱地獄と化している今日この頃、生徒会から渡りに船な依頼がやって来た。

なんでも、プールの清掃をしてくれれば、オカルト研究部の全員で好きに利用してくれて構わないとのこと。

部長も二つ返事でオーケーした。その上会長は黒歌を連れてきても構わないと許可してくれた。

これはもう、やるしかないだろう。

というコトで今は生徒会メンバー立ち合いの下、清掃開始となったのだが……ここで俺が待ったをかける。

すまんね皆。俺は今すぐにも冷水の中戯りたいのだよ。

清掃を楽しむというのは、今回は諦めてくれたまえ。熱い。ドライグだって今すぐに水浴びがしたいはずだ。

『いや、俺はいつも酒を浴びてるから全然問題無いんだが』  
うんうん。とても水浴びをしたがっている。

という訳で、早速魔法を使うとしよう。

ブーステッド・ギア  
『赤龍帝の籠手』を起動し、倍加を開始。

長期の時間操作は、これを使わないと辛いのでね。

それ以外には使わないから、皆後ずさる必要は無いよ。うん。お兄さん悲しいよ。

「な、なあ輪廻。まさかとは思うんだけど、プールを破壊して一から直せば元通りー、なんてふざけたことは言わないよな？」

「お前は俺を何だと思ってるんだ。普通に時間を戻すだけだったの」

「あ、そっかあ……とはならねえからな!?普通に時間を戻すって何!?!」

『BoostBoostBoostBoostBoost!Explosion!』

イツセーから失礼な事を言われつつ力を倍加し、魔法を発動。

プールのあるこの場所全体を含む形で魔法陣が地面に展開し、そして時が遡っていく。

作られた当時の綺麗な状態へと、戻っていく。

これで良し。汚れも何も存在しない、綺麗なプールに元通りだ。終わったんでさっさと着替えちゃいましょうよ、と言おうと振り向いたら、皆口を大きく開けて呆然としていた。

……ああ、まあ。確かにな。この学園が作られた時まで時間を戻した訳だから、それは流石に驚くだろうな。

確かこの学園って100年以上前に開校されてたはずだし。そこまで時間を戻すとなれば、ねえ？

「えーっと、取り敢えず終わりました……よ？」

「——今のが、時間を支配するという力……まさか、プールを設置したの状態で戻したというのですか？」

会長の言葉に頷く。

すると会長は頭を抱え「プールは、お好きに使ってください……」と言って出て行ってしまった。

慌てて匙らも付いていき、後にはグレモリー眷属および俺&黒歌だけが残る。

よほどショックだったんだろうな。まあ、新品に戻ったんだから結果オーライというコトで妥協しておいてくださいな。

「……な、なんかもう色々ツツコミどころばっかだけど！せっかくだし、さっさとプールを楽しむとしようか！」

「そ、そうだね。うん。じゃあ、僕も着替えに行こうかな」

気まずい沈黙が続く中、イツセーと木場が声を張り上げ、更衣室へ向かっていった。

それを見て、部長たちも溜息一つついた後、更衣室へ向かう。

この場に残ったのは、黒歌と俺と……ゼノヴィア。

何故ゼノヴィアがここに？聖剣の欠片を回収して帰ったのでは？と疑問に思うかもしれないが、なんと彼女は既に教会の人間ではない。

神の不在を知り、破れかぶれになって教会から離反。行く当てもないので悪魔に転生した……とのこと。

何という行動力、と軽く戦慄したが、先程述べた理由以外に、俺に会いたかったというのがあったらしい。

なんで?と思ったが、俺はゼノヴィアもイリナも勝手に美化して憧れていた赤龍帝。いるとわかれば、なるたけ近くに居たいのだろう。俺とて前世は厄介オタク。好きなキャラの声をやっておられた声優様のイベントには毎回追っかけていたやべー奴である。気持ちわかるよ。

「行かなくて良いのか?」

「少し話があつて、ね。黒歌にも是非立ち会ってもらいたくつて、残つてもらつたんだ」

「話がある事は知つてたけど、何か相談かにや?」

「単刀直入に言わせてもらおう。私も輪廻の家に住みたい」

「はい?」

すつごくマヌケな声が出た。

今、なんて?ゼノヴィアが、んん?

冗談を言っている様子ではない。しかしその理由もわからない。

「え、えつと。なんでまた?」

「ふむ……理由を聞かれれば、少々照れくさい所もあるが……なんだろうな。あの時、主の死を伝えられて絶望していた私に優しく声をかけ、鼓舞してくれた君に……他の人とは違う、特別な感情を抱いたんだ。その正体は生憎と私にはわからないが、少なくとも黒歌やアーンシアが君と同棲していて私はしていないという状況に、言いようの無い不満を覚えてしまう程には強い感情だね。そんな折に、小猫が君の家で暮らす事になったという話を部長から聞いて、なら私も構わないだろう……と。——後は、純粹に住む場所が無かった、という話だ」

「それ絶対最後のが本当の理由だろ……」

そんな事は無いんだが……と呟くゼノヴィアは一旦無視して、黒歌に目を向ける。

その目はなんだか、警戒の色を帯びているように見えた。

いや、なんで?」

「えつと、どうするよ?」

「家主は(主人様……)というか、お義父様お義母様にやし、お好きにどうぞ?まあ、同棲を認めるなら説教は免れないと思うけど」

「……で、でつすよねー」

汗がダラダラと流れる。

それは果たして暑いせいか、はたまた正座させられて数時間近く不純異性交がいかに悪い事なのかを説教された時の事を思い出したからか。

：どちらにせよ、黒歌が好きにしろというなら俺の答えは決まったも同然である。

「えつと、ゼノヴィア。俺の家に住みたいって話だけど……取り合えず、俺からは良いよ、とだけ言つとく。けど、父さんと母さんが許すかどうかわからないから、あまり期待せずにももらえればいい……かな？」

「そ、そうか！では帰ったらすぐ、御挨拶だな！——話は終わりだ、着替えてくる！」

スキップするかのような軽やかな足取りで去って行くゼノヴィア。

ソレを見送った後、黒歌がおもむろに口を開いた。

「……良かったの？」

「まあ、行く当てがねえってんなら仕方ねえだろ。家のスペースは増やせばいいし」

「そういう力技ができるからこのご主人様は……好きにしろって言っちゃったし、これ以上なにも言わにゃいけど」

「あ、あはは……そうしてくれると助かる。どうせ父さんと母さんから叱られるのはほぼ確定事項だし」

一周回って許してくれるんじゃないかなあって期待してる部分もあるが、取り敢えず怒られる覚悟だけはしてある。

けどさあ、やっぱ、行く当てがなくて困ってるってんなら放っておけねえよ。

俺は確かに命の価値に区別をつけるし、人が苦しんでいる所を見て何も思わずにいられるタイプだけど……仮にも、困ったことがあれば助けてやるって言った身だしな。頼まれたなら断らずに力になってやるべきだろう。

最低限のけじめというか、そこら辺は俺とてしつかりしているの

だ。

苦笑いする俺に、黒歌は呆れたと言いたげな顔で溜息一つ吐いた後、ころつと表情を変えて、笑顔を見せつつ俺にこう言ってきた。

「じゃ、私も着替えてくるにやん。とっておきだから、期待してて？」

「——お、おう」

その悪戯っぽい笑みが何とも可愛らしくって、俺はついどもってしまふのだった。

うーむ。これが何年も生きてきた龍帝の姿か。

※——

男子全員が着替え終わり、後は女性陣を待つだけだー…という状況になってから早数分。

更衣室の扉が開いて最初に現れたのは、古き良きスクール水着に身を包んだアーシアと小猫。

幼いふくらみによって少し押し上げられたゼッケン部分の文字は、ひらがなでそれぞれの名前が書かれている。

体に張り付くようになっていいるからか、へその形まで丸わかりな程だった。

「輪廻さん、その…ど、どうですか？」

「すごく良いと思う。なんていうかアーシアの純朴さってのが、この穢れ無きスクール水着とマッチしてて。——ああ、勿論小猫も似合ってるぞ？言っているのかわからんけど」

「…それはつまりどういう意味でしょうか」

幼女扱そいうしたかうと意キ味レだるよだろ。

まあ、どちらかと言うと小猫の方が似合っているように見える。アーシアはアーシアで、結構成長している節があるからな。

それが成長期の瑞々しさとなって表れてて良い、ってのもあるけど。

「お、おお。天使って多分こういうのを言うんだな！うんうん。学園の二大マスコットと言われつつあるアーシア&小猫ちゃんコンビのスク水姿！今までの俺なら、覗きでもしない限り見れなかった代物だぜ！」

「さらつと選択肢の中に『覗き』が入ってるんだね……」

感動の涙を流すイツセーと、困ったような笑みを浮かべる木場。

……何故か知らんが、木場がブルーメランパンツみたいな水着を着てるんだよな。これは…その、触れた方が良いのか？それとも話題にしない方が良いのか？

「彼女の私を差し置いてそっちの二人にご執心とは良い度胸じゃない」

「ぶ、部長!?!いえ、そんな事は——って、ぶはあつ!?!」

イツセーが鼻血を噴き出して尻もちをつく。それほどの衝撃を与えた部長の水着姿は、まさかの紐であった。

端的に言おう。大事な所がちよっぴり見えている。

イツセーに見せるためなんだろうけど、この場に俺と木場が居る事を失念しては居ないだろうか。

それとも俺達に見られても気にしないという意志の表れなのだろうか。

まあ、流石に人の恋人に色目使う程落ちぶれてはいないが。

「あら、刺激が強かったかしら?」

「そ、それはもう物凄く!!」

「あらあら、リアスったら大胆。私も結構攻めた水着を持ってきたけれど、流石にアレには勝てないわね」

「……朱乃さんのそれは……マイクロビキニですか。白の」

「うふふ。そうよ?どう、似合ってるかしら?」

「それは勿論。——ただどうしてこう、うちの学園の二大お姉さまが揃いも揃ってそんな露出度の高い服を」

「ごっしゅじんさま〜!」

俺の言葉を遮るように、黒歌の声が聞えてくる。

視線を向けると、更衣室のドアから顔だけ覗かせている状態だった。

なんでそんな焦らすような真似をしているんだろうか。

そんな疑問が頭に浮かんだ次の瞬間、黒歌の姿が完全に露になる。まず最初に、アーシアや小猫と同じスク水かと思わせられた。

しかしすぐに気づく。違う。アレはへそ周辺が見えるようになってるし、それに見た目も若干違う。

食い込んでいるかのような股下が、やけにエッチだ。

——まさかこれは、ハイレグレオタード……!?

「ど、う、か、にゃん♪」

「ご、ごっちはあツ!」

昔から、性的な興奮を覚えると鼻血が出る…なんて話を聞くが、俺はずっとソレをデマだと思っていた。

そんなわけが無いだろう。脳が茹だって…とか言われても、そんなのが現実に起こりうるわけが無いだろうと鼻で笑っていた。

その頃の俺よ、今の俺は、実際にエロいものを見て鼻血を出したぞ。それも勢いよく。

胸元を強調するポーズを取り、小悪魔的笑みを浮かべる黒歌に、俺は悩殺された。

なんというエロス。俺は今日この日の為に生まれてきたかもしれない。

今までなんとなく維持されてきたクールキャラ（笑）が瓦解していく音を微かに聞きつつ、俺は鼻を押さえながら黒歌の姿をまじまじとその目に映した。

一瞬たりとも視界から外したくない。そう思えるほどに魅力的だ。

「にゃっふふーん。鼻血出ちゃうくらい興奮しちゃうなんて、ご主人様可愛いー♪」

「か、かわ……いや。俺とて男だ。そんな刺激的な恰好をされれば耐えられるはずが無かろうに」

「口調乱れてるよ輪廻君……」

「ええい、うるさい木場。この場に必要なのはツツコミじや無くティツシユだ。——まあ時間操作で鼻血が出る前に戻すから別にティツシユもいらないけど」

俺とイツセーの鼻の時間だけを戻して、正常な状態に。

鼻血が収まるまで待った後直ぐにプールに入ったら、血がもう一回流れることになるかもしれないからな。

小猫には「力の無駄遣い」と言われた。

い、良いじゃん。戦闘中はこれでもかとはかりにかっこよくなるんだから。(自画自賛)

「すまない、遅れてしまった」

「ああ、いやいや全然。皆まだ柔軟してた段階だから——つと。ビキニと、シャツか。色もゼノヴィアらしくって似合ってるぞ」

「ん、そうか。ありがとう?かな。実際にこれを選んだのは私じゃないかってアジアだから、素直に喜んでしまっただけ良い物かと」

「もう。そんな事気にしなくっていいんですよ?」

アジアと談笑するゼノヴィアは、青いビキニの上に黄色のTシャツを着ている姿だ。

水に入っても大丈夫なシャツのようだが、実際に着ている人を見るのは初めてだったりする。

っていうか、アジアが選んだのか。

元教会コンビというコトもあって仲が良いのは知っていたが(無論前に魔女と呼んで断罪しようとした事については謝罪し、許されている)一緒に買い物に行く仲だったとは。

……ん?一緒に買い物に行ったのに、アジアは態々スク水を?

趣味かな。

「さ、皆揃った事だし、泳ぎましょうか」

「「おぉー!」」

部長の言葉に皆が賛同し、炎天下の中、冷たい水で戯れる時間がついに始まるのだった。

※——

さて、俺達はプールを楽しんでいた。

俺はアジアと小猫の泳ぎの練習についてあげたり、黒歌と朱乃さんにサンオイルを塗る役目を任されたり、木場とゼノヴィアの二人と一緒に泳ぎで勝負したり、まあ充実した時間を過ごした訳だ。

部長とイツセーも、恋人同士ちよつと過激に楽しんでいたようだし、かなり良い時間を過ごしていたと思うのだが……

なんだろう、この状況は。

ゼノヴィアから「話があるから来て欲しい」と言われて物陰まで引つ張られ、そしてそのまま押し倒されての驚愕の一言。

「輪廻の子供を産ませて欲しい」

子供。子供。子供。

何度頭の中で反芻しても、キムチ的な聞き間違いではない事は明らか。逆に子供を産ませて欲しいと聞き間違えるような文章を思いつく奴が居たら名を名乗れという話だ。

…つてかなんで？

アジア同様にゼノヴィアも最初は恐れ多いだのなんだのと言って俺から少し距離を置いているような所があったから、気にせずフレンドリーに來い、名前も呼び捨てで良いぞ、と言った事はあるが、まさか子作り要求される程フレンドリーとは思わなかった。

いや子作りが要求される程のフレンドリーさってなんだ。どんな友人関係してるんだ。

「え、ええつと？子供？なんでまた、急に？」

「ほら、私は教会から離脱して、そして悪魔になっただろう？だから、今まで抑圧して生きてきた分を発散すると良い……と、部長から助言を貰ってね」

「ん、んん？なんか悪い言い方になるけどそれはつまり、今まで性欲を押しえて生きてきたから…つて事になるの？」

「もしかしたら、そういう側面もあるかもしれないね。私自身、よくわかっていないんだ。ただ、望むことは子を産む事で…：せつかくなら、強い血を引く子供が良い。そこで真つ先に目をつけたのが、輪廻だったわけだ」

え、ええー……。

まあ確かに？ゼノヴィアみたいな美人に迫られて子作りを要求されるのは嬉しくない訳じゃない。

寧ろ嬉しい。全然バツチこいだ。

…そこに確かな愛があるならば、だが。

俺はあくまで純愛厨。

要するに、エロい事を誰でも良いからやってみたいと思いつつ、い

ざするとなると相思相愛のいちやらぶせ●クスでなければ不満を覚えてしまい行為に及べない…という訳だ。

我ながら度し難い。

とどのつまり、ただ何となく漠然と強い子供を産みたいから、なんて理由でおねだりされても空しいだけなのである。

——かといって、俺がここで拒んで、他の男と…となるとなんだか後味が悪い。

一度誘われてソレを自分の都合で拒否しておきながら、後で他の男が良い思いをするとなればソレを許容できないとは、これまた度し難い男だ。

しかし俺はハーレムを最終目的に掲げる男。

黒歌と進展していない物の、取り敢えずハーレムを目指している事だけはしつかり知られてしまっているという何とも言えない状況にあるが、俺はやる。やってやるぞ。

今この場で、唾をつけるというのをやってやるんだ。

深呼吸して気持ちを落ち着かせ、冷静さを無理矢理保ちながら、若干ハイになりつつ話す。(一行矛盾)

「……まずは、ごめん。今この場でお前と子供を作るわけにはいかな  
い」

「いや何、そういうとは思っていた。けど、流石に今すぐ作ってすぐさま父親として振舞えと強要するつもりは無いよ。基本的な育児なんかは、全て私がするつもりでいたしね。ただ、子供が父親を欲する時には、そう振舞ってもらえると助かるが」

「仮に子供ができたとしたら俺も育児に参加する予定だとは一応言っておくが、今大事なのはそこじゃない。あのなゼノヴィア。確かに前は魅力的な女だと思う。はつきり言わせてもらうがさっきの子供を産ませて欲しい発言で俺の下半身が結構危うい。——だが、愛も何もないのに子供を作るつもりは毛頭ない。それは生まれてくる子にとっても良くない事だしな」

「……それは、確かにそうかもしれないが…」

「それに、子供を作るたって焦る必要なんかないだろ。それは長期

の目的って事にしときゃいい。——けどさ。俺としては、一度誘ってきた相手が別の男と…なんてのもまた嫌なわけで。だからさ」

一度言葉を切り、体を起こす。

思いのほかあっさりとしてゼノヴィアが避けてくれたので、今度は俺がゼノヴィアを壁に押し付けるくらい近づいて、

「俺かお前のどっちかが相手に惚れたら、その時は時期とか気にせず子作りしようぜ」

「どちらかが…って、私には恋とか愛とかが良くわからないんだが…」  
「よく聞く話だけど、それってつまり恋とか愛とかを抱いたことが無いってだけで、実際そう言う感情が出るとわかるもんだぜ。内心で気づかないふりをするかどうかが問題なだけだ。——でも、お前はそう言う事はしないタイプだろ？」

「まあ、そうだね…：…だけど、片方が好きになった時にもう片方が好きじゃ無かったとしたら、それは愛のある子作りとは言えないんじゃないのかい？」

「んー…最低な話だけど、男としては相手から愛されてたら別に問題無いんだよ。愛ってのは後から生まれるものでもあるわけで。でも女性の方はわからんし、そもそも俺が本気でお前に惚れるような事があれば、多分どんな手を使ってでも振り向かせようとする。だから、この条件で良いんだよ。お前が俺を本気で好きになった時はいつでも来ればいいし、俺だけがお前を好きになった時は、自分から行かず、お前に好きになってもらえるように奮闘してからすればいい」

「…なる、ほど？」

顎に指をあて、考え込むゼノヴィア。

俺が言った事を反芻しているのか、時折口から断片的な単語がこぼれ出てくる。

そして少し経ってから顔を上げ、首を縦に振った。

「良いな。そうしよう。——けど、輪廻は良いのか？黒歌に並々ならぬ感情を抱いているように見えるが」

「大丈夫、と言っているのかはわからないけど…：…俺の夢って、ハーレム王だしな。一人二人三人、平気で囲ってやるのさ。なんてったって

龍帝だし、将来的に身を置くのは悪魔社会とかそこら辺だからな。一夫多妻オーケーなんだよ。——まあ、俺の甲斐性が試されるわけだけど」

「……ふふつ、なんだろうね。君のハーレムだったら、なんだか楽しく居られそうだ」

「今は正妻すらない状態なんだけどな」

「うん？それなら、私が立候補しても——」

「そこまでにやん」

ゼノヴィアが一瞬でその場を離れ、そしてデュランダルを構える。それくらい濃密な殺気が、俺達を襲った。

まあ、口調からわかる通りその殺気は黒歌のモノな訳だけど。

「……えつと、黒歌……さん？」

「はあ……なーんか怪しいと思っついてきてみればこれにやん。全く、油断も隙も無いとはこのことにやん」

「まったく、いきなりそんな殺気をぶつけてこないでくれ。体が自然と反応する」

「それ自体は結構だけど、反応速度も動きも何もかもお粗末にやん。もちつと訓練した方が良いわね。——話は全部聞いてたけど、その上でゼノヴィアに一言だけ言わせてもらわないといけないから……ご主人様は、先に戻ってて？」

「え、全部聞いてたってその、黒歌？その全部っていうのはつまりゼノヴィアとの子作りの件から俺のハーレム願望の所まで」

「良いから。先に戻ってて」

「アツ、ハイ」

有無を言わさぬ語調に、俺はすごすごと引き下がった。

これが最強と謳われた赤龍帝の姿である。

うーん。黒歌とは絶対に結婚するつもりではいるが、もし仮にゴールインできたとして尻に敷かれる未来が見える見える。

まあ、黒歌程敷かれ心地の良い尻は無いだろうがな。ははは。

※——

「…それで、話って？」

「ま、簡単な事にゃん。ほーんの一言だから」

「輪廻にハーレムなんか作らせるつもりは無いから、お前は手を引け——とかかい？」

口元を歪めて言うゼノヴィアだが、しかし黒歌は首を横に振って否定する。

それに驚いたように目を丸くして、彼女は本当の答えを待った。

「……別に、私としてはご主人様がいくら女囲おうと構わないの。私だつてご主人様に愛してもらいたいし、白音もご主人様に想いを寄せている節があるから、一緒に愛してあげて欲しいし。アーシアだつて健気で、報われて欲しいって思う気持ちもあるからにゃん」

「じゃあ、警告でもするのかい？ 赤龍帝と……この世界の最強と、契りを交わす事の重大さを？」

「それも不正解」

またしても予想が外れたゼノヴィアは、つまらなそうにしつつ眉を顰めて黙り込む。

これ以上の失態はごめんだ、という顔だ。

そんな彼女に、黒歌は纏う雰囲気危険な香りのする物へ変え、背筋の凍るような凄絶な笑みを浮かべて、告げた。

「ご主人様の一番は誰にも譲らない。正妻も、最初に子を授かるのも、一番近くを、隣を歩むのも——私」

「……なるほど、宣戦布告、という訳か」

「ま、こればかりはご主人様が決める事だし。——けど、私は容赦なく蹴落とすタイプだから覚悟しておくにゃん。一番の座だけは、アーシアにも白音にも譲るつもりないし♪」

じゃ、言いたい事はそれだけだから、と言って去って行く黒歌。

後に残されたゼノヴィアは、デュランダルをしまつて深く息を吐いた。

「……………ははは、面白いじゃないか。一筋縄ではいかなさそうだが、けれどそれが良い。……私が彼を好きになり、同時に彼も私を好きになるようにする……それが最優先だな。——見ている黒歌。ご主人様だかなんだか知らないが、その座に胡坐をかくばかりなら、私が蹴落

として奪わせてもらうからね」

にやりと口元を歪めて、我ながらうまい事を考えたという表情で、続ける。

「——悪魔らしく、ね」

## 黒歌 1／7スケールファイギュア

「え、授業参観に魔王様が来る？」

「はい。部長のお兄様が昨日イツセーさんの家に赴いて、その事を伝えたいらしいです。――後、その数日後に三大勢力のトップがそれぞれ出席する会議を行う…とも」

「なるほど？その会場が駒王学園だから、下見ついでに参観も…ってワケか」

三大勢力の会合がある事は前々から知っていた物の、あくまで知らなかった体を装う。

プールで遊んだ日から幾日か経過し、ゼノヴィアの件でしつかり両親から説教を貰い、とぼつちりにドライグが一週間の禁酒を言い渡されてしばらく経った今日。

ここ最近とある理由から個人的に連絡を取り合っていたサーゼクスの話を、アジアから聞かされた。

因みにそのとある理由だが…：三大勢力の会合の前後で明らかになるだろう。

「授業参観か。私の通っていた学校には、そういう行事は無かったな。クラスのみんなは緊張するとか言っていたが…別にやましい事は無いだろうに、なんで緊張するんだろうか」

「ま、実際背後から見られてりやわかるもんさ。多分俺の親は必ず来るだろうし、その時一緒に見られるだろうよ」

言い忘れていたが、ゼノヴィアは転校生として俺達と同じクラスで過ごすことになった。

青髪美少女！と大喜びだった松田元浜が、ゼノヴィアの「輪廻の家で世話になっている」という発言で膝から崩れ落ち、すぐさま俺に攻撃を仕掛けに来た一件は今でも記憶に新しい。

しかしそうか。ゼノヴィアは…：…というか、ゼノヴィアとアジアは授業参観されるのって初めてか。

向こうじゃそういう文化がねえのかな。

――それと、ゼノヴィアって向こうで学校通ってたんだな。てつき

りずっと聖剣を使いこなす修行でもしていたと思っただけ。

「先輩の御両親は、私の方も見に来てくださると言っていました。……授業の時間がズレているとは言え、教室がそれなりに離れているのに、大丈夫でしょうか」

「ま、二人が行きたがってるんだから良いんじゃない？ 複雑な作りしてるから迷子になるかもだけど、そこは黒歌に案内してもらえばいいし」

「え、姉様が？」

「ふっふーん。白音やご主人様たちの授業風景を見に行ける日に、家でお留守番している程家猫してないにゃん」

胸を張ってどや顔する黒歌に、小猫は一瞬辟易した表情を見せ、すぐさま元の無表情に戻って俺に質問してきた。

「姉様はああ言っていますけど、当日は魔王様も来るんですよね。事情があるとは言え、大罪人の姉様が魔王様のいる場所に堂々といまして、まっぴり良いものなのでしょうか？」

「問題ない問題ない。最悪俺が悪魔勢力と戦争を始める羽目になるだけ」

「二大問題じゃないですか！」

「……黒歌の為なら、悪魔相手に戦争すら仕掛ける、か」

声を荒げるアーシアと小猫に、なんだかシニカルな笑みと共に呟くゼノヴィア。

前者はともかく、後者は一体何を言いたいんだろう。

黒歌は俺にとって大事な存在だ。ソレを傷つけるといふなら、容赦しなくて当然だろう。

「ま、半分冗談だって。もう根回しはすんでるし、大丈夫大丈夫」

「……なんでしよう、すつごく不安です」

「ま、まあ。輪廻さんが言うんですし、一旦信じましょう？ ね？」

俺を擁護するような事を言ってくれるアーシアだが、見た感じ確実に俺を信じている顔ではない。

なんだろう。ここ最近皆の俺に対する扱いがぞんざいな気がする。どれだけ信用無いんだ俺。ちよつと赤龍帝だって事隠してたくら

いしか、悪い事した覚えがないというのに。

「……ってか、黒歌は大丈夫だよな？小猫と俺の教室の場所、知ってるよな？」

「もつちろん。何度こつそり授業風景のぞき見したと思ってるじゃん。場所から行き方まで、全部把握済みじゃん」

「な、何度も見に来てたんですか……全然気づきませんでした」

「にやつははっ。そこは修行不足ね。私の気配を隠す術の前には、白音の探知能力はまだまだお粗末ってワケ」

「小猫は匂いに頼り過ぎてる嫌いがあるからなー。今度気配の察知の訓練しような」

「……はい」

※——

時間が流れるのは早いもので、参観日がついにやって来た。

俺の家からは父さんと母さん、そして猫耳と尻尾を隠した黒歌が来て、イツセーの家からは両親、そして部長の家からはサーゼクスとジオテイクスさん（部長の父親だそうだ）が来ている。

因みに他のオカルト研究部員と松田元浜の家族は来ていない。

いや、小猫は黒歌が来てるから別か。

授業が始まる時間になって入って来た黒歌に手を振り、そして前を向く。

その時点で既に松田元浜含む男子たちから鋭い目を向けられたが、まだ「後で説明してもらうからな」程度の目である。セーフセーフ。「さて、今日の英語の授業だが、この紙粘土を使って何かを作ってもらう」

英語教師の言葉に、皆がどよめく。

いつもは簡単な英単語の小テストから始まるのだが、今日は英単語どころか普通の授業ですらないらしい。

何かを作れてなんだ。なんで芸術の授業をさせるんだ。

俺の選択科目は音楽なのに。

「先生。それは英語の授業と言えるのでしょうか」

「そういう英会話もある！というコトだ。後これは内緒話だが、最近

の教師つてのは上から「参観授業の時は他校との違いを示すために独創的な授業を行うように」と圧力をかけられる物なんだぞ！ちくしょーつ、テスト範囲狭めるしかねえじゃねえかつ、理事長のバカやろーツ!!」

先生の魂の叫びに、俺達は一気に同情するような目を向けた。

教師歴四十年のこの人も、上には頭が上がらない物なのだろう。

……しかし参ったな。紙粘土で何かを作れ、か。

咄嗟に思いつくものがねえな。——周りの連中も他の生徒と相談しながら進めてるっぽいし、俺もイツセーと話して決めるか。

ただま、アイツに聞いたらおっばいでも作ろうぜ!!とか言われそうなのかな。

「なあイツセー、お前は何かを作ることにした？」

「んー。どうしよつかなーって思いつつ、取り敢えず適当に手でこねるだけこねてる。最悪お前の禁手姿でも作ってみるかなー、なんて」  
「……まあ、ロボットみたいでカツコいいかもしれないが。しかし意外だな。お前の事だから「最高のおっばいを作つてやるぜーツ」とか言うもんだと思つてた」

「失礼な奴だなお前は!!」

そーいいつつも、イツセーの手は止まらない。

目を閉じている所からも、ただ適当にこねている事が良くわかる。

さてどうしようか。何か良い物はーつと。

周りに目を向けると、親と相談している生徒の姿も見受けられた。

この自由っぷり…これはこれで悪くないと思うな。

「むむむう、おっばい……おっばいを作る…俺の、最高のおっばい……!!」

「おいお前さつき俺に怒鳴っておきながらなんでおっばいを作る方向にシフトしてるんだおい」

ガン無視。完全にゾーンに入っていやがる。

ちら、とアジアの方を見て、彼女が磔刑にあっているキリストを作っている最中なのを見てすぐに目を逸らし、ゼノヴィアを見てなかぐちやぐちやの教会を作っているのを見て完全に諦める。

仕方ない、俺もイツセーみたいな方法でこね続けて、なんか出来たらソレを提出しよう。

席に戻り、瞳を閉じて粘土をこねる。

もう俺も人目とか忘れておっぱい作つたらうか。

しかしおっぱい。言うて俺はおっぱいフェチという訳ではない。

かといって尻が好きかと聞かれれば、それもまた疑問符だ。

俺は女体ならば基本何でもよい。大きかろうが小さかろうが、毛が生えていようが生えていまいが、それはその女性固有の魅力であり、俺はそれに興奮を覚える。

言うなれば雑食の変態。特筆して何が好きとか、そういうのは無い。

——ただ、好きな女性ならばいる。

黒歌だ。俺が現状好意を寄せている相手と言えば、アイツしかないだろう。

……しかし、黒歌の魅力を果たして俺の技量とこの程度の紙粘土で表現できるだろうか。

確かに、外見的魅力にあふれた女性である事は否定できない。俺が『龍帝武装』に目覚めることができたのは、アイツに抱き着かれた時に感じた感触温もり良匂いがあつてこそだからな。

それくらいに魅力的。けれど、彼女を構成するのはそんな外側の物だけではない。

大人びて妖艶で、しかし子供っぽい無邪気さや可愛らしさを見せるチグハグ感。

驚くほど距離が近いかと思えば、手がちよつと触れ合うとかで顔を赤くして大仰に反応する事もある等、初々しさと手馴れている感じの入り混じった不思議なあり方。

彼女自身からしか感じる事の出来ない魅力を、果たして俺にこの数グラム程度の紙粘土で表現できるだろうか。

そんな事を考えながら、取り敢えず粘土を練る。練ってねって練り続ける。

時折水で濡らしたりして、なんか違う形になっているのではと考える

直してもう一度最初から練ってみる。

しばらくそうしていると、なんだか周りから多くの視線を感じるようになる。

一体どうしたというのだろうか。まさか俺の黒歌の完成度が予想以上に低くてドン引きされているのだろうか。

そりゃ目を閉じながらイメージと感触だけで作ってるんだから仕方ない……いや、なんで目を開けずに作ったし、俺。

「…おろ、意外といい出来」

目を開けて、一先ず完成形を目にしてみる。

我ながら中々の出来だった。良いクオリティだろう。勿論、本物の黒歌の方が何倍も美しく可愛らしく綺麗なわけだが。

さて、そんな俺の黒歌七分の一スケールフィギュアに、クラスメイトや父兄、教師の視線がじーっと注がれている。

おい、なんだその目は。何か言いたいなら言えればいいだろう。

誰かがボソツと声を出す。

「…5000」

声と同時に掲げられた五千円札を皮切りに、教室内オークションが開幕する。

周囲から聞こえる値段の声と、掲げられていくお札。

生徒も教師も保護者の方も、皆がオークションに参加していた。

「いや黒歌は大金積まれようが誰にも渡さねえからな!!」

「ご、ご主人様…!!にやはは、私の高クオリティな人形作るばかりか、そんな熱い言葉までくれるにやんて…!」

「ご、ご主人様アああああつ!!?」

黒歌が俺をご主人様と呼んだ途端、オークション会場だったはずの教室が俺を裁く法廷へと変貌。

残りの授業時間は、嫉妬に狂った男子たちによる追及と制裁（勿論回避した）の時間変わったのだった。

…因みに、みんながハッスルしている間もイツセーは黙々と粘土をこね続け、部長のハイクオリティなフィギュアを完成させた。

しかも、全裸の。

※ お前、恋人の裸体をフィギュア化して人前に晒して良いのか…？

「うーん、やっぱりすごいな。まるで黒歌さんそっくりだ。まさか輪廻にこんな才能があったなんてなあ」

「やめてくれよ父さん。この程度じゃ黒歌の魅力は全然表現できてないじゃないか」

「……あのね輪廻。お母さん的には、そんな発言を別に付き合っているでも何でもない女の子にするのはとても罪作りだと思うのよ」

「そうにやん。だからこれからもそういう事を言っていないのは私だけというコトで」

「オイコラ輪廻ツ!!今思い出したが黒歌さんってアレだろ! テメエにいつぞや愛妻弁当を作ってきたあの入だろツ!!非リア連合にその名を連ねておきながらなんだその恵まれた状況は、アアン!」

「黒髪巨乳和服美人と同棲とかテメエなんの冗談だコラアツ!!その上クラスのアイドルアーシアたそこにこれまた美人なゼノヴィアとも同棲中とか人生イージーモードすぎんだろテメエはよおおおっ!!」

昼休み。

教室では怒り狂った松田元浜からの暴言の嵐で落ち着いて食事もできないというコトで、父さん母さんを連れて、いつものメンバーで食事をとるために旧校舎へ向かう事に。

その道中で部長たちとも合流して、互いの両親が挨拶を交わした所で、少し離れた所で騒ぎが起きているのに気づく。

廊下に人が集まっているのを、匙が解散する様にと必至に訴えているようだった。

一体何が起きたというのだろうか。

「よお、匙。どうしたんだ?」

「ん、立神か。いや、廊下のだ真ん中で、このコスプレしてるお姉さんの写真撮影会が始まっちゃまって…」

「いえーい☆どもども、コスプレお姉さんでーっす☆」

「ほう、魔法少女コスですか」

「おいおいおい、カメラを構えるな変態」

失礼な。こんなレベルの高いコスプレを披露されては、一枚や二枚写さねば無作法というもの。

ガンレフ持ち歩いという正解だったぜ。

ステッキを構えてみたり、にこやかにピースをしてみたりと色々なポーズを見せてくれる魔法少女コス女性の、時折ポーズ要求をしつつ何度もシャッターを切る。

うんうん、我ながら良い写真だ。ただスカートが短いせいで時折パンツが写るんだよな……ま、ラッキーって事で。

「いやあ、いい写真が撮れました。ありがとうございます」

「ううん。こちらこそ、そんな熱心に撮ってくれるなんて魔法少女冥利に尽きるよ☆」

「お前なー……つたく、こんなのが最強とか、世も末だぜ……」

「聞こえてるぞ匙。別に良いだろ？ 現役魔王の魔法少女コスなんだから、撮っておいて損はねえと思うけど」

「はーい、魔王でーす☆名前はセラフオール・レヴィアタン。よろしくね☆」

「あのな、コスをしているのが魔王様だからってそんなはっちゃけるのは——って魔王様ああああアツ!!」

ギャグみたいな反応をした匙に、セラフオールはポーズを決めたまま「ソーナちゃんのお姉ちゃんでもあるよ☆」と付け足す。

その時になって、ようやくみんなが人込みを抜けてやって来た。

「おお、セラフオール。ここにいたのか」

「あ、サーゼクスちゃん。なんだか上機嫌だけど、何かあった？」

「ん？ いやあ？ 私は別に、何も？ 上機嫌だなんて、まったくおかしなことを言うなあ。私のどこが、そんな上機嫌に見えるんだい？ んん？」

「…お兄様は、ここ数日ずっとこうで……なんというか、何かが待ち遠しいと言わんばかりにそわそわと。しかしいくら聞いてもその事については詳しく教えてもらえず……」

「うーん、リアスちゃんにすら言わないって事は相当なコトなのかな☆——あ、ソーナたん」

「私を。そう呼ばないようにと。何度も。お願いした。はずですが」

言葉が片言になりつつ、眉間を押さえた状態で会長が姿を現す。

いやあ、大変そうだな。姉がこんなはっちゃけた人だと、こう堅物っぽいこの人だと色々苦労するんだろう。

胃薬が手放せない生活を送る事にならないと良いが。

「ええー。じゃあ、ソーナちゃん」

「大差ないでしょう！——ん、んんつ。とにかく、その服で校内を歩き回らないでください。この学校にもきちんとしたルールがあるんです」

「えー。でも赤龍帝ちゃんには大好評だったよー？」

「それでもです。——後、貴方もそちら側なのですか立神輪廻」

「まさかのフルネーム!？」

先日のプールの一件以来、俺への当たりがキツイ気がするこの人。

なんでかと聞いたら、ボソツと「:姉と、似た雰囲気を感じる」と言われたが……俺苦手な人認定されてるよね、コレ。

何だよ、俺別に魔法少女コスに興味はないぞ。見るのは良いが着るのはNG。

:多分、似てるって言うのは軽いノリでとんでもない事を平然としかす部分なんだろうけど。

「もう、わかったよソーナちゃん。ちゃんと後で着替えるから、先に一つ聞きたい事があるの」

「ん、俺ですか」

会長からの説教に若干の反省の色を見せたセラフオールは、俺に視線を向けて問いかける。

「なんで大罪人の黒歌がここに居るの？」

返答次第では事を構える可能性がある。

そんな雰囲気を滲ませつつも、しかし周りにはソレを悟らせない。

仮にも魔王と呼ばれるだけはある。相当な実力者なのは確かだ。

サーゼクスやジオティクスさんからは何も言われていなかったからと油断していたらしい黒歌が、一気に険しい表情になる。

大丈夫と言っていたが、これでは大変なことになってしまいうのではと危惧している顔だ。

……ま、問題無いんだけどさ。

「詳しい話は会合の時にでも話しますよ。黒歌の事については、天使と墮天使がいる場で話した方が良いので。——少なくとも彼女が誰かを殺すような真似はしませんよ」

「……ふーん。ま、サーゼクスちゃん達も何も言っていないみたいだし、なら私も何も言ーわない☆」

コロツと雰囲気を変えて、彼女は「じゃ、着替えてくるねー☆」と言って去って行った。

少しの間静寂が場を支配し、そして俺の父さんが最初に口を開いて、

「黒歌さんが、大罪人？」

と言った。

……俺一応全部説明したんですけど。家に住まわせていいかと聞くときに、しっかりと黒歌の事情を全部説明したはずなんだけど。

あ、母さんに叩かれた。

※——

「もう一人の、『僧侶』？」

「そう。リーアの眷属には、今まで実戦に参加させるのを禁止され、封印されていた子が居てね。元々は『変異ミューテーション・ピースの駒』の効果で眷属に加え入れられただけで、従えるには実力不足だったのだけけど……先日のコカビエル打倒の件もあって、お偉方が許可を出したんだ」

放課後。俺の家に集合し、俺の父さん母さん、イツセーの父さん母さん、そしてサーゼクスとジオテイクスさんが、家のテレビを使って今日の授業の風景の記録映像を肴に酒を飲みかわした後、サーゼクスがこんな話をしてきた。

この場には俺の両親どころかイツセーの両親すらいるのだが、そこは問題ない。

イツセーが、部長と交際することになった時点で自分が悪魔だというコト等を全て話したのだ。

これは自分なりのケジメだな、と笑って言っていたので、俺も包み隠さず赤龍帝云々を話してある。

勿論黒歌の事も紹介していたので、セラフオールから大罪人云々と  
言われたことも、疑問に思わずすんなり流していた。

「あの一件は、私ではなく輪廻が解決した問題です。私はただその場  
にいただけで……」

「だとしても、彼らにとっては君が全てを解決したことになってるん  
だ。——元々、赤龍帝が世界最強であるという事を真実とわかってい  
るのは、私含む一部の悪魔や堕天使：後はそうであると教え伝えられ  
ている教会の人々と、他勢力の一部分くらいでね。当たり前と言えば  
当たり前だが……今代の赤龍帝が本当に強者であるのかと、疑問を抱  
いている者すらいる始末だ」

『ははは。言われてるぞ相棒』

「赤龍帝も白龍皇も二天龍なんぞと持て囃されてはいるが、結局世界  
全体で見ればそれ以上の存在が山ほどいるはずだからな。力の一部  
を封印された状態で神器としてただの人間に宿った所で、そりや強い  
とは誰も思わんだろうよ」

勿論俺だつて最初はクソザコだった。

それはもう、そこら辺のはぐれ悪魔相手に死にかけるレベルで弱  
かった。

それでも強くあろうとし続けて、やっとここまで来たのだ。現状一  
応最強の称号を貰えるほどに、至れたのだ。

「それで、今回のこの決定をしたのが『赤龍帝は弱者』と考える者でね。  
この一件に赤龍帝は大して関わっておらず、その場に居合わせた若手  
上級悪魔が解決したものだと思ってる。——まあ、悪い話ではな  
いだろう。いつまでもあの子を封印し続ける訳にも行かないだろう  
し、いい機会だと思ふと良い」

「しかし……いえ。わかりました。『僧侶』<sup>ビショップ</sup>の……ギヤスパの封印  
を、解くことにします」

部長の言葉に満足そうに頷き、サーゼクスはテーブルに戻り、俺の  
父さんにお酒を注いだ。

ぞ。 おい良いのか魔王。俺の父さんはただのサラリーマンぞ。平社員

「いやあ、サーゼクスさん達が持ってきた酒は美味しいですなあ。さぞお高かったのでは?」

「いえいえ。一応年代物のワインではありますが、未来の義理の息子や、サーゼクスが懇意にしている子の御両親への贈り物としてはまだまだ安い部類ですよ。日本円で言うところ、ざっと100万くらいの」  
「100万!!?」

安いとか言っているが、その値段のワインは相当である。

どれくらいすごいかわかりやすく説明すると、現在ワインで歴代最高の値段を叩きだしたロマネ・コンティの価格が約160万。

つまり最高値との差額60万程度というところでもないワインを、イツセーの両親と俺の両親にそれぞれ一本ずつ贈呈した事になる。

やめてくれよ、うちの両親の普段飲んでるワイン1000円いくか行かないかなんだぞ。

もはや繊細な味もわからんぞ、多分。

「…もう、お兄様もお父様も、張り切り過ぎよ」

「ぎ、義理の息子かあ…:うん。俺頑張った甲斐があつたなあ…」

「人生振り返るみたいな喋り方すんなよ。悪魔なんだから、まだ1万年くらいは生きるんだろ?」

「そりやそうだけどき。腕も捨てて寿命もちよっぴり削って、そんなけ頑張った分の幸せがこうして巡ってきてると思うとき、なんかこう…:ふうつと一息つきたくなるっつーか」

そういういつつソファにゴロンと寝転ぶイツセーを、部長が愛おしそうに見つめつつ優しく頭を撫でる。

それだけで一気にだらしなく変態的な顔に早変わりするんだから、俺の親友はブレが無い。いつもいつでも相変わらずである。

『…:くっ、高いだけのワインなんて、どうせ…:どう、せ…』

「禁酒中に限っていい酒渡されちゃったな、可哀そうに」

『も、元をただせば相棒!お前が後先考えずに女を家に連れ込むからなあ!!』

「人聞き悪い言い方してんじゃねえ!!ってか後先考えてない訳じゃないだろ。怒られる覚悟してたわ」

『説教前提で動くな！おかげで俺はまだまだ禁酒だちくしよーっ！』

酒龍帝のんべえドラゴンの悲痛な嘆きが、部屋中に響くのを、俺の父さんと母さんだけが愉快そうに笑うのだった。（笑い上戸）

他の皆？畏れ多いのか何なのか、苦笑いだったよ。

## 邪眼と魔法。そしてブザー

公開授業の翌日、俺達は旧校舎の一室に集まっていた。

そこはまるで事件現場のように警告色のテープで嚴重に封印されており、何重にも重ね掛けされた魔法を感じた。

「ここに、もう一人の僧侶が？」

「ええ。強力な神器を持つ、ヴァンパイア……それがここに封印されている、ギヤスパーよ。一応、この封印は夜には解除されて外を出歩けるようになるけれど……あの子自身がソレを拒んで、部屋から一歩も出ないのが現状。私としてもそっとしておいた方が良いと思って放置していたけれど……今日からは、そうも言ってられないのよね」「引きこもりってヤツなんですか……」

俺達が話している間に朱乃さんらが結界を解除し、そして閉ざされていたドアが開く。

そしてそれと同時に響く絶叫。耳をつんざく甲高い声に、俺達は大きく肩を震わせた。

「な、なんだ今の声」

「今のがギヤスパーの声よ。あの子、極度の人見知りでもあるから……こうして自分の部屋が開けられたことに、驚いちゃったのかしらね。

——じゃあ、呼んでくるから」

そう言って部長と朱乃さんが部屋へと入っていく。

奥から聞こえる声は、やっぱりとつてもうるさかった。

「えっ、えっ、何事なんです!?!封印が解けるなんて、一体全体何が!?!」「貴方の封印を解除しても良いと、上の人達から許可が下りたの。だからあなたも、今日から昼夜気にせず外に出ていいのよ」

「ひっ、い、嫌ですうううううッ!!お外、いやあああああッ!!」

「あらあら、そんなに嫌がらないで?ほら、私達も一緒よ?」

「そ、それでもお外は怖いですううううッ!人に会いたくないっ、僕の聖域はここなんですうううううッ!」

悪魔が聖域なんて言葉を使うのか(困惑)

しかしまあ、かなり外に出る事を嫌がっているな。

アレは無理矢理出さない方が良いとすら思えるが、それでもやつぱり出してあげたいのが主心なのだろうか。

二大お姉さまに呼ばれて出てこないとは何事か、とイツセーが部屋に入っていくのについていき、部屋の壁に張り付くようにして泣きわめいている女子生徒の制服を着たギャスパーを初めて視界に映す。

うーん。やつぱ見た目は女だよな。中性的な顔つきもあって。だけど感じる気配も、骨格の感じも男だ。

イツセーも気配が男だという事はわかったのか、物凄く不思議そうな顔をしている。

「え、これ、金髪美少……女？でも気配は男？え、ううん？」

「ひいつ?!し、知らない人が続々とおお……!!」

「イツセー。確かに見た目は女の子だけど、この子は男よ」

首をフクロウのごとく傾げるイツセーに、部長が苦笑いして真実を伝える。

ソレを聞いて数秒間硬直した後、今度はイツセーが大声を出す。

「え、ええええええええええええつ!!お、男!?でも、なんで女子生徒の服を着て?!」

「ひ、ひいいいいつ!!ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいい!!」

「この子、女装趣味があるのよ」

朱乃さんが補足し、イツセーは膝から崩れ落ちる。

なんとなくわかつてはいた物の、それでもショックだったのだから。

「先輩は、驚かないんですね」

「気配も骨格も男のソレだったからな。今時じゃ女装趣味も一般的になりつつあるくらいだし、俺は全然いいと思うけど」

「いや、断じて良くないね!!コイツ、俺の一瞬夢見た金髪外国人美女コンビが『僧侶』という光景を、完膚なきまでに叩き壊しやがって!!」

「そ、そんな事言われてもお……!」

「人の夢と書いて、儂い」

おお、上手い。

「と、ところでこちらの方々は…?」

「あ、私はアーシア・アルジェントって言います。同じ『僧侶』<sup>ビシヨツク</sup>なので、よろしくですー!」

「私はゼノヴィア。『騎士』<sup>ナイト</sup>の駒を授かっている。アーシアもだが、元教会の人間なので、悪魔としての生き方は未だ勉強中だ。よろしく頼む」

「俺は兵藤一誠。『兵士』<sup>ポーン</sup>で、部長のその、か、彼氏なんぞをな。やらせてもらってる。うん。んで…ま、さつきは夢が云々で怒鳴っちゃまったけど、あんま気にしてないしよろしくな? 気軽にイツセーで良いぜ」

「い、いきなり沢山増えてますうううう…よ、よろしくですう…つて、じゃあそちらの方は…?」

「俺は立神輪廻。この中で唯一の人間だけど、一応オカルト研究部に所属させてもらってる。ま、よろしくな」

「君のどこが普通の人間なんだい…」

「え、違うんですか?」

「彼は今代の赤龍帝。あのウロボロス・ドラゴンを倒したと言われている、現在世界最強の存在ですわ」

「ああ、赤龍帝。世界最強の——つて、ええええええええええツ!!!?」

少し壁から離れていた物の、また壁に張り付いてしまう。

後朱乃さん。俺別にオフィス倒した訳じゃないですからね。ギリギリ引き分けました。残念ながら。

「確かに赤龍帝ではあるけど、そんな大仰なもんでもないさ。——で、話は変わるけど、なんでそんなに外に出たがらないんだ? 吸血鬼だから陽の光に当たりたくない、つて話だったら、一応今は曇りだし問題ないと思うけど」

「そ、そういう問題じゃ無いんですううううっ!! お外に出るのも、人に会うのも、全部嫌なんですうううっ!!」

「だーっ、もう! いつまでもそうやって怖がってるだけじゃ何にも変わらねえんだつて! よし、取り敢えず外出るぞ。話はそこで聞いて

やつから」

「や、やめてええええええッ!!」

痺れを切らしたイツセーがギヤスパーの手を掴んだ瞬間、景色が一瞬歪み、世界が色を失った。

時が止まった世界だ。俺は自分の魔力が俺だけの時間法則となってるから、世界そのものが止められようが影響を受けないが、他のみんなはもの見事に固まってしまっている。

「これがギヤスパーの力、か。目が光っている所を見るに、身体が直接神器になってるタイプか？」

「え、ええええええッ!!なんで動けるんですかあああああッ!？」

「なんでってそりゃ、俺の魔力は時間そのものっていうか…俺も一応時間操作ができてな。その方法として常に本来の時間の流れと同時に俺の体内だけにある『俺が自由に操れる時間法則』を無理矢理世界に適応させるって形をとってるんだけど…世界の時間に誰かが干渉しても、俺の時間法則だけは乱れずにそのまま進み続けるから、こうして俺だけ止まらずにいられるって事だと思うぞ」

「わ、わけわからないですうう…」

頭を抱えてうずくまり、先程までのギャグチックな号泣から一転して、ポロポロと涙を溢し始めるギヤスパー。

大方、自分を外へ行こうと誘ってくれた皆の動きを止めて、裏切るような真似をしたと悲しんでいるんだろう。

「なあ、ギヤスパー。外は怖いかな？」

「え?…は、はい。怖いです。人が、沢山いて」

「なんで人が怖いんだ？」

「それは…僕、この力を、きつと悪く思うから」

「どうして悪く思われるんだ？」

「あ、貴方だって、突然自分の動きが完全に止められて、その間に好き勝手動ける奴が居て…ってなったら、その人の事を気味悪がるでしょう?…だから、止まった時の中を動くことのできる僕の神器は、会う人全員に嫌われる」

「確かに、そうかもな。自分の知らない所で、自分に何かされているか

もしれないって思ったたら…誰もが良い感情を持てる、とは限らないな。——つまり、それさえ何とかなればお前は外に出られるんだな？」

「へ？え、いやいや。確かに僕の最大の悩みの種は、それですけど…無理ですよ、今ですらこの力を制御しきれていないのに、日に日に強くなっているんです。勝手に。ソレをずっと制御できるようにならない限り、僕が誰かを意図せず止めて不快な気持ちにさせてしまうのは、どうしようも…」

「それを俺が手伝えば良いだろ」

俺の言葉に、ギヤスパーはポカンと口を開けてこちらを見つめてくる。

イツセー達はまだ、動く様子が無い。

「俺は赤龍帝だし、何より同じく時間を操る力を持つてる。俺の場合はお前よりも年季が入ってるし、神器と魔法とじゃまた違うだろうけど、アドバイスとか特訓の手伝いとかなら全然できる。もしお前が誰かに悪意を向けられて、傷つけられるようなことがあれば、俺が守つてやる。——それじゃ、ダメか？」

「え、いや、でも…その…なんでそんなに僕に優しくしてくれるんですか？今日、初めて会っただけなのに」

「んー？大した理由は無いけど、強いて言うなら友達だから、かな。ほら、お前だって部長の眷属で、一応これからは毎日俺達に顔を見せる事になってるわけだし。もう自己紹介も挨拶も済んだし、なんなら俺もお前も互いの力を披露したわけで。これって、友達じゃねえの？」「とも、だち…僕と、僕なんかと友達で、良いんですか？」「良いも悪いもねーよ。ってか友達に良し悪しつけ始めたら俺の親友三人は全員変態の極悪人だぞ？——あんま一人で抱え込むなよ。これからは、止まってようが止まっていまいが同じ時間を過ごせる俺が、力になってやるからさ」

「う、あ…うわああああああん!!」

大声で泣き始めるギヤスパーだが、なんだかその涙は先程までの物とは違うような気がした。

今までため込んでいた物を、全部吐き出すような、そんな感じ。俺はそんなギヤスパーに近づき、そつと頭を撫でてやった。なんでそうしようと思ったのかはよくわからないが、自然と。

「…あ、れ？これは…」

「あらあら……一体、何があつたのかしらね」

停止状態から解除されたイツセー達が、号泣するギヤスパーとそれをあやす俺を見て、不思議そうな声を発するのだった。

※

フォービドゥン・バロール・ビュ  
『停止世界の邪眼』。それがギヤスパーの神器。

ケルト神話の邪神、バロールに由来するその力は、視界内の物体の時を停止させるというもの。

理論上は神や魔王すらも止める事ができるらしいし、何なら世界そのものを完全に停止させることだってできるらしいが……今はまだ、所有者のギヤスパーの意志で発動する事すら難しいとのこと。

その癖力の規模は日に日に上昇しており、このままだと勝手に禁手に至る可能性だつてあると部長が言っていた。

禁手、かあ。俺もいつかは使えるようになりたいけど、俺の場合は日課の筋トレなんかじゃ全然たどり着けそうもないんだよな。

木場や輪廻にコツを聞いてみても、力さえ一定以上あれば、心境に大きな変化が生じればすぐにでも禁手になるとしか教えてもらえなかったし。

「というかそれくらいなんだろうな。禁手になる方法って。

ちくしよー。やつぱ力かー。

「い、いやああああああつ!! 聖剣怖いつ、にんにく怖いつ、十字架も聖水も、こつわあああああああいつ!!」

「どうしたギヤスパー。そんな軟弱なようでは、吸血鬼として情けないぞ」

「お、追つてこないでえええええええつ!!」

吸血鬼殺し四点セットを手にしたゼノヴィアが、真顔でギヤスパーを追いかけてます。

「彼の面倒を見るのを一度任せてくれ」と意気込んでいたが、まさかこ

んなスパルタ式とは思わなかった。

小猫ちゃんも「ギャー君はもつとニンニクを食べるべき」とか言つてガーリックトーストを山ほど差し出してたしな。

……ああ、そうそう。ギヤスパーは小猫ちゃんと同じ一年で、オカ研メンバーの中で唯一いじれるからなのか、中々サディスティックなコトをしている。

この間は炎天下の外に放り投げてたな。アイツはダイウオーカーって言つて、日光を浴びても灰にならないらしい吸血鬼らしいけど、それでも陽の光は嫌いだって言つてたのに。

「おいゼノヴィア。そろそろやめてやれ、本気で不貞腐れるぞ」

「あつ、輪廻せんぱーいっ！た、助けて〜!!」

「むっ、輪廻の背に隠れるのは卑怯だぞ」

最初にあつた時から、やけにギヤスパーは輪廻に懐いているように見える。

理由を聞くと、同じ力を持つ者同士で信用してくれてるんだと言われた。

：：そうだったな、アイツ。時間操作とか平然とやるもんな。

プールの清掃をさっさと終わらせたいからって言つて時間を大幅に巻き戻すような男だもんな。

輪廻の背中に隠れて震えるギヤスパーに、ゼノヴィアが唇を尖らせデュランダルをしまう。

仲間の剣なんだけど、やっぱり近くにいと光の力のせいかヒリヒリするな。アシアの十字架もだけど。

「うう、怖かったですうう…」

「よしよし、もう大丈夫だからな…：：あのなゼノヴィア。その『健全な精神は健全な肉体に宿る』式教育もまあ、一概に悪いとは言わんが。人にあつた教え方というか、鍛え方というのをちゃんと考えてやれ」

「むう…：：私はコレが一番手っ取り早いと思うが」

「自分ができる事が誰もがができる事じゃねーんだよ。逆も然りだろ？ギヤスパーと違つてお前は身も心もある程度強いが、その代わりお前

じや時間を止められない」

「それは、そうだが……」

「このままじゃ、子供を持つのはまだまだ先だな。危なっかしすぎて育児させるのが不安だ」

「なっ、それとこれとは別問題だろう！」

「同じだバカ」

厳しいゼノヴィアに、甘やかす輪廻。保護者かな？

遠巻きにその様子を眺めている俺達に、匙が声をかけてくる。

「よっ、最近騒がしいけど、どうした？」

「んー。新入部員というか、元々いたけど最近になって顔を出したというか。——ほら、部長が前々から連れてはいたけど、実際には封印されてた『僧侶』」

「あー。会長が言ってたな。どれどれ……おおっ、金髪美女！またしても立神にくつついてるが、アレはアレで良いじゃねえか」

「……男なんだぜ、アイツ」

俺の言葉に、匙が「ぱーどうん？」と聞き返してくる。

うんうん。わかるぜその気持ち。俺もマジで裏切られた気になっ  
たもん。

「嘘だろ詐欺だぜあんなの……てつきりグレモリー眷属の『僧侶』は金髪美女二人という夢の編成かと思っただのに」

「わかるぜ匙。俺も最初はそう思った。——けど実際出てきたのは、女装趣味の引きこもり男子……現実ってなんでこんなに厳しいんだろうな」

「そうだよなー……」

遠い目をして輪廻とギヤスパーを眺める。

俺達と接するときには少し距離感を感じるアイツだが、輪廻相手には結構自然体に見えた。

やっぱ、同じ力を持つっただけで違うのかね。悩みもわかってくれるだろうし。

「へえ、ここが悪魔の学校、ね。神器持ちに聖剣使いが揃い踏みとはすげえじゃねえか」

「ツ!?あ、アンタ、いつの間に背後に…!!」

気づけなかった。気配には人一倍敏感な俺が、背後に立たれたことに気づけなかった。

浴衣姿の男は、あくまで自然体のままそこに立っている。

いきなり俺が離れ、警戒心をあらわにしても気にも留めていない。

というか、悪魔、神器、聖剣……どれも普通の人間が知っているような単語じゃない。

三大勢力関係か、それとも別の神話体系か……もしくは神器持ちの人間か。

とにかく、警戒しないとやばそうだ。

アジアもゼノヴィアもそれぞれの武器を構え、匙も咄嗟に神器を出現させている。

輪廻だけは突っ立ったままだが、その背後にいるギヤスパーを庇うようにしている。

「貴方は、一体誰ですか…?」

「ん?俺か?俺はアザゼルっつーんだが……流石に知ってるよな。これでも堕天使の中でも有名どころだし」

「アザゼルだと…!?!」

堕天使の総督にして、生粋のコレクター。

サーゼクス様がそう言っていた。神器を好み、所有者を捕まえては何らかの研究をしていると。

まさか、俺たちの神器狙いでここに!?!

さらに警戒を強める俺達に、しかしアザゼルは困ったように笑うだけ。

「おいおい。そんなビビるなよ、下級悪魔くん達。今回用があるのは、聖魔剣の使い手だからな」

「木場の聖魔剣狙いか…!!クソツ、『悪魔コンボ・オブ・デーモンの連撃』!!」

「おお、サタンの神器!今まで未確認だった、原初の魔王の力が込められた神器か。そいつも興味深いが……コイツの場合だと、腕ごと持つてくことになっちまうしなあ。それはお前が許さないだろ?赤龍帝」  
「やるってんなら止めませんけど、その場合は三大勢力が二大勢力に

なる事をお忘れなく」

「だー、わかった。わかったからその馬鹿みてえな殺気を止めろ。俺でも体の芯から震えるってどうかしてんだろその威圧感………ったく。せっかく平和的に解決したっつーのに、その立役者であるお前が火種持ち込んでどーすんだよ」

「だから、貴方と戦うなら堕天使そのものを根絶やしにするって言うてるでしょう。そうすれば恨みを持つ者も、次の争いを望む者もいなくなる」

「……それを本気でやるのがテメエなんだよなー………けっ、しけちまったぜ。やめだ。帰る」

お、おお？なんかよくわかんねえけど、帰るのか？

踵を返したアザゼルに、なんだか気が抜ける。

しかしヤツは途中で立ち止まり、ギヤスパーを見てこう言った。

「その『停止世界の邪眼』の吸血鬼。その力、制御できてねえんだろ？それなら、その『黒い龍脈』使いの力を借りると良い。余剰分の力を抜いてもらいながら練習すりゃ、コツもつかめるようになるはずだ」

なんてことはないただのアドバイスに、少々面食らう。

だってアイツは堕天使のトップ。悪魔の俺たちとは敵同士………のはずだ。

いや、でもさつき平和的に解決したとかなんとか言ってたような。

その立役者が輪廻だ、とも言ってたけど………一体どういうことだ？

「お、おい！待てよ！」

「あん？なんだよ、さつきまでは出て行けムードだった癖に。なんだ、サタンの神器見せてくれるつもりにでもなったか？」

「いや、そうじゃねえけど………い、意味深なんだよ！さつきから！なんか輪廻と知り合いみたいだし、俺たちと敵対するムードでもねえし、しかも、平和的に解決したって………一体全体どういう意味なんだよ！？」

「ん？なんだ、輪廻から聞いてねえのか？三大勢力の睨み合いが終

わったってこと。つまり、和平が結ばれたって事をよ」

和平。和平つてのはつまり、争いはもうしませんって事か？

……いやいやいきなりそんな、え？三大勢力の溝つてすつごく深かったって話じゃねえの!？」

目を白黒させる俺たちに、アザゼルは「その様子だと聞いてねえらしいな」と呟いてから説明する。

「コカビエルと戦ったんだから聞いただろうが、俺たちは元々戦争をもう一度起こすつもりなんてなかった。それは魔王を失った悪魔も、神を失った天使も同じだった」

「え、か、神様を、失った…?」

「ギヤスパーは知らなかったっけか。聖書の神も、件の戦いの最中死んでたんだよ」

「それでも互いの内情を知っていようと、俺たちは戦争をやめにしようなんて言い出せなかった。まあ、コカビエルがいい例だな。戦争賛成派は少なからずいたし、悪魔の方だって旧魔王だの新魔王だので揉めてやがる。そんな折に『自分には戦う力なんてありません』宣言なんざしたら、格好の的になっちまう。少なくとも俺はそう思ってた。……だから、本当ならもうじき行われる会合で言い出すつもりだったんだが……その馬鹿が良い方便を寄越してきてな。おかげで三大勢力は争えない状態になっちまった」

「輪廻が…?」

ゼノヴィアが首を傾げる。

「そうさ。噂が本当なら三大勢力全部が束になっても敵わねえような奴が、和平に反対するならばその勢力を消すつて脅してきた……つて方便だ。実際は俺たちの考えをこいつが聞いて回って伝えて、一先ず平和だけは確保することに決定したつて話なんだがな。ま、強いやつに脅されてつつたら下の連中も不満を言い出しようがねえし、最悪矛先が輪廻に向かつててもこいつに敵うような奴はそうそういねえ。後は会合で正式な書類でもなんでも作つて、互いの近況報告なりこれからの関わり方なりを決めるだけつてわけだな」

「そ、そんな話になつてたのか……つてかなんで黙つてたんだよ!」

「サーゼクスに口止めされてたからな。まあ、サプライズにしておきたい程度だったし、止める必要も無いと思ったからアザゼルに説明させたってだけだ。はつきり言って俺にはどっちでも良かったからな」  
「…そっすか」

なんというか、知らない間にでかいことがあつてさらつと終わつて  
るつてのは、結構疲れるんだな。

今度からは定期的に何か無かつたかつて聞いた方が良いかもしれ  
ない。

あと魔王様呼び捨てにしてんのかこいつ。殺されたり…ないか。  
「でも、会合の時に意見の食い違いが…とかつて、ならないんでしよ  
うか？」

「意見交換だの近況報告だのはあくまで飾りさ。会合つっても形だけ  
だしな。どちらかと云えば、それぞれのトップ同士で決めた事を周り  
に伝えるためにやるし、それに…まあ、これはそんな時にでも話しや  
いいか。とにかく、俺たちが対立することはもうねえよ。そんな心配  
しなくてもな。——所で、その十字架は一体なんだ？スピーカー…  
なるほど？大方それを通して発せられた言葉に聖なる力が宿るつて  
とこか。音なら相手の強さ関係なく耳に届かせることができるし、  
中々強力じゃないか」

「えっ、あ、ど、どうも…？」

褒められて困惑するアーシアを鼻で笑い、アザゼルは今度こそ本当  
に去ろうとする。

しかし再び足を止め、最後に、と呟いてから俺にこう言ってきた。  
「ああ、そうそう。サタンのガキ。お前、随分と女の胸に執着して  
るじゃねえか。リアス・グレモリーの素敵なバストだけじゃ我慢でき  
ねえくらいにな」

「んなつ…!!なんで俺のおっぱい好きをテメエが知ってたんだよ!!」

「まあそう怒るなって。——お前が恋人相手にや奥手っぱいから一つ  
良いアドバイスをしてやる。おっぱいってのは揉むためだけにある  
んじゃない。吸う楽しみだつてある」

「はんっ！んなこと言われなくても」

「そして。おっぱいってのは、その先っぱを押す楽しみもあるんだ」  
「——なに?」

先っぱを、押す…だと?

コイツは、コイツは一体何を言ってるんだ?

おっぱいの、先っぱ。女の子の敏感な所。

俺達が生まれた時から吸っていて、大人になってもなお吸いたいと思えるような素敵スポット。

そんな大切な所を、押す?

そんな——そんな、素敵なコトがあるというのか…?!

「その様子じゃ、やっぱり知らなかったみたいだな」

「し、知らないも何も、そんなスイッチ押すみたいなノリで触る訳ねえだろ普通! っつか俺、まだ部長のおっぱいをまともに揉んだことすらねえんだぞ!!」

「え、まだだったのかイツセー」

うっせーほっとけ! いざって時にへタレる男で悪うございましたねえ!!

「スイッチ? いや違う。女の乳首ってのは、時にブザーになるのさ。押すと鳴るんだよ」

「な、鳴る? 何がだよ。一体何が鳴るって言うんだよ!!」

「いやーん……ってな」

「ツ?!?!」

あるで雷に直接撃たれたかのような衝撃。

アザゼルの、敵のはずの…いや、敵だったはずの男の言葉に、俺は脳内に存在するおっぱいのワンダーランドに迷い込んでしまった。

例えば、部長のおっぱい。

ちよつとした動きに呼応するように揺れて震えるあの素敵な柔らかなおっぱいを、ブザーのようにポチつと押してみたら——。

『いやあんっ……!』

艶やかな声、ほんのり赤くなる頬!

そして未だ俺は知らない、コリコリとしているだろう乳首の感触!!

お、押したいッ! 一度で良いから押してみたいッ!!

「い、イツセー先輩がすぐくだらしない顔してますう…」

「あー、気にしなくていい。コイツはそういうヤツだ」

「はははっ、まさかそこまでお気に召すとはな。——ま、なんだ？主様のお乳でも、試しに一発つついてみると良い。もしかしたら——  
ああ、いや。これは言わないでいいか。それじゃあな」

そう言つて、今度こそアザゼルは去って行った。

それでも、俺の脳内は既におっぱいブザーの事で頭が一杯なままだった。

「おっぱい……先っぽ……ぽちつと……いやーん……」

「…さ。イツセーは放っておいて、神器を使いこなす特訓を開始しよつか。匙、手伝ってもらつていいか？」

「え、あー…うん。いいぞ。『黒い龍脈』に神器の力だけ上手く抜き取るような器用さがあるなんて、考えてもいなかったが……できるなら、いずれ強力な神器を持つ相手と戦う時にも活かせるかもしれねえし」

「ま、最初の内はブーステッド・ギアで補助してやるから。ギヤスパーは、頑張れるよな？」

「は、はいっ！頑張ります！」

## 神社の天使と救えない者

ギヤスパアの神器指導もそれなりに軌道に乗りつつある今日この頃。

朱乃さんからの呼び出しがあり、俺とアーシア、そしてゼノヴィアの三人は、とある神社に向かっていた。

理由はきつと、俺が前々から頼んでおいたアレだろう。

そのことについて、直接関係のある二人も呼んできたってとこだろ  
うか。

「ここが神社、か。宗教が違うから一度も足を踏み入れた事が無かったが、なるほど。これが和の風情、というヤツなのかな」

「石段に、涼し気な木々…なんだか、落ち着きますね。私達は、悪魔、ですけど」

「それは、裏で行われた取引があつてこそですわ」

石段を登りながら談笑していた俺達に、上の方から朱乃さんの声が届く。

視線を向けると、声の聞こえた所には、巫女装束の朱乃さんが微笑みながら立っていた。

※――

かなり前からこの神社に住んでいる、という話を聞きつつ朱乃さんと石段を登り、神社に着く。

どうやら部長が、家の無い朱乃さんを慮ってこの無人の神社を住まいとして使えるようにしてくれたらしい。

感謝の言葉しかないが、しかし家が広いせいで掃除が大変なのが困る、と笑いながら愚痴っていた。

「そういえば、ですけど。私達ってどうして呼ばれたんでしょうか……？」

「ああ。輪廻が呼ばれるならともかく、私達も一緒になると……聖なる力が、何か関係している……とか？」

「うふふ。それはお会いしてからののお楽しみですわ。――ただ輪廻君はもう、わかってるみたいですけど」

「強い気配も感じますしね。しかし今いるって事は、待たせてるって事なんじゃ…」

「それは大丈夫ですわ。先方も、来る時間が遅い早い等を気にする事は無いとおっしゃってましたし。——ほら、着きましたわよ」

長い石段登りも終わり、ついに境内に上がる。

直ぐに視界に映ったのは、無人と言えど綺麗に残っている神社と、賽銭箱の前で微笑みながら佇む、白い翼の生えた男。

金髪的美男子は、俺達を視認するところちらに近づいてきて、柔らかな雰囲気のまま口を開く。

「初めまして。よくぞ来てくださいました。私はミカエル。天使の長を務めさせてもらっている者です」「なっ!?!み、ミカエル様!」

相手がミカエルだとわかったゼノヴィアとアーシアが、驚きつつも即座に跪く。

しかしその行動が悪魔的にアウトだったのか、痛ッと言って二人とも頭を抱えた。

それを見てミカエルが「自然体で構いませんよ」と言い、二人は申し訳なさそうにしつつその言葉に従った。

「色々聞きたいことがあるでしょうが……話は、中で」

※——

神社の本殿につき、ミカエルと向かいあうようにして俺達三人が座り、その横で朱乃さんが平素と変わらぬ笑みを浮かべている。

なんだかお見合い気分だ。まあ、ミカエルはあまり異性に興味があるタイプでは無いんだけども。

「さて。まず最初に、お二人に謝らせていただきたい。我々の勝手な都合で、同じく主の教えに従い、主を敬愛する者を、異端として排斥してしまったことを」

「あ、頭をお上げください！私達は、微塵も気にはしていませんから」「ええ。そうです。私に至っては、己の意志で教会を離れた身。その上でミカエル様に頭を下げさせたとあっては、かつての同志たちに申し訳が立ちません」

開口一番頭を下げたミカエルに、アーシアとゼノヴィアが冷静さを

装いつつも慌てる。

仮にも自分たちの宗教のトップみたいないな存在だからな。そんなすごい人に頭を下げられたら、そりゃ驚きもするだろうさ。

相手は天使の長だしな。

「……神が死に、人々を救済するために存在した『システム』は不完全な物となつてしまった。それゆえに切り捨てずにはいられない信徒が多数生まれてしまったのは、偏に主の御心を理解しきれぬ我らの至らなさが故です。だからこそ、悪魔をも癒す『トワイライト・ヒリング聖母の微笑』の持ち主であるアーシアを追放し、神の不在を知り、教会を離反する意志を固めたゼノヴィアを放つておくことになってしまいました」

「それでも、私達は今、幸せですから。もしかしたらこれも、主の御導き……だったのかもしれないと、私はそう思っています」

「私も、同じです。教会を離反したとて、主を思う気持ちは同じ。しかし教会に属していた時には無かった新たな喜びや発見に、日々が明るく彩られていると楽しく思っています。だから、ミカエル様が気に病む事等、一つもございません。——強いて気になるとすれば、同じく神の不在を知ってしまったイリナの事が」

「紫藤イリナならば問題ありません。彼女は神の不在を知つてもなお教会に残る意志を固めてくれた者。それを無理矢理追放するような真似も、異端の烙印を押すような真似も、絶対にしません」

その言葉を聞き、ゼノヴィアはほつとしたように大きく息を吐く。なんだかんだ、気にしてたんだな。

その後もいくつかの言葉を交わし、二人が今の状況に対して理不尽を感じている事が無いとしたミカエルが、本題に入る。

俺との取引で、既に決まっていた事だ。

まあ、二人への俺からのお節介みみたいなモノだが、喜んでもらえる嬉しい。

「では、本題に入るとしましょう。今日私がここに貴方方を呼んだのは、貴方方の意志を問うためです」

「私達の、意志？」

「はい。——貴方方は、今でもなお主を想い、主の御言葉を話し、主を

賛美する歌を歌ってください。しかし、それは悪魔である貴方方を無条件に苦しめてしまう……しかし神が死に、かくあれかしと定められていた『システム』が揺らいだ今ならば、貴方方が宗教行為を行って受ける痛みを無くすことも可能です」

「そ、それってつまり、私達が聖書を読んでも、十字を切っても、痛みを受けない……と？」

「はい。貴方方が望むならば、私は喜んでそのようにいたしましょう。それが私にできる、唯一の償いなのですから」

そう言つて微笑むミカエルに、二人は互いの顔を一瞬見て、そして頷いた。

「はい。是非、お願いします」

「教会を離れたと言つても、やはり神を慕う気持ちは揺るぎありません。今まで通りの宗教行為が可能ならば、それに越したことは無い」  
「お二人の意志は、確かに聞き受けました。『システム』の変更には少々時間がかかるので、明日まではまだ聖書を読む事も聖歌を歌う事も出来ないと思いますが……必ず、明日からは可能となるはずです」  
「ありがとうございます……で、ですが、なぜ私達にそんな措置を？」

「私達以外にも、異端とされて去って行ってしまった者は多くいたと思いますが……」

「それは立神輪廻……今代の赤龍帝が、私にそう取引を持ち掛けてきたからですよ」

「え？」

二人が俺の方を見てくる。

まあ、いい取引だったと思う。俺が渡したのは技術で、貰ったのがアーシアとゼノヴィアの信仰の自由。

渡した技術だって、俺には何の痛手も無い物だし。……いや、部長たちにとっては良くないか？

『聖書の剣』と呼ばれる物のサンプルと、簡単な製造法を教えてくださいました。その代わりに、貴方方の信仰を自由にして欲しいと」

「そんな事を……で、でも良かったんですか？聖書の剣って、すごく貴

重な物なんじゃ」

「聖書一冊から数百本作れる代物だし全然問題ないさ。それに、俺が作るならともかく天使や教会で作るなら制作にかなりの時間と労力がかかるし、あまり三大勢力のバランスも崩さない」

「ええ。聖書の一ページが、誰でも操れる聖剣に早変わりというのは素晴らしいですが……如何せん、聖なるオーラを一点に貯めるという工程が難しく、量産は難しいというのが現状の結論ですね。ですが、それで良いだろうと思ってもいます。少しづつ数を増やすだけなら、信徒たちの自衛手段として広げつつも、他勢力をあまり刺激せずにすむでしょうし」

俺の製法だと、倍加と譲渡無しじゃ作れないからな。

強い光の力を持つ天使なら倍加も譲渡も不要かもしれないが、その場合の作り方を自分達で模索してもらおう必要があるし、まだまだ量産は厳しいだろう。

「……では、そろそろ私はお暇させてもらいましょうか。これから戻って『システム』を変更する必要がありますからね」

「あつ、その、ありがとうございます！」

「礼を言うのであれば、私ではなく赤龍帝に。彼がこの取引を持ち掛けてこなければ、今この場で私達が会う事も無かったはずですから」  
そう言つて、ミカエルは強い光と共に去つて行つた。

残されたアーシア達は、知らず力の籠つていた肩を下ろし、俺の方を向いて、感謝の言葉を一言告げた。

——今思つたけど、今までは自分もダメージを受けるからギリギリ許されていた聖歌の攻撃がノーダメージになるって、結構やばいのは？

※——

アーシアとゼノヴィアが先に家に帰つて、後には朱乃さんに引き留められた俺だけが残った。

今は場所を変えて、茶をいただいている。

美味しい。ただ抹茶だからか、落雁が食べたくなる。

もてなしてもらっている側だし、要望とかは言わないけどさ。

「えっと。俺に話があるようですけど」

「ええ。一つ、聞きたい事があって」

俺の言葉に、神妙な面持ちで頷く朱乃さん。

「普段の笑みも姿を消している彼女に、こちらも自然と肩に力が入ってしまおう。」

「……あなたは、未来と過去とを行き来する赤龍帝……そうよね？」

「はあ……そう、ですけど」

「だったら……だったら、貴方のその力で……私の母を、助けて欲しいの」

「——朱乃さんの、お母さんを？」

聞き返した俺に、彼女は頷いた。

そして、詳しい事情を語りだす。

彼女と、その母に、何があったのかを。

何より、彼女がどのような存在なのかを。

「母の死について話す前に、私の正体について、見せるわ」

「正体って——その、翼」

服をだけさせ、朱乃さんは背を向けて、翼を出現させた。

片方は、蝙蝠のような悪魔の翼。

そしてもう片方は……黒く染まった天使の羽を思わせる、堕天使の翼。

「そう。私の中には、堕天使の血が流れているの。幹部バラキエルの血……ふふっ、汚らわしいわよね。とても惨めで、みすばらしくって、悍ましい翼。私が悪魔になったのも、悪魔になればこの翼を——あの男の痕跡を失う事ができると思ったからなの。けど結果は、見ての通りよ。悪魔と堕天使の翼をもつ、歪な存在に成り果ててしまった」  
「……バラキエル、ですか。もしかして、貴方の母親の死に、何か関係しているとか」

俺の言葉に、朱乃さんは無言で頷いた。

そして、その瞳を憎悪の色に染めて、語りだす。

「私の母が、傷ついたバラキエルと出会い、その傷を癒したことが二人の出会い。その縁で私が生まれ、しばらくの間平和な日々が続いた。」

私と母が暮らす家に、仕事の合間を縫って顔を見せるバラキエル。私は彼を父と慕って、いつかは家族三人で暮らせる日が来て欲しいと――そう、願っていた」

「……まさか、バラキエルが貴方の母親を？」

「いいえ。直接手を下した訳じゃない。――けど、裏切ったような物よ。ある日、バラキエルが不在の時、彼に恨みを持つ集団が私達を襲った。そして母は私を庇って殺された。――それでも、バラキエルが私達を助けに来ることも、生き残った私の下に来ることも、無かった」

「……なるほど。それで、俺に時間を遡って、過去の朱乃さんとお母さんを助けて欲しい……と」

「ええ。貴方ならそれが可能なはず。――お願い、します」

深く頭を下げて頼んでくる朱乃さんに、しかし俺は言葉に詰まった。

はつきり言わせてもらうなら、それは不可能だ。

俺が過去に干渉するのは、歴史を変えない範囲だけ。そうでなければ、この世界は勝手に崩壊する。

確かに俺は色々な存在に喧嘩を吹っ掛けてみたり、サーゼクスの師匠面なんかしたことがある。

だがそれでも歴史は、大まかな本筋を逸れる事は無かった。

もし仮に逸れる事があったならば、俺はそれ自体を無くすつもりだったし、一応問題は無い。

しかしこの話は違う。

朱乃さんの母を救ってしまえば、朱乃さんがグレモリー眷属に加わる事も、その先の歴史も全て変わってしまう。

そうして本来のルールを外れた世界は、世界の修正力によって、そのものが消失する。

そうすれば本末転倒だ。救った瞬間に、この世界の住民である彼女達は死よりも救いのない状態になってしまう。

生き残るのは、この世界の住民ではない俺と、魂レベルで同化しているドライグだけだ。

過去に、俺はソレを体験している。

ほんの気まぐれに『聖剣計画』の被験者たちを救おうとした時に、この世界は一度崩壊した。

あくまで木場達を助けるのはリアス・グレモリーでなければならなかったのだろう。

じゃあ黒歌は？と思うだろうが、彼女は遅かれ早かれイツセー達の仲間になるし、イツセーに好意を向けなくてはいけないのはリアス・グレモリーただ一人であって、他のハーレムメンバーが生涯独身だろうが他の男や女に好意を抱こうが、なんの問題も無い。

——かといって、ソレを馬鹿正直に話した所で彼女は納得しないだろう。

できるわけが無い。俺だって同じ立場なら、例え理解はできても納得はできない。

……恨まれる以外、無いか。

「すみませんが、それはできません」

「なっ…!!なぜですか!?!貴方なら、きつと私達を襲撃した集団相手でも……!」

「勝てない、とかそういう問題じゃ無いんです。——予定説って、知ってますか?」

「世界の全ては、神の定めた通りに動いている…ですか。それとこれとに一体なんの関係が」

「過去を変えた場合。それは最終的に同じ結末にたどり着くならば許され、本筋に影響を及ぼさないのなら無視される。しかし、大きく何かを変える干渉は、修正力が動く原因となる」

「修正、力…?まさか、母の死は、すでに決められたもので…:助けようと、別の理由で死ぬと?」

「それもあります。それが以前に世界が滅びる。いや、消滅すると言っている。事実俺は、一度人助けをしたせいで世界が消失し、無だけが残ったのを見ました。——貴方の母を助けても、その瞬間貴方達は消えてなくなる。死ぬとか生きるとか、そんな事が関係なくなるんです」

「……じゃあ、私の母様は、何があっても助からない……と？」

絶望しきった顔をする朱乃さん。

その目から涙がこぼれるのを見て、俺は無意識のうちに口を開いた。

「確かに、朱乃さんのお母さんは助かりません……けど、だからこそ、今の朱乃さんがあるんじゃないんですか？慰めになんてならないかもしれないですけど、今の朱乃さんだって、部長みたいな友人が居て、イツセー達みたい仲間がいて、駒王学園にはあなたを慕う後輩たちが沢山いる。確かに、父母の愛というのはかけがえのない物かもしれませんが、今あなたが持っている物だって、大切な物のはずです。失った物を忘れろとか、そんな事は言いません。——けど、それにばかり執着して、今ある物を見失って欲しくないんです」

「貴方に何がわかるっていうのよ！親を失った事なんて無い癖にツ！！」

「わかりませんよ、俺には。——それでも、せめて寄り添うぐらいはできる。貴方の母を救う事ができなくても、今の貴方の大切な物を、今の貴方を守るくらいなら、俺もできる。代わりになんてならないかもしれないですけど、だから、その……そんな絶望ばかり、しないでください」

一度激昂した朱乃さんは、続く俺の言葉に、今度はしおらしくなつて、すすり泣くように問いかけてきた。

「……寄り添うくらいはできる、って……今の私を見ても、そう言えるの？汚らわしい堕天使の翼を生やして、現実を受け止めきれずに泣き出して、貴方に当たるような真似までして。そんな、貴方達の知るような完璧な姿とは程遠い私に、等身大の私に……寄り添えるの？」

「朱乃さんは朱乃さんですよ。二大お姉さまとしてのあなたも、今こうして俺に自分の弱さを見せてくれているあなたも、どっちも朱乃さんです。俺が力になってあげたいと思う、姫島朱乃ですよ」

「……私を、守ってくれるの？こんな私を。悪魔で、堕天使の、姫島朱乃を」

「求められれば、いくらでも。——後、朱乃さんは汚らわしいとか言っ

てますけど、その翼。コカビエルや他の堕天使なんかと全然違って、綺麗ですよ」

「ツ……………そんな、事」

言葉を切る。

なんだろう、余計なコトを言ったとかじゃ無ければ良いが。

正直自分でもこれで良いのか怪しく思っているくらいだし、これで「もう顔も見たくない」とか言われたら耐え切れない自信があるぞ。

表情には出さないものの内心不安で仕方が無い俺に、朱乃さんは呟く。

「……………そんな事言われて、堕ちないはずがないじゃない」

「えっ?」

「——ねえ、輪廻君。私、一番じゃ無くて良いわ。いいえ、最悪五番目でも構いませんわ」

「えっ? いや、いきなりなんの番号?」

混乱する俺に、朱乃さんはなんだか吹っ切れたと言いたげな顔を見せる。

それどころか、なんだかちよつと蠱惑的な笑みまで浮かべて…………

「輪廻君も、イツセー君ほど大っぴらにはしていなくても、そういうコト、興味あるわよね?」

「は、はい? いや、え? さつきから全くついて行けていないんですけど何事——うおあつ!」

抱き着かれた。突然。

朱乃さんの体温を、かなり近くに感じる。

そりやそうだよな。服がはだけてるんだもの!

いやいや何事!? なんで俺にいきなり抱き着いて……………その、そういうコトってというのは、エッチなお話という事でしようか!?

「こうして女の人に抱き着かれるの、お好きかしら?」

「は、はいっ! お好きです!!」

『(相棒…………)』

ドライブが情けないと言わんばかりに溜息を吐く。

うるさい黙ってる! 半裸の女性から抱き着かれるなんて黄金体験、

俺は生まれてこの方数度しか味わっていない！

「うふふ。これからは私も、こういうコトを沢山してあげますわ」

「マジですか!? そりゃ嬉しい限り——ツ!!?」

「へーえ。嬉しいんだ」

朱乃さんの体で隠されて見えないが、部屋の入り口から聞こえた声は確かに黒歌の声だ。

というかちよつと前から気配自体は感じてたし。

なのになんでこんな他の女にデレデレする所見せちやったのかと言われれば、俺が女性から攻めに転じられると弱い童貞野郎だということない。

情けない赤龍帝と笑い給え。

『(お前の話に俺の名前を持ち込むな! 赤童帝チエリードラゴンなんて名で呼ばれるのはもう嫌だぞ!)』

(昔オーデインに呼ばれたヤツか。まだ引きずってたかお前)

「あら、黒歌。ここに何の用かしら?」

「ご主人様の帰りが遅いから迎えに来たにやん。けど、そしたらつまみ食いの瞬間を目撃しちゃったって所ね」

「あらあら、申し訳ありませんわ。け、ど。彼の方もつまみ食いされることに何ら抵抗は無かった用ですわよ?」

「……ふんつ。今のうちに良い気になってなさい。ご主人様だって、私の方が……—帰るわよ」

「え、あの、黒歌」

「良いから。黙って帰る」

「……はい」

——これでハーレム作るとか、大丈夫なのかなー。

そんな事を思いつつ、俺は朱乃さんに挨拶して、黒歌と共に帰路に就くのだった。

※——

「ねえ、ご主人様」

「…あ、うん? どした」

帰り道、人通りの少ない場所に差し掛かった所で、ようやく黒歌が

口を開いた。

「ご主人様って、ハーレム作りたいのよね」

「……まあ、そうだな。うん。知られてたよね、やっぱり…」

「私が知ってたかどうかは今はいいの。——ご主人様だから、別に沢山女の子囲おうと、誰も悲しませるような真似はしないでだろうし。だけど一つだけ聞かせて？」

そう言つて、俺の方に体を向ける。

その顔は真剣そのもので、俺は自然と生唾を飲み込み、次の言葉を待った。

「……ご主人様には、一番って…いるの？」

「——それは」

いる。勿論いる。

というか今ここにいる。目の前に。

確かに他にも魅力的な子つてのは俺の周りに沢山いるけど、それでも、俺は黒歌が一番好きだ。

直接伝えられなくても、その気持ちに変わりはない。

『(いや、さつさと言えはいいだけだろう)』

(うるせえつ、俺にそんな度胸があったらもつと前から俺と黒歌はジューテームな関係だつての！…いや、それでもないかもしれないが！)

「いるよ、一人。この先誰に好意を向けられても、俺にとっての一番は、ずっと——」

「そう。——なら、それでいいにやん」

くるつと体を回転し、先へ歩いていく。

その時見えた横顔は、なんだかちよつと笑っているように見えた。

……これ、黒歌も気づいてるんじゃないかな、なんて。

その上で何も言わず何もせずにいるって事は、俺はもしかしたら待たせているのかもなつて。

ちよつと、思った。

## 会合という名の罠

ギヤスパーに神器が使いこなせるようになる特訓を施すようになってからしばらく経った。

俺という同じ系統の力を持つ存在があつたからか、大分使いこなせるようになったのではと思う。

あまり連続して使いすぎるとすぐにバテたり暴走してしまったりするものの、今では数回くらいなら狙った物の時間のみ停止させることができるようになった。

そのため、元々は会合に連れて行く事は出来ないという話だったが、連れていける事になった。

ギヤスパーも成長が実感できたからか、飛び跳ねる程喜んでいた。後は、黒歌と俺も会合の場に行く事になった。

まあ、理由はお察しの通り。黒歌から罪人というレッテルをはがすためである。

いや、実際にはもう既に？がれているのだが、公的な場でサーゼクス<sup>魔王</sup>が認める必要があるのだ。

「……しかし、壮観だねえ。魔王に大天使に、果ては最強と噂の赤龍帝。んなバケモンみたいな連中が、よくもまあ日本の学校に集まったもんだぜ」

「貴方だって墮天使の長でしょう。十分なビッグゲームです」

「へいへい。お世辞をどーも。——んじゃ、そろそろ始めつか。全員揃ってるよな？魔王四人、四大熾天使全員。そして墮天使からは俺とシエムハザ。話の中心に立つ赤龍帝と、コカビエル打倒の立役者であるリアス・グレモリーとその眷属。そしてソーナ・シトリーとその眷属たち」

アザゼルに改めて言われて、この場に揃っている存在の凄まじさに気づく。

さらっと四大魔王全員来てるし、四大熾天使も揃っている。

俺はそうでもないが、イツセイ達は居心地が悪そうだ。

そりゃまあ、各陣営のトップがほぼ全員揃ってるんだもんな。仕方

ないだろう。

「まずは、コカビエルの件について話そうか……と言いたい所だがな。その話は、もう一個のやばい話と一緒に話した方が良さそうなんだな。ま、さらつと言わせてもらおう。——うちに事実上所属していた白龍皇、ヴァーリが離反した。俺の部下の持つ神器も、俺が作った人工神器も研究資料も、後ついでに先日的一件で確保したコカビエル、バルパー、フリード、伊吹の四人も、ゼーんぶ持っていかれた」  
「……は？」

思わず素の声が出た。

だってヴァーリの離反は、原作だとこの会合に禍カオス・ブリゲイトの団の襲撃してきた後のはずだ。

なんで始まる前から離反するような真似を——まさか、夢幻人か？ もしくは、俺に敗れた過去を持つアルビオンが、力を得るためならばとか言っつてそそのかしたか……ううん。わからん。

あまりにあんまりな報告に、魔王や熾天使の全員が驚愕する。

今代の白龍皇が歴代最強と呼ばれているのも、それなりに有名な話だからな。

「堕天使勢力が白龍皇を招き入れた話は聞いていましたが……離反されて、しかも神器を奪われた？人工神器など、気になる事は沢山ありますが……そちらの被害はどれくらいの物だったのでしょうか」

「負傷者は無い。ただただ奪って逃げてっただけだ。赤龍帝を倒すにはこれくらい必要だ、とか言っつたらしいが……ったく。おかげで

スラッシュ・ドッグ  
刃 狗は壊滅だ」

「神器を奪った……という事は、殺したのではないのかい？」

「いいや。白龍皇の力を使って、神器の力の大半を奪っただけらしい。だから一応、奪われた奴らにも神器の力はほんの少しだけ残ってる。発動できない程度だがな。しかも、神器に宿る存在の意志だけは正式な所有者の方に残されて、ヤツが持つてるのは力のみなんだと。都合のいい野郎だぜ」

やれやれ、と肩を竦めるアザゼル。

そんな彼に、サーゼクスは呆れたように溜息を吐いて、「一先ずは頭

に入れておこう」とだけ答えた。

「ま、アイツが現魔王や熾天使相手に喧嘩売るとは思えねえし、あまり重要でもないさ。アイツはもう、赤龍帝……立神輪廻にしか興味がない。明確に超えるべき壁と判断されてるぞ」

「……はあ。一応赤龍帝と白龍皇は和解しているんですけどねえ」

「えっ!?! そうなの!?!」

今度は俺の言葉に全員が驚く。

いや、サーゼクスだけは俺が武勇伝として語ったから驚いてないな。なんでか自慢げな笑みを浮かべている。

「ええ。俺が昔、強くなるためについて言って色んな存在に過去現在未来関係なく喧嘩を吹っ掛けていた時に、かつての白龍皇と対峙しました。その時に色々あって、和解したんです」

『色々については何も聞くな。良いか、何も聞くんじゃないぞ』

念を押すドライグだが、和解できた理由が俺もその時の白龍皇もどっちも人一倍の変態で、お互い苦勞してるなーみたいなノリになったが故だから恥ずかしかつているのだろう。

だてにチェリードラゴンと呼ばれたわけではない。あまりその名前は浸透していないが。

まあ、しなくてもいいけど。俺もちよつとは恥ずかしい。

「それもあって、赤龍帝と白龍皇の戦いは本気の殺し合いから、ある種ゲームや競技に近い物に変わったんです。勿論、当事者が望むなら殺し合いも可能という話ですけど」

『まあ、白いのは自分の力が奪われた事や、あんな理由で和解する事になっちゃったのが屈辱的で仕方なかったらしくってな。随分と今代の相棒に、戦う術を教え込んでいるらしい。俺の相棒はともかく、あのヴァーリとかいうヤツは殺し合いを所望するだろうからな。被害は凄まじい事になるぞ』

「お、お待ちください。白龍皇の力を、奪った……?」

『ああ。そうさ。コイツは歴代最強になるためって、迷わずアルビオンの力を取り込みやがった。今やコイツは倍加半減譲渡吸収反射透過となんでもござれの赤龍帝。奪われた神器がなんだが知らな

いが、相棒に勝てるとは到底思えないな』

おいおい、褒めるなよドライブ。口元が緩む。

ただまあ、ヴァーリが原作以上の力を持っている事が確定した以上、俺もあまり気を抜けない。

元々気を抜くつもりは無かったが、必要以上に引き締める準備はした方が良さそうだ。

「はっはっはっ！いやいや、アイツもアイツで奇跡みたいな存在だが、こっちはもはやなんかの間違い……そうさな、この世界の『バグ』をつつた所か？データを取らせてもらったが、数値が軒並み計測不能って出てきたくらいだしな」

「データを取った？赤龍帝のかい？」

「ああ。取引したんだよ、コイツと。俺の神器研究の資料を見せる代わりに、コイツのデータを測って研究する許可を貰ったわけさ。ま、結果としてはこっちの大損だな。何がなんだかさっぱりわからなかった。強いて言うなら、生身で最上級悪魔クラスって事くらいか？それしか測定できなかつたぜ」

アザゼルの言葉を聞きながら、測定時の事を思い出す。

機械が煙吐き出してな………なんでか俺が怒られた。自然体にしてただけなのに。

どんだんサーゼクスがニヤニヤしていくのを見つつ、俺は話し合い………というか、雑談を傍聴する。

既に和平は決まっているんだ。トップ陣営はあまり緊張感が無いし、なんだか和気藹々としてつつある。

「墮天使側との取引はデータの交換……天使側は、『聖書の剣』の製造法とサンプルの提供と引き換えに、アジア・アルジェント並びにゼノヴィアの宗教行為に対するダメージの完全免除を行いました。悪魔となつても主を思う彼女等に、幸あれ、と」

「へえー。てつきりお前はガブリエルに乳揉ませろとか言うもんだと思ってたぜ」

「へっ!？」

「失礼すぎねえかな!?後、そんなつもりは全然ないのでそんな警戒心

をあらわにした感じで俺から胸元を隠さないで貰って」

「透過が使えるんだったら透かして見れるだろ」

「うるせえっ、俺の変態キャラを着実に確立しようとするなッ！」

自分から言うのは有りだが、第三者から言われるのは無し。これが俺である。

どんどんと場の空気がカオスになりつつあるも、そこにサーゼクスがうつきうきで爆弾を落とす。

「悪魔側には、SS級はぐれ悪魔である黒歌の罪を無かった事にする事を要求してきた。元々彼女には事情があつた事も説明された上でね」

「……あ、だから黒歌がここにいたんだ」

「ファルビウム……んんっ。とにかく、私はソレを飲んだ。異論は認めないし、輪廻からも認めさせないとの言葉を貰っている。いくらお偉いご老体方が文句を言えども、この決定は不変の物だとする。つまり、黒歌は今日を以って無罪放免だ。主殺しをしたとは言え、その事情とバツクの赤龍帝を鑑みれば、そうする他ない」

「っ、やったあっ!!」

黒歌が抱き着いてくる。

俺もすっかり抱き返し、頭を撫でてやる。

見れば小猫の方も、安心したような、嬉しそうな顔をしつつ、しかしどこか複雑そうな目をこちらに向けていた。

多分、俺が黒歌を抱きしめ返しているのが不服なんだろう。

実の姉がどこの馬の骨とも知らん男に撫でられているのを「はいそうですね」と受け入れられないのだろう。

「へえ。事情は詳しく知らねえが、それで良いってんなら良いんじゃないかねえか？」

「でもでもサーゼクスちゃん。赤龍帝の方は何を提示してきたの？」

「え、言っただけだったのか？」

「まあ、サプライズにしたくってね。——輪廻は私に、自分が悪魔となる事を条件として提示してきた」

空気が一瞬で凍った。

天使、墮天使だけでなく、部長たちや会長たち、果てはサーゼクスを除く魔王全員までもが目を丸くして、一気に剣呑な雰囲気纏う。「おいおい。それはつまり、悪魔という超越者クラスの存在を新たに迎え入れるって事だよな？ 和平の話はどうした？ 今まで白龍皇を事実上引き入れてた俺が言えた事じゃねえが、そんなの俺達全員と戦争する意志を固めたと言ってるのと同じだぞ」

「ええ。今代の赤龍帝、立神輪廻が悪魔勢力に所属するというのが一体どれほどの軋轢を生むか、わかっていないとは言わせませんよ」

「勿論、私だってそれはわかってるさ。——だから、輪廻。私達悪魔は、君の提示した条件を受け取らない」

「……えっ、ちよつと待て。それは」

「黒歌の無罪の件はそのままだ。——つまり、私達は君から何も受け取らずに、君の要望を聞き入れるという事だね」

「そ、それは構わないのでしょうか…?」

ガブリエルの問いかけに、魔王たちも側近も頷く。

…そう言えばグレイフィアさんとそっくりな人がいるんだけど、彼女は一体誰だろうか。

サー坊は、ここで今日一番の爽やかな笑みを見せ、そして自慢げに言い放った。

「構わないさ。私と輪廻の仲なんだからね」

「……あの、サーゼクス様。それは、どういう?」

「いや何。かつて私の師であり、今も私が憧れを抱く存在こそが輪廻だというだけの話さ。まあ、後はご老体たちの意見が必ずしも通るわけではないと思い知らせたかったのもあるけどね」

「さ、サーゼクスの師匠なんぞやってたのかお前は」

「ええ、まあ。ただこんな嬉しそうに暴露されるとは思いもしませんでしたけどね」

サー坊はサー坊のままだった、という事だろう。

皆も驚き半分呆れ半分と言った様子だ。

「ああ、でも完全に無償だとアレだし、せつかくだから禁手見せておくれよ、禁手」

「え、えー……お前、この狭い教室の中でやったら不味いだろ」

「良いじゃないか、ね？」

「お、お兄様……」

兄の痴態に顔を覆う部長の声が、やけに響いた気がした。

※――

三大勢力の会合。

いい意味でも悪い意味でも、俺が想像していたのとは違った。

来る人はてつきり魔王様一人にアザゼル一人、後は天使のトップ一人と、それぞれの付き添い……くらいかと思っていたら、まさかのトップそろい踏み。

その上始まりはそれなりに緊張感があつた物の、途中からはなんだか悪ふざけが始まって、今は絶賛セラフオール様の魔法少女コス撮影会の時間だ。

もう何が何だかわからない。

「……しかしまさか、サーゼクス様と輪廻が知り合いだったなんてなー」

「り、輪廻先輩ってすごかったんですね……色々」と

嬉々としてセラフオール様の写真を撮り続ける輪廻を見つつ、俺とギヤスパーは小さな溜息を吐いた。

サーゼクス様は輪廻の生き生きとした姿に笑顔だし、アザゼルは腹を抱えて「これが赤龍帝かよっ」と大爆笑。つられてミカエル様とやらも笑ってしまっているし、ファルビウム様はマイペースにも布団を敷いて爆睡中だ。

あ、黒歌さんに叱られた。嫉妬だろうな。

「そっちも大変ね……ソーナ」

「リアス……いえ、貴方こそ。まさかサーゼクス様が立神君と肩を組んで歌い始めるとは思いませんでした」

「ほんと、私は何を見せられていたのかしら……」

我らが主様コンビがそれはもう物凄く沈んでおられる。

まあ、こんなフォーマルなはずの場で、あそこまでの痴態を晒したとあつては……ううん。心中お察しするとはこのことか。

勿論、サーゼクス様はグレイファイアさんとリーシアさんにちやんと叱られてた。

双子というだけあって似てるなーと思いつつ眺めていたが、二人同時の説教を受けてもなお笑顔を絶やさなかったサーゼクス様がちよつと不気味になって来たのですぐに目を逸らした。

失礼かもだけど、あの人ちよつとテンションおかしいよ。

現魔王の人達は皆どこかおかしいというか、ノリが軽い人達ばかりだというけど、これはちよつとはっちやけすぎなのではないだろうか。

木場に聞いても、苦笑いを返されるだけだったが。

「…にしても、あの天使の女の人綺麗だよなー」

「ガブリエル様かい？彼女は天界一の美人と言われる程だからね。ただ、そういう事を言うとはっちやけすぎなのでは？」

「あつ、部長」

「……まあ、貴方の女好きはよく知っているけれど。それでもやっぱり、複雑な気持ちになるモノなのよ？」

凄絶な笑みを浮かべる部長に、俺は自然と正座になるのだった。

……はは、でもこうして叱られるというか嫉妬してもらえると、良くは無いんだろうけど、愛されてるって感じられて…ちよつと、良いな。

※——

「この中で会合が開かれてる、か？」

「ああ。アザゼルがそう言っていた。今頃、和平に向けての意見のすり合わせでもしている頃だろうさ」

「ふふふつ。三大勢力の会合が行われるこの場で、全勢力への宣戦布告を行う…素晴らしいじゃない」

「おいおい、最大の目的を忘れたわけじゃねえだろうな」

駒王学園上空。

校舎を見下ろす四つのシルエットが、月明りに照らされる。

一人は、墮天使の元幹部コカビエル。

かつてこの地で聖剣を統合し、三大勢力間の戦争の火種としよう

した男。

もう一人は伊吹狩刈。鬼族の王にして、『イマジネウス夢幻人の幹部。

コカビエルと協力関係にあり、輪廻の命を狙った男。

そして残る二人は、カテレア・レヴィアタンにヴァーリ・ルシファー……旧魔王の血を引く者である。

「無論、俺の目的は『夢幻人』同様。赤龍帝、立神輪廻を倒す事。白龍皇としてヤツを超え——最強の座に、君臨する」

「赤龍帝が最強という話が、そもそも眉唾ものだけど。本当に私達カオス・ブリゲート『禍の団』のトップ、オーフィスを倒したの？」

「さあな。真実なんて俺達にはどうでも良い。大事なのは、グレートレッドを脅かす可能性がある、という話が噂されている事なんだ。最強じゃ無いにしても、その噂が立つくらいには強いというのは確かだしな。だから殺す必要がある」

「信仰の為、か。堕ちた天使と悪魔の前でソレを語るか？」

「なんだ、不快にでもなったか？」

くつくつと笑うコカビエルに、狩刈が冗談めかして笑い返す。

まるで緊張感のないその姿に、ヴァーリは呆れたように溜息を吐き、そして校舎を睨むように見つめる。

「……アルビオン。準備は良いか」

『ああ。赤いのと殺し合うのは、久方ぶりだが……立神輪廻を倒す事は、私の願いでもある。既に奪った神器の効果を馴染ませるのも終わった。後は、その力を振るうだけだぞ』

「…そうか。——そろそろ始めてくれ」

ヴァーリの言葉を聞き、狩刈が右手を掲げると、校舎を取り囲んでいた『夢幻人』のメンバーが、剣の切っ先を天に掲げ、祈る。

「二」我らの命を捧ぐ!! 然る後、我らが希望、白龍皇に、夢幻の力を与えよ!! 「二」

『引換剣』が、願いを受理する。

刀身が一斉に光を放ち、そして剣を掲げていた者たちが一斉に死んでいく。

次の瞬間、ヴァーリの体から真っ白なオーラが立ち昇り、学園に展



## 『最強』

俺達の耳に突然響いたのは、何かが発火するかのような轟音。

それが『人を殴った音』だというのに気づいたのは、開け放たれた窓の外に見えた輪廻と、吹き飛ばされていく白龍皇の姿を視認した時だった。

「……まったく、意味深な事言いだしたと思っただらこれかよ……何が『力を借りる事になるかもしません』だ。時間停止だか何だか知らねえが、たった一瞬で壊滅させてんじゃねえか」

「アザゼル。アレが君や輪廻が語っていた、『禍の団』と『夢幻人』かい？」

「ああ。さっきの莫大な力を生み出したのが大方『引換剣』を使った『夢幻人』で、今の一瞬である赤龍帝がほぼ全滅させたのが『禍の団』だろうな。はははっ、戦う相手を間違えるってのはまさにこのことだろうな」

アザゼルとサーゼクス様が、窓の外へ飛び立ちつつそんな話をしてる。

内容が全く分からない……って訳じゃないけど、大半が何を言っているかわからない。

『夢幻人』と、なんだって？カオス・ブリゲード？『夢幻人』以外にも何らかの組織があったって事か？

そしてそいつらが何かを企んでいて、今の一瞬で輪廻が粗方片付けた、と？

んんん？

混乱する俺の手を部長が引き、皆が外に出たから貴方も外に行きましようとして連れ出す。

温かくてすべすべして綺麗な手だ。

デートはまだ数えるほどしかしてないが、そのたびにこう、手を繋ぐと、なんか性欲とは違うドキドキが来るんだよな。

なんかやばそうな状況の今でも、ちよつと緊張する。

「うわっ、なんだこれ……死体の、山？」

『引換剣』、とやらの効果でしょう。貴方が過去に対峙したという、フェニックス家の三男が持っていた物と同じです。命と引き換えに、願いを叶える剣ですよ」

「えっ、あの剣を使って、一体何を…!?!」

「簡単さ。ヴァーリの底上げだ。さつき一瞬感じた凄まじいオーラは、『引換剣』で強化されたが故だろう。——事実、俺達が張った結果が罅だらけになってるしな。確かに赤龍帝に勝てるなんて夢を、一瞬くらいは見ちまうだろうなあ」

アザゼルやミカエル様が、俺の疑問に答えてくれる。

さらっと凄い事なんじゃねえかな、と思いつつ空を仰ぐ。

禁手状態の輪廻だ。相変わらず直視したくないレベルのオーラ。

そしてその視線の先には、地面に倒れ伏す白龍皇。エクスカリバーの一件の時に、輪廻が止めを刺そうとしていたのを邪魔してきた奴だ。

他にも、なんだかエツチな見た目をしたお姉さんや、コカビエルに狩刈と、強そう（事実コカビエルや狩刈は強い）な奴らが全員負傷した状態で地面に叩きつけられている。

これを、一瞬でやったのか……時間操作ってすごいなあ。なんかもう、感嘆の溜息しかでねえわ。

「ぐっ、がはあっ……!は、ははは。やはりその時間を止める能力。厄介極まりないな。そこの『停止世界の邪眼』ならまだ対策はあったが、世界の法則を思うがままに歪められるとなると手の施しようがない」  
「称賛する余裕があるのか？前にあった時は勝てない相手じゃないとか言ってたが、今の一撃を受けてもなおそう言えるか？」

「ああ、言えるさ。なぜなら俺はまだ、禁手にしかなくていい……感じただろう、先程の俺の力の波動を。龍の極地、『夢幻』の力を一時的に手に入れた俺は、この一戦の間は……『覇龍』を扱える」

その言葉に息を呑む、三大勢力のトップたち。

アザゼルとサーゼクス様だけが、それぞれ緊張感のない顔をしている。アザゼルは「やっぱりな」と言いたげな顔で、サーゼクス様の方は

「それが何か」と言う顔だ。

「は、『覇龍』？」

『ドラゴンの力を宿す神器の真骨頂…とでも言うべきかね。封印されている本来の力を完全に解き放つ代わりに、それ相応の代償を支払わせるものさ。ただあの口ぶりだと、ノーリスクで使えるらしいな』

「そ、それって流石の輪廻でもやばいんじゃないか!? アイツのオーラも、馬鹿にできねえレベルだし!」

「まさか。輪廻が負けるなんて事があれば、それはこの世界が滅ぶ時だけさ」

当たり前のように笑うサーゼクス様に、何とも言えない顔になってしまう。

いや、いくら師匠だったり昔からの友人だったりするからって、信頼しすぎじゃないですかね。

「…はあ。まあ、止めはしないけどさ…アザゼル。ヴァーリは捕獲なんだよな？」

「ああ。殺さずに頼む。死んだら神器の回収ができないかもしれないからな。奪われた分取り返さねえと」

「了解…じゃ、行こうぜドライブ」

『おうよ』

『Change Blaster weapon!!』

鎧の両手部分が砲口に変化し、莫大なエネルギーが収束していく。

Boost Boostと鳴り響く音が、本能的な『死』の恐怖を煽ってくる。

これ、逃げなきゃ近くに居る俺達も危ねえんじゃないや——と思った次の瞬間には、サーゼクス様が結界を張ってくれた。

滅びの魔力でできているのか、触れるとやばいという危機感を覚える。

「ロンギヌス・スマッシュャー…アレって、禁忌に属する力よね？」

「ああそうさ。アレの一発を放つだけで、町一個が枯れ果てる代物だ。それをセーブしているとは言えあんな連発するたあ…やっぱドラゴンを宿す者ってのは、どこかイカれてんだな。——さて、んじゃ俺

達は自分の勢力のイカれたヤツを相手するか」

「イカれた奴、とはご挨拶だな。アザゼル」

いつの間にか起き上がっていたコカビエルや狩刈が、結界内に転移してくる。

なんでか知らないが、前よりも格段に強くなっている……そんな気配がする。

「イカれてるだろ、お前はよ。まったく。何が戦争を始めるだバーカ。俺の事昔散々中二病だのと煽って来たくせに、テメエのが中二野郎じゃねえか」

「ふん。言いたきや言えばいいさ。俺がする事は決して何一つ変わらない！」

光の槍を構えたコカビエルが、一気にアザゼルへと肉薄する。

そして次の瞬間には、堕天使二人は空中に移動し、光の槍同士で剣戟を始めていた。

は、速すぎる！全く目で追えなかった！

コカビエルなんかは、あの時の輪廻の攻撃で片腕無くなってるつてのに……改めて、自分がまだまだだと思いい知らされる。

「まったく。コカビエルは直情的というか、なんといいですか……久しぶりね、サーゼクス、ファルビウム、アジユカ。そして——セラフォーラー」

「カテレアちゃん……一応聞くけど……『禍の団』に、入ったの？それとも『夢幻人』？」

「両方、と言えば良いでしょうね。私達『禍の団』と『夢幻人』は先日イマジナリ・カオス・ブリゲードのコカビエルが引き起こした一件の日に同盟を結んだ。言うなれば、『禍なる夢幻団』」

『禍なる夢幻団』……や、やべえ。何が何だかさっぱりわからん。

部長の顔を見ても、いまいちよくわかっていない様子だ。

ただ、魔王様達は皆神妙な顔をしているし、後ろで金棒を振り回してニヤニヤしてる狩刈も怪しげだし、とにかく良い話ではなさそうだ。

当たり前か。

……つてか、カテレアって呼ばれたあの人……魔王様達の知り合いなのか？

「そんな物を作って、君たちは一体何を望むんだい？」

「貴方にそれがわからないとは言わせませんよ、サーゼクス。我ら旧魔王派は、貴方達新魔王派の思い描く世界を見限った。平和、共存、助け合い。全くもってくだらない。この世界はもつと陰惨で、凄惨でなければならぬ。本質も見ずに理想だけを語る貴方達には、もはや誰も従いはしない」

「そんな……」

「旧魔王派は全員そちら側、か……やれやれ困ったな」

カテレアと呼ばれた女性の言葉に、魔王様達はそれぞれ違った反応を見せる。

ただどれも芳しい物ではない。

旧魔王とか新魔王とかが良くわからない俺でも、取り敢えず悪魔の多くが敵に回ったという事だけはなんとなくわかった。

「今私がこの場にいるのは、その事実を伝えるため——そしてセラフオール。かつて私からレヴィアタンを奪った貴方に復讐するためです」

「っ、カテレアちゃん、私は——」

「気安く呼ぶなッ!!——んんっ。とにかくここで貴方を殺し、『禍なる夢幻団』の活動の第一歩を……そして、私が真のレヴィアタンとして返り咲くための踏み台とします……この神器を使って」

そう言っ取り出されたのは、禍々しいオーラを纏う傘。

感じる気配は、悪魔と……ドラゴン？みたいな。

似ているけど、ドラゴンの物ではない。

言うなれば蛇、か？

『ほう……これは面白い、面白過ぎるぞ！レヴィアタンの一族を名乗る女が、原初魔王のレヴィアタンの力を使うとは!!』

「は、はあっ!?!原初魔王って、お前みたいなの!？」

「ああ、サタン。そう言えばその力を持つ下級悪魔オーション・オブ・デーモンがいると、話に聞いていましたね。——その通り。この傘は『悪魔の絶海』。旧魔王で

も新魔王でもない、真なる魔王——原初魔王レヴィアタンの力を宿す神器です」

「サタン以外にも存在していた…か。だが君は生まれながらの悪魔。その神器の本来の所有者では無いんだろう？ 選ばれたわけでも無いただの悪魔に過ぎない君がその力を使いこなせるとは思えないが」

「ええ。相応の代償を支払う事は覚悟の上——さあ、話は終わり。私の目的はあくまでセラフォルーただ一人。邪魔をするなら、まとめて殺します。そこで見ている分には、殺しはしません」

「わ、私は嫌だよ。カテレアちゃんもだって、話し合えばちゃんと分かり合える……」

「そんな甘えた事を。いつまで経っても現実が受け入れられない、考えも趣味も幼子のような貴方が、私は嫌いな。——原初魔王のレ

ヴィアタン。その名を継ぐ私に、その力を与え給え——  
『バランス・ブレイク禁手化』

『Leviathan power Balance Breaker  
!!』

傘が光の粒子になり、カテレアの体に付着していく。

光は次第にドレスの形を取り、完成と同時に黒と青の入り混じった妖艶で厳かなドレスへと変貌した。

これが、原初魔王レヴィアタンの神器。そのバランス・ブレイカーか。

サタンと違って、一見すると戦闘向けとは思えないな。

「これが『悪魔の絶海』の禁手。『エンヴィー・ジ・レヴィアタン・キャッスル・ドレス嫉妬の蛇魔王の城服』……ただのドレスに見えるでしょう？ ですが、何人もこの要塞を落とす事は不可能！ さあ、難攻不落の私を前に、無念と共に沈みなさい！」

カテレアが右手を振るうと、突然結界内部に大波が出現し、セラフォルー様めがけて流れていく。

あんな大質量の水を浴びればひとたまりも…！ と思ったが、その心配はすぐにかき消される。

セラフォルー様が、一瞥する事も無く大波を凍らせたのだ。

す、すごい！ 輪廻と白龍皇、アザゼルとコカビエルの戦いだけでも

腹いっぱいなレベルなのに、こっちもこっちで途轍もない戦いだ！  
足手まといにすらなれてないぞ、俺達。

上空の戦いも、結界の向こうの戦いも、既に俺では目で追う事すら  
叶わない程だし。

「私は、嫌だよ。カテレアちゃんと戦うなんて。殺し合いなんて、した  
くない」

「私を馬鹿にしているの？戦う価値も無いと。私なんて、取るに足ら  
ない存在だと！」

大きな水の塊が出現し、爆発。

風を切る音を立てて水滴が飛び散り、地面を抉り、辺り一帯の物を  
襲う。

それでも、セラフォル様は立ったまま、攻撃を防ぐだけだ。

「いつだってあなたはそう。人を小馬鹿にした態度で、いつだって人  
並み以上の結果を残して!!」

カテレアが怒り狂いながら、様々な攻撃を仕掛ける。

水の刃や、水の矢が、セラフォル様を襲い続ける。

だけど、届かない。

神器では埋められない差が、存在するんだろう。

「私からレヴィアタンの座を奪った時だってそう！いつもいつもいつ  
も！私を、私達を馬鹿にしてツ!!」

半狂乱のカテレアが、今までで一番の攻撃を放つ。

それに対しセラフォル様は、ついにその手をカテレアへ向け—  
|。

※——

「ははっ、おいおいマジかよ！原初魔王の神器、他にもあったのか！」  
「よそ見してるんじゃないやねえツ!!」

俺に飛んでくる光の槍を躲し、舌打ちを一つ。

全く、邪魔しやがって。サタン以外の原初魔王の神器にテンション  
上がってたっつーのによー。

失った左腕を惜しむように傷口付近を撫でながら、コカビエルに話し  
かける。

「戦闘の最中、腕をもつてかれたのだ。」

「はあ。お前は戦闘に夢中になり過ぎなんだつーの。戦うのがそんなに好きか？ええ？」

「ああ、好きさ。俺は戦いを何よりも求める。だから、他勢力の連中の入り混じった組織に入る事も是とした。この世界を、血で血を洗う闘争の世界へと変えるためにな！」

「つと。——やれやれ、そろそろ終わりにしてえ所だが……一つ聞きたい事がある」

「あ？なんだ？」

「カテレアの話がこつちにも聞こえてきたんだが、『夢幻人』と『禍の団』が組んだらしいじゃねえか」

「それがなんだっていうんだ？」

苛立ち混じりに聞き返してくるコカビエルに、俺は小馬鹿にするような仕草を付け加えて答える。

「おかしいんだよ。『無限の龍神』ウロボロス・ドラゴンをトップに据える『禍の団』と、

『真なる赤龍神帝』アボカリユブス・ドラゴンを信仰する『夢幻人』が、手を組むなんてのがな。なんせオーフィスは静寂を求めて、次元の狭間に居るグレートレッドを追い出す事を悲願に掲げてるって話だろ？それなら『禍の団』も『夢幻人』にとつては信仰を脅かす敵なんじゃねえのか？」

俺の言葉に、コカビエルは一度首を傾げてから、不思議そうに口を開いた。

「お前は何の話をしているんだ？オーフィスが、静寂を求めて次元の狭間への帰還を求めている？そんな話は一度も聞いていないぞ？」

「何？そんなはずはない。過去にオーフィスと接触した輪廻が語ってるんだ、間違いないはずだ」

「立神輪廻が？——ああ、なるほど。そういうコトか…はははっ、なるほどな」

何かを納得したように笑うコカビエルに、俺は知らずと苛立ちが募った。

コイツ、俺がわかってねえからって馬鹿にしがって。

まあ良い。コイツも態々隠すつもりも無さそうだし、聞きやいいだ

けだ。

……あの赤龍帝、立神輪廻が嘘を吐いたとは思えねえ。大方、アイツの情報も真実だ。

いや、真実だった、なんだろうな。きつとアイツと別れてから、オーフィスの野郎に何らかの変化が起きた……つてとこだろう。

「何がおかしいんだよ」

「いや何。あの男がそういう点で鈍いというのは何かの情報で知っていたが、まさかと思つてな。教えてやるよアザゼル。オーフィスの目的は静寂でも、次元の狭間への帰還でもない。もつとちつぽけでくだらないものだ。だが奴は、そのために無限の肩書を下ろした」

「……は？つまりそりや、あいつは有限の存在になつたつて事か!？」

「そうさ。力は無限のままだが、存在そのものは有限。性別も定まつたらしいしな」

あ、あのオーフィスが、有限に？

性別すら定めたつて、つまりそりや『一個体として確定した』つて事じゃねえか！

一体何が目的なんだ!？」

「あの無表情無感情野郎がそこまでするとはね……マジで何が目的なんだ?」

「それは——ツ、何イツ!？」

俺の質問に答えようとしたコカビエルが、突如真つ赤な光の柱に飲み込まれた。

慌てて俺も回避したが、余波だけで軽く火傷を負つちまつた。

今のはロンギヌス・スマツシャーか。

まさか滅びの魔力の結界をぶち破つてくるとはな。

……しかし、あの戦争狂の最期が、他所の戦闘の余波に巻き込まれて、とはね。

あいつにとつちや、一番辛い終わりだろうな。話してる最中に呆気なく事故死とは。

元ボスとして、黙祷くらいはしてやるか。

「……さて、あつちの戦争に混ざるなんて無理だし……サーゼクス達

の方に戻るか」

※――

どろり、と。

カテレアの右腕が突如液状化し、地面に落ちた。

せめて自分の手で殺す、という覚悟を決めたセラフオール様の瞳が、困惑の色を帯びる。

しかし当のカテレアは、何か悟ったような表情をするだけで、左手を振るって攻撃を行った。

「どうしたんです、セラフオール。攻撃の意志を固めたのでしょうか？ それなら、私と真のレヴィアタンの座をかけた殺し合いを――」

「いや、でも、その腕……」

「私<sup>敵</sup>の身を案じるなツ!! 情けをかけたつもりですか!!」

濁流がセラフオール様を襲う。

それは瞬時に凍てつき、砕け散る。

「……なるほど、それが君の代償……という訳か」

「ど、どういう事なんですか?」

「先ほと言った通りさ。兵藤一誠君の『悪魔の連撃』も、君の『魔剣創造』も、どちらも強大な力を持つ神器だろう? だけど君たちはその力が暴走して命に関わる事は無い。ギャスパ―君の『停止世界の邪眼』だって暴走する事は有れど、それは彼の無意識が願って発動している物だからね。危機的状況と感じていない時は発動しないだろう?」

「そ、そういえば……」

「だがそれは、君たちが正式な所有者だからだ。その神器の力を持つて生まれる事を許された存在だからだ。だから、下級悪魔に過ぎない兵藤一誠君にもサタンを扱う事が出来た。――ただ、カテレアは違う。彼女は純血の悪魔だ。つまり、あの神器も誰かから奪った物という事になる。正式な所有者でなければ、いくら上級……ともすれば最上級とも言うべき彼女だろうと、原初魔王の力を使い続けるだけでその体を失う事になってもおかしくはない……という事さ」

「……ええ、サーゼクスの言う通り。私がこの力を振るう度、体がどんどんとこの神器へと奪われていく。腕が完全に液状化したのは、実体

を保てるだけのエネルギーを全て吸い上げられた証拠。——けど、それで良いの。セラフオルーを殺せるなら、私はそれでいい。……さあ、私は文字通り命を懸けてこの場に居る。ソレを知って尚、貴方は私に情けをかけますか」

鋭く睨みつけるカテレアに、セラフオルー様は逡巡する様子を一度見せた物の、深呼吸一つの後には覚悟を決めた顔を見せた。

それに満足そうに頷き、カテレアは再び攻撃を仕掛ける。

……新魔王と旧魔王の、結末の見えた戦いが、ようやく始まった。

「——つと。凄い戦いだな。俺達なんて光の槍でチャンバラやってただけだっつーのに」

「アザゼル……っ！その腕」

「あー、油断しちまった。そうそう、ちよいと衝撃的な話を聞かされたんで、せつかくだから聞いてけよ。お前らは別に、あの戦いに乱入するような無粋な真似はしないだろ？」

左腕を失ったアザゼルが、しかしソレは何てこと無いというように振舞いつつ、俺達の下に降り立つ。

そして狩刈の方を一瞥してから、話し始めた。

「ゴカビエルから聞いた話なんだがな。どうやらオーフィスの野郎、無限をやめたらしい」

「あの無限の龍神と呼ばれたオーフィスが……？一体、何があつたというのです？」

「さあな、そこまでは聞けなかった。だがアイツはなんらかの目的のために、無限の力を存在と切り離れた。力は健在でも、存在は有限になつたらしい」

オーフィスってのは知ってる。輪廻が倒したただか引き分けたただかいうドラゴンだ。

だが無限をやめただけの力は健在だの有限がどうかは、全くもってわからない。

混乱する俺たち下級悪魔に対し、魔王様や大天使様達は神妙な面持ちで考え込んでいる様子。

「お前達にもわかりやすく説明するとだな。無限の力つてのがこの場

合水。蛇口がオーフィスだな。今までは蛇口と、いくらでも水が湧き出る場所が直接つながっていた。だが今のアイツは、蛇口が貯水タンクに繋がれている。水は後からいくらでも注ぎ足せるが、一時的には有限になる。俺も詳しいことは知らねえが、多分これであってるはずだ」

「やっぱりちよつとよくわからないが、なんとなくはわかった。」

「けどすごい力を好き放題使えなくして、一体何がしたいんだろ。」

混乱する俺達のすぐそばに突如、ズゴンツツツ!!と、爆音と共に何がが着地する。

土煙から覗くのは、赤い鎧。

輪廻だ。

片腕がない状態の。

「輪廻!？」

「油断した。つつーか捕獲狙いの戦闘なんて初めてだしな。なれないことはするもんじゃやない。……ただ、それ抜きにしてもアイツが強いつてのはあるな」

「流石の赤龍帝も、『黒刃の狗神』ケイニス・リュカオンの斬撃は効くだろう?」

空を飛ぶ白龍皇が、俺たちを見下すように佇む。

ケイニス・リュカオン、というのによくわからないが、それが輪廻の腕を奪ったのだろう。

輪廻は腕を生やして(時間を戻したんだろう)空を仰ぎ、煽るように言った。

「奪った力でよく威張れるな。恥ずかしくないのか?」

「いいや? 戦いに、勝利に、美学なんてつまらないものは要らない。勝てばそれでいいだろう? ……だが、確かに気に入らないところはあ。それは立神輪廻。君が本気を出していない事だ」

「…それ言ったらお前だって『覇龍』を使つてないだろ」

「それどころか、今『黒刃の狗神』を使うまで、神器の力を振るってないさ。俺は君を殺すつもりでいるのに、君は捕獲狙い。そこで最初から本気を出せば、せつかくの歴代最強同士の戦いがつまらない結末を迎えてしまっただろう?」

「歴代最強、ねえ。確かにお前はそうだろうけど、自分で言うか？」

呆れた様子で言う輪廻に、ヴァーリは自信満々に言い切った。

「ああ、俺は旧魔王ルシファアの血を引き生まれた、言うなれば奇跡の存在。出生だけ見れば、君よりも俺の方が上さ」

「なっ、ルシファア!？」

「ん？サー坊には言っていなかったっけ？アイツはヴァーリ・ルシファア。言ってた通り、旧魔王ルシファアの血を引く白龍皇。魔力の才覚なんかは、多分俺以上だろうな」

輪廻の言葉に、俺たちは息を呑んだ。

神器を持てるのは人の血を引く者。

だから、吸血鬼と人のハーフであるギヤスパは神器を持って生まれた。

それと同じように、アイツは旧魔王の血を引きながら、白龍皇なんて呼ばれる存在の神器を持って生まれた。

その上『引換剣』の効果で強化され、奪った神器でさらに強くなっているなんて……流石に、勝てねえんじや。

「さあ、どうする？本気を出さないと、流石の君とて命に関わるだろう？それでもなお、殺す気にはならないと？」

「ま、頼まれたしな」

「……なら、話を変えようか」

鎧を解除し、ヴァーリが地に降り立つ。

銀髪のイケメンだ。力も才能も恵まれてるだけじゃなくイケメンか。ムカつく野郎だぜ。

ヴァーリは輪廻に一度視線を向けた後、今度は黒歌さんの方を見て口を開いた。

「久しぶりだな、黒歌」

「っ、ええ。そうね」

「……知り合いなのか？」

「ああ。元々黒歌も『禍の団』のメンバーでね。俺のチームの一人だった」

黒歌さんが、禍の団に……？

輪廻もそれは知らなかったのか、驚いている様子だ。

黒歌さんの方は、なんだか気まずそうな表情。

「途中で離脱したから何かと思えば、まさか赤龍帝の方についていたとはな。離脱する少し前からそんな雰囲気は感じていたが……赤龍帝の提示する平和に、絆されたか？」

「その話はもうしたでしょ。元々私は『禍の団』の活動には興味が無かった。私はただ、もう一度白音と一緒に暮らせるようになればよかっただけ。ご主人様を選んだのだから最初はそういう理由だったし。けど今は違う。ご主人様の飼い猫やつてるのが幸せだし、そのおかげで白音とも一緒に暮らせるようになった。もうアンタ達の所に戻ってテロ活動に勤しむつもりは無いわよ」

白音……小猫ちゃんか。

主殺しの件で離ればなれになっていた時も、ずっと小猫ちゃんの事を案じていたんだな。

そのために『禍の団』に……なるほど。

納得する俺達だが、ヴァーリは黒歌さんの言葉を聞き口元を歪めた後、今度は輪廻に話しかける。

「黒歌はそう言っているが……はは、なあ立神輪廻。君は黒歌に並々ならぬ感情を抱いている。そうだろう？」

「……それがどうした」

「前置きは無しにして、結論から言おうか。——俺は黒歌に『子供を産ませて欲しい』と言われたことがある」

「——は？」

ミシツ、と、空気が軋む音が聞えた。

輪廻は、それはもう見事にキレている。

そう言えば前にアイツが言っていた。——元カレとか、気にするタイプだって。

ヴァーリは、輪廻の様子を見てさらに口元を歪め、さらに煽る。「同じチームで活動している時にな。俺の強さと、旧魔王の血、白龍皇の力に惹かれてか、そう頼んできてね。まあ、ドラゴンの血というだけでも、強い子を産みたいと思う女を惹きよせるのに、俺はその上旧

魔王、ルシファアの血筋だ。動物的な本能が強い黒歌には、さぞ魅力的だったんだろうね」

『待てヴァーリ。それは』

白龍皇……アルビオンが口を挟むが、ヴァーリは意に介する事無く話す。

……いや違うな。これは……挑発している。

本気の殺意を向けられるために。

「ところで、だが。君はきつとそう言われた事は無いだろうか？ 見ればわかるさ。俺と違って黒歌にそういった感情を抱く君なら、誘われて直ぐに応じるだろうからね。——つまりだ。雄としての魅力で言えば、黒歌からすれば君よりも俺の方が優れているという事になる」  
「……………」

「可哀そうにね。歴代最強、世界最強と称されようと、結局は想い人から誘われる事も無い孤独な存在。大して俺は、奇跡と称される生まれで、君が求めてやまない女性から子を産みたいとせがまれた。——  
そうだ黒歌。退職金代わりに、その赤龍帝じゃ無く白龍皇である俺の子を産ませてやって——」

ドグンツツツツ!!

心臓が鼓動するような音が響き、この学園を覆っていた結界に罅が入る。

アレは魔王様達が力を合わせて作った結界だから、並大抵の衝撃じゃ壊れるはずがないのに。

結界は瞬時に再生するが、辺りに充満する『力』の波動は濃いままだ。

「はははっ、ようやくやる気になったか！ そうだ憎め怒れ!! それでこそ二天龍の戦い！ 力の極地の衝突だ!!」

『ええい、この大馬鹿者めっ！ 戦狂いの大馬鹿者だお前は!!』

「馬鹿で結構。俺がしたいのは本気の殺し合い。ソレを制し、真の最強に君臨するのが俺の目的さ。……さあアルビオン。『覇』を使うぞ。

——我、目覚めるは、覇の理に全てを奪われし二天龍なり——」

嬉しそうに笑いながら、ヴァーリが何らかの詠唱を始める。

それと同時に純白の凄まじいオーラがヤツから噴き出し、禁手の鎧が装備され、そして姿を徐々に変えていく。

「無限を妬み、夢幻を想う」

シルエツトは、ドラゴンそのもの。

今までは鎧としての側面が強かったが、今度は生物的な雰囲気を感じる。

「我、白き龍の覇道を極め、汝を無垢の極限へと誘おう——!!!」

『Juggernaut Drive!!!』

音声と同時に、一際強く輝くヴァーリ!!

龍の与えてくる恐怖と、光から感じる神々しさは、抗おうという気は一切をそぎ落とす。

——けれど、そんなもの知るかとばかりに怒る男がここにいる。

白い龍と対を成す赤が、ここにいる。

「さあ立神輪廻!!君の本気を見せてくれッ!!」

『……喜んでいる所悪いが、ヴァーリ・ルシファーよ』

「ドライブ?…一体何だと言うんだい?まさか、彼は『覇』を使えない……とでも?」

『いや、そうではない。ただ一つ良い事を教えてやろう。先程の黒歌の話は、相棒に本気を出させるための物だったんだろうが……お前は選択を間違えた』

『ッ、おいイツセー。後他多数。逃げろ。さっさと逃げねえと死ぬぞ』

「は、はあ?いきなりなんだよ」

「……まさか、アレを使うつもりか。——確かに、できる限り離れなければ」

「おいサーゼクス。お前いきなり何を」

「どんな結界を張ろうと、この距離なら余波だけで私達くらい容易く殺せるという事だよ。輪廻のあの姿は、それほどに強大で、恐ろしい」翼を出現させ、空を飛ぶサーゼクス様。

それに色々言いたげな顔をしつつもアザゼルが、そして一先ず従おうと俺達がついていく。

確かにすごいオーラだけど、死ぬって……アイツが今キレてるの





## 覇龍の逆鱗、煮え切らぬ結末

「……なんて力なの……!?これが、今代の二天龍!」

「……当初の予定では、私も狩刈もヴァーリの援護に回るはずでしたが……アレでは、私がいるだけ邪魔でしょうね」

二人のレヴィアタンが、赤と白の二人を見る。

既にカテレアは両足を失い、体そのものも部分部分が液体化し、欠けている。

決着の時は近い。

「さあ、終わりにしましょうセラフオール。私の全てを、あなたにぶつけます」

「……本当に、やめる気はないんだね?」

「当たり前です。真のレヴィアタンは私こそふさわしい。それを証明するためにここにいる」

「……そっか。じゃあ……さようなら」

方や大質量の水球。

方や極小の冷気の塊。

その二つが衝突し、そして冷気の塊が水球を一瞬で凍てつかせ、そして巨大な氷塊はすぐさま砕け散る。

それを見て、カテレアは諦めたような笑みを見せる。

「私の、負けですか」

「うん。そして私の勝ちだね」

「……私は、今まであなたが憎かった。真なる魔王は私のはずと、ずっとそう思ってた生きてきた」

「だからずっと、謝りたかった。かつての魔王が死んで、混乱する悪魔達のためと言って、あなたを蔑ろにしてみましたこと」

「……良いんです、もう、そんなこと。原初魔王レヴィアタンの力をろくに振るえず、こうして身を削った時点で私が魔王に相応しくないと、わかっていたのですから」

「っ、じゃあ。なんでわざわざ死にいくような真似を」

「簡単な事です。神器が扱えなかった程度の事で、私の今まで抱いて

いた思いを、自分の意思で否定したくなかった。だから、私は最初から、あなたに殺されるつもりでいました」

禁手を解除し、カテレアの手に傘が握られる。

ドクドクと脈打つそれは、今もなおカテレアから命を吸い上げていることがわかる。

それを手放すようにとセラフオールが言うが、カテレアは諦めたように首を振って拒む。

「ごめんなさい、セラフオール。勝手な都合であなたを目の敵にして。そして私の命を背負うような真似をさせて。あなたは非情になりきれないところがありますからね」

「ううんっ、そんな事ないよ！私はず……大丈夫、だからっ」

「強がつて……ふふっ、先ほどは、あなたに『幼児趣味なあなたが嫌い』だと、『常に明るく振る舞うあなたが嫌い』だと言いましたけど………実は結構、好きでした」

体がどんどんと液化して、もはや生きている事が不思議なほどに肉体が崩壊する。

セラフオールは涙は流さずとも、ほとんど泣いているような物だった。

「……もつと早くに気づけていれば、あなたとも、かの大戦前のように、ずっと……友として、いられたかもしれないね」

「友達だよ！私はずっと、カテレアちゃんの事、大切な友達だって思ってた……！」

「……そう言ってもらえるだけで、十分です。……最期に、あなたにこれを」

カテレアが、神器を手渡す。

セラフオールが受け取った瞬間、カテレアの腕は液化して地に落ちた。

「その神器は、適切な使い方さえすれば、代償なしで扱えます。……あなたの方が、これを使うに相応しい。真のレヴィアタンを名乗るに、相応しい」

「カテレアちゃん……ありがとう」

感謝の言葉を聞き、満足そうに笑ったカテレアは。  
ついに、その体全てが液化となり、消えた。

『あ、れ？私、生きてる？』

「カテレアちゃん!?ど、どこから声が!?ていうか、どうして!」

『わ、私にもわかりません』

『神器よ神器。神器の中』

『ああ、神器の……って、貴方は!?』

『わからないかしら。この神器をなんの神器と思っていたのかしら。

私はレヴィアタン。原初魔王のレヴィアタンよ』

勝気そうな少女の声が神器から聞こえる。

カテレアの声も、そこから響いていた。

セラフオールは酷く驚きつつも、レヴィアタンに問う。

「れ、レヴィアタン…様?どうして、今になって声を?」

『んー?アンタ達の仲良さげな姿に絆されちゃった?ってどこかしら。だからほら、カテレアから代償として徴収した魂を残留思念として、アンタと話せるようにしたの。感謝しなさい?』

その言葉に、セラフオールはなんとも言えない顔をする。

素直に奇跡と喜ぶべきかと、困った顔になる。

『と、とにかく、良いじゃないですか。今まで敵対していた時の分、やり直しましょう?そ、そう言えば私、魔法少女に興味がありました!終わったら、一緒に観ましょ?ね?』

「……………ま、それでいつか☆覚悟してねカテレアちゃん。私の魔法少女布教はソーナちゃんかノイローゼになるレベルだよっ」

『貴方自分の妹に何をしてるんですか……』

ズゴゴオオン!!と、爆発音が響く。

すぐさま音の聞こえた方を見ると、何やら姿が変わった赤龍帝と白龍皇が殴り合いを……いや、赤龍帝の一方的な暴力が見える。

しっかりと見えるわけでは無いものの、赤と白の軌跡が空を動くの

は見える。

「私たちも、行こうか」

『あの戦いに混ざる気ならやめなさい。仮に私の全力とアンタの全力があつたところで、アレになんの影響も与えられ無いわよ』

『一先ず、サーゼクス達に合流しましょう。結界無しでこの場に立ち続けるのは危険です。あの戦いの場が、こちらになるかもしれないかもしれません』

※――

「ははははっ!!!これが赤龍帝の力!!一撃一撃が死ぬほど重いツツツ!!!」

『ディバイン・シールドがあるからと油断するなヴァーリ。奴はまだ透過の能力を使っていないだけで、使われれば即死だぞー!』

「使うかよ。お前は限界までいたぶつてから殺す。殺して死んだら復活させてもう一度殺す。それを繰り返して何度も何度も何度も何度も殺す。二度と転生できないくらい、魂が損傷し、消滅するまで殺し尽くす!!!」

目で追えない速度でありながら、何と言っているのかはわかる。

り、輪廻が驚く程キレてる……!アレ余波だけで俺たちなんか簡単に死ぬぞおい。

「ディバイン・シールドとは一体?」

「俺がヴァーリに提案してやった技さ。白龍皇の半減のオーラを纏う事で、ダメージを極限まで減少させるんだが……あの様子じゃ、即死しないだけで十分一撃一撃が致命傷なんだろうな。ははっ、アレ一応神クラスの攻撃も理論上ほぼ無力化できるつてのに」

木場の質問に、アザゼルが答える。

神クラスっていうのはよくわかんないけど、俺じゃ到底及べない領域にある事だけは確かだ。

「良いぞ良いぞ、もっと怒れ!俺はそれを倒し、最強となるんだからなッ!!黒き刃に裂かれろッ!!」

『Blade!!?』

空中に無数の刃が出現し、輪廻を斬り裂く。

……が、刃は通る事なく、全て砕け散った。

「ほう、『黒刃の狗神』が効かないか!!」

『アルティメット・バリア玄武変生』は一切の直接攻撃を防ぐ。たかが神でも斬り裂ける程度の刃が、俺に傷をつけられるとも思ったか?」

「んじや鬼の一撃を試させてくれよツ!!」

今まで見てるだけだった狩刈が、背後から輪廻を襲う。

だがやはりダメージは無く、弾かれたように仰け反った狩刈を、輪廻は振り向くことなく裏拳で殴り、吹き飛ばした。

「邪魔するなよ、今はコイツを殺す」

「直接攻撃が効かないなら、それ以外でやれば良いだけさ。死ぬのは君だよ——何?」

両手を輪廻に向けたヴァーリだが、そこから何が起こるわけでも無く、アイツは混乱する。

次の瞬間には、輪廻に殴られてか、ヴァーリの体が吹き飛んだ。

「不思議か?魔法が使えなくて。魔力を操る事ができなくて。自慢の旧魔王の血が、魔法の才能が全くの無意味になったのがそんなに不思議か?」

「……アレが『アンチマジック・ワールド絶魔変生』。『覇龍変生』の彼が常に発生させているオーラだ」

「アンチマジック……まさか、魔法の一切を無力化すると?」

「いや。それだけじゃない。魔力を介した全てがこの空間では無力化される。私やリーアの滅びの魔力も、放出する事すら叶わないさ」

直接殴ったりするのが全部無駄で、魔法の攻撃も効かない……じやあアレどうやって倒すんだよ。

前まではオーフィスってヤツと引き分けになるだけでもすごいやって思ってたけど、今じやどうやってオーフィスが輪廻と引き分けられたのか気になって仕方ねえ。

土煙が晴れて、立ち上がろうとしているヴァーリの姿が見える。が、立ち上がらせまいと輪廻が一瞬で接近して、その拳を叩きつける。その衝撃で、地面が砕けた。

「ごふっ……ははっ、直接攻撃も魔法攻撃も無効、か。そりゃあ強いわけだ。——だが、俺にはそれ以外の攻撃手段がある。——例えば奪った四凶、饕餮の力とかね」

ヴァーリが右手を伸ばすと、手の甲部分の宝玉に不思議な模様……そう、ラーメンのどんぶりについてるアレみたいな模様が浮かび上がり、まるで口のような何かを輪廻を飲み込むように出現した。

輪廻のロンギヌス・スマツシャーみたいな、本能的な恐怖を感じるソレに、しかし俺は何処か心の中で冷静だった。

寧ろ、俺はそっちの心配をしていた。

——今の輪廻に噛みつくような真似をして、大丈夫かと。

俺の心配は正解だったらしく、出現したはずの大きな口は、一瞬で黄金の塊に変わった。

それどころか、謎の文様が浮かんでいた方の鎧まで、黄金になってしまった。

「なっ、これは…!？」

ゴールデン・レジスト

『黄金変生』つってな。前二つじや防げない物……例えば神器の効果とか、仙術とか妖術とか、言っちゃえばその他の攻撃か。ソレを全部黄金に変えて無力化するんだよ。ゲームで言うパッシブスキルだな。直接的な攻撃も、魔法での攻撃も、それ以外の攻撃も、俺には一切届かない。通用しない。どれだけ出力を上げようと、ブーストすれば上げた分も無駄になる。——今代の白龍皇、ヴァーリ。お前じや俺には勝てない。そして——」

ゾツとする程冷たい声音で、輪廻は言う。

改めて羅列されると意味不明なまでに強いな。

「俺はお前を許さない」

『Boost Burst Dragons Gear!』

鎧の形状が変化し、輪廻の背後に『∞』の模様に似た魔法陣のような物が出現する。

あれってもしかして、無限？なんかのロゴで見た事あるけど、どうして無限——まさか、アイツも無限の力を持つって事か!？

…サタンから、一度だけ聞かされた事がある。



ている。

その度に時間を戻しているから、まだ生きてるんだ。

……相手に魔法使わせない癖に、自分は使えるのかよ……

「アレが、赤龍帝……輪廻君の力か」

「……果たして、鍛錬なんかで、たどり着ける領域なのか……？到底私じゃ、共に戦うなんて叶わない気がするんだが……」

目の前の圧倒的な破壊を目の当たりにして、木場達が脱力して膝から崩れる。

そうだ。俺たちは、最強だとか色々聞いていた癖に、心のどこかで思ってたんだ。

——俺達もいつかは輪廻と肩を並べて戦えるようになれるって。

だけど現実アレ。聞き取れないレベルの怒号と共に、歴代最強って言われてる白龍皇なんて存在を、まるでゴム毬みたいに甚振り続けているのがアイツの力の一端だ。

……確かに鍛えりやある程度は強くなれるかもしれない。

もしかしたら、ヴァーリくらいはなれたりするかも。俺だってサタンの力があるし、アーシアは聖書や聖歌の力と十字架の力、そして癒しの力がある。

木場は魔剣も聖剣も、その上聖魔剣も生み出せるし、小猫ちゃんだって最近は何術を覚えつつあって、体術も俺達一だ。

ゼノヴィアだって力強い剣術とデュランダルの力があって、ギヤスパーは時間を止めれる。

朱乃さんの雷の魔法も、部長の滅びの魔力も、どっちも強力だ。けど、アレは無理だ。

腕を捨てる、足を捨てる、寿命を削る、そんなもんじゃない。

アレはきつと、俺達が俺達のままたどり着ける場所じゃ無い。

「……」主人様」

「あ、姉様……その、元をただせば姉様の浅慮な発言のせいだと思っんですけど、その所はどうお考えでしょうか」

小猫ちゃんが毒を吐く。

丁寧な口調だが、その言葉の裏にはかなり棘がある。

しかし黒歌さんは、まるでこの状況を理解していないような言葉を発した。

「私が取られたかもって嫉妬するなんて可愛い過ぎるにゃん♡」

「付き合ってもいないのにバカツプル気取りですか、最悪です」

「しかもその嫉妬のせいで俺達の校舎消し飛んじやったんですけど」

あんまりな発言に、俺達全員がずっこける。

黒歌さんは両手を頬にあてていやんいやんと体をくねらせるばかりだ。

「おい黒歌。お前ならアイツでも止められるだろ。さっさと止めてこい」

「いやよ。私がヴァーリを助ける義理は無いし、それに……」

「お前の都合なんか知るか！こっちはヴァーリに死なれちゃ困るんだよ！元をただせばテメエの昔の発言のせいなんだから止めてこいってのー！」

「ああなつたご主人様を私なんか止められるわけないでしょ!？」

「うつせつ、テメエが乳でも何でも見せてやりや止まるだろ！」

「……なんだろ、輪廻ならそれでもいける気がする」

すごく失礼だけど、アイツの場合黒歌さんがストリップ始めたら攻撃の手を止めて見入ると思うんだよな。

しかし黒歌さんはそれが不服らしく、さらに声を荒げる。

「はあッ?!私にご主人様以外の奴らがいる場所で脱げっての!?!冗談じゃ無いわー！」

「ヴァーリに子作りねだるくらいなんだからどうでも良いだろ!どうせ生娘でもねえんだろお前はよ!!」

「私は処女よ!!何から何までご主人様専用なの!」

「姉様。品が無すぎます。——後、自分のやらかしの責任くらい取ってください。白龍皇が死ぬかどうかはともかくとして、あのままだと街どころかこの国が崩壊します」

国が崩壊する。確かにその通りだ。

今はまだアイツも手を抜いているらしいし、このままヒートアップし続けて日本消滅なんてのもあり得る。

冗談抜きで。

小猫ちゃん言葉に、黒歌さんは顔を顰め、輪廻の方に視線を向ける。

空間が歪んでいる。アレはきつと、力の波動であんな風になっているんだ。

もう俺達じゃきつと、止められない。

「ちよ、ちよつとちよつと！アレ一体なんなの!？」

「セラフォル！そつちは終わったのかい？」

「ん、えへへ。無事解決つていうか……」

『色々ありまして、神器の中身になったと言いますか』

「へえ、『歴代の所有者』になった訳か。ヴァーリも輪廻も言ってたが、普通は生前の無念とかに囚われて変質しているんじゃないのか？」

『この女は現所有者との戦いで、自分の中の闇と決別したから問題ないわ。それよりも、あそこで戦っている二人、もしかしてドライグとアルビオン？どちらもかつてあった時よりも強大な力を手にしているようだけれど』

セラフォル様が俺達の下に駆け寄り、輪廻達の方を指さす。

危機感を覚えている様子だったが、サーゼクスの質問に、一気に雰囲気柔らかくなる。

そして、手に持った傘……先程カテレアが持っていた神器から、なんとカテレアの声が聞えてきた。

『歴代の所有者』とアザゼルは言っていたが、死んだ後も所有者つてのは神器の中にある事になるのか？

後、最後に聞こえてきた幼子の声は一体？

『よおレヴィ。久しぶりだな』

『……私の質問に答えず挨拶とは、良い度胸ね。セラフォル、あの品性下劣なクソ悪魔と宿主の下級悪魔をまとめて葬ってしまいなさい』  
『はっはっは！品行方正なお嬢様が『クソ』なんてお下品な言葉をお使いになられるなんて世も末でございますねえ。——後、今代の二天龍は化け物揃いだ。あつちの赤龍帝なんかは時間を支配できるし、何なら全盛期の俺が手も足も出ずに負けたレベルだ。……しかし驚いたな。』

あの戦闘狂がレヴィには喧嘩を売らなかつたってーのは』

『ふん。強きなんて二の次とは言っているけれど、アンタが狙われて私は何も無しってのは腹が立つわね。——それにしても、全盛期の貴方が手も足も出ずに？なんの冗談なのかしら。真なる魔王、妨げる者、最も神に近い墮天使、黙示録の獣、忌まわしき皇帝……あらゆる異名を持つほどに『強者』だったアンタが、だなんて』

サタンが親し気に：しかしどこか挑発する色を込めて声をかける。

それに対し、神器から少女の声が聞えるが……もしかして、会話の内容的にこの声が原初魔王レヴィアタンの声？

ってか何そのサタンの異名の数。多くね？

サタンとレヴィアタンが会話している間に、サーゼクス様がセラフォルム様に事情を説明したようで、深刻そうな顔をして悩みこんでいた。

まあ、輪廻が(多少理性があるとはいえ)暴れてるってなったら、そりゃあんな顔もする。

「ギヤスパ―・ヴラデイの神器で、彼を止める事は不可能なのか？彼の時間停止と、神器による時間停止は別物だと思うが」

「あ、えと。輪廻先輩に、僕の神器は利きません…でした。なんか、自分だけの時間？がどうかで……」

「輪廻は時間操作のために、自分のみ適用され、外部からの影響を一切受けない特殊な時間軸を自らの世界の中心としているからね。世界を止める彼の神器だろうと、輪廻は止まらないさ」

「……なぜ貴方が自慢げなのですか……」

ギヤスパ―の神器は利かない。

っていうか、もし神器で干渉しようものならギヤスパ―の目が黄金になつちまうだろう。

それはダメだ。

やっぱり、黒歌さんが止めに行くしかない。

誰もがそう思った、その時。

「縛鎖陣」

そんな言葉が聞えると同時に、俺達の体は見えない鎖に捕らえられ

たかのように動かなくなる。

それは魔王様も、大天使たちも、アザゼルも同じだ。

……これは、妖術……狩刈の仕業か！

「いっつーっ。やってくれやがったよあの赤龍帝。俺の事振り向きもせずに殺しかけやがって。止め刺しに來なかつたあたり、本当に俺は眼中にねえらしいな……くそっ。今、後悔させてやる……」

「私達をこんな程度で捕えられたとでも？」

「ああ、そうさ。言っておくが自慢滅びの魔力も、その他諸々の全部も使えねえぞ。その鎖に縛られてる間は自分の力を扱えなくなる。——そうそう、この術は俺よりも弱い奴じゃないとそもそも縛ることができない。黒歌ならわかるだろ？お前も妖術使いだもんな」

「……ええ、そうね。でも予想外だったわ。ご主人様の攻撃ですぐぼろ雑巾みたいになっちやうよわく鬼っ子が、まさか私達を縛れるだなんて」

「はっ、言ってる言ってる。弱者からの煽りはどうでも良い。負け犬の遠吠えはうるさいだけだ。——おかしな話だよなあ。俺は魔王とか、四大天使とか、墮天使の総督だとか、そんな連中よりも上にいる。中には超越者って呼ばれる二人が居て、きつと夢凡人でもソレとまともには戦える奴は少ない。だっつーのに、赤龍帝相手だとまるで毬扱いだ。俺達の希望、白龍皇ですらあのザマ……いよいよ、こっちの幹部もボスも全員投入する以外に道が無いような気がしてきたぜ。俺はな」

「攻撃も何も利かない輪廻に、数を増やした所で勝てねえだろ」

「いいや。俺たちのボスなら或いは、な。詳細を態々教えてやることねーけど、俺達だって馬鹿じゃない。本当に勝ち目がないなら、自然災害だの試練だの言って受け入れる。それでも諦めてないのは勝率があるからだ。ゼロじゃない以上、ソレをしないのは怠慢。——つーわけで、俺たちの希望である白龍皇サマにや生き延びてもらわないと困るんでね。アイツの地雷を俺も踏み抜くとするさ」

背筋をぐいと伸ばし、狩刈は声を張り上げる。

「おい立神輪廻!! テメエの仲間も、友人も、そして黒歌も! 守りてえモ

ン全部人質にとっちまってるぞー!!」

言い終わる直前……というか、黒歌も、の下りで輪廻は俺達の目の前に現れ、狩刈を殴り飛ばすと、俺達を縛っていた見えない鎖を壊した。

勿論その途中で俺達に凄まじい衝撃波が襲い掛かって来た。

一応あの時みたいに俺達にシールドを張って守ってくれはしたけど。

周囲の地形が変わってるんだよなあ。

「お前、せっかく生き延びたのに無駄な事するんだな。俺の怒りの矛先が現在進行形でヴァーリに向いてるってわかった上でやったのかよ。ほっときやお前は生き延びれたっつーのに」

「……知ってる、っつーの。バーカ。俺が、無駄に、死ぬわきやねえー……だろ」

「そこまでわかってないでも？ 気配探知でここにヤツの仲間が来る事は把握済みだ。だがそいつらが救援に向かう事は無い。魔法でここに来ることも、それ以外の方法でここへ来ることも、既に不可能——あ?」

ドスの利いた声で輪廻がヴァーリのいた方を睨む。

そこには今までいなかったはずの、ライトアーマーを装備した男や、金髪眼鏡にスーツ姿の男がいた。

スーツ姿の男に肩を貸されながら、ヴァーリは『覇龍』を解除したボロボロの状態で、虚ろな目をして立っている。

「何があったか知らねーが、大方ヴァーリが無駄に煽って手痛い反撃喰らったってとこかねい。んま、俺っちには関係なし。いざ対峙してわかったけどアレは俺らの手に負えるレベルじゃねえしな。手合わせどころか一瞬でひき肉だぜい」

「噂は話半分程度にしか聞いていませんでしたが……なるほど、アレは確かに、世界最強と呼ばれるだけはある」

「ごちやごちやうるせえ。二秒だけやるからさっさとソレを置いて失せろ。じゃないとお前らもまとめて殺す」

「へっ、悪いがこっちも事情つてのがあるんでね。その鬼も回収し

てかなきやらねえし、ヴァーリを死なせるわけにもいかない。——  
アーサー、ヴァーリだけ転移させとけ。二人で食い止めて、狩刈も回  
収すんぜ」

「ええ。生きて帰りましょうか」

「わかったわかった。お前らの気持ちはよくな。——死にたいなら  
わかりやすくそう言え」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost!!』

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost!!』

地面が抉れ、そして輪廻が二人の男に殴りかかる。

いや、もうすでに殴っている。まともな奴に反応できる速度じゃ  
ねえ。

しかし、男達は上手く対処したらしく、致命傷で済んだようだ。

「あつぶねっ!! 『引換剣』の強化させてもらって正解だったぜ」

「……無意味に命を落とす必要は無いと止めましたが……なるほど、  
これは必要でしたね」

「微かに気配がすると思えば……お前らも『引換剣』で底上げしてるの  
か。なるほどな」

『Dragon Blaster!!』

関係ねえな。

そう呟いたと同時に、今度は輪廻の両手が巨大な二つの大砲へと変  
化し、エネルギーが瞬時に収束。

解き放たれた破壊の光が、全てを飲み込みながら男を襲う。

しかしソレをギリギリで回避し、男達は狩刈を確保し、足元に何ら  
かの術式を展開。

あれ、魔法じゃないらしいけど……それにしたって、黄金に変わっ  
ちまうんじゃ。

「……ああ、やっとわかった。それ、夢幻人がここ最近この町に仕掛け  
てたヤツだろ。いつまで探しても見つからないから、なんだろうなと  
思ってたんだ」

「へへ、そうだぜ。コイツは脱出用の転移陣。一応魔法以外の移動手段に含まれるが前々からあるからお前の黄金化も免れるのさ。——んじゃ、一先ずおさらばさせてもらうぜい」

「いつかまた、ヴァーリと共に貴方を倒しに戻ります。——その時までに、御覚悟を」

「覚悟なんかいらねえな。今死ね。五重奏」クインテット

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost』  
『DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide』  
『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost』  
BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost  
BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost  
Boost』

『DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide』  
DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide  
DivideDivide』

『BoostDivideBoostBoostBoostDivideBoostDivideBoostDivideBoost』  
stDivideDivideDivideDivideBoostBoostDivide  
eBoostBoostBoostBoost!!!』

輪廻と男達を一直線に繋ぐ、バリアでできた樽円のドーム。

明らかに過剰であろう倍加と、恐らく半減（男二人から感じる力が極端に弱くなった）の力の後、一拍置いて輪廻の両腕の大砲部分からエネルギー砲が発射される。

『カタストロフ・ストライク  
龍 撃』



## 白猫、黒猫

「……はあ」

ヴァーリを取り逃し、ふと冷静になると自分がやった事が何だか気恥ずかしくなって逃げだしてしまった。

勿論壊したものは直したし、俺が関与していない物でも後処理はやった。時間操作はこういう時の為にあると言っている。

だが、しかし……

——俺は俺は俺はツ、俺は一度たりともそんな事言われてないのにツ、テメエはあああああああツ!!!『子供を産ませて欲しい』だとオとおおおおあああああああツ!!!殺すツ、ぶっ殺すぞこのド腐れカス野郎がアあああああああツ!!!

別にアレを言った事は後悔していない。俺は実際あれくらいキレてたし、今でもヴァーリへの怒りは絶えない。

けど、だからと言ってアレを黒歌の前で言ってしまったのはいかなものかと。

俺は別に、黒歌に自分の好意を伝えた事があるわけでも何でもない。

早い話、付き合ってもいないのに彼氏面してキレ散らかしたという訳だ。よくよく考えれば気持ちの悪い男である。

「どの面下げて帰ればいいんだよお……」

「別にどの面も何も無いと思います」

背後から聞こえる声は、小猫の声だ。

気配を感じていたからそこに驚きはしないが、俺の小さなぼやきが聞かれていた事は驚き……というか余計に恥ずかしい。

心なしか、彼女のジト目が俺を非難する色を帯びているように感じてしまう。

「……なんの用だよ」

「何も言わずにいなくなったので、先輩が居そうな場所を手当たり次第探してみただけです。貴方は、良くこういう場所に居ますから」

深夜の公園。しかもここは街を一望できる高台。

なるほど、確かに俺はこういう場所に良くいるな。

あつそ、と返事とも呼べぬ返事をして、街を眺める。

何とも思っていない風を装ってはいるが、内心ドキドキしっぱなしである。

恥ずかしさで。

今にも顔から火が吹き出そうだ。

「……まさか先輩が、あれほど強いとは思っていませんでした」

「え？あ、ああ。そうか。まあ所詮噂は噂だしな。漠然と強いって話だけ聞かされてたら疑いもする」

「殴ってもダメ。魔法もダメ、仙術は効かないばかりか黄金に変えられてしまう……そんな力を、どうして手に入れようと思ったんですか？」

「強くなりたかった理由って事？」

はい、と小猫が頷く。

さらつと俺の隣に腰かけている彼女は、無表情のまま俺をじつと見つめていた。

どことなく黒歌に似た顔だ。姉妹というだけある。——いや、実際姉妹なんだけど。

「……早い話が、生き残りたかったから、かなあ。ドライブと会って、この世界についてわかって……弱いままだと、俺どころか家族まで危険が及ぶかもしれない。そう思うと居ても立っても居られなかった……というか。とにかく強くなるうって、がむしやらになったんだ。んで、そこら辺のはぐれ悪魔なんかに殺されかけてた弱小人間は、気が付きや無限の龍神相手に引き分け持ったたり、グレートレッドなんてとんでもねえヤツを脅かす者扱いされるレベルにまで至ってたって訳だ。神器を分けてもらったのは、自分一人の力じゃ伸び悩むようになつたから。そしたら今みたいな、あらゆる攻撃が効かない化け物みたいな赤龍帝が出来上がったんだよ」

「……生き残り、たかったから」

反芻する様に呟く小猫に、俺は空を見上げて記憶をたどる。

初めて神器を起動させた、生後数か月の時。

初めてブーステッド・ギア本来の力を扱えるようになった時。  
初めて魔力による時間操作が可能になった時。

初めて禁手に至った時。

他にも龍帝武装、覇龍変生……沢山の力に目覚めた時。

今の俺が使う力の全ては、なんだかんだ死の淵が殆どだった。

神器の起動と龍帝武装はそうでも無いが、それ以外は基本全部「死にたく無い」という思いがあつて目覚めた。

神器は所有者の願いによって強くなる。

俺の場合は、俺の命を脅かすものを無くしたいという願いが、『玄武変生』、『絶魔変生』、『黄金変生』といった力を生み出したのだ。

「先輩でも、命の危険を感じた事とかあるんですか？」

「そりゃ、人間なんだから当然だろ。それこそB級にも満たないはぐれ悪魔に殺されかけたことも有れば、オーフィスとの戦いで死にかけたこともあつた」

オーフィスは強かつた。『覇龍変生』にダメージを与えることはなかつたものの、俺の攻撃が致命傷になることも無かつた。

いわゆる千日手つてヤツだ。そうなりゃ、限界がある俺が負けて当然だろう。

……けど、俺には覇龍変生のその先がある。元々はヴァーリ相手の切り札のつもりだったが、今回は使わずに済んだ。というかアレは人が近くにいる時に使うわけにはいかない。

何せまだ、制御できていないのだから。

……そういえば、俺はどうやってあの姿から戻る事ができたんだろうか。

オーフィスから戦いの最中奪った無限の因子で、あの力は永続的な物になつたはずだが。

「先輩が死にかける、なんて……想像できません」

「そうかもな。今じゃあらゆる攻撃が通用しない無敵のドラゴンだからな」

「……………それほどの力を使うのが、恐ろしく無いんですか？」

「ん？」

俯きながら発せられた小さな言葉に、俺は首を傾げる。

恐ろしい。この力が？確かにそりや、現状俺の最強状態ともいえるアレは使うのを躊躇するっていうか怖いけど、龍帝武装とかは恐怖心も何もない。

覇龍変生なんかは歴代の赤龍帝と完全に和解して手に入れた力だ。恐ろしさなんてかけらも無い。

その事を伝えると、小猫は「そうですか」と一言告げて、そして一拍置いて語り出した。

「……私は、怖いです。私の力が」

「……猫又の力の事か」

「はい……姉様がかつての主を殺した時から、私の中には力に対する苦手意識があるんです」

「黒歌が力を暴走させて主人を殺したからか。でも、それは嘘でお前を守るための行動だったって話じゃ」

「そう、だとしてもです。姉様は実際、輪廻先輩に会うまでは力に溺れていたと、禍の団に入っていたのも力を気ままに振りたいという気持ちがあったからだと言っていました。……溺れる危険性がある力を持つなんて、私には無理です。リアス部長には恩もありますし、そもそも仲間を自分のせいで傷つけるなんて嫌です。勿論、先輩にこの力の矛先を向けてしまうのだって嫌です」

「……なるほど、ねえ」

ポロポロと涙を流す小猫に、俺は大きく息を吐きつつ考える。

力が怖い。もし暴走して、あるいはそれに溺れて、大事な人を傷つけたく無い……か。

ギヤスパーも同じことを言っていた。自分の力で誰かが嫌な思いをするのが嫌だ。自分の力が暴走して、世界が完全に止まったままになつたらどうしよう、と。

生憎と、俺はそんな悩みを抱いた事がない。

強大な力。そんなもん、俺に宿ってるわけがないだろうと。

赤龍帝の力がなければ俺は甲斐性無しのおろくでなしだ。そこにクスとウスノ口を足している。

ようは悩みの種になりうるのは赤龍帝の力のみということになる。だがドライグが俺の意に反して暴走する事は決して無い。仮に暴れてもたかが赤龍帝。この世界全体で見れば中堅程度である。

イツセー達の交友関係なら、俺を止める存在はいくらでもいるだろう……いや、今はまだそんなにいないか。

あれ、そう考えるとやばいな。ちよつと不安になってきたぞ。

と、とにかく今は小猫だ。

さてどうしたものか。今更「わかるよその気持ち」と言つたとして、きつとなんの慰めにもならないだろう。

ここで必要な……というか、俺にかけてやれる言葉って、一体何だろうか。

「要するに小猫は、自分がその力で誰かを傷つけるのが嫌なんだよな？それが力に溺れての物でも、暴走してしまつての物でも」

「…はい」

「それっていうのはさ、多分……間違つてたらアレだけど、きつとそれは力があるが故の孤独ってのが怖いんだと思う。その孤独に至るまでに、誰かを傷ついたり、その力に溺れて自己中心的になったりとかがあるわけで。最終的にあるのは孤独だろ？」

「……………孤独、ですか」

「そ。ギヤスパーだって、時間が止まる力のせいで嫌われる事、悪意を向けられる事……ひいては世界全てが止まつて、自分しか動けなくなつてしまう事。そういう孤独を恐れてた。——小猫も、そんなじゃないかつて思つてさ」

取り敢えず、自分の考えを口に出す。

これを頭ごなしに否定されるようなら俺はもう何も言えないのだが、もしこれで言い淀んで考えるような素振りでも見せれば、小猫の不安つてのは今言つた通りになるわけだ。

それなら、ギヤスパーの時と同じやり方で良い。

横目で様子をうかがうと、真剣な表情をして悩んでいる様子だった。

俺の言葉が真実かもしれないと、心の中で迷っている証左だ。

「その様子だと、当たりっぽいな。——いや、別に恥ずかしがるもんじゃないさ。ヒトつてのは一人だけじゃ生きていけない。中には一匹狼気取りや自分は一人が楽だとかいうヤツがいるが、そういうヤツにも最低限の関わりをもつ奴はいる。家族とかな。完全な一人つてのは、孤独つてのは、今この地球を生きているヤツには無い」

「……仮に、そうだとして。先輩に何ができるんですか。『氣』は扱えても、仙術は使えないんでしょう?」

「闘気は一応使えるがな。仙術はからつきしだ。だからお前の修行を見てやる事なんてできないし、時々アドバイスするなんて事も無理だ。——けどさ。お前がもし力を暴走させそうになった時。お前がもし力に溺れそうになった時、ソレを止める事はできる」

「止める、つて」

「勿論小猫を傷つけるような止め方はできる限りしないようにするさ。ガス欠になるまで俺が受け止め続けるとか。お前が誰かを傷つけるってなったら、ソイツを俺が身を挺してでも守りやいい。お前がもし力に溺れそうなら……一応、俺の持つてる神器の中に気分を落ち着かせるモノもあるし、ソレを使えば考え直せるだろ。——お前は一人にはならねえさ。少なくともお節介な俺がいるし、同じ力を持って、同じ血を引く黒歌がいるだろ?それに、部長たちだってお前の事を持った力で忌み嫌ったりなんかしないだろうしさ」

「……本当に、止めてくれるんですか?」

「ああ」

「力を制御できなくなっても、力に溺れても、助けてくれるんですか?」

「そりゃ勿論」

「——私を、一人にしないと、約束できるんですか?」

「できるよ。大事な後輩で、部活仲間で——一緒に家に暮らす、家族なんだからさ」

その言葉を聞いて、小猫は体を俺の方に向け、縋るような目をして言った。

多分きつとその言葉は、本気じゃ無かったのかもしれない。

隠していた本音を曝け出して、少しおかしくなってしまっただけかもしれない。

「——じゃあ、本当だというなら」

それでも、俺は素直に、黙って行動で答えた。

「私を、抱きしめてください」

今まで何度も膝に乗せたりと身体的接触の多い子だったが、真正面から抱きしめ合うのは、これが初めてだった。

※——

抱きしめられてからもしばらく泣きっぱなしだった小猫がようやく落ち着いたので、家に帰ることにした。

家が近づくにつれて黒歌への気恥ずかしさやらが蘇ってきて「やっぱり今日はネットカフェでお休みしてくるから…」と情けない一言を漏らしてしまったのだが、小猫様はそんな軟弱な意見を許してはくれなかった。

……どんな顔すりやいいんだろ。

小猫は気にすることは何もないとか言ってたけど、正直そうは思えないんだよな……アイツの意見ガン無視して、勝手にキレてた身だし。

「…あつ、ご主人様!!白音!!」

家の前では、黒歌がそわそわしながら俺たちの帰りを待っていた。夜も遅いというのに、よくもまあ待っていてくれたなと思う。

俺の手を掴んで離さなかった小猫が、ようやく俺から離れた。

「た、ただいま……はは、はははは……」

後頭部を搔きながら、消え入りそうな細かい声を出す。

黒歌の方は表情の読めない状態のまま、取り敢えず中に入りましよう、とだけ言っつて、踵を返した。

……もしかして、だけど。怒ってらっしやる？

いやいや、まさか……あの発言で怒ってるんだとしたら、俺もう一生立ち直れない自信がありますけども。

家に入るも、そこには静寂だけが広がっていた。

居間は灯りがついていたが、父さんの声も母さんの声も、後はゼノ

ヴィアやアーシアの声も聞こえてこない。

気配は二階から感じるし、寝ているのかもしれない。

「では、私は先に寝ていますので。姉様と先輩で、後はごゆっくり」  
『そうだな。俺ももう寝るとしよう。お休み相棒。後は若いのでごゆっくり』

「おい待てドライグ。小猫はともかくお前は寝ないだろ普通。おい、ちよつと?もしもし?」

返事はない。言いたい事だけ言って本当に寝やがった。

多分狸寝入りだけど。

残された俺達は、やっぱり気まずい雰囲気のまま、なんとなく居間に向かう。

「……えつと、そのー……」

「お茶。用意するにやん」

語尾はにやんだ。これは機嫌が悪くない証拠である。ちよつと一安心。

何か話さねば、と話題を模索する俺に、黒歌は席を離れて台所へ向かう。

猶予時間と考えれば良いだろうか。ならば今のうちに何を話さしつかり考えなくっちゃ——つて早いな!もう終わったのか!

テーブルに置かれた緑茶に、お門違いとわかつていながらもちよつと恨みの念を送る。

ええい、もつと長々と時間をかけて注がれたまえ。

「ごめんなさい。ご主人様」

「——へつ?」

困った困ったと喚いていた俺の脳内と対象に、落ち着いた雰囲気のまま黒歌がしんみりと謝る。

…いやいや。ごめんなさいってのは……もしかして、禍の団に所属してたって事?

確かに所属してる事は今まで知らなかったけど、それ自体はあまり別に気にしていないんだけど…

まあ、気になるか。テロ組織だもんな。普通謝るか。

「私が、禍の団に所属してた事。——昔は全部がどうでも良かったからって、ヴァーリに誘うような言葉を言っていた事」

「……え、あれってマジだったの？」

「う、うん。そう。実際、私はヴァーリの……白龍皇と旧魔王の両方の性質を持つ、あの血を引いた子を産みたかった」

マジか。てつきりヴァーリのやつすい挑発かと思ってた。

それに本気で引っかけたってダッセーとか思われてんのかなって思  
い込んでたけど、違ったのか。

アレ、本当だったのか。

……だとすると余計にイライラしてきたな。

反省したはずなのに、この激情を抑えられる自信がない。

ヴァーリは原作を楽しんでいた時は、元中二病だったりケツ龍皇と  
呼ばれたりギャグ枠でありながら、銀髪イケメンの強キャラとして  
の側面もあり、結構好きなキャラだったんだが……今こうして黒歌  
に性行為を要求された事があると聞かされれば、なるほど。

殺したくて仕方が無い。

ドロドロとした、マグマのような怒りだ。

多分これは、一過性の物なんかじゃない。ずっと引きずり続けるよ  
うな怒りだ。

少なくともアイツの顔が原型をとどめなくなるまで殴らないと気  
が済まない。

「勿論、今は違う。私にとって一番素敵な人は、そのお……ご主人  
様だけだから！」

慌てて付け足す黒歌に、ほっと息を吐いて——それでいいのか  
と、疑念を抱く。

いや、確かにこの言葉は嬉しい。

黒歌から今一番素敵だと思ってるのは俺だと言われたのは確か  
に良い事だ。

だけど、それは今この時、素敵なだけ。

好きだなんて一言も言っていないし、ずっとだなんて言っていない。  
それで満足しているだけで良いのか。

いや、良くない。

だって俺は、黒歌が。黒歌の事が。

「ごめん、黒歌」

「っ、な、何が？」

「まったくムードも何もねえけど、黙ってるわけにもいかねえし。――

――好きだよ、お前の事。女として、ずっと前から」

ぽかん、と口を開けて固まる。

照れは無い。どちらかという申し訳なさがある。

本当なら、もつとムードのある場所で、もつと状況を考えて告白したかった。

一大イベントだ。失敗しない為に万全を期したいと思うのは当然だろう。

しかし、俺にはもうそんな悠長な事を言える余裕がない。

ヴァーリの件で、「黒歌が誰かに奪われてしまうのでは」という疑念が、浮上ってしまったのだ。

だというのに、色々理由をつけて遠ざけるなんて真似、できない。できるわけが無い。

俺は黒歌が好きだ。

ハーレムを作りたいとか言っておきながら、全員平等にするとか言っておきながら、多分黒歌以上の女性はこの先出会わないとすら思っているレベルだ。

今までもこの先も、ずっと俺の一番は黒歌なんだ。

きつとアジアには好意を寄せられているし、ゼノヴィアだって子作りという願いがあった上でだが俺を好きになろうとしてくれる。

小猫だって、もしかしたら俺に気があるのかもしれない。――いや、それは無いか。身体的接触が多いとは思うけど、懐いてるだけか。猫的に。

ともかく、俺に好意を寄せてくれる可愛らしかったり美しかったりする子がいるとしても、俺の中で黒歌が最上級なのは不変の真理になっている。

それくらい好きなのに、何もせずに他の男のモノになりましたなんて、許容できるわけない。

——でも、流石に考え無し過ぎたか。

少し後悔しつつ、黒歌の様子をうかがう。

呆然としていた顔は、俺の発言をようやくと理解してか神妙な顔になり、そして瞳からはポロポロと涙がこぼれだす。

「ほん、と?」

「嘘なんて吐くかよ。何度だって言えるさ。好きなんだよ、黒歌の事。恋人同士になりたいし、結婚だってしたい。俺の子を、何人も産んで欲しい」

何も取り繕うことなく、直球で勝負。

それしかできない。つてか、ここまで来て技巧とか何もない。

そんな言葉でも、黒歌は涙ながらに、嬉しそうに何度も首肯してくれた。

「わたし、も。私も、好き。大好きっ……!恋人になるし、結婚もするし、ご主人様の赤ちゃん、沢山、たつくさん産むから!」

## 墮天使先生

「つてな訳で、今日からこのオカルト研究部の顧問になった、墮天使の総督、アザゼルだ。先生でも総督でも、好きな方で呼べ」

黒歌との交際を開始した翌日。満ち足りた気持ちで一日を過ごし、昨日全員の前で見せてしまった痴態の事など忘れてオカルト研究部の部室にやって来た俺を出迎えたのは、着崩したスーツ姿のアザゼルだった。

……ああ、ここの顧問やることになるんだっけ。イツセイ達の監督も兼ねて。

隣で大きく口を開けて驚いているイツセイに部室へ入るように促しつつ、俺は一応アザゼルに問いかける。

「どうしてここに？」

「サーゼクスからの御指名でな。前に結んだ『駒王協定』の強さを示すために、こうして悪魔の学園の教師として墮天使を呼んだわけさ。後はまあ、サタンのガキやバロールの目を持つ吸血鬼の面倒を見るためだな」

「お、俺達の面倒をつて……アンタに何が」

「おいおい、俺は神器マニアと呼ばれた墮天使総督サマだぜ？強くなる方法なんざ、いくらでも提示できる」

洋画の登場人物みたいに大仰な身振り手振りをするアザゼル。

その表情若干ウザい。イラっとくるような、人を小馬鹿にした顔だ。

しかしまあ、原作通りではあるが、果たしてイツセイの面倒を見れるだろうか。

アイツはサタンの力を宿す神器、『悪魔の連撃』を持つ。アレは本来存在しないような神器だ。いくらマニアのアザゼルだろうと、流石に何も知らないのでは。

「お、俺も強くなれるのか？」

「ああ。俺の指示通りにすればな。——だが初めに言っておくが、その規格外だけは目標にするな。折れて終わる」

「ツ！お、俺達じゃ輪廻みたいにはなれねえつてのかよ!!」

突然声を荒げるイツセー。何か強迫観念めいた物を感じているように見えるが、どうしたんだらうか。

思えば、なんだか俺がヴァーリをボコボコにした日以来ずっと何かを悩んでいるように見えた。

……ううむ。パツと思いつく事が無い。まあ、いつかわかるか。

そんなイツセーに、アザゼルは溜息一つついた後、聞き分けの無い子供に教えるように告げた。

「絶対になれない訳じゃない。そもそも輪廻自体、元はただの人間。はつきり言っちゃえば、お前らよりも素体的には格下もいいところだ。それは本人も言ってた」

「先輩が、僕たちよりも格下…?」

「確かに輪廻君は人間かもしれませんが、彼は倍加無しの状態でもコカビエルの攻撃をいなせたんですよ?そんな彼が、僕たちよりも下だなんて……」

「いや、下だよ。圧倒的にな。足りない分を量と質だけで埋めただけだ」

量と質?と全員が首を傾げる。

それに対しアザゼルが頷いた後、呆れたように補足した。

「知つての通りコイツは時間操作ができる。ソレを使えば、たった一回の腕立て伏せが何百億回分にも相当するし、時間逆行をすれば過去の強者と戦って、その技術を体験する事だってできるわけだ」

「だからまあ、悪魔の長い寿命の全部をトレーニングや実践訓練に費やせば、俺レベルなんて簡単に越せるようになる。だけどトレーニングは最初の内は色々創意工夫とかがあるし、肉体の変化も大きいのが、途中から肉体の変化が全くわかんないレベルになるし、トレーニングも単調な一つ二つの工程に落ち着く。飽きやすくなるんだよ。俺の場合は時間が戻せるって強みがあったし、強くならなきゃいけない理由があったからできたけど……普通は無理だよ」

説明を聞いて、皆が渴いた笑みを見せる。話を聞くだけでも、大分荒唐無稽に感じる事だろう。

だが実際俺はソレをやった。やってやった。だから強くなれた。それでもまだまだ足りない気がしてならないが、一応今の時点では事足りる。

ディオドラの一件の時には、俺も鍛え直そうかなと思ってるけど。「まあ、あんま悲観的になんよ。こんな規格外のバカが近くに居ちやアレかもしれないが、お前らだって十分この世代じゃ強い方だ。伸びしろだってある。下手すりゃ魔王クラスだって夢じゃねえ」

「……強くならなきゃ、いけないのね」

「ああ。お前の場合は若手悪魔同士の戦いだってあるんだろう？ 単なる我儘お嬢様で終わりたくねえってんなら、そりゃ強くならなくっちゃだなあ。——後、『禍なる夢幻団』との戦いに身を投じるかもしれないえんだ。いつでもその最強が守ってくれるワケじゃねえし、自分の身くらい自分で守れた方が良いだろ？」

「あの、アザゼル……先生」

「ん、どうした聖魔剣使い」

眉を顰めて、言いにくそうにしながらもアザゼルを先生と呼んだ木場。

右手が挙げられているのも相まって、まるで授業中に質問しているかのようだ。

「僕は木場祐斗です。——ええと。『禍なる夢幻団』は、テロ集団の『禍の団』と赤龍神帝崇拜組織『夢幻人』が手を組んで生まれたんですよ」

「ああ、そうだな。元々俺達が話の終わってるはずの会合をやったのは、『禍の団』或いは『夢幻人』……もしくは両方をおびき寄せたためだった。その時はまだ、連中が手を組んでるなんて思いもなかったがな。それがどうかしたのか？」

「今の僕たちは、『禍なる夢幻団』相手に戦えますか？」

「……なるほど？ 戦ってたのは俺とセラフォルと輪廻だけだったから、相手の強さがどれほどかわからねえってか。——なあ木場祐斗。お前は禁手をどれくらい維持できる？」

「？ 大体、一時間ぐらい……ですけど」

「サタンの方は？」

「……俺は、まだ。禁手できそうもねえ」

俯きながら答えたイツセーに、アザゼルは目を丸くする。

「へえ。そりや本当か？お前ほどサタンと相性の良い男は居ないと思うが」

「相性がいい悪いって話じゃねえだろ。俺に力が無いから……」

「いや、そういう話さ。確かに力がありやどんな神器でも従えられるけどな。神器と相性が良けりや、力が無かろうが禁手に至る資格を得る事が可能なんだ。その上お前は、現状このメンツの中で一番体でできてる。俺の見立てだと、禁手化してない方がおかしいと思うが……サタンから、何かご意見はねえのか？」

『正解だぜ、アザゼル。コイツは俺の力を操るべくして生まれたような男だ。禁手出来てないのは、まあ気の持ちようが半分と、目覚めるに足る出来事が無いってのが半分だな。後半はともかく、前半の方はいずれ何とかしなきゃいけねえ問題だ。ま、天下無敵の赤龍帝サマが味方なんだ。気長で良いだろうさ』

なんか言葉に棘があるが、それは多分過去に俺がコイツの事を一方的にボコボコにしたからだろう。

『覇龍変生』が使えるようになって調子乗ってたというか、舞い上がっていたというか……とにかく、一時のテンションに身を委ねてやり過ぎたと思っている。申し訳ないとは思っているんだが、多分コレを伝えたらもつとキレそうだし黙っておく。

つつーか、イツセーの気の持ちようが……やっぱり何か悩みでもあるのかね。

何かあるってんなら相談にでも乗ってやりたいが、果たして俺に良い解答が出せる物か。

先日の小猫の時も、それどころかもつと前から、俺の説教的なお話はなんかちよつとズレているような気がしてならない。

……一先ずは様子見だな。うん。

「俺が、禁手に至れる……？」

『ああ、そうさイツセー。お前はいくらでも強くなれる。なんてっ

たつてこのサタンの宿主なんだからなあ。——まだまだ元気出すにやあ足りないだろうが、そういつまでも落ち込む必要は無いつて事だけ頭に入れとけ。その女モドキ吸血鬼もな。お前の場合は、俺の見立てだと……まあ、今年中には禁手に至るだろう』

「ぼ、僕もですか？」

『そうさそうさ。神器持ちじゃねえお前らだつて、他の追隨を許さぬ強さは手に入れられると俺が保証しようじゃねえか。——ただ悪魔と墮天使が混じった女。お前はアレだ。いつまでもそのままじゃあ置いてけぼりだな』

「おい、その話は……」

「いいのよ、輪廻君」

さらつと朱乃さんの秘密を暴露した挙句、地雷原でタツプダンスするような発言をしやがったサタンに、少し黙らせるべきかと声をかける。

しかし、朱乃さんはあまり気にした様子も無く、穏やかな表情で変わらず微笑み続けていた。

ソレに対して驚くのはアザゼルだ。

……なんで知ってんだ、つて思ったけど当たり前か。部下の娘だもんな。

「そーいや、俺がここにいる事に対してもあまり反応してなかったが……一体どんな心境の変化だ？」

「別に、何も変わってはいませんわ。私はあの男……バラキエルを今でも憎んでいる。それでも、今の私には私を想ってくれる仲間が、大切な人がいると、そう気づいた——気づかせていただいただけです」  
「……そうか。ま、それならいいんだが——」つと。話を戻そうか。  
神器持ちの奴らにとって、これから禁手の長期間使用は必須条件……いや、もはや前提条件になるな。戦闘の途中で力尽きましたじゃ話にならない」

「禁手の、長期間使用……あの状態を長く維持できるようになれつて事か」

過去に一度禁手化した事のあるイツセーが、左手を見つつ呟く。

あの時は凄かったな。上級悪魔の中でもかなりの強さを誇るライザーが、あんな呆気なく。

一応最上級悪魔クラスの肉体を持ってると太鼓判を押された俺でも、神器無しで相手するのは恐ろしいと思っただくらいだ。

ソレを長い事維持できるようなになれば、きつとかなりのアドバンテージとなるだろう。

「で、でも。祐斗先輩は一時間も使えるらしいですし、問題無いんじゃない？」

「それはあくまで最大値の話だろうが。連戦になったり、体調が優れなかったり……相手はお前らの都合を考えてくれるわけじゃない。寧ろ弱みは積極的に狙ってくる。ヴァーリなんかは、一か月は禁手を維持できたしな。戦闘込みだと多少は下がるが」

「い、一か月!?!」

「アイツだけじゃねえ。優れた神器使ってのは、禁手を日や月単位で維持できるもんさ。——因みに赤龍帝。お前はどれくらい維持できる?」

「禁手どころか『覇龍変生』だって、俺の寿命が尽きるまで維持し続けられますよ」

過去にオーフィスと戦った時、『覇龍変生』を数億年間維持したのだ。

今の俺の寿命は大体二千万年のはずだから、間違った事は言っていない。

まあ、寿命なんていくらでも増やせるんだけども。

……それと、俺は数百年程度しか生きていないはずなのに、数億年維持したというのはおかしいと思うだろうが、「数百年生きた」というのはあくまで人間的な生活をしていた年数の話であって、戦闘にかけた時間はノーカウントという事である。

オーフィス以外にも、年単位で戦うような相手沢山いたし。

「……あー。まあ、コイツはアレだ。参考にするな」

アザゼルの言葉に、全員が頷いた。

おいおい失礼だな。俺の教える能力はかなり高いと自負している

んだが？

「ひとまずは、禁手を最低でも2ヶ月維持できるようになれ。つーかできなきや死ぬぞ。ヴァーリの野郎も、俺の部下から奪った神器で底上げされちまつてるはずだしな」

『まあ、あのやられようでは、心が折れて再起不能になっているやも知れんがな』

「かもな。挑発するにしても、もう少しやり方があったとは思うな。あの破壊力だ。なまじある程度軽減して致命傷程度に留められたのが裏目に出たな。あれ、不死鳥でも生身で喰らえば死に尽くすような一撃だったろ」

「まあ、俺自身あいつを簡単に死なせたくなっただけで大分手を抜きましたけどね。それでもあの出力なら、地表を焼き払うくらいは容易にできましたよ」

俺は黒歌と交際することになった。アイツの一番は、名実ともに俺だ。

だが、過去にアイツが黒歌から誘われたことに変わりはない。アイツが、俺の知らない黒歌の一面を見たことも事実だ。

それを許せるかといえば、勿論そんなことは無い。許せるはずが無い。必ず殺す。俺が、この手で。

「あー、大体何を考えてるのかはわかるが、一旦落ち着けバカ。テメエの殺気で窓が割れちまつたじゃねえか」

「……あ、すんません」

「そして平然と時間を戻すな！——つたく。常識外の存在との会話程疲れるモンはねえな。まあ、これからはお前も振り回される側になつてもらうから覚悟しておけよ」

「え、振り回される側？」

無意識のうちに発していた殺気に怯えてか黙っていた皆も、首を傾げる。

大方、俺が振り回されるような事なんて無いと思っっているんだろう。実際俺もそうだ。俺が誰かに振り回される事は無いはず。

まさか、黒歌に尻に敷かれるとかそういう話だろうか。それなら別

に苦しやないが。

「絶対なんか勘違いしてるだろうから教えてやる。お前には、夏休みの間コイツ等の修行の面倒を見てもらうんだよ」

「……………夏休みの間、修行？」

俺よりも先に、イツセーが尋ねた。

なんだ、コイツも知らなかったのか。てっきり俺以外は既に合宿か何かをする前提で動いてるのかと思っってしまった。

「ええ、そうよ。さつきアザゼルが言っていた通り、私達には力が必要。そのために、ライザーとの戦いの前のように、強化合宿を行うつもりなの。期間は勿論、夏休み全部よ」

「……………イツセー先輩は、知らなかったんですか？」

「え、ちよつと待って。知らなかったの、俺だけ？」

部長と小猫の言葉に目を丸くして、イツセーは自分自身を指さした。

それに対し、部長が申し訳なさそうにしつつ笑って答える。

「ごめんなさい。貴方に真っ先に話すつもりだったのだけれど……………すっかり忘れてたわ」

「いやあ、僕たちもてつきり、部長から聞いている物かと」

「そ、そうか……………まあ、別に予定があった訳でもないし、いいけど——って！ライザーの時と同じようになって、つまり部長の別荘に行くって事ですよね！お風呂場付きの！」

「いいえ？今回は、私の実家……………つまり、冥界に行くわ。貸し切りのお風呂のある、ね？」

「ぶ、ぶぶ、部長の、実家あああああああッ!!？」

何を想像したのか、イツセーは一瞬でゆでだこのように顔が真っ赤になり、鼻血を出しつつ幸せそうな顔で倒れた。

大の字になって寝転ぶイツセーは、ブツブツと「貸し切りのお風呂呂ってつまり…」とか「ご両親に本格的なご挨拶…」とか言っている。

それを無視して、小猫が俺の方を一瞥し、その後部長に質問する。

「冥界に行くとなると、先輩は来れないのでは……………？」

「確かに、冥界は本来、人間は入れないわ。でもそれはただの人間の

話。輪廻は今代の赤龍帝だし、その力は三大勢力どころか外部勢力にすら届いていて、しかも畏怖されている程……なんら問題ないわ」  
「なんでか自信ありげに答える部長。でもその内容はちよつと不服だ。」

別に俺は、何か畏怖されるような真似をした覚えはない。強いて言うなら、心を折るために戦ったヴァーリくらいだ。もし狙い通りに行っていたら、アイツは俺を想起させるものを見たり聞いたりするだけで発狂するくらいになっているはず。

何せ、自分で言うのもなんだが、不死鳥すら再生を拒み、死んで逃げ出したくなるほどの攻撃だ。再生能力なんて無いアイツが、まともな精神で居られるわけがない。もし回復できたとしても、アイツの身は別人になることだろう。

「つてか、ついていくつて……俺、夏休みは黒歌との予定で埋め尽くしてただけだ」

「ならアイツも連れてくりやいだろ。別にずっと付きっ切りで居ろとは言わねえし、何よりお前がずっと近くに居ると心折れちゃうだろ、コイツら」

「お前さつきから俺に対して失礼すぎないか……?」

「良いんだよ。俺は常識外れた馬鹿野郎には冷たいんだ、俺の胃を痛める存在なんだからな」

「ストレスとは無縁そうな顔しておいてよくもまあ」

「んだとテメエ！俺のアルティメットウェポンと化した左腕の力見せてやろうか!?!」

「見せれるならな。停まった時の中でも動くつていうなら、是非見せてもらおうか」

「——ちつ、今日はここまでにしておいてやる」

「小者か」

さりげなく機械になった自分の左腕を見せびらかそうとしてきたアザゼルを、冷たく一蹴。

時間操作がいに恐ろしい力なのかわかる。俺は結構どうでもいい事にばかり使っているが、持つ者によっては神になったかのような

気持ちにすらなるだろう。

となると、やっぱりそういう力を『恐ろしい物』として溺れずにいられるギヤスパーってすごいな。同じ立場なら、俺はきつと有頂天になって好き放題していたはずだ。

「因みに何を教えればいいんだ？」

「お前は主に神器持ちの面倒を見ろ。一応全員に簡単な体術とか、魔法の使い方とかも教えてやれ。コンディション確認とか、データ系の仕事は全部俺がやる」

「……さりげなく俺の負担多くね？まあ、良いけど」

「できない事が殆ど無い自分を恨むんだな」

皮肉っぽく笑うアザゼル。なんだか無性に腹が立つ。

一度くらい、覇龍変生でぶん殴っても許されるんじゃないだろうか。ちよつと思つた。

「しかし、輪廻君の指導、か……懐かしいような、新鮮なような。あの時とは少し違うからね。赤龍帝だという事を隠さない指導が、楽しみなような恐ろしいような」

「せ、先輩に、夏休み付きっ切りで指導してもらえるだなんて…!!か、感激ですう！」

「お前はいつも特訓に付き合ってるだろ……いや、喜んでもらえるなら良いんだろうけど」

「私のデュランダルも、広い目で見れば神器だと思うんだ。どうだろうか」

「私も、広い目で見れば同じ仙術使いですので。やはり付きっ切りの指導が必須かと」

「あらあら。なら、私は魔力が使えなくなった時の為に、体術を重点的に教えて欲しいですわ。手取り足取り」

「おいおい、遊びじゃねーんだぞー？」

盛り上がる皆を、アザゼルが鼻で笑いながら窘める。

しかし、彼等の熱は冷めないようだった。楽しみにしてもらえるのは嬉しいが、ハードルが上がっている気がしてちよつと困る。

頬を掻きながら「まいったな」と小さく口の中で呟いた俺に、イツセーが近づいてくる。

いつになく真剣な顔に、少し姿勢を正した。

「……なあ、輪廻」

「おう、どうした？」

「お前に教えて貰ったら、禁手もできるのか？強く、なれるのか？」

「——それは」

返答に迷う。

俺は確かに神器に詳しい。所有する神器の数は人並以上。そしてソレ等を十全に……とまでは言えない物の、それなりには扱うための知識はしっかりと持っている。

だからこそ、アザゼルやサタンがイツセーに言った、「禁手は可能」という言葉が真実である事は分かる。

だが、コイツが最後の一步を踏み出すために必要なのは、多分俺の力じゃない。もっと違う何かだ。

この場合、どう答えるべきか——。

数秒悩んでから、俺は答えた。

「それは、違う」

「ツ、それは——」

「お前の望む事と、俺が教える事、それはきつと、違う。望む通りの結果には、ならないはずだ。お前に必要な最後の一押しは、俺の指導なんかじゃない。もっとお前らしい、お前だけの何かだ」

「……俺、だけの？そんなの……」

わかるわけねえだろ、と。そう呟いたイツセーは、俯いたまま部室を出ていた。

ただならぬ様子に、部長が後を追おうとするが、アザゼルがそれを止める。今はそつとしておいた方がいい、と視線で語り掛けた。

——なんつーか、前途多難、だな。

天井を見上げつつ、俺は溜息を一つ吐くのだった。

## 冥界合宿のネバーダイ いざ、夏の始まり

「ご主人様」

頭蓋の中身が全て蕩かされるような甘い甘い声、ほんのりと生暖かい呼気と共に耳朶を打つ。脳が先に目を覚まし、開く前の瞳には恐らくカーテンから差し込んできているのだろう陽の光が白と赤の入り混じったような色となつて知覚された。

そこまでしてようやく本当の意味で目を覚ました俺は、迷わず声の聞こえた方を向く。まず見えるのは、金色の瞳。やや潤んだソレは、慈しむように、愛おしいと叫ぶように、俺をじつと見つめていた。そこから少しだけ視線をずらすと、彼女の頭部に一対の猫耳が見える。ピコピコと動くそれは、確か『嬉しい』のサインだと、猫の気持ちについてまとめた本に書かれていたはず。アレは大分眉唾ものだが、もし本当だとしたら良いな、なんて思いながら、やつと口を開く。

「おはよう、黒歌」

「おはようじゃん」

色気と、無邪気さと、可愛らしさと、あざとさと。色々な物が入り混じった声がすぐ近くから聞こえる事に、ソレを発した本人が、今こうして俺に密着しているという事に、自然と体が歓喜に振るえる。

彼女はいつもと変わらぬ様子で挨拶をし、そして少しの無言状態を経て、その視線を適当な場所へと移した。

黒歌。長い事俺と一緒に暮らしていて、ついに最近交際する様になった女。そして。

「にゃっはは……昨日の今日だと、なんだか小恥ずかしいわね」

「……だな」

俺の童貞を、貰っていった女である。

※

「……夕べは随分とまあ、お楽しみでしたね。御二方」

「えっ」

「も、もしかして、聞こえて……？」

「はい、それはもうバツチリと」

あの後、いつも以上にのんびりとイチヤイチャしながら一階に降りると、なんだか気まずそうな雰囲気満ちていた。皆食卓に集まっているのに、驚くほど会話がなない。一体どうしたのだろう、と思いがながら俺達が近づくと、小猫がいきなりあんなことを言ってきた。

「どうやら、小猫だけでなく全員に聞かれていたらしい。」

「あのね、輪廻。若いんだし、長い事片思いしてた子相手だと、そういう事をしたくなる気持ちもわかるけど………避妊はしなさいよ？」

「朝っぱらから母親にそんな話をされたくは無かった」

「避妊なら大丈夫です。房中術の応用で、何度出しても受精せずにそのままエネルギーに変換して吸収できるようになってますから」

「あら、そうなの？ 凄いのね、最近のその、ぼーちゅーじゅつっていうのは」

「母さん絶対知らないしわかってないだろ」

房中術は仙術の一種で、男女がまぐわう際の生命エネルギーのやり取り的な話の事だ。なるほど。俺が一人物凄く緊張して買ってきたコンドームが一つも袋から出されること無く生で終わったのはソレのおかげか。行為の最中に仙術特有の気の動きは感じなかったし、マジで孕む気かと思ってた。

「……輪廻さんと黒歌さん、最近かなりエスカレートしてますよね」

「ん、あー……まあ、俺としては物凄い年数お預けされていたというか、我慢の連続だったわけで……長い事片思いし続けた分が、こーうさ」

「なぜ黒歌は良くって私はダメなんだ！」

「いや俺とお前は別に付き合ってるわけでも何でもないだろ」

アーシアは静かに、ゼノヴィアは烈火のように俺の良心や羞恥心をチクチクと刺してくる。いや、ゼノヴィアの方はあんまり罪悪感とか無いかな。一周回ってギャグ感がある。口にはしないけど助かってるよ、ありがとう。

居心地が悪く、流し込むようにして食事を終える。別に後悔だとかそういう感情は無いが、確かに家族や居候の女の子達がいる時に、あんな激しくする必要は無かったかなと思う。考え無しにも程があったな、俺。

「……ところで姉様。喉の調子はどうですか？」

「え、いや、別に特に何も無いけど」

「そうですか。あんな声を長々と出しては、相当な負荷がかかっていたと思いますが」

「っ、白音え〜！」

平然と下ネタというか、昨日の俺達の話を持ち出す小猫に、黒歌が顔を真っ赤にして掴みかかる。掴みかかると言っても頬っぺただ。両手でムニムニと引っ張って、じゃれついている様子。

小猫は「いひやい、いひやいです、ねえさま」と抗議していた。

「でも、確かに驚いたな。まさか黒歌が、ずっと濁点混じりのような声を出し続けて」

「うう……なんだか、当事者でも無いのに恥ずかしくなってきました……」

「共感性羞恥を感じられるとこっちも余計に恥ずかしくなるからやめてくれないかなあ！」

意図しているか否かは別として、俺と黒歌は三人から言葉で虐められながら、夏休み初日の朝を迎えるのだった。

※――

「夏休みが始まって、いざ部長の実家、冥界へ！ってなったはいいけど……なんで駅？」

荷物をまとめて、部長に指示された場所へ付くと、俺達と同じタイミングでイツセーと部長がやって来た。すぐに木場や朱乃さんも合流し、アザゼルやギャスパーも集まって、全員が到着した。

現在地は、イツセーが先程わかりやすく説明口調で一人呟いた通り。最寄りの駅だ。

それなりに大きい物の、冥界なんて摩訶不思議な場所に行くにはそぐわない物である。普通なら。

「ここにはね、悪魔が冥界に行くときに使う電車があるのよ」

「冥界に電車で行くんですか!?魔法陣とか、そういうのじゃなくって!?」

「魔法陣は魔王様を筆頭とした、それなりに地位のある人でないと使えませんわ。それに転生したての悪魔は最初、この正式なルートを通らないと罰則ですもの」

「ば、罰則……!!」

「へえ、そうなってるのか。なるほどなあ。俺もてつきり、魔法陣でバンバン出現してるモンだと思ってたぜ」

「知らなかったんですか?」

「ま、ついこの間までは冷戦状態だったからなあ。悪魔も墮天使も天使も、みーんな睨み合いで、腹の中の探り合いだ。お互いの人間界への通路だって、隠したい重要項目の一つだったさ。だからこうして墮天使の長である俺が悪魔のルートを使うのも、友好の証って訳だな」

「はえー、とわかつているんだかわかっていないんだか不鮮明な声を出して、イツセーは駅の中をキョロキョロと眺める。行きかう人達の視線が、時折こちらに集中する。まあ、この一団で目立たない事は無いだろう。顔だけはそれなりにイケメンのイツセーに、純粋に王子様な木場。ワイルドイケメンのアザゼルに、男の娘とかいう重要文化財のギヤスパー。女性陣は言わずもがな、二大お姉さまの部長に朱乃さん。アーシアは聖女か天使かの二択だし、小猫だってマスコットの可愛らしさがある。ゼノヴィアのボーイツシユ?シニカル?な感じも良く、何より黒歌はこの世に二人としていない絶世の美女。これに勝る女がいるというなら是非連れてきて欲しいという話だ。まあ、そんな話に対処できるのは一休さんくらいだろう、屏風の虎とか、その手の方式を利用してくるに違いない。」

東京に初めてやって来た田舎者のような素振りを見せながら部長のすぐ隣を歩いていたイツセーは、部長が足を止めると、少し遅れて止まる。そして、その止まった場所に疑問を覚えたのか、思いつきり首を傾げた。

「ここ、普通のエレベーターじゃないですか」

「ええ。表向きは、他のエレベーターと変わらないわ。けれど、このエレベーターだけは特別なよ。悪魔が使う時は、ね」

着いてきなさい、と言って、イツセーと小猫、そしてアーシアを連れて行く。イツセーは彼氏だからだろうし、他二人は多分、小柄だからだろう。荷物もあるし、朱乃さんとか黒歌とかが入れば、すし詰め状態になってしまっただろうし。何よりイツセーと黒歌が密室で、なんて許容できん。俺がこの建物を破壊するのが先か、黒歌とイツセーが（事故だとしても）触れ合ってしまうのが先になるかの話になってしまう。

「普通は一階と二階しか行先が表示されないんですが、このカードを電子パネルにタッチすると、悪魔用の特別階に移動するようになるんです」

「へえ。魔法とかは使っていない訳か。その方法、アリだな」

部長たちが移動している間に、木場が俺達に解説してくれる。最初は魔力を識別して、とかかと思っただが、そうでもないらしい。まあ、その分コストも低く抑えられているだろうし、考えられている、という方が正しいか。

木場の説明を聞いて、顎に指をあてて何かを考え込むアザゼル。まさか墮天使側でもその発想を利用しようとしているのだろうか。コイツの技術力と人望とその他諸々があれば、正直なんでもできそうな気はするが。

再び扉が開き、今度はエレベーターに俺達全員が一斉に乗り込む。こっそり俺が空間を倍加しておいたため、かなり快適だった。なんなら部長の時もやってあげた方が——いや、イツセーと部長が人目を憚らずにくつつく理由を奪うのは、流石に悪いな。

地下へと到着した俺達は、巨大な洞窟のような悪魔用の駅構内を移動し、電車へと乗り込む。その際、部長だけが一両目に乗り込んで、俺達は二両目以降に乗る様に指示された。そういうルールらしい。眷属と主との立場を明確に、とのことらしいが、俺やアザゼルや黒歌は部外者なんだが、そこら辺はどういう扱いなんだろうか。

まあ、電車の車両にそこまでこだわりとか無いんだけど。

「なんだか、先輩とこうして落ち着くのって久しぶりな気がします」  
「最近是一緒にゲームしてやる機会も減ったしなあ。偶には遊びに行つてやるから、そう悲しそうな顔すんなつて」

「ん、えへへ……なんだか、先輩と一緒にいると安心するんです。段ボールの中にいるくらい」

「俺は段ボールだった……？」

黒歌とギヤスパーに挟まれるようにして座りながら、背もたれに全体重をかけてリラックス。ギヤスパーとの話を聞いて、黒歌が揶揄うように、悲し気な顔を作つてすり寄つて来た。

「ご主人様は、私よりもギヤスパーの方が良いの？」

「それとこれとは別だ。俺の一番は例え世界が崩壊しても揺るがないからな」

「いやーん、情熱的！」

なんだか冷たい視線と、呆れたと言いたげな溜息が聞えて来た気がするが、それは多分気のせいだろう。黒歌を抱き寄せながら、その頭を撫でてくつろぐ。これ以上ない贅沢な時間だった。

「二人を見てみると、なんだか嫉妬してしまいますわ」

「あ、朱乃さん？どうしてこう、俺に抱き着くような形に？」

「以前言った通りですわ。私は一番でなくとも構わないと。何なら一番最後でも構いませんのよ？」

「い、いや、それって一体どういう……？」

なんの番号だろうか。まさか、正妻、後妻の話？——な訳ないか。俺はこの人に恨まれる事はあれど、好かれる事は無いはず。何せ、救えるはずの（実際は修正力のせいで不可能だが）母親を、救わないと断言した男なのだ。なぜ抱き着いてきているのかは甚だ不明だが、少なくとも俺には嫌悪感しか抱いていないはず。

混乱する俺に、今度は黒歌が呆れたように溜息を吐く。無論、離れたところに居るイツセー達も同じだ。本当に、俺の発言がさも「あり得ない」と言うかのようである。

いやいや、確かに何も知らなければ朱乃さんが俺に好意を寄せているように見えるだろうけど。こっちはその、あまり言いにくい事情が

確かにあつてですね。

「朱乃は随分と輪廻にご執心のようね」

「あら、リアス。いつの間に戻っていたの？」

「ついさつきよ。せつかくだし、私も皆と——特に、イツセーと一緒に居ようと思つてね」

「っ、部長ー!!」

感激したように大声を出しながら、イツセーが飛びつく。それをひらりと躲して、体制を崩した所を後ろから抱きしめる。なんとというか、惚れ惚れするような身のこなしだった。

「貴方から抱き着かれるのも嬉しいけれど、あの勢いだと倒れちゃうわ」

「す、すみません!」

「良いのよ。いつかは私も、貴方を正面から抱き止められるようになるから」

「……あの二人に関しては何も言わないのか、小猫」

「姉と主とは話が違います」

二人だけの空間を生み出しつつある彼等を指さすも、小猫は特に言いよどむ事無くそう答えた。畜生。俺達の方がダメなのは、片方が姉だからか。そりや肉親がデレデレしてる所なんて見ていて恥ずかしくなつて当然だとは思うけど。俺だつて父さんと母さんが人目も憚らずイチヤイチャとしていたらなんか気恥ずかしいし。

そんなやり取りの間に、人の良さそうな老人が俺達に何か機械のような物に向けて登録(これで魔法陣を使った入国が可能になったそう)だ。とは言え滅多に使う事は無いらしいが)を完了させ、幸せそうな部長の姿に微笑んだ後、先頭の車両へと戻つていった。

「……あ、輪廻さん! 外を見てください、外!」

「ん、おお。冥界だ。もう次元を抜けたのか」

アーシアに言われるままに外を見ると、先ほどまで石でできた壁しか見えなかった窓の外が、冥界の広大な自然に早変わりしていた。懐かしい景色だ。昔はよく、この冥界で修行をしたものだ。時々ドラゴンだとかそう言った存在と喧嘩になったり、色々と充実していた事を

良く覚えている。

「ここはもう、グレモリー領なんだよな？」

「うん、そうだよ。君は過去に来たことがあるんじゃないかな。魔王様の友人、なんだろう？」

「友人、だな。一応。俺からしたら、サー坊は弟子というか、弟というか、そんな感じだけど」

「あの魔王相手に弟、ねえ。流石は赤龍帝様だな」

アザゼルの皮肉るような発言について苦笑いがこぼれる。実際、あのサーゼクス相手に弟だのなんだのと言えるのは現状俺だけだろう。というか、一般人の視線だとサー坊って呼び方が既にアウトだと思う。事実、大分慣れてきているとは言え、俺がサーゼクスをサー坊と呼ぶたびに、部長の眷属全員が肩を震わせている。畏れ多いのだろう。主の肉親だから特に。

『まもなく、グレモリー本邸前。まもなく、グレモリー本邸前』

俺達の登録作業を行った老人の声が、スピーカーから流れる。どうやら到着らしい。グレモリー本邸は何度か訪れた事が実はあるのだが、こうして正面から堂々とするのは初めてだ。何せ当時は俺とサー坊の関係は二人だけの秘密だったからな。

緩やかに停車した車両からいざ降りよう、となった時、アザゼルだけが動かなかった事にイツセーが首を傾げる。

「あれ、先生はこのまま降りないんですか？」

「ああ、俺はこのままサーゼクスのところに向かわねえとだからな。後から合流すつから、お前らは先に行つとけ」

そう言つて手を振る彼に、なるほど、と納得したようにうなずいて、イツセーは部長と手を繋いで降りて行った。本当に仲睦まじいな。原作よりも仲良いんじゃないかねのか？

そんな事を考えながら、負けじと俺も黒歌の手を握ろうとして、腕を掴まれた。なるほど。抱き着く感じなのね。

『リアスお嬢様！お帰りなさいませ!!』

アザゼル以外の全員が電車を降り、少し進んだ所で、綺麗に整列したメイドたちが一斉に頭を下げ、そして交響楽団のような人達が演奏

を始め、空にはワイバーンに乗った騎士甲冑の者が横断幕をはためかせているのが見えた。

なんだ、このカオス。と一瞬思ったが、ここはグレモリー領。部長を歓迎する従者たちが居て然るべきだろう。その上、グレモリー家は基本的に血の繋がりが無い従者にすら優しい事でお馴染みの悪魔。恩返し、というか、これくらい力が入るのも仕方ないのだろう。

派手な出迎えに驚く俺達と違い、慣れた様子で全員に手を振り、にこやかに歓迎に対する礼を言う部長。なんだか、こういう姿は人の上に立つ者って感じがある。ここ最近はいっせーと付き合っているというのもあってかアレだったけど。

一団の中から、二人の女性が代表する様に出てくる。二人とも銀髪で、服の色以外は殆ど同じのように見える。片方がグレイフィアさんなのは確かだけど、もう一人は一体？

「お帰りなさいませ、リアスお嬢様」

「眷属の皆様も、よくぞお越しくできました。こちらに馬車の用意がしてありますので、是非お乗りください」

「ありがとうございます、グレイフィア、リーシア。所でだけど、私を眷属と同じ馬車に乗せるのは可能かしら。ほら、イツセーもアーシアも冥界は初めてみたいだし、一緒に居てあげたいのだけど」

「それがお嬢様の意志とあらば。ではお嬢様の馬車の方に、特別に御二方もお乗りいただく事としましょう」

「それが良いわ。ほら、着いてきて」

「は、はい」

「じゃ、じゃあ輪廻さん。また後で」

「おう、また後でな」

リーシアさんと言うらしい人に連れられて、三人が移動していく。俺達に乗るであろう馬車と違い、裝飾が派手だ。一瞬見えた中身も、かなり高級感がある。まあ、眷属と主とでそれくらいの差をつけるのは当然か。

一応俺、客人枠なんだけど。

「では、残る皆さまはこちらの馬車へ。広さの方はご安心ください。

魔法の力で、見た目よりも中のスペースはずっと広くなっていますから」

その場に残ったグレイフィアさんが、俺達の誘導をしてくれる。や不安定な足場を踏んで乗った馬車の中は、なるほど確かに広がった。しかも眷属用とは思えない備品の数。クッションもあるし、何ならお茶菓子もある。これが関係者全員に優しいグレモリーの力か。日本の店に並ぶ、いや超えるようなおもてなしの心を感じる。

「魔法というのは凄いんだな。まるで輪廻が部屋の大きさを変えた時のようだ」

「俺の場合は、普通の魔法が使えない分をドライグに補ってもらってただけだしな。こっちの方が凄いだろうよ」

「時間操作の魔法の為に、他の全てを諦めた、か。よくもそんな思い切った決断ができたね」

「人間、追いつめられるとそういう決断もポンポンできるようになるんだぜ、木場。お前もいずれわかるよ。まあ、そんな状況には陥りたくないだろうがな」

「ははは……悪いけど、君が追いつめられるような状況がまるで想像できないや」

「同感です」

辛辣だなあ、なんて思いながら、静かに動き始めた馬車の微かな揺れを楽しむ。時間が経つと辛いだけだが、最初の内はこうした振動がまた楽しかったりするのだ。時間が経つとマジで腰とか尻とか痛くなるけど。まあ、この馬車にはクッションもあるし、何なら俺の場合痛みを感じる前の時間に戻せば問題は無いし。ほんと、こういう時にこの力は便利だと思う。

「それにしても、この道ってこんなに長かったんだな。サー坊と遊んでいる時にチラッと一部分だけ見えたけど、まさかこんな続いているモンだとは」

「サーゼクス様と、ですか」

「ああ、そうそう。アレ？確かサー坊が結婚した相手って」

「はい。私の妹ですね」

なんか原作に居なかった（はずの）人が増えてるし、一応確認しておこうと口を開くと、予想外の、とは言え少しは予想していた返答が来た。

どうやら、この世界ではサーゼクスとグレイファイアさんではなく、サーゼクスとリーシアさんが結婚したらしい。それって修正力は働かないのか、と思っただが、今こうして俺達が生きているのだから大丈夫なんだろう。

相変わらず、基準が良くわからない。

内心かなり驚いているのを隠しつつ、その話に関連した話を出して何とか話題を逸らす。混乱する頭を整理しながらの会話はかなり骨が折れたが、まあ大勢の前で間違った事を言わなくて助かった。

——にしても、グレイファイアさんフリーなのか？にしては人妻のような色気のあるオーラがあるけど。

※——

「リアス姉さま！お帰りなさい！」

馬車から降りてすぐ、部長の下へ紅色の髪をした少年が駆けていく。さながら電車の中のイッセーのように抱き着こうとした彼を、今度は回避を挟まずにそのまま受け止めた。

その事にちよっぴり複雑そうな表情を見せながらも、姉さま、という言葉から色々察したのか、イッセーは平常心を装っていた。『気』は若干乱れているがな。

「ただいま、ミリキヤス。大きくなったわね」

「はい！——あつ、リアス姉さまこそ、たいへん美しくなられて」

「あらあら、挨拶のお勉強も進んでるみたいね。ただ、もう少し自然な態度を意識した方が良いわよ。まあ、まだまだ習いたてなんでしょうけど」

「……あ、あの。部長、この子——じゃなくて、この方は？」

言葉を選びながら、イッセーが問う。それに対し、ミリキヤスと呼べた少年の頭を撫でていた部長は、あっけらかんと答えた。

「この子はミリキヤス。お兄様の子供よ」

「あつ、ご、御挨拶が遅れました。僕はミリキヤス・グレモリー。今後

ともよろしくお願いいたします」

「えっ、あつ、は、はい！ご、ご丁寧なご挨拶をどうもありがとうございます！  
います！俺——じゃなくて、自分は兵藤一誠などと申しており！」  
「テンパリ過ぎだろ。別にフォーマルな場でも無いんだから多少無礼  
でも肩の力抜いた方が良いぞ」

「そ、そうは言ってもよお……ん、んんっ。えっと、俺——いや、僕は  
兵藤一誠って言います。僭越ながら……僭越ながら？と、とにかく部  
長——リアス・グレモリーさまとお付き合いの程をさせていただいて  
いる所存で……」

「あつ、貴方が兵藤一誠さまですな！お噂はかねがね」

「そ、そうなんですございますか!？」

「だーめだこりゃ」

一応アドバイスはしたものの、イツセーの緊張っぷりは変わりな  
く。意識しすぎて慇懃無礼になりつつある物の、それを気にする素振  
りも無く（或いは慇懃無礼を知らないのか）普通に会話をするミリ  
キヤス。

「というか、母親が違ってもミリキヤスなんだな。名前と言い、見た  
目と言い。いや、見た目は良く知らないけど。」

「お嬢様。そろそろお部屋の方に移動なさっては」

「ええ、そうね。皆も長旅や慣れない雰囲気になれているでしょうし。  
何よりお父様とお母様に帰国の挨拶もしないといけないもの」

「旦那様は現在外出中ですので、お顔合わせは帰宅後となる夕餉の夕  
イミングだと仰られています」

「あら、そうなの。なら仕方ないわね。とにかく、皆も荷物を置きたい  
でしょうし、部屋に向かいますよう」

部長に着いていく形で、俺達は巨大な城の中へと入っていく。懐か  
しいな、なんて思いながら中を見渡すが、全然見覚えのある場所は  
無かった。と言うか、俺はサー坊の部屋くらいしか入った事が無かつ  
た。何が懐かしいだよ、凶々しいにも程があるわ。

中に入って、皆が皆周囲を見渡す中、上の階から女性の声が聞えて  
きた。声の聞こえた場所へと視線を移すと、そこには部長と同一年に

見える女性が。

「あら、もう帰っていたのね」

コツコツと規則正しい音を立てて階段を降りてきた彼女に、イツセーが鼻の下を伸ばす。まあ、部長にそっくりだし仕方ないだろう。

——いや、部長がそっくり、の方が正しいか。

「……イツセー。貴方は私よりも、私のお母様の方に、ご執心なのかしら?」

「えっ、いやいやそんな——って、ええええええええええっ!!?お、お母様!?!部長の!?!」

お手本のようなリアクションで、イツセーが驚く。ただ実際はそう驚く事も無い。なぜなら悪魔は、一定の年齢を超えると姿を魔力で変える事が出来るようになるからだ。わざと年寄りを偽装したり、いつまでも年若い姿で居たり。似たような事は俺でもできるが、正直する必要はないと思っている。ただまあ、年を取ればまた違うのだろうが。

「ぶ、部長と同年代にしか見えませんか!?!」

「あらあら、嬉しい事を言ってくれるわね」

「悪魔は一定の年齢を超えると、見た目を好きなように変える事が出来るの。お母様は普段からこの年頃の姿にしているわ」

「見た目を、変える事が……?」

「つまり松田だか元浜だかが言っていた、ロリババアも夢ではないって事だな」

「お、おお。アイツ等が聞いたら血の涙でも流して喜びそうだ」

「あら、久しぶりね輪廻君。式場で会った時は話せなかったけど、元気そうで何よりですわ」

「ご丁寧にどうも。おかげさまで、今日も大事なしですよ」

イツセーとくだらない事を話していると、彼女は俺に挨拶をしてきた。目つきは鋭いが、なんだかふんわりおっとりとしたオーラを纏った人である。ただ怒ると滅茶苦茶怖い。昔はよく、サー坊にいらん知恵を与えて怒られたっけな。

なんだか親し気に会話をする俺達に、イツセーを始め全員が驚いた

ような顔をする。そして、代表するかのように部長が問いかけてきた。

「あ、貴方、お母様と知り合いなの？」

「はい。サー坊と密かに会っている事がバレて、成り行きで」

「サーゼクスの命の恩人でもありますし、二人の友情を断ち切るのも忍びなかったものですから。特に最初『このような怪しい男とは関わらない事』と言った時、滅多に泣く事の無かったあの子が号泣して」

「お、お兄様が……？」

信じられない、と頭を抱えた部長に代わり、イツセーが恐る恐る口を開く。

「あの、命の恩人、と言うのは……？」

「文字通りですわ。アレはまだ、権力を握っているのが今という旧魔王派だった時代の話。貴族という物に恨みを持つ集団に、あの子が攫われてしまって、それを助け出したのが彼なんです」

「え、サーゼクス様が？」

「ええ。今ではあの子は魔王の一角を担い、最強との呼び声も高い。しかし当時は弱く、才能は有れどそれを振るう事が出来なかった。だからそれを狙って、無差別に貴族を攻撃している集団に連れ去られたのです」

「んで、ソレを通り魔的喧嘩の真っ盛りだった俺が邪魔して、その時にサー坊に懐かれたって訳だ。アイツが強くなりたいてって言い出したのも、それがきつかけだったらしい」

「そ、そんな事が……」

開いた口が塞がらない、という様子。それはイツセーのみならず、全員がそうだった。グレイファイアさんすら目を丸くしていたし、知らなかったんだろう。思えばライザーとの一戦の際、彼女は俺の事を微塵も知らない様子だったし。

今更俺とサー坊が仲が良い理由が判明した所で、彼女は一度咳払いをして話を切り替える旨を言外に示し、そしてとても経産婦とは思えないような瑞々しい笑顔を見せ、優雅にお辞儀をして、言った。

「とにかく、今日からよろしくお願いしますわ。私はヴェネラナ・グレ

モリー。リアスの母です」

ご両親への、ご挨拶です！

夏休み、初日。俺はいつも通り全裸の部長と共に目を覚まし（まだエッチな事は一度もしていない。どうしても俺がへタレてしまうのだ）いつも通りの時間を過ごして、部長の実家へと移動した。

家に着くまでは驚きの連続だった。いや、何なら着いてからも驚きが連続していた気がする。部長と同じ年ごろにしか見えないお母さまに、魔王様と輪廻の関係。その他諸々、聞いているだけで気疲れしてきた。

それで、割り振られた部屋でしつかりと休もうかと思ったら、部屋は教室くらいのサイズがあった。家具は全部高級品（だと思っ）だし、ベッドなんて天蓋付き、カーテン付きの超巨大ベッドだ。何人がかりでベッドメイクをしているのか、試しに聞いてみたくなるほどのサイズだ。緊張してリラックスする所ではない。

結局疲れを取ることができないままに夕食の時間になり、俺はやたらと豪華な食卓で、これまた豪華な食事を頂くことになった。作法が分からず手をつけられなかった俺に、隣に座る部長が色々教えてくれた。現在交際中という事で、こうして隣に座らせてもらっているのだ。本当なら、眷属と主とは離れて食事を行うものらしいけど。

因みに、木場達は特に困った様子もなく綺麗な所作で食事をしていった。勿論輪廻も、ギヤスパーもだ。正直この二人は俺と同レベルだと思っていたから、ちよつと驚いた。俺よりもずっと年下のミリキヤス様ですら何てことないようにできているし、一人だけ常識知らずみたいで恥ずかしい。

「いやあ、今日のはめでたい日だ！これからグレモリー家の一員となる、一誠君が家に来てくれたのだからね！」

部長のお父様……いや、お義父様が、ワイン片手に嬉しそうに言う。グレモリー家の一員。そうだよな。このまま俺は、部長と結婚して一誠・グレモリーに……ん？婿入り？いやまあ貴族の、家を継ぐことができる一人娘の結婚相手なんだししようがないか。兵藤家が俺で

終わりとなると、なんだか親父とお袋に申し訳ない気もするが……もし仮に部長と付き合えていなければ、俺は誰と交際する事も無く一生を終えていただろうし、結果は同じだ。

「……最近は何報が多い。リアスや眷属たちの活躍が認められつつある事に加え、封印を命じられていたギヤスパ―君の解放。果てはリアスに婚約者だ。なんだか、一生分の幸運が消費されようとしている気がするよ」

「もう、貴方だったらそんな縁起でもない……んんっ。ですが、そうすわね。まさかあのリアスが、男を連れて来るだなんて」

「お父様もお母様も、私を何だと……」

「何度縁談を持ってきても、全て一瞥することなく拒否したのはごの誰ですか。相手の面子を潰さないためにと、私達が一体どれほどの……」

「まあまあ、せっかく皆が集まってくれているんだ。口喧嘩はほどほどにね」

口喧嘩があつても無くても、俺は緊張しっぱなしなんですけどね！  
一緒に食卓を囲んでいるのは、部長のお父様にお母様。周囲を直立不動のメイドたちに囲まれ、元一般市民の俺には胃に穴が開きそうな緊張感がのしかかっていた。

最初の挨拶の時なんかもう、汗がダラダラ流れていたし。一応部長との交際が決定したあの会場に居たとしても、改めて自分の口から説明するとなると、それはもう……うん。

今は大分マシだけど、さっきまでは顔が真っ青だったはずだ。

「ところで「誠君。まずは君に、いくつか聞きたい事があるのだが」

「はっ、はい!!なんでございませうか!?!」

「ははは、そんなに緊張しなくとも構わないさ。——まず、君の事なんだが」

ビシィッ!!と姿勢を正した俺に、お父様は軽く笑ってすぐに、真剣な表情を見せる。鋭く睨みつけるようなその瞳に、俺は自然と生唾を飲み込んだ。

「イツセー君、と。読んでも構わないかな?」

「——へっ？あ、ああ、は、はい。それは、全然」

「そうか！いやいや。実を言うと、一誠というのは発音が難しくってね。せつかく家族になるんだ。ラフな呼び方でも構わないだろうと思っていたのさ」

「そ、そうだったんですか……」

「そうだとも。だから是非、私達の事も楽に——いや、ここは厳命しておこう。私達はお義父様、お義母様と呼ぶように。勿論君の、だ。君のお義父様、お義母様だからね」

お、お義父様、お義母様……!?な、なんて素敵な響きなんだ！なんだか部長との関係が一步先へ進んだような気がする！

隣の部長が若干照れくさそうにしているのを見つつ、俺はお義父様の言葉にしっかりと頷いた。

……しかし、こうもあつさりと受け入れてもらって良かったのだろうか。俺は下級の転生悪魔に過ぎないし、部長は純血の貴族悪魔だ。ライザーに忠告された通り、身分の差とかで難色を示されるモンだと勝手に思っていたけど。

「……あの、俺からも一つ、いいですか？」

「む、何かな？」

「いえ、その……どうして、こう。俺の事をここまで歓迎してくれるんですか？部長と俺だと、普通は釣り合っていないと嫌な顔をするものだと思っていたんですけど」

「ああ、娘は君にはやらん！というヤツか。君がそういうタイプが良いなら、一度やってみても良いが」

「そ、そういう意味じゃなくってですね！——その、俺は部長が好きです。悪魔になって一生の重みが増えた今でも、一生愛していると云えます。けど、第三者の視点で見れば、俺は下級の転生悪魔で、部長は貴族で純血悪魔。普通は結婚どころか交際すら認めない物だと思っうんです」

「ああ、そんな事か。別にその程度、私達は気にもしないよ」

「き、気にしないって……はつきり言えば、俺みたいなどこの馬の骨とも知れない男、普通は受け入れられませんよ!?自分で言うのもなんで

すけど、イケメンでも無けりや頭も悪いし、敬語も作法もてんでダメで、おまけに人目も憚らずおっぱいおっぱい言っちゃうような変態です。普通、大事な娘には決して近づけたくないような男だと思うんですけど……」

「……なるほど」

立ち上がって思いの丈を叫んだ俺に、お義父様は静かに呟いて、ワインを飲む。飛び出した言葉の中に、部長との交際に関して感じていた後ろめたさ的な物のみならず、ここ最近俺が抱えていたモヤモヤも含まれていた事に遅れて気づき、やつちまったと口を抑えたくなるような気持ちになる。

見れば、お義母様も部長も、何なら皆も俺をじっと見つめていた。驚いたような物、悩まし気な物、等々。含まれた感情がやけに鋭く知覚されて、居心地の悪さが加速する。

そんな中、お義父様がゆっくりと口を開いた。

「君はいくつか勘違いしているようだ」

「勘違い、ですか？」

「ああ。まず初めに、私達は出自や身分なんかで他人を判断しない。リアスが君と決めたのなら、その判断を信じ、ただ祝福する。それだけだよ。生まれも育ちも、容姿も頭脳も作法も何もかも、どうでも良い。それを加味して君が良いと、他ならぬリアスが決めたのだからね」

「それは」

「それに。君とは何度か会い、その姿を見て、ある程度私の中でも君という人物の像が定まっている。その上で、君ならリアスを任せられる。君なら家族に迎え入れられる。そう判断したんだ。ずるい言い方になるが、私の判断を君の感情で否定するのは、どうかと思うぞ」

何か反論しようとして、すぐに何も思いつかない事に気づき、ただモゴモゴと口を動かす。そんな俺を見ているのかいないのか、お義父様は言葉を続ける。

「君はリアスを愛していて、リアスは君を愛している。そこに第三者の存在は必要かい？ いや、不要なはずだ。大事なものは互いが互いをど

う思っているか。どこまで想い合えているか。これから、どう想いあつていくか、だ。それでも不安だというなら、変えられる部分だけ変えれば良い。力が無い事を嘆くなら鍛えれば良い。頭が悪いというなら勉強に励めば良い。見た目に自信が無いなら、美容を学ぶ事も良いだろう。作法なんて、ほんの少しの見栄えさえ整えれば、後は思いの問題だ。相手への敬意があれば、それ以外は飾りに過ぎないのだよ」

お義父様の言葉に、俺は開くに開けなかった口が開いたのを感じた。そして次の瞬間には、落ち着く間も無く言葉が飛び出す。

俺の胸の奥に、ずつとつかえていた物が。

「ッ、でも、俺じゃ——俺じゃ輪廻みたいにはできないんです！どれだけ鍛えても力じゃ遠く及ばない。どんだけ勉強してもアイツに勝てる分野はまるでないし、見た目なんてアイツがちよつとでも努力すりゃ、俺が埋めようとした差なんて容易く抜かされるに決まってる！持つてる神器だって、俺もアイツと同じくらい強いはずなのに、肩を並べるどころか、背中を追いかける事すらできない！！同じ年齢で、同じ変態で、同じ戦い方で同じ考え方で、色々な物が同じだったり似ているのに、全部俺はアイツに劣ってる！劣り続ける！！そりゃ、努力はします。してますよ！でも、不安なんですッ、俺……………このままじゃ、部長の愛想つかされるんじゃないかって…………！！」

「イツセー！」

ビクッ、と体が震える。暴走していた俺を止めたのは、部長の声だった。すぐに冷静になつて、俺はよりによつてこんな場所で、なんて事を言ってしまったんだと凄く後悔する。しかし過ぎてしまった物は仕方ない、と無理矢理割り切つて、恐る恐る部長の方を見る。すると、その目がまるで今にも泣きだしそうなように、潤んでいるのが分かった。

そして次の瞬間には、優しく抱きしめられていた。

「ぶ、ちようっ？」

「———そういう、事だったのね。貴方が最近、ずっと元気が無かったのは。貴方の様子が、おかしかったのは」

「つ、そ、そんなに変だったんですか……?」

「ええ。明るく振舞っていても、沈んだ表情をしている機会が多かったもの。誰でも気づくわ。けどその原因がわからなくて、聞くに聞けなくって、今まで放置してしまっていた。——本当は、すぐにでも誤解を解いてあげないと、いけなかったのに」

慈しむような声と共に、俺の頭を撫でる。なんだか無性に落ち着く。犬猫が飼い主に撫でられるのってこういう感じなのかな、なんて頭のどこかで思う。

顔は見えないながら、泣いているように聞こえる声の部長は、詫びるように話す。

「確かに、貴方に強くあつて欲しい。貴方に賢くあつて欲しい。社交界に大手を振って出られるくらいに作法を身に着けてもらえたら嬉しい。そう考えている部分は確かにある。けれどそれを強いるつもりも、それが出来なければダメだというつもりも無い。まして、私が愛想をつかさだなんて、そんな事は絶対に無い。誓うわ。私は、例えば何があつても貴方を愛し続ける」

「——部長」

「それにね、イツセー。貴方は輪廻と自分とを比べて悲観的になっていたようだけれど、そんな事する必要は全く無かったのよ?——だって私が好きなのは、私が愛しているのは、輪廻じゃ無くてイツセーなんだから」

その言葉に、俺は全身の力が一気に抜けていくのを感じた。

そうだ。部長は、俺を愛していると何度も言ってくれていた。毎朝、毎晩、昼までも、俺と一緒に居てくれた。それは決して将来輪廻のようになれ、と丹精込めて育てていたわけではなく、俺が、兵藤一誠が好きだからだ。

急に今まで悩んでいた事がバカバカしく感じられてきて、同時に輪廻に対して申し訳ない気持ちが増える。なにせつい最近はずいぶん比較的冷たく接する事が多くなったし、今なんてなんか当て馬みたいな使い方しちゃったし。

——アレ、今の状況よくよく考えたらやばくね?お義父様、お義

母様への挨拶を済ませたばかりの食事の時に突然立ち上がった親友に感じていた劣等感を爆発させて、実は何てことはありませんでした。で解決したって……輪廻に対してだけでなく、この場の全員に申し訳が立たない気がしてきました。

挨拶の時はまた違った冷や汗が流れ出す俺から、部長が丁度良いタイミングで離れる。そろそろ食事に戻りましょう、とのことらしい。

「…………えっと、その、なんか、すみません。溜まってたもんが弾けちゃったといえますか……」

「いいさいいさ。若いうちにそういうのを何度も経験しておくのが人生のコツだよ。——それとねイツセー君。最後に一つ付け足しておきたい事があってね」

「は、はい。なんででしょうか」

「性欲が強いのは私的には良い事だよ。何せ悪魔は出生率が低いからね。数をこなしてもらわないと、孫の顔を見る日が遠くなってしまう」

「か、数をこなすツ!？」

真顔でとんでもない事を言うてくださったお義父様に、皆は「解決したっほいな」と言いたげな顔をして、各々食事を再開するのだった。

因みに俺は、その後もお義父様からの質問攻めを受ける事になった。父さんと母さんへのお土産は何が良いか、とか、色々。

流石に、城をプレゼントするのはどうだろうか、と言われた時はぶっ倒れかけたが。

※——

「———ですので、近代における魔王とは———」

本来、修行漬けになるはずだった俺の夏休みは、始まってから数日間、殆どことうした座学の時間に費やされていた。俺に不足している一般教養から、悪魔の常識に悪魔文字。後は礼儀作法のお勉強を、毎日みっちり行っていた。

おかげでかなり上達した気がする。とは言え、ギリギリ人様に見せられる程度、だが。

隣に座るミリキヤス様は、真剣な顔でノートと黒板とに視線を行き来させ、一定の速度で文字を書き込んでいた。勿論悪魔文字だ。人の手で書くにはそれなりに難易度の高い文字だと思っただが、教師役をしてくれているミリキヤス様お付きの家庭教師の人の言葉をそのまま文字に起こすかのように、淀みなく書いている。

対する俺はと言うと、まあこうして今の状況を報告する程度には暇を持って余している——言ってしまうえば、ノートの記録が追いついていないという訳で。一応前日の内に予習をしたりして対応しているが、それも気休め程度。勿論内容はしっかりと頭に叩き込んでいるが、多分ミリキヤス様ほど身になるような勉強はできていない。

一応、駒王学園なんて難しい高校に入学できるくらいだから酷くバカという訳でもないんだろうけど、そこまで頭が良いという訳でもないのが現実。ミリキヤス様が10覚える間に、俺は5くらいしか理解できない。

「お勉強は、はかどっているのかしら？」

「あつ、おばあさま！」

「お義母様！」

俺とミリキヤス様が同時に声を出す。ドアを開けて入って来たお義母様に、二人揃って頭を下げた。それに片手を上げて挨拶を返し、家庭教師の人に一言二言聞く。恐らく、俺達の指導者側から見た態度とか成長とかを聞いているのだろう。教師役の人の言葉に満足げに頷いて、お義母様は優しい笑みを浮かべて、メイドにお茶を持ってこさせた。

ミリキヤス様は紅茶。俺は緑茶だった。別に日本人は緑茶以外飲めないって事は無いんだけども。

「今日はイツセーさんの教育の最終日ですけれど、早めに切り上げる事になっています。理由は既に、リアスから聞いていますわね？」

「はい。若手悪魔の行っ、恒例の行事だとか。会合のような物だと」「その通り。これから自身のライバルとなる者達と共に、魔王やその他重鎮の前で決意を表明し、互いを意識し合う場。眷属であり、そして伴侶である貴方は、特にその振る舞い一つ一つに気を払うのです

よ。——なんて、言うまでもありませんわね」

お義母様の言う通りだ。俺の行動一つで、部長の評価は最高にも最低にもなりうる。敬語は苦手だとか、フォーマルな場は肌に合わないとか、そんな事を言っている場合ではない。

それにその行事から逃れた所で、どうせ大勢の前に立つような機会はいずれ来る。なら、今の内に本番の空気ってヤツを味わった方が得だ。

「そういえば、赤龍帝様もついていくのですか？」

「ええ。サーゼクスが無理を通したようですわ。全く、普段は滅多に我欲を表に出さない子なのに、一度言い出すと頑として譲らないのですから……」

何かを思い出すように呟くお義母様から視線を逸らし、ミリキヤス様を見る。少し悲しそうな顔をしているが、その理由はたった一つ。輪廻が俺達と一緒にやってしまうからだ。

というのも、ミリキヤス様はサーゼクス様の息子。そう、あの輪廻を狂信しているようにすら見えるあのサーゼクス様の息子なのだ。だから、それこそ物心つく前から最強の赤龍帝について毎日話し続けられたらしく、かなり憧れというか、幻想を抱いていたようだ。

実際は俺レベルの変態だけだ。

けど輪廻も輪廻でファンには優しいというか、子供を邪険にはしないらしく、意味も無いのに禁手を使って見せたり、抱きかかえて空を飛んでやったり（勿論音速を遥かに上回る速度だ）して、かなり懐かれた。

今では家族以外でミリキヤス様と最も仲が良いんじゃないだろうか。——ギヤスパーと言い、アイツ実は男の方にも興味が……なんて。流石に無いか。

……無いよな？

「とにかく、急ぎ準備をなさって。そろそろリアス達も、輪廻君も戻ってくる頃ですわ」

お義母様の言葉にうなずき、俺は部屋を出て、自室へと向かう。フォーマルな場に出かけるのだ。一応、髪型くらいは整えておかない

ては。

因みに、部長たちも輪廻も、それぞれ冥界観光に繰り出していた。部長と眷属組、輪廻と黒歌さんのカップルで別れて行動しているらしいが、一つだけ俺から言える事がある。

マジで羨ましい。

## 若手悪魔と夢の話、です！

あの後、部長たちと合流した俺は、主に部長を見送る従者たちの黄色い声援を受けて地下鉄へ乗り込み、会合が行われるという場所へと向かった。相変わらず車両は貸し切りである。貴族ってすげー。

道中に色々注意やら説明やらを受けたのだが、どうやら今回は我らがリアス部長を含めて五人の悪魔がメインとなるらしい。グレモリーは勿論のことだが、他の参加者の家もやんごとなき方たちの家なので、くれぐれも粗相の無いように、とのことだ。

まあ、俺は大丈夫さ。何があっても平常心を保つ。コレが社会を生きる上で最低限必要な技能だと、ちゃんと学んだからな。

問題は、ギヤスパードと思う。アイツ、人が（厳密には悪魔だが）がたくさんいるだけでガタガタ震えて情けない声を出して輪廻の背後に隠れるからなあ。その様子を見て、舐められたりしないと良いけど。いや、逆に相手を油断させるためにバカのふりをみんなで見たり——？ いやいや、この会合はあくまで器を測る物。後々の戦闘の事だけを考えて振舞うのは、それこそバカのする事だ。戦闘以外にも加味すべき事は沢山ある。

それなりに長い間電車で揺られ、駅から歩いてようやく到着。巨大なエレベーターの前で待機させられた後、乗り込んでどうとう目的地。

ついて早々、部長は通路の奥の壁に寄りかかっている何者かに気づき、声をかけた。

「サイラオーグ！ 久しぶりね！」

「む。おお、リアス。久しいな」

シルエットしかわからなかった男が、近づくとつれてその全貌がわかる。見るだけで分かる、鍛え抜かれた肉体。魔法を主に扱う悪魔にしては、珍しい体だ。

そしてその顔。美男子だが、どこかサーゼクス様に似た物を感じるのとはなぜだろう。黒髪に紫の瞳と、一見似ている要素は無いはずなのに。

「噂は色々と聞いているぞ。最近、かなり目覚ましい活躍をしているそうじゃないか」

「ええ。とは言っても、運が良かっただけよ。私はただそこに偶然居合わせただけに過ぎないわ」

「そう謙遜するな。運を引き寄せる力を持っているだけでも、俺には輝いてみえる。——して、隣の男がかの兵藤一誠か。原初魔王、サタンの力を持つという」

「あつ、は、はい！俺が兵藤一誠です。どうも！」

「俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ。リアスの従兄にあたる」

す、すげー！次期当主様か！しかも部長の従兄！じゃあ、俺にとつての——俺の、なんだ？やべえ、親戚の呼び方とか覚えてねえ！その上俺、婿入り側だし！なんか違うのかな？

差し出された手を握る。ただ握手に応じただけでも、その手が幾度となく握りしめられ、振るわれた拳だという事が分かった。

一瞬脳内に流れた、恐らく彼が重ねてきただろう修行の光景のイメージに、俺は冷や汗を流した。ただ俺が勝手に感じたイメージだというのに、つい生唾を飲み込んでしまう。

「……………そして、貴方が今代の」

「赤龍帝、立神輪廻だ。サイラオーグと呼ばせてもらっても？」

「ええ、構いません」

「そりやありがたい。なら、そのついでに俺への敬語は止めてくれ。むず痒くなる」

「そうか。なら、ありがたく」

一歩前に出た輪廻とも握手をし、サイラオーグさんは何度か頷く。

何というか、そこに居るだけで凄まじいエネルギーを感じる。一挙手一投足に物理的な重みを感じる程だ。

「ところで、どうして通路に居たの？もう会場はとっくに開いているはずだけど」

「中のくだらん騒ぎに巻き込まれるのも面倒だな。全員が揃うまでここで待つ事になっていた」

「くだらん騒ぎって……もしかして、他にも来ているの?」

「アガレスもアスタロトも既にいる。拳句の果てにはゼファードルだ。ヤツがアガレスと揉め始めてな。——まったく。俺は会合前に顔を合わせるような場所を設けるべきではないと進言したのだが」アガレスにアスタロト。どちらも勉強中に聞いた名前だ。グレモリーやフェニックス、そしてバルと同じ七十二の悪魔の名家。なるほど、今回の参加者はその家から出ていたのか。しかしゼファードルはわからん。聞いたこと無いけど、もしかして個人名?

部長はサイラオーグさんの話を聞いて、全てを察したような顔をした。どうもそのゼファードルという人、性格に難があるらしい。嫌なことを思い出したような顔を隠そうともせず、私も待とうかしら、と呟いた。

すると次の瞬間、扉の向こうから何かが破壊されるような爆音が聞こえてきた。な、なんだ!? 一体何が起こったんだ!?

「……はあ、仕方ない」

ひどく面倒臭そうに呟くと、サイラオーグさんは扉を開けた。中には、まさに貴族が居るべき場所、というような綺麗な空間が広がっていた。

いや、違う。綺麗だった空間だ。

大広間（と言うべきだろう）は、先ほどの破壊音から予想できるように酷く荒らされていて、その破壊の中心には眼鏡をかけたクール系美女を筆頭とした一団と、顔に刺青の入ったヤンキー風の男を筆頭とした一団が睨み合っているのが見えた。

まさに一触即発。放つ殺気と魔力のオーラに、サイラオーグさんに気圧された時同様、俺は後退ってしまった。

「こんなところで戦いを始める必要性はないのではなくて? そんな事すらわからないくらいなら、貴方ここで死ねば?」

「アガレスのヒスアマが調子乗った事言ってんじやねえぜ! 俺あただ、テメエの処女穴開通させてやるって言ったただけだっつーのによお! これだから魔王眷属の女ってのは嫌いなんだ。お堅いだけで純情気取りやがって!」

恐らくリーダーであろう二人は、片や冷静に、片や下品に罵り合っていた。それに追従する様に、部下らしき人達が睨み合う。魔力のうねりを全身で感じるほどに、この場の緊張感が高まっていた。

「ここは会合が始まる前に、挨拶等を行う会場だったんだがな。血の気の多い奴らを集めた結果がコレだ。お偉方はこういう小競り合いも醍醐味と静観するのみで、收拾がつかん」

「そ、そうなんですか……」

「女の方がアガレス、男の方がグラシヤラボラスの次期当主だ。と言っても、アレを見て素直に納得できるとは思わんが」

主に俺のために解説してくれたサイラオーグさんの言葉に、俺は笑うべきか否か悩んで、曖昧な表情を作る。なんていうか、仮にも主の同期なんだから、現状下僕でしかない俺が笑うのは問題になりそうだからだ。

「で、止めに入るのか?」

「ああ、そのつもりだが……せつかくだ。立神殿。是非その力を見せて欲しい」

「……構わねえけど、俺で良いのかよ。呼ばれたとは言え、部外者だぜ?それと輪廻で良い」

「む、そうか。なら輪廻と。——いや何。輪廻はレーティングゲームには参加できない。となれば、その力を直接見る機会はそうそう無いわけだ。ならこの機会に是非、とな。部外者云々は気にしなくて良い。説明は俺がしよう」

「ああ、そう。別にアンタが頼んでくるなら、アンタと手合わせするくらい構わないけどな」

「直接戦うよりも、見ている方がよほど集中できるだろうと思ってな」  
「はははっ、なるほど。そりゃ良い」

愉快そうに笑って、輪廻は特に気負う事無く殺気と魔力の渦巻く場所へと歩み寄っていく。まるで緊張感が無いが、もはやその事に対して違和感や驚きを感じる事はない。

だって俺達は全員、アイツの力をこれでもかと思せつけられてきたのだから。

「盛り上がってる所悪いけど、そろそろ止めにしないか？」

「アア？なんだテメエは」

「一体誰の眷属——いえ、悪魔じゃない？」

「そりや、ただの人間だからな」

「ただの人間がここに居るわけねえだろうが！何者だテメエ」

「……何者って言われると特に何も成してないけど。まあ、名前は立神輪廻って言うんだ。よろしく」

まるでいつもと変わらない適当な調子で話す輪廻だが、名前を口にした瞬間アガレスの女も眷属たちも顔を引きつらせて殺気を警戒心へと変え、一目で「引き下がった」とわかるような態度をとった。

「何も成していないとは、ご謙遜を。かの最強の赤龍帝が、何者でもない訳がないでしょう」

「自分で言うような称号じゃないだろ。それに、それは俺じゃ無くてドライグの力があつたからだ。コイツが居なきや、俺はただの一般人どまりだよ」

それはないと思う。仮に赤龍帝の力が無かったとして、コイツが強くなる事を諦めるような真似はしないだろうし、どんな方法を使つても今の状態と同じようになっていると思う。

第一、コイツが弱い姿なんて想像できねえ。

ソレは部長たちも同じだったそうで、凄く胡散臭い物を見るような目をしていた。

「はんつ、噂はよく聞くが、いざ実際に会ってみれば本当にただの人間じゃねえか」

「ああ、まあ。ただの人間だな。どこにでもいるよ」  
だからいねえって。

煽る様に口を開きながら、ゼファードルとやらが輪廻に詰め寄る。なんでそんな煽れるんだと驚愕したが、そう言えば輪廻が最強って事を信じているのは悪魔だと少数派で、その上今は殺気も何も出していないからただの人間にしか見えないんだった。そりや、勘違いしてもおかしくない、けど……。

「あーあームカつくぜ。聞いたよ、あのSS級はぐれ悪魔の『黒歌』」

テメエが保護したから、罪が帳消しになったって？ふざけた話だなあ、オイ」

ぴくつ、と、輪廻の眉が動く。一瞬ゼファードルという男の死を連想して合掌しそうになったが、しかし輪廻は思いのほか冷静に、殺気も威圧も放つ事無くそのまま口を開いた。

「——驚いたな。アイツ一人の特別扱いが許せない、だなんて殊勝な言葉が出てくるような男には見えなかったが」

ああ、そういう事か。ただの煽りじゃ無くて、特別待遇をするのは間違ってるって事に怒ってたワケね。見た目とか、さっきのアガレスの女の人に吐いてた暴言とかで勝手に勘違いしてただけで、実際は善良な心を持つ人だったのか。

「あ？な訳ねえだろ。別に他のはぐれ悪魔の罪がどうのだからなんてさらさら気にしちやいねえ」

訂正。全くそんな事は無かった。

ゼファードルの言葉に、呆れたように溜息を吐くサイラオーグさん。その気持ちが良いわかり、俺はつい頷いてしまった。

そう。俺はすっかり忘れていたのだ。こんな事をしていいる余裕はないという事を。この流れで次にゼファードルが言うだろう事は比較的簡単に予想できて、そしてそれを止めなければどうなるかという事も、わかっていたというのに。

俺は、それを遮るような事もせず、静観してしまったのだ。

「黒歌捕まえんのは俺のはずだったんだよ、本当は」

「そりやまたどうして？」

「あんなエロい女、とっ捕まえてブチ犯す以外する事ねえだろうがよ！主殺しの罪人なら、どう遊ぼうがべきよ」

言葉の途中で、輪廻の拳が振るわれた。神器を装着することも無い、ただ『気』を纏っただけの拳だったが、その威圧感だけで空間が軋んでいるのを感じる。

結果は勿論、ゼファードルの言葉が遮られた事で分かるだろう。どう優しい表現を選んでも潰れたとしか言いようのないえげつないやられ方で、アイツは辺りに血をまき散らしながら吹っ飛んでいった。

「まあ、そう考えても無理はないし今回はコレで許してやるよ。だが次アイツに色目使ってみろ、存在の痕跡さえ残らないくらいに塵殺してやる」

誰も何も言えずに立ち尽くす中、輪廻は堂々と俺達の下へ戻って来る。

「悪いな。赤龍帝の力を見せるって話だったが、普通に殴っちまった」  
「あ、ああ、いや。見事な闘気だった」

サイラオーグさんの言葉を最後に、会場には沈黙が訪れる。

誰も何も言えず、動けないこの状況は、生徒会長率いるシトリー眷属たちが来るまでの間続くのだった。

※――

生徒会長の登場によりなんとなく雰囲気は回復し、軽い自己紹介をお互いしてから幾ばくか。

ついに行事が開始し、俺達はなんだか厭かな場所へと移動することになった。

到着した場所は、なんというか……圧迫面接？そんな言葉が飛び出そうになるような場所。

なんせ、お偉いさんと思しき悪魔さま方が何人も高い場所（物理的に）に座っているんだ。つい生唾を呑んじゃう。

あ、サーゼクス様だ。輪廻と一緒にいない時は、なんだか底知れない雰囲気でカッコいいな。

あ、輪廻と目が合った。雰囲気が一気に残念になった。わかりやすっ。

他にも知っている人はセラフォル様、アジュカ様、ファルビウム様……あの時会合の場にいた、魔王様達だ。

彼らだけは俺達を見下すような目をしていない……とどのつまり、魔王様方以外は全員俺達をどこか見下すような目で見ていているという事だ。

しかし若手悪魔六人は我らが主リアス部長も含め、全員が綺麗な姿勢で威風堂々と立っていた。

俺達は後方の少し離れた所からそれを見ている。まあ、従者だし

ね。

因みに部外者の輪廻も俺達と同じ場所にいる。ちょうど俺の隣だ。「皆、良く集まってくれた。知っての通り、この会合は若き悪魔たちを見定めるモノであるが……ふむ、顔つきは皆、次世代を担うに足りるといえよう」

「先の一件が無ければ、手放しに称賛できたのですがなあ」

厳かな声で話す男性と、皮肉たっぷりに呟く老人。

どっちも苦手なタイプだ。俺、というか従者は基本的に置物扱いなのに、それでも胃から何かがせりあがってきそうな緊張感を覚えてしまふ。

「それと赤龍帝、立神輪廻」

「由緒正しきこの会合に貴殿が参加できたのは、偏に魔王様のご意向故」

「史上最強、世界最強などと持て囃されているようだが……この場では本来招かれざる客であるという事を忘れないで貰おう」

偉そうな悪魔たちの矛先が輪廻に向かうが、アイツは黙って頭を下げるだけに終始した。

その様子を見て悪魔たちは鼻で笑ったり意に介さなかつたりと様々な反応を見せて、咳払い一つの後に若手悪魔六人へ視線を向けた。

「さて。実力、家柄共に次世代を担うに相応しい貴殿らだが、そんな貴殿らにこそデビュー前に互いに競い合ってもらいたい。より一層力を高めるには、それが最も効果的であろう」

競い合うつてーと、レーティングゲームか！ここに居る若手悪魔六人が、俺の横にずらりと並ぶ（輪廻を除く）眷属たちが、全力でぶつかる……!!

今から武者震いが止まらねえ。

サイラオーグさんは勿論の事、シーグヴァイラさん（アガレス家当主）にディオドラさん（アスタロト家当主）、そして生徒会長……誰も強敵揃いだらう。その眷属も含めて、だ。

さつき輪廻に呆気なく殴り飛ばされてたゼファードルだって、俺か

らすれば全然強いだろう。

——けど、俺達グレモリー眷属だつて負けてねえ。なんならこの会合が終わった後すぐに待ってる特訓で、さらに強くなるんだからな！

「さらに強くという事はつまり、我々もいずれは『禍なる夢幻団』との戦に投入されるという事ですね？」

サイラオーグさんがド直球に尋ねる。

それに答えるのは、優しい笑みを絶やさないサーゼクス様だった。「それはまだ未定だが、今の所は君達の力は借りずによいように思っている。当然、君達の力を疑っているわけでは無い。まだまだ伸びしろがあり、いずれは私達を上回る可能性を秘めている事もね。——だが同時に君達のような若き悪魔を、次世代を担う優秀な者達をこの戦に投入し、万が一にも失うようなことがあってはならない。我々はそう考えている」

「……………わかりました」

瞼を固く閉じ、数秒間考え込んでから、渋々と言った様子で頷くサイラオーグさん。

その後はお偉いさんたちから難しいお話やら今後のゲームの話など、俺には到底理解できないような難しい話がいくつか飛び出し、俺にとって居心地の悪い時間が続いた。

これでもミリキャス様と一緒に勉強してるんだけどな……………さっぱりわからん。

だが数十分もすれば所謂ありがたいお話というのも終わり、再びサーゼクス様が口を開く。

「さて、長い話に付き合わせて悪かったね。だがコレも我々が君たちに期待している証だと受け取って欲しい。何せ、君達は我々にとって、何より今後の悪魔界にとって、宝なのだからね」

そこで一度言葉を切り、一拍置いてサーゼクス様はこう尋ねた。

「最後に君達の今後の目標——夢を、聞かせてもらえるかな」

目標。夢。

俺の夢と言ったらやっぱりハーレム王。リアス部長を正妻とする

現代の大奥を作り、美少女に囲まれる最高の毎日を過ごす事。

では、ここに揃った若き次世代の主たちは、何を目指しているんだろうか。

最初に口を開いたのは、サイラオーグさん。

「俺の夢は、魔王になる事……いえ。魔王になります」

ほう、とお偉いさんたちが感嘆の息を漏らす。

「大王家から魔王が輩出される、前代未聞の事態を望む、いや断言するか」

「流石と言う他ないが、果たして本当に成せるのかね？」

「民がそう望む程の姿を見せれば良いだけの話です」

か、かつけええええ!!

言い切ったサイラオーグさんに、お偉いさんたちはある者は満足げに、ある者は皮肉げに頷く。

「私はグレモリー家次期当主として、その名に恥じない生き方を。その名を輝かせるような戦績を残す事を、近い将来の目標としていますわ」

我らが部長の夢はソレか。うんうん。確か、ノブレスオブリージュって言うんだっけ？なら俺も部長の将来の夫として、現在進行形の恋人として、その夢を叶える手助けをしようじゃないか。

……まあ、今は足を引つ張らないように高貴さのお勉強をするので精一杯なんだけどね！

その後はグラシャラボラス、アガレス、アスタロトと続き、最後にソーナ会長の番が来た。

「私の夢は、冥界にレーティングゲームの学校を建てる事です」

学校。確かに、レーティングゲームはただ戦うだけじゃない奥深さがある。ここ最近色々詰り込まれているからこそわかるが、ただのチェスや単純な決闘とは比べ物にならない難しさがあるのだ。

そのテクニクだとか、細かい正規のルールだとか、そういうのを学べる場所があるのは確かに良いと思う。

感心する俺だったが、しかしお偉いさんたちは眉を顰めるばかり。

「レーティングゲームを学ぶ場は、既にあるはずだが」

「それは上級悪魔や一部特権階級のみが通える学校です。私が建てた  
い学校は、下級悪魔や転生悪魔も通える、生まれや階級による隔ての  
無い学校ですから」

差別の無い、ね。

それは凄く素晴らしい事だし、俺も応援したい夢だ。

——けど、前に黒歌さんの罪の件で部長から聞かされた話。ソレ  
が脳裏をかすめた瞬間、なんとなくお偉いさんたちの反応が予測でき  
た。できてしまった。

「はははははは!!」

笑っていた。

嘲るように、詰る様に、酷く滑稽で愉快なモノを見たそばかりに、お  
偉いさんたちは笑う。

ああ、そうだろう。悪魔は長寿で、こういう『お偉いさん』つての  
は大体差別主義や血縁、階級主義の頭の固いご老体ばかりだって話  
だ。

ソーナ会長の素敵な夢も、連中にはくだらないモノでしかないんだ  
ろう。

ムカつくし、悔しい。

だけどソーナ会長はただただ嘲笑を受けるばかりで、何も言わな  
い。動かない。

不愉快な笑い声が響く中、遂に匙がキレた。

「何がそんなにおかしいんっすか!!?会長の夢の、どこが笑えるって言  
うんっすか!?!叶わない夢なんて無い、俺達は本気なんですよ!!」

「口を慎み給え転生悪魔。君に言葉を発する権利は与えられていな  
い」

「夢が幼稚なら下僕の躰けもお粗末と来ましたか。これでは次世代を  
担うなどとてもとても」

「……私の不徳の致すところです。申し訳ございません」

「なっ、会長!!」

深々と頭を下げた会長に、匙が今にも泣き出しそうな程震えた声で  
叫ぶ。

しかし会長は淡々と、頭を下げたまま叱責する。

「お黙りなさい。この場はそういう態度を取る場ではありません。何より、私は夢を語っただけ。それ以上でもそれ以下でも——」

「ああ。だからお前は下がってな匙。こういうのは部外者の役目だ」  
余りに堂々とした態度で、輪廻が前へ出る。

会長の言葉を遮りながら現れた輪廻を、お偉いさん達は不機嫌そうに見つめ、

「どうなされた、最強の赤龍帝殿。何かご不満な事でも？」

「一つ質問なんだが」

お偉いさんの言葉をまったく聞くことなく、サーゼクス様へ視線を向けて問いかける。

その態度にお偉いさんが顔を顰めるが、輪廻もサーゼクス様も気に留める様子は無く、二人だけで言葉を交わす。

「何かな、立神輪廻」

「コイツ等はまだ必要か？」

シン……と、完全な静寂がこの場を支配する。

誰もがその言葉の意味を理解しきれず、或いは受け止めきれずに、呆然とする。

数秒間無言が続くと、付け足すように輪廻が言葉を発した。

「その老人たちはそろそろお役御免で良いんじゃないか、と聞いたんだが」

今度は、ゾツとした。

その傲岸不遜な物言いに、どこまでもあつけらかなと話すその態度に。

だってその一言はつまり、今ソーナ会長の夢を嗤ったお偉いさん達を皆殺しにする、という意味で。

「ふ、ふぎけるな人間!!赤き竜の力があるからと、最強と持て囃されて  
いるからと調子に乗るな!!」

「蜥蜴如きが我らの生殺与奪を決めるだ?!不敬不遜も甚だしい!」

「我ら悪魔を愚弄するか!!」

「で、どうなんだサーゼクス・ルシファー。お前が是とするなら、取り

敢えずこの喧しいのは殺すが。——ああ、不安なら見せしめに一人二人、文字通り捻じり上げて見せようか？」

禁手の鎧どころかブーステッド・ギアさえ装備することなく、しかし空間が震える程の闘気を放ちながら輪廻が語る。

虚仮脅し？ 冗談じゃない。

もしサーゼクス様が一言「良し」と言えば、ただ一度領けば、スプラッター映画もびつくりな惨劇が繰り広げられるだろう。

お偉いさん達は喚くのをやめ、冷や汗、脂汗をダラダラと流しながら、縋る様にサーゼクスを見る。

この場の全員の視線が集まる中、彼は飄々と答えた。

「彼らは遙か昔から我ら悪魔を率いてきた者達だ。今この場で全員失うのは惜しい」

「古き知見の必要さを否定するつもりは無い。が、古い価値観に縋り新しきモノを受け入れず嘲笑うような浅はかな連中を、態々生き残らせる必要があるのか？ 凝り固まった思想を持つ権力者は、国を腐敗させる老廃物でしかないぞ」

「重々承知しているとも。その上で、私はまだ彼らが必要だと判断する。——わかってくれるかな」

「……………良いだろう」

闘気と殺気とを抑え、踵を返す。

その姿にほっと胸を撫でおろしたお偉いさん達だったが、輪廻は背を向けたまま「だが」と言葉を発し、

「俺はソーナ・シトリの夢が素晴らしいモノであり、彼女のような者がこの先必要とされる人材であると断言する。——忘れるなよ、サーゼクス・ルシファーが一度領けば、貴様らの命は簡単に失われるという事を」

捨て台詞を吐いて、元居た場所へ戻る。

完全に場を荒らした輪廻だが、先程までの硬い表情は何処へやらのほほんとした様子で壁に寄りかかる。

お偉いさん達にガツンと言ってやったのはこっちもスカツとしたけど、うん。自由か!!

「さて、赤龍帝殿が私の言葉をある程度代弁してくれたから、すぐに本題に入ろう。——ソーナ。そしてリアス。君達二人で戦ってみないか？」

「っ!!」

同時に驚く二人。

当然、俺やその他眷属たちも同様だ。

お構いなしにサーゼクス様は続ける。

「ゲームで勝てば、どんな夢物語だろうと現実味を帯びる。それを実現するだけの力を示せる。——元々レーティングゲームを三大勢力全体に公開する試みが計画されていた上、試合は可能ならデビュー前の若手が好ましいという話が上がっていた。良い機会だと思いが、どうだろうか？」

その言葉を聞いて、二人は顔を見合わせた。

部長は挑戦的な、会長は冷徹な笑みを浮かべ、すぐにサーゼクス様の方を向き、同時に頷く。

「勿論です」

駒王学園生徒会VSオカルト研究部の対戦カードが、ここに決定したのだった!!

因みに、試合は人間時間で言う八月二十八日に行うそう。

修行には大体二十日間使える訳だ。

会長の夢も素敵だと思おうし、この試合で勝たなきゃ噛いモノ扱いから抜け出せないとはわかってるが——俺は他の誰よりも大切な部長の為。リアス・グレモリー様の為、全力で戦う。

そして勝つ!それだけだ!!